松下大三郎
丸岡桂 校訂

國文大觀

2
物語部貳
源氏物語下

板倉屋書房

松下大三郎
丸岡桂　校訂

國文大觀

2

物語部貳
源氏物語下

板倉屋書房

若菜上

朱雀院の帝ありしみゆきの後、そのころほひより例ならず惱み渡らせ給ふ。もとよりあつしくおはしますうちにこの度は物心細くおぼしめされて年比もおこなひのほい深きをきさいの宮のおはしましつる程はよろづ憚り聞えさせ給ひて今まで おぼしとゞこほりつるを、猶そのかたに催すにやあらむ「世に久しかるまじき心地なむする」などのたまはせてさるべき御心まうけどもせさせ給ふ。御子達は春宮をおき奉りて女宮達なむ四所おはしましける。その中に藤壺と聞えしは 先帝の源氏にぞおはしましける。まだ坊と聞えさせし時參り給ひて高き位にも定まり給ふべかりし人の、取り立てたる御うしろみも坐せず、母方もそのすぢとなく物はかなき更衣ばらにてものし給ひければ御まじらひの程も心細げにて、大后の內侍のかみを參らせ奉り給ひて傍にならぶ人なくもてなし 聞え給ひなどせし ほどにけおされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひ聞えさせ給ひながら、おりゐさせ給ひにしかばかひなく口惜しくて、世の中を怨みたるやうにてうせ給ひにし、その御腹の女三宮をあまたの御中にすぐれて悲しきものに思ひかしづき聞え給ふ。その程御年十三四ばかりにおはす。今はとそむきすてやまでもり志なむ後の世にたちとまりて誰をたのむかげにて物し給はむとずらむと、唯この御事をうしろめたくおぼしなげく。西山なる御寺造りはてゝ、移ろはせ

給はむほどの御いそぎをせさせ給ふにそへて、又この宮の御もぎのことをおぼしいそがせ給ふ。院の内にやんごなくおぼす御たから物御調度どもをば更にもいはず、はかなき御遊物まで少しゆゑある限をば唯この御かたにと渡し奉らせ給ひて、そのつぎつぎをなむことみこたちには、御そうぶんどもありける。春宮は、かゝる御なやみに添へて世をそむかせ給ふべき御心づかひになむときかせ給ひて渡らせ給へり。母女御も添ひ聞えさせ給ひて參り給へり。すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御すくせの限なくめでたければ、年比の御物語細やかに聞えかはさせ給ひけり。宮にもよろづの事世を保ち給はむ御心づかひなど聞え知らせ給ふ。御年のほどよりはいとよくおとなびさせ給ひて、御後見どもゝ此方彼方かろがろしからぬ なからひに物し給へば、いとうしろやすく思ひ聞えさせ給ふ。「この世にうらみ殘ることも侍らず。女宮達のあまた殘りとゞまる行くさきを思ひやるなむさらぬ別にもほだしなりぬべかりける。さきざき人のうへに見聞きしにも、女は心よりほかにあはあはしく人におとしめらるゝすくせあるなむいと口惜しく悲しき。いづれをも思ふやうならむ御世には、さまざまにつけて御心とゞめておぼし尋ねよ。その中にうしろみなどあるはさる方にも思ひゆづり侍り。三の宮なむいはけなきよはひにて唯一人をたのもしきものとならひて、うち捨てゝむ後の世にたゞよひさすらへむ ことといとゞうしろめたく悲しく侍り」と、御目おしのごひつゝ聞え知らせ給ふ。女御にも心うつくしきさまに聞え告げさせ給ふ。されど母女御の人よりはまさりて時めき給ひしに、皆いどみかはし給ひし

程、御なからひどもえうるはしからざりしかば、その名殘にてげに今はわざとにくしとはなくとも、誠に心とゞめて思ひうしろみむまではおぼさずもやとぞ推し量らるゝかし。朝夕にこの御事をおぼし歎く。年暮れ行くまゝに、御惱み誠に重くなりまさらせ給ひてみすのとにお出でさせ給はず、御ものゝけにて時々惱ませ給ふこともありつれど、いとかくうちはへをやみなきさまにはおはしまさゞりつるを、この度は猶限なりとおぼしめしたり。御位を去らせ給へれど、猶その世にたのみそめ奉り給へる人々は今も懷かしくめでたき御有樣を心やり所に參り仕うまつり給ふかぎりは心をつくして惜み聞え給ふ。六條院よりも、御とぶらひしばしばあり、みづからも參り給ふべききよし聞しめして院はいといたく喜び聞えさせ給ふ。中納言の君參り給へるをみすの內に召し入れて御物語こまやかなり。「故院の上の今はのきざみにあまた御遺言ありし中にこの院の御ことと今の內の御ことなむとりわきてのたまひおきしを、おほやけとなりてことかぎりありければ內々の心よせは變らずながらはかなきことあやまりに心おかれ奉ることもありけむと思ふを、年頃ことにふれてその恨み殘し給へる氣色をなむ漏らし給はぬ。さかしき人といへど身の上になりぬればことたがひて心動き、必ずそのむくい見え、ゆがめることなむいにしへだに多かりける。いかならむをりにかその御心ばへほころぶべからむと世の人もおもむけ疑ひけるを、つひに忍び過ぐし給ひて春宮などにも心をよせ聞え給ふ。今はた又なく親しかるべき中となりむつびかはし給へるも限なく心には思ひながら、本性のおろかなるに添へてその道の闇に立ちまじり、かたくなゝる

さまにやとて、なかなかよそのことに聞え放ちたるさまにて侍る。内の御事はかの御遺言違へず仕うまつりおきてしかば、かく末の世のあきらけき君としてきし方の御おもてぶせをもおこし給ふ、ほいのごといと嬉しくなむ。この秋の行幸の後、いにしへのことゝり添へてゆかしくおぼつかなくなむおぼえ給ふ。たいめんに聞ゆべきことゞも侍り。必ず自らとぶらひものし給ふべきよし催し申し給へ」などうち志ほたれつゝのたまはす。中納言の君、「過ぎ侍りにけむかたは、ともかくも思う給へわき難く侍り。年まかり入り侍りておほやけにも仕うまつり侍るあひだ世の中の事を見給へまかりありく程には、大小のことにつけても内々のさるべき物語などのついでにもいにしへのうれはしき事ありてなむなど、うちかすめ申さるゝ折は侍らずなむ。かくおほやけの御うしろみを仕うまつりさして靜なる思ひをかなへむと、ひとへに籠り居し後は、何事をも知らぬやうにて故院の御ゆゐごんの事もえ仕うまつらず、御位に坐しましゝ世には齡の程も身のうつはものも及ばず、かしこきかみの人々多くて、その志をとげて御覽ぜらるゝこともなかりき。今かくまつりごとをさりて靜におはしますほど比ほひ心のうちをも隔なく、參りうけたまはらまほしきを、さすがに何となく所せき身のよそほひにておのづから月日を過ぐすことゝなむ折々歎き申し給ふ」など奏し給ふ。二十にもまだ僅なる程なれどいとよく整ひすぐしてかたちも盛ににほひていみじく淸らなるを、御目にとゞめてうちまもらせ給ひつゝ、このもて煩はせ給ふ姫宮の御うしろみにこれをやなど人知れずおぼしよりけり。「おほきおとゞのわたりに今は住みつかれにたりとな年頃

心得ぬさまに聞きしがいとほしかりしを、耳やすきものからさすがに妬く思ふことこそあれ」とのたまはする御氣色を、いかにのたまはすることにかとあやしく思ひ廻らすに、この姫宮をかくおぼしあつかひてさるべき人あらばあづけて心安く世をも思ひ離ればやとなむおぼしのたまはすると、おのづから漏り聞き給ふたよりありければ、さやうのすぢにやとは思ひよれどふと心得顔にも何にかはいらへ聞えさせむ。「唯はかばかしくも侍らぬ身にはよるべもさぶらひ難くのみなむ」とばかり奏して止みぬ。女房などは覗きて見聞えて、「いとありがたくも見え給ふかたちようゐかな。あなめでた」など集りて聞ゆるを、おいしらへるは、「いでさりともかの院のかばかりにおはせし御有樣にはえなずらへきこえ給はざめり。いと目もあやにこそ淸らに物し給ひしか」などいひしろふを聞しめして「誠にかれはいとさま異なりし人ぞかし。今は又その世にもねびまさりて光るとはこれをいふべきにやと見ゆるにほひなむいとゞ加はりにたる。うるはしだちてはかばかしきかたに見ればいつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを、又打ち解けてたはぶれごとをもいひ亂れ遊べばそのかたにつけては似るものなくあいぎやうづきなつかしくうつくしきことのならびなきこそ世にありがたけれ。何事にもさきの世推し量られて珍らかなる人の有樣なり。宮の內におひ出でゝ帝王のかぎりなく悲しきものにし給ひ、さばかりなでかしづき身にかへておぼしたりしかど、心のまゝにもおごらずひげして二十がうちには納言にもならずなりにきかし。ひとつあまりてや宰相にて大將かけ給へりけむ。それに、これはいとこよなく進みにためるは次々の

このおぼえのまさるなめりかし。誠にかしこきかたのざえ心もちゐなどは　これもをさをさ劣るまじくあやまりてもおよすげまさりたる覺え　いと殊なめり」などめでさせ給ふ。「姫宮のいと美しげにて若く何心なき御有樣なるを見奉り給ふにも、見はやし奉りかつは又かたおひならむことをば見隱し敎へ聞えつべからむ人の後安からむにあづけ聞えばや」など聞え給ふ。おとなしき御乳母ども召し出でゝ御もぎの程の事などのたまはするついでに、「六條のおとゞの、式部卿のみこのむすめおぼしたてけむやうに　この宮を預かりてはぐゝまむ人もがな。たゞ人の中にはあり難し。内には中宮さぶらひ給ふ。次々の女〻達とてもいとやんごとなき限物せらるゝにはかばかしきうしろみなくてさやうのまじらひ　いとなかなかならむ。この權中納言の朝臣の一人ありつる程に打ちかすめてこそ心みるべかりけれ。若けれどいときやうざくにおひさきたのもしげなる　人にぞあめるを」とのたまはす。「中納言はもとよりいとまめ人にて、年頃もかのわたりに心をかけてほかざまに　思ひうつろふべくも侍らざりけるに、その思ひかなひては、いとゞゆるぐかた侍らじ。かの院こそなかなか猶いかなるにつけても人をゆかしくおぼしたる心は　絶えずものせさせ給ふなれ。その中にもやんごとなき御願ひ深くて前齋院などをも今に忘れがたくこそ聞え給ふなれ」と申す。「いでそのふりせぬあだけこそはいと後めたけれ」とはのたまはすれど、げにあまたのなかにかゝづらひてめざましかるべき思ひはありとも、猶やがて親ざまに定めたるにて、さもや讓り置き聞えましなどもおぼしめすべし。「誠に少しも世づきてあらせむと思はむ女子もたらば同じ

くはかの人のあたりにこそは、ふればはせまほしけれ。いくばくならぬこの世のあひだはさばかり心ゆく有樣にてこそすぐさまほしけれ。われ女ならば同じはらからなりとも必ずむつびよりなまし。若かりし時などさなむおぼえし。まして女のあざむかれむはいとことわりぞや」とのたまはせて、御心のうちにかんの君の御こともおぼし出でらるべし。この御うしろみどものなかに、おもおもしき御乳母のせうと左中辨なるかの院の親しき人にて年比仕うまつるありけり。この宮にも心よせことにてさぶらへば、參りたるにあひて物語するついでに「上なむしかじか御氣色ありて聞え給ひしをかの院にをりあらば漏し聞えさせ給へ。御子達は一人おはしますこそは例のことなれど、さまざまにつけて心よせ奉り、何事につけても御うしろみし給ふ人あるはたのもしげなり。上を置き奉りて又眞心に思ひ聞え給ふべき人もなければ、おのれは仕うまつるとても何ばかりの宮仕にかあらむ。我が心ひとつにしもあらでおのづから思の外のこともおはしまし、かるがるしき聞えもあらむ時にはいかさまにかは煩しからむ。御覽ずる世にともかくもこの御事定りたらば仕うまつりよくなむあるべき。賢きすぢと聞ゆれど女はいとすくせ定めがたくおはしますものなれば、よろづになげかしくかく夥多の御中に取りわき聞えさせ給ふにつけても、人の猜みあべかめるをいかでちりもすゑ奉らじ」と語らふに、辨「いかなるべき御ことにかあらむ。院は怪しきまで御心ながく、かりにても見そめ給へる人は御心とまりたるをも、又さしも深からざりけるをも、方々につけて尋ねとり給ひつゝ數多つどへ聞え給へれど、やんごとなくおぼしたるはかぎり

ありて、ひとかたなめればそれにことよりて、かひなげなる住まひし給ふ方々こそは多かめるを、御すくせありて若しさやうにおはしますやうもあらば、いみじき人と聞ゆとも立ち並びておしたち給ふことは得あらじとこそは推し量らるれど、猶いかゞと憚らるゝ事ありてなむ覺ゆる。さるはこの世のさかえ末の世に過ぎて身に心もとなきことはなきを、女のすぢにてなむ人のもどきをもおひ我が心にも飽かぬこともあるとなむつねにうちうちのすさびごとにもおぼしのたまはするに、げにおのれらが見奉るにもさなむおはします。かたがたにつけて御かげに隱し給へる人皆その人ならず、立ち下れるきはには物し給はねど、限あるたゞ人どもにて院の御ありさまに並ぶべきおぼえ具したるやはおはすめる。それに同じくは實にさもおはしまさばいかにたぐひたる御あはひならむ」と語らふを、乳母又ことのついでに「然々なむなにがしの朝臣にほのめかし侍りしかば、かの院には必ずうけひき申させ給ひてむ、年比の御ほ意かなひておぼしぬべきことなるを、こなたの御ゆるし誠にありぬべくは傳へ聞えむとなむ申し侍りしを、いかなるべきことにかは侍らむ、ほどほどにつけてひとのきはきはおぼしわきまへつゝ、ありがたき御心ざまにものし給ふなれど、たゞ人だに又かゝづらひ思ふ人たちならびたることは人の飽かぬことにし侍るめるを、めざましきこともや侍らむ、御うしろみ望み給ふ人々は數多ものし給ふめり。よくおぼしめし定めてこそよく侍らめ。限なき人と聞ゆれど今の世のやうとては皆ほがらかにあるべかしく、世の中を御心とすぐし給ひつべきもおはしますべかめるを、姫宮はあさましく覺束なく心もとなくのみ見

えさせ給ふにさぶらふ人々は仕うまつるかぎりこそ侍らめ。大方の御心おきてにしたがひ聞えてさかしきしも人もなびき侍ふこそたよりあることには侍らめ。取り立てたる御うしろみものし給はざらむは猶心細きわざになむ侍るべき」と聞ゆ。「しか思ひたどるによりなむ。御子達の世づきたる有樣はうたてあはあはしきやうにもあり。又高ききはといへども女は男に見ゆるにつけてこそくやしげなることもめざましき思ひも、おのづからうちまじるものなめれど、かつは心苦しく思ひ亂るゝを、又さるべき人に立ちおくれて賴むかげどもに別れぬるのち心を立てゝ世の中に過ぐさむことも、昔は人の心たひらかにて世に許さるまじき程のことをば思ひ及ばぬものとならひたりけむ。今の世にはすきずきしく亂りがはしきことも、るゐに觸れて聞ゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほなほしく降れるきはのすきものどもになほたちあざむかれて、なき親のおもてをふせ影を辱むるたぐひ多く聞ゆる、いひもて行けば皆おなじことなり。程々につけて宿世などいふなることは知りがたきわざなればよろづにうしろめたくなむ。總て惡しくも善くもさるべき人の心に許し置きたるまゝにて世の中を過ぐすは宿世宿世にて後の世に衰へあるときもみづからのあやまちにはならず。ありへてこよなきさいはひあり、めやすきことになるをりは、かくてしもあしからざりけりと見ゆれど、なほたちまちにふと打ち聞きつけたる程は、親に知られずさるべき人も許さぬに心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身にはますことなききずと覺ゆるわざなる。なほなほしきたゞ人のなからひにてだに

あはつけく心づきなきことなり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを思ふ心より外に人にも見え宿世の程定められむなむ、いとかろがろしく身のもてなしありさまおしはからるゝことなるを、怪しく物はかなき心ざまにやと見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせてもてなし聞ゆるなさやうなる事の世にもり出でむといと憂きことなり」など、見捨てまつり給はむのちの世をうしろめたげに思ひ聞えさせ給へれば、いよいよ煩はしくおもひあへり。「今すこしものをも思ひ知り給ふ程まで見過ぐさむとこそは年頃念じつるを、深きほ意も遂げずなりぬべき心地のするに思ひ催されてなむ。かの六條のおとゞはげにさりとももののゝ心えてうしろ安き方はこよなかりなむを、かたがたに數多ものせらるべき人々を知るべきにもあらずかし。とてもかくても人の心からなり。のどかにおち居て大かたの世のためしとも、うしろ安き方は並びなくものせらるゝ人なり。さらでよろしかるべき人誰ばかりかはあらむ。兵部卿宮人がらはめやすしかし。同じすぢにてこと人とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめく程に、重き方おくれて少しかろびたる覺えや進みにたらむ。なほさる人はいとたのもしげなくなむある。又大納言の朝臣の家づかさのぞむなる、さるかたにものまめやかなるべきことにはあなれどさすがにいかにぞや。さやうにおしなべたるきはゝ猶めざましくなむあるべき。昔もかやうなるえらひには何事も人にことなる覺えあるに、ことよりてこそありけれ。唯ひとへにまたなく用ゐむばかりを、賢きことに思ひ定めむはいと飽かず口惜しかるべきわざになむ。右衛門督のしたにわぶな

るよし、ないしのかみのものせられしその人ばかりなむ、位など今少しものめかしき程になりなば、などかはとも思ひよりぬべきを、まだ年いと若くむげにかろびたる程なり。高き志深くてやもめずみにて過ぐしつゝいたくゑづまり思ひあがれる氣色人にはぬけてざえなどもこともなく遂には世のかためとなるべき人なれば、行く末もたのもしけれど、猶又この爲にと思ひはてむにはかぎりぞあるや」と萬におぼし煩ひたり。かやうにもおぼしよらぬ姉宮達をばかけても聞えなやまし給ふ人もなし。怪しく内々にのたまはする御さゝめきごとどもの、おのづからことひろごりて心を盡す人々多かりけり。おほきおとゞもこの衞門督の今まで一人のみありて御子達ならずはえじと思へるを、かゝる御定めども出て來たなる折に、さやうにもおもむけ奉りて召しよせられたらむ時、いかばかり我が爲にもめんぼくありて嬉しからむとおぼしのたまひて、内侍のかんの君にはかの姉の北の方して傳へ申し給ふなりけり。よろづかぎりなき言の葉を盡して奏せさせ御氣色たまはらせ給ふ。兵部卿宮は左大將の北の方を聞えはづし給ひて聞き給ふらむ所もあり。かたほならむことはとえり過ぐし給ふにいかゞは御心の動かざらむ。限なくおぼしいられたり。藤大納言は年比院のべたうにて親しく仕うまつりて侍ひなれにたるを、御山籠りし給ひなむ後、より所なく心ぼそかるべきを、この宮の御うしろみにことよせてかへりみさせ給ふべく、御氣色せちにたまはり給ふなるべし。權中納言もかゝることどもを聞き給ふに、人づてにもあらずさばかりおもむけさせ給へりし御氣色を見奉りてしかば、おのづからたよりにつけて漏らし聞し召さする事も

あらば、よもてはなれてはあらじかしと心時めきもしつべけれど、女君の今はと打ち解けて頼み給へるを年比つらきにもことづけつべかりしほどだに、ほかざまの心もなくて過ぐしてしを、あやにくに今更に立ちかへりにはかにものをや思はせ聞えむ。なのめならずやんどなき方にかゝづらひなば、何事も思ふまゝならで左みぎに安からずは、我が身も苦しくこそはあらめ。もとよりすきずきしからぬ心なれば、思ひしづめつゝ打ち出でねど、さすがにほかざまに定まりはて給はむもいかにぞや覺えて耳はとまりけり。春宮にもかゝる事ども聞し召してさしあたりたる只今のことよりも後の世のためしともなるべきことなるをよくおぼしめし廻らすべきことなり。人がらよろしとてもたゞ人はかぎりあるを、なほしかおぼしたつことならばかの六條院にこそ親ざまに讓り聞えさせ給はめとなむ、わざとの御せうそこにはあらねど、御氣色ありけるを、まち聞かせ給ひてもげにさることとなり。いとよくおぼしのたまはせたりといよいよ御心だゝせたまひて、まづかの辨してぞかつがつあないつたへ聞えさせ給ひける。この宮の御ことかくおぼし煩ふさまはさきざきも皆聞き置き給へれば、「心苦しき御事にもあなるかな。さはありとも院の御世ののこりすくなしとて、こゝに又いくばく立ち後れ奉るべきとてかその御うしろみの事をば受け取り聞えむ。げに次第をあやまたぬにて今しばしの程も殘りとまるかぎりあらば、大かたにつけてはいづれの御子逹をもよそに聞き放ち奉るべきにもあらねど、又かくとりわきて聞きおき奉りてむをば殊にこそはうしろみ聞えめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなりや」とのたまひて

「ましてひとへに頼まれ奉るべきすぢにむつびなれ聞えむことはいとなかなかに打ち續き、世を去らむきざみ心苦しくみづからのためにも淺からぬほだしになむあるべき。中納言などは年若くかるがるしきやうなれど行く先遠くて人がらも遂におほやけの御うしろみともなりぬべきおひさきなめれば、さもおぼしよらむになどかこよなからむ。されどいといたくまめだちて思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせ給ふにやあらむ」などのたまひてみづからはおぼしはなれたるさまなるを、辨はおぼろげの御定めにもあらぬをかくのたまへばいとほしくも口惜しくも思ひて、うちうちに覺え立ちにたるさまなど委しく聞ゆれば、さすがに打ちゑみつゝ、「いと悲しくし奉り給ふ御子なめればあながちにかくきし方行く先のたどりも深きなめりかしな。唯内にこそ奉り給はめ。やんごとなきまづの人々おはすといふことはよしなきことなり。それにさはるべきことにもあらず。必ずさりとて末の人恐なるやうもなし。故院の御時に、大后の坊の始の女御にていきまき給ひしかどむげの末に參り給へりし、入道宮にしばしはおされ給ひにきかし。この御子の御母女御こそはかの宮の御はらからにものし給ひけめ。かたちもさしつぎにはいとよしといはれ給ひし人なりしかばいづかたにつけてもこの姫宮おしなべてのきはにはよもおはせじを」などいぶかしくは思ひ聞え給ふべし。』年も暮れぬ。朱雀院には御心地猶をこたるさまにもおはしまさねば萬あわたゞしくおぼし立ちて、御もぎのことおぼしいそぐさま、きし方行くさきありがたげなるまでいつくしくのゝしる。御しつらひはかへ殿の西面に御几帳よりはじめてこゝの綾錦をばまぜ

させ給はず、もろこしの后の飾をおぼしやりて麗しくことごとしく輝くばかりとゝのへさせ給へり。御腰ゆひにはおほきおとゞをかねてより聞えさせ給へりければ、ことごとしくおはする人にて參りにくゝおぼしけれど、院の御事を昔より背き申し給はねば參り給ふ。今二所のおとゞ達そのこりの上達部などは、わりなきさはりあるもあながちにためらひ助けつゝ參り給ふ。御子達八人殿上人はた更にもいはず、內春宮も殘らず參りつどひていかめしき御いそぎの響きなり。院の御事はこの度こそとぢめなれとみかど春宮を初め奉りて心苦しく聞し召しつゝ、藏人所をさめどのゝからものども多く奉らせ給へり。六條院よりも御とぶらひいとこちたし。贈物ども人々の祿尊者の大臣の御引出物など、かの院よりぞ奉らせ給ひける。中宮よりも御さうぞく櫛の箱心ことにてうせさせ給ひて、かのむかしの御ぐしあげの具故あるさまに改めくはへてさすがにもとの心ばへもうしなはず、それと見せて、その日の夕つ方奉らせ給ふ。宮の權のすけ、院の殿上にも侍ふを御使にて、姬宮の御方に參らすべくのたまはせつれどかゝることぞ中にありける。

「さしながら昔を今につたふれば玉のをぐしぞかみさびにける」。院御覽じつけて哀におぼし出でらるゝことゞもありけり。あえものけしうはあらじと讓り聞え給へる程、げにおもだゝしきかんざしなれば、御返りも昔のあはれをばさし置きて、

「さしつぎにみるものにもが萬世をつげのをぐしのかみさぶるまで」とぞ喜び聞え給へる。御心地いと苦しきを念じつゝおぼしおこしてこの御いそぎはてぬれば三日すぐして遂

に御ぐしおろし給ふ。よろしき程の人の上にてだに今はとてさまかはるは悲しげなるわざなれば、ましていと哀げに御方々もおぼしまどふ。內侍のかんの君はつと侍ひ給ひていみじくおぼしいりたるをこしらへかね給ひて、子を思ふ道はかぎりありけり、かく思ひしみ給へるわかれの堪へ難くもあるかなとて、御心亂れぬべけれど、あながちに御けうそくにかゝり給ひて、山の座主より始めて御いむことの阿闍梨三人さぶらひてほふぶくなど奉る程、この世を別れ給ふ御作法いみじく悲し。今日は世を思ひすましたる僧達などだに涙も得とゞめねば、まして女宮達女御更衣こゝらの男女かみしもゆすりみちて泣きとよむに、いと心あわたゞしう、かゝらでしづやかなる所にやがて籠るべく覺しまうけけるほ意だかひておぼしめさるゝも、唯この幼き宮にひかされてとおぼしのたまはす。內より始め奉りて御とぶらひのしげさいと更なり。六條院も少し御心地よろしくと聞き奉らせ給ひて參り給ふ。御たうばりのみふなどこそ皆同じごとおりゐの帝とひとしく定まり給へれど、まことの太上天皇の儀式にはうけばり給はず。世のもてなし思ひ聞えたるさまなどは心ことなれど、殊更にそぎ給ひて、例のことごとしからぬ御車に奉りて上達部などさるべきかぎり車にてぞ仕うまつり給へる。院にはいみじく待ち悅び聞えさせ給ひて、苦しき御心をおぼしつよりて御對面あり。麗しきさまならず唯おはします方におましよそひくはへて入れ奉り給ふ。かはり給へる御有樣見奉り給ふに、きし方行くさきかきくれて悲しくとゞめがたくおぼさるれば、とみにもえためらひ給はず。「故院におくれ奉りしころほひより世の常なく思ひ給へられしかばこの

方の本意深く進み侍りにしを心弱く思う給へてたゆたふことのみ侍りつゝ、つひにかく見奉りなし侍るまでおくれ奉りぬる心のぬるさを恥しく思う給へらるゝかな。身にとりてはことにもあるまじく思う給へたち侍るをりをりあるを、更にいと忍びがたきこと多かりぬべきわざにこそ侍りけれ」となぐさめがたくおぼしたり。院も物心ぼそくおぼさるゝに得心づよからず打ち志ほたれ給ひつゝ、いにしへ今の御物語いと弱げに聞えさせ給ひて、「今日か明日かと覺え侍りつゝ、さすがに程經ぬるを打ちたゆみて、深きほ意のはしにてもとけずなりなむことゝ思ひおこしてなむ。かくても殘りの齡なくばおこなひの志もかなふまじけれどまづかりにてものどめおきて念佛をだにと思ひ侍る。はかばかしからぬ身にても世にながらふること唯このこゝろざしにひきとゞめられたると思う給へ知られぬにしもあらぬを今までつとめなきをこたりをだに安からずなむ」とて、おぼしおきてたるさまなど委しくのたまはする序に「女御子たちを數多うち捨て侍りなむ、心苦しき中にも又思ひ讓る人なきをば取りわきてうしろ見煩ひ侍る」とてまほにはあらぬ御氣色を心苦しと見奉り給ふ。御心のうちにもさすがにゆかしき御有樣なればおぼしすぐしがたくて「げにたゞ人よりもかゝるすぢは、わたくしざまの御後見なきは口惜しげなるわざになむ侍りける。春宮かくておはしませばいとかしこき末の世のまうけの君と天の下のたのみ所にあふき聞えさするを、ましてこの御事と聞え置かせ給はむことは、ひとことゝしておろそかにかろめ申し給ふべきには侍らねば、更に行く先の事おぼし惱むべきにも侍らねど、げにことかぎりあればおほやけと

なり給ひ世の政御心にかなふべしとはいひながら、女の御ためになにばかりのけざやかなる御心よせあるべきにも侍らざりけり。すべての女の御ためにはさまざま誠の御後見とすべきものは猶さるべきすぢに契をかはし、えさらぬことにはぐゝみ聞ゆる御まもりめ侍るなむ後ろ安かるべきことに侍るを、なほ志ひてのちの世の御疑殘るべくばよろしきに思し選びて忍びてさるべき御あづかりを定め置かせ給ふべきになむ侍る」と奏し給ふ。「さやうに思ひよると侍れどそれもかたきことになむありける。いにしへのためしを聞き侍るにも世をたもつさかりのみこにだに人を選びてさるさまのことを志給へるたぐひ多かりけり。ましてかく今はとこの世を離るゝきはにてことごとしく思ふべきにもあらねど、又志かすつる中にも捨てがたきことありてさまざまに思ひ煩ひ侍る程に病は重りゆく。又とりかへすべきにもあらぬ月日の過ぎ行けば、心あわたゞしくなむ。かたはらいたきゆづりなれどこのいはけなき内親王ひとりとりわきてはぐゝみおぼしてさるべきよすがをも御心におぼし定めて預け給へと聞えまほしきを、權中納言などのひとり物しつる程に進みよるべくこそありけれ。おほいまうちぎみにせんせられてねたく覺え侍る」と聞え給ふ。「中納言の朝臣まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべく侍るを何事もまだ淺くてたどり少くこそ侍らめ、かたじけなくとも深き心にて後見聞えさせ侍らむに、おはします御かげに變りてはおぼされしを、唯行く先短くて仕うまつりさすことや侍らむと、疑はしき方のみなむ心苦しく侍るべき」とうけひき申し給ひつ。夜に入りぬればあるじの院方もまらうどの上達部達も、皆御

前にて御あるじのこと、さうじものにてうるはしからずなまめかしくせさせ給へり。院の御前にせんからのかけばんに御鉢など昔に變りて參るを人々涙おしのごひ給ふ。哀なるすぢのことゞもあれどうるさければかゝず。夜ふけてかへり給ふ。祿どもつぎつぎに賜ふ。別當大納言も御送に參り給ふ。あるじの院は、今日の雪にいとゞ御風くはゝりてかき亂り惱ましくおぼさるれどこの宮の御事聞え定めつるを心安くおぼしけり。六條院はなま心苦しうさまざまおぼし亂る。紫の上もかゝる御定めなどかねてもほのきゝ給ひけれど、さしもあらじ、前齋院をもねんごろに聞え給ふやうなりしかど、わざともおぼし遂げずなりにしをなどおぼして、さることやあるともとひ聞え給はず何心もなくておはするにいとほしく、この事をいかにおぼさむ、我が心はつゆも變るまじく、さることあらむにつけてはなかなかいとゞ深さこそまさらめ、見定め給はざらむ程いかに思ひ疑ひ給はむなど安からずおぼさる。今の年比となりてはましてかたみにへだて聞え給ふことなく、あはれなる御中なれば、しばし心に隔て殘したることあらむもいぶせきを、その夜は打ち休みてあかし給ひつ。又の日雪打ち降り空の氣色も物哀に過ぎにし方行く先の御物語聞えかはし給ふ。「院のたのもしげなくなり給ひにたる御とぶらひに參りて哀なる事どものありつるかな。女三の宮の御ことをいと捨てがたげにおぼしてしかじかなむのたまはせつけしかば、心苦しくて得聞えいなびずなりにしを、ことごとしくぞ人はいひなさむかし。今はさやうのこともうひうひしくすさまじく思ひなりにたれば、人づてに氣色ばませ給ひしには、とかく遁れ聞えしを、對面のついで

に心ふかきさまなることどもをのたまひつゞけしには、えすぐすぐしくもかへさひ申さでなむ。深き御山ずみにうつろひ給はむ程にこそは、わたし奉らめ。あぢきなくや思さるべき。いみじきことありともさだめある世に變ることは更にあるまじきを、心なおき給ひそよ。かの御ためこそ心苦しからめ。それもかたはならずもてなしてむ。たれもたれものどかにて過ぐし給はゞ」など聞え給ふ。はかなき御すさびごとをだにめざましきものにおぼして心安からぬ御心ざまなれば、いかゞおぼさむとおぼすに、いとつれなくて「哀なる御ゆづりにこそはあなれ。こゝにはいかなる心を置き奉るべきにか。めざましくかくてはなど咎めらるまじくは心安くても侍りなむを、かの母女御の御かたさまにても疎からずおぼしかずまへてむや」と、ひげし給ふを、「あまりかう打ち解け給ふ御ゆるしもいかなればとうしろめたくこそあれ。誠はさだにおぼし許して我れも人も心得てなだらかにもてなし過ぐし給はゞ、いよいよあはれになむ。ひがこと聞えなどせむ。人のこと聞き入れ給ふな。すべて世の人のくちといふものなむ、たがいひ出づることゝもなく、おのづから人のなからひなど打ちほゝゆがみ思はずなる事出でくるものなめるを、心ひとつにしづめてありさまにしたがふなむよき。まだきに騒ぎてあいなき物恨みし給ふな」といとよくをしへ聞え給ふ。心のうちにも、かく空より出で來にたるやうなることにてのがれ給ふかたなきをにくげにも聞えなさじ。我が心に憚り給ひ諫むることに隨ひ給ふべきおのがどちの心よりおこれる懸想にもあらず、せかるべき方なきものからをこがましく思ひむすぼゝるゝさま世の人にもり聞えじ、式部卿宮の

大北の方常にうけはしげなることどもをのたまひ出でつゝ、あぢきなき大將の御ことにてさへ怪しく恨みそねみ給ふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせ給はむなど、おいらかなる人の御心といへどいかでかはかばかりのくまはなからむ。今はさりともとのみ我が身を思ひあがりうらなくて過しける世の人笑へならむことをまたには思ひつゞけ給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。』年もかへりぬ。朱雀院には、姫宮六條院にうつろひ給はむ御いそぎをし給ふ。聞え給ひつる人々いと口惜しくおぼしなげく。內にも御心ばへありて聞え給ひける程に、かゝる御定めを聞し召しておぼしとまりにけり。さるは今年ぞ四十ぢになり給ひければ、御賀のことおほやけにも聞し召し過ぐさず、世の中のいとなみにてかねてより響くを、ことのわづらひ多く、嚴めしきことは昔より好み給はぬ御心にて皆かへさひ申し給ふ。正月廿三日子の日なるに左大將殿の北の方若菜まゐり給ふ。かねて氣色も漏し給はでいといたく忍びておぼし設けたりければ俄にて得諫め返し聞え給はず。忍びたれどさばかりの御いきほひなれば、渡り給ふ儀式などいとひゞきことなり。南のおとゞの西のはなちいでにおましよそふ。屏風かべしろより始め新しく拂ひしつらはれたり。麗しくいしなどは建てず御地敷四十枚御しとね脇息などすべてその御具どもいと淸らにせさせ給へり。螺鈿の御厨子二よろひに御衣箱四つすゑて、夏冬の御さうぞく、かうご、藥の箱、御硯、ゆするつき、かゝげの箱などやうのもの、うちうちきよらを盡し給へり。御かざしの臺にはぢんしたんを作り、珍しきあやめを盡し、同じきかねをも色づかひなしたるこゝろばへあり今めか

しく、かんの君物のみやび深くかどめき給へる人にてめなれぬさまに志なし給へり。大かたのことをば殊更に事々しからぬ程なり。人々參りなど志給ひておましに出で給ふとてかんの君に御對面あり。御心のうちには古おぼし出づることもさまざまなりけむかし。いと若く淸らにてかく御賀などいふことはひがかぞへにやと覺ゆるさまのなまめかしく人のおやげなくおはしますを、珍しく年月へだてゝ見奉り給ふはいと恥しけれど猶けざやかなるへだてもなくて御物語聞えかはし給ふ。幼き君もいと美しくて物し給ふ。かんの君は打ち續きても御覽ぜられじとのたまひけるを大將のかゝる序にだに御覽ぜさせむとて、二人同じやうに振分髮の何心なき直衣姿どもにておはす。「過ぐるよはひもみづからの心にはことに思ひ咎められず、唯昔ながらの若々しき有樣にて改むることもなきを、かゝる末々のもよほしになむなまはしたなきまで思ひ知らるゝ折も侍りける。中納言のいつしかと設けたなるをうとうとしく思ひ隔てゝまだ見せずかし。人より殊に數へとりける今日の子の日こそ猶うれたけれ。志ばしは老を忘れても侍るべきを」と聞えたまふ。かんの君もいとよくねびまさりもののしきけさへ添ひて見るかひあるさまし給へり。

「若葉さすのべの小松をひきつれてもとの岩根をいのる今日かな」とせめておとなび聞え給ふ。沈の折敷四つして御若菜さまばかりまゐれり。御かはらけ取り給ひて、

「小松原すゑのよはひにひかれてや野べのわかなも年をつむべき」など聞えかはし給ひて上達部あまた南の廂につき給ふ。式部卿宮は參りにくゝおぼしけれど、御せうそこありけ

るにかく親しき御なからひにて心あるやうならむもびんなくて日たけてぞ渡り給へる。大將のしたり顔にてかゝる御なからひにうけばりてものし給ふも、げに心やましげなるわざなめれど御うまごの君達はいづかたにつけてもおり立ちてざふやくしたまふ。こものよそえだ、をりひづものよそぢ中納言をはじめ奉りてさるべきかぎりとり續け給へり。御かはらけくだり若菜の御羹參る。御前には沈のかけはん四つおほんつきどもなつかしく今めきたる程にせられたり。朱雀院の御藥のこと猶たひらぎはて給はぬにより樂人などは召さず。御笛などおほきおとゞのその方はとゝのへ給ひて、世の中にこの御賀より又珍しく淸らを盡すべきことあらじとのたまひて勝れたるねのかぎりをかねてよりおぼし設けたりければ忍びやかに御遊あり。とりどりに奉る中に和琴はかのおとゞの第一に秘し給ひける御琴なり。さるものゝ上手の心を留めてひき鳴らし給へるねいとならびなきを、ことひとは搔きたてにくゝし給へば、右衛門督のかたくいなぶるをせめ給へば、げにいとおもしろくをさをさ劣るまじくひく。何事も上手のつぎといひながらかくしも得つがぬわざぞかしと心にくゝ哀に人々おぼす。しらべに從ひてあとある手ども定まれるもろこしのつたへどもはなかなか尋ね知るべき方あらはなるを、心にまかせて唯搔き合せたるすがゝきに、萬の物の音とゝのへられたるは、たへにおもしろく怪しきまでひゞく。父おとゞはことのをもいとゆるにはりていたうくだして調べ響き多く合せてぞ搔きならし給ふ。これはいとわらゝかにのぼるねのなつかしく愛敬づきたるを、いとかうしもは聞えざりしをと御子達も驚き給ふ。琴は兵部

卿宮ひき給ふ。この御琴は宜陽殿の御物にて代々に第一の名ありし御琴を故院の末つ方一品宮好み給ふことにてたまはり給へりけるを、この折の清らを盡し給はむとするためおとゞの申し給はり給へる御つたへつたへをおぼすに、いと哀に昔のことも戀しくおぼし出でらる。御子もゑひ泣きえ留め給はず。御氣色とり給ひてきんは御前にゆづり聞えさせ給ふ。物の哀にえ過し給はで珍しきもの一つばかりひき給ふにことごとしからねど限なくおもしろき夜の御遊なり。さうがの人々みはしに召してすぐれたる聲のかぎり出してかへり聲になる。夜の更け行くまゝに物のしらべどもなつかしく變りて青柳遊び給ふ程げにねぐらの鶯驚きぬべくいみじくおもしろし。わたくしごとのさまにゐなし給ひて祿などいときやうざくに設けられたりけり。曉にかんの君かへり給ふ、御贈物などありけり。「かう世を捨つるやうにて明し暮すほどに年月のゆくへも知らず顏なるをかう數へ知らせ給へりけるにつけては心ぼそくなむ。時々は老いやまさると見給ひくらべよかし。かくふるめかしき身の所せきに、思ふに從ひてたいめなきもいと口惜しくなむ」など聞え給ひて哀にもをかしくも思ひいで聞え給ふとなきにしもあらねば、なかなかほのかにかく急ぎ渡り給ふを、いと飽かず口惜しくぞおぼされける。かんの君も誠の親をばさるべき契ばかりに思ひ聞え給ひて、ありがたくこまやかなりし御心ばへを、年月にそへてかく世に住みはて給ふにつけてもおろかならず思ひ聞え給ひけり。かくて二月の十餘日に朱雀院の姫宮六條院に渡り給ふ。この院にも御心まうけ世の常ならず若菜參りし西の放ちいでに御帳たてゝ、其方の一二の對渡殿かけ

て女房のつぼねまでこまかにしつらひ磨かせ給へり。内に參り給ふ人の作法をまねびてかの院よりも御調度などはこばる。渡り給ふ儀式いへば更なり、御送に上達部など數多參り給ふ。かのけいし望み給ひし大納言も安からず思ひながらさぶらひ給ふ。御車よせたる所に院わたり給ひておろし奉り給ふほどなども例には違ひたる事どもなり。たゞ人におはすれば萬の事かぎりありてうちまゐりにも似ず。婿の大君といはむにも、ことたがへて珍しき御中のあはひどもになむ。三日が程はかの院よりもあるじの院方よりも嚴めしく珍しきみやびを盡し給ふ。對の上もことに觸れてたゞにもおぼされぬ世の有樣なり。げにかゝるにつけてもこよなく人に劣りけたるゝこともあるまじけれど、又ならぶ人なくならひ給ひて華やかにおひさき遠くあなづりにくきけはひにてうつろひ給へるに、なまはしたなくおぼさるれどつれなくのみもてなして、御わたりのほどももろ心にはかなきこともしいで給ひていとらうたげなる御有樣をいとゞありがたしと思ひ聞え給ふ。姫宮はげにまだいとちひさくかたなりにおはする內にもいといはけなき御氣色してひたみちに若び給へり。かの紫のゆかり尋ねとり給へりしをりおぼし出づるに、かれはざれていふかひありしを、これはいといはけなくのみ見え給へば、よかめり、にくげにおしたちたることなどはあるまじかめりとおぼすものから、いとあまり物のはえなき御さまかなと見奉り給ふ。三日が程は夜がれなく渡り給ふを、年比さもならひ給はぬ心地に忍ぶれどなほ物哀なり。御ぞどもなどいよいよたきしめさせ給ふものから打ち眺めてものし給ふ氣色いみじくらうたげにをかし。などて萬の事

ありとも又人をばならべて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりきにける我がをこたりにかゝることも出でくるぞかし、若けれど中納言をばえおぼしかけずなりぬめりしをと、われながらつらくおぼし續けらるゝに涙ぐまれて「今夜ばかりはことわりと許し給ひてむな。これよりのちのとだえあらむこそ身ながらも心づきなかるべけれ。又さりとてかの院に聞し召さむことよ」と思ひ亂れ給へる御心のうち苦しげなり。少しほゝゑみて「みづからの御心ながらだに得定め給ふまじかなるをまして、ことわりもなにも何處にとまるべきにか」と、いふかひなげにとりなし給へる、恥しうさへ覺え給ひてつらづゑをつきてよりふし給へれば、御硯を引きよせて、

「めに近くうつればかはる世の中を行くすゑとほくたのみけるかな」。ふることなど書きまぜ給ふを取りて見給ひてはかなきことなれど、げにとことわりにて、

「命こそたゆとも絶えめさだめなき世のつねならぬ中のちぎりを」。とみにも得渡り給はぬを「いとかたはらいたきわざかな」とそゝのかし聞え給へばなよゝかにをかしき程にえならず匂ひて渡り給ふを見出し給ふもいとたゞにはあらずかし。年比さもやあらむと思ひしことゞも、今はとのみもてはなれ給ひつゝ、さらばかうにこそはと打ち解けゆく末に、ありありてかく世のきゝみゝもなのめならぬ事の出できぬるよ。思ひ定むべき世の有樣にもあらざりければ今より後もうしろめたうぞおぼしなりぬる。さこそつれなくまぎらはし給へどさぶらふ人々も、思はずなる世なりや、數多ものし給ふやうなれど何方も皆こなたの御け

はひにはかたさり憚るさまにて過ぐし給へばこそことなくなだらかにもあれ、おしたちてかばかりなる有樣にけたれても得過ぐし給はじ、又さりとてはかなきことにつけても安からぬことのあらむ折々、必ず煩はしき事ども出できなむかしなどおのがじゝ打ち語らひなげかしげなるを、露も見知らぬやうにいとけはひをかしく物語などし給ひつゝ夜更くるまでおはす。かう人のたゞならずいひ思ひたるも聞きにくしとおぼして「かくこれかれ數多物し給ふめれど御心にかなひて今めかしくすぐれたるきはにもあらずと、めなれてさうざうしくおぼしたりつるに、この宮のかく渡り給へるこそめやすけれ。猶わらはごゝろのうせぬにやあらむ、我れもむつび聞えてあらまほしきを、あいなくへだてあるさまに人々やとりなさむとすらむ。ひとしき程劣りざまなど思ふ人にこそたゞならず耳だつこともおのづから出で來るわざなれ。辱く心苦しき御ことなめればいかで心おかれ奉らじとなむ思ふ」などのたまへば、中務中將の君などやうの人々めをくはせつゝ、「あまりなる御思ひやりかな」などいふべし。昔はたゞならぬさまにつかひならし給ひし人どもなれど年比はこの御方にさぶらひて皆心よせ聞えたるなめり。こと御方々よりもいかにおぼすらむ。もとより思ひ見馴れたる人々はなかなか心やすきをなどおもむけつゝとぶらひ聞え給ふもあるを、かくおしはかる人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものをなどてかさのみは思ひ惱まむなどおぼす。あまり久しきよひゐも例ならず人や咎めむと心のおにゝおぼして入り給ひぬれは、御ふすまゝゐりぬれど、實にかたはら寂しきよなよなへにけるも猶たゞならぬ心地すれ

どかの須磨の御別の折をおぼし出づれば、今はとかけはなれ給ひても、唯同じ世のうちに聞き奉らましかばと我が身までのことはうち置きあたらしく悲しかりし有樣ぞかし。さてそのまぎれに我も人も命堪へずなりなましかばいふかひあらまし世かはとおぼしなほす。風打ち吹きたる夜のけはひ冷やかにてふとも寢入られ給はぬを近くさぶらふ人々怪しとや聞かむとうちもみじろぎ給はぬも猶いと苦しげなり。夜深きとりの聲の聞えたるも物哀なり。わざとつらしとにはあらねどかやうに思ひ亂れ給ふけにや、かの御夢に見え給ひければ、打ち驚き給ひていかにと心騒がし給ふにとりのね待ち出で給へれば、夜ふかきも知らずがほに急ぎ出で給ふ。いといはけなき御有樣なれば乳母たち近く侍ひけり。妻戸押し開けて出で給ふを見奉りおくる。明けくれの空に雪の光見えておぼつかなし。名殘までとまれる御にほひ、やみはあやなしとひとりごたる。雪は所々消え殘りたるがいと白き庭のふとけぢめ見えわかれぬ程なるに、猶殘れる雪と忍びやかに口ずさみ給ひつゝ、御格子打ち叩き給ふも久しくかゝることなかりつるならひに、人々もそらねをしつゝやゝまたせ奉りてひきあげたり。「こよなく久しかりつる身もひえにけるは、おぢ聞ゆる心のおろかならぬにこそあめれ。さるは罪もなしや」とて御ぞひきやりなどし給ふに、少しぬれたる御ひとへの袖をひき隱して、うらもなくなつかしきものから打ち解けてはたあらぬ御用意などいと恥しげにをかし。限なき人と聞ゆれどかたかめる世をとおぼしくらべらる。萬いにしへのことをおぼし出でつゝ、解け難き御氣色を恨み聞え給ひてその日は暮し給へれば、えわたり給はで寢殿には御

せうそこをぞ聞え給ふ。今朝の雪に心地あやまりていとなやましく侍れば心やすき方にためらひ侍るとあり。御めのとさ聞えさせ侍りぬとばかりことばに聞えたり。殊なることなの御返りやとおぼす。院に聞し召さむこともいとほし、この頃ばかりつくろはむとおぼせど、えさもあらぬを、さは思ひしことぞかしあな苦しとみづから思ひつゞけ給ふ。女君も思ひやりなき御心かなと苦しがり給ふ。今朝は例のやうに大殿籠り起きさせ給ひて宮の御方に御文奉れたまふ。殊に恥しげもなき御さまなれど御筆などひきつくろひてしろき紙に、

「中みちをへだつる程はなけれども心みだるゝけさの泡ゆき」。梅につけ給へり。人めして「西の渡殿より奉らせよ」とのたまふ。やがて見出して端近く坐します。白き御ぞどもを着給ひて花をまさぐり給ひつ。友まつ雪のほのかに殘れる上に打ち散りそふ空をながめ給へり。鶯の若やかに近き紅梅の末にうち鳴きたるを、袖こそ匂へと花をひき隱して御簾押し上げて眺め給へるさま、夢にもかゝる人の親にて重き位と見え給はず、若うなまめかしき御さまなり。御返り少し程經る心地すれば入り給ひて女君に花を見せ奉り給ふ。「花といはゞかくこそ匂はましけれな。櫻にうつしては又ちりばかりも心わく方なくやあらまし」などのたまふ。「これも數多にうつろはぬ程目とまるにやあらむ。花の盛にならべて見ばや」などのたまふに御かへりあり。紅の薄葉にあざやかに押し包まれたるを、胸つぶれて御手のいと若きをしばし見せ奉らであらばや、隔つとはなけれどあはあはしきやうならむは、人のほどかたじけなしとおぼすに、ひき隱し給はむも心おき給ふべければ、かたそばひろげ給へるを、

しり目に見おこせて添ひふし給へり。
「はかなくてうはのそらにぞ消えぬべき風にたゞよふ春のあわ雪」。御手げにいと若く幼げなり。さばかりの程になりぬる人はいとかくはおはせぬものをと目とまれど見ぬやうに紛はして止み給ひぬ。こと人の上ならばさこそあれなどは忍びて聞え給ふべけれど、いとほしくて、「唯心安くを思ひなし給へ」とのみ聞え給ふ。今日は宮の御方に晝わたり給ふ。心ことに打ちけさうし給へる御有様今見奉る女房などはまして見るかひありと思ひ聞ゆらむかし。御乳母などやうのおひしらへる人々ぞ、いでやこの御有様一所こそめでたけれ、めざましきことはありなむかしと、打ちまぜて思ふもありけり。女宮はいとらうたげに幼きさまにて御しつらひなどのことごとしくよだけて麗しきにみづからは何心もなく物はかなき御程にて、いと御ぞがちにみもなくあえかなり。ことに恥ぢなどもし給はず唯ちごのおもぎらひせぬ心地して心やすく美しきさまし給へり。院のみかどは雄々しくすくよかなる方の御ざえなどこそ心得なく坐しますと世人思ひためれ。をかしきすぢなまめきゆゑゆゑしき方は人にまさり給へるを、などてかくおいらかにおほしたて給ひけむ。さるはいと御心留め給へるみことと聞きしをと思ふもなまくちをしけれどにくからず見奉り給ふ。唯聞え給ふまゝになよなよと靡き給ひて御いらへなどをも覚え給ひけることはいはけなく打ちのたまひ出でゝ、えみはなたず見え給ふ。昔の心ならましかばうたて心おとりせましを今は世の中を皆さまざまに思ひなだらめて、とあるもかゝるもきは離るゝことはかたきものなりけり、とりど

りにこそおほうはありけれ、よその思ひはいとあらまほしき程なりかしとおぼすに、さしならびめかれず見奉り給へる年比よりも對の上の御ありさまぞ猶ありがたくわれながらもおほしたてけりとおぼす。一夜のほどあしたのまも戀しく覺束なく いとゞしき御志のまさるを、などかく覺ゆらむとゆゝしきまでなむ。院のみかどは月のうちにみ寺にうつろひ給ひぬ。この院に哀なる御せうそこども聞え給ふ。姫宮の御ことは更なり、煩はしくいかに聞く所やなど憚り給ふ事なくてともかくも唯御心にかけてもてなし給ふべくぞたびたび聞え給ひける。されど哀にうしろめたく幼くおはするを思ひ聞え給ひけり。紫の上にも御せうそこことにあり。「幼き人の心なきさまにてうつろひものすらむを、罪なくおぼし許して、後見給へ尋ね給ふべき故もやあらむとぞ。

そむきにしこの世にのこる心こそいる山みちのほだしなりけれ。やみをえはるけで聞ゆるもをこがましくや」とあり。おとゞも見給ひて、「哀なる御せうそこをかしこまり聞え給へ」とて御使にも女房してかはらけさし出させ給ひてしひさせ給ふ。御返りはいかゞなど聞えにくゝおぼしたれどことごとしくおもしろかるべき折のことならねば、唯心をのべて、

「背く世のうしろめたくはさりがたきほだしをしひてかけな離れそ」などやうにぞありし。女のさう束に細長添へてかづけ給ふ。御手などのいとめでたきを院御覽じて何事も恥しげなめるあたりに、いはけなくて見え給ふらむといと心苦しうおぼしたり。今はとて女御更衣達などおのがじゝ別れ給ふも哀なることなむ多かりける。ないしのかんの君は故きさ

いの宮のおはしまし〻二條の宮にぞ住み給ふ。姫宮の御事を置きてはこの御事をなむ顧みがちにみかどもおぼしたりける。尼になりなむとおぼしたれどか〻るきほひには慕ふやうに心あわたゞしと諫め給ひて、やうやう佛の御事など急がせ給ふ。六條のおとゞは哀に飽かずのみおぼしてやみにし御あたりなれば年比も忘れがたくいかならむをりに對面あらむ、今一度あひ見てその世の事も聞えまほしくのみおぼし渡るをかたみに世のき〻耳も憚り給ふべき身の程に、いとほしげなりし世のさわぎなどもおぼし出でらるれば萬につ〻み過ぐし給ひけるを、かうのどやかになり給ひて世の中を思ひしづまり給ふらむころほひの御有樣、いよいよゆかしく心もとなければあるまじきこと〻はおぼしながら大かたの御とぶらひにことつけて哀なるさまに常に聞え給ふ。若々しかるべき御あはひならねば御返りも時々につけて聞えかはし給ふ。昔よりはこよなくうち具し整ひはてにたる御けはひを見給ふにも猶忍びがたくて、昔の中納言の君のもとにも心深きことゞもを常にのたまふ。かの人のせうとなる和泉のさきの守を召しよせて若々しくいにしへにかへりて語らひ給ふ。「人づてならで物ごしに聞えしらすべきことなむある。さりぬべく聞えなびかしていみじく忍びて參らむ。今はさやうのありきも所せき身のほどにおぼろげならず忍ぶべきことなれば、そこにも又人にはもらし給はじと思ふにかたみにうしろ安くなむ」との給ふ。かんの君「いでや世の中を思ひ知るにつけても昔よりつらき御心をこ〻ら思ひつめつる年ごろのはてに、哀に悲しき御事をさし置きていかなる昔語をか聞えむ。實に人は漏り聞かぬやうありとも心

のとはむこそいと恥しかるべけれ」と打ち歎き給ひつゝ猶更にあるまじきよしをのみ聞ゆ。いにしへわりなかりし世にだに心かはし給はぬことにしもあらざりしを、實に背き給ひぬる御ためうしろめたきやうにはあれど、あらざりしことにもあらねば今しもけざやかにきよまはりて立ちにし我が名今さらに取り返し給ふべきにやとおぼしおこして、この志のだの森を道の志るべにてまうで給ふ。女君には「東の院にものする常陸の君の日比煩ひて久しくなりにけるを物騒しきまぎれにとぶらはねばいとほしくてなむ。晝などけざやかにわたらむもびんなきを夜の間に忍びてとなむ思ひ侍る。人にもかくとも知らせじ」と聞え給ひていといたく心けさうし給ふを例はさしも見えぬあたりを、あやしと見給ひて思ひあはせ給ふこともあれど、姫宮の御事の後は何事もいと過ぎぬる方のやうにはあらず、少し隔つる心添ひて見知らぬやうにておはす。その日は寢殿へも渡り給はで御文書きかはし給ふ。たきものなどに心を入れて暮し給ふ。よひ過してむつまじき人の限四五人ばかり網代車のむかし覺えてやつれたるにて出で給ふ。和泉の守して御せうそこ聞え給ふ。かく渡りおはしましたるよしさゝめき聞ゆれば、驚き給ひて怪しくはいかやうに聞えたるにかとむつがり給へどをかしやかにて返し奉らむにいとびんなう侍らむとて、あながちに思ひめぐらして入れ奉る。御とぶらひなど聞え給ひて「唯こゝもとに物ごしにても、更に昔のあるまじき心などは殘らずなりにけるを」と、わりなく聞え給へばいたくなげくなげくゐざり出で給へり。さればよ猶けぢかさはとかつおぼさるゝかたみにおぼろげならぬ御みじろきなればあはれも少

からず。ひんがしの對なりけり、辰巳のかたの廂にすゑ奉りてみさうじのしりはかためたれば「いと若やかなる心地もするかな。年月のつもりをも紛れなく數へらるゝ心ならひに、かくおぼめかしきはいみじうつらくこそ」と恨み聞え給ふ。夜いたく更け行く。玉藻に遊ぶをしの聲々などあはれに聞えて、しめじめと人め少なき宮の內の有樣にさも移り行く世かなとおぼしつゞくるに平仲がまねならねど誠に涙もろになむ。昔に變りておとなおとなしくは聞え給ふものから、これをかくてやとひき動かし給ふ。

「年月をなかにへだてゝ逢坂のさもせきがたくおつるなみだか」。女、

「涙のみせきとめがたきしみづにて行き逢ふ道ははやく絶えにき」などかけはなれ聞え給へど、いにしへをおぼし出づるも誰により多うはさるいみじきこともありし世のさわぎぞと思ひ出で給ふに、實に今一度の對面はありもすべかりけりとおぼしよわるも、もとよりづしやかなる所はおはせざりし人の、年比はさまざまに世の中を思ひ知り、さし方をくやしくおほやけわたくしのことに觸れつゝ數もなくおぼし集めて、いといたく過し給ひにたれど、昔覺えたる御對面にその世の事も遠からぬ心地して得心づよくもてなし給はず。猶らうらうしく若うなつかしくて一方ならぬ世のつゝましさをも哀れをも思ひ亂れて歎きがちにてものし給ふ氣色など、今始めたらむよりも珍しく哀にて明け行くもいと口惜しくて出で給はむ空もなし。朝ぼらけのたゞならぬ空に百千鳥の聲もいとうらゝかなり。花は皆散り過ぎて名殘かすめる梢の淺緑なるこだち、昔藤の宴し給ひしこの頃のことなりけむかしとお

ぼし出づるに、年月のつもりにける程もその折のことかきつゞけ哀におぼさる。中納言の君の見奉り送るとて妻戸押し開けたるに立ちかへり給ひて「この藤よいかに染めけむ色にか。猶えならぬ心添ふにほひにこそ。いかでかこの影は立ち離るべき」とわりなくいでがてにおぼしやすらひたり。やまぎはよりさし出づる日の花やかなるにさしあひ、目も輝く心地する御さまのこよなくねび加はり給へる御けはひなどを珍しく程經ても見奉るはましてよのつねならず覺ゆれば、さる方にてもなどか見奉り過し給はざらむ、御宮仕にもかぎりありてきはことに離れ給ふこともなかりしを、故宮のよろづに心を盡し給ひ、よからぬ世のさわぎにかるがるしき御名さへ響きて、やみにしよなど思ひ出でらる。名殘おほく殘りぬらむ御物語のとぢめにはげに殘りあらせまほしきわざなめるを、御身を心にえ任せさせ給ふまじく、こゝらの人目もいと恐しくつゝましければ、やうやうさしあがり行くに心あわたゞしくて、廊のとに御車さしよせたる人々も忍びてこわづくり聞ゆ。人召してかの咲きかゝりたる花一枝折らせ給へり。

「しづみしも忘れぬものをこりずまに身をなげつべきやどの藤波」。いといたくおぼし煩ひてよりゐ給へるを心ぐるしう見奉る。女君も今さらにいとつゝましくさまざまに思ひ亂れ給へるに花のかげは猶なつかしくて、

「身をなげむふちもまことの淵ならでかけじやさらにこりずまの波」。いと若やかなる御ふるまひを心ながらも許さぬことにおぼしながら關守のかたからぬたゆみにや、いとよく

語らひ置きて出で給ふ。そのかみも人よりこよなく心とめて思う給へりし御志ながらはつかにて止みにし御なからひには いかでか哀も少からむ。いみじく忍び入り給へる御ねくたれのさまを待ちうけて 女君さばかりならむと心得給へれどおぼめかしくもてなしておはす。なかなか打ちふすべなどし給へらむよりも心苦しく、などかくしも見放ち給へらむとおぼさるれば、ありしよりげに深き契をのみ長き世をかけて聞え給ふ。かんの君の御ことも又もらすべきならねど、いにしへの事も知り給へれば「まほにはあらねど物ごしにはつかなりつる對面なむのこりある心地する。いかでひとめ咎めあるまじくもて隱して今一度も」と語らひ聞え給ふ。打ち笑ひて「今めかしくもなりかへる御有樣かな。昔を今に改めくはへ給ふほど中空なる身のため苦しく」とてさすがに涙ぐみ給へるまみのいとらうたげに見ゆるに「かう心安からぬ御氣色こそ苦しけれ。唯おいらかにひきつみなどして敎へ給へ。隔あるべくもならはし聞えぬを思はずにこそなりにける御心なれ」とて、よろづに御心とり給ふほどに何事も得殘し給はずなりぬめり。宮の御方にもとみにえ渡り給はず、こしらへ聞えつゝおはします。姫宮は何ともおぼしたらぬを御うしろみどもぞ安からず聞えける。煩はしうなど見え給ふ氣色ならば 其方もまして 心苦しかるべきをおいらかに美しき 翫びぐさに思ひ聞え給へり。桐壺の御方はうちはへえ罷で給はず、御暇のありがたければ心安くならひ給へる若き御心にいと苦しくのみおぼしたり。夏比なやましくし給ふを頓にも許し聞え 給はねばいとわりなしとおぼす。珍しきさまの御心地にぞありける。まだいとあえかなる御程にいと

ゆゝしくぞ誰も誰もおぼすらむかし。辛うじてまかで給へり。姫宮のおはしますおとゞのひんがし面に御方はしつらひたり。明石の御方今は御身に添ひて出で入り給ふもあらまほしき御宿世なりかし。對の上こなたに渡りて對面し給ふついでに「姫宮にも中の戸あけて聞えむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、序なきにはつゝましきをかゝる折に聞えなれば心安くなむあるべき」とおとゞに聞え給へばうちゑみて「思ふやうなる御語らひにこそはあなれ。いと幼げに物し給ふめるをうしろやすく敎へなし給へかし」とゆるし聞え給ふ。宮よりも明石の君の恥しげにてまじらはむをおぼせば御ぐしすましひきつくろひておはする。たぐひあらじと見え給へり。おとゞは宮の御方に渡り給ひて「夕がたかの對に侍る人のしげいさに對面せむとて出でたつついでに近づき聞えさせまほしげにものすめるを、ゆるしてかたらひ給へ。こゝろなどはいとよき人なり。まだわかわかしくて御あそびがたきにもつきなからずなむ」などきこえ給ふ。「はづかしうこそはあらめ。何事をか聞えむ」とおいらかにのたまふ。「人のいらへはことにしたがひてこそはおぼし出でめ。隔て置きてなもてなし給ひそ」とこまかにをしへ聞え給ふ。御中うるはしくて過し給へとおぼすあまりに、何ごゝろなき御ありさまを見顯されむも恥しく味氣なけれどさのたまはむを心隔てむもあいなしとおぼすなりけり。對にはかく出でたちなどしたまふものからわれよりかみの人やはあるべき、身のほどのものはかなきさまを見え置きたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつゞけられてうちながめ給ふ。手習などするにも、おのづからふることも物おもはしきすぢのみか

ゝるゝを、さらばわが身には思ふことありけりとみづからぞおぼし知らるゝ。院わたりたまひて宮女御の君などの御ありさまどもをうつくしうもおはするかなとさまざま見たてまつり給へる御めうつしには年ごろめなれたまへる人のおぼろげならむがいとかくおどろかるべきにもあらぬをなほたぐひなくこそはと見たまふ。ありがたきことなりかし。あるべきかぎりけ高うはづかしげにとゝのひたるに添ひて、はなやかにいまめかしくにほひなまめきたるさまざまのかをりも取りあつめめでたきさかりに見えたまふ。こぞより今年はまさり昨日より今日はめづらしくつねにめなれぬさまのしたまへるを、いかでかくともありけむとおぼす。打ち解けとりつる御手習を硯のしたにさし入れ給へれど、見つけ給ひて引きかへし見たまふ。手などのいとわざとも上手と見えでらうらうしくうつくしげに書きたまへり。

「身にちかく秋やきぬらむ見るまゝに青葉の山もうつろひにけり」とある所に目とゞめ給ひて、

「水鳥の青ばゝ色もかはらぬをはぎのしたこそけしきことなれ」など書き添へつゝすさび給ふ。ことに觸れて心苦しき御氣色のしたにはおのづからもりつゝ見ゆるをことなくけち給へるもありがたく哀におぼさる。今夜は何方にも御暇ありぬべければかのしのび所にいとわりなく出で給ひにけり。いとあるまじきことゝいみじくおぼし返すにもかなはざりけり。春宮の御方はぢちの母君よりもこの御方をばむつましきものに頼み聞え給へり。いと美しげにおとなびまさり給へるを思ひ隔てずかなしと見奉り給ふ。御物語などいと懐しく

聞えかはし給ひて中の戶あけて宮にも對面し給へり。いと幼げにのみ見え給へば心やすくておとなおとなしく親めきたるさまに昔の御すぢをも尋ね聞え給ふ。中納言の乳母といふ召し出でゝ「同じかざしを尋ね聞ゆればかたじけなけれど、わかぬさまに聞えさすれどついでなくて侍りつるを、今よりは疎からずあなたなどにも物し給ひて怠らむとをば驚かしなども物し給はむなむ嬉しかるべき」などのたまへば「たのもしき御かげどもにさまざまにおくれ聞え給ひて心細げにおはしますめるを、かゝる御ゆるし侍るめればますことなくなむ思ひ給へられける。背き給ひにし上の御心むけも唯かくなむ、御心隔て聞え給はずまだいはけなき御有樣をもはぐゝみ奉らせ給ふべくぞ侍るめりし。うちうちにもさなむ賴み聞えさせ給ひし」など聞ゆ。「いとかたじけなかりし御せうそこの後はいかでとのみ思ひ侍れど、何事につけても數ならぬ身なむ口惜しかりける」と、安らかにおとなびたるけはひにて宮にも御心につき給ふべく繪などのことひゝなの捨て難きさま、若やかに聞え給へば、實にいと若く心よげなる人かなとをさなき御心ちには打ち解け給へり。さて後は常に御文かよひなどしてをかしき遊びわざなどにつけても疎からず聞えかはし給ふ。世の中の人もあひなうかばかりになりぬるあたりのことはいひあつかふものなれば「初めつ方は對の上いかにおぼすらむ。御覺えいとこの年比のやうには坐せじ。少しは劣りなむ」などいひけるを、今少し深き御志かくてしもまさるさまなるを、それにつけても又安からずいふ人々あるに、かくにくげなくさへ聞えかはし給へばことなほりてめやすくなむありける。神無月に對の上院の

御賀に嵯峨野の御堂にて藥師佛供養し奉り給ふ。いかめしきことはせちに諫め申し給へば忍びやかにとおぼしおきてたり。佛、きやうばこ、ぢすのとゝのへまことの極樂ぞ思ひやらるゝ。最ぞう王經金剛盤若ず命經などいとゆたけき御いのりなり。上達部いと多く參り給へり。御堂のさまおもしろくいはむかたなく紅葉のかげわけ行く野遊の程より始めてみものなるにかたへはきほひ集り給ふなるべし。霜がれ渡れる野原のまゝに馬車の行き通ふ音志げく響きたり。御ず經われもわれもと御方々いかめしくせさせ給ふ。二十三日を御としみの日にてこの院はかくすきまなく集ひ給へるうちに我が御わたくしの殿とおぼす、二條院にてその御まうけはせさせ給ふ。御さうぞくをはじめ大かたのことども、皆こなたにのみし給ふを、御方々もさるべきことどもわけつゝ望み仕うまつり給ふ。對どもは人の局々にしたるを拂ひて、殿上人諸大夫院司志も人までのまうけいかめしくせさせ給へり。寢殿のはなちいでを例の志つらひてらでんのいし立てたり。おとゞの西の間に御ぞの机十二たてゝ、夏冬の御よそひ御ふすまなど例の如く、紫の綾のおほひども麗しく見え渡りてうちの心はあらはならず。御前に置物の机二つ唐の地のすそごの覆ひしたり。かざしの臺は沈のけそくこがねの鳥、銀の枝に居たる心ばへなど淑景舍の御あづかりにて、明石の御方のせさせ給へるゆゑふかく心ことなり。後の御屏風四帖は式部卿宮なむせさせ給ひける。いみじくつくして例の四季の繪なれど珍しき泉水だんはなどめなれずおもしろし。北の壁にそへて置物の御厨子ふたよろひたてゝ御調度も例のことなり。南の廂に上達部、左右の大臣、式部卿宮をはじめ

奉りて次々はまして參り給はぬ人なし。舞臺の左うに樂人のひらばりうちてにしひんがしにとんじき八十ぐ、祿の唐櫃四十續けて立てたり。未の時ばかりに樂人まゐる。萬歳樂皇麞など舞ひて日暮れかゝるほどに、高麗のらんじやうして落蹲の舞ひ出でたるほど、猶常のめなれぬ舞のさまなれば舞ひはつる程に權中納言衞門督おりていりあやをほのかに舞ひて紅葉のかげに入りぬる名殘飽かず興ありと人々おぼしたり。いにしへの朱雀院の行幸に青海波のいみじかりし夕思ひ出で給ふ人々は權中納言衞門督の又劣らず立ち續き給ひにける、世々のおぼえありさまかたち用意などもをさをさ劣らず、つかさくらゐはやゝ進みてさへこそなどよはひの程をも數へて猶さるべきにて昔よりかくたち續きたる御なからひなりけりとめでたく思ふ。あるじの院も哀に涙ぐましくおぼし出でらるゝことども多かり。夜に入りて樂人ども罷り出づ。北のまんどころの別當ども人々ひきゐて祿の唐櫃によりてひとつつゞ取りてつぎつぎたまふ。白きものどもを品々かづきて山ぎはより池のつゝみ過ぐる程のよそめは千年をかねてあそぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる。御遊始まりてまたおもしろし。御ことどもは春宮よりぞとゝのへさせ給ひける。朱雀院より渡り參れる琵琶きん、内より賜はり給へる箏の御琴など皆昔覺えたる物のねどもにて珍しく彈き合せ給へるに、何の折にも過ぎにし方の御有樣うちわたりなどおぼし出でらる。故入道の宮おはせましかばかゝる御賀など我こそ進み仕うまつらましか、何事につけてかは志をも見え奉りけむと飽かず口惜しくのみ思ひ出で聞え給ふ。内にも故宮のおはしまさぬことを、何事にもはえなくさうざ

うしくおぼさるゝにこの院の御事をだに例の跡あるさまのかしこまりを盡しても得見せ奉らぬを世と共に飽かぬ心地し給ふも今年はこの御賀にことつけてみゆきなどもあるべくおぼしおきてけれど「世の中のわづらひならむこと更にせさせ給ふまじくなむ」といなび申し給ふこと度々になりぬれば口惜しくおぼしとまりぬ。しはすの二十日あまりのほどに中宮まかでさせ給ひて今年ののこりの御いのりに奈良の京の七大寺に御誦經、布四千段、この近き都の四十寺に絹四百疋をわかちてせさせ給ふ。ありがたき御はぐゝみをおぼし知りながら、何事につけてかは深き御志をも顯はし御覧ぜさせ給はむとて、父宮母御息所のおはせまし御ための志をも取り添へおぼすに、かうあながちにおほやけにも聞え返させ給へばことゞも多く留めさせ給ひつ。「四十の賀といふことはさきざきを聞き侍るにも殘のよはひ久しきためしなむ少かりけるを、この度は猶世のひゞき留めさせ給ひて、誠に後にたらむことを數へさせ給へ」とありけれどおほやけざまにて猶いと嚴めしくなむありける。宮の坐します町の寢殿に御しつらひなどしてさきざきにことに變らず。上達部の祿など大きやうになずらへてみ子達には殊に女のさうぞく、非參議の四位、まうちきんだちなど、たゞの殿上人には白き細長一かさねこしざしなどまで次々にたまふ。御さうぞく限なく淸らを盡して名高き帶みはかしなど、故前坊の御方ざまにて傳はり參りたるも又哀になむ。ふるき世のひとつのものと名ある限は、皆つどひ參る御賀になむあめる。昔物語にも物得させたるを、かしこきことには數へ續けためれど、いとうるさくてこちたき御なからひのことゞもはえぞかぞへ

あへ侍らぬや。内にはおぼしそめてし事どもをむげにやはとて中納言にぞつけさせ給ひてける。そのころの右大將やまひして辭し給ひけるを、この中納言に御賀の程よろこびくはへむとおぼし召して俄になさせ給ひつ。院も喜び聞えさせ給ふものから「いとかく俄にあまるよろこびをなむいちはやき心地し侍る」と卑下し申し給ふ。丑寅の町に御しつらひ設け給ひてかくろへたるやうにしなし給へれど、今日は猶かたことに儀式まさりて所々の饗などもくらづかさごくそうゐんより仕うまつらせ給へり。とんじきなどおほやけざまにて頭中將宣旨承りて御子達五人、左右のおとゞ大納言二人、中納言三人、宰相五人、殿上人は例の、内、春宮、院殘りすくなし。おまし御調度どもなどはおほきおとゞ委しくうけ給はりて仕うまつらせ給へり。今日は仰事ありてわたり參り給へり。院もいとかしこく驚き申し給ひて御ざにつき給ひぬ。もやのおましに向へておとゞの御ざあり、いと清らにものものしくふとりてこのおとゞぞ今さかりのしうとくとは見え給へる。あるじの院は猶いと若き源氏の君に見え給ふ。御屛風四帖に内の御手書かせ給へるからの綾のうすだんにしたゑのさまなどおろかならむやは。おもしろき春秋のつくりゑなどよりもこの御屛風の墨つきの輝くさまは目も及ばず、思ひなしさへめでたくなむありける。置物の御厨子ひきものふきものなど藏人所よりたまはり給へり。大將の御いきほひもいといかめしくなり給ひにたれば打ち添へて今日の作法いとことなり。御馬四十疋左右のうまづかさ六衛府の官人かみより次々にひきとゝのふる程日暮れはてぬ。例の萬歲樂賀皇恩などいふ舞氣色ばかり舞ひておとゞの渡り給へ

るに珍しくもてはやし給へる御遊に皆人心をいれ給へり。琵琶は例の兵部卿宮何事にも世にかたき物の上手に坐していとになし、お前にきんの御こと、おとゞ和琴ひき給ふ。年比添ひ給ひにける御耳の聞きなしにや、いと優に哀におぼさるれば、きんも御手をさをさかくし給はず、いみじきねども出づ。昔の御物語どもなど出できて今はたかゝる御なからひに何方につけても聞え通ひ給ふべき御むつびなど心よく聞え給ひて御みき數多たびまゐりて物のおもしろさも滞りなく御ゑひなきども得とゞめ給はず。御贈物にすぐれたる和琴一つ好み給ふこま笛そへて紫檀の箱ひとよろこひにからの本どもこゝのさうの本など入れて御車におひて奉れ給ふ。御馬どもむかへ取りて右のつかさども高麗の樂しての丶しる。六衛府の官人の祿ども大將たまふ。御心とそぎ給ひて嚴めしきことゞもはこのたびとゞめ給へれど內、春宮、一院、后宮次々の御ゆかりいつくしき程いひ知らず見え渡ることなれば猶かゝる折にはめでたくなむ覺えける。大將の唯一所おはするをさうざうしくはえなき心地せしかど、數多の人にすぐれ、おぼえことに人がらもかたはらなきやうに物し給ふにも、かの母北の方の伊勢の御息所との恨深く挑みかはし給ひけむほどの御すくせどもの行くへ見えたるなむさまざまなりける。その日の御さう束どもなど此方の上なむ志給ひける。祿ども大かたのことをぞ三條の北の方は急ぎ給ふめりし。折ふしにつけたる御いとなみうちうちのものゝ淸らをも此方には唯よそのことにのみ聞き渡り給ふを何事につけてかはかゝるものものしき數にもまじらひ給はましと覺えたるを、大將の君の御ゆかりにいとよくかずまへられ給へり。年

かへりぬ。桐壺の御方近づき給ひぬるにより正月朔日より、御ず法ふだんにせさせ給ふ。てらでらやしろやしろの御いのりはた數も知らず。おとゞの君ゆゝしきことを見給へてしかばかゝる程のことはいと恐しきものにおぼししみたるを、對の上などのさることし給はぬは口惜しくさうざうしきものから嬉しくおぼさるゝに、まだいとあえかなる御程にいかにおはせむとかねておぼしさわぐに、二月ばかりより怪しく御氣色かはりて惱み給ふに御心どもさわぐべし。おんみやうしどもゝ所をかへてつゝしみ給ふべく申しければ、外のさしはなれたらむは覺束なしとて、かの明石の御町の中の對に渡し奉り給ふ。此方は唯おほきなる對二つ、廊どもなむめぐりてありけるに御修法のだんひまなくぬりて、いみじきげんざども集ひてのゝしる。母君この時に我がすくせをも見ゆべきわざなめればいみじき心を盡し給ふ。かの大尼君も今はこよなきほけ人にてぞありけむかし。この御有樣を見奉るは夢の心地していつしかと參り近づきなれ奉る。年比この母君はかうそひさぶらひ給へど、昔のことなどまほにしも聞え知らせ給はざりけるを、この尼君喜びにえ堪へず、參りてはいと涙がちにふるめかしきことゞもをわなゝき出でつゝ語り聞ゆ。始つかたは怪しくむつかしき人かなと打ちまもり給ひしかど、かゝる人ありとばかりはほの聞き置き給へれば、なつかしくもてなし給へり。生れ給ひしほどのことおとゞの君のかの浦におはしましたりし有樣、今はとて京へ上り給ひしに誰も誰も心をまどはして、今はかぎりかばかりの契にこそはありけれと歎かしきを、若君のかくひきたすけ給へる御すくせのいみじく悲しきことゝほろほろと泣

けば、げに哀なりける昔のことを、かく聞かせざらましかば覺束なくても過ぎぬべかりけりとおぼして打ち泣き給ふ。心のうちには、我が身はげにうけばりていみじかるべききはにはあらざりけるを對の上の御もてなしにみがかれて人の思へるさまなどもかたほにはあらぬなりけり、身をば又なきものに思ひてこそ宮仕のほどにもかたへの人々をば思ひけち、こよなき心おごりをばしつれ、世の人はしたにいひ出づるやうもありつらむかしなどおぼし知りはてぬ。母君をばもとよりかく少しおぼえ降れるすぢと知りながら、生れ給ひけむ程などをば、ある世ばなれたるさかひにてなども知り給はざりけり。いとあまりおほどき給へるけにこそは。怪しくおぼおぼしかりけることなりや。かの入道の今は仙人の世にも住まぬやうにて居たなるを聞き給ふも心苦しくなど、かたがたに思ひ亂れ給ひぬ。いと物哀にながめておはするに御方參り給ひて日中の御加持に此方彼方より參り集ひ物騒がしくのゝしるにお前にとに人もさぶらはず尼君所えていと近くさぶらひ給ふ。「あな見苦しや、短き御几帳ひきよせてこそ侍ひ給はめ。風などさわがしくておのづからほころびのひまもあらむに、くすしなどやうのさましていとさかり過ぎ給へりや」などなまかたはらいたく思ひ給へり。よしめきそしてふるまふとは覺ゆめれども、まうまうに耳もおぼおぼしかりければ、あゝとかたぶきてゐたり。さるはいとさいふばかりにもあらずかし。六十五六のほどなり。尼姿いとかはらかにあてなるさまして目つやゝかに泣きはれたる氣色の怪しく昔思ひ出でたるさまなれば胸打ちつぶれて「こだいのひがごとどもや侍りつらむ。よくこの世の外のやうなるひが

おぼえどもにとりまぜつゝ怪しき昔のことゞも出でまうできつらむはや。夢の心地こそし侍れ」とて、うちほゝゑみて見奉り給へば、いとなまめかしく淸らにて例よりいたくしづまり、物おぼしたるさまに見え給ふ。我が子とも覺え給はずかたじけなきにいとほしきことゞも聞え給ひて、おぼし亂るゝにや、今はかばかりと御位を極め給はむ世に聞えも知らせむとこそ思へ、口惜しくおぼしすつべきにはあらねど、いといとほしく心おとりし給ふらむと覺ゆ。御加持はてゝまかでぬるに、御くだものなど近くまかなひなしこればかりをだにといと心苦しげに思ひて聞え給ふ。尼君はいとめでたううつくしく見奉るまゝにも、涙はえとゞめず、顏はゑみて口つきなどは見苦しくひろごりたれど、まみのわたり打ちしぐれてひそみ居たり。あなかたはらいたとめくはすれど聞きも入れず。

「老の波かひある浦に立ちいでゝしほたるゝあまを誰かとがめむ。昔の世にもかやうなるふる人は、罪ゆるされてなむ侍りける」ときこゆ。御硯なる紙に、

「しほたるゝあまを浪路のしるべにてたづねも見ばや濱のとまやを」。御方も待忍び給はで、うち泣き給ひぬ。

「世を捨てゝあかしの浦にすむ人も心のやみははるけしもせじ」など聞え紛はし給ふ。別れけむ曉のことも夢のうちにおぼし出でられぬを、口惜しくありけるかなとおぼす。彌生の十餘日のほどにたひらかに生れ給ひぬ。かねてはおどろおどろしくおぼし騷ぎしかど痛く惱み給ふこともなくて男御子にさへおはすれば限なく、おぼすさまにておとゞも御心おちる

給ひぬ。此方はかくれの方にて唯けぢかき程なるに、いかめしき御うぶやしなひなどのうちしきりひゞきよそほしき有樣、げにかひある浦と尼君のためには見えたれど、儀式なきやうなれば渡り給ひなむとす。對の上も渡り給へり。しろき御さうぞくし給ひて人の親めきて若宮をつと抱き居給へるさまいとをかし。みづからかゝること知り給はず、人の上にても見習ひ給はねばいと珍らかに美くしと思ひ聞え給へり。むつかしげにおはする程を絶えず抱きとり給へば、まことのをば君は唯まかせ奉りて、御湯殿のあつかひなどを仕う奉り給ふ。春宮の宣旨なる内侍のすけぞ仕うまつる。御むかへゆにおりたち給へるもいとあはれにうちうちのこともほの知りたるに、少しかたほならばいとほしからましを、あさましくけだかくげにかゝる契ことにものし給ひける人かなと見聞ゆ。その程の儀式などもまねびたてむにいと更なりや。六日といふに例のおとゞに渡り給ひぬ。七日の夜うちよりも御うぶやしなひのことあり。朱雀院のかく世を捨てゝおはします御かはりにや、藏人所より頭辨、宣旨うけたまはりて珍らかなるさまに仕うまつれり。祿のきぬなど又中宮の御方よりも、おほやけごとにはたちまさりいかめしくせさせ給ふ。次々のみ子達大臣の家々そのころのいとなみにてわれもわれもと淸らを盡して仕うまつり給ふ。おとゞの君もこの程のことゞもは例のやうにもことそがせ給はで、世になく響きこちたき程にうちうちのなまめかしくこまかなるみやびのまねび傳ふべきふしは目もとまらずなりにけり。おとゞの君も若宮を程なく抱き奉り給ひて、大將の數多まうけたなるを今まで見せぬがうらめしきにかくらうたき人を添へ

奉りたるとうつくしみ聞え給ふはことわりなりや。日々に物をひき延ぶるやうにおよすけ給ふ。御めのとなど心知らぬはとみにめさで、さぶらふ中にしな心すぐれたるかぎりをえりて仕うまつらせ給ふ。御方の御心おきてのらうらうしくけだかく大どかなるものゝさるべき方には卑下してにくらかにもうけばらぬなどを褒めぬ人なし。對の上はまほならねどみえかはし給ひてさばかり許しなくおぼしたりしかど、今は宮の御とくにいとむつましくやんごとなくおぼしなりにたり。ちごうつくしみし給ふ御心にてあまがつなど御手づから作りそゝくりおはするもいとわかわかし。明暮この御かしづきにてすぐし給ふ。かのこだいの尼君は若宮をえ心のとがに見奉らぬなむ飽かずおぼえける。なかなか見奉りそめて戀ひ聞ゆるにぞ命もえたふまじかりける。かの明石にもかゝる御こと傳へ聞きて、さるひじり心地にもいと嬉しく覺えければ、今なむこの世のさかひを心安くゆきはなるべきとでしどもにいひて、この家をば寺になしてあたりの田などやうのものは皆その寺のことにしおきて、この國のおくの郡に人も通ひ難く深き山あるをとしごろもしめおきながらあしこに籠りなむ後又人には見え知らるべきにもあらずと思ひて、唯少しの覺束なき事殘りければ、今までながらへけるを今はさりともと佛神を頼み申してなむうつろひける。この近きとしごろとなりては京にことなることならで、人も通はし奉らざりつ。これよりくだし給ふ人ばかりにつけてなむ、ひとくだりにても尼君にさるべき折ふしのこともかよひける。思ひ離るゝ世のとぢめにふみ書きて御方に奉れ給へり。「このとしごろは同じ世の中のうちにめぐらひ侍りつ

れど、何かはかくながら身をかへたるやうに思ひ給へなしつゝ、させることなき限は聞えうけ給はらず、かなぶみ見給へるは目のいとまいりて、念佛もけだいするやうにやくなうてなむ御せうそこも奉らぬを、つてにうけ給はれば若君は春宮に參り給ひて男宮生れ給へるよしをなむ深く悅び申し侍る。その故は自らかくつきなき山伏の身に、今更にこの世のさかえを思ふにも侍らず。過ぎにし方の年比、心ぎたなく六時のつとめにも唯御事を心にかけてはちすの上の露の願ひをばさし置きてなむ念じ奉りし。我、おもと生れ給はむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづからすみの山を右の手に捧げたり、山の左右より月日の光さやかにさし出でゝ世をてらす、みづからは山のしもの蔭に隱れてその光にあたらず、山をば廣き海に浮べ置きて、小さき船に乘りて西の方をさして漕ぎ行くとなむ見侍りし。夢さめてあしたより數ならぬ身に賴む所出できながら何事につけてかさるいかめしきことをば待ち出でむと心の中に思ひ侍りしを、そのころよりはらまれ給ひにしこなた、俗の方の書を見侍りしにも又內敎の心を尋ぬる中にも夢を信ずべき事多く侍りしかば賤しきふところのうちにも辱く思ひいたづき奉りしかど、力及ばぬ身に思ひ給へかねてなむ、かゝる道におもむき侍りにし。又この國のことにえづみ侍りて老の波更に立ち返らじと思ひとぢめて、この浦に年比侍りしほども若君を賴むことに思ひ聞え侍りしかばなむ心ひとつに多くのぐわんをたて侍りし。そのかへり申したひらかに思ひのごと時に逢ひ給ふ。若君國の母となり給ひて、願ひみち給はむ世に住吉の御社をはじめはたし申し給へ。更に何事をか疑ひ侍らむ。こ

のひとつの思ひ近き世にかなひ侍りぬれば、遙に西の方十萬億の國隔てたる九ぼんの上の望は疑なくなり侍りぬれば、今は唯むかふるはちすを待ち侍るほどその夕まで、水草きよき山の末にてつとめ侍らむ」とてなむ、まかりいりぬる。

「ひかりいでむ曉ちかくなりにけり今ぞ見しよの夢がたりする」とて月日かきたり。「命終らむ月日も更になおぼしめしそ、いにしへより人のそめ置きける藤衣にも、何かやつれたまふ。唯我が身は變化のものとおぼしなして老法師のためにはくどくをつくり給へ。この世の樂みに添へても後の世を忘れ給ふな。願ひ侍る所にだにいたり侍りなば必又對面も侍りなむ。さばのほかの岸に到りてとくあひ見むとをおぼせ」、さてかの社にたて集めたるぐわん文どもをおほきなるぢんのふばこにふんじ籠めて奉りたり。尼君にはことごとに書かず。「唯この月の十四日になむ草のいほり罷り離れて深き山に入り侍りぬる。かひなき身をば熊狼にもせし侍りなむ。そこにはなほおもひしやうなる御世を待ち出で給へ、あきらかなる所にて又對面はありなむ」とのみあり。尼君この文を見てかの使の大とこに問へば、「この御文書き給ひて三日といふになむかの絶えたる峰にうつろひ給ひにし。なにがしらもかの御おくりに麓まではさぶらひしかど、皆かへし給ひて僧一人、わらは二人なむ御供にさぶらはせ給ふ。今はと世を背き給ひしをりを悲しきとぢめと思う給へしかどのこり侍りけり。年比おこなひのひまひまによりふしながらかきならし給ひしきんの御琴琵琶とりよせ給ひて、かいしらべ給ひつゝ佛にまかり申しゝ給ひてなむ御堂にせにふし給ひしさらぬものどもゝ多

くは奉り給ひて、そののこりをなむ御弟子ども六十餘人なむ親しきかぎりさぶらひける、ほどにつけて皆そぶんし給ひて、猶しのこりをなむ京の御料とて送り奉り給へる。今はとてかき籠り遙けき山の雲霞にまじり給ひにし空しき御跡にとまりて、悲び思ふ人々なむ多く侍るなど、この大とこもわらはにて京より下りたりし人の老法師になりてとまれるいと哀に心ぼそしと思へり。佛の御弟子のさかしきひじりだに鷲の峯をばたどたどしからず頼み聞えながら猶薪つきける世のまどひは深かりけるを、まして尼君の悲しと思う給へることかぎりなし。御方は南のおとゞにおはするを、か〻る御せうそこなむあるとありければ忍びて渡り給へり。重々しく身をもてなして、おぼろけならでは通ひあひ見給ふこともかたきを、哀なることなむと聞きて覺束なければ打ち忍びてものし給へるにいといみじく悲しげなる氣色にて居給へり。火近く取りよせてこの文を見給ふにげにせきとめむ方ぞなかりける。よその人は何とも目とゞむまじきことのまづ昔さし方のこと思ひ出で戀しと思ひ渡り給ふ心にはあひ見で過ぎはてぬるにこそはと見給ふにいみじくいふかひなし。涙をえせきとめず、この夢がたりをかつは行くさき頼もしく、さらばひが心にて我が身をさしもあるまじきさまにあこがらし給ふと、中ごろ思ひたゞよはれしことはかくはかなき夢にたのみをかけて心高くものし給ふなりけりとかつがつ思ひ合せ給ふ。尼君久しくためらひて「君の御德には嬉しくおもだ〻しきことをも身にあまりてならびなく思ひ侍り。哀にいぶせき思ひもすぐれてこそ侍れ。數ならぬ方にてもながらへし都を捨て〻かしこにしづみ居しをだに世の人

に逢ひたる宿世にもあるかなと思ひ侍りしかど、生ける世に行きはなれ隔たるべき中の契とは思ひかけず、同じはちすに住むべき後の世のたのみをさへかけて年月を過しきて俄にかく覺えぬ御事出できて背きにし世に立ち返りて侍る。かひある御事を見奉り喜ぶものから片つ方には覺束なく悲しきことの打ち添ひて絕えぬをつひにかくあひ見ず隔てながらこの世を別れぬるなむ口惜しく覺え侍る。世にへし時だに人に似ぬ心ばへにより世をもてひがむるやうなりしを若きどち賴みならひておのおのはまたなく契りおきてければかたみにいと深くこそ賴み侍りしか。いかなればかく耳に近き程ながらかくて別れぬらむ」といひつゞけていと哀にうちひそみ給ふ。御方もいみじく泣きて「人にすぐれむ行くさきのことも覺えずや。數ならぬ身には何事もけざやかにかひあるべきにもあらぬものから、哀なる有樣に覺束なくてやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづのことさるべき人の御ためとこそ覺え侍れ。さて捗へ籠り給ひなば世の中も定なきにやがてきえ給ひなばかひなくなむ」とて、よもすがら哀なる事どもをいひ明し給ふ。「昨日もおとゞの君のあなたにありと見置き給ひてしを、俄にはひかくれたらむもかるがるしきやうなるべし。身ひとつは何ばかりも思ひ憚り侍らず、かくそひ給ふ御ためなどのいとほしきになむ、心に任せて身をももてなしにくかるべき」とて曉に歸り渡り給ひぬ。「若宮はいかゞ坐します。いかでか見奉るべき」とても泣きぬ。「今見奉り給ひてむ女御の君もいと哀になむ覺し出でつゝ聞えさせ給ふめる。院も事のついでにもし世の中思ふやうならばゆゝしきかねごとなれど尼君その程までながらへ給はなむ

とのたまふめりき。いかに思すことにかあらむ」とのたまへば、またうちゑみて「いでやされば
こそ様々ためしなきすくせにこそ侍れ」とて喜ぶ。このふばこは持たせて参うのぼり給ひ
ぬ。宮よりとく参り給ふべきよしのみあれば「かく思したることわりなり。珍しきことさへ
そひていかに心もとなくおぼさるらむ」と紫の上もの給ひて、若宮忍びて参らせ奉らむの御
心づかひし給ふ。御息所は御いとまの心安からぬにこり給ひて、かゝるついでにしばしあら
まほしくおぼしたる、程なき御身にさる恐しきことをし給へれば、少しおも痩せほそりていみ
じくなまめかしき御さまし給へり。「かくためらひ難くおはする程つくろひ給ひてこそは」
など御方などは心苦しがり聞え給ふをおとゞは「かやうにおも痩せて見え奉り給はむもな
かなか哀なるべきわざなり」などのたまふ。對の上などの渡り給ひぬる夕つ方しめやかなる
に御方お前に参り給ひてこのふばこ聞え知らせ給ふ「思ふさまに適ひはてさせ給ふまでは
とり隠して置きて侍るべけれど、世の中定めがたければうしろめたさになむ。何事をも御心
とおぼしかずまへざらむこなた、ともかくもはかなくなり侍りなば必ずしも今はのとぢめ
を御覧ぜらるべき身にも侍らねば、猶うつしごゝろうせず侍る世になむはかなきことをも
聞えさせおくべく侍りけると思ひ侍りて、むつかしくあやしき跡なれど、これも御覧ぜよこ
の御願文は近きみづしなどに置かせ給ひて必ずさるべからむ折に御覧じてこのうちのこと
どもはせさせ給へ。疎き人にはなもらさせ給ひそ。かばかりと見奉り置きつればみづからも
世をそむき侍りなむと思う給へなり行けば、よろづ心のどかにも覚え侍らず。對の上の御心

おろかに思ひ聞えさせ給ふな。いとありがたく物し給ふ深き御氣色を見侍れば、身にはこよなくまさりて長き御世にもあらなむとぞ思ひ侍る。もとより御身に添ひ聞えさせむにつけても、つゝましき身の程に侍ればゆづり聞えそめ侍りにしをいとかうしも物し給はじとなむ、としごろは猶世の常に思 う給へ渡り侍りつる。今はさし方行くさきさうしろ安く思ひなりにて侍り」などいと多く聞え給ふ。涙ぐみて聞きおはす。かくむつましかるべきおまへにも常に打ち解けぬさまし給ひて、わりなく物づゝみしたるさまなり。このふみの詞いとうたてこはくにくげなるさまを、みちのくにがみにて年經にければきばみあつこえたる五六枚に、さすがにかうにいと深くしみたるに書き給へり。いと哀とおぼして御ひたひがみのやうやうぬれゆく御そばめあてになまめかし。院は姫宮の御方におはしけるを、中の御さうじよりふと渡り給へればえしもひきかくさで御几帳を少しひきよせてみづからははたかくれ給へり。「若宮は驚き給へりや。時の間も戀しきわざなりけり」と聞え給へば御息所はいらへも聞え給はねば、御方「對に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。「いとあやしや、あなたにこの宮をらうじ奉りてふところを更に放たずもてあつかひ、人やりならずきぬも皆濡してぬぎかへがちなめる、かろがろしくなどかく渡し奉り給ふ。こなたに渡りてこそ見奉り給はめ」との給へば「いとうたて思ひぐまなき御事かな。女におはしまさむだにあなたにて見奉り給はむこそよく侍らめ。まして男は限なしと聞えさすれど心やすく覺え給ふを、たはぶれにてもかやうに隔てがましきさかしがり聞えさせ給ひそ」と聞え給ふ。打ち笑ひて「御中ともにまか

せて見放ち聞ゆべきなゝりな。隔てゝ今はたれもたれもさし放ちさかしらなどのたまふこそをさなけれ。まづはかやうにはひかくれてつれなくいひおとし給ふめりかし」とて御几帳をひきやり給へればもやの柱によりかゝりていと淸げに心はづかしげなるさましてものし給ふ。ありつる箱も惑ひかくさむもさまあしければさておはするを「なぞの箱ぞ深き心あらむけさう人の長歌詠みてふんじこめたる心地こそすれ」とのたまへば「あなうたてや今めかしくなりかへらせ給ふめる御心ならひに聞き知らぬやうなる御すさびごとこそ時々出でくれ」とてほゝゑみ給へれど物哀なりける御氣色どもしるければ、あやしとうちかたぶき給へるさまなれば煩しくて「かの明石の岩屋より忍びて侍りし御いのりの卷じゆ又まだしきぐわんなどの侍りけるを御心にも知らせ奉るべきをりあらば御覽じ置くべきやとて侍るを只今はついでなくて何にかはあけさせ給はむ」と聞え給ふに、實に哀なるべき有樣ぞかしとおぼして「いかに行ひまして住み給ひにたらむ。命長くてこゝらのとしごろつとむる罪もこよなからむかし。世の中によしあるさかしき方々の人とて見るにも、この世にそみたる程のにごり深きにやあらむ、かしこき方こそあれ、いとかぎりありつゝ及ばざりけりや。さもいたり深くさすがに氣色ありし人の有樣かな。ひじりだちこの世離れがほにもあらぬものから、したの心は皆あらぬ世にかよひ住み渡るとこそ見えしか。まして今は心苦しきほだしもなく思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば忍びていとあはまほしくこそ」との給ふ。「今はかの侍りし所をもすて鳥の音聞えぬ山にとなむ聞き侍る」と聞ゆれば「さらばその遺言な

なりな、せうそこはかよはし給ふや。尼君いかに思ひ給ふらむ。親子の中よりも又さるさまの契は殊にこそ添ふべけれ」とて打ち涙ぐみ給へり。「年のつもりに世の中の有樣をとかく思ひ知り行くまゝに、怪しく戀しく思ひ出でらるゝ人の御有樣なれば、深き契のなからひはいかに哀ならむ」などのたまふ序に、「この夢がたりもおぼし合するともやと思ひていと怪しき梵字とかいふやうなるあとに侍るめれど、御覽じ留むべきふしもやまじり侍るとてなむ。今はとて別れにしかども、猶こそ哀は殘り侍るものなりけれ」とて、さまよく打ち泣き給ふ。とり給ひて「いとかしこく猶ほれぼれしからずこそあるべけれ。手などもすべて何事もわざというそくにおつべかりける人の、唯この世なる方の心おきてこそすくなかりけれ。かの先祖のおとゞはいと賢くありがたき志を盡しておほやけに仕うまつり給ひける程に、ものゝたがひめありてそのむくいにかく末はなきなりなど人いふめりしを、女子の方につけたれど、かくていとつぎなしといふべきにはあらぬもそこらのおこなひのしるしにこそあらめ」など涙おしのごひ給ひつゝ、この夢のわたりに目とゞめ給ふ。怪しくひがひがしくすゞろに高き志ありと人もとがめ、またわれながらもさるまじきふるまひをかりにてもするかなと思ひしことは、この君の生れ給ひし時に契深く思ひ知りにしかど、目の前に見えぬあなたのことは、覺束なくこそ思ひ渡りつれ、さらばかゝるたのみありてあながちには望みしなりけり、よこさまにいみじきめを見漂ひしもこの人ひとりのためにこそありけれ、いかなるぐわんをか心に起しけむとゆかしければ、心の内に拜みてとり給ひつ。これは又具して奉るべ

きもの侍り。今又聞え知らせ侍らむ」と女御には聞え給ふ。そのついでに「今はかくいにしへの事をもたどり知り給ひぬれど、あなたの御心ばへをおろかに覺しなすな。もとよりさるべき中えさらぬむつびよりも、横ざまのなげの哀をもかけ、ひとことの心よせあるはおぼろげのことにもあらず。ましてこゝになどさぶらひなれ給ふを、みるみるも初めの志かはらず深くねんごろに思ひ聞えたるを、いにしへの世のたとへにもさこそはうはべにははぐゝみげなれど、らうらうしきたどりあらむもかしこきやうなれど、猶あやまりても我がためあたの心ゆがみたらむ人を、さも思ひよらずうらなからむためは引き返し哀にいかでかゝるにはと、罪得がましきにも思ひなほる事もあるべし。おぼろげの昔の世のあだならぬ人は違ふふしぶしもあれど、ひとりひとり罪なき時にはおのづからもてなほすためしともあるべかめり。さしもあるまじきことにかどかどしく癖をつけ、あいきやうなく人をもてはなるゝ心あるはいと打ち解けがたく思ひくまなきわざになむあるべき。多くはあらねど人の心のとあるさまかゝるおもむきを見るに、ゆゑよしといひさまざまに口惜しからぬきはの、心ばせあるべかめり。皆おのおの得たる方ありて取る所なくもあらねど、又とりたてゝ我がうしろみに思ひ、まめまめしく選び思はむにはありがたきわざになむ、唯誠の心のくせなく、善き事はこの對をのみなむ、これをぞおひらかなる人といふべかりけるとなむ思ひ侍る。よしとて又あまりひたゝけて頼もしげなきもいと口惜しや」とばかりの給ふに、かたへの人は思ひやられぬかし。「そこにこそ少し物の心得て物し給ふめるを、いとよくむつびかはしてこの御

うしろみをも同じ心にて物し給へ」など忍びやかにの給ふ。「のたまはせねどいとありがたき御けしきを見奉るまゝに明暮のことくさに聞え侍る。めざましきものになどおぼし許さゞらむにかうまで御覽じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまでかずまへのたまはすればかへりてはまばゆくさへなむ、數ならぬ身のさすがにきえぬは世のきゝみゝもいと苦しくつゝましく思う給へらるゝを、罪なきさまにもてかくされ奉りつゝのみこそ」と聞え給へば、「その御ためには、何の志かはあらむ。唯この御有樣をうちそひても得見奉らぬ覺束なさに讓り聞えらるゝなめり。それも又とりもちて、けちえんになどあらぬ御もてなしともに萬の事なのめにめやすくなればいとなむ思ひなく嬉しき。はかなきことにても物心得ずひがひがしき人はたちまじらふにつけて、人のためさへからきことありかし。さなほし所なく誰も物し給ふめれば心安くなむ」とのたまふにつけても、さりやよくこそ卑下しにけれなど思ひ續け給ふ。對へ渡り給ひぬ。「さもいとやんごとなき御志のみまさるめるかな。げにはた人よりことにかくしも具し給へる有樣のことわりと見え給へるこそめでたけれ。宮の御方うはべの御かしづきのみめでたくて渡り給ふことも得なのめならざるはかたじけなきわざなめりかし。同じすぢにはおはすれど今一きはゝ心苦しく」としりうごち聞え給ふにつけても、我がすくせはいとたけくぞ覺え給ひける。やんごとなきだにおぼすさまにもあらざめる世に、ましてたちまじるべき覺えにしあらねば、すべて今はうらめしきふしもなし。唯かのたえ籠りにたるやまずみを思ひやるのみぞ哀に覺束なき。尼君も唯福地の園に種まきてと

やうなりしひこととを打ち頼みて、後の世を思ひやりつゝ眺め居給へり。大將の君はこの姫君の御事を思ひ及ばぬにしもあらざりしかば、目に近くおはしますをいとたゞにも覺えず、大かたの御かしづきにつけてこなたにはさりぬべきをりをりに參りなれ、おのづから御けはひ有樣も見聞き給ふに、いと若くおほどき給へる一すぢにてうへの儀式はいかめしく世のためしにしつばかりもてかしづき奉り給へれど、をさをさけざやかに物深くは見えず。女房などもおとなおとなしきは少く若やかなるかたち人のひたぶるに打ち華やぎざればめるはいと多く、數知らぬまで集ひさぶらひつゝ、物思ひなげなる御あたりとはいひながら、何事ものどやかに心しづめたるは心の中のあらはにしも見えぬわざなれば、身に人知れぬ思ひ添ひたらむも又更にこゝちゆきけにとゞこほりなかるべきにしも打ちまじればかたへの人にひかれつゝ同じけはひもてなしになだらかなるを、唯あけくれはいはけたるみあそびたはぶれに心入れたるわらはべのありさまなど、院はいとめにつかず見給ふことゞもあれどひとつさまに世の中をおぼしのたまはぬ御本性なれば、かゝるかたをもまかせてさこそはあらまほしからめと、御覽じ許しつゝいましめとゝのへさせ給はず。さうじみの御有樣ばかりをばいとよく敎へ聞え給ふに少しもてつけ給へり。かやうのことを大將の君もげにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意氣色のこゝらの年經ぬれど、ともかくももり出で見え聞えたる所なくしづやかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をもけたず、身をもやんごとなく心にくゝもてなし添へ給へることゝ見し面影も忘れ難くのみなむ思ひ出でられ

ける。我が御北の方も哀と覺す方こそ深けれ、いふかひあり勝れたるらうらうじさなど物し給はぬ人なり。おだしきものに今はとめなるゝに、心ゆるびて猶かくさまざまにつどひ給へる御有樣どものとりどりにをかしきを、心ひとつに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は人の御ほどを思ふにも限なく心ことなる御ほどに、取りわきたる御けしきにしもあらず、人目のかぎりばかりにこそと見奉り知るにわざとおほけなき心にしもあらねど、見奉る折ありなむやと、ゆかしく思ひ聞え給ひけり。衞門のかんの君も院に常に參り親しくさぶらひ馴れ給ひし人なれば、この宮をちゝみかどのかしづきあがめ奉り給ひし御心おきてなどくはしく見奉り置きて、さまざまの御定めありし比ほひより聞えより、院にもめざましとはおぼしのたまはせずと聞きしを、かくことざまになり給へるはいと口惜しく胸いたきこゝちすれば、猶得思ひ離れずそのをりより語らひつきにける、女房のたよりに御有樣なども聞き傳ふるを慰めに思ふぞはかなかりける。對の上の御けはひには猶おされ給ひてなむと世の人もまねび傳ふるを聞きては、かたじけなくともさるものは思はせ奉らざらまし、げにたぐひなき御身にこそあたらざらめと常にこの小侍從といふ御ちぬしをもいひはげまして世の中定めなきを、おとゞの君もとより本意ありておぼしおきてたる方に趣き給はゞとたゆみなく思ひありきけり。『三月ばかりの空うらゝかなる日六條院に兵部卿宮、衞門督など參り給へり。おとゞ出で給ひて御物語などし給ふ。「しづかなる住まひはこの頃こそいとつれづれにまぎるゝことなかりけれ。おほやけわたくしにことなしや。何わざしてかは暮すべき」などの給ひ

て、「今朝大將の物しつるは何方にぞ、いとさうざうしきを、例の小弓射させて見るべかりけり。このむめるわかうどゝもゝ見えつるを、ねたういでやしぬる」と問はせ給ふ。大將の君は丑寅の町に人々數多して、まりもてあそばして見給ふときこしめして、「みだりがはしきことのさすがに目さめてかどかどしきぞかし。いづらこなたに」とて御せうそこあれば參り給へり。わかきんだちめく人々多かりけり。「鞠持たせ給へりや、誰々か物しつる」との給ふ。「これかれ侍りつ此方へまかでむや」との給ひて、寢殿のひんがしおもて桐壺は若宮具し奉りて參り給ひにし頃なれば こなたはかくろへたりけり。やりみずなどのゆきあひはれてよしあるかゝりの程をたづねて立ち出づ。おほきおほいどのゝ君達、頭辨、兵衛佐、大夫の君など過したるも又かたなりなるもさまざまに 人よりまさりて好み物し給ふ。やうやう暮れかゝるに風吹かずかしこき日なりと興じて辨の君もえ靜めず立ちまじれば、おとゞ「辨官もえをさめあへざめるを、上達部なりとも若きゑふづかさたちはなどか亂れ給はざらむ、かばかりのよはひにては怪しく見すぐす口惜しく覺えしわざなり。さるはいときやうざやうなりや、このことのさまよ」などのたまふに、大將もかんの君も皆おり居てえならぬ花の影にさまよひ給ふ。夕ばへいと淸げなり。をさをささまよくしづかならぬ亂れごとなめれど所から人がらなりけり。故ある庭の木立のいたく霞籠めたるにいろいろのひも解き渡る花の木ども、わづかなるもえぎのかげにかくはかなきことなれど善き惡しきけぢめあるをいどみつゝ我れも劣らじと思ひ顏なる中に、衛門督のかりそめに立ちまじり給へる足もとにならぶ人なかりけ

り。かたちいときよげになまめきたるさましたる人の用意いたくして、さすがにみだりがはしきをかしく見ゆ。みはしのまにあたれる櫻の蔭によりて人々花の上も忘れて心に入れたるを、おとゞも宮もすみの高欄に出でゝ御覽ず。いとらうある心ばへども見えて數多くなり行くに上らうも亂れてかうぶりのひたい少しくつろぎたり。大將の君も御位の程思ふこそ例ならぬ亂りがはしさかなと覺ゆれ。見る目は人よりけに若くをかしげにて櫻のなほしのやゝなえたるにさしぬきのすそつかた少しふくみて氣色ばかりひきあげ給へり。かるがるしくも見えず、物淸げなるうちとけ姿に花の雪のやうに降りかゝれば打ち見上げてしをれたる枝少し押し折りてみはしの中のしなの程に居給ひぬ。かんの君つゞきて「花亂りがはしく散るめりや。櫻はよぎてこそ」などの給ひつゝ宮の御前の方をしりめに見れば例のごとにをさまらぬけはひどもしていろいろこぼれ出でたるみすのつまづますきかげなど、春のたむけのぬさぶくろにやと覺ゆ。御几帳どもしどけなくひきやりつゝ人げ近く世づきてぞ見ゆるに、からねこのいと小さくをかしげなるをすこしおほきなる猫の追ひ續きて俄にみすのつまより走り出づるに人々おびえ騷ぎてそよそよとみじろきさまよふけはひどもきぬの音なひ耳かしましき心ちす。猫はまだよく人にもなつかぬにや、つないと長くつきたりけるを物にひきかけまつはれにけるを、逃げむとひこじろふ程にみすのそばいとあらはにひきあげられたるをとみにひきなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も心あわたゞしげにてものおぢしたるけはひどもなり。几帳のきは少し入りたる程にうちき姿にて立ち給

へる人あり。端より西の二の間のひんがしのそばなれば紛れ所もなくあらはに見入れらる。紅梅にやあらむ濃き薄き、すぎすぎにあまた重りたるけぢめ、はなやかに草紙のつまのやうに見えて櫻の織物のほそながなるべし、御ぐしのすそまでけざやかに見ゆるは絲をよりかけたるやうになびきてすそのふさやかにそがれたるいと美しげにて七八寸ばかりぞ餘り給へる。御ぞのすそがちにいとほそくさゝやかにて姿つき髮のかゝり給へるそばめいひしらずあてにらうたげなり。夕かげなればさやかならず奥暗き心地するもいと飽かず口をし。鞠に身をなぐる若公達の花のちるを惜しみもあへぬ氣色どもを見るとて、人々あらはをふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなけば見返り給へるおもゝちもてなしなどいとおいらかにて若くうつくしの人やとふと見えたり。大將いとかたはらいたけれどはひよらむもなかなかいとかるがるしければ、唯心を得させてうちしはぶき給へるにぞやをらひき入り給ふ。さるは我がこゝちにもいと飽かぬこゝちし給へど猫のつなゆるしつれば心にもあらず打ちなげかる。ましてさばかり心をしめたる衛門督は胸つとふたがりて誰ばかりにかはあらむこゝらの中にしるきうちきすがたよりも人に紛るべくもあらざりつる御けはひなど心にかゝりて覺ゆ。さらぬ顔にもてなしたれどまさにめとゞめじやと大將はいとほしくおぼさる。わりなきこゝちのなぐさめに猫を招きよせてかきいだきたればいとかうばしくてらうたげに打ちなくもなつかしく思ひよそへらるゝぞすきずきしきや。おとゞ御覽じおこせて「上達部のざいとかろがろしや、こなたにこそ」とて對の南面に入り給へれば皆そなたに參

り給ひぬ。宮も居直り給ひて御物語し給ふ。つぎつぎの殿上人はすのこにわらうだめしてわざとなくつばいもちひ、なし、からじやうのものどもさまざまに箱の蓋どもにとりまぜつゝあるを若き人々そぼれとりくふ。さるべきからものばかりして御かはらけまゐる。衛門督はいといたく思ひしめりて、やゝもすれば花の木に目をつけてながめやる。大將は心知りに怪しかりつる御簾のすきかげ思ひ出づる事やあらむと思ひ給ふ。いと端近なりつる有樣をかつはかろがろしと思ふらむかし。いでやこなたの御有樣のさはあるまじかめるものをと思ふに、かゝればこそ世のおぼえの程よりは內々の御志ぬるきやうにはありけれと思ひ合せて猶うちとの用意多からず、いはけなきはらうたきやうなれどうしろめたきやうなりやと思ひおとさる。宰相の君は萬の罪をもをさをさたどられず覺えぬ物のひまよりほのかにもそれと見奉りつるにも、我が昔よりの志のしるしあるべきにやと契嬉しき心地して、飽かずのみおぼゆ。院は昔物語しいで給ひて「おほきおとゞの萬の事にたちならびてかちまけのさだめし給ひし中に鞠なむ得及ばずなりにし、はかなきことは傳へあるまじけれど、ものゝすぢは猶こよなかりけり。いとめも及ばずかしこうこそ見えつれ」とのたまへば、うちほゝゑみて「はかばかしき方にはぬるく侍る家の風のさしも吹き傳へ侍らむに、後の世のため、殊なることなくこそ侍りぬべけれ」と申し給へば、「いかでか、何事も人に異なるけぢめをばしるし傳ふべきなり。家の傳へなどに、かきとゞめ入れたらむこそ、けうはあらめ」など、たはぶれ給ふ。御さまの匂ひやかに淸らなるを見奉るにも、かゝる人にならひていかばかりのこ

とにか、心をうつす人は物し給はむ、何事につけてか哀と見許し給ふばかりはなびかし聞ゆべきと、思ひめぐらすに、いとこよなく御あたりはるかなるべき身の程も思ひ知らるれば胸のみふたがりてまかで給ひぬ。大將の君ひとつ車にて道のほど物語し給ふ。「猶このごろのつれづれにはこの院に參りてまぎらはすべきなり、今日のやうならむいとまのひま待ちつけて花のをりすぐさず參れとの給ひつるを、春をしみがてら月の内に小弓持たせて參り給へ」と語らひ契る。おのおの別るゝ道の程物語し給うて宮の御事の猶いはまほしければ「院には猶この對にのみ物せさせ給ふなめりなかの御覺えのことなるなめりかし。この宮いかにおぼすらむ。みかどのならびなくならはし奉り給へるに、さしもあらで具し給ひにたらむこそ心苦しけれ」とあいなくいへば「たいだいしきこと、いかでかさはあらむ。こなたはさまかはりておほしたて給へるむつびのけぢめばかりにこそあべかめれ、宮をばかたがたにつけて、いとやんごとなく思ひ聞え給へるものを」と語り給へば「いであなかま給へ。皆聞きて侍る、いといとほしげなる折々あなるをや。さるは世におしなべたらぬ人の御おぼえをありがたきわざなりや」といとほしがる。

「いかなれば花に木づたふ鶯のさくらをわきてねぐらとはせぬ。春の鳥の櫻ひとつにとまらぬ心よ、あやしと覺ゆることぞかしと」口ずさびにいへば、いであなあぢきなのものあつかひや、さればよと思ふ。

「みやま木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花の色にあくべき。わりなきことひたお

もむきにのみやは」といらへて、煩しければことにいはせずなりぬ。ことごとにいひまぎらはしておのおのわかれぬ。かんの君は猶おぼいどのゝひんがしの對にひとりずみにてぞものし給ひける。思ふ心ありてとしごろかゝるすまひをするに人やりならずさうざうしく心ぼそきをりをりあれど、我が身かばかりにてなどか思ふことかなはざらむとのみ心おごりするに、この夕べよりくしいたく物おもはしくていかならむをりに又さばかりにてもほのかなる御ありさまをだに見む、ともかくもかきまぎれたるきはの人こそ、かりそめにもたはやすき物いみ、かたゝがへのうつろひもかろがろしきにおのづからともかくも物のひまをうかゞひつくるやうもあれなど、思ひやる方なく深き窓のうちに何にばかりのことにつけてかかく深き心ありけりとだに知らせ奉るべきと、胸いたくいぶせければ、小侍從がり例の文やり給ひて、「一日の風にさそはれて、みかきが原をわけ入りてはべりしに、いとゞいかに見おとし給ひけむ、その夕よりみだりごゝちかきくらしあやなくけふをながめくらし侍る」など書きて、

「よそに見てをらぬなげきはしげれどもなごり戀しき花のゆふかげ」とあれど侍從は一日の心も知らねば、唯世の常のながめにこそはと思ふ。おまへに人しげからぬ程なればこの文をもて參りて「この人のかくのみ忘れぬものにことゝひものし給ふこそ煩はしく侍れ。心苦しげなる有樣も見給へあまる心もやそひ侍らむと、みづからの心ながら知りがたくなむ」とうち笑ひて聞ゆれば「いとうたてあることをもいふかな」と何心もなげにのたまうて文ひ

ろげたるを御覧ず。見もせぬといひたる所をあさましかりしみすのつまをおぼし合せらるゝに、御おもて赤みておとゞのさばかりことのついでごとに大将に見え給ふな、いはけなき御有樣なめればおのづからとりはづして見奉るやうもありなむと、いましめ聞え給ふをおぼし出づるに、大將のさることありしと語り聞えたらむ時いかにあばめ給はむと、人の見奉りけむ事をばおぼさで、えはゞかり聞え給ふ心のうちぞをさなかりける。常よりも御さしいらへなければすさまじくおぼひて聞ゆべきことにもあらねばひき忍びて例のかく「一日はつれなし顏をなむ、めざましうとゆるし聞えざりしを、見ずもあらぬやいかにあなかけかけしや」とはやりかに走り書きて、

「今さらにいろにないでそ山櫻およばぬ枝にこゝろかけきと。かひなきことを」とあり。

若菜下

ことわりと思へどうれたくもいへるかな、いでやなぞかく異なる事なきあへおらひばかりをなぐさめにては、いかゞすぐさむ、かゝる人づてならでひとことをものたまひ聞ゆる世ありなむやと、思ふにつけても大方にては惜しくめでたしと思ひ聞ゆる院の御ためなまゆがむ心やそひにたらむ。つごもりの日は人々數多參り給へり。なまものうくすゞろはしけれど、そのあたりの花の色をも見てや慰むと思ひて參り給ふ。殿上ののりゆみ二月とありしを

過ぎて三月はた御き月なれば口惜しと人々思ふに、この院にかゝるまとゐあるべしと聞き傳へて例のつどひ給ふ。左右大將さる御なからひにて參り給へばすけたちなどいどみかはして、小弓とのたまひしかどかちゆみの勝れたる上ずどもありければ召し出でゝ射させ給ふ。殿上人どもゝつきづきしきかぎりは皆まへしりへの心こまどりにかたわきて、暮れゆくまゝに今日にとぢむる霞の氣色もあわたゞしく、亂るゝ夕風に花のかげいとゞ立つことやすからず。人々いたくゑひすぎ給ひてえんなるかけものどもこなたかなた人々の御心見えぬべきを、柳の葉をもゝたびあてつべきとねりどものうけばりていとるむじんなりや。すこしこゝしき手つきどもをこそいどませめとて、大將だちより始めており給ふに、衞門の督人よりけにながめをしつゝ物し給へば、かのかたはし心知れる御めには見つけつゝなほいとけしきことなり。煩しきこと出で來べきよにやあらむと我さへ思ひつきぬるこゝちす。この君達御中いとよしさるなからひといふ中にも心かはしてねんごろなればはかなきことにても物思はしくうち紛るゝことあらむをいとほしく覺え給ふ。みづからもおとゞを見奉るにけおそろしくまばゆくかゝる心はあるべきものか、なのめならむにてだにけしからず、人にてんつかるべきふるまひはせじと思ふものを、ましておほけなきことゝ思ひわびてはかのありし猫をだにえてしがな、思ふこと語らふべくはあらねどかたはらさびしきなぐさめにもなつけむと思ふに、物ぐるほしういかでかは盗み出でむと、それさへぞ難きことなりける。女御の御方に參りて物語など聞えまぎらはし心みる、いと奧深く心はづかしき御もてな

しにてまほに見え給ふこともなし。かゝる御なからひにだにけどほくならひたるを、ゆくり
かに怪しくはありしわざぞかしとは、さすがにうち覺ゆれど、おぼろげにしめたる我が心か
ら淺くも思ひなされず。春宮に參り給ひて、ろなうかよひ給へる所あらむかしと目とゞめて
見奉るに匂ひやかになどはあらぬ御かたちなれどさばかりの御有樣はた、いとことにてあ
てになまめかしくおはします。うちの御猫の數多ひきつれたりけるはらからどもの所々に
あがれて、この宮にも參れるがいとをかしげにてありくを見るにまづ思ひ出でらるれば、「六
條の院の姬宮の御方に侍る猫こそいと見えぬやうなる顏して、をかしうはべりしか、はつか
になむ見給へし」と啓し給へば、猫わざとらうたくせさせ給ふ御心にてくはしく問はせ給
ふ。「から猫のこゝのにたがへるさましてなむ侍りし。同じやうなるものなれど心をかしく
人なれたるは怪しくなつかしきものになむ侍る」などゆかしくおぼさるばかり聞えなし給
ふ。きこし召しおきて桐壺の御方より傳へて聞えさせ給ひければ參らせ給へり。げにいと美
しげなる猫なりけりと人々けうずるを、衞門督は尋ねむとおぼしたりきと御けしきを見置
きて、日比へて參り給へり。わらはなりしより朱雀院のとりわきておぼしつかはせ給ひしか
ば、御山ずみにおくれ聞えては又この宮にもしたしう參り心よせ聞えたり。御琴など敎へ
聞え給ふとて御猫ども數多集ひ侍りにけり。「いづら好みし人か」と尋ねて見つけ給へり。い
とらうたく覺えてかきなでつゝ居たり。宮も「げにをかしきさましたりけり。心なむまだな
つきがたきは見馴れぬ人を知るにやあらむ、こゝなる猫どもことに劣らずかし」とのたま

へば、「これはさるわきまへ心もをさをさ侍らぬものなれど、その中にも心かしこきはおのづからたましひ侍らむかし」など聞えて、「まさるどもさぶらふめるをこれは暫し賜はりあづからむ」と申し給ふ。心のうちにあながちにをこがましくかつは覺ゆ。つひにこれを尋ねとりてよるもあたり近くふせ給ふ。あけたてば猫のかしづきをしてなでやしなひ給ふ。ひとげ遠かりし心もいとよく馴れてともすればきぬのすそにまつはれ寄りふしむつるゝをまめやかにうつくしと思ふ。いといたくながめて端近く寄りふし給へるに、來てねうねうといとらうたげになけば、かきなでゝうたてもすゝむかなとほゝゑまる。

「戀ひわぶる人のかたみと手ならせばなれよ何とてなくねなるらむ」。これも昔の契にやと顏を見つゝのたまへば、いよいようらうたげになくをふところに入れて眺め居給へり。ごたちなどは「怪しく、俄なる猫のときめくかな。かやうなるもの見入れ給はぬ御心に」と咎めけり。宮より召すにも參らせずとりこめてこれを語らひ給ふ。』左大將殿の北の方は大殿の君達よりも、右大將の君をばなほ昔のまゝにうとからず思ひ聞え給へり。心ばへのかどかどしくけぢかくおはする君にて對面し給ふ時々もこまやかに隔てたる氣色なくもてなし給へれば、大將もしげいさなどのうとうとしく及びがたげなる御心ざまのあまりなるにさまことなる御むつびにて思ひかはし給へり。男君今はましてかの初の北の方をもてはなれはてゝ並びなくもてかしづき聞え給ふ。この御腹には男君達のかぎりなればさうざうしとて、かのまきばしらの姫君えてもてかしづかまほしくし給へど、おほぢ宮など更に許し給はず、こ

の君をだに人わらへならぬさまにて見むと覺しの給ふ。みこの御おぼえいとやんごとなくうちにもこの宮の御心よせいとこよなくて、このことゝ奏し給ふことをばえそむき給はず心ぐるしきものに思ひ聞え給へり。大方も今めかしくおはする宮にてこの院大殿にさしつぎ奉りては、人も參り仕うまつり、世の人もおもく思ひ聞えけり。大將もさる世のおもしとなり給ふべき志たかたなれば、姫君の御おぼえなどてかはかるくはあらむ。聞え出づる人々ことに觸れて多かれどおぼしもさだめず。衞門督をさも氣色ばまばとおぼすべかめれど、猫には思ひおとし奉るにや、かけても思ひよらぬぞ口惜しかりける。母君のあやしく猶ひがめる人にて世の常のありさまにもあらずもてけち給へるを口惜しきものにおぼして、まゝはゝの御あたりをば心つけてゆかしく思ひて、今めきたる御心ざまにぞ物し給ひける。兵部卿の宮猶一所のみおはして、御心につけておぼしける事どもは、皆たがひて世の中もすさまじく人わらへにおぼさるゝに、さてのみやはあまえて過ぐすべきと覺してこのわたりに氣色ばみより給へれば大宮「何かはかしづかむと思はむ女子をば宮仕へにつぎてはみ子達にこそは見せ奉らめ、たゞ人のすくよかになほなほしきをのみ今の世の人のかしこくする志ななきわざなり」とのたまひて、いたくも惱まし奉り給はずうけひき申し給ひつ。御子あまりうらみどころなきをさうざうしとおぼせど大方のあなづりにくきあたりなればえしもいひ過ぐし給はでおはしましそめぬ、いとになくかしづききこえ給ふ。大宮は女ごあまた物し給ひて、さまざま物なげかしき折々多かるに物こりもしぬべけれど猶この君のことの思ひ放

ち難く覺えてなむ、母君は怪しきひがものに年比にそへてなりまさり給ふ。大將はた我がことに從はずとておろかに見捨てられためればいとなむ心苦しきとて、御志つらひをもたちゐ御手づから御覽じいれよろづにかたじけなく御心に入れ給へり。宮はうせ給ひにける北の方を世と共に戀ひ聞え給ひて唯むかしの御有樣に似奉りたらむ人を見むとおぼしけるに、惡しくはあらねどさまかはりてぞ物し給ひけるとおぼすに、口惜しくやありけむ通ひ給ふさまいと物うげなり。大宮いと心づきなきわざかなとおぼし歎きたり。母君もさこそひがみ給ひつれどうつしごゝろ出でくる時は口惜しくうき世と思ひはて給ふ。大將の君もさればよいといたく色めき給へる御子をと、初より我が御心にゆるし給はざりしとなればにやものしと思ひ給へり。かんの君もかくたのもしげなき御さまを近く聞き給ふには、さやうなる世の中を見ましかばこなたかなたいかにおぼし見給はましなどなまをかしくも哀にもおぼし出でてけり。そのかみもけぢかく見聞えむとは思ひよらざりきかし、唯なさけなさけしう心深きさまにのたまひわたりしを、あへなくあはつけきやうにや聞きおとし給ひけむといとはづかしく、年比もおぼしわたることなれば、かゝるあたりにて聞き給はむことも心づかひせらるべくなどおぼす。これよりもさるべきことはあつかひきこえ給ふ。せうとの君だちなどしてかゝる御氣色も知らずがほににくからずきこえまつはしなどするに心苦しくもてはなれたる御心はなきにおほ北の方といふさがなものぞ常に許しなく怨じ聞え給ふ。「御子達はのどかにふたごゝろなくて見給はむをだにこそ華やかならぬ慰めには思ふべけれ」と

むつかり給ふを宮も漏り聞き給ひては、いと聞きならはぬことかな、昔いと哀と思ひし人をおきても猶はかなき心のすさびは絶えざりしかどからきびしき物えんじは殊になかりしものを、心づきなくいとゞ昔を戀ひ聞え給ひつゝふるさとにうちながめがちにのみおはします。さいひつゝもふたとせばかりになりぬればかゝるかたにめなれて唯さるかたの御中にてすぐし給ふ。はかなくて年月も重りて内のみかど御位につかせ給ひて十八年にならせ給ひぬ。次の君とならせ給ふべき御子おはしまさず。物のはえなきに世の中はかなく覺ゆるを心安く思ふ人々にも對面しわたくしざまに心をやりて のどかにすぐさまほしくなむと、年比おぼしのたまはせつるを、日比いと重く惱ませ給ふことありて俄におりゐさせ給ひぬ。世の人あかずさかりの御世をかくのがれ給ふことゝ惜み歎けど春宮もおとなびさせ給ひにたればうちつぎて世の中のまつりごとなど殊に變るけぢめもなかりけり。おほきおとゞちじの表奉りてこもり居給ひぬ。世の中の常なきにより、かしこきみかどの君も位を去り給ひぬるに、年ふかき身のかうぶりをかけむ何か惜しからむとおぼしのたまひて左大將右大臣になり給ひてぞ世の中のまつりごとつかうまつり給ひける。女御の君はかゝる御世をも待ちつけ給はでうせ給ひにければ限ある御位を得給へれど物のうしろのこゝちしてかひなかりけり。六條の女御の御腹の一の宮ばうに居給ひぬ。さるべきことかねて思ひしかどさしあたりては猶めでたく目驚かるゝわざなりけり。右大將の君大納言になり給ひて例の左に移り給ひぬ。いよいよあらまほしき御なからひなり。六條院はおり居給ひぬる冷泉院の御つぎお

はしまさぬを飽かず御心の中におぼす。同じすぢなれど思ひなやましき御事なくてすぐし給へるばかりにつみは隱れて末の世まではえ傳ふまじかりける御すくせ口惜しくさうざうしくおぼせど人にのたまひ合せぬことなればいぶせくなむ。春宮の女御は御子達あまた數そひ給ひて、いとゞ御おぼえならびなし。源氏のうちつゞきさききに居給ふべきことを世の人あかず思へるにつけても冷泉院の后は故なくてあながちにかくしおき給へる御心をおぼすに、いよいよ六條院の御ことを年月にそへて限なく思ひきこえ給へり。院のみかどおぼしめしゝやうにみゆきも所せからで渡り給ひなどしつゝかくてしも實にめでたくあらまほしき御有樣なり。姬宮の御ことはみかど御心留めて思ひきこえ給ふ。大方の世にも遍くもてかしづかれ給ふを、たいの上の御勢にはえまさり給はず、年月ふるまゝに御中いとうるはしくむつび聞えかはし給ひていさゝかあかぬことなくへだても見え給はぬものから「今はかうおほざうのすまひならでのどやかに行ひをもとなむ思ふ。この世はかばかりと見はてつる心地するよはひにもなりにけり。さりぬべきさまにおぼし許してよ」とまめやかにきこえ給ふをりをりあるを「あるまじくつらき御ことなり。みづから深きほいあることなれどとゞまりてさうざうしく覺え給ひ、ある世に代らん御有樣のうしろめたさによりこそながらふれ、遂にその事とげなん後にともかくもおぼしなれ」などのみさまたげ聞え給ふ。女御の君唯こなたをまことの御親にもてなし聞え給ひて、御かたはかくれがの御うしろみにて卑下しものし給へるしもぞなかなかゆくさきたのもしげにめでたかりける。尼君もやゝもすれば堪

へぬよろこびの涙ともすれば落ちつゝ目をさへのごひたゞして命長き嬉しげなるためしになりて物し給ふ。すみよしの御ぐわんかつがつはたし給はむとて春宮の女御の御いのりにまうで給はむとて、かの箱あけて御覧ずればさまざまのいかめしきことども多かり。年ごとの春秋のかぐらに必ず長き世のいのりを加へたるぐわんどもげにかゝる御勢ならでははたし給ふべき事ども思ひおきてざりけり。唯走り書きたるおもむきのざえざえしくはかばかしく佛神も聞き入れ給ふべき言の葉あきらかなり。いかでさるやまぶしのひじりこゝろにかゝる事どもを思ひよりけむと哀におほけなくも御覧ず。さるべきにて暫しかりそめに身をやつしける昔の世のおこなひびとにやありけむなどおぼしめぐらすにいとゞかるがるしくもおぼされざりけり。この度はこの心をば顯し給はず唯院のものまうでにて出で立ち給ふ。うらづたひの物さわがしかりしほどそこらの御ぐわんども皆はたし盡し給へれども、猶世の中にかくおはしましてかゝるいろいろのさかえを見給ふにつけても神の御たすけは忘れ難くて對の上もぐし聞えさせ給ひてまうでさせたまふ。ひゞき世の常ならずいみじくことどもそぎ捨てゝ世のわづらひあるまじくとはぶかせ給へどかぎりありければめづらかによそほしくなむ、上達部もおとゞふた所を置き奉りては皆つかうまつり給ふ。まひびとは衛府のすけどものかたち淸げにたけだちひとしきかぎりをえらせ給ふ。このえらびに入らぬをばはぢに憂へ歎きたるすきものどもありけり。べいじうも石淸水賀茂の臨時の祭などに召す人々の道々のことにすぐれたるかぎり整へさせ給へり。加はりたる二人なむこのゑづ

かさの名高きかぎりを召したりける。御神樂のかたにはいと多く仕うまつれり。內、春宮、院の殿上人かたがたに分れて心寄せつかうまつる。數も知らずいろいろにつくしたる上達部の御馬くら、馬ぞひ、ずゐじん、こどねりわらは、つぎつぎのとねりなどまで整へ飾りたる見物またなきさまなり。女御殿對の上はひとつに奉りたり。次の御車には明石の御かた尼君忍びて乘り給へり。女御の御めのと心知りにて乘りたり。かたがたのひとだまひ上の御方の五つ女御殿の五つ明石の御あがれのみつ、目もあやに飾りたるさうぞく有樣いへば更なり。さるは尼君をば同じくは老の浪のしわのぶばかりに人めかしくてまうでさまむと院はのたまひけれどこの度はかく大方のひゞきに、立ちまじらむもかたはらいたし、もし思ふやうならむ世の中を待ち出でたらばと御方はしづめ給ひけるをのこりの命うしろめたくてかつがつ物ゆかしがりてしたひ參り給ふなりけり。さるべきにてもとよりかく匂ひ給ふ御身どもよりもいみじかりけるちぎりあらはに思ひ知らるゝ人の御有樣なり。十月中の十日なれば神のいがきにはふくずも色かはりて松の下もみぢなどおとにのみ秋を聞かぬかほなり。ことごとしきこまもろこしのがくよりもあづまあそびの耳なれたるはなつかしくおもしろく浪風の聲に響きあひてさる小高き松風に吹き立てたる笛のねも外にて聞くしらべには變りて身にしみ、琴にうち合せたるひやうしもつゞみを離れてとゝのへとりたる方おどろおどろしからぬもなまめかしくすごうおもしろく所からはまして聞えけり。やまあゐにすれる竹のふしは松の綠に見えまがひかざしの花のいろいろは秋の草にことなるけぢめ分れて何

事にも目のみまがひいろふ。もとめこはつる末に若やかなる上達部はかたぬぎており給ふ。にほひもなく黒き上のきぬにすあうがさねゑびぞめの袖を俄に引きほころばしたるに、紅深きあこめの袂のうちしぐれたるに氣色ばかりぬれたる松はらをば忘れて紅葉の散るに思ひわたる。見るかひ多かるすかたども にいと白くかれたる荻を高やかにかざして唯一返りまひて入りぬるはいとおもしろく飽かずぞありける。おとゞ昔のことおぼし出でられ中比しづみ給ひし世のありさまも目の前のやうにおぼさるゝに、そのよのこととうち亂れ語り給ふべき人もなければ、ちじのおとゞをぞ戀しく思ひ聞え給ひける。入り給ひて二の車に忍びて、

「誰かまた心を知りてすみよしの神世を經たる松にことゝふ」。御たゝうがみに書き給へり。尼君うちしをれたるかゝる世を見るにつけてもかのうらにて今はと別れ給ひしほど女御の君のおはせし有樣など思ひ出づるもいとかたじけなかりける身のすくせの程を思ふ。世を背き給ひし人も戀しくさまざまに物悲しきをかつはゆゝしとことゝいみして、

「すみのえをいけるかひある渚とは年經るあまも今日や知るらむ」。おそくはびんなからむとたゞうち思ひけるまゝなりけり。

「昔こそまづ忘られねすみよしの神のしるしを見るにつけても」とひとりごちけり。よひとよ遊び明し給ふ。二十日の月遙にすみて海のおもておもしろく見えわたるに霜のいとこちたうおきて松原も色まがひて、よろづの事そゞろ寒くおもしろさも哀さも立ち添ひたり。

對の上常の垣根のうちながら時々につけてこそ興ある朝夕のあそびに耳ふり目なれ給ひけれ。みかどよりとの物見をさをさし給はず。ましてかくみやこの外のありきはまだ習ひ給はねば珍しくをかしく思さる。

「すみのえの松に夜ふかくおく霜は神のかけたるゆふかづらかも」。たかむらのあそんのひらの山さへといひける雪のあしたをおぼしやれば祭の心うせ給ふしるしにやといよいよたのもしくなむ。女御の君

「神人の手にとりもたる榊葉にゆふかけ添ふるふかき夜の霜」。中務の君、

「はふり子がゆふうちまがひおく霜はげにいちじるき神のしるしか」。つぎつぎ數知らず多かりけるを何せむにかは聞きおかむ。かゝるをりふしの歌は例の上手めき給ふ男達もなかなかいでぎえして松の千とせより離れて今めかしきことしなければうるさくてなむ。ほのぼのと明け行くに霜はいよいよ深くてもとすゑもたどたどしきまでゑひ過ぎにたる神樂おもてどものおのが顏をは知らで、おもしろきことに心はしみて、庭火もかげしめりたるになほまざいまざいと榊葉を取り返しつゝ祝ひ聞ゆる御世の末思ひやるぞいとゞしきや。萬の事あかずおもしろきままにちよをひとよになさまほしきよの何にもあらで明けぬればかへる浪にきほふも口惜しく若き人々おもふ。松原にはるばると立てつゞけたる御車どもの風に打ちなびくしたすだれのひまひまときはのかげに花の錦を引き加へたると見ゆるに、うへのきぬのいろいろけぢめおきてをかしきかけばん取りつゞきて物參りわたすをぞ

しもびとなどは目につきてめでたしとは思へる。尼君の御前にもせんかうのをしきにあをにびのおもておりてさうじものを參るとて目ざましき女のすくせかなとおのがじゝはしりうごちけり。詣でたまひし道はことごとしくて煩はしき神だからさまざまに所せげなりしをかへさは萬のせうえうを盡し給ふ。言ひ續くるもうるさくむつかしき事どもなれば、かゝる御有樣をもかの入道の聞かず見ぬ世にかけ離れ給へるのみなむあかざりける。難きとなりかし。まじらはましも心苦しくや。世の中の人これをためしにて心高くなりぬべきころなめり。萬の事につけてめであさみ世のことぐさにて明石の尼君とぞさいはひびとにいひける。かのちじの大殿の近江の君はすぐろくうつ時の詞にも明石の尼君明石の尼君とぞ幸ひ乞ひける。入道のみかどはおこなひをいみじくし給ひてうちの御事をも聞き入れ給はず、春秋の行幸になむ昔思ひ出でられ給ふこともまじりける。姫宮の御事をのみぞ猶えおぼしはなたでこの院をば猶大方の御うしろみに思ひ聞え給ひてうちうちの御心よせあるべくそうせさせ給ふ。二品になり給ひてみふなどまさる、いよいよ花やかに御勢そふ。對の上かく年月にそへてかたがたにまさり給ふ御おぼえに我が身はたゞ一所の御もてなしに人には劣らねどあまり年積りなばその御心ばへも遂に衰へなむ。さらむ世を見はてぬさきに心と背きにしがなとたゆみなくおぼしわたれどさかしきやうにやおぼさむとつゝまれて、はかばかしくもえ聞え給はず。うちのみかどさへ御心よせことに聞え給へば、おろかに聞かれ奉らむもいとほしくて渡り給ふ事ややうやうひとしきやうになりゆく。さるべき事ことわりとは思ひな

がら、さればよとのみ安からずおぼされけれど猶つれなく同じさまにて過し給ふ。春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたに取りわきてかしづき奉り給ふ。その御あつかひになむつれづれなる御よがれのほども慰め給ひける。いづれもわかずうつくしく悲しと思ひ聞え給へり。夏の御方はかくとりどりなる御うまごあつかひを羨みて大將の君のないしのすけばらの君を切に迎へてぞかしづき給ふ。いとをかしげにて心ばへもほどよりはざれおよすげたればおとゞの君もらうたがり給ふ。少なき御つぎとおぼしゝかど末にひろごりてこなたかなたいと多くなり添ひ給ふを今は唯これをうつくしみあつかひ給ひてぞつれづれもなぐさめ給ひける。右の大とのの參り仕うまつり給ふことといにしへよりもまさりて、親しく今は北の方もおとなびはてゝ、かの昔のかけがけしきすぢ思ひはなれ給ふにや、さるべき折もわたり給ひつゝ對の上にも御對面ありて、あらまほしく聞えかはし給ひけり。姫宮のみぞ同じさまに若くおほどきておはします。女御の君は今はおほやけざまに思ひはなち聞え給ひてこの宮をばいと心苦しく幼からむ御むすめのやうに思ひはぐゝみ奉り給ふ。朱雀院の今はむげに世近くなりぬる心地して物心ぼそきを更にこの世の事顧みじと思ひ捨つれど、對面なむ今一度あらまほしきを、もしうらみのこりもこそすれ、ことごとしきさまならで渡り給ふべく聞え給ひければ、おとゞもげにさるべきことなり、かゝる御氣色なからむにてだに進み參り給ふべきをましてかうまち聞え給ひけるが心苦しきことゝ參り給ふべき事おぼしまうく。ついでなくすまじきさまにてやはひわたり給ふべき、なにわざをしてか御覽ぜさせ給

ふべきとおぼしめぐらす。このたびたり給はむ年若菜などてうじてやとおぼしてさまざまの御法服のこと、いもひの御まうけのしつらひ何くれとさまことに變れる事どもなれば、人の御心しらひども入りつゝおぼしめぐらす。いにしへも遊びの方に御心留めさせ給へりしかばまひびと樂人などを、心ことに定めすぐれたるかぎりを整へさせ給ふ。右大殿の御子どもふたり、大將の御子ないしのすけばらの加へて三人、又ちひさき七つよりかみのは皆殿上せさせ給ふ。兵部卿の宮のわらはそんわうすべてさるべき宮達の御子ども、家のこの君達皆えらび出で給ふ。殿上の君達もかたちよく同じき舞の姿も心ことなるべきを定めて數多の舞のまうけをせさせ給ふ。いみじかるべきたびのことゝてみなひと心を盡し給ひてなむ。道々の物の師上手いとまなきころなり。宮はもとよりきんのおんことをなむ習ひ給ひけるをいと若くて院にもひき別れ奉り給ひにしかば覺束なく思して「參り給はむついでにかの御琴の音なむ聞かまほしき。さりともきんばかりはひき取り給ひつらむ」としりうごとに聞え給ひけるを内にも聞し召して「げにさりともけはひことならむかし。院の御前にて手つくし給はむついでに參りて聞かばや」などの給はせけるをおとゞの君も傳へ聞き給ひて「年比さりぬべきついでごとには敎へ聞ゆることもあるを、そのけはひはげに優り給ひにたれど、まだ聞し召し所あるものふかきてにはおよばぬを何心もなくて參り給へらむついでに聞し召さむとゆるしなくゆかしがらせ給はむはいとはしたなかるべきことにも」といとほしくおぼしてこのころぞ御心留めて敎へ聞え給ふ。しらべ殊なるて二つ三つおもしろきだいこくど

もの四季につけて變るべきひゞき空のさむさぬるさをとゝのへ出でゝやんごとなかるべき手のかぎりを取り立てゝ敎へ聞え給ふに、心もとなくおはするやうなれどやうやう心得給ふまゝにいとよくなり給ふ。晝はいと人しげく猶ひとたびもゆしあんずる暇も心あわたゞしければよるよるなむしづかにことの心もしめ奉るべきとて對にもその比は御暇聞え給ひて明暮敎へ聞え給ふ。女御の君にも對の上にもきんは習はし奉り給はざりければこのをりをさをさ耳なれぬ手ども彈き給ふらむをゆかしとおぼして女御もわざとありがたき御暇を唯暫しと聞え給ひてまかで給へり。御子二所おはするを又もけしきばみ給ひていつゝきばかりにぞなり給へればかみわざなどにことつけておはしますなりけり。十一月すぐしては參り給ふべき御せうそこうちしきりあれどかゝるついでにかくおもしろきよるよるの御遊をうらやましく、などて我に傳へ給はざりけむとつらく思ひ聞え給ふ。冬の夜の月は人にたがひてめで給ふ御心なればおもしろき夜の雪の光にをりに合ひたる手どもひき給ひつゝさぶらふ人々も少しこの方にほのめきたるに御琴どもとりどりにひかせて遊びなどし給ふ。年の暮れつかたは對などにはいそがしくこなたかなたの御いとなみにおのづから御覽じ入るゝことゞもあれば春のうらゝかならむ夕などにいかでこの御琴のね聞かむとのたまひわたるに年返りぬ。院の御賀まづおほやけよりせさせ給ふ。ことどももいとこちたきにさしあひてはびんなくおぼされて少しほどすぐし給ふ。二月十餘日と定め給ひて樂人まひ人など參りつゝ御あそび絕えずあり。「この對に常にゆかしうする御琴のねいかでこの人々のさう琵

琶のねも合せて女樂こゝろみさせむ、只今の物の上手どもこそ更にこのわたりの人々の御心志らひどもにまさらね、はかばかしく傳へ取りたることはをさをさなけれど、何事もいかで心に知らぬことあらじとなむ、幼きほどに思ひしかば世にある物の師といふかぎり、又高き家々のさるべき人の傳へどもを殘さず試みし中にいと深くはづかしきかなと覺ゆるきはの人なむなかりし。そのかみよりも又この比の若き人々のざれよしめきすぐすにはたあさくなりにたるべし。きんはたまして更にまねぶ人なくなりにたりとか。この御琴のねばかりだに傳へたる人をさをさあらじ」とのたまへば何心なく打ちゑみて嬉しくかくゆるし給ふ程になりにけるとおぼす。廿一二ばかりになり給へど猶いといみじくかたなりにきびはなる心地してほそくあえかに美しくのみ見え給ふ。「院にも見え奉り給はで年經ぬるをねびまさり給ひにけりと御覽ずばかり用意くはへて見え奉り給へ」とことに觸れて敎へ聞え給ふに、げにかゝる御うしろみなくてはましていはけなくおはします御有樣かくれなからましと人々も見奉る。正月二十日ばかりになれば空もをかしき程に風ぬるくふきて御前の梅も盛になりゆく。大方の花の木どもゝ皆氣色ばみ霞み渡りにけり。「月たゝば御いそぎ近く物騷がしからむにかきあはせ給はむ御琴のねもしがくめきて人のいひなさむを、このころ靜なるほどに試み給へ」とて寢殿にわたし奉り給ふ。御供にわれもわれもと物ゆかしがりてまう上らまほしがれどこなたに遠きをばえりとゞめさせ給ひて少しねびたれどよしあるかぎりえりてさぶらはせ給ふ。わらはべはかたちすぐれたる四人赤色に櫻のかざみ薄色の織物の

あこめうきもんのうへの袴、紅のうちたるさまもてなしすぐれたるかぎりを召したり。女御の御方にも御志つらひなどいとゞ改れる比の曇りなきにおのおのいどましく盡したるよそひどもあざやかに二なし。童は青色にすあうのかざみ、からあやのうへの袴、あこめは山吹なるからのきを同じさまに整へたり。明石の御方のはことごとしからで紅梅ふたり櫻ふたり、あをしのかぎりにてあこめ濃く薄くうちめなどえならで着せ給へり。宮の御方にもかくつどひ給ふべく聞きたまひてわらはべの姿ばかりは殊につくろはせ給へり。あをにに柳のかざみ、えびぞめの袙など殊にこのましく珍らしきさまにはあらねど大方のけはひのいかめしく氣高きことさいへどならびなし。ひさしの中の御さうじをはなちてこなたかなた御几帳ばかりをけぢめにて中の間は院のおはしますべきおましよそひたり。今日の拍子合せにはわらはべを召さむとて右おほい殿の三郎、かんの君の御はらの兄君さうの笛、左大將の御太郎横笛と吹かせてすのこにさぶらはせ給ふ。内には御志とねども並べて御琴どもまゐりわたす。ひし給ふ御琴どもうるはしきこんぢの袋どもに入れたる取り出でゝ明石の御方に琵琶、紫の上にわごん、女御の君にさうの御琴、宮にはかくことごとしき琴はまだえひき給はずやと危くて例の手ならし給へるをぞ調べて奉り給ふ。筝の御琴はゆるぶとなけれど、猶かく物に合する折の調べにつけてことぢのたちど亂るゝものなり。よくその心志らひ整ふべきを女はえはり志づめじを猶大將をこそ召し寄せつべかめれ。「この笛吹どもまだいと幼げにて拍子とゝのへむ賴つよからず」と笑ひ給ひて「大將こなたに」と召せば御かたが

たはづかしく心づかひしておはす。明石の君を放ちてはいづれも皆捨て難き御弟子どもなれば御心加へて大將の聞き給はむになんなかるべくとおぼす。女御は常にうへのきこし召すにも物に合せつゝひきならし給へればうしろやすきを和琴こそいくばくならぬしらべなれどあとさだまりたることなくてなかなか女のたどりぬべけれ、春の琴のねは皆かき合するものなるを亂るゝ處もやとなまいとほしくおぼす。大將いといたく心げさうして御前のことごとしくうるはしき御心みあらむよりも今日の心づかひは殊にまさりて覺え給へばあざやかなる御直衣、からにしみたる御ぞども袖いたくたきしめて引きつくろひて參り給ふほどくれはてにけり。ゆゑあるたそがれ時の空に花はこぞのふる雪思ひ出でられて枝もたわむばかり咲き亂れたり。ゆるらかに打ち吹く風にえならず匂ひたるみすの內のかをりも吹き合せて鶯さそふつまにしつべくいみじきおとゞのあたりのにほひなり。みすの下より箏の御琴のすそ少しさし出でゝ「かるがるしきやうなれどこれが緒整へて調べ試み給へ。こゝに又うとき人の入るべきやうもなきを」とのたまへば打ちかしこまりて給はり給ふほどようい多くめやすくていちこちでうの聲にはちの緒を立てゝふとも調べやらでさぶらひ給へば「猶かきあはせばかりは手ひとつすさまじからでこそ」とのたまへば「更に今日の御遊のさしいらへにまじらふばかりの手づかひなむ覺えず侍りけるを」と氣色ばみ給ふ。「さもあることなれど女樂にえことまぜでなむ逃げにける とつたはらむ名こそ惜しけれ」とて笑ひ給ふ。調べはてゝをかしき程に搔き合せばかり彈きて參らせ給ひつ。この御まごの君達のいと

美しきとのゐすがたどもにて吹き合せたる物のねどもまだ若けれどおひさきありていみじくをかしげなり。御琴どもの調べども整ひはてゝ搔き合せ給へるほどいづれとなき中に琵琶はすぐれて上手めきかみさびたる手づかひすみはてゝおもしろく聞ゆ。和琴に大將も耳留めて給へるになつかしくあいぎやうづきたる御つまおとに搔き返したるねの、珍しく今めきて更にこのわざとある上手どものおどろおどろしく搔き立てたるしらべ調子に劣らずにぎはゝしく、やまとごとにもかゝる手ありけりと聞き驚かる。深き御らうの程あらはに聞えておもしろきにおとゝ御心おちゐていとありがたく思ひ聞え給ふ。さうの御琴は物のひまひまに心もとなく漏りいづる物のねがらにてうつくしげになまめかしくのみ聞ゆ。きんは猶若き方なれど習ひ給ふさかりなればたどたどしからずいとよく物に響き合ひていうになりにける御琴のねかなと大將聞き給ふ。ひやうしとりてさうがし給ふ。院も時々扇うちならして加へ給ふ御聲昔よりもいみじくおもしろく少しふつゝかにものものしきけそひて聞ゆ。大將も聲いとすぐれ給へる人にて夜の靜になり行くまゝにいふかぎりなくなつかしき夜の御遊なり。月心もとなきころなればとうろこなたかなたにかけて火よき程にともさせ給へり。宮の御方をのぞき給へれば人よりけにちひさく美しげにて唯御ぞのみある心ちす。にほひやかなる方はおくれて唯いとあてやかにをかしく、二月の中の十日ばかりの靑柳の僅にしたり始めたらむ心地して、鶯の羽風にも亂れぬべくあえかに見え給ふ。櫻のほそながにみぐしは左みぎよりこぼれかゝりて柳の糸のさましたり。これこそは限なき人の御有樣

なめれと見ゆるに女御の君は同じやうなる御なまめき姿の今少しにほひ加はりてもてなしけはひ心にくゝよしあるさまし給ひてよく咲きこぼれたる藤の花の夏にかゝりてかたはらに並ぶ花なき朝ぼらけの心地ぞし給ふ。さるはいとふくらかなる程になり給ひてなやましく覺え給ひければ御琴も推しやりてけうそくにおしかゝり給へり。さゝやかになよびかゝり給へるに、御けうそくは例の程なればおよびたる心地して殊更にちひさく作らばやと見ゆるぞいと哀げにおはしける。紅梅の御ぞに御ぐしのかゝりはらはらと淸らにてほかげの御姿世になく美しげなるに紫の上はえびぞめにやあらむ、色濃きこうちき、うすすはうの細長に御ぐしのたまれるほどこちたくゆるらかにおほきさなどよき程にやうだいあらまほしく、あたりにほひ滿ちたる心地して、花といはゞ櫻にたとへても猶物よりすぐれたるけはひ殊に物し給ふ。かゝる御あたりに明石はけおさるべきをいとさしもあらずもてなしなど氣色ばみはづかしく心のそこゆかしきさましてそこはかとなくあてになまめかしく見ゆ。柳の織物の細長もえぎにやあらむ、小袿着てうすものゝ物はかなげなる引きかけて、殊更ひげしたれどけはひ思ひなしも心にくゝあなづらはしからず。こまの靑地の錦の端さしたるしとねにまほにもゐて琵琶をうち置きて唯氣色ばかりひきかけてたをやかにつかひなしたるばちのもてなし、音を聞くよりも又ありがたくなつかしくて五月まつ花たちばなの花も實もくしておしをれるかをり覺ゆ。これもかれも打ち解けぬ御けはひどもを聞き見給ふに大將もいと打ちゆかしく覺え給ふ。對の上の見し折よりもねびまさり給へらむありさまゆか

しきにしづ心もなし、宮をば今少しのすくせ及ばましかば我が物にても見奉りてまし。心のいとぬるきぞくやしきや、院はたびたびさやうにおもむけてしりうごとにものたまはせけるをと、ねたく思へど少し心安き方に見え給ふ御けはひに、あなづり聞ゆとはなけれどいとしも心は動かざりけり。この御かたをば何ごとも思ひ及ぶべき方なくけ遠くて年比過ぎぬれば、いかでか唯大方に心よせあるさまをも見え奉らむとばかりの口惜しく歎しきなりけり。あながちにあるまじくおほけなき心などは更に物し給はず、いとよくもてをさめ給へり。夜更け行く風のけはひひやゝかなり。臥まちの月はつかにさし出でたる心もとなしや。「春のおぼろ月夜よ、秋の哀はたかうやうなる物のねに蟲の聲より合せたる、たゞならずこよなく響きそふ心地すかし」とのたまへば大將の君「秋の夜の隈なき月には萬の物のとゞこほりなきに琴笛の音もあきらかに澄める心地はし侍れど猶殊更に作り合せたるやうなる空の氣色花の露もいろいろめ移ろひ心ちりてかぎりこそ侍れ。春の空のたどたどしき霞の間より朧なる月かげに靜に吹き合せたるやうには、いかでか笛のねなども艶に澄みのぼりはてなむ。女は春をあはれむとふるき人のいひ置き侍りける、げにさなむ侍りける。なつかしくものゝとゝのほることは春の夕暮こそことに侍りけれ」と申し給へば「いなこのさだめよ。いにしへより人のわきねたることを末の世にくだれる人のえあきらめはつまじくこそ。物のしらべごくのものどもはしもげにりちをば次のものにしたるはさもありかし」などの給ひて「いかに只今いうそくのおぼえたかきその人かの人ごぜんなどにて度々試みさせ給ふにすぐれ

たるは數少くなりためるをそのこのかみと思へる上手どもいくばくえまねび取らぬにやあらむ。このがくほのかなる女たちの御中にひきまぜたらむにきは離るべくこそ覺えね。年比かくうもれてすぐすに耳なども少しひがひがしくなりにたるにやあらむ。口惜しうなむ怪しく人のざえはかなくとりすることども、物のはえありてまさる所なる。その御前の御あそびなどにひときざみにえらばるゝ人々、それかれといかにぞ」とのたまへば大將「それをなむとり申さむと思ひ侍りつれどあきらかならぬ心のまゝにおよすげてやはと思ひ給ふる。のぼりての世を聞き合せ侍らねばにや。衞門督のわごん、兵部卿の宮の御琵琶などをこそこの比珍らかなるためしに引き出で侍るめれ。げにかたはらなきを、こよひうけたまはるものゝ音どもの皆等しく耳驚き侍れば、猶かくわざともあらぬ御あそびとかねて思ひ給へたゆみける心の騷ぐにや侍らむ、さうがなどいと仕うまつりにくゝなむ。和琴はかのおとゞばかりこそかく折につけてこしらへなびかしたるねなど、心にまかせて掻き立て給へるはいとことにものし給へ。をさをさきは離れぬものに侍るめるを、いとかしこく整ひてこそ侍りつれ」とめで聞え給ふ。「いとさことごとしきはにはあらぬをわざとうるはしくも取りなさるゝかな」とてゑたり顔にほゝゑみ給ひけり。「けしうはあらぬ弟子どもなりかし。琵琶はしもこゝに口入るべきことまじらぬを、さいへど物のけはひことなるべし。覺えぬ所にて聞き始めたりしに珍しき物の聲かなとなむ覺えしかど、その折よりは又こよなくまさりにたるをや」とせめてわれがしこに喞ちなし給へば女房などは少しつきしろふ。「萬の事道々につけ

て習ひまねばゞ、ざえといふもの孰れもきはなく覺えつゝ、我が心にあくべきかぎりなく習ひとらむとはいと難けれど、何かはそのたどり深き人の今の世にをさをさなければかたはしをなだらかにまねびえたらむ人、さるかたかどに心をやりてもありぬべきを、きんなむ猶煩はしく手ふれにくきものにはありける。この事は誠にあとのまゝに尋ねとりたる昔の人はあめつちをなびかしおにがみの心をやはらげ萬の物のねのうちに從ひて悲しび深きものもよろこびにかはり賤しく貧しきものも高き世にあらたまりたからにあづかり世にゆるさるゝたぐひ多かりけり。この國にひき傳ふる始つかたまで深くこの事を心得たる人は多くの年を知らぬ國にすぐし身をなきになしてこのことをまねび取らむと惑ひてだにしうるは難くなむありけるを、げにはたあきらかに空の月星をうごかし時ならぬ霜雪を降らせくもいかづちをさわがしたるためし、あがりたる世にはありけり。かく限りなきものにてそのまゝに習ひとる人のありがたく世の末なればにや、いづこのかたはしにかはあらむ。されど猶おにがみの耳とゞめかたぶきそめにけるものなればにやなまなまにまねびて思ひかなはぬたぐひありける。のちこれをひく人によからずとかいふなんをつけてうるさきまゝに今はをさをさ傳ふる人なしとか。いと口惜しきことにこそあれ。きんのねをはなれては、何事をか物をとゝのへしるしるべとはせむ。げに萬の事衰ふるさまは易くなりゆく世の中に一人出て離れて心を立てゝもろこしこまとこの世に惑ひありき親子を離れむことは世の中にひがめるものになりぬべし。などかなのめにて猶この道をかよはししるばかりのはしをば知

りおかざらむ。ぁらべひとつに手をひきつくさむことだにはかりもなきものなゝり。いはむや多くのぁらべ煩はしきこく多かるを、心にいりしさかりには世にありとあり、こゝに傳はりたる譜といふものゝかぎりを遍く見合せて、後々は師とすべき人もなくてなむ好み習ひしかど、猶あがりての人には當るべくもあらじをや。ましてこの後といひては傳はるべき末もなき、いと哀となむ」などのたまへば大將げにいと口惜しく恥しと覺す。「この御子達の御中に思ふやうにおひ出で給ひ物し給はゞその世になむそもさまでながらへとまるやうあらばいくばくならぬ手のかぎりもとゞめ奉るべき。二宮今より氣色ありて見え給ふを」などのたまへば明石の君はいとおもだゝしく涙ぐみて聞き居給へり。女御の君は、さうの御琴をば上にゆづり聞えて寄りふし給ひぬればあづまをおとゞの御前に參りて少しけぢかき御あそびになりぬ。かづらきあそび給ふ華やかにおもしろし。おとゞをりかへし謠ひ給ふ御聲譬へむかたなくあいぎやうづきめでたし。月やうやうさしあがるまゝに、花のいろかもてはやされてげにいと心にくき程なり。箏の琴は女御の御つまおとはいとらうたげになつかしく母君の御けはひ加はりてゆのねふかくいみじくすみて聞えつるを、この御手づかひは又さま變りてゆるらかにおもしろく聞く人たゞならず。すゞろはしきまであいぎやうづきりんのてなどすべてさらにいとかどある御琴のねなり。かへり聲に皆調べかはりてりちの搔き合せども懷しく今めきたるにきんは五箇のぁらべあまたの手の中に心とゞめて必ずひき給ふべき五六のはちをいとおもしろくすまして彈き給ふ。更にかたほならずいとよくすみて聞

ゆ。春秋よろづの物にかよへるしらべにて通はしわたしつゝ彈き給ふ心しらひ敎へ聞え給ふさまたがへずいとよく辨へ給へるを、いとうつくしくおもだゝしく思ひ聞え給ふ。この君達のいと美くしく吹き立てゝせちに心入れたるをらうたがり給ひて、「ねぶたくなりにたらむに、こよひのあそびは長くはあらではつかなる程にと思ひつるを、とゞめ難き物のねどものいづれともなきを聞きわく程の耳とからぬたどたどしさにいたくふけにけり。心なきわざなりや」とてさうの笛吹く君にかはらけさし給ひて御ぞ脱ぎてかづけ給ふ。横笛の君には、こなたより織物の細長に、袴などことごとしからぬさまに氣色ばかりにて、大將の君には宮の御方よりさかづきさし出でゝ、宮の御さうぞくひとくだりかづけ奉り給ふを、おとゞ「あやしや、物の師をこそまづは物めかし給はめ。うれはしきことなり」との給ふに、宮のおはします御几帳のそばより御笛を奉る。うち笑ひ給ひてとり給ふ。いみじきこまぶえなり。少し吹きならし給へば皆立ち出で給ふほどに、大將立ちとまり給ひて、御子の持ち給へる笛を取りていみじくおもしろく吹き立て給へるがいとめでたく聞ゆれば、いづれもいづれも皆御手をはなれぬものゝつたへつたへ、いとになくのみあるにてぞ、我が御ざえのほどありがたくおぼし知られける。大將殿は、君達を御車に乘せて月の澄めるにまかで給ふ。道すがら箏の琴のかはりていみじかりつる音も耳につきて戀しく覺え給ふ。我が北の方は、故大宮の敎へ聞え給ひしかど、心にもしめ給はざりしほどにわかれ奉り給ひにしかばゆるらかにも引き取り給はで男君の御前にては耻ぢて更にひき給はず。何事も唯おいらかに打ちおほどきた

るさまして子どもあつかひをいとまなくつぎつぎ志給へば、をかしき所もなく覺ゆ。さすがに腹惡しくて物ねたみ打ち志たる、あいぎやうづきて美しき人ざまにぞ物し給ふめる。院は對へわたり給ひぬ。うへはとまり給ひて、宮に御物語など聞え給ひて曉にぞ渡り給へる。日高うなるまで大殿ごもれり。「宮の御琴の音はいとうるせくなりにけりな。いかゞ聞き給ひし」と聞えたまへば、「初めつかたあなたにてほの聞きしはいかにぞやありしを、いとこよなくなりにけり。いかでかはかくことごとなく教へ聞え給はむには」といらへ聞え給ふ。「さかし、てをとるとる覺束なからぬ物の師なりかし。此彼にもうるさく煩はしくていとまいるわざなれば教へ奉らぬを、院にも内にもきんはさりとも習はし聞ゆらむとのたまふと聞くがいとほしく、さりともさばかりの事をだにかく取りわきて御うしろみにとあづけ給へるし志るしにはと、思ひ起してなむ」など聞え給ふついでにも「昔世づかぬ程をあつかひ思ひしさま、その世にはいとまもありがたくて、心長閑に取りわき教へ聞ゆることなどもなく、近き世にも何となく次々まぎれつゝすぐして、聞きあつかはぬ御琴のねの、いでばえ志たりしも面ぼくありて、大將のいたく傾ぶき驚きたりし氣色も思ふやうに、嬉しくこそありしか」など聞え給ふ。かやうのすぢも今は又おとなおとなしく宮達の御あつかひなど取り持ちて志給ふさまもいたらぬことなく、すべて何事につけてももどかしくたどたどしきとまじらず、ありがたき人の御有様なればいとかく具しぬる人は世に久しからぬためしもあなるをと、ゆゝしきまで思ひ聞え給ふ。「さまざまなる人の有様を見集め給ふまゝに、取り集めたら

ひたることは、誠にたぐひあらじとのみ思ひ聞え給へり。今年は三十七にぞなりたまふ。見奉り給ひし年月のことなども哀におぼし出でたるついでに「さるべき御いのりなど常より取り分きて今年は愼み給へ。物騒しくのみありて、思ひ至らぬこともあらむを、猶おぼしめぐらしておほきなる事どもし給はゞおのづからせさせてむ。故僧都の物し給はずなりにたるこそいと口惜しけれ。大方にて打ちたのまむにも、いとかしこかりし人を」などの給ひ出づ。「自らはをさなくより、人に異なるさまにてことごとしくおひ出でゝ、今の世のおぼえありさま、來し方にたぐひなくなむありける。されど又世にすぐれて悲しきめを見る方も人にはまさりけりかし。まづは思ふ人にさまざま後れ殘りとまれる齡の末にも、飽かず悲しと思ふこと多くあぢきなくさるまじきことにつけてもあやしく物おもはしく、心にあかず覺ゆることそひたる身にてすぎぬれば、それにかへてや思ひしほどよりは今までもながらふるならむとなむ思ひ知らるゝ。君の御身には、かのひとふしのわかれよりあなたこなた物思ひとて、心亂り給ふばかりのことあらじとなむ思ふ。后といひ、ましてそれより次々はやんごとなき人といへど、皆必ず安からぬ物思ひそふわざなり。高きまじらひにつけても心みだれ人に爭ふ思ひの絶えぬもやすげなきを、親のまどのうちながらすぐし給へるやうなる心やすきことはなし。そのかたは人に勝れたりけるすくせとはおぼししるや。思の外にこの宮のかく渡り物し給へるこそはなまぐるしかるべけれど、それにつけてはいとゞ加ふる志のほどを、御みづからの上なればおぼし知らずやあらむ。物の心も深く知り給ふめれば、さり

ともとなむ思ふ」と聞え給へば、「の給ふやうに物はかなき身には過ぎにたるよその覺えはあらめど、心に絶えぬ物なげかしさのみうち添ふや、さはみづからのいのりなりける」とて殘り多げなるけはひはづかしげなり。「まめやかにはいとゆくさきすくなき心地するを、今年もかくしらず顔にてすぐすはいとうしろめたくこそ、さきざきも聞ゆることいかで御ゆるしあらば」と聞え給ふ。「それはしもあるまじきことになむ。さてかけ離れ給ひなむ世に殘りては何のかひかあらむ。唯かく何となくて過ぐる年月なれど、明暮のへだてなき嬉しさのみこそますことなく覺ゆれ。猶思ふさま殊なる心の程を見はて給へ」とのみ聞え給ふを例のことゝ心やましくて涙ぐみ給へる氣色をいと哀と見奉り給ひて、萬に聞えまぎらはし給ふ。「多くはあらねど、人の有樣のとりどりに口惜しくはあらぬを、見知りゆくまゝに誠の心ばせのおいらかにおちゐたるこそ、いと難きわざなりけれとなむ思ひはてにたる。大將の母君を幼かりし程に見そめて、やんごとなくさらぬすぢには思ひしを、常になかよからず隔ある心地して止みにしこそ、今思へばいとほしくくやしくもあれ。又我があやまちにのみもあらざりけりなど心ひとつになむ思ひ出づる。うるはしくおもりかにてそのことの飽かぬかなと覺ゆることもなかりき。唯いとあまり亂れたる所なく、すくすくしく少しさかしとやいふべかりけむと思ふにはたのもしく見るには煩はしかりし人ざまになむ。中宮の御母御息所なむさまことに心深くなまめかしきためしにはまづ思ひ出でらるれど、人見えにくゝ苦しかりしさまになむありし。怨むべきふしぞげにことわりと覺ゆるふしを、やがて長く思

ひつめて深くゑんぜられしこそいと苦しかりしか。心ゆるびなくはづかしくてわれも人もうちたゆみ朝夕のむつびをかはさむには、いとつゝましき所のありしかば、打ちとけては見おとさるゝことやなどあまりつくろひし程にやがて隔たりし中ぞかし。いとあるまじき名をたちて身のあはあはしくなりぬるなげきを、いみじく思ひしめ給へしがいとほしく、實に人がらを思ひしも我が罪ある心地して止みにしなぐさめに中宮をかくさるべき御契とはいひながら、取りたてゝ世のそしり人のうらみをも知らず心よせ奉るを、あの世ながらも見なほされぬらむ。今もむかしもなほざりなる心のすさびにいとほしくくやしきことも多くなむ」とさし方の人の御うへ少しづゝのたまひ出でゝ「内の御方の御うしろみは、何ばかりの程ならずとあなづりそめて心安きものに思ひしを、猶心の底見えずきはなく深き所ある人になむ。うはべは人になびきおいらかに見えながら、打ち解けぬ氣色したにこもりてそこはかとなく恥しき所こそあれ」との給へば「こと人は見ねば知らぬを、これはまほならねどおのづから氣色見る折々もあるに、いと打ち解けにくゝ心はづかしき有樣しるきを、いとたとしへなきうらなさを、いかに見給ふらむとつゝましけれど、女御はおのづからおぼし許すらむとのみ思ひてなむ」との給ふ。さばかりめざましと心おき給へりし人を今はかくゆるして見えかはしなどし給ふも、女御の御ための御まごゝろなるあまりぞかしとおぼすに、いとありがたければ「君こそはさすがにくまなきにはあらぬものから、人により事に從ひいとよく二すぢに心づかひはし給ひけれ。更にこゝら見れど御有樣に似たる人はなかりけり。い

と氣色こそ物し給へ」とほゝゑみて聞え給ふ。宮にいとよくひき取り給へりしことの悦び聞えむとて夕つかたわたり給ひぬ。我に心おく人やあらむともおぼしたらず、いといたく若びてひとへに御ことに心入れておはす。「今はいとまゆるして打ち休ませ給へかし。物の師は心ゆかせてこそ。いと苦しかりつる日比のしるしありて、うしろ安くなり給ひにけり」とて御ことゞもおしやりて、大殿ごもりぬ。對には例のおはしまさぬ夜はよひゐし給ひて、人々に物語など讀ませて聞き給ふ。かく世のたとひにいひ集めたる昔語どもにも、あだなる男、色ごのみ、二心ある人にかゝづらひたる女、かやうなる事をいひ集めたるにも遂によるかたありてこそあめれ、怪しくうきてもすぐしつる有樣かな、げにのたまひつるやうに、人よりことなるすくせもありける身ながら、人の忍び難く飽かぬことにする物思ひはなれぬ身にてや止みなむとすらむ、味氣なくもあるかなゝど思ひつゞけて、夜更けて大殿籠りぬる曉方より御胸を惱み給ふ。人々見奉りあつかひて「御せうそこ聞えさせむ」と聞ゆるを、「いとびんないこと」とせいし給ひて堪へ難きをおさへて明し給ひつ。御身もぬるみて御心地もいと惡しけれど、院もとみにわたり給はぬ程かくなむとも聞えず。女御の御方より御せうそこあるに、「かくなやましくてなむ」と聞え給へるに驚きてそなたより聞え給へるに胸つぶれて急ぎわたり給へるにいと苦しげにておはす。「いかなる御心地ぞ」とて探り奉り給へば、いとあつくおはすれば昨日聞え給ひし御つゝしみのすぢなどおぼし合せ給ひていとおそろしくおぼさる。御かゆなどこなたに參らせたれど御覽じも入れず。日一日添ひおはして萬に見奉り

嘆き給ふ。はかなき御くだものをだにいと物うくし給ひて、起きあがり給ふこと絶えて日比へぬ。いかならむとおぼし騷ぎて、御いのりども數知らず始めさせ給ふ。僧めして御かぢなどせさせ給ふ。そこところともなくいみじく苦しくしたまひて、胸は時々おこりつゝ煩ひ給ふさま堪へ難く苦しげなり。さまざまの御つゝしみ限なけれど、しるしも見えず。重しと見れどおのづからをこたるけぢめあらばたのもしきを、いみじく心ぼそく悲しと見奉り給ふに、ことごとおぼされねば御賀の響もしづまりぬ。かの院よりもかく煩ひ給ふよし聞し召して、御とぶらひいとねんごろにたびたび聞え給ふ。同じさまにて二月も過ぎぬ。いふかぎりなくおぼし歎きて試に所をかへ給はむとて二條院に渡し奉り給ひつ。院の内ゆすり滿ちて思ひ歎く人々多かり。冷泉院もきこし召しなげく。この人うせ給はゞ院も必ず世を背く御ほい遂げ給ひてむと、大將の君なども心盡して見奉りあつかひ給ふ。御ずほふなどは、大方のをばさるものにて、取り分きて仕うまつらせ給ふ。聊物おぼしわくひまには、「聞ゆる事をさも心うく」とのみ怨み聞え給へど「限ありて別れはて給はむよりも目の前に我が心と變しすて給はむ御有樣を見ては、更に片時たふまじくのみ惜しく悲しかるべければ、昔よりみづからぞかゝるほい深きを、とまりてさうざうしくおぼされむ心苦しさにひかれつゝすぐすを、さかさまに打ち捨て給はむとやおぼす」とのみ惜み聞え給ふに、げにいとたのみがたげによわりつゝ限のさまに見え給ふ折々多かるを、いかさまにせむとおぼし惑ひつゝ宮の御方にもあからさまにわたり給はず。御琴どもゝ凄まじくて皆ひき込められ、院のうちの人々は皆

あるかぎり二條院につどひ參りて、この院には火をけちたるやうにて唯女どちおはして人ひとりの御けはひなりけりと見ゆ。女御の君もわたり給ひて諸共に見奉りあつかひ給ふ。「たゞにもおはしまさで物のけなどいと恐しきを早く參り給ひね」と苦しき御心地にも聞え給ふ。若宮のいと美しうておはしますを見奉り給ひてもいみじくなき給ひて「おとなび給はむを、え見奉らずなりなむ事忘れ給ひなむかし」とのたまへば、女御せきあへず悲しとおぼしたり。「ゆゝしくかくなおぼしそ。さりともけしうは物し給はじ。心によりなむ人はともかくもある。おきてひろきうつはものにはさいはひも其に隨ひ、せばき心ある人はさるべきにて、高き身となりてもゆたかにゆるべる方はおくれ、急なる人は久しく常ならず、心ぬるくなだらかなる人は長きためしなむ多かりける」など佛神にもこの御心ばせのありがたく、罪かろきさまを申しあきらめさせ給ふ。みずほふのあざりたち夜居などにても近く侍ふかぎりのやんごとなき僧などはいとかくおぼし惑へる御けはひを聞くに、いといみじく心苦しければ心を起して祈り聞ゆ。少しよろしきさまに見え給ふとき、五六日うちまぜつゝ、又おもり煩ひ給ふこと、いつとなくて月日を經給へば猶いかにおはすべきにか、よかるまじき御心地にやとおぼしなげく。御ものゝけなどいひて出で來るもなし。惱み給ふさまそこはかと見えず。唯日に添へてよわり給ふさまにのみ見ゆれば、いとも悲しくいみじくおぼすに御心のいとまもなげなり。まことに衞門督は中納言になりにきかし。今の御世にはいと親しくおぼされていと時の人なり。身のおぼえまさるにつけても思ふ事のかなはぬうれは

しさを思ひ侘びて、この宮の御姉の二宮をなむえ奉りてける。下﨟の更衣腹におはしましければ心やすき方まじりて思ひ聞え給へり。人がらもなべての人に思ひなずらふればけはひこよなくおはすれど、もとよりしみにし方こそ猶深かりけれ。慰め難きをばすてにて人目に咎めらるまじきばかりにもてなし聞え給へり。猶かのしたの心忘られず小侍従といふかたらひ人は、宮の御侍従のめのとのむすめなりけり。そのめのとの姉ぞこのかんの君の御めのとなりければ早くより氣近く聞き奉りて、まだ宮幼くおはしまし丶時よりいと淸らになむおはします。みかどのかしづき奉り給ふさまなど聞きおき奉りてか丶る思ひもつきそめたるなりけり。かくて院も離れおはします程人め少くしめやかならむを推し量りて小侍従を迎へ取りつ丶いみじうかたらふ。「昔よりかく命もたふまじく思ふことをか丶る親しきよすがありて、御有樣を聞き傳へ堪へぬ心の程をも聞し召させてたのもしきに、更にそのしるしのなければいみじくなむつらき。院の上だにかくあまたにかけかけしくて、人におされ給ふやうにて一人大殿籠るよなよな多く、つれづれにてすぐし給ふなりなど人の奏しけるついでにも、少し悔いおぼしたる御氣色にて、同じくはたゞ人の心安きうしろみを定めむにはまめやかに仕うまつるべき人をこそ、定むべかりけれとのたまはせて、女二の宮のなかなかうしろやすく行く末ながきさまにて物し給ふなることとのたまはせけるを傳へ聞きしにいとほしうも口惜しうもいかゞ思ひ亂る丶。げに同じ御すぢとは尋ね聞えしかど、それはそれとこそ覺ゆるわざなりけれ」と、打ちうめき給へば小侍従は「いであなおほけな。それをそれ

とさし置き奉り給ひて、又いかやうに限なき御心ならむ」といへばうちほゝゑみて「さこそは物はありけれ。宮にかたじけなく聞えさせ及びけるさまは院にも内にも聞し召しけり。などてかはさてもさぶらはざらましとなむことの序にはのたまはせける。いでやたゞ今すこしの御いたはりあらましかば」などいへば「いと難き御となりや。御すくせとかいふ事侍るなるをもとにて、かの院のことに出でゝねんごろに聞え給ふに立ち並び妨げ聞えさせ給ふべき御身のおぼえとやおぼされし。この頃こそ少しものものしく御ぞの色も深くなり給へれ」といへばいふかひなくはやりかなる口ではさに、えいひはて給はで「今はよし、過ぎにし方をば聞えじや。唯かくありがたきものゝひまに氣近きほどにて、この心の中に思ふことのはし少し聞えさせ給ふべくたばかり給へ。いとおほけなき心はすべてよし見給へ。いと恐しければ思ひ離れて侍り」との給へば「これよりおほけなき心はいかゞはあらむ。いとむくつけき事をもおぼしよりけるかな。何しに參りつらむ」とはちぶく。「いであな聞きにく、あまりこちたく物をこそいひなし給ふべけれ。世はいと定なきものを女御后もあるやうありて物し給ふたぐひなくやは。ましてその御有樣よ、思へばいとたぐひなくめでたけれどうちうちは心やましきことも多かるらむ。院のあまたの御中に又ならびなきやうにならはし聞え給ひしに、さしもひとしからぬきはの御方々にたちまじり、めざましげなることもありぬべくこそ。いと善く聞き侍りや。世の中はいと常なきものをひとときはに思ひ定めてはしたなくつきゞりなることとなのたまひそよ」とのたまへば「人におとされ給へる御有樣とてめ

でたき方に改め給ふべきにやは侍らむ。これは世の常の御有樣にも侍らざめり。唯御うしろみなくて、たゞよはしくおはしまさむよりは、おやざまにと讓り聞え給ひしかばかたみにさこそ思ひかはし聞えさせ給ひためれ。あいなき御おとしめごとになむ」とはてはてははらだつを萬にいひこしらへて「誠はさばかり世になき御有樣を見奉りなれ給へる御心に、數にもあらず怪しきなれすがたを、打ち解けて御覽ぜられむとは更に思ひかけぬことなり。唯ひとことものごしにて聞え知らすばかりは、何ばかりの御身のやつれにかはあらむ。神佛にも思ふ事申すは罪あるわざかは」といみじきちかごとをたつゝの給へば、暫しこそいとあるまじきことにいひかへしけれ、物深からぬ若人は人のかく身にかへていみじく思ひの給ふを、えいなびはてゞ「もしさりぬべき隙あらばたばかり侍らむ。院の坐しまさぬ夜は御帳のまはりに人多く侍らひて、おましのほとりにさるべき人必ずさぶらひ給へば、いかなる折をかはひまを見つけ侍るべからむ」と侘びつゝ參りぬ。いかにいかにと日々に責められこうじてさるべき折伺ひつけて、せうそこおこせたり。悅びながらいみじくやつれ忍びておはしぬ。誠に我が心にもいとけしからぬことなれば、氣近くなかなか思ひ亂るゝこともまさるべきまでは思ひもよらず。唯いとほのかに御ぞのつまばかりを見奉りし春の夕の飽かず世と共に思ひ出でられ給ふ御有樣を 少し氣近くて見奉り、思ふ事をも聞え知らせてはひとくだりの御返しなどもや見せ給ひ、哀とやおぼし知るとぞ思ひける。四月十餘日ばかりのことなり、みそぎあすとて齋院に奉り給ふ女房十二人、ことに上臈にはあらぬわかびとわらはべな

ど、おのがじゝ物縫ひけさうなど志つゝ、物見むと思ひ設くるもとりどりに暇なげにて、御前のかた志めやかに人志げからぬ折なりけり。近く侍ふあぜちの君も時々かよふ、源中將せめて呼びいださせければ、おりたるまに、唯この侍從ばかり近くはさぶらふなりけり。善きをりと思ひて、やをら御帳のひんがしおもての、おましの端にすゑつ。さまでもあるべきことなりやは。宮は何心もなく大殿でもりにけるを、近く男のけはひのすれば院のおはするとおぼしたるに、打ちかしこまりたる氣色見せてゆかの志もに抱きおろし奉るに、物におそはるゝかと、せめて見上げ給へればあらぬ人なりけり。怪しくも知らぬ事どもをぞ聞ゆるやあさましくむくつけくなりて人召せど近くもさぶらはねば聞きつけて參るもなし。わなゝき給ふさま、水のやうに汗もながれて物も覺え給はぬ氣色いと哀にらうたげなり。「數ならねどいとかうしもおぼし召さるべき身とは思う たまへられずなむ。昔よりおほけなき心の侍りしをひたぶるに籠めて止み侍りなましかば、心の中にくたしてすぎぬべかりけるを、なかなか漏し聞えさせて、院にも聞し召されにしをこよなくもて離れても、のたまはせざりけるにたのみをかけそめ侍りて、身の數ならぬひときはに、人より深き志を空しくなし侍りぬることゝ動し侍りにし心なむ、よろづ今はかひなき事と思う給へ返せど、いかばかり志み侍りにけるにか、年月にそへて口惜しくもつらくもむくつけくも哀にもいろいろに深く思う給へまさるに、せきかねてかくおほけなきさまを御覽ぜられぬるもかつはいと思ひやりなくはづかしければ、罪重き心も更に侍るまじ」といひもてゆくに、この人なりけりとおぼすに、

いとめざましく恐しくてつゆいらへもし給はず。いとことわりなれど「世にためしなき事にも侍らぬを珍らかになさけなき御心ばへならば、いと心うくてなかなかひたぶるなる心もこそつき侍れ。哀とだにの給はせばそれを承りて罷でなむ」とよろづに聞え給ふ。よその思ひやりはいつくしく物なれて見え奉らむもはづかしく推し量られ給ふに、唯かばかり思ひつめたるかたはし聞え知らせて、なかなかかけかけしき事はなくて止みなむと思ひしかど、いとさばかり氣高う恥しげにはあらでなつかしくらうたげにやはやはとのみ見え給ふ。御けはひのあてにいみじく覺ゆることぞ人に似させ給はざりける。さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちもゐてかくし奉りて我が身も世にふるさまならず跡絶えて止みなばやとまで思ひみだれぬ。唯いさゝかまどろむとしもなき夢に、この手ならしゝ猫のいとらうたげに打ちなきて來たるを、この宮に奉らむとて我がゐて來たると覺えしを、何しに奉りつらむと思ふ程におどろきていかに見えつるならむと思ふ。宮はいとあさましくうつつとも覺え給はぬに胸ふたがりておぼしおぼるゝを、「猶かく遁れぬ御すくせの淺からざりけるとおぼしなせ。みづからの心ながらもうつしごゝろにはあらずなむ覺え侍る」。かの覺えなかりしみすのつまを猫のつなびきたりし夕のことも聞え出でたり。實にさはたありけむよと口惜しくちぎり心うき御身なりけり。院にも今はいかでかは見え奉らむと、悲しく心細くていとをさなげに泣き給ふをいとかたじけなく哀と見奉りて人の御涙をさへのごふ袖はいとゞ露けさのみまさる。明けゆく氣色なるに出でむかたなくなかなかなり。「いかゞ

はし侍るべき。いみじくにくませ給へば又聞えさせむ事もありがたきを、唯ひとこと御聲を聞かせ給へ」と、萬に聞えなやますもうるさくわびしくて物の更にいはれ給はねば「はてはてはむくつけくこそなり侍りぬれ。又かゝるやうはあらじ」といとうしと思ひ聞えて「さらばふようなめり。身をいたづらにやはなしはてぬ。いと捨て難きによりてこそかくまでも侍れ。こよひにかぎり侍りなむもいみじくなむ。つゆにても御心ゆるし給ふさまならば、それにかへつるにても捨て侍りなまし」とて掻き抱き出づるに、はてはいかにしつるぞとあきれておぼさる。すみの間の屛風をひき廣げて戸を押しあけたれば渡殿の南のとのよべいりしがまだあきながらあるに、まだあけぐれの程なるべし。ほのかに見奉らむの心あればかうしをやをら引きあげて「かういとつらき御心にうつしごゝろも失せ侍りぬ。少し思ひのどめよとおぼされば哀とだにの給はせよ」とおどし聞ゆるをいと珍らかなりとおぼして、物もいはむとし給へどわなゝかれて、いとわかわかしき御さまなり。たゞあけに明け行くに、「いと心あわたゞしくて、哀なる夢がたりも聞えさすべきをかくにくませ給へばこそ。さりとも今おぼしあはする事も侍りなむ」とてのどかならず立ち出づる明けくれ、秋の空よりも心づくしなり。

「おきて行く空も知られぬあけくれにいづくの露のかゝる袖なり」。ひき出でゝうれへ聞ゆれば、出でなむとするに少し慰め給ひて、

「あけくれの空にうき身は消えなゝむ夢なりけりと見てもやむべく」とはかなげにの給

ふ。御睞の若くをかしげなるを聞きさすやうにて出でぬる、たましひはまことに身を離れてとまりぬる心ちす。女宮の御許にもまうで給はで大殿へぞ忍びておはしぬる。打ちふしたれどめもあはず。見つる夢のさだかにあはむことも難きをさへ思ふに、かの猫のありしさまいと戀しと思ひ出でらる。さてもいみじきあやまちしつる身かな、世にあらむことこそまばゆくなりぬれと、恐しくそらはづかしき心地してありきなどもし給はず。女の御ためは更にもいはず、我が心地にもいとあるまじき事といふ中にもむくつけく覺ゆれば、思ひのまゝにもえまぎれありかず。みかどの御めをも取り過ちてことの聞えあらむに、かばかり覺えむことゆゑは身のいたづらにならむことも苦しくおぼゆまじ、しかいちじるき罪にはあたらずとも、この院にめをそばめられ奉らむことはいと恐しくはづかしくおぼゆ。かぎりなき女と聞ゆれど、少し世づきたる心ばへまじり、上はゆゑありこめかしきにも從はぬしたの心添ひたるこそ、とあることかゝることにうちなびき心かはし給ふたぐひもありけれ。これは深き心もおはせねどひたおもむきに物おぢし給へる御心にたゞ今しも人の見聞きつけたらむやうに、まばゆくはづかしくおぼさるれば、あかき所にだにえゐざり出で給はず、いと口惜しき身なりけりと、みづから思し知るべし。「惱しげになむ」とありければおとゞ聞き給ひていみじく御心を盡し給ふ御事にうち添へて、又いかにと驚かせ給ひてわたり給へり。そこはかと苦しげなることも見え給はず、いといたくはぢらひしめりてさやかにも見合せ奉り給はぬを、久しくなりぬるたえまをうらめしくおぼすにやといとほしくて、かの御心地のさまなど

聞え給ひて「今はのとぢめにもこそあれ、今さらにおろかなるさまを見ゑおかれじとてなむいはけなかりし程よりあつかひそめて見放ちがたければかう月比よろづを知らぬさまにすぐし侍るぞ、おのづからこの程すぎば見なほし給ひてむ」など聞え給ふ。かく氣色も知り給はぬもいとほしく心苦しくおぼされて、宮は人知れず涙ぐましくおぼさる。かんの君はましてなかなかなる心地のみ増りて起き臥し明し暮し侘び給ふ。祭の日などは物見に爭ひ行く君達かきつれていひそゝのかせど、なやましげにもてなしてながめ臥し給へり。女宮をばかしこまりおきたるさまにもてなし聞えて、をさをさ打ち解けても見え奉り給はず。我方に離れ居ていとつれづれに心ぼそくながめ給へるに、わらはべのもたるあふひを見給ひて、

「くやしくぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに」と思ふもいとなかなかなり。世の中靜ならぬ車の音などをよその事に聞きて人やりならぬつれづれに暮し難くおぼゆる、女宮もかゝる氣色のすさまじさも見知られ給へば、何事とは知り給はねど恥しくめざましきに物思はしくぞおぼされける。女房など物見に皆出でゝ人ずくなにのどやかなれば打ちながめて、箏の琴なつかしくひきまさぐりておはするけはひも、さすがにあてになまめかしけれど、同じくば今ひときは及ばざりけるすくせよとなほおぼゆ。

「もろかづら落葉を何にひろひけむなはむつまじきかざしなれども」と書きすさび居たるいとなめげるしりうごとなりかし。おとゞの君はまれまれ渡り給ひてえふとも立ちかへり給はずしづ心なくおぼさるゝに、絶え入り給ひぬとて人參りたれば更に何事もおぼしわ

かれず御心もくれて渡り給ふ。道の程の心もとなきに、げにかの院はほとりのおほぢまで人たち騒ぎたり。殿の内泣きのゝしるけはひいとまがまがし。我にもあらで入り給へれば「日比はいさゝかひま見え給へるを、俄になむかくおはします」とて侍ふかぎりは我も後れ奉らじと惑ふさまどもかぎりなし。みずほふどもの壇こぼち僧などもさるべきかぎりこそまかでね、ほろほろと騒ぐを見給ふに、更に限にこそはとおぼしはつるあさましさに何事かはたぐひあらむ。「さりとももののけのするにこそあらめ。いとひたぶるにな騒ぎそ」と静め給ひて、いよいよいみじきぐわんどもを立てそへさせ給ふ。勝れたるけんざどものかぎり召し集めて、「限ある御命にてこの世つき給ひぬとも只今暫しのどめ給ひ不動尊の御もとのちかひあり、その日數をだにかけ留め奉り給へ」と、かしらよりまことに黑烟を立てゝいみじき心を起して加持し奉る。院も、只今一度目を見合せ給へ、いとあへなく限なりつらむ程をだに、え見ずなりにけることの悔しく悲しきをと、おぼし惑へるさま、とまり給ふべきにもあらぬを見奉る心ちども唯推しはかるべし。いみじき御心のうちを佛も見奉り給ふにや、月比更に現れ出でこぬ物のけちひさき童にうつりてよばひのゝしる程に、やうやう生きいで給ふにも嬉しくもゆゝしくもおぼし騒がる。いみじくてうぜられて「人は皆さりね。院一ところの御耳に聞えむ。おのれを月比てうじ侘びさせ給ふがなさけなくつらければ、同じくはおぼし知らせむと思ひつれど、さすがに命もたふまじく身を碎きておぼし惑ふを見奉れば、今こそかくいみじき身をうけたれ、いにしへの心の殘りてこそかくまでも參り來たるなれば、物

りかけて泣くけはひ、唯昔見給ひしもの丶けのさまと見えたり。あさましくむくつけしとおぼしゐみにしことの變らぬもゆ丶しければ、この童の手をとらへて引きすゑて さま惡しくもせさせ給はず、「誠にその人か。善からぬ狐などいふなるもの丶たはぶれたるか。なき人のおもてぶせなることいひ出づるもあなるを、たしかなるなのりせよ。又人の知らざらむことの心にゐるく思ひ出でられぬべからむをいへ。さてなむいさ丶かにても信ずべき」とのたまへば、ほろほろといたくなきて、

「我が身こそあらぬさまなれそれながらそらおぼれする君は君なり。いとつらしつらし」と泣きさけぶものから、さすがに物はぢしたるけはひ變らず、なかなかいと疎ましく心うければ、物いはせじとおぼす。「中宮の御事にてもいと嬉しくかたじけなしとなむ天かけりても見奉れど、道ことになりぬればこの上までも深く覺えぬにやあらむ。猶みづからつらしと思ひ聞えし心の ゐふなむとまるものなりける。その中にも生きての世に人よりおとしておぼし捨てしよりも、思ふどちの御物語のついでに心よからずにくかりし有樣をのたまひいでたりしなむいとうらめしく、今はたゞなきにおぼし許して、こと人のいひおとしめむをだに省き隱し給へとこそ思へど、うち思ひしばかりにかくいみじき身のけはひなればかく所せきなり。この人を深く憎しと思ひ聞ゆることはなけれど、まもりつよくいと御あたり遠き心地してえ近づきまゐらず、御聲をだにほのかに聞き侍る。よし今はこの罪かろむばかりの

わざをせさせ給へ。ずほふどきやうとのゝしるとも身には苦しくわびしきほのほとのみまつはれて更に尊きことも聞えねばいと悲しくなむ。中宮にもこのよしを傳へ聞え給へ。ゆめ御宮仕のほどに人ときしろひそねむ心つかひ給ふな。齋宮におはしまし〻比ほひの御罪かろむべからむくどくのことを必ずせさせ給へ。いとくやしきことになむありける」などいひつゞくれど、ものゝけに向ひて物語し給はむもかたはらいたければ、ふうじこめて上をば又こと方に忍びて渡し奉り給ふ。かくうせ給ひにけりといふ事世の中に滿ちて、御とぶらひに聞え給ふ人々あるをいとゆゝしくおぼす。今日のかへさ見に出で給ひける上達部など歸り給ふ道に、「かく人の申せばいといみじき事にもあるかな。生けるかひありつるさいはひびとの光失ふ日にて雨はそぼふるなりけり」とうちつけごと志給ふ人もあり。又「かくたらひぬる人は必ずえ長からぬことなり。何を櫻にといふふるごともあるはかゝる人のいとゞ世にながらへて世のたのしみを盡さば傍の人苦しからむ。今こそ二品宮はもとの御おぼえあらはれ給はめ。いとほしげにおされたりつる御覺えを」などうちさゝめきけり。衛門督昨日いと暮し難かりしを思ひて、今日は御弟ども左大辨頭宰相など奥の方に乘せて見給ひけり。かくいひあへるを聞くにも胸打ちつぶれて「何かうき世に久しかるべき」と打ちずじ獨りごちて、かの院へ皆參り給ふ。たしかならぬ事なればゆゝしくやとて、唯大方の御とぶらひに參り給へるに、かく人の泣きさわげば誠なりけりと打ち騷ぎ給へり。式部卿の宮も渡り給ひて、いといたく覺しほれたるさまにてぞ入り給ふ。人々の御消そこもえ申し傳へ給はず。大

將の君涙をのごひて立ち出で給へるに「いかにいかに。ゆゝしきさまに人の申しつれば、信じ難きことにてなむ、唯久しき御惱を承り歎きて參りつる」などの給ふ。「いと重くなりて月日經給へるをこの曉より絕えいり給へりつるを、もののけのしわざになむありける。やうやういき出で給ふやうに聞きなし侍りて今なむ皆人心しづめれど、まだいとたのもしげなしや。心苦しきことにこそ」とて誠に痛く泣き給へる氣色なり。目も少し腫れたり。衛門督、わがあやしき心ならひにや、この君のいとさしも親しからぬ繼母の御ことを、いたく心しめ給へるかなと目をとゞむ。かくこれかれ參り給へる由聞し召して「重きびやうざの俄にとぢめつるさまなりつるを、女房などは心もえをさめず亂りがはしく騷ぎ侍りけるに、みづからもえのどめず、心あわたゞしき程にてなむ。殊更になむ斯物し給へるよろこびは聞ゆべき」とのたまへり。かんの君は胸つぶれてかゝるをりのらうろうならずはえ參るまじく、けはひはづかしく思ふも心の中ぞ腹ぎたなかりける。かくいき出で給ひての後しも恐しくおぼして、又々いみじき法どもをつくしてくはへ行はせ給ふ。うつしびとにてだにむくつけかりし人の御けはひの、まして世かはりあやしきものゝさまになり給へらむをおぼしやるに、いと心うければ中宮をあつかひ聞え給ふさへぞこのをりは物うくいひもてゆけば、女の身は皆同じ罪深きもとゐぞかしとなべて世の中いとはしく、かの又人も聞かざりし御中のむつものがたりに少し語り出で給へりしことをいひ出でたりしに、誠とおぼし出づるにいと煩はしくおぼさる。御ぐしおろしてむとせちにおぼしたれば、忌むことの力もやとて御いたゞきし

るしばかりはさみて五かいばかりうけさせ奉り給ふ。御戒の師いむことの勝れたるよし佛に申すにも哀に尊きことまじりて人わろく御傍にそひ居給ひて涙おしのごひ給ひつゝ佛をもろごゝろに念じ聞え給ふさま、世にかしこくおはする人もいとかく御心惑ふことにあたりてはえしづめ給はぬわざなりけり。いかなるわざをしてこれを救ひかけ留め奉らむとのみよるひるおぼし歎くに、ほれぼれしきまで御顔も少しおもやせ給ひにたり。五月などは、ましてはればれしからぬ空の氣色に、えさはやぎ給はねど、ありしよりは少しよろしきさまなり。されど猶絶えず惱みわたり給ふ。ものゝけの罪救ふべきわざ、日ごとに法華經一部づつ供養せさせ給ふ。何くれと尊きわざせさせ給ふ。御まくらがみ近くて不斷のみ讀經聲尊きかぎりして讀ませ給ふ。あらはれそめては折々悲しげなることどもをいへど、更にこのものゝけさりはてず、いとどあつき程は息も絶えつゝいよいよよわり給へばいはむ方なくおぼし歎きたり。なきやうなる御心ちにもかゝる御氣色を心苦しく見奉り給ひて世の中になくなりなむも我が身には更に口惜しきとのこるまじけれど、かくおぼし惑ふめるに、空しく見なされ奉らむがいと思ひぐまなかるべければ、思ひ起して御ゆなどいさゝかまゐるけにや、六月になりてぞ時々御ぐしもたげ給ひける。珍しく見奉り給ふにも猶いとゆゝしくて、六條院にはあからさまにもえ渡り給はず。姫宮は怪しかりしことをおぼし歎きしより、やがて例のさまにもおはせず、惱ましくし給へど、おどろおどろしくはあらず、立ちぬる月より物聞し召さでいたくあをみそこなはれ給ふ。かの人はわりなく思ひあまる時々は、夢のやうに見

奉りけれど、宮はつきせずわりなき事におぼしたり。院をいみじくおぢ聞え給へる御心に、有様も人のほども、ひとしくだにやはある。いたくよしめきなまめきたれば大方の人目にこそなべての人には優りてめでらるれ、幼くよりさるたぐひなき御有様にならひ給へる御心にはめざましくのみ見給ふ程に、かく惱みわたり給ふは哀なる御すくせにぞありける。御めのと逢見奉り咎めて「院のわたらせ給ふこともいとたまさかなるを」とつぶやき怨み奉る、かく惱み給ふと聞し召してぞわたり給ふ。女君はあつくむつかしとて、御ぐしすまして少しさはやかにもてなし給へり。臥しながらうちやり給へりしかばとみにもかはかねど、露ばかり打ちふくみまよふすぢもなくていと淸らにゆらゆらとしてあをみおとろへ給へるしも、色はさをにしろく美しげにすきたるやうに見ゆる御はだつきなど世になくらうたげなり。もぬけたる蟲のからなどのやうにまだいとたゞよはしげにおはす。年比すみ給はで少し荒れたりつる院のうちたとしへなくせばげにさへ見ゆ。昨日今日かくもの覺え給ふひまにて心ことにつくろはれたるやりみづせんざいのうちつけに心よげなるを見出し給ひても哀に今まで經にけるをおもほす。池はいと涼しげにてはちすの花の咲きわたれるに、葉はいと靑やかにて露きらきらと玉のやうに見えわたるを「かれ見給へ。おのれひとりも涼しげなるかな」とのたまふに、起きあがりて見出し給へるもいとめづらしければ「かくて見奉るこそ夢の心ちすれ。いみじく我が身さへかぎりと覺ゆる、をりをりのありしはや」と涙をうけてのたまへば、みづからも哀とおもほして、

「消えとまるほどやはふべきたまさかに蓮の露のかゝるばかりを」との給ふ。

「契りおかむこの世ならでもはちす葉に玉ゐる露のこゝろへだつな」。出で給ふかたざまは物うけれど、内にも院にも聞し召さむ所あり。惱み給ふと聞きても程經ぬるをめに近きに心を惑はしつるほど見奉ることもをさをさなかりつるに、かゝる雲間にさへやは、絕えこもらむとおぼし立ちてわたり給ひぬ。宮は御心のおにゝ見え奉らむもはづかしくつゝましくおぼすに、物など聞えたまふ御いらへも聞え給はねば、日ごろのつもりをさすがにさりげなくてつらしとおぼしけると心苦しければ、とかくこしらへ聞え給ふ。おとなびたる人召して御心ちのさまなど問ひ給ふ。「例のさまならぬ御心ちになむ」と煩ひ給ふ御ありさまを聞ゆ。「あやしくほどへて珍しき御事にも」とばかりのたまひて御心のうちには年比經ぬる人々だにも、さることとなきを、ふぢやうなる御ことにもやとおぼせば、ことにともかくものたまひあへしらひ給はで唯打ち惱み給へるさまのいとらうたげなるをあはれと見奉り給ふ。辛うじておぼし立ちて渡り給ひしかばふともえ歸りたまはで、二三日おはするほど、いかにいかにと後めたくおぼさるれば、御文をのみ書き盡し給ふ。「いつの間につもる御言の葉にかあらむ。いでややすからぬ世をも見るかな」と若君の御あやまちを知らぬ人はいふ。侍從ぞかゝるにつけても胸うちさわぎける。かの人もかく渡り給へりと聞くに、おほけなく心あやまりしていみじき事どもを書き續けておこせ給へり。對にあからさまに渡り給へる程に、人まなりければ忍びて見せ奉る。「むつかしき物見するこそいと心うけれ。心地のいとゞ惡

しきに」とて臥し給へれば、「猶たゞこのはしがきのいとほしげに侍るぞや」とて廣げたれば人の参るにいと苦しくて御几帳ひき寄せて去りぬ。いとゞ胸つぶるゝに院入り給へば、えよくもかくし給はで、御しとねの下にさしはさみ給ひつ。夜さりつかた二條院へわたり給はむとて御暇聞え給ふ。「こゝにはけしうはあらず見え給ふを、まだいとたゞよはしげなりしを見捨てたるやうに思はるゝも今更にいとほしくてなむ」と語らひ給ふ。例はなまいはけなきたはぶれごとなども打ち解け聞え給ふを、いたくしめりてさやかにも見合せ奉り給はぬを、唯世のうらめしき御氣色と心え給ふ。晝のおましにうち臥し給ひて御物語など聞え給ふほどに暮れにけり。少し大殿ごもり入りにけるに、ひぐらしの花やかになくに驚き給ひて、さらば道たどたどしからぬ程にとて、御ぞなど奉りなほす。「月まちてともいふなるものを」といと若やかなるさましてのたまふはにくからずかし。そのまにもとやおぼすと心苦しげにおぼして立ちとまり給ふ。

「夕露に袖ぬらせとやひぐらしの鳴くをきくきくおきてゆくらむ」。かたなりなる御心にまかせていひ出で給へるもらうたければ、ついゐて「あな苦しや」とうち歎き給ふ。

「まつさともいかゞ聞くらむかたがたに心さわがすひぐらしの聲」などおぼしやすらひで、猶なさけなからむも心苦しければとまり給ひぬ。しづ心なくさすがに眺められ給ひて御くだものばかり參りなどして大殿ごもりぬ。まだ朝すゞみの程に渡り給はむとて疾く起き

給ふ。よべのかはほりをおとしてこれは風ぬるくこそありけれとて御扇おき給ひて、きのふうたゝね志給へりしおましのあたりを立ちとまりて見給ふに、御志とねの少しまよひたるつまより淺緑の薄葉なる文の押し卷きたる端見ゆるを、何心もなく引き出でゝ御覽ずるに男の手なり。かみのかなどいとえんにことさらめきたる書きざまなり。ふたかさねにこまごまと書きたるを見給ふに、まぎるべき方なくその人の手なりけりと見給ひつ。御鏡など開けて參らする人は猶見給ふ文にこそはと、心も知らぬ小侍從見つけて、昨日の文の色と見るに、いといみじく胸つぶつぶとなる心ちす。御かゆなどまゐる方に目も見やらず、いでさりともそれにはあらじ、いといみじくさる事はありなむや、かくし給ひてけむと思ひなす。宮は何心もなく、まだ大殿ごもれり。あないはけな、かゝるものをちらし給ひて我ならぬ人も見つけたらましかばとおぼすも心おとりして、さればよいとむげに心にくき所なき御有樣を後めたしとは見るかしとおぼす。出で給ひぬれば人々少しあがれぬるに、侍從よりて「昨日の物はいかにせさせ給ひてし。けさ院の御覽じつる文のいろこそ似て侍りつれ」と聞ゆれば、あさましとおぼして涙のたゞいできに出でくれば、いとほしきものからいふかひなの御さまやと見奉る。「いづくにかは置かせ給ひてし。人々の參りしに事あり顏に近くさぶらはじと、さばかりのいみをだに心の鬼にさり侍りしを、いらせ給ひしほどは少し程經侍りにしをかくさせ給ひつらむとなむ思う給へし」と聞ゆれば、「いさとよ、見し程に入り給ひしかばふともえおきあへで、さしはさみしを忘れにけり」とのたまふにいと聞えむかたなし。より

て見れどいづくのかはあらむ。「あないみじ。かの君もいと痛くおぢ憚りて氣色にても漏り聞かせ給ふことあらばとかしこまり聞え給ひしものを、ほどだに經ずかゝることの出でまうで來るよ、すべていはけなき御有様にて人にも見えさせ給ひければ、年比さばかり忘れがたく怨みいひわたり給ひしかど、かくまで思う給へし御ことかは。たが御ためにもいとほしく侍るべきこと」とはゞかりもなく聞ゆ。心やすく若くおはすれば馴れ聞えたるなめり。いらへもし給はでたゞなきにのみぞ泣き給ふ。いとなやましげにて露ばかりの物も聞し召さねば、かく惱しくせさせ給ふを見おき奉り給ひて、今はをこたりはて給ひにたる御あつかひに心を入れ給へることゝ、つらく思ひいふ。おとゞはこの文の猶怪しくおぼさるれば人見ぬ方にて打ち返しつゝ見給ふ。さぶらふ人々の中にかの中納言の手に似たる手して書きたるかとまでおぼしよれど、言葉づかひきらきらとまがふべくもあらぬことゞもあり。年を經て思ひわたりけることのたまさかにほいかなひて心安からぬすぢを書き盡したることばいと見所ありて哀なれど、いとかくさやかにはかくべしや、あたら人の文をこそ思ひやりなく書きけれ、おちちることもこそと思ひしかば、昔かやうにこまかなるべきをりふしにも、ことそぎつゝこそ書きまぎらはしゝか、人の深き用意は難きわざなりけりと、かの人の心をさへ見おとしたまひつ。さてもこの人をばいかゞもてなし聞ゆべき、珍しきさまの御心地もかゝることのまぎれにてなりけり、いであな心うや、かく人づてならずうきことをしるしるありしながら見奉らむよと、我が御心ながらもえ思ひなほすまじく覺ゆるを、なほざりのすさび

と始より心を留めぬ人だに、又ことざまの心わくらむと思ふは、心づきなく思ひ隔てらるゝを、ましてこれはさまことにおほけなき人の心にもありけるかな、みかどのみめをもあやまつたぐひ昔もありけれど、それは又いふかたことなり。宮づかへといひて我も人も同じ君になれ仕うまつる程に、おのづからさるべき方につけても、心をかはしそめ物のまぎれ多かりぬべきわざなり。女御更衣といへど、とあるすぢかゝる方につけてかたほなる人もあり、心ばせ必ず重からぬうちまじりて思はずなることもあれど、おぼろげの、さだかなるあやまち見えぬ程はさてもまじらふやうもあらむに、ふとしもあらはならぬまぎれありぬべし。かくばかり又なきさまにもてなし聞えて内々の志ひくかたよりもいつくしくかたじけなきものに思ひはぐゝまむ人をおきてかゝることは更にたぐひあらじとつまはじきせられ給ふ。みかどと聞ゆれどたゞすなほにおほやけざまの心ばへばかりにて宮仕の程も物すさまじきに、志深き私のねぎごとになびき、おのがじゝ哀をつくし見すぐし難き折のいらへをもいひそめ、忍ねむに心かよひそむらむなからひは、同じけしからぬすぢなれど、よるかたありや、我が身ながらもさばかりの人に心わけ給ふべくは覺えぬをと、いと心づきなけれど又氣色に出すべき事にもあらずなどおぼし亂るゝにつけて、故院の上もかく御心にはしろしめしてや知らず顏をつくらさせ給ひけむ、思へばその世のことこそは いと恐しくあるまじきあやまちなりけれと近きためしをおぼすにぞ、戀の山路はえもどくまじき御心まじりける。つれなしづくり給へど、物思し亂るゝさまのしるければ、女君消え殘りたる いとほしみにわ

たり給ひて、人やりならず心苦しう思ひやり聞え給ふにやとおぼして「心地はよろしくなりにて侍るを、かの宮の惱しげにおはすらむに疾く渡り給ひにしこそいとほしけれ」と聞え給へば「さかし。例ならず見え給ひしかど異なる心地にもおはせねばおのづから心のどかに思ひてなむ。内よりは度々御使ありけり。今日も御文ありつとか。かの院のいとやんごなく聞えつけ給へれば上もかくおぼしたるなるべし。少しおろかになどもあらむは、こなたかなたおぼさむことのいとほしきぞや」とてうめき給へば「内の聞し召さむよりもみづからうらめしと思ひ聞え給はむこそは心苦しからめ。われはおぼし咎めずともよからぬさまに聞えなす人々必ずあらむと思へば、いと苦しくなむ」などのたまへば、「實にあながちに思ふ人のためには煩はしきよすがなれど、萬にたどり深きことゝやかくやとおほよそ人の思はむ心さへ思ひめぐらさるゝを、これはたゞ國王の御心やおき給はむとばかりを、はゞからむは淺き心地ぞしける」とほゝゑみてのたまひまぎらはす。「渡り給はむことは諸共にかへりてを、心のどかにあらむ」とのみ聞え給ふを「こゝには暫し心安くて侍らむ。まづ渡り給ひて人の御心も慰みなむ程にを」と聞えかはし給ふ程に日ごろ經ぬ。姫宮はかく渡り給はぬ日比のふるも人の御つらさにのみおぼすを、今は我が御をこたりうちまぜてかくなりぬるとおぼすに、院も聞し召しつけていかにおぼし召さむと世の中つゝましくなむ。かの人もいみじげにのみいひわたれども小侍從も煩はしく思ひ歎きて「かゝることなむありし」と告げてければいとあさましくいつの程にさることと出できけむ、かゝることはありふればおのづから氣色に

ても漏り出づるやうもやと思ひしだにいとゞつゝましく、空にめつきたるやうに覺えてしを、ましてさばかり違ふべくもあらざりし事どもを見給ひてけむ、恥しくかたじけなくかたはらいたきに、朝夕すゞみもなき比なれど身もしむる心地していはむかたなく覺ゆ。年比まめごとにもあだごとにも召しまつはし參りなれつるものを、人よりはこまやかにおぼしとめたる御氣色の哀になつかしきをあさましくおほけなき物に心おかれ奉りてはいかでかは目をも見合せ奉らむ、さりとてかきたえほのめき參らざらむも人めあやしくかの御心にもおぼし合せむことのいみじさなど安からず思ふに、心地もいとなやましくてうちへも參らず。さして重き罪には當るべきならねど身のいたづらになりぬる心地すれば、さればよとかつは我が心もいとつらく覺ゆ。いでやしづやかに心にくきけはひ見え給はぬわたりぞや、まづはかのみすのはざまもさるべきことかは、かるがるしと大將の思ひ給へる氣色見えきかしなど今ぞ思ひおはする。しひてこの事を思ひさまさむと思ふかたにてあながちになんづけ奉らまほしきにやあらむ、よきやうとてもあまりひたおもむきにおほどかにあてなる人は世の有樣も知らず、かつさぶらふ人に心おき給ふこともなくて、かくいとほしき御身のためも人のためもいみじきことにもあるかなとかの御事の心苦しさもえ思ひ放たれ給はず。宮はいとらうたげにて惱みわたり給ふさまの猶いと心苦しくかく思ひはなち給ふにつけては、あやにくにうきにまぎれぬ戀しさの苦しくおぼさるれば、渡り給ひて見奉り給ふにつけても胸いたくいとほしくおぼさる。御いのりなどさまざまにせさせ給ふ。大方のことは

ありしにかはらず、なかなかいたはしくやんごとなくもてなし聞ゆるさまをまし給ふ。氣近くうち語らひ聞え給ふさまはいとこよなく御心隔たりてかたはらいたければ、人目ばかりをめやすくもてなしておぼしのみ亂るゝに、この御心のうちしもぞ苦しかりける。さることゝ見きともあらはし聞え給はぬに、みづからいとわりなくおぼしたるさまも心をさなし。いとかくおはするけぞかし。よきやうといひながらあまり心もとなく後れたる賴もしげなきわざなりとおぼすに、世の中なべてうしろめたく女御のあまりやはらかにおびれ給へるこそ、かやうに心かけ聞えむ人はまして心亂れなむかし。女はかうはるけ所なくなよびたるを人もあなづらはしきにや、さるまじきにふと目とまり心强からぬあやまちはゝ出づるなりけりとおぼす。右のおとゞの北の方の取り立てたるうしろみもなく幼くより物はかなきよにさすらふるやうにて生ひ出で給ひけれど、かどかどしくらうありて我も大方にはおやめきしかど、にくき心のそはぬにしもあらざりしをなだらかにつれなくもてなしてすぐし、このおとゞのさるむゝんの女房に心合せて入り來たりけむにもけざやかにもて離れたるさまを人にも見え知られ、殊更に許されたる有樣にゝなして我が心と罪あるにはなさずなりにしなど、今思へばいかにかどあることなりけり、契深き中なりければ長くかくてたもたむことはとてもかくても同じことあらましものから心もてありしことゝも世の人も思ひ出でば少しかるがるしき思ひ加はりなまし、いといたくもてなしてしわざなりとおぼし出づ。二條のないしのかんの君をば猶絶えず思ひ出で聞え給へど、かくうしろめたきすぢのことうきも

のにおぼしおりて、かの御心よわさも少しかるく思ひなされ給ひけり。遂に御ほ意のごとし給ひてけりと聞き給ひては、いと哀に口惜しく御心動きてまづとぶらひ聞え給ふ。今なむとだにほのめかし給はざりけるつらさをあさからず聞え給ふ。

「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦にもしほたれしも誰ならなくに。さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて今まで後れ聞えぬる口惜しさをおぼし捨てつとも、さり難き御ゑかうのうちにはまづこそはと哀になむ」など多く聞え給へり。狹くおぼし立ちにしことなれどこの御さまたげにかゝづらひて人にはおかあらはし給はぬことなれど、心のうちあはれに、昔よりつらき御契をさすがにあさくしもおぼし知られぬなどかたがたにおぼし出でらる。御かへり今はかくしも通ふまじき御文のとぢめとおぼせば哀にて心とゞめて書き給ふ墨つきなどいとをかし。「常なき世とは身ひとつにのみ知り侍りにしを後れぬとのたまはせたるになむ。げに、

あま船にいかゞは思ひおくれけむあかしの浦にいさりせし君。ゑかうにはあまねき方にてもいかゞは」とあり。濃きあをにびの紙にておきみにさし給へる、例のことなれどいたくすぐしたる筆づかひ猶ふりがたくをかしげなり。二條院におはします程にて女君にも今はむげに絶えぬることにて見せ奉り給ふ。「いといたくこそはづかしめられたれ。げに心づきなしや。さまざまに心ぼそき世の中の有樣をよく見すぐしつるやうなるよ。なべての世の事にてもはかなく物をいひかはし、時々によせて哀をも知り故をもすぐさず、よそながらのむ

つぴかはしつべき人は、齋院とこの君とこそは殘ありつるを、かく皆背きはてゝ齋院はたいみじうつとめてまぎれなくおこなひに志み給ひにたなり。猶こゝらの人の有樣を聞き見る中に、深く思ふさまにさすがに懐しきことのかの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女ごをおほし立てむことよ、いと難かるべきわざなりけり。すくせなどいふらむものは目に見えぬわざにて親の心にまかせがたし。おひたらむ程の心づかひはなほ力いるべかめり。よくこそあまたかたがたに心を亂るまじきちぎりなりけれ。年深くいたらざりしほどにさうざうしのわざや。さまざまに見ましかばとなむ歎かしきをりをりありし。若宮を心しておほしたて奉り給へ。女御は物の心を深く知り給ふ程ならでかく暇なきまじらひをし給へば、何事も心もとなきかたにぞ物し給ふらむ。御子達なむなほあくかぎり人にてんつかるまじくて世をのどかにすぐし給はむにうしろめたかるまじき心ばせつけまほしきわざなりける。かぎりありてとざまかうざまのうしろみまうくるたゞ人はおのづからそれにも助けられぬるを」など聞え給へば「はかばかしきさまの御うしろみならずとも世にながらへむかぎりは見奉らぬやうあらじと思ふを、いかならむ」とて猶物を心ぼそげにてかく心に任せて行ひをもとゞこほりなく志給ふ人々をうらやましく思ひ聞え給へり。「かんの君にさま變り給へらむさうぞくなどまだ立ちなれぬほどはとふらふべきを、けさなどはいかにぬふ物ぞ。それせさせ給へ。一くだりは六條のひんがしの君にものしつけむ。うるはしき法服だちてはうたて見る目もけうとかるべし。さすがにその心ばへ見せてを」など聞え給ふ。あをにびのひと

くだりをこゝにはせさせ給ふ。つくもどころの人召して忍びてあまの御具どものさるべきはじめのたまはす。御志とね、うはむしろ、屏風、几帳などのこともいと忍びてわざとがましく急がせ給ひける。かくて山のみかどの御賀も延びて秋とありしを、八月は大將の御き月にてがくそのこと行ひ給はむにびんなかるべし。九月は院の大后の隱れ給ひにし月なれば十月にとおぼしまうくるを、姬宮いたく惱み給へばまたのびぬ。衞門督の御あづかりの宮なむその月には參り給ひける。おほきおとゞ居立ちていかめしくこまかに物のきよら、ぎしきをつくし給へりけむ。かんの君もその序にぞ思ひ起して出で給ひける。猶なやましく例ならず病づきてのみすぐし給ふ。宮もうちはへて物をつゝましくいとほしとのみおぼし歎くけにやあらむ、月多く重なり給ふまゝにいと苦しげにおはしませば、院は心うしと思ひ聞え給ふ方こそあれ、いとらうたげにあえかなるさましてかく惱みわたり給ふを、いかにおはせむとなげかしくてさまざまにおぼしなげく。御いのりなど今年はまぎれ多くてすぐし給ふ。御山にもきこし召して、らうたく戀しと思ひ聞え給ふ。月比かくほかほかにて渡り給ふこともをさをさなきやうに人の奏しければいかなるにかと御胸つぶれて、世の中も今更にうらめしくおぼして對の方の煩ひける比は猶そのあつかひにと聞し召してだになまやすからざりしを、その後なほり難く物し給ふらむはその比ほひびんなきことや出で來たりけむ、みづから知り給ふことならねど善からぬ御うしろみどもの心にていかなることかありけむ、うちわたりなどのみやびをかはすべきなからひなどにも、けしからずうきことといひ出づるたぐひ

も聞ゆかしとさへおぼしよるも、こまやかなることおぼし捨てし世なれど、猶この道は離れ難くて、宮に御文こまやかにてありけるを、おとゞ坐します程にて見給ふ。「覺束なくてのみ年月のすぐるなむ哀なりける。惱み給ふなるさまはくはしく聞きし後ねんずのついでにも思ひやらるゝはいかゞ。世の中さびしく思はずなることありとも忍びすぐし給へ。うらめしげなる氣色などおぼろけにて見知り顏にほのめかす、いとしなおくれたるわざになむ」など敎へ聞え給へり。いといとほしく心苦しく、かゝる内々のあさましきをばきこし召すべきにはあらで、我がをこたりにほいなくのみ聞きおぼすらむことをとばかりおぼしつゞけて「この御かへりをばいかゞ聞え給ふ。心苦しき御せうそこにまろこそいと苦しけれ。思はずに思ひ聞ゆることありともおろかに人の見咎むばかりはあらじとこそ思ひ侍れ。たが聞えたるにかあらむ」とのたまふに、はぢらひて背き給へる御姿もいとらうたげなり。いたくおも痩せて物思ひくし給へるいとゞあてにをかし。「いとをさなき御心ばへを見置き給ひていたくうしろめたがり聞え給ふなりけりと思ひ合せ奉れば、今より後もよろづになむかうまでもいかで聞えじと思へど。うへの御心にそむくときこし召すらむこと安からずいぶせきを、こゝにだに聞え知らせでやはとてなむ。いたりすくなくたゞ人の聞えなすかたにのみよるべかめる御心には、唯おろかにあさきとのみおぼし、又今はこよなくさだすぎにたる有樣もあなづらはしくめなれてのみ見なし給ふらむも、方々に口惜しくもうれたくも覺ゆるを、院のおはしまさむ程は猶心をさめてかのおぼしおきてたるやうありけむさだすぎびとをも同じ

くなずらへ聞えていたくなかるめ給ひそ。いにしへよりほいふかきみちにもたどりうすかるべき女がたにだに皆思ひ後れつゝいとぬるき事多かるを、みづからの心には何ばかり思ひ迷ふべきにはあらねど、今はと捨て給ひけむ世のうしろみに讓りおき給へる御心ばへの哀に嬉しかりしを、引き續き爭ひ聞ゆるやうにて、同じさまに見捨て奉らむことのあへなく覺されむにつゝみてなむ。心苦しと思ひし人々も今はかけとゞめらるゝほだしばかりなるも侍らず。女御もかくて行く末は知り難けれど御子達數そひ給ふめればみづからの世だにのどけくはと見おきつべし。その外はたれもたれもあらむに從ひて諸共に身を捨てむも惜しかるまじき齡どもになりにたるを、やうやうすゞしく思ひ侍る。院の御世ののこり久しくもおはせじ。いとあづしくいとゞなりまさり給ひて、物心ぼそげにのみおぼしたるに、今更に思はずなる御名もり聞えて御心亂り給ふな。この世はいと安し。ことにもあらず。後の世の御道の妨げならむも罪いとおそろしからむ」など、まほにそのこととはあかし給はねどつくづくと聞え續け給ふに、涙のみ落ちつゝ我にもあらず思ひしみておはすれば、我もうち泣き給ひて人のうへにてももどかしく聞き思ひしふる人のさかしらよ、身に變ることにこそ、いかにうたてのおきなやとむつかしくうるさき御心そふらむと、耻ぢ給ひつゝ御硯ひき寄せ給ひて手づから押し摺り紙取りまかなひ書かせ奉り給へど、御手もわなゝきてえ書き給はず。かのこまかなりし返事はいとかくしもつゝまず通はし給ふらむかしとおぼしやるに、いとにくければよろづの哀もさめぬべけれど、ことばなど敎へ書かせ奉り給ふ。參り給はむこ

とはこの月かくて過ぎぬ。二の宮の御いきほひことにて參り給ひけるをふるめかしき御身ざまにて立ちならび顏ならむもはゞかりある心ちしけり。霜月はみづからの御忌月なり。年のをはりはたいと物さわがし。又いとゞこの御姿も見苦しく待ち見給はむをと思ひ侍れど、さりとてさのみ延ぶべきことにやは。「むつかしく物おぼし亂れずあきらかにもてなし給ひてこのいたくおも痩せ給へるつくろひ給へ」などいとらうたしとさすがに見奉り給ふ。衛門督をば何ざまの事にもゆゑあるべきをりふしには必ず殊更にまつはし給ひつゝのたまはせあはせしを絕えてさる御せうそこもなし。人あやしと思ふらむとおぼせど、見むにつけてもいとゞほれぼれしきかたはづかしく見むにはまた我が心もたゞならずやとおぼし返されつゝ、やがて月比參り給はぬをもとがめなし。大方の人は猶例ならず惱みわたりて院にはた御遊などなき年なればとのみ思ひわたるを大將の君、ぞあるやうあることなるべし、すきものは定めて我が氣色とりしとには忍ばぬにやありけむと思ひよれど、いとかくさだかに殘りなきさまならむとは思ひより給はざりけり。十二月になりにけり。十餘日と定めてまひどもならし殿の內ゆすりてのゝしる。二條院の上はまだわたり給はざりけるをこの試樂によりてぞえしづめはてゞ渡り給へる。女御の君も里におはします。このたびの御子は又男にてなむおはしましける。すぎすぎいとをかしげにておはするを、明暮もてあそび奉り給ふになむ過ぐるよはひのしるし嬉しくおぼされける。試樂に右大臣殿の北の方もわたり給へり。大將の君丑寅の町にてまづうちうちに調樂のやうに、明暮遊びならし給ひければかの御かたはお前

のものは見給はず。衛門督をかゝることの折もまじらはせざらむはいとはえなくさうざうじかるべき。うちにも人怪しとかたぶきぬべきことなれば參り給ふべきよしありけるを、重く煩ふよし申して參らず。さるはそこはかと苦しげなる病にもあらざなるを、思ふ心のあるにやと心苦しくおぼして取りわきて御せうそこつかはす。「ちゝおとゞもなどかかへさひ申されける。ひがひがしきやうに院にも聞し召さむを、おどろおどろしき病にもあらず。助けて參り給へ」とそゝのかし給ふにかく重ねてのたまへれば苦しと思ふ思ふ參りぬ。上達部などもまだ集ひ給はぬ程なりけり。例の氣近き御簾の內に入れ給ひてもやの御簾おろしておはします。實にいといたくやせやせにあをみて例もほこりかに花やぎたる方は弟の君達にはもてけたれていと用意ありがほにしづめたるさまぞことなるを、いとゞしづめてさぶらひ給ふさま、などかは御子達の御傍にさし並べたらむに更にとがあるまじきを、たゞことのさまの誰も誰もいと思ひやりなきこそいと罪許しがたけれなど、御目とまれどさりげなくいとなつかしく「そのことゝなくて對面もいと久しくなりにけり。月比はいろいろのびやうざをのみあつかひ、心のいとまなきほどに院の御賀のためこゝに物し給ふみこのほふじ仕うまつり給ふべくありしを、つきづき滯ることしげくてかく年もせめつれば、え思ひのごとくもしあへでかたのごとくなむ。いもひの御鉢參るべきを、御賀などいへばことごとしきやうなれど、家に生ひ出づるわらはべの數多くなりにけるを御覽ぜさせむとて舞などならはしはじめし、そのことをだにわたさむとて拍子とゝのへむこと、又誰にかはと思ひめぐらし

かねてなむ、月比とぶらひものし給はぬうらみも捨てゝける」とのたまふ。御氣色のうらなきやうなるものからいとゞはづかしきに、顏の色違ふらむと覺えて御いらへもとみにえ聞えず。「月比かたがたにおぼし惱む御こと承り歎き侍りながら、春の比ほひより例もわづらひ侍る。みだりかくびやうといふもの所せく起り煩ひ侍りてはかばかしくふみたつる事も侍らず月比に添へて沈み侍りてなむ、内などにも參らず世の中跡絶えたるやうにてこもり侍る。院の御齡たり給ふ年なり。人よりさだかに數へ奉り仕うまつるべきよし、致仕のおとゞ思ひおよび申されしを、かうぶりをかけ車をもしまず捨てし身にて進み仕うまつらむにつくところなし、げに下﨟なりとも同じこと深き所侍らむ、その心御覽ぜられよともよほし申さるゝことの侍りしかば、重き病をあひ助けてなむ參りてはべし。今はいよいよいとかすかなるさまにおぼしすましていかめしき御よそひを待ち受け奉り給はむこと願はしくもおぼすまじく見奉り侍りしを、事どもをばそがせ給ひて靜なる御物語の深き御願ひかなはせ給はむなむ優りて侍るべき」と申し給へば、いかめしく聞きし御賀のことを女二の宮の御方ざまにはいひなさぬもらうありとおぼす。「唯かくなむことそぎたるさまに世の人はあさく見るべきを、さはいへど心えて物せらるゝに、さればよとなむいとゞ思ひなられ侍る。大將はおほやけがたはやうやうおとなぶめれど、かやうになさけびたる方はもとよりしまぬにやあらむ。かの院何事も心および給はぬことはをさをさなきうちにも、がくのかたの事は御心留めていとかしこく知り整へたまへるをさこそおぼし捨てたるやうなれ。靜に聞し召し

すまさむこと今しもなむ心づかひせらるべき。かの大將と諸共に見入れて舞の童部の用意心ばへよく加へ給へ。物の師などいふものは唯我が立てたることこそあれ。いと口惜しきものなり」などいと懷しくの給ひつくるを、嬉しきものから苦しくつゝましくてことずくなにてこの前を疾く立ちなむと思へば、例のやうにこまやかにもあらでやうやうすべり出でぬ。ひんがしのおとゞにて大將のつくろひ出し給ふ樂人舞人のさうぞくのことなど又々行ひ加へ給ふ。あるべきかぎりいみじく盡し給へるにいとゞ委しき心しらひそふもげにこの道はいと深き人にぞものし給ふめる。今日はかゝるこゝろみの日なれば御方々物見給はむに見所なくはあらせじとて、かの御賀の日は赤きしらつるばみに、えびぞめのしたがさねを着るべし。今日は靑色にすはうがさね、樂人三十人今日はしらがさねを着たり。辰巳の方の釣殿につゞきたる廊をがくそにして山の南のそばより御前に出つる程せんゆうかといふもの遊びて雪のたゞいさゝかちるに春のとなり近く梅の氣色見るかひありてほゝゑみたり。廂の御簾の内に坐しませば、式部卿の宮右のおとゞばかりさぶらひ給ひて、それより下も上達部はすのこにわざとならぬ日のことにて御あるじなど氣近き程に仕うまつりなしたり。右の大殿の四郎ぎみ大將殿の三郎ぎみ兵部卿宮のそんわうの君だち二人はまんざいらくまだいとちひさき程にていとらうたげなり。四人ながらいづれとなくたかき家の子にてかたちをかしげにかしづき出でたる思ひなしもやんごとなし。又大將の御子のないしのすけばらの二郎ぎみ式部卿の宮の兵衛の督といひし、今は源中納言の御子皇麞、右の大い殿の三郎ぎ

み陵王、大將殿の太郎ぎみ落蹲、さてはたいへいらく喜春樂などいふ舞どもをなむ、同じ御なからひのきんだちおとなたちなど舞ひける。暮れゆけば御簾あげさせ給ひて物の興まさるにいとうつくしき御うまごの君達のかたちすがたにて舞のさまも世に見えぬ手を盡して、御師ども、おのおの手のかぎりを敎へ聞えけるに、深きかどかどしさを加へて珍らかに舞ひ給ふを、いづれをもいとらうたしとおぼす。老い給へる上達部たちは皆涙おとし給ふ。式部卿の宮も御うまごをおぼして御鼻の色づくまでしほたれさせ給ふ。あるじの院「過ぐる齡にそへては醉ひなきこそとゞめ難きわざなりけれ。衞門督心とゞめてほゝゑまるゝいと心恥しや。さりとも今暫しならむさかさまにゆかぬ年月よ、老いはえ遁れぬわざなり」とてうち見やり給ふに、人よりけにまめだちくつして誠に心地もいと惱ましければ、いみじき事もめもとまらぬ心地する人をしもさしわきて空醉ひしつゝかくの給ふ。たはぶれのやうなれどいとゞ胸つぶれてさかづきのめぐりくるも頭いたく覺ゆれば氣色ばかりにてまぎらはすを御覽じとがめて持たせながらたびたびしひ給へばはしたなくてもて煩ふさま、なべての人に似ずをかし。心地かき亂りて堪へがたければまだ事もはてぬに罷て給ひぬるまゝに、いといたく惑ひて、例のいとおどろおどろしき醉にもあらぬを、いかなればかゝるならむ、つゝましと物を思ひつるにけののぼりぬるにや、いとさいふばかりおくすべき心よわさとは覺えぬを、いふかひなくもありけるかなとみづから思ひ知らる。しばしの醉ひの惑ひにもあらざりけり。やがていといたく煩ひ給ふ。おとゞ母北の方おぼしさわぎてよそよそにてい

と覺束なしとて殿にわたし奉り給ふを、女宮のおぼしたるさま又いと心ぐるし。事なくてすぐす月日は心のどかにあいなだのみしていとしもあらぬ御志なれど今はと別れ奉るべきかどでにやと思ふは哀に悲しく、後れて思し歎かむことのかたじけなきをいみじと思ふ。母御息所もいといみじく歎き給ひて「世の事として親をばなほさるものにおき奉りてかゝる御なからひはとあるをりもかゝるをりも離れ給はぬこそ例のことなれ。かく引き別れてたひらかに物し給ふまでもすぐし給はむが心づくしなるべきことを、暫しこゝにてかくて試み給へ」と御傍に御几帳ばかりを隔てゝ見奉り給ふ。「ことわりや、數ならぬ身にて及び難き御なからひになまじひに許され奉りてさぶらふ志るしには長く世に侍りてかひなき身の程も少し人とひとしくなるけぢめをもや御覽ぜらるゝとこそ思う給へつれいといみじくかくさへなり侍れば深き志をだに御覽じはてられずやなり侍りなむと思う給ふるになむ、とまりがたき心地にもえゆきやるまじく思ひ給へらるゝ」など、かたみになき給ひてとみにもえわたり給はねば、又母北の方うしろめたくおぼして、「などかまづ見えむとは思ひ給ふまじき。われは心地も少し例ならず心ぼそきときはあまたの中にまづ取りわきてゆかしくも賴もしくもこそ覺え給へ。かくいと覺束なきこと」と怨み聞え給ふも又いとことわりなり。人よりさきなりけるけぢめにや取りわきて思ひならひたるを今に猶悲しく志給ひて暫しも見えぬをば苦しきもに志給へば、心地のかくかぎりに覺ゆるをりしも見え奉らざらむ罪深くいぶせかるべし。「今はとたのみなく聞かせ給はゞいと忍びて渡り給ひて御覽ぜよ。必ず又對面

給はらむ。怪しくたゆくおろかなる本性にて ことにふれておろかにおぼさるゝ事ありつらむこそくやしく侍れ。かゝる命の程を知らで行く末長くのみ思ひ侍りける事」となくなく渡り給ひぬ。宮はとまり給ひていふ方なくおぼしこがれたり。大殿に待ち受け聞え給ひてよろづにさわぎ給ふ。さるはたちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月比物などを更に參らざりけるに いとゞはかなきからうじなどをだにふれ給はず、唯やうやう物に引きいるゝやうに見え給ふ。さるときのいうそくのかくものし給へば世の中惜みあたらしがりて御とぶらひに參り給はぬ人なし。內よりも院よりも御とぶらひしば聞えつゝ、いみじく惜みおぼし召したるにも、いとゞしき親達の御心のみ惑ふ。六條院にもいと口惜しきわざなりとおぼし驚きて、御とぶらひに度々ねんごろに父おとゞにも聞え給ふ。大將はましていとよき御中なれば氣近く物し給ひつゝいみじく歎きありき給ふ。御賀は廿五日になりにけり。かゝる時のやんごとなき上達部の重く煩ひ給ふに、おやはらからあまたの人々さるたかき御なからひのなげきしをれ給へる比ほひぞ物すさまじきやうなれど、月々に滯りつることだにあるを、さて止むまじきことなればいかでかはおぼしとゞまらむ、女宮の御心のうちをぞいとほしく思ひ聞えさせ給ふ。例のごじふじのみずきやう又かのおはします御寺にもまかびるさなの。

柏木

衛門のかんの君かくのみ惱みわたり給ふこと猶をこたらで年もかへりぬ。おとゞ北の方おぼし歎くさまを見奉るにしひてかけはなれなむ命かひなく罪おもかるべきことを思ふ。心はこゝろとして又あながちにこの世に離れがたく惜み留めまほしき身かは、いはけなかりし程より思ふ心ことにて何事をも人には今一きはまさらむとおほやけわたくしのことにふれてなのめならず思ひのぼりしかど、その心かなひ難かりけりとひとつふたつのふしごとに身を思ひおとしてしこなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて後の世のおこなひにほい深くすゝみにしを親たちの御うらみを思ひて野山にもあくがれむ道の重きほだしなるべく覺えしかば、とざまかうざまに紛らはしつゝすぐしつるを、遂に猶世に立ちまふべくも覺えぬ物思ひの一方ならず身にそひにたるはわれより外に誰かはつらき、心づからもてそこなひつるにこそあめれと思ふに恨むべき人もなし。神佛をもかこたむ方なきはこれ皆さるべきにこそあらめ、たれも千年の松ならぬ世はつひにとるべきにもあらぬを、かく人にも少しうち忍ばれぬべき程にてなげの哀をもかけ給ふ人あらむをこそはひとつ思ひにもえぬるしるしにはせめ、せめてながらへばおのづからあるまじき名をもたち、我も人も安からぬみだれ出で來るやうもあらむよりは、なめしと心おい給へらむあたりにもさりともおぼし

ゆるいてむかし、萬の事今はのとぢめには皆消えぬべきわざなり、又ことざまのあやまちしなければ年比物のをりふしごとにまつはしならひ給ひにしかたの哀も出できなむなど、つれづれに思ひ續くるもうちかへしいとあぢきなし。などかく程もなくしなしつる身ならむとかきくらし思ひ亂れて枕もうきぬばかり人やりならずながしそへつゝ、いさゝかひまありとて人々立ちさり給へる程に、かしこに御文奉れ給ふ。「今はかぎりになりにて侍る有樣はおのづからきこし召すやうも侍らむを、いかゞなりぬるとだに御耳とゞめさせ給はぬもことわりなれど、いとうくも侍るかな」と聞ゆるに、いみじうわなゝけば思ふこともみなかきさして、

「今はとてもえむ煙もむすぼゝれ絶えぬおもひのなほや殘らむ。哀とだにのたまはせよ。心のどめて人やりならぬ闇に惑はむ道の光にもし侍らむ」と聞え給ふ。侍從にもこりずまに哀なる事どもを言ひおこせ給へり。「みづからも今一たびいふべき事なむある」との給へれば、この人もわらはよりさるたよりに參り通ひつゝ見奉りなれたる人なればおほけなき心こそうたて覺え給ひけれ。今はと聞くはいとかなしうてなくなく「猶この御かへり誠にこれをとぢめにもこそ侍れ」と聞ゆれば「我も今日か明日かの心ちして物心ぼそければ大方の哀ればかりは思ひ知らるれど、いと心うきことゝ思ひこりにしかばいみじうなむつゝましき」とて更にかい給はず。御心の本性の強くづしやかなるにはあらねど恥しげなる人の御けしきの折々にまほならぬがいと恐しうわびしきなるべし。されど御硯などまかなひて責め聞ゆ

れば志ぶ志ぶに書い給ふをとりて忍びてよひのまぎれにかしこに參りぬ。おとゞはかしこきおこなひ人葛城山よりさうじ出でたる、待ちうけ給ひて加持參らせむと志給ふ。みずほふどきやうなども いとおどろおどろしうさわぎたり。人の申すまゝにさまざまひじりだつげんざなどの、をさをさ世にも聞えず深き山に籠りたるなどをも、弟の君だちをつかはしつゝ尋ねめす、にけにくゝ心づきなき山伏どもなどもいと多くまゐる。煩ひ給ふさまのそこはかとなく物を心ぼそく思ひてねをのみ時々はなき給ふ。陰陽師なども多くは女の靈とのみ占ひ申しければさることもやとおぼせど、更にものゝけの顯れ出でくるもなきに、おもほしわづらひてかゝる隈々をも尋ね給ふなりけり。このひじりもたけたかやかにまぶしつべだましくて、荒らかにおどろおどろしく陀羅尼讀むを「いであなにくや、罪の深き身にやあらむ、陀羅尼の聲高きはいとけおそろしくていよいよ志ぬべくこそ覺ゆれ」とて、やをらすべり出でゝこの侍從と語らひ給ふ。おとゞはさも志り給はず、「ちやすみたると」人々志て申させ給へば、さおぼして忍びやかにこの聖と物語志給ふ。おとなび給へれど猶花やぎたるところつきて物わらひし給ふおとゞの、かゝるものどもと向ひ居てこの煩ひそめ給ひし有樣、何ともなくうちたゆみつゝおもり給へること「誠にこのものゝけあらはるべく念じ給へ」などこまやかに語らひ給ふもいと哀れなり。「かれ聞き給へ。何の罪ともおぼしよらぬに占ひよりけむ女の靈こそ誠にさる御志うの身にそひたるならば、いとはしき身もひきかへやんごとなくこそなりぬべけれ。さてもおほけなき心ありてさるまじきあやまちをひき出でゝ、人の御

名をもたて身をもかへりみぬたぐひ昔の世にもなくやはありけると思ひなほすに、猶けはひわづらはしう、かの御心にかゝる咎をしられ奉りて世にながらへむこともいとまばゆく覺ゆるはげにことなる御光なるべし。深きあやまちもなきに見合せ奉りし夕のほどよりやがてかきみだり惑ひそめにしたましひの身にもかへらずなりにしを、かの院の内にあくがれありかば結びとゞめ給へよ」などいとよわげにからのやうなるさましてなきみ笑ひみ語らひ給ふ。宮も物をのみはづかしうつゝましうおぼしたるさまを語る。さてうちしめりおもやせ給へらむ御さまの面影に見奉る心ちして思ひやられ給へば、げにあくがるゝたまやゆき通ふらむなどいとゞしき心ちにも亂るれば「今さらにこの御こととよ、かけても聞えじ。この世はかうはかなくて過ぎぬるを長き世のほだしにもこそと思ひなむ。いといとほしき心苦しき御ことをたひらかにとだにいかで聞きおい奉らむ。見し夢を心ひとつに思ひ合せて又語る人もなきがいみじういぶせくもあるかな」などとりあつめ思ひしみ給へるさまの深きを、かつはいとうたて恐しう思へど哀はたえしのばずこの人もいみじうなく。しそくめして御返り見給へば、御手も猶いとはかなげにをかしきほどに書い給ひて「心苦しうきゝながらいかでかは、唯おしはかり、殘らむとあるは、

立ちそひて消えやしなましうきことを思ひみだるゝ煙くらべに。おくるべうは」とばかりあるを哀にかたじけなしと思ひたまふ。「いでやこの煙ばかりこそはこの世の思ひいでならめ。はかなくもありけるかな」と、いとゞなきまさり給ひて御返りふしながらうちやすみ

つゝ書い給ふ。言の葉のつゞきもなくあやしき鳥の跡のやうにて、
「行くへなき空のけぶりとなりぬとも思ふあたりをたちははなれじ。夕はわきて詠めさせ給へ。咎め聞えさせ給はむ人めをも今は心やすくおぼしなりてかひなき哀をだにも絶えずかけさせ給へ」などかきみだりて心ちの苦しさまさりければ「よしいたう更けぬさきに歸り參りたまひてかく限のさまになむとも聞え給へ。今更に人あやしと思ひあはせむを、我が世の後さへ思ふこそ苦しけれ。いかなる昔の契にていとかゝることしも心にしみけむ」となくなくゐざり出で給ひぬれば、例はむごにむかへすゑてすゞろごとをさへいはせまほしうし給ふをことずくなにてもと思ふが哀なるに、えもいでやらず。御有樣をめのとも語りていみじう泣きまどふ。おとゞなどの覺したる氣色ぞいみじきや。「昨日今日少し宜しかりつるをなどかいと弱げには見え給ふ」とさわぎ給ふ。「何か猶とまり侍るまじきなめり」と聞え給ひてみづからもない給ふ。宮はこのくれつ方より惱ましうし給ひけるをその御氣色と見奉りしりたる人々さわぎみちておとゞにも聞えたりければ驚きて渡り給へり。御心のうちには、あなくちをしや、思ひまじる方なくて見奉らましかば珍しく嬉しからましとおぼせど、人には氣色漏らさじとおぼせば、げんざなどめしみずほふはいつとなく不斷にせらるれば、僧どもの中にげんあるかぎり皆參りて加持まゐりさわぐ。夜ひと夜惱みあかさせ給ひて日さしあがる程に生れ給ひぬ。男君ときゝ給ふに、かく忍びたることのあやにくにいちしるき顏つきにてさしいで給へらむこそ苦しかるべけれ、女こそ何となくまぎれ、數多の人の見

ぬものなればやすけれとおぼすに、又かく心苦しきうたがひまじりたるにては心やすき方に物し給ふもいとよしかし、さてもあやしや、我が世と共に恐しと思ひし事のむくいなめり、この世にてかく思ひかけぬことにむかはりぬれば後の世の罪も少しかろみなむやとおぼす。人はたしらぬことなればかく心ことなる御はらにて末に出ておはしたるおぼえ、いみじかりなむと思ひいとなみ仕うまつる。御うぶやの儀式いかめしうおどろおどろし。御方々さまざまにしいで給ふ御うぶやしなひ、世のつねのをしきついかさね、たかつきなどのこゝろばへも、殊更に心々いとましさ見えつゝなむ。五日の夜は中宮の御方よりこもちの御前のもの女房の中にもしなじなに思ひあてたるきはきは、おほやけごとに厳めしうせさせ給へり。御粥、とんじき五十具、所々の饗、院の下部、廳の召次所、なにかのくまゝでいかめしうせさせ給へり。宮づかさ大夫よりはじめて院の殿上人みな參れり。七夜はうちよりそれもおほやけざまなり。致仕のおとゞなど心殊に仕うまつり給ふべきに、この比は何事もおぼされでおほざうの御とぶらひのみぞありける。宮達上達部などあまた參り給ふ。大かたの氣色も世になきまでかしづき聞え給へどおとゞの御心のうちに心苦しとおぼすことありていたうももてはやし聞え給はず御あそびなどはなかりけり。宮はさばかりひわづなる御さまにていとむくつけうならはぬことの恐しう思されけるに、御ゆなども聞しめさず、身の心うきことをかゝるにつけてもおぼし入れば、さばれこの序にも死なばやとおぼす。おとゞはいとよう人目をかざりおぼせど又むつかしげにおはするなどを、とりわきても見奉り給はずなどあ

れば、老いしらへる人などは「いでやおろかにも坐しますかな。珍しうさし出で給へる御有様のかばかりゆゝしきまでにおはしますを」とうつくしみ聞ゆれば、かた耳に聞き給ひてさのみこそはおぼし隔つることもまさらめと、怨めしう我が身つらくて尼にもなりなばやの御心つきぬ。よるなどもこなたには大殿籠らず、晝つ方などぞさしのぞき給ふ。「世の中のはかなきを見るまゝに行く末短かう物心ぼそくて行ひがちになりにて侍れば、かゝる程のらうがはしき心ちするにより、得参りこぬを、いかゞ御心ちはさはやかにおぼしなりにたりや。心苦しうこそ」とて御几帳のそばよりさし覗き給へり。御ぐしもたげ給ひて「猶えいきたるまじき心ちなむし侍るを、かゝる人は罪もおもかなり。尼になりてもしそれにやいきとまると試み又なくなるとも罪を失ふことにもやとなむ思ひ侍る」と常の御けはひよりはいとおとなびて聞え給ふを、「いとうたてゆゝしき御事なり。などてかさまではおぼす。かゝることはさのみこそおそろしかなれど、さてながらへぬわざならばこそはあらめ」と聞え給ふ。御心のうちには誠にさもおぼしよりてのたまはゞ、さやうにて見奉らむは哀なりなむかし、かつ見つゝもことにふれて心おかれ給はむが心苦しう、我ながらもえ思ひなほすまじううき事うち交りぬべきを、おのづからおろかに人の見咎むることもあらむがいといとほしう、院などの聞しめさむとも我がをこたりにのみこそはならめ、御悩みにことづけてさもやなし奉りてましなど覺しよれど、又いとあたらしう哀にかばかり遠きみぐしのおひさきを、しかやつさむとも心苦しければ「猶つよくおぼしなれ。けしうはおはせじ。かぎりと見ゆる人

もたひらかなるためし近ければさすがにたのみある世になむ」など聞え給ひて御湯まゐり給ふ。いといたう青みやせてあさましうはかなげにて打ち臥し給へる御さまおほどきうつくしげなれば、いみじきあやまちありとも心弱く許しつべき御さまかなと見奉り給ふ。山のみかどは珍しき御事たひらかなりと聞し召して哀にゆかしうおもほすに、かく惱み給ふよしのみあれば、いかに物し給ふべきにかと御おこなひも亂れておぼしけり。さばかり弱り給へる人の物をきこしめさで日比經給へばいとたのもしげなくなり給ひて年比見奉らざりし程よりも院のいと戀しく覺え給ふを、またも見奉らずなりぬるにやといたうなき給ふ。かく聞え給ふさまさるべき人して傳へ奏せさせ給ひければ、いと堪へがたう悲しとおぼして、あるまじき事とはおぼし召しながら世にかくれて出でさせ給ふ。かねてさる御せうそこもなくて俄にかく渡りおはしまいたればあるじの院驚きかしこまり聞え給ふ。「世の中をかへりみすまじう思ひ侍りしかど、猶惑ひさめがたきものはこの道の闇になむ侍りければ、行ひもけだいしてもしおくれさきだつ道のだう理のまゝならで別れなばやがてこの恨もやかたみに殘らむと、あぢきなさにこの世のそしりをばしらでかくものし侍り」と聞え給ふ。御かたちことになまめかしうなつかしきさまにうち忍びやつれ給ひてうるはしき御法服ならず、すみぞめの御姿、あらまほしう淸らなるもうらやましく見奉り給ひ、例のまづ涙おとし給ふ。「わづらひ給ふ御さま殊なる御惱みにも侍らず、唯月比弱り給へる御有樣に、はかばかしう物なども參らぬつもりにやかくものし給ふにこそ」など聞え給ふ。「かたはら痛きおまし

なれども」とて御帳の前に御褥まゐりて入れ奉り給ふ。宮をもとかう人々つくろひ聞えてゆかの志もにおろし奉る。御几帳少しおしやらせ給ひて「夜居の加持の僧などの心ちすれどまだげんつくばかりの行ひにもあらねばかたはら痛けれど唯覺束なく覺え給はむさまをさながら見給ふべきなり」とて御目おしのごはせ給ふ。宮もいと弱げにない給ひて「生くべうも覺え侍らぬをかくおはしましたる序に尼になさせ給ひてよ」と聞え給ふ。「さる御ほ意あらばいと尊きことなるをさすがに限らぬ命のほどにて行く末とほき人はかへりてことのみだれあり、世の人に謗らるゝやうありぬべきことになむ、猶憚りぬべき」などのたまはせておとゞの君に「かくなむすゝみのたまふを、今はかぎりのさまならば片時のほどにてもそのたすけあるべきさまにてとなむ思ひ給ふる」とのたまへば「日比もかくなむのたまへど、ざけなどの人の心たぶらかしてかゝる方にすゝむるやうも侍るなるをとてきゝも入れ侍らぬなり」と聞え給ふ。「ものゝけの敎へにてもそれにまけぬとて惡しかるべき事ならばこそはゞからめ。よわりにたる人の限とて物し給はむことを聞きすぐさむは後のくい心苦しうや」とのたまふ。御心のうちにはかぎりなううしろやすくゆづり置きし御事をうけとり給ひてさしも志深からず、我が思ふやうにはあらぬ御氣色を事にふれつゝ年比聞しめしおぼしつめげること色に出でゝ恨み聞え給ふべきことにもあらねば、世の人の思ひいはむ所も口惜しうおぼしわたるに、かゝる折にもてはなれなむも何かは人わらへに世を恨みたる氣色ならで、さもあらざらむ大かたのうしろみには猶頼まれぬべき御おきてなるを、唯預け置

き奉りししるしには思ひなして、にくげに背くさまにはあらずとも、御そうぶんに廣くおもしろき宮給はり給へるを繕ひて住ませ奉らむ、わがおはします世にさる方にても後めたからずきゝおき、又かのおとゞもさいふともいとおろかにはよも思ひ放ち給はじ、その心ばへをも見はてむなどおもほしとりて、「さらばかく物したる序にいむことうけ給はむをだに結縁にせむかし」とのたまはす。おとゞの君うしとおぼす方も忘れてこはいかなるべき事ぞと悲しく口惜しければ得堪へ給はず「うちに入りてなどかう いく世しも侍るまじき身をふり捨てゞ、かうはおぼしなりにけるぞ。猶しばし心をしづめ給ひて御湯まゐり物などをもきこしめせ。たふとき事なりとも御身弱うては行ひもし給ひてむや。かつはつくろひ給ひてこそ」と聞え給へど頭ふりて、いとつらうのたまふとおぼしたり。つれなくてうらめしとおぼすこともありけるにやと見奉り給ふに いといとほしう哀なり。とかく聞えかへさひおぼしやすらふ程に夜明けがたになりぬ。かへり入らむに道も晝ははしたなかるべしといそがせたまひて御いのりに侍ふ僧の中にやんごとなう尊き限召し入れて御ぐしおろさせ給ふ。いとさかりに清らなる御ぐしをそぎすてゝいむことうけ給ふ。さはふ悲しく口惜しければおとゞはえ忍びあへ給はずいみじうない給ふ。院はたもとよりとりわきてやんごとなう人よりもすぐれて見奉らむとおぼしゝを、この世にはかひなきやうになし奉るも飽かず悲しければ、うちしほたれ給ひて「かくてもたひらかにて同じうはねんずをも勤め給へ」と聞えおき給ひて、明けはてぬに急ぎ出でさせ給ひぬ。宮は猶よわう消えいるやうにし給ひてはかばかし

うもえ見奉らず物なども聞え給はず。おとゞも「夢のやうに思ひ給へ亂るゝ心まどひにかう昔覺えたるみゆきのかしこまりをもえ御覽ぜられぬらうがはしさは殊更に參り侍りて」など聞え給ふ。御送に人々參らせ給ふ。「世の中のけふかあすかに覺え侍りし程に、又ある人もなくてたゞよはむことの哀にさり難う覺え侍りしかば、御ほ意にはあらざりけめど、かく聞えつけて年比は心安く思ひ給へつるを、もしもいきとまり侍らば さまことにかはりて人繁き住まひはつきなかるべきを、さるべき山里などにかけ離れたらむ有樣も又さすがに心ぼそかるべくや。さまにあたがひて猶おぼし放つまじくなむ」と聞え給へば、「更にかくまで仰せらるゝなむかへりて耻しう思ひ給へらるゝみだり心ち、とかく亂れ侍りて何事も得辨へ侍らず」とてげにいと堪へがたげにおぼしたり。後夜の御加持に御ものゝけ出で來て「かうぞあるよ。いとかしこう取りかへしつと一人をばおぼしたりしが、いとねたかりしかば、このわたりにさりげなくてなむ日比侍らひつる。今は歸りなむ」とてうち笑ふ。いとあさましう、さはこのものゝけのこゝにも離れざりけるにやあらむとおぼすに、いとほしう悔しうおぼさる。宮少しいき出で給ふやうなれど猶頼みがたげにのみ見え給ふ。侍ふ人々もいといふかひなく覺ゆれど、かうてもたひらかにだにおはしまさばと念じつゝ、みずほふまたのべてたゆみなく行はせなどよろづにせさせ給ふ。かの衛門督はかゝる御事を聞き給ふに、いとゞ消え入るやうにあ給ひてむげに頼む方すくなうなり給ひにたり。女宮の哀に覺えたまへばこゝに渡り給はむことは今更にかるがるしきやうにもあらむを、上もおとゞもかくつ

とそひおはすればおのづからとゞらはづして、見奉り給ふやうもあらむに、味氣なしとおぼして「かの宮にとかくして今一度まうでむ」とのたまふを更に許し聞え給はず。誰にもこの宮の御事を聞えつけ給ふ。初より母御息所はをささ心ゆき給はざりしを、このおとゞのゐたちねんごろに聞え給ひて志深かりしにまけ給ひて、院にもいかゞはせむとおぼし許しけるを、二品の宮の御事をおもほし亂れける序に、なかなかこの宮は行くさきうしろやすくまめやかなるうしろみまうけ給へりとのたまはすと聞き給ひしをかたじけなく思ひ出づ。かくて見捨て奉りぬるなめりと思ふにつけては さまざまにいとほしけれど、心より外なる命なれば堪へぬ契うらめしうて、おぼし歎かれむが心苦しきこと「御志ありてとぶらひ物せさせ給へ」と母上にも聞え給ふ。「いであなゆゝし。後れ奉りてはいくばく世にふべき御身とて、かうまで行くさきの事をばのたまふ」とて泣きにのみなき給へばえ聞えやり給はず、左大辨の君にぞ大方の事どもは委しう聞えつけ給ふ。心ばへのどかに善くおはしつる君なれば、弟の君達も又末々のわかきは親とのみ頼み聞え給へるに、かう心ぼそうのたまふを悲しと思はぬ人なく、殿のうちの人もなげく。おほやけもをしみ口をしがらせ給ふ。かくかぎりと聞しめして俄に權大納言になさせ給へり。よろこびに思ひおこして今一たびも參り給ふやうもやあるとおぼしのたまはせければ、更にえためらひやり給はで、苦しき中にもかしこまり申し給ふ。おとゞもかく重き御おぼえを見給ふにつけても、いよいよ悲しうあたらしとおぼし惑ふ。大將の君常にいと深う思ひ歎きとぶらひ聞え給ふ。御悦にもまづまうで給へり。この

おはする對のほとりこなたのみかどは馬車たちこみ人さわがしうさわぎみちたり。ことしとなりては起きあがる事もをさをさし給はねば重々しき御さまに亂れながらはえ對面し給はで思ひつゝ弱りぬる事と思ふに口をしければ「猶こなたに入らせ給へ。いとらうがはしきさまに侍る罪はおのづからおぼし許されなむ」とて臥し給へる枕がみのかたに僧などしばし出し給ひて入れ奉り給ふ。早うよりいさゝか隔て給ふことなくむつびかはし給ふ御中なれば別れむことの悲しく戀しかるべきなげき、おやはらからの御思ひにも劣らず。今日はよろこびとて心ちよげならましをと思ふにいと口惜しうかひなし。「などかくたのもしげなくはなり給ひにける。今日はかゝる御よろこびに聊すくよかにもやとこそ思ひ侍りつれ」とて、几帳のつまをひきあげ給へれば「いと口惜しうその人にもあらずなりにて侍りや」とて、ゑばうしばかりおし入れて、少し起きあがらむとし給へどいと苦しげなり。白き衣どもの、懷しうなよゝかなるを數多かさねてふすまひきかけて臥し給へり。おましのあたり物清げにけはひかうばしう心にくゝぞすみなし給へる。うちとけながら用意ありと見ゆ。重く煩ひたる人はおのづから髮ひげも亂れ物むづかしきけはひもそふ業なるを瘠せさらぼひたるしもいよいよしろうあてはかなるけして、枕をそばだてゝ物など聞え給ふけはひいとよわげに息も絶えつゝあはれげなり。「久しう煩ひ給ふ程よりは殊にいたうもそこなはれ給はざりけり。常の御かたちよりもなかなかまさりてなむ見え給ふ」とのたまふものから涙おしのごひて「後れ先だつ隔なくとこそ契り聞えしがいみじうもあるかな。この御心ちのさ

まを何事にておもり給ふとだにえ聞きわき侍らず。かく親しきほどながら覺束なくのみ」などのたまふに「心には重くなるけぢめも覺え侍らず。そこぞと苦しきこともなければたちまちにかうも思ひ給へざりし程に、月日も經でよわり侍りにければ、今はうつしごゝろもうせたるやうになむをしげなき身をさまざまにひきとゞめらるゝ。いのりぐわんなどのちからにや、さすがにかゝづらふもなかなか苦しう侍れば心もてなむ急ぎたつ心ちのし侍る。さらばこの世のわかれさりがたきことばいと多うなむ。親にも仕うまつりさして今更に御心どもを惱まし、君に仕うまつる事もなかばの程にて身をかへりみるかたはたましてはかばかしからぬ恨をとゞめつる大方の歎きをばさるものにて又心のうちに思ひ給へ亂るゝことの侍るを、かゝるいまはのきざみにて何かは漏すべきと思ひ侍れど、猶忍びがたきことを誰にかはうれへ侍らむ。これかれ數多ものすれどさまざまなることにて更にかすめ侍らむもあいなしかし。六條院にいさゝかなる事のたがひめありて月比心のうちにかしこまり申すことなむ侍りしを、いとほ意なう世の中心ぼそう思ひなりて病ひづきぬとおぼえ侍りしに、めしありて院の御賀のがくそのこゝろみの日まゐりて御氣色を給はりしに、猶ゆるされぬ御心ばへあるさまに御まなじりを見奉り侍りて、いとゞ世にながらへむこともはゞかり多う覺えなり侍りてあぢきなう思ひ給へしに心のさわぎそめて、かくしづまらずなり侍りぬるになむ、人かずにはおぼし入れざりけめど、いはけなう侍りし時より深く頼み申す心の侍りしを、いかなるざうげんなどのありけるにかと、これなむこの世のうれへにて殘り侍りけ

れば、ろならうかの後の世のさまたげにもやと思ひ給ふるを、事のついで侍らば御耳とゞめてよろしうあきらめ申させ給へ。なからむうしろにもこのかうじ許されたらむなむ御德に侍るべき」などのたまふまゝに、いと苦しげにのみ見えまさればいみじうて、心の中に思ひ合する事どもあれどもさしてたしかにはえしも推しはからず、「いかなる御心の鬼にかは。更にさやうなる御氣色もなく、かくおもり給へる由をも聞き驚き歎き給ふ事かぎりなうこそ口をしがり申し給ふめりしか。などかくおぼす事あるにては今まで隔てのこい給ひつらむ。こなたかなたあきらめ申すべかりけるものを、今はいふかひなしや」とてとりかへさまほしく悲しくおぼさる。「げにいさゝかも隙ありつるをりに聞えうけ給はるべうこそ侍りけれ。されどいとかう今日明日としもやはと、みづからながら知らぬ命のほどを思ひのどめ侍りけるもはかなくなむ。この事は更に御心よりもらし給ふまじ。さるべき序侍らむ折には御用意くはへ給へとて聞えおくになむ。一條に物し給ふ宮ことにふれてとぶらひ聞え給へ。心苦しきさまにて院などにも聞しめされ給はむをつくろひ給へ」などのたまふ。いはまほしき事は多かるべけれど心ちせむ方なくなりにければ、出でさせ給ひねと手かき聞え給ふ。加持まゐる僧ども近う參り、上おとゞなどおはし集まりて人々も立ちさわげば、なくなく出で給ひぬ。女御をば更にも聞えずこの大將の御方などもいみじう歎き給ふ。心おきてのあまねく人のこのかみ心に物し給ひければ、右の大殿の北の方もこの君をのみぞむつまじきものに思ひ聞え給ひければ、よろづ思ひなげき給ひて御いのりなどとりわきてせさせ給ひけれ

ど、やむくすりならねばかひなきわざになむありける。女宮にも遂にえ對面し聞え給はであわの消えいるやうにてうせ給ひぬ。年比志たの心こそねんごろに深くもなかりしか、大かたにはいとあらまほしくもてなしかしづき聞えてけなつかしう心ばへをかしううちとけぬさまにてすぐい給ひければつらきふしもことになし。唯かく短かりける御身にてあやしくなべての世すさまじく思ひたまふなりけりと思ひ出でたまふに、いみじうておぼし入りたるさまいと心ぐるし。御息所もいみじう人わらへに口惜しと見奉り歎き給ふ事かぎりなし。おとゞ北の方などはましていはむかたなく、われこそさきだゝめ、世のことわりなうつらいことゝ、こがれ給へど何のかひなし。尼宮はおほけなき心もうたてのみ覺されて世にながゝれとしもおぼさゞりしを、かくなど聞き給ふはさすがにいと哀なりかし。若君の御ことをさぞと思ひたりしもげにかゝるべき契にてや、思の外に心うき事もありけむとおぼしよるにさまざま物心ぼそうて打ちなかれ給ひぬ。三月になれば空の氣色も物うらゝかにてこの君いかの程になり給ひていと志ろう美くしう、程よりはおよすげて物語など志給ふ。おとゞわたり給ひて「御心ちはさはやかになり給ひにたりや。いでやいとかひなくも侍るかな。例の御ありさまにてかく見なし奉らましかばいかに嬉しう侍らまし。心うくおぼしすてけること」と涙ぐみて恨み聞え給ふ。日々に渡り給ひて今しもやんごとなく限なきさまにもてなし聞え給ふ。御いかにもちひ參らせ給はむとて、かたち殊なる御さまを人々「いかに」など聞えやすらへど、院わたらせ給ひて「何か女に物し給はゞこそ同じすぢにていまいましくもあ

らめ」とて南面にちひさきおましなどよそひて參らせ給ふ。御乳母いと花やかにさうぞきて御前の物いろいろにつくしたるこゑものひわりでの心ばへどもを內にもとにもとの心をしらぬことなればとりちらし何心もなきを、いと心苦しうまばゆきわざなりやとおぼす。宮もおき居給ひてみぐしのすゑの所せうひろごりたるを いと苦しとおぼして、ひたひなどなでつけておはするに、几張をひきやりて居給へば いと恥しうてそむき給へるいとゞちひさうほそり給ひて御ぐしはをしみ聞えて長うそぎたりければうしろはことにけぢめも見え給はぬ程なり。すぎすぎ見ゆるにび色の御ぞども黃がちなる今やう色など着給ひて、まだありつかぬ御かたはらめかくてもうつくしき子どもの心ちしてなまめかしうをかしげなり。「いであな心う。墨染こそ猶いとうたて目もくるゝ色なりけれ。かやうにても見奉ることはたゆまじきぞかしと思ひ慰め侍れど、ふりがたうわりなき心ちする淚の人わろさを、いとかう思ひすてられ奉る身のとがに思ひなすも、さまざまに胸いたう口惜しうなむ。取り返すものにもがなや」と打ち歎き給ひて「今はとて覺しはなれば、誠に御心といとひすて給ひけると恥しう心うくなむ覺ゆべき。猶哀とおぼせ」と聞え給へば「かゝるさまの人は物の哀もしらぬものときゝしを、ましてもとより知らぬ事にていかゞは聞ゆべからむ」とのたまへば「かひなのことや。おぼししる方もあらむものを」とばかりのたまひさして若君を見奉り給ふ。御乳母たちはやんごとなく めやすき限數多さぶらふ。召しいでゝ仕うまつるべき心おきてなどの給ふ。「哀のこりすくなき世におひ出つべき人にこそ」とて抱きとり給へばいと心安く

うちゑみてつぶつぶと肥えて白ううつくし。大將などの御ちごおひほのかにおぼし出づるには似給はず、女御の宮たちはた父みかどの御かたざまにわうげづきて氣高うこそおはしませ、殊にすぐれてめでたうしもおはせず。この君いとあてなるにそへてあいぎやうづきまみのかをりてゑみがちなるなどをいと哀と見給ふ。思ひなしにや猶いとようおぼえたりかし。只今ながらまなこゐのどかに恥かしきさまもやうはなれてかをりをかしき顔ざまなり。宮はさしもおぼしわかず人はた更にしらぬことなれば唯一所の御心のうちにのみぞ哀はかなかりける人の契かなと見給ふに、大方の世のさだめなさもおぼし續けられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日はこといみすべき日をとおしのごひ隱し給ひて「しづかに思ひて嘆くに堪へたり」とうちずじ給ふ。五十八を十とりすてたる御齡なれど末になりぬる心ちし給ひていと物哀におぼさる。なんぢが父にとも諫めまほしうおぼしけむかし。この事の心しれる人女房の中にもあらむかし、しらぬこそねたけれ、をこなりと見るらむと安からずおぼせど我が御咎めあるとはあへなむ、ふたついはむには女の御爲こそいとほしけれなどおぼして、色にもいだし給はず、いと何心なう物語して笑ひ給へるまみ口つきのうつくしきも心しらざらむ人はいかゞあらむ。猶いとよく似通ひたりけりと見給ふに、親たちの子だにあれかしとない給ふらむにもえ見せず。人しれずはかなきかたみばかりをとゞめ置きて　さばかり思ひあがりおよすげたりし身を心もてうしなひつるよと、哀にをしければめざましと思ふ心もひきかへしうちなかれ給ひぬ。人々すべり隱れたる程に宮の御許により給ひて「この人

をばいかゞ見給ふや。かゝる人を捨てゝ背きはて給ひぬべき世にやありける。あな心う」とおどろかし聞え給へば顔うち赤めておはす。

「たが世にかたねはまきしと人とはゞいかゞ岩根の松はこたへむ。哀なり」など忍びて聞え給ふに、いらへもなうてひれふし給へり。ことわりとおぼせば志ひても聞え給はず、いかにおぼすらむ、物深うなどはおはせねど、いかでかはたゞにはと推し量り聞え給ふもいと心苦しうなむ。大將の君はかの心にあまりてほのめかし出でたりしを、いかなる事にかありけむ、少し物覺えたるさまならましかばさばかりうち出でそめたりしに、いとよう氣色を見てましを、いふかひなきとぢめにてをりあしういぶせうあはれにもありしかなと、面影忘れがたくてはらからの君達よりも志ひて悲しと覺え給ひけり。女宮のかく世を背き給へる有樣おどろおどろしきなやみにもあらですかやかにおぼし立ちける程よ、又さりとも許し聞え給ふべきことかは、二條のうへのさばかり限にてなくなく申し給ふと聞きしを、いみじきことにおぼして遂にかくかけとゞめ奉り給へるものをなど、取り集めて思ひくだくに、猶昔より絶えず見ゆる心ばへえ忍ばぬ折々もありきかし、いとようもて志づめたるうはべは人よりけに用意あり、のどかに何事をこの人の心の中に思ふらむと、見る人も苦しきまでありしかど、少しよわき所つきてなよび過ぎたりしけぞかし、いみじくともさるまじき事に心をみだり、かくしも身にかふべき事にやはありける、人の爲にもいとほしう我が身はたいたづらにやなすべき、さるべき昔の契といひながらいとかるがるしう味氣なきことなりかしなど

心ひとつに思へど、女君にだに聞え出て給はず、さるべきついでなうて院にもまた聞え出で給はざりけり。さるはかゝる事をなむかすめしと申し出でゝ、御氣色も見まほしかりけり。父おとゞ母北の方は涙のいとまなくおぼししづみて、はかなく過ぐる日數をもしり給はず、御わざの法服御さうぞく、なにくれの急ぎをも君達御方々とりどりになむせさせ給ひける。經佛のおきてなども左大辨の君せさせ給ふ。七日七日の御ずきやうなども人の聞えおどろかすにも「われになきかせそ。かくいみじと思ひ惑ふに、なかなか道さまたげにもこそ」とてなきやうに覺しほれたり。一條の宮にはまして覺束なくて別れ給ひにし恨さへそへて、日比ふるまゝに廣き宮のうち人げすくなう心ぼそげにて、親しく使ひならし給ひし人は猶參りとぶらひきこゆ。好み給ひし鷹、馬などその方のあづかりども、皆つく所なう思ひうんじてかすかに出入を見給ふも、ことにふれて哀はつきぬものになむありける。もてつかひ給ひし御調度ども、常にひき給ひし琵琶和琴などの緒もとりはなちやつされて音を立てぬもいとうもれいたきわざなりや。御前の木立いたうけぶりて花は時を忘れぬ氣色なるを詠めつゝものがなしく、侍ふ人々もにび色にやつれつゝ寂しう徒然なる晝つ方、さき華やかに追ふ音してこゝにとまりぬる人あり。「あはれ故殿の御けはひとこそうち忘れて思ひつれ」とて泣くもあり。大將殿のおはしたるなりけり。御せうそこ聞えいれ給へり。例の辨の君、宰相などのおはしたるとおぼしつるをいとはづかしげに淸らなる御もてなしにて入り給へり。もやの廂におましよそひて入れ奉る。おしなべたるやうに人々のあへしらひ聞えむはかたじけ

なきさまの志給へれば御息所ぞたいめし給へる。「いみじきことを思ひ給へ歎く心はさるべき人々にも越えて侍れど限あれば聞えさせやる方なうて世の常になり侍りにけり。いまはの程にものたまひ置く事侍りしかばおろかならずなむ。誰ものどめ難き世なれば、後れ先だつ程のけぢめには思ひ給へ及ばむに志たがひて深き心の程をも御覽ぜられにしがなとなむ。神わざなど志げき比ほひ私の志にまかせて、つくづくと籠り居侍らむも、例ならぬ事なりければ立ちながらはたなかなかに飽かず思ひ給へらるべうてなむ日比はすぐし侍りにける。おとゞなどの心を亂り給ふさま見聞き侍るにつけても親子の道のやみをばさるものにて、かゝる御中らひの深く思ひとゞめ給ひけむ程を推し量り聞えさするにいと盡きせずなむ」とて志ば志ばおしのごひ鼻打ちかみ給ふ。あざやかに氣高きものから懷しうなまめいたり。御息所も鼻聲になり給ひて「哀なるとはその常なき世のさがにこそは、いみじとても又類ひなき事にやはと、年積りぬる人は志ひて心づようさまし侍るを、更におぼし入りたるさまのいとゆゝしきまで志ばしも立ち後れ給ふまじきやうに見え侍れば、すべていと心うかりける身の今までながらへ侍りてかくかたがたにはかなき世の末の有樣を見給へすぐすべきにやといと志づ心なくなむ。おのづから近き御なからひにて聞き及ばせ給ふやうも侍りけむ。初めつかたよりをさをさうけひき聞えざりし御ことを、おとゞの御心むけも心苦しう院にもよろしきやうにおぼしゆるいたる御氣色などの侍りしかば、更にみづからの心おきての及ばぬなりけりと思ひ給へなしてなむ見奉りつるを、かく夢のやうなることを見給ふ

るに思ひ給へあはすれば、みづからの心の程なむ同じうは强うもあらがひ聞えましをと思ひ侍るに猶いとくやしう。それもかやうにしも思ひより侍らざりきかし。御子達はおぼろげの事ならで、惡しくも善くも、かやうに世づき給ふことはえ心にくからぬことなりとふるめき心には思ひ侍りしを、いづかたにもよらず中空にうき御すくせなりければ、何かはかゝる序にけぶりにも紛れ給ひなむは、この御身のため人ぎゝなどは殊に口をしかるまじけれど、さりとてもしかすかやかにえ思ひしづむまじう悲しう見奉り侍るに、いと嬉しう淺からぬ御とぶらひの度々になり侍るめるを、ありがたうもと聞え侍るも、さらばかの御契ありけるにこそはと思ふやうにしも見えざりし御心ばへなれど、今はとてこれかれにつげおき給ひける御ゆゐごんの哀なるになむ。憂きにも嬉しきせは交り侍りけり」とていといたうない給ふけはひなり。大將もとみにえためらひ給はず「怪しういとこよなくおよすげ給へりし人の、かゝるべうてや、この二三年のこなたなむいたうしめりて物心細げに見え給ひしかば、あまり世のことわりを思ひしり物深うなりぬる人のすみすぎてかゝるためし心うつくしからず、かへりてはあざやかなる方のおぼえうすらぐものなりとなむ、常にはかばかしからぬ心に諫め聞えしかば心あさしと思ひ給へりし、萬よりも人にまさりてげにかのおぼし歎くらむ御心のうちのかたじけなけれど。いと心苦しうも侍るかな」など懐しうこまやかに聞え給ひて、やゝ程經てぞ出で給ふ。かの君は五六年の程のこのかみなりしかど猶いと若やかになまめきあいだれて物し給ひし。これはいとすくよかに重々しく雄々しきけはひ

して顔のみぞいと若う清らなること人にすぐれ給へる。若き人々は物悲しさも少し紛れて見出し奉る。御前近き櫻のいとおもしろきを今年ばかりはとうち覺ゆるもいまいましきすぢなりければ「あひ見むことは」と口ずさびて、

「時しあればかはらぬ色に匂ひけりかたえ枯れにし宿の櫻も」。わざとならず誦じなして立ち給ふに、いととう、

「この春は柳のめにぞ玉はぬくさきちる花のゆくへしらねば」と聞え給ふ。いと深きよしにはあらねど今めかしうかどありとはいはれ給ひし更衣なりけり。げにめやすき程の用意なりけりと見給ふ。致仕の大殿にやがて參り給へれば君達あまた物し給ひて「こなたに入らせ給へ」とあれば、おとゞの御いてゐのかたに入り給へり。ためらひて對面し給へり。ふりがとう淸げなる御かたちいたう瘠せ衰へて御髭などもとりつくろひ給はねば、しげりて親のけうよりもげにやつれ給へり。見奉り給ふよりいと忍びがたければあまりにをさまらず亂れ落つる涙こそはしたなけれと思へばせめてぞかくし給ふ。おとゞもとりわきて御中よく物し給ひしをと見給ふに、たゞふりに降り落ちてえとゞめ給はず、つきせぬ御事どもを聞えかはし給ふ。一條の宮にまうでたりつる有樣など聞え給ふ。いとゞしく春雨かと見ゆるまで軒の雫にことならずぬらしそへ給ふ。たゝうがみにかの柳のめにぞとありつるをかい給へるを奉り給へば目も見えずやとおししぼりつゝ見給ふ。うちひそみつゝ見給ふ御さま例は心强うあざやかにほこりかなる御氣色名殘なく人わろし。さるは殊なることなかめれど、こ

の玉はぬくとあるふしのげにとおぼさるゝに心亂れて久しうえためらひ給はず。「君の御母君のかくれ給へりし秋なむ、世に悲しきことのきはには覺え侍りしを、女は限ありて見る人すくなうとあるともかゝることもあらはならねば、かなしびもかくろへてなむありける。はかばかしからねどおほやけも捨て給はずやうやう人となりつかさくらゐにつけてあひ頼む人々おのづから次々に多うなりなどして、驚き口惜しがるもるゐにふれてあるべし。かう深き思ひはその大方の世のおぼえもつかさ位もおもほえず、唯ことなることなかりしみづからのありさまのみこそ堪へがたく戀しかりけれ、何ばかりの事にてかは思ひさますべからむ」と、空を仰ぎてながめ給ふ。夕暮の雲の氣色にび色にかすみて花の散りたる梢どもをも今日ぞ目とゞめ給ふ。この御たゝうがみに、

「木のしたの雫にぬれてさかさまにかすみの衣きたる春かな」。大將の君、

「なき人もおもはざりけむうちすてゝ夕のかすみ君きたれとは」。辨の君、

「うらめしや霞のころも誰着よと春よりさきに花の散りけむ」。御わざなど世の常ならずいかめしうなむありける。大將殿の北の方をばさるものにて、殿は心ことにずきやうなども哀に深き心ばへを加へ給ふ。かの一條の宮にも常にとぶらひ聞え給ふ。卯月ばかりの空はそこはかとなう心ちよげにひとつ色なる四方の梢もをかしう見えわたるを、物思ふ宿は萬の事につけてしづかに心ぼそくくらしかね給ふに例の渡り給へる。庭もやうやう靑み出づる若草見えわたり此處彼處のすなごうすき物のかくれのかたに蓬も所えがほなり。前栽に

心いれてつくろひ給ひしも心に任せてしげりあひひとむら薄もたのもしげにひろごりて蟲の音そはむ秋思ひやらるゝより、いと物哀に露けくてわけ入り給ふ。伊豫簾かけわたしてにびいろの几帳の衣がへしたるすきかげ涼しげに見えて、よきわらはのこまやかににばめるかざみのつま頭つきなどほの見えたり。をかしけれど猶目驚かるゝ色なりかし。今日はすのこに居給へばしとねさし出でたり。いとかるらかなるおましなりとて、例の御息所驚かし聞ゆれど、この比なやましとてよりふし給へりとかく聞え紛はす程、御前のこだちども思ふことなげなる氣色を見給ふもいと物哀なり。柏木と楓との物よりけに若やかなる色して枝さしかはしたるを、「いかなるちぎりにか。末あへるたのもしさよ」などの給ひて忍びやかにさしよりて、

「ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありきと。御簾のとのへだてあるほどこそうらめしけれ」とてなげしにより居給へり。なよびすがたはたいといたうたをやぎけるをやとこれかれつきじろふ。このあへしらへ聞ゆる少將の君といふ人して、

「柏木にはもりの神はまさずとも人ならすべき宿の木末か」。「うちつけなる御言の葉になむ淺う思ひ給へなりぬる」と聞ゆれば、げにとおぼすに少しほゝゑみ給ひぬ。御息所少しゐざり出で給ふけはひすればやをらゐなほり給ひぬ。「うき世の中を思ひ給へしづむ月日のつもるけぢめにや、みだり心ちもあやしうほれぼれしうてすぐし侍るを、かく度々かさねさせ給ふ御とぶらひのいとかたじけなきに、思ひ給へおこしてなむ」とて、げに惱ましげなる

御けはひなり。「思ほしなげくは世のことわりなれど、又いとさのみはいかゞ。萬の事さるべきにこそは侍るめれ。さすがにかぎりある世になむ」となぐさめ聞え給ふ。この宮こそきゝしよりは心のおく見え給へ、哀げにいかに人わらはれなることをとりそへておぼすらむと思ふもたゞならねば、いたう心とゞめて御有樣も問ひ聞え給ひけり。かたちぞいとまほにはえ物し給ふまじけれど、いと見苦しうかたはらいたき程にだにあらずは、などて見るめにより人をもおもひあき又さるまじきに心をも惑はすべきぞ、さまあしや、唯心ばせのみこそいひもてゆかむにはやんごとなかるべけれとおぼす。「今は猶昔におもほしなずらへて疎からずもてなさせ給へ」など、わざとけさうびてはあらねどねんごろに氣色ばみて聞え給ふ。直衣姿いとあざやかにてたけだちものものしうそゞろかにぞ見え給ひける。かのおとゞは萬の事なつかしうなまめき、あてに愛敬づき給へることのならびなきなり。これはをゝしう華やかにあなきよらとふと見えたまふ。「にほひぞ人に似ぬや」とうちさゝめきて、「同じうはかやうにても出で入り給はましかば」など人々いふめり。「いうしやうぐんがつかに草はじめてあをし」とうち口ずさひて、それもいと近き世のことなれどさまざま近う遠う心みだるやうなりし世の中に高きも降れるもをしみあたらしがらぬはなきもうべうべしき方をばさるものにて怪しう情をたてたる人にぞ物し給ひければ、さしもあるまじきおほやけ人女房などの年ふるめきたるどもさへ戀ひかなしび聞ゆる。ましてうへには御遊などの折ごとにまづおぼし出でゝなむしのばせ給ひける。あはれ衛門督のといふことくさ、何事につけて

もいはぬ人なし。六條院にはまして哀とおぼし出づること月日にそへておほかり。この若君を御心ひとつにはかたみと見なし給へど、人の思ひよらぬことなればいとかひなし。秋つかたになればこの君ははひゐざりなど。

橫笛

故權大納言のはかなくうせ給ひにし悲しさを飽かず口をしきものに戀ひ忍び給ふ人おほかり。六條院にも大かたにつけてだに世にめやすき人のなくなるをば惜み給ふ御心に、ましてこれは朝夕したしく參り馴れつゝ人よりも御心留めおぼしたりしかば、いかにぞやおぼし出づることはありながら、あはれはおほく折々につけて忍び給ふ。御はてにも誦經などとりわきせさせ給ふ。よろづもしらずがほにいはけなき御有樣を見給ふにも、さすがにいみじく哀なれば御心のうちにまた心ざし給ひてこがね百兩をなむべちにせさせ給ひける。おとゞは心もしらでぞかしこまり悅び聞えさせ給ふ。大將の君もことゞもおほくしたまふ。とりもちてねんごろに營み給ふ。かの一條の宮をもこの程の御志深くとぶらひ聞え給ふ。はらからの君達よりもまさりたる御心の程をいとかくは思ひ聞えざりきとおとゞうへも喜び聞え給ふ。なき跡にも世の覺えおもくものし給ひける程の見ゆるに、いみじうあたらしうのみおぼしこがるゝことつきせず。山のみかどは二の宮もかく人わらはれなるやうにてながめ給ふな

り。入道の宮もこの世の人めかしきかたはかけはなれ給ひぬれば、さまざまに他かずおぼさるれど、すべてこの世をおぼしなやまじと忍び給ふ。御おこなひの程にも同じ道をこそはつとめ給ふらめなどおぼしやりて、かゝるさまになり給ひて後ははかなき事につけても絶えず聞え給ふ。御寺のかたはら近き林にぬき出でたるたかうな、そのわたりの山にほれるところなどの山里につけてはあはれなれば奉れ給ふとて、御文こまやかなるはしに「春の野山霞もたどたどしけれど、志深く堀り出させて侍るしるしばかりになむ、

世をわかれ入りなむ道はおくるともおなじ所を君もたづねよ。いとかたきわざになむある」と聞え給へるを涙ぐみて見給ふほどに、おとゞの君わたり給へり。例ならず御前近きらいしどもをなぞあやしと御覽ずるに院の御文なりけり。見給へばいと哀なり。けふかあすかの心ちするを對面の心にかなはぬことなど、こまやかに書かせ給へり。このおなじ所の御ともなひを殊にをかしきふしもなきひじりごとばなれどげにさぞおぼすらむかし。われさへおろかなるさまに見え奉りて、いとゞ後めたき御思ひのそふべかめるを、いといとほしとおぼす。御返りつゝましげに書き給ひて御使には青にびの綾一かさね賜ふ。書きかへ給へりけるかみの御几帳のそばよりほの見ゆるをとりて見給へば、御手はいとはかなげにて、

「うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山路に思ひこそいれ」。うしろめたげなる御氣色なるに「このあらぬ所もとめ給へるいとうたて心うし」と聞え給ふ。今はまほにも見え奉り給はず、いとうつくしうらうたげたる御ひたひがみつらつきのをかしさ、唯ちごのや

うに見え給ひていみじうらうたきを見奉り給ふにつけては、などかうはなりにしことぞと罪えぬべくおぼさるれば、御几帳ばかり隔てゝ又いとことよならうけどほくうとうとしうはあらぬ程にもてなし聞えてぞおはしける。若君は乳母の許にねたまへりける、起きてはひ出で給ひて御袖をひきまつはれ奉り給ふさまいとうつくし。白きうすものにからの小紋の紅梅の御ぞの裾、いと長くしどけなげにひきやられて御身はいとあらはにてうしろのかぎりに着なし給へるさまは、例のことなれどいとらうたげにしろくそびやかに柳をけづりてつくりたらむやうなり。かしらは露草して殊更に色どりたらむ心ちして口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに耻しうかをりたるなどは猶いとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやうにきははなれたる淸らはなかりしものをいかでかゝらむ。宮にも似奉らず今より氣高くものものしうさまことに見え給へる氣色などは、我が御かゞみのかげにも似げなからず見なされ給ふ。僅に歩みなどし給ふ程なり、このたかうなのらいしになにともしらず立ちよりていとあわたゞしうとりちらしてくひかなぐりなどしたまへば「あならうがはしや。いとふびんなり。かれとりかくせ。くひものに目とゞめ給ふと物いひさがなき女房もこそいひなせ」とて笑ひ給ふ。かきいだき給ひて「この君のまみのいと氣色あるかな。ちひさきほどのちごを數多見ねばにやあらむ、かばかりの程は唯いはけなきものとのみ見しを、今よりいとけはひことなるこそ煩はしけれ。女宮ものし給ふめるあたりにかゝる人おひ出でゝ心苦しきことたがためにもありなむかし。あはれそのおのおのゝおひゆく末までは見もはてむとすら

むやは、花の盛はありなめど」とうちまもり聞え給ふ。「うたてゆゝしき御ことにも」と人々はきこゆ。御歯のおひ出づるにくひあてむとて、たかうなをつとにぎりもちてしづくもよゝとくひぬらし給へば、「いとねぢけたる色ごのみかな」とて、

「うきふしも忘れずながらくれ竹のこはすてがたきものにぞありける」とゐてはなちてのたまひかくれど うち笑ひて何とも思ひたらず、いとそゝかしうはひおりさわぎ給ふ。月日にそへてこの君のうつくしうゆゝしきまで おひまさり給ふに、誠にこのうきふし皆おぼし忘れぬべし。この人のいでものし給ふべき契にて さる思の外の事もあるにこそはありけめ、遁れがたかなるわざぞかしと少しはおぼしなほさる。みづからの御すくせも猶飽かぬことおほかり。數多つどへ給へる中にもこの宮こそはかたほなる思ひまじらず、人の御有樣も思ふにあかぬ所なくてものし給ふべきを、かく思はざりしさまにて見奉ることゝおぼすにつけてなむ、過ぎにし罪ゆるしがたく猶くちをしかりける。大將の君はかの今はのとぢめにとゞめしひとことを心ひとつに思ひ出でつゝ、いかなりしよぞとはいときこえまほしう、御氣色もゆかしきを、ほの心えて思ひよらるゝこともあれば、なかなかうち出で聞えむもかたはらいたくて、いかならむついでにこの事の委しき有樣もあきらめ又かの人の思ひ入りたりしさまをも聞しめさせむと思ひわたり給ふ。秋の夕の物哀なるに 一條の宮を思ひやり聞え給ひてわたり給へり。うちとけしめやかに御琴どもなどひき給ふ程なるべし。深くもえとりやらで、やがてそのみなみの廂にいれ奉りたまへり。端つかたなりつる人のゐざり入りつ

るけはひどもしるく、きぬのおとなひも大方のにほひかうばしく心にくきほどなり。例の御息所對面し給ひて昔の物語ども聞えかはし給ふ。わが御とのゝ明暮人しげく物さわがしく幼き君達などすだきあわて給ふにならひ給ひていと靜に物あはれなり。うちあれたる心ちすれどあてにけだかくすみなし給ひてぜんざいの花ども蟲の音しげき野邊とみだれたるゆふばえを見わたし給ふ。わごんをひきよせ給へればりちにしらべられていとよく彈きならしたる、ひとがにしみてなつかしうおぼゆ。かやうなるあたりに思ひのまゝなるすき心ある人はしづむることなくて、さま惡しきけはひをもあらはし、さるまじき名をもたつるぞかしなど思ひ續けつゝ掻きならし給ふ。故君の常にひき給ひしことなりけり、をかしき手ひとつなどすこしひき給ひて「哀いと珍らかなるねにかきならし給ひしはや。この御ことにもこもりて侍らむかし。承りあらはしてしがな」との給へば「ことのをたえにし後より昔の御わらはあそびの名殘をだに思ひ出で給はずなむなりにて侍るめる。院の御前にて女宮たちのとりどりの御ことゞも試みきこえ給ひしにもかやうの方はおぼめかしからず物し給ふとなむ定め聞え給ふめりしを、あらぬさまにほれぼれしうなりてながめすぐし給ふめれば、世のうきつまにといふやうになむ見給ふる」と聞え給へば「いとことわりの御おもひなりや。かぎりだにある」と打ちながめて琴はおしやり給へれば「かれなほさらば聲に傳はることもやと聞きわくばかりならさせ給へ。物むつかじう思う給へ沈める耳をだにあきらめ侍らむ」と聞え給ふを「しかつたはるなかのをはことにこそ侍らめ。それをこそ承らむと聞えつれ」とて

御簾のもと近くおしよせたまへど頓にしもうけひき給ふまじきことなればゐひても聞え給はず。月さし出でゝ曇りなき空に羽根うちかはす雁がねもつらをはなれぬ、うらやましく聞き給ふらむかし。風のはだ寒く物哀なるにさそはれて箏の琴をいとほのかに搔き鳴し給へるもおくふかき聲なるにいとゞ心とまりはてゝなかなかにもおもほゆれば、琵琶をとりよせていとなつかしきねに想夫戀をひき給ふ。「思ひおよびがほなるはかたはらいたけれど、これはことゝはせ給ふべくや」とてせちにすのうちをそゝのかし聞え給へどましてつゝましきさしいらへなれば、宮は唯物のみあはれとおぼしつゞけたるに、

「ことに出でゝいはぬをいふにまさるとは人にはぢたる氣色をぞみる」と聞え給ふにたゞすゑつかたをいさゝかひき給ふ。

「ふかき夜の哀ばかりはきゝわけどことよりほかにえやはいひける」。飽かずをかしきほどに、さるおほどかなる物のねがらに深き人の心ゐめてひき傳へたる、おなじゐらべの物といへど哀に心すごきものゝかたはしをかきならして止み給ひぬればうらめしきまでおぼゆれど「すきずきしさをさまざまにひき出でゝも御覧ぜられぬるかな。秋の夜ふかし侍らむも昔のとがめやとはゞかりてなむ罷で侍りぬべかめる。又殊更に心してなむさぶらふべきをこの御琴どものゐらべかへずまたせ給はむや、引き違ふることも侍りぬべき世なれば後めたくこそ」などまほにはあらねど打ちにほはしおきて出で給ふ。「今宵の御すきには人ゆるし聞えつべくなむありける。そこはかとなきいにしへがたりにのみまぎらはさせ給ひて、玉

のをにせむ心ちも志侍らぬ、殘りおほくなむ」とて、御贈物に笛をそへて奉れ給ふ。「これになむ誠にふるきことも傳はるべく聞きおき侍りしを、かゝる蓬生にうづもるゝも哀に見給ふるを、御さきにきほはむ聲なむよそながらもいぶかしく侍る」と聞え給へば「似つかはしからぬ隨身にこそ侍るべけれ」とて見給ふに、これもげに世と共に身にそへてもあそびつゝ、みづからも、更にこれが音のかぎりはえ吹きとほさず、思はむ人にいかで傳へてしがなと折々聞えごち給ひしを思ひ出で給ふに今少しあはれおほくそひて試に吹きならす。はん志きでうのなからばかり吹きさして「昔を忍ぶひとりごとはさても罪ゆるされ侍りけり。これはまばゆくなむ」とて出で給ふに、

「露志げきむぐらの宿にいにしへの秋にかはらぬ蟲のこゑかな」ときこえいだし給へり。

「橫笛の志らべはことにかはらぬを空しくなりしねこそつきせね」。いでがてにやすらひ給ふに夜もいたく更けにけり。殿にかへりたまへれば格子などおろさせて皆寢給ひにけり。この宮に心かけ聞え給ひてかくねんごろがり聞え給ふぞなど人の聞え志らせければ、かやうに夜ふかし給ふもなまにくゝて入り給ふをもきくきく寢たるやうにて物し給ふなるべし。「いもと我といるさの山の」と聲はいとをかしうてひとりごち謠ひて「こはなぞかくさしかためたる。あなうもれや、今夜の月を見ぬ里もありけり」とうめき給ふ。格子あげさせ給うて御簾まきあげなどし給ひて端近く臥し給へり。「かゝる夜の月に心やすく夢みる人はあるものか。少し出で給へ。あな心う」など聞え給へど心やましう打ち思ひて聞き忍び給ふ。君

逹のいはけなくねをびれたるけはひなどてゝかしこにうちして女房もさしこみて臥したる、ひとげもにぎはゝしきにありつる所の有樣思ひあはするにおほくかはりたり。この笛をうち吹き給ひつゝいかに名殘もながめ給ふらむ、御琴どもはしらべ變らず遊び給ふらむかし、御息所も和琴の上手ぞかしなど思ひやりてふし給へり。いかなれば故君の唯大方の心ばへはやんごとなくもてなし聞えながらいと深き氣色なかりけむと、それにつけてもいといぶかしう覺ゆ。見おとりせむことこそいとほしかるべけれ、大方の世につけてもかぎりなく聞くことは必ずさぞあるかしなど思ふに、我が御中のうちけしきばみたる思ひやりもなくてむつびそめたる年月の程をかぞふるに、哀にいとかうおしたちておごりならひ給へる、ことわりに覺え給ひけり。少し寢入り給ひつる夢にかの衛門督唯ありしさまのうちきすがたにてかたはらにゐてこの笛をとりて見る、夢のうちにもなき人のわづらはしうこの聲をたづねてきたると思ふに、

「笛竹にふきよる風のごとならば末の世ながきねにつたへなむ。思ふかたことに侍りき」といふを、問はむと思ふ程に、若君のねおびれてなき給ふ御聲にさめ給ひぬ。この君いたくなき給ひてつだみなどし給へば乳母もおきさわぎ上もおほとなぶら近くとりよせさせ給ひて耳ばさみしてそゝくりつくろひて抱きて居たまへり。いとよく肥えてつぶつぶとをかしげなる胸をあけてちなどくゝめ給ふ。ちごもいとうつくしうおはする君なれば白くをかしげなるに御ちはいとかはらかなるを心をやりてなぐさめ給ふ。男君もよりおはして「い

かなるぞ」などのたまふ。うちまきしちらしなどしてみだりがはしきに夢の哀もまぎれぬべし。「なやましげにこそ見ゆれ。今めかしき御有樣の程にあくがれ給うて夜ふかき御月めでに格子もあげられたれば、例のものゝけの入りたるなめり」など、いと若くをかしきかほしてかこち給へば、うちわらひて「あやしのものゝけの志るべや。まろ格子あげずは道なくてげにえ入りこざらまし。數多の人のおやになり給ふまゝに思ひいたりふかく物をこそのたまひなりにたれ」とてうち見やり給へるまみのいとはづかしげなれば、さすがに物ものたまはで「いで給ひね。見ぐるし」とてあきらかなるほかげをさすがに耻ぢ給へるさまもにくからず。まことにこの君なづみて泣きむつがり明し給ひつ。大將の君も夢おぼし出づるにこの笛のわづらはしうもあるかな、人の心とゞめて思へりしものゝゆくべき方にもあらず、女の御傳へはかひなきをや、いかゞ思ひつらむ、この世にて數に思ひ入れぬこともかのいまはのとぢめに一念のうらめしきにも、もしは哀とも思ふにまつはれてこそは、長き世の闇にも惑ふわざなれ、かゝればこそは何事にも志うはとゞめじと思ふよなれなど、おぼしつゞけておたぎにずきやうせさせ給ふ。又かの心よせの寺にもせさせ給ひて、この笛をばわざと人のさるゆゑ深きものにてひき出で給へりしを、たちまちに佛の道におもむけむも尊きことゝはいひながらあへなかるべしと思ひて六條院に參り給ひぬ。女御の御方におはしますほどなりけり、三の宮三つばかりにて中にうつくしくおはするを、こなたにぞ又とりわきておはしまさせ給ひける。走り出で給ひて「大將こそ宮いだき奉りてあなたへゐて坐せ」とみづか

らかしてまりていとまどけなげにのたまへばうち笑ひて「おはしませ。いかでか御簾の前をば渡り侍らむ、いときやうぎやうならむ」とて抱き奉りて居給へれば「人も見ず。まろが顔はかくさむ。なほなほ」とて御袖してさしかくし給へば、いとうつくしうてゐて奉り給ふ。こなたにも二宮の若君とひとつにまじりて遊び給ふを、うつくしう見ておはしますなりけり。すみの間のほどにおろし奉り給ふを、二宮見つけ給ひて「まろも大將に抱かれむ」との給ふを、三宮「あが大將をや」とてひかへ給へり。院も御覽じて「いとみだりがはしき御有樣どもかな。おほやけの御近きまもりを、わたくしの隨身にりやうぜむと爭ひ給ふよ。三宮こそいとさがなくおはすれ。常にこのかみにきほひ申し給ふ」と諫め聞えあつかひ給ふ。大將も笑ひて「二宮はこよなくこのかみ心に所さり聞え給ふ御心淸くなむおはしますめる。御年のほどよりはおそろしきまで見えさせ給ふ」など聞え給ふ。うちゑみて、いづれをもいとうつくしと思ひ聞えさせ給へり。「見苦しくかるがるしきくぎやうの御座なり。あなたにこそ」とて渡り給はむとするに、宮たちまつはれて更にはなれ給はず。宮の若君は宮達の御つらにはあるまじきぞかしと御心のうちにおぼせどなかなかその御心ばへを母宮の御心の鬼にや思ひよせ給ふらむと、これも心のくせにいとほしう思さるれば、いとらうたきものに思ひかしづき聞え給ふ。大將はこの君をまだえよく見ぬかなとおぼして、御簾の隙よりさし出で給へるに、花の枝のかれて落ちたるをとりて見せ奉りてまねき給へばはしりおはしたり。ふたあゐのなほしのかぎりを着ていみじう白うひかりうつくしきこと御子達よりもこまかにをか

しげにてつぶつぶときよらなり。なまめとまる心もそひて見ればにや、まなこゐなどこれは今すこし强うかどあるさままさりたれど、まじりのとぢめをかしうかをれる氣色などいとよく覺え給へり。口つきのことさらに華やかなるさましてうちゑみたるなど、わがめのうちつけなるにやあらむ、おとゞは必ず思しますらむと、いよいよ御氣色ゆかし。宮たちは思ひなしこそけだかけれ、世の常のうつくしきちごどもと見え給ふに、この君はいとあてなるものからさまことにをかしげなるを見くらべ奉りつゝ、いで哀若しうたがふゆゑもまことならば、父おとゞのさばかり世にいみじう思ひほれ給ひて、こと名のり出でくる人だになきとかたみに見るばかりの名殘をだにとゞめよかしとなきこがれ給ふに、聞かせ奉らざらむ罪えがましさなど思ふも、いでいかてさはあるべきことぞと猶心えず思ひよるかたなし。心ばへさへなつかしうあはれにてむつれ遊び給へばいとらうたくおぼゆ。對へわたり給ひぬればのどやかに御物語など聞えておはする程に日も暮れかゝりぬ。よべかの一條の宮に詣でたりしにおはせし有樣など聞え出で給ひつるを、ほゝゑみてきゝおはす。哀なる昔のことかゝりたるふしぶしはあへしらへなど志給ふに「かの想夫戀の心ばへはげにいにしへのためしにもひき出づべかりける折ながら、女はなほ人の心うつるばかりのゆゑよしをもおぼろげにては漏らすまじうこそありけれと思ひ志らるゝ事どもこそ多かれ。過ぎにし方の志を忘れずかく長き用意を人に志られぬとならば、おなじうは心ぎよくてとかくかゝづらひゆかしげなきみだれなからむや。誰がためも心にくゝめやすかるべきことならむとなむ思ふ」

とのたまへば、さかし、人のうへの御をしへばかり心づよげにてかゝるすきはいでやと見奉り給ふ。「何のみだれか侍らむ。猶常ならぬ世の哀をかけそめ侍りにしあたりに心みじかくはべらむこそなかなか世のつねの嫌疑ありがほに侍らめとてこそ。想夫戀は心とさしすぎてこといで給はむや にくきことに侍らまし。物の序にほのかなりしはをりからのよしづきてをかしうなむ侍りし。何事も人により事に隨ふわざにこそ侍るべかめれ。よはひなどもやうやういたう若び給ふべき程にもものし給はず、またあざれがましくすきずきしき氣色などに物なれなども志侍らぬに、うちとけ給ふにや、大かたなつかしうめやすき人の御有樣になむ物し給ひける」など聞え給ふに、いとよきついでつくり出でゝ少し近く參りより給ひてかの夢がたりを聞え給へば、頓に物ものたまはで聞しめしておぼしあはすることどもあり。「その笛はこゝに見るべきゆゑあるものなり。かれは陽成院の御笛なり。それを故式部卿宮のいみじきものに志給ひけるをかの衞門督は童よりいとことなるねを吹き出でしにかんじてかの宮の萩の宴せられける日贈物にとらせ給へるなり。女の心は深くもたどり志らず志か物したるなゝり」などのたまひて、末の世のつたへは又いづかたにとかは思ひまがへむ、さやうに思ひなりけむかしなどおぼして、この君もいといたり深き人なれば思ひよることあらむかしとおぼす。その御氣色を見るにいとゞはゞかりて頓にも打ち出できこえ給はねど、せめて聞かせ奉らむの心あれば、今しもことのついでに思ひ出でたるやうにおぼめかしうもてなして「今はとせし程にとぶらひにまかりて侍りしに、なからむ後のことゞもいひ

置き侍りし中にしかしかなむ深くかしこまり申すよしを返す返すものし侍りしかば、いかなることにか侍りけむ、今にその故をなむえ思ひ給へより侍らねばおぼつかなく侍る」といとたどたどしげに聞え給ふに、さればよとおぼせど何かはそのほどのこと顯はしのたまふべきならねば、しばしおぼめかしくて「しか人のうらみとまるばかりの氣色は何のついでにかもり出でけむと、みづからもえ思ひ出でずなむ。さて今しづかにかの夢は思ひ合せてなむ聞ゆべき。よるかたらずとか、女房のつたへにいふことなり」とのたまひて、をさをさ御いらへもなければ、うちいできこえてけるを、いかにおぼすにかとつゝましくおぼしけるとぞ、

鈴蟲

夏頃はちすの花の盛に入道の姫宮の御持佛どもあらはしいで給へる供養せさせ給ふ。このたびはおとゞの君の御志にて御念誦堂の具どもこまかにとゝのへさせ給へるをやがてしつらはせ給ふ。はたのさまなどなつかしう心ことなる唐の錦をえらびぬはせ給へり。紫の上ぞいそぎせさせ給ひける。花づくゑのおほひなどをかしきめぞめもなつかしうきよらなる匂ひそめつけられたる心ばへめなれぬさまなり。よるの御帳のかたびらをよおもてながらあげて後の方に法華のまだらかけ奉りて、しろがねの花がめに高くことごとしき花の色をととのへて奉れり。みやうがうには唐の百歩のかうをたき給へり。あみだ佛、脇士の菩薩、おの

おのびやくだんして造り奉りたる、こまかに美くしげなり。閼伽の具は例のきはやかにちひさくて、青き白き紫のはちすをとゝのへて、荷葉の方を合せたる名香、みちをかくしほろゝげてたきにほはしたる ひとつかをりに匂ひあひていとなつかし。經は六道のすゑやうのために六部かゝせ給ひて、みづからの御持經は院ぞ御手づからかゝせ給ひける。これをだにこの世の結縁にてかたみに導きかはし給ふべき心を願文に作らせ給へり。さては阿彌陀經唐の紙はもろくて朝夕の御てならしにもいかゞとて、かんやの人をめして殊に仰事給ひて、心ことにきよらにすかせ給へるに、この春の頃ほひより御心とゞめて急ぎかゝせ給へるかひありてはしを見給ふ人々目もかゞやきまどひ給ふ。けかけたるかねのすぢよりも墨づきの上に輝くさまなどもいとなむめづらかなりける。軸、表紙、箱のさまなどいへばさらなりかし。これは殊にぢんのけそくの机にすゑて、佛の御おなじ帳臺の上にかざられ給へり。堂かざりはてゝ講師まうのぼりぎやうだうの人々參りつどひ給へば、院もあなたに出で給ふとて宮のおはします西の廂にのぞき給へれば、せばき心ちするかりのしつらひに所せくあつげなるまで、ことごとしくさうぞきたる女房五六十人ばかりつどひたり。北の廂の簀子までわらはべなどはさまよふ。火取どもあまたしてけぶたきまであふぎちらせば、さしより給ひて、「そらにたくはいづくの煙ぞと思ひわかれぬこそよけれ。富士の峯よりもげにくゆりみち出でたるはほいなきわざなり。かうぜちのをりは大方のなりをしづめて のどかに物の心もきゝわくべきことなれば、はゞかりなききぬのおとなひ人のけはひ しづめてなむよかる

べき」など、例の物ふかゝらぬ若人どもの用意をしへ給ふ。宮は人げにおされ給ひていとちひさくをかしげにてひれふし給へり。「若君らうがはしからむ。抱きかくし奉れ」などのたまふ。北のみさうじも取り放ちて御簾かけたり。そなたに人々はいれ給ふ。しづめて宮にも物の心しり給ふべきしたかたを聞えしらせ給ふ。いと哀に見ゆ。おましを讓り給へる佛の御しつらひ見やり給ふもさまざまに、「かゝる方の御營みをも諸共に急がむものとは思ひよらざりしことなり。よし後の世にだにかの花のなかのやどりに隔てなくとおもほせ」とて、うちなき給ひぬ。

「はちす葉をおなじうてなと契りおきて露のわかるゝけふぞ悲しき」と御硯にさしぬらして香染めなる御扇に書きつけ給へり。宮、

「へだてなく蓮の宿をちぎりても君がこゝろやすまじとすらむ」と書き給へれば、「いふかひなくもおもほしくたすかな」と打ち笑ひながら、猶哀と物をおもほしたる御氣色なり。例のみこたちなどもいとあまた參り給へり。御かたがたよりわれもわれもといとなみ出で給へる御ほうもちのありさま心ことに所せきまで見ゆ。七僧の法服などすべて大方のことどもは皆紫の上せさせ給へり。綾のよそひにて袈裟の縫目まで見しる人は世になべてならずとめでけりとや。むつかしうこまかなる事どもかな。かうじのいとたふとく事の心を申してこの世にすぐれ給へる盛を厭ひはなれ給ひて、長きよゝにたゆまじき御契を法華經に結び給ふ。尊く深きさまをあらはして只今の世に才もすぐれゆたけきさきらをいとゞ心し

ていひつゞけたる、いとたふとければ皆人々しほたれ給ふ。これはたゞ忍びて御念誦堂のはじめとおぼしたることとなれど、内にも山のみかども聞しめして皆御使どもあり。みず經のふせなどいと所せきまで にはかになむことひろごりける。院にまうけさせ給へりける事どもそぐとおぼしゝかど、世の常ならざりけるをまいて今めかしき事どもの加はりたれば、夕の寺におき所なげなるまで所せき いきほひになりてなむ僧どもはかへりける。今しも心苦しき御心そひてはかりもなくかしづき聞え給ふ。院のみかどは この御そうぶんの宮に住みはなれ給ひなむも、つひのことにてめやすかりぬべく聞え給へど「よそよそにては覺束なかるべし。明暮見奉り聞えうけ給はらむことをこたらむにほいたがひぬべし。げにありはてぬ世いくばくあるまじけれど猶生ける限 の志をだに失ひはてじ」と聞え給ひつゝかの宮をもいとこまかに淸らにつくらせ給ふ。みふの物ども、國々のみさう、み牧などより奉るものども、はかばかしきさまのは皆かの三條の宮の御藏に納めさせ給ふ。又もたてそへさせ給ひて樣々の御寶ものども院の御そうぶんに數もなく賜はり給へるなどあなたざまの物は皆かの宮に運びわたしこまかにいかめしうおおかせ給ふ。明暮の御かしづきそこらの女房のことゞもかみしものはぐゝみは おしなべて我が御あつかひにてなむ 急ぎ仕うまつらせ給ひける。秋頃西の渡殿の前の中の塀の東のきはを おしなべて野につくらせ給へり。あかの棚などしてその方におなさせ給へる御おつらひなどいとなまめきたり。御弟子におたひ聞えたる尼ども御乳母ふる人 どもはさるものにて、若きさかりのも心さだまりさる方にて世を盡しつ

べきかぎりはえりてなむなさせ給ひける。さるきほひにはわれもわれもときしろひけれどおとゞの君聞しめして「あるまじきことなり、心ならぬ人すこしもまじりぬればかたへの人苦しうあはあはしき聞え出でくるわざなり」と諫め給ひて十餘人ばかりの程ぞかたちことにてはさぶらふ。この野に蟲どもはなたせ給ひて風すこし涼しくなり行く夕暮に渡り給ひて、蟲の音きゝ給ふやうにて猶思ひ離れぬさまを聞えなやまし給へば、例の御心はあるまじきにこそあなれと偏にむつかしきことに思ひ聞え給へり。人目にこそ變ることなくもてなし給ひしが、うちにはうきをしり給ふ氣色しるくこよなう變りにし御心をいかで見え奉らじの御心にておほうは思ひなり給ひにし御世のそむきなれば今はもてはなれて心やすきに猶かやうになど聞え給ふぞ、苦しうて人ばなれたらむ御住まひにもがなとおぼしなれど、およすけてえさもしひ申し給はず。十五夜の月のまだ影かくしたる夕暮に佛のお前に宮おはして端近うながめ給ひつゝ念誦し給ふ。若き尼君たち二三人花奉るとてならすあかつきの音、水のけはひなど聞ゆる、さまかはりたるいとなみにそゝぎあへる、いと哀なるに例のわたり給ひて「蟲の音いとしげう亂るゝ夕かな」とて、われも忍びてうち誦じ給ふ。阿彌陀のだいずいとたふとくほのぼの聞ゆ。げに聲々聞えたる中に鈴蟲のふり出でたるほどはなやかにをかし。「秋の蟲の聲いづれとなき中に松蟲のなむすぐれたるとて、中宮の遙けき野邊を分けていとわざと尋ねとりつゝはなたせ給へる、しるく鳴きつゝふるこそすくなかなれ。名にはたがひて命の程はかなき蟲にぞあるべき。心にまかせて人聞かぬ奥山遙けき野の松

原に聲をしまぬもいとへだて心ある蟲になむありける。鈴蟲は心やすく今めいたるこそらうたけれ」などのたまへば、宮、

「大かたの秋をばうしと志りにしをふり捨てがたきすゞむしの聲」と忍びやかにのたまふ、いとなまめいてあてにおほどかなり。「いかにとかや。いで思の外なる御事にこそ」とて、

「こゝろもて草のやどりをいとへどもなほすゞ蟲の聲ぞふりせぬ」など聞え給ひてきんの御琴召して珍しく彈き給ふ。宮御すゞひきをこたり給ひて御琴に猶心いれ給へり。月さし出でゝ、いと華やかなる程も哀なるに空をうちながめて世の中さまざまにつけて、はかなく移り變る有樣もおぼしつゞけられて、例よりも哀なる音にかきならし給ふ。今夜は例の御遊にやあらむとおしはかりて兵部卿の宮渡り給へり。大將の君殿上人のさるべきなど具して參りたまへれば、こなたにおはしますと御琴の音を尋ねてやがて參り給ふ。「いとつれづれにてわざと遊びとはなくとも、久しく絶えにたる珍しき物のねなど聞かまほしかりつるひとりごとをいとよう尋ね給ひける」とて宮もこなたにおましよそひて入れ奉り給ふ。うちのお前に今夜は月の宴あるべかりつるをとまりてさうざうしかりつるに、この院に人々參り給ふと聞き傳へて、これかれ上達部なども參り給へり。蟲の音のさだめを志給ひて御琴どもの聲々かきあはせておもしろき程に、「月見る宵の いつとても物哀ならぬをりはなき中に、今宵のあらたなる月の色にはげに猶我が世のほかまでこそよろづ思ひながさるれ。故權大納言何の折々にもなきにつけていとゞ忍ばるゝことおほく、おほやけわたくし物の折ふし

のにほひうせたる心ちこそすれ。花鳥の色にも音にも思ひわきまへ いふかひあるかたのいとうるさかりしものを」などのまたひ出でゝ みづからもかき合せ給ふ御琴の音にも袖ぬらし給ひつ。御簾の內にも耳とゞめてや聞き給ふらむと片つ方の御心にはおぼしながら、かゝる御遊の程にはまづ戀しう內などにもおぼし出でける。「今宵は鈴蟲のえんにて明してむ」とおぼしのたまふ。御かはらけふたわたりばかり參る程に冷泉院より御せうそこあり。御前の御あそび俄にとまりぬるを口をしがりて、左大辨、式部大輔、又人々ひきゐて さるべきかぎり參りたれば、大將などは六條院にさぶらひ給ふと聞しめしてなりけり。

「雲の上をかけはなれたるすみかにも物わすれせぬ秋の夜の月。おなじくば」と聞え給へれば「なにばかり所せき身の程にもあらずながら今はのどやかにおはしますに、參りなるゝこともをさをさなきを、ほいなきことにおぼしあまりて驚かさせ給へるかたじけなし」とて俄なるやうなれど參り給はむとす。

「月かげはおなじ雲居に見えながらわが宿からの秋ぞかはれる」。異なることなかめれど唯昔今の御有樣のおぼし續けられけるまゝなめり。御使にさかづき賜ひて祿いと二なし。人々の御車次第のまゝにひきなほし、御前の人々立ちこみて しづかなりつる御あそびまぎれて出で給ひぬ。院の御車にみこ奉り、大將、左衛門督、藤宰相などおはしけるかぎり皆參り給ふ。直衣にてかろゝかなる御よそひどもなれば下襲ねばかり奉り加へて、月やゝさしあがり更けぬる空おもしろきに、若き人々笛などわざとなく吹かせ給ひなどして 忍びたる御まゐ

りのさまなり。麗はしかるべき折ふしは所せくよだけきぎじきを盡して　かたみに御覧ぜられ給ふ。又いにしへのたゞ人ざまにおぼしかへりて、今宵はかるがるしきやうにふとかく參り給へれば、いたう驚き待ちよろこび聞え給ふ。ねびとゝのひ給へる御かたちいよいよことものならず、いみじき御盛のよを御心とおぼし捨てゝしづかなる御有樣に哀すくなからず。その夜の歌どもからのもやまとのも心ばへ深うおもしろくのみなむ。例の事たらぬかたはしはまねぶもかたはらいたくてなむ。明方にふみなどからうじて狹く人々まかで給ふ。六條院は中宮の御方に渡り給ひて御物語など聞え給ふ。「今はかう靜なる御住まひにしばしばも參りぬべく、何とはなけれど過ぐる齡にそへて、忘れぬ昔の御物語などうけたまはり聞えまほしう思ひ給へるに、何にもつかぬ身の有樣にてさすがにうひうひしく所せくも侍りてなむ。われより後の人々にかたがたにつけて後れ行く心ちし侍るもいと常なき世の心ぼそさののどめ難うおぼえ侍れば、世ばなれたる住まひにもやとやうやう思ひ立ちぬるを、のこりの人々の物はかなからむたゞよはし給ふなと、さきざきも聞えつけし心違へず覺しとゞめて物せさせ給へ」などまめやかなるさまに聞えさせ給ふ。例のいとわかうおほどかなる御けはひにて「九重のへだて深う侍りし年比よりも　おぼつかなさのまさるやうに思ひ給へらるゝ有樣を、いと思の外にむつかしうて、皆人のそむき行く世を厭はしう思ひなることも侍りながら、その心のうちを聞えさせうけ給はらねば何事もまづたのもしきかげには聞えさせならひていぶせく侍る」と聞え給ふ。「げにおほやけざまにては限ある折節の御里居も　いとよ

う待ちつけ聞えさせしを、今は何事につけてかは御心に任せさせ給ふ御うつろひも侍らむ。定めなき世といひながらもさしていとはしきこともなき人は、さはやかに背き離るゝもありがたう心やすかるべき程につけてだに、おのづから思ひかゝづらふほだしのみ侍るを、などかその人まねにきほふ御道心は、かへりてひがひがしうおしはかり聞えさする人もこそはべれ。かけてもいとあるまじき御事になむ」と聞え給ふを「深うもくみはかり給はぬなめりかし」とつらう思ひきこえ給ふ。故御息所の御身の苦しうなり給ふらむありさまいかなる煙の中に惑ひ給ふらむ、なきかげにても人にうとまれ奉り給ふ。御名のりなどの出できたりけることとかの院にはいみじう隠し給ひけるを、おのづから人の口さがなくて傳へきこしめしける後いと悲しういみじくて、なべての世のいとはしくおぼしなりて、かりにてもかののたまひけむ有樣の委しう聞かまほしきを、まほにはえ打ち出で聞え給はで「唯なき人の御有樣の罪輕からぬさまにほの聞くことの侍りしを、さる志るしあらはならでもおしはかりつべきことに侍りけれど、後れし程の哀ばかりを忘れぬことにて、物のあなた思ひ給へやらざりけるが物はかなさを、いかでよういひ聞かせむ人のすゝめをも聞き侍りてみづからだにかのほのほをもさまし侍りにしがなとやうやう積るになむ思ひ志らるゝこともありける」などかすめつゝぞのたまふ。げにさもおぼしぬべきことゝ哀に見奉り給ひて「そのほのほなむ、誰も遁るまじきことゝ志りながら朝露のかゝれるほどは思ひ捨てられ侍らぬになむ、目蓮が佛に近きひじりの身にてたちまちに救ひけむためしにもえつかせ給はざらむものから

玉のかんざし捨てさせ給はむも、この世にはうらみ残るやうなるわざなり。やうやうさる御志をまめ給ひてかの御烟はるゝべきことをせさせ給へ。まか思ひ給ふること侍りながら物さわがしきやうに靜なるほいもなきやうなるさまに明けくらし侍りつゝみづからのつとめにそへて今靜にと思ひ給ふるもげにこそ心をさなきことなれ」など、世の中なべてはかなく厭ひ捨てまほしきことを聞えかはし給へど、猶やつしにくき御身の有樣どもなり。よべはうち忍びてかやすかりし御ありき今朝はあらはれ給ひて上達部なども參り給へるかぎりは皆御おくり仕う奉り給ふ。春宮の女御の御有樣のならびなく いつきたて給へるかひがひしさも大將のまたいと人に異なる御さまをも、いづれとなくめやすしとおぼすに、猶この冷泉院を思ひ聞え給ふ御志は 勝れて深く哀にぞおぼえ給ふ。院も常にいぶかしう思ひ聞え給ひしに、御對面のまれにいぶせうのみおぼされけるにいそがされ給ひて、かく心安きさまにとおぼしなりにけるになむ。中宮ぞなかなか罷で給ふ事もいとかたうなりて、たゞ人の中のやうにならびおはしますに、今めかしうなかなか昔よりも華やかに御あそびをも志給ふ。何事も御心やれる有樣ながら唯かの御息所の御事をおぼしやりつゝ 行ひの御心すゝみにたるを、人のゆるし聞え給ふまじきことなれば功德のことをたてゝおぼしいとなみいとゞ心ふかう世の中をおぼしとれるさまになりまさり給ふ。六條院にももろ心に急ぎ給ひて 御八講など行はせ給ふとぞ。

夕霧

まめ人の名をとりてさかしがり給ふ大將、この一條の宮の御有樣をなほあらまほしと心にとゞめて、大方の人めには昔を忘れぬ用意に見せつゝ、いとねんごろにとぶらひ聞え給ふ。志たの心にはかくてはやむまじくなむ月月にそへて思ひまさり給ひける。御息所も哀にありがたき御心ばへにもあるかなと、今はいよいよ物寂しき御つれづれを絶えずおとづれ給ふに、慰むることゞもおほかり。始よりけさうびても聞え給はざりしにひきかへしけさうばみなまめかむもまばゆし、唯深き志を見え奉りてうちとけ給ふをりもあらじやはと思ひつゝさるべきことにつけても宮の御けはひありさまを見給ふ。みづからなど聞え給ふことは更になし。いかならむついでに思ふことをもまほに聞えしらせて人の御けはひを見むとおぼしわたるに、御息所ものゝけにいたう煩ひ給ひて、小野といふわたりに山里もたまへるにわたり給へり。はやうより御いのりの師にてものゝけなどはらひ捨てけるりしの山ごもりして里に出でじとちかひたるを、麓近くてさうじおろし給ふ故なりけり。御車よりはじめて御前など大將殿よりぞ奉れ給へる。なかなかまことの昔の近きゆかりの君達は、ことわざしげきおのがじゝのいとなみに紛れつゝ、えしも思ひいで聞え給はず。辨の君はた思ふ心なきにしもあらでけしきばみけるに、殊の外なる御もてなしには　ゐてはまうでとぶらひ給はずな

りにたり。この君はいとかしこうさりげなく聞えなれ給ひにためり。ずほふなどせさせたまふと聞きて僧の布施淨衣などやうの こまかなるものをさへ奉れ給ふ。なやみ給へばえ聞え給はず。「なべての宣旨書はものしと覺しぬべくことごとしき御さまなり」と人々聞ゆれば、宮ぞ御かへり聞え給ふ。御手はいとをかしげにて唯ひとくだりなど おほどかなるかきざまことばもなつかしき所かきそへ給へるを、いよいよ見まほしう目とまりて ゑげう聞えかよひ給ふ。猶遂にあるやうあるべき御なからひなめりと北の方けしきとり給へれば、わづらはしくてまうでまほしうおぼせど、頓にえいで立ち給はず。八月中の十日ばかりなれば野邊の氣色もをかしき比なるに、山里の有樣のいとゆかしければ「なにがしりりしの珍しうおりたなるに、切に語らふべきことあり。御息所のわづらひ給ふなるもとぶらひがてらまうでむ」と大方にぞ聞えごちていで給ふ。ご前ことごとしからで ゑたしき限五六人ばかり狩衣にてさぶらふ。殊に深き道ならねど松が崎のおやまのいろなども、さるいはほならねど秋の氣色づきて、都に二なくとつくしたる家ゐには猶哀もけうもまさりてぞ見ゆるや。はかなき小柴垣もゆゑあるさまにゑなして、假初なれどあてはかに住まひなし給へり。寢殿と覺しきひんがしの放出に修法のだんぬりて北の廂におはすれば西おもてに宮はおはします。御もの丶けむつかしとてとゞめ奉り給ひけれど、いかでか離れ奉らむと慕ひわたり給へるを、人にうつりちるを、おぢて少しのへだてばかりにあなたには渡し奉り給はず、まらうどの居給ふべきところのなければ、宮の御方の すの前に入れ奉りて 上らうだつ人々 御せうそこ聞えつたふ。

「いとかたじけなくかうまでのたまはせ渡らせたまへるをなむもしかひなくなりはて侍りなば、このかしこまりをだに聞えさせでやと思ひ給ふるになむ、今しばしかけとゞめまほしき心つき侍りぬる」と聞えいだし給へり。「渡らせ給ひし御送にもと思ひ給ひしを六條院にうけ給はりさしたる事侍りし程にてなむ、日比もそこはかとなく紛るゝこと侍りて思ひ給ふる心の程よりはこよなくおろかに御覧ぜらるゝことの苦しう侍る」など聞え給ふ。宮は奥の方にいと忍びておはしませどことごとしからぬ旅の御しつらひ淺きやうなるおましの程にて人の御けはひおのづからしるし。いとやはらかに打ちみじろきなどし給ふ。御ぞのおとなひさばかりなゝりと聞き居給へり。心も空におぼえてあなたの御せうそこ通ふほど少し遠うへだゝるひまに例の少將の君などさぶらふ人々に物語などし給ひて、「かう參りきなれ承はることの年頃といふばかりになりにけるを、こよなう物遠うもてなさせ給へるうらめしさなむ、かゝるみすの前にて人づての御せうそこなどのほのかに聞え傳ふることよ、まだこそならはね、いかにふるめかしきさまに人々ほゝゑみ給ふらむとはしたなくなむ。齡積らず輕らかなりしほどにほのすきたる方におもなれなましかばかうひうひしうも覺えざらまし。更にかばかりすくずくしうをれて年ふる人はたぐひあらじかし」との給ふ。「げにいとあなづりにくげなるさましゝ給へれば、さればよと、なかなかなる御いらへ聞え出でむは恥しう」などつきしろひて「かゝる御うれへ聞しめししらぬやうなり」と宮に聞ゆれば、「みづから聞え給はざめるかたはら痛さに代り侍るべきを、いと恐しきまで物し給ふめりしを見あ

つかひ侍りし程に、いとゞあるかなきかの心ちになりてなむ得聞えぬ」とあれば、「こは宮の御せうそこか」と居なほりて「心苦しき御なやみを、身にかふばかり歎き聞えさせ侍るも何のゆゑにか。かたじけなけれど物をおぼしゐる御有樣などはればれしき方にも見奉りなほし給ふまでは、たひらかに過ぐし給はむこそ誰が御ためにもたのもしきことには侍らめと推し量り聞えさするによりなむ。唯あなたざまにおぼしゆづりてつもり侍りぬる志をもゐろしめされぬは、ほいなき心ちなむ」と聞え給ふ。「げに」と人々も聞ゆ。日入りがたになりゆくに、空の氣色も哀にきりわたりて山の蔭はをぐらき心ちするに、ひぐらし鳴きゐきりてかきほにおふるなでしこの打ち靡きける色もをかしう見ゆ。お前の前栽の花どもは心に任せて亂れあひたるに水の音いと涼しげにて山おろし心すごく松の響木深く聞えわたされなどして、不斷の經よむ時かはりて鐘打ちならすにたつ聲もゐかはるもひとつにあひていとたふとく聞ゆ。所から萬のこと心ぼそう見なさるゝも哀に物思ひつゞけらる。出で給はむ心ちもなし。りしも加持する音して陀羅尼いとたふとくよむなり。いと苦しげにゐ給ふなりとて人々もそなたに集ひて大方もかゝるたび所に數多參らざりけるにいとゞ人ずくなにて宮はながめ給へり。ゐめやかにて思ふ事も打ち出でつべき折かなと思ひ居給へるに、霧のたゞこの軒のもとまで立ち渡れば「まかでむ方も見えずなりゆくはいかゞすべき」とて、

「山里のあはれをそふる夕霧にたちいでむ空もなきこゝちして」ときこえ給へば、

「山がつのまがきをこめて立つ霧もこゝろそらなる人はとゞめず」。ほのかに聞ゆる御け

はひに慰めつゝ誠に踏るさ忘れはてぬ。「中ぞらなるわざかな。家路は見えず、霧の籬は立ちとまるべうもあらずやらはせ給ふ。つきなき人はかゝることこそ」などやすらひて忍びあまりぬるすぢもほのめかし聞え給ふに、年比もむげに見知り給はぬにはあらねど知らぬがほにのみもてなし給へるを、かく言に出でゝ恨み聞え給ふをわづらはしうていとゞ御いらへもなければ、いたう歎きつゝ心のうちに又かゝる折ありなむやと思ひめぐらし給ふ。情なうあはつけきものには思はれ奉るともいかゞはせむ、思ひわたるさまをだにしらせ奉らむと思ひて人をめせば、御つかさのぞうよりかうぶりえたるむつましき人ぞ参れる。忍びやかにめしよせて「このりしに必ずいふべきことのあるを、護身などにいとまなげなめるを只今はうちやすむらむ。今夜このわたりにとまりてそやのしはてむ程にかの居たる方に物せむ。これかれ侍はせよ。隨身などのをのこどもは栗栖野の庄近からむま草などとりかはせてこゝに人あまた聲なせそ。かうやうの旅寢はかるがるしきやうに人もとりなすべし」とのたまふ。あるやうあるべしと心得てうけたまはりて立ちぬ。「さて道いとたどたどしければこのわたりに宿かり侍る。おなじうはこのみすのもとに許されあらなむ。阿闍梨のおるゝ程までなむ」とつれなくのたまふ。例はかやうに長居してあざればみたる氣色も見え給はぬを、うたてもあるかなと宮は思せど、ことさらめきてかるらかにあなたにはひ渡り給はむもさまあしき心地して唯音せでおはしますに、とかく聞えよりて御せうそこ聞えつたへにゐざりいる人のかげにつきて入り給ひぬ。まだ夕暮の霧にとぢられて内は暗くなりにたる程なり。

あさましうて見かへりたるに宮はいとむくつけうなり給ひて此の御さうじのとにゐざりいてさせ給ふを いとようたどりてひきとゞめ奉りつ。御身は入りはて給へれど御ぞの裾の殘りてさうじはあなたよりさすべき方なかりければひきたてさして水のやうにわなゝきおはす。人々もあされていかにすべきこととも思ひえず。こなたよりこそさすがねなどもあれ、いとわりなくて荒々しくはえひきかなぐるべくはたものし給はねば、「いとあさましう思ひ給へよらざりける御心の程になむ」と泣きぬばかりに聞ゆれど「かばかりにてさぶらはむが人よりけにうとましうめざましうおぼさるべきにやは。數ならずとも御耳なれぬる年月も重りぬらむ」とていとのどやかにさまよくもてしづめて思ふ事を聞えしらせ給ふ。聞き入れ給ふべくもあらず。くやしうかくまでとおぼす事のみやるかたなければのたまはむことはたまして覺え給はず。「いと心うくわかわかしき御さまかな。人しれぬ心にあまりぬるすきずきしきつみばかりこそ侍らめ、これよりなれすぎたることは更に御心ゆるされでは御覧ぜられじ。いかばかりちゞにくだけ侍る思ひに堪へぬぞや。さりともおのづから御覧じ知るふしも侍らむものを、しひておぼめかしうけうとうもてなさせ給ふめれば、聞えさせむ方なさにいかゞはせむ。心ちなくにくしとおぼさるともかうながら朽ちぬべきうれへを、さだかに聞えしらせ侍らむとばかりなり。いひしらぬ御氣色のつらさものからいとかたじけなければ」とてあながちに情深う用意し給へり。さうじをおさへ給へるはいと物はかなきかためなれどひきもあけず。「かばかりのけぢめをとしひて覺さるらむこそ哀なれ」とうち笑ひて

うたて心のま丶なるさまにもあらず。人の御有樣のなつかしうあてになまめい給へることさはいへどことに見ゆ。世と共にものを思ひ給ふけにや、やせやせにあえかなる心ちしてうちとけ給へるま丶の御袖のあたりもなよびかにけぢかうしみたるにほひなどとりあつめてらうたげにやはらかなる心ちし給へり。風いと心ぼそう更け行く夜の氣色蟲の音も鹿のなくおとも瀧の音もひとつに亂れて艶なる程なれば、唯ありのあはつけ人だにねざめしぬべき空の氣色を格子もさながら入りがたの月の山の端近きほどとめがたう物哀なり。「猶かうおぼししらぬ御有樣こそかへりては淺う御心の程しらるれ。かう世づかぬまでしれじれしき後やすきなどもたぐひあらじと覺え侍るを、何事にもかやすきほどの人こそか丶るをばしれものなど打ち笑ひてつれなき心つかふなれ。あまりこよなくおぼしおとしたるに、えなむしづめはつまじき心ちし侍る。世の中をむげにおぼししらぬにしもあらじを」と萬に聞えせめられ給ひていかゞいふべきと侘しうおぼしめぐらす。世をしりたる方の心安きやうに折々ほのめかすもめざましう、げにたぐひなき身のうさなりやとおぼしつゞけ給ふに、しぬべくおぼえ給うて「うきみづからの罪を思ひしるとても、いとかうあさましきを、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ」といとほのかに哀げにない給ひて、

「われのみやうき世をしれるためしにてぬれそふ袖の名をくたすべき」と、のたまふともなきを我が心につゞけて忍びやかに打ちずじ給へるもかたはらいたく、いかにいひつることぞとおぼさる丶に「げにあしう聞えつかし」などほ丶ゑみ給へる氣色にて、

「大かたはわがぬれぎぬをきせずともくちにし袖の名やはかくるゝ。ひたぶるにおぼしなりねかし」とて月あかき方にいざなひ聞ゆるもあさましとおぼす。心づようもてなし給へどはかなうひきよせ奉りて「かばかりたぐひなき志を御覧じ志りて心やすうもてなし給へ。御ゆるしあらでは更に更に」といとけざやかに聞え給ふ程明けがた近うなりにけり。月くまなくすみわたりて霧にも紛れずさし入りたり。あさはかなる廂の軒はほどもなき心ちすれば、月のかほに向ひたるやうなる、あやしうはしたなくて紛はし給へるもてなしなどいはむ方なくなまめき給へり。故君の御事も少し聞え出でゝさまようのどやかなる物語をぞ聞え給ふ。さすがに猶かの過ぎにし方におぼしおとすをばうらめしげに恨み聞え給ふ。御心のうちにも、かれは位などもまだ及ばざりけるほどながら誰も誰も御ゆるしありけるに、おのづからもてなされて見なれたまひにしを、それだにいとめざましき心のなりにしさまよ、ましてかうあるまじきことによそに聞くあたりにだにあらず、おほ殿などの聞き思ひ給はむことよ、なべての世のそしりは更にもいはず、院にもいかに聞し召しおもほされむなど、はなれぬこゝかしこの御心をおぼしめぐらすにいと口をしう、我が心一つにかうつよう思ふとも人の物いひいかならむ、御息所の志り給はざらむも罪えがましう、かく聞き給ひて心をさなくとおぼしのたまはむもわびしければ、「明さでだに出で給へ」とやらひ聞え給ふより外のことなし。「あさましや、ことありがほにわけ侍らむ。朝露の思はむ所に猶さらばおぼし志れよ。かうをこがましきさまを見え奉りてかしこうすかいやりつとおぼし離れむこそ、その

きはゝ心もえをさめあふまじう知らぬことごとゝけしからぬ心づかひもならひはじむべう思ひ給へよらるれ」とていと後めたくなかなかなれど、ゆくりかにあざれたることのまことにならはぬ御心ちなればいとほしう我が御みづからも心おとりやせむなどおぼいて、誰が御ためにもあらはなるまじき程の霧に立ちかくれて出で給ふ心ちそらなり。

「荻原や軒ばのつゆにそぼちつゝやへたつ霧をわけぞゆくべき。ぬれぎぬは猶えほさせ給はじ。かうわりなうやらはせ給ふ御心づからこそは」と聞え給ふ。げにこの御名のたけからずもりぬべきを心のとはむにだに口清うこたへむとおぼせば、いみじうもてはなれ給ふ。

「わけゆかむ草葉の霧をかごとにて猶ぬれ衣をかけむとや思ふ。めづらかなることかな」とあばめ給へるさまいとをかしうはづかしげなり。年比人にたがへる心ばせ人になりてさまざまになさけを見え奉る名殘なくうちたゆめすきずきしきやうなるがいとほしう心はづかしげなれば、疎ならず思ひかへしつゝ、かうあながちに隨ひ聞えても後をこがましくやとさまざまに心亂れつゝ出で給ふ。道の露けさもいと所せし。かやうのありきならひ給はぬ心ちにをかしうも心づくしにおぼえつゝ、殿におはせば女君のかゝるぬれをあやしと咎め給ひぬべければ、六條院のひんがしのおとゞにまうで給ひぬ。まだ朝霧もはれずましてかしこにはいかにと覺しやる。例ならぬ御ありきありけりと人々はさゞめく。暫し打ち休み給ひて御ぞぬきかへたまふ。夏冬といときよらにしおき給へればかうの御唐櫃よりとうでゝ奉り給ふ。御かゆなどまゐりて御前に參り給ふ。かしこに御文奉り給へれば御覧じもいれず、俄

にあさましかりし有樣めざましうもはづかしうもおぼすに心づきなくて、御息所の漏りきゝ給はむこともいとはづかしう又かゝることやとかけて志り給はざらむに、たゞならぬふしにても見つけ給ひ、人の物いひかくれなき世なればおのづから聞きあはせて隔てけるとおぼさむがいと苦しければ、人々ありしまゝに聞えもらさなむ、うしとおぼすともいかゞはせむとおぼす。親子の御中と聞ゆる中にも露へだてずぞ思ひかはし給へる。よその人はもり聞けども親にかくすたぐひこそは昔物語にもあめれど、さはたおぼされず。人々は何かはほのかに聞き給ひてもことしもありがほに とかくおぼし亂れむ、まだきに心苦しなどいひ合せていかならむと思ふどちこの御せうそこのゆかしきをひきもあけさせ給はねば心もとなくて「猶むげに聞えさせ給はざらむも覺束なくわかわかしきやうにぞ侍らむ」など聞えて、ひろげたれば「あやしう何心もなきさまにて人にかばかりにても見ゆるあはつけさの、みづからのあやまちに思ひなせど、思ひやりなかりしあさましさも慰めがたくなむ。え見ずとをいへ」と殊の外にてよりふさせ給ひぬ。さるはにくげもなくいと心ぶかうかい給ひて、

「たましひをつれなき袖にとゞめおきて 我が心から惑はるゝかな。ほかなるものはとか昔もたぐひありけりと思ひ給へなずにも、更に行きがた志らずのみなむ」などいと多かめれど人はえまほにも見ず。例の氣色なるけさの御文にもあらざめれど猶え思ひはるけず。人々は氣色もいとほしきを歎しう見奉りつゝ、いかなる御ことにかはあらむ、何事につけてもありがたう哀なる御心ざまはほどへぬれど、かゝるかたに賴み聞えては見おとりやし給はむ

と思ふもあやうくなどむつましうさぶらふかぎりはおのがどち思ひみだる。御息所もかけてしり給はず、ものゝけに煩ひ給ふ人は　おもしと見れど　さはやぎ給ふひまもありてなむ物おぼえ給ふ。晝つかた日中の御加持はてゝ阿闍梨ひとりとゞまりて猶陀羅尼讀み給ふ。よろしう坐します悦びて「大日如來そらごとし給はずばなどて　かかくなにがしが心をいだして仕うまつる御す法にしるしなきやうはあらむ。あくらうはしふねきやうなれどごつしやうにまつはれたるはかなものなり」と聲はかれていかり給ふ。いとひじりだちすくすくしきりしにてゆくりもなく「そよやこの大將は　いつよりこゝには參り通ひ給ふぞ」ととひ申し給ふ。御息所「さることも侍らず。故大納言の　いとよき中にて語らひつけ給へる心たがへじと、この年比さるべきことにつけて　いとあやしくなむ語らひ物し給ふも、かくふりはへわづらふを、とぶらひにとて立ち寄り給へりければ辱く聞き侍りき」と聞え給ふ。「いであなかたは。なにがしにかくさるべきことにもあらず。けさごやにまうのぼりつるにかの西の妻戸よりいとうるはしき男の出で給へるを、霧ふかくてなにがしはえ見わい奉らざりつるを、この法師ばらなむ、大將殿の出で給ふなりけりよべも御車も歸してとまり給ひけると口々申しつる。げにいとかうばしきかのみちて頭痛きまでありつれば、げにさなりけりと思ひあはせ侍りぬる。常にいとかうばしう物し給ふ君なり。この事いと切にもあらぬことなり。人はいと有職にものし給ふ。なにかし等もわらはにものし給ひし時より、かの君の御ための事はずほふをなむ故大宮ののたまひつけたりしかば、一かうにさるべきと今に承はる所　なれどい

とやくなし。本妻强くものし給ふ。さる時にあへるぞうるゐにていとやんごとなし。若君達は七八人になり給ひぬ。えみこの君おし給はじ、又女人のあしき身をうけ長夜のやみにまどふは唯かやうの罪によりなむ、さるいみじき報をもうくるものなる。人の御いかり出できなば長きほだしとなりなむ。もはらうけひかず」とかしらふりてたゞいひにいひ放てば「いとあやしきことなり。更にさる氣色にも見え給はぬ人なり。萬心ちのまどひにしかばうちやすみて對面せむとてなむ暫し立ちとまり給へるとこゝなる御達いひしを、さやうにてとまり給へるにやあらむ。大かたいとまめやかにすくよかに物し給ふ人を」とおぼめい給ひながら心のうちに、さることもやありけむ、たゞならぬ御氣色は折々見ゆれど人の御さまのいとかどかどしうあながちに人のそしりあらむことは省きすて、うるはしだち給へるに、容易く心ゆるされぬことはあらじとうちとけたるぞかし、人ずくなにておはする氣色を見てはひ入りもや志給ひけむとおぼす。律師たちぬる後に小少將の君をめして「かゝることなむ聞きつる。いかなりしことぞ。などかおのれにはさなむかくなむとは聞かせ給はざりける。さしもあらじとは思ひながら」とのたまへば、いとほしけれどありしやうを始より委しう聞ゆ。けさの御文のけしき宮もほのかにのたまはせつるやうなど聞え、「年比忍びわたり給ひける心のうちを聞え志らせむとばかりにや侍りけむ、ありがたう用意ありてなむ明しもはてゞ出で給ひぬるを、人はいかに聞え侍るにか」と律師とは思ひもよらで忍びて人の聞えけると思ふ。物ものたまはでいとうく口をしとおぼすに涙ほろほろとこぼれ給ひぬ。見奉るもいとい

とほしう、何にありのまゝに聞えつらむ、苦しき御心ちをいとゞおぼし亂るらむと悔しう思ひゐたり。「さうじはさしてなむ」と萬に宜しきやうに聞えなせど「とてもかくてもさばかりに何の用意もなくかるらかに〔人に見え給ひけむこそいといみじけれ。內々の御心ぎようおはすともかくまでいひつる法師ばらよからぬわらはべなどはまさにいひ殘してむや。人にはいかにいひあらがひ、さもあらぬことゝいふべきにかあらむ。すべて心をさなきかぎりしもこゝに侍ひて」ともえのたまひやらず、いと苦しげなる御心ちに物をおぼし驚きたればいといとほしげなり。け高うもてなし聞えむとおぼいたるに、よづかはしうかるがるしき御名の立ち給ふべきを疎ならず覺し歎かる。「かう少し物覺ゆるひまに渡らせ給ふべう聞えよ。そなたへ參りくべけれど動くべうもあらでなむ。見奉らで久しうなりぬる心ちすや」と淚をうけてのたまふ。「參りて𛀙かなむ聞えさせ給ふ」とばかりきこゆ。渡り給はむもとて御額髮のぬれまろかれたるひきつくろひ、單衣の御ぞほころびたる着かへなど𛀙給ひても頓にもえうごい給はず。この人々もいかに思ふらむ、まだえ𛀙り給はで後にいさゝかも聞き給ふことあらむにつれなくてありしよとおぼし合せむも、いみじうはづかしければ又ふし給ひぬ。「心ちのいみじうなやましきかな。やがてなほらぬさまにもなりなばいとめやすかりぬべくこそ。あしのけののぼりたる心ちす」とおしくださせ給ふ。物をいと苦しうさまざまに覺すにはけぞあがりける。少將「うへにこの御事ほのめかし聞えける人こそはべけれ。いかなりしことぞ」と問はせ給へればありのまゝに聞えさせて「御さうじのかためばかりをなむ少し

こどそへてけざやかに聞えさせつる。もしさやうにかすめ聞えさせ給はゞ同じさまに聞えさせ給へ」と申す。歎い給へる氣色は聞え出でず。さればよといとわびしくて物ものたまはぬ、御枕よりしづくぞおつる。この事にのみもあらず身の思はずになりそめしよりいみじう物をのみ思はせ奉ることゝ、生けるかひなく思ひつゞけたまひて、この人はかうてもやまでとかくいひかゝづらひ出でむも、煩しう聞き苦しかるべうよろづに覺す。まいていふかひなく人のことによりていかなる名をくださましなど、少しおぼしなぐさむる方はあれど、かばかりになりぬるたかき人のかくまでもすゞろに人に見ゆるやうはあらじかしと、すくせうくおぼしくして夕つ方ぞ「猶わたらせ給へ」とあれば、中の塗籠の戸あけあはせて渡り給へる。苦しき御心ちにもなのめならずかしこまりかしづき聞え給ふ。常の御さはゝふあやまたず、おきあがり給うて「いと亂りがはしく侍れば渡らせ給ふも心ぐるしうてなむ。この二日三日ばかり見奉らざりけるほどの年月の心地するも、かつはいとはかなくなむ。後必ずしも對面の侍るべきにも侍らざめり。又めぐり參るともかひやは侍るべき。思へば唯時のまに隔たりぬべき世の中をあながちにならひ侍りけるも悔しきまでなむ」などなき給ふ。宮も物のみ悲しうとりあつめおぼさるれば、聞え給ふこともなくて見奉り給ふ。物つゝみをいたうし給ふ本性にきはきはしうのたまひさはやぐべきにもあらねば耻しとのみ覺すに、いといとほしうて、いかなりしなども問ひ聞え給はず、大となぶらなど急ぎ參らせて御臺などこなたにて參らせ給ふ。物聞しめさずときゝ給ひて、とかう手づからまかなひなほしなどし給へど觸れ給

ふべくもあらず。唯御心ちのよろしう見え給ふぞ胸すこしあき給ふ。かしこより又御文あり。「心しらぬ人しもとりいれて大將殿より少將の君にとて御文あり」といふぞ又侘しきや。少將御文はとりつ。御息所「いかなる御文にか」とさすがに問ひ給ふ。人しれずおぼし弱る御心もそひてしたに待ち聞え給ひけるに、さもあらぬなめりとおぼすも心さわぎして「いでその御文なほ聞え給へ。あいなし。人の御名をよざまにいひなほす人はかたきものなり。そこに心ぎようおぼすとも、しかもちゐる人は少くこそあらめ。心うつくしきやうに聞えかよひ給ひて猶ありしまゝならむこそよからめ。あいなきあまえたるさまなるべし」とて召しよす。苦しけれど奉りつ。「あさましき御心のほどを見奉りあらはいてこそなかなかひたぶる心もつき侍りぬべけれ。

せくからにあさくぞ見えむ山川のながれての名をつゝみはてずは」とことばもおほかれど見もはて給はず。この御文もけざやかなる氣色にもあらでめざましげに心ちよがほに今宵もつれなきをいといみじとおぼす。かんの君の御心ざまの思はずなりし時いとうしと思ひしかど、大方のもてなしは又ならぶ人なかりしかばこなたに力ある心ちしてなぐさめしだに世に心もゆかざりしを、あないみじや、大殿のわたりに思ひのたまはむことゝ思ひしみ給ふ。猶いかゞのたまふと氣色をだに見むと、心ちのかき亂りくるゝやうにし給ふ。めをしぼりてあやしき鳥の跡のやうに書き給ふ。「賴もしげなくなりにて侍る、とぶらひに渡り給へるをりにてそゝのかし聞ゆれど、いとはればれしからぬさまに物し給ふめれば、見給

へわづらひてなむ、

女郎花志をるゝ野邊をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ」とたゞかきさしておしひねりて出し給ひて臥し給ひぬるまゝに、いといたく苦しがり給ふ。御物のけのたゆめけるにやと人々いひ騷ぐ。例のげんあるかぎりいと騷がしうのゝしる。「宮をば猶渡らせ給ひね」と人々聞ゆれど御身のうきまゝに後れ聞えじとおぼせばつとそひ給へり。大將殿はこの晝つ方より三條殿におはしにける。今宵立ちかへりまうで給はむに ことしもありがほにまだきに聞き苦しかるべしなど念じ給ひて、いとなかなか年比の心もとなさよりもちへにもの思ひかさねて歎き給ふ。北の方はかゝる御ありきの氣色ほのぎゝて心やましと聞き居給へるに志らぬやうにて君達もて遊びまぎらはしつゝ、我が晝のおましにふし給へり。宵過ぐる程にぞこの御返りもて參れるを、かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば頓にもとき給はで大となぶら近うとりよせて見給ふ。女君物隔てたるやうなれど いと疾く見つけ給ひてはひよりて御後よりとり給ひつ。「あさましうこはいかに志給ふぞ。あなけしからず。六條の東の上の御文なり。けさ風おこりてなやましげに志給へるを、院の御前に侍りて出づる程又もまうでずなりぬればいとほしさに今のまいかにと聞えたりつるなり。見給へよ、けさうびたる文のさまか。さてもなほなほしの御さまや。年月にそへていたうあなづり給ふこそうれたけれ。思はむ所をむげにはぢ給はぬよ」と打ちうめきてをしみがほにもひこじろひ給はねばさすがにふとも見でも給へり。「年月にそふるあなづらはしさは御心ならひなべかめり」と

ばかり、かくうるはしだち給へるに憚りて若やかにをかしきさましてのたまへばうち笑ひ
て「そはともかくもあらむ。世の常のことなり。又あらじかし。よろしうなりぬるをのこのか
くまがふ方なくひとつ所を守らへて物おぢしたる鳥のせうようのものゝやうなるはいかに
人笑ふらむ。さるかたくなしきものにまもられ給ふは御ためにもたけからずや。あまたが中
に猶きはまさり殊なるけぢめ見えたるこそよその覺えも心にくゝ我が心ちも猶ふりがたく
をかしきことも哀なるすぢもたえざらめ。かく翁のなにがしまもりけむやうにをれまどひ
たればいとぞ口をしき。いづこのはえかあらむ」とさすがにこの文の氣色なくをこづりとら
むの心にて欺き申し給へば、いと匂ひやかにうち笑ひて「物のはえばえしさつくり出で給ふ
程、ふりぬる人くるしや。いと今めかしくなりかはれる御氣色のすさまじさも見習はずなり
にけることとなればいとなむ苦しき。かねてよりならはし給はで」とかこち給ふもにくゝもあ
らず。「俄にとおぼすばかりには何事か見ゆらむ。いとうたてある御心のくまかなっよからず
物聞えしらする人ぞあるべき。怪しうもとよりまろをば許さぬぞかし。猶かの緑の袖のなご
りあなづらはしきにことつけてもてなし奉らむと思ふやうあるにや。いろいろ聞きにくき事
どもほのめくめり。あいなき人の御ためにもいとほしう」などのたまへど遂にあるべき事と
おぼせばことにあらがはず。大輔の乳母いと苦しときゝて物も聞えず、とかくいひしろひて
この御文はひきかくし給ひつればせめてもあさりとらでつれなく大殿籠りぬれば胸はしり
て、いかでとりてしがなと御息所の御文なめり。何事ありつらむと目もあはず思ひふし給へ

り。女君の寢給へるによべのおましのまたなどさりげなくて搜り給へどなし。隱し給へらむ程もなければいと心やましくて明けぬれど頓にも起き給はず。女君は君達におどろかされてゐざり出で給ふにぞ、われも今起き給ふやうにて萬にうかゞひ給へど見つけ給はず。女はかく求めむとも思ひ給へらぬをぞ、げにけさうなき御文なりけりと心にも入れねば君達のあわて遊びひゝなつくりすゑて遊び給ふ。文よみ手ならひなどさまざまにいとあわたゞしくちひさきちごはひかゝりひきしろへばとりし文のとも思ひ出で給はず。男はこと事もおぼえ給はずかしこに疾く聞えむと覺すに、よべの御文のさまもえたしかに見ずなりにしかば見ぬさまならむもちらしてけると推し量り給ふべしなど思ひ亂れ給ふ。誰もたれも御だい參りなどして長閑になりぬる晝つかた思ひわづらひて「よべの御文は何事かありし。あやしう見せ給はで今日もとぶらひ聞ゆべし。なやましうて六條にもえ參るまじければ文をこそは奉らめ。何事かありけむ」との給ふがいとさりげなければ、文はをこがましうとりてけりとすさまじうてその事をばかけ給はず。「一夜の深山風にあやまち給へるなやましさなりとをかしきやうにかこち聞え給へかし」と聞え給ふ。「いでこのひがごとな常にのたまひそ。何のをかしきやうかある。世人になずらへ給ふこそなかなかはづかしけれ。この女房達もかつはあやしきまめざまをかくのたまふことほゝゑむらむものを」とたはぶれごとにいひなして「その文よいづら」とのたまへどとみにもひき出で給はぬ程に猶物語など聞えてしばしふし給へる程に暮れにけり。ひぐらしの聲に驚きて、山のかげいかに霧ふたがりぬら

む、あさましや、今日この御返事をだにといとほしうて唯志らず顔に硯おしずりていかになしてしにかとりなさむとながめおはするおましの奥の少しあがりたる所を試みにひきあげ給へれば、これにさしはさみ給へるなりけりと嬉しうもをこがましうもおぼゆるに、うちゑみて見給ふにかう心苦しきことなむありける。胸つぶれて、一夜のことを心ありて聞き給ひけるとおぼすに、いとほしう心苦しうよべだにいかに思ひ明し給ひけむ、今日も今まで文をだにといはむ方なくおぼゆ。いと苦しげにいふかひなくかき紛はし給へるさまにて、おぼろげに思ひあまりてやはかく書き給へつらむ、つれなくて今宵のあけつらむといふべき方のなければ女君ぞいとつらう心うき、すゞろにかくあたへかくして　いでや我がならはしぞやとさまざまに身もつらくすべて泣きぬべき心ち志給ふ。やがて出で立ちたまはむとするを、心やすく對面もあらざらむものから人もかくのたまふ、いかならむ、坎日にもありけるをもしたまさかに思ひゆるし給はゞ惡しからむ、猶よからむことをこそと、うるはしき心におぼしてまづこの御返しを聞え給ふ。「いとめづらしき御文をかたがた嬉しう見給ふにこの御とがめをなむ。いかに聞しめしたることにか。

秋の野の草の志げみは分けしかどかりねの枕むすびやはせし。あきらめ聞えさするもあやなけれどよべの罪はひたやごもりにや」とあり。宮にはいと多く聞え給ひてみまやにありしとき御馬にうつしおきて一夜のたいふをぞ奉れ給ふ。「よべより六條院にさぶらひて只今なむ罷でつるといへ」とていふべきやうさゝめき敎へ給ふ。かしこにはよべもつれなく見え

給ひし御氣色を、忍びあへで後の聞えをもつゝみあへず恨み聞え給ひしをその御返りだに見えず。今日の暮れはてぬるをいかばかりの御心にかはともてはなれてあさましう心も碎けてよろしかりつる御心ち又いといたう惱み給ふ。なかなかさうじみの御心のうちは、このふじを殊に憂しとおぼし驚くべきとしなければ、唯覺えぬ人にうち解けたりし有樣を見えしことばかりこそ口をしけれ、いとしもおぼししまぬをかくいみじうおぼいたるをあさましうはづかしうあきらめ聞え給ふ方なくて例よりも物はぢし給へる氣色見え給ふを、いと心苦しう物をのみおぼしそふべかりけると見奉るも胸つとふたがりて悲しければ「今更にむつかしき事をば聞えじと思へど、猶御宿世とはいひながら思はずに心をさなくて人のもときをおひ給ふべきことを取り返すべき事にはあらねど、今よりは猶さる心し給へ。數ならぬ身ながらも萬にはぐゝみ聞えつるを今は何事をもおぼししり世の中のとざまかうざまの有樣をもおぼしたどりぬべき程に見奉りおきつることゝ、そなたざまは後安くこそ見奉りつれ。猶いといはけて強き御心おきてのなかりける事と思ひ亂れ侍るに、今暫しの命もとゞめまほしうなむ。たゞ人だに少しよろしくなりぬる女のひとふたりと見るためしは心うくあはつけきわざなるを、ましてかゝる御身にはさばかりおぼろげにて人の近づき聞ゆべきにもあらぬを思の外に心にもつかぬ有樣と年比も見奉りなやみしかど、さるべき御宿世にこそは。院よりはじめ奉りておぼしなびき、この父おとゞにもゆるひ給ふべき御氣色ありしに、おのれ一人しも心をたてゝいかゞはと思ひよわり侍りし事なれど末の世までものしき

御有様を、我が御あやまちならぬに大空をかこちて見奉りすぐすを、いとかう人のため我がためよろづに聞きにくかりぬべき事の出できそひぬべきが、さてもよその御名をばしらぬ顔にてよのつねの御有様にだにあらばおのづからありへむにつけても慰む事もやと思ひなし侍るを、こよなう情なき人の御心にも侍りけるかな」とつぶつぶと泣き給ふ。いとわりなくおしこめての給ふを、あらがひはるけむ言の葉もなくて唯打ち泣き給へるさまおほどかにらうたげなり。うちまもりつゝ「あはれ何事かは人に劣り給へる。いかなる御すくせにてやすからず物を深くおぼすべき契深かりけむ」などのたまふにいみじう苦しうし給ふ。ものゝけなどもかゝるよわめに所うるものなりければ俄に消え入りてたゞひえにひえ入り給ふ。律師も騒ぎたち給うて願などたてのゝしり給ふ。深きちかひにて今は命を限りける山ごもりをかくまでおぼろげならず出で立ちて壇毀ちて歸り入らむとのめいぼくなく佛もつらく覺え給ふべきことを、心を起して祈り申し給ふ。宮の泣き惑ひ給ふ事いとことわりなりかし。かく騒ぐ程に大將殿より御文とりいれたるほのかに聞き給ひて、今宵もおはすまじきなめりとうち聞き給ふ。心うく世のためしにもひかれ給ふべきなめり、何に我さへさる言の葉を殘しけむとさまざまおぼし出づるにやがて絶えいり給ひぬ。あいなくいみじといへばおろかなり。昔より物の氣には時々煩ひ給ふ。限と見ゆる折々もあれば例のごととりいれたるなめりとて加持參りさわげどいまはの樣はしるかりけり。宮はおくれじとおぼしいりてつとそひふし給へり。人々まゐりて「今はいふかひなし。いとかうおぼすともかぎりある道

には歸りおはすべき事にもあらず。慕ひきこえ給ふともいかでか御心にはかなふべき」とさらなることわりを聞えて「いとゆゝしうなき御爲にも罪深きわざなり。今はさらせ給へ」とひきうごかい奉れどすくみたるやうにて物も覺え給はず。修法の壇毀ちてほろほろといづるにさるべきかぎりかたへこそ立ちとまれ、今はかぎりのさまいと悲しう心ぼそし。所々の御とぶらひいつのまにかと見ゆ。大將殿も限なく聞き驚き給ひてまづ聞え給へり。六條院よりも致仕の大殿よりもすべていと志げう聞えたまふ。山のみかども聞しめしていと哀に御文かいたまへり。宮はこの御せうそこにぞ御ぐしもたげ給ふ。「日比重く惱み給ふと聞きわたりつれど例もあつしうのみ聞き侍りつるならひにうちたゆみてなむ、かひなき事をばさるものにて思ひ歎い給ふらむありさまおしはかるなむ哀に心苦しき。なべての世のことわりに覺しなぐさめ給へ」とあり。目も見え給はねど御返しきこえ給ふ。常にさこそあらめとのたまひける事とて今日やがてをさめ奉るとて御甥の大和守にてありけるぞよろづにあつかひ聞えける。骸をだに志ばし見奉らむとて宮は惜み聞え給ひけれど、さてもかひあるべきならねば皆急ぎたちてゆゝしげなる程にぞ大將殿おはしたる。「今日よりのち日ついであしかりけり」など人ぎゝにはの給ひていともかなしう哀に宮のおぼし歎くらむことをおしはかり聞え給ひて「かくしも急ぎ渡り給ふべき事ならず」と人々いさめ聞ゆれど志ひておはしましぬ。程さへ遠くて入り給ふほどいと心すごし。ゆゝしげに引き隔てめぐらしたる儀式のかたは隱してこの西おもてに入れ奉る。大和守出できてなくなくかしこまり聞ゆ。妻戸の簀

子におしかゝり給ひて女房よび出でさせ給ふに、あるかぎり心もをさまらず物覺えぬほどなり。かくわたり給へるにぞ聊なぐさめて少將の君はまゐる。物もえのたまひやらず、涙もろにおはせぬ心づよさなれど所のさま人のけはひなどをおぼしやるもいみじうて常なき世の有樣の人のうへならぬもいと悲しきなりけり。やゝためらひて「よろしうをこたり給ふさまに承りしかば思ひ給へたゆみたりし程に夢もさむる程侍るなるを、いとあさましうなむ」と聞え給へり。おぼしたりしさまこれにおほくは御心も亂れにしぞかしとおぼすに、さるべきとはいひながらもいとつらき人の御契なればいらへをだに志給はず「いかに聞えさせ給ふとか聞え侍るべき。いとかるらかならぬ御さまにて、かくふりはへ急ぎ渡らせ給へる御心ばへをおぼしわかぬやうならむもあまりに侍りぬべし」と口々きこゆれば「たゞおしはかりて。われはいふべきとも覺えず」とて臥し給へるもことわりにて「只今はなき人と異ならぬ御有樣にてなむ。渡らせ給へる由は聞えさせ侍りぬ」と聞ゆ。この人々もむせかへるさまなれば「聞えやるべき方もなきを今少し自らも思ひのどめ又志づまり給ひなむに參りこむ。いかにしてかくにはかにと、その御有樣なむゆかしき」との給へば、まほにはあらねどかのおもほし歎きし有樣をかたはしづゝ聞えて「かこち聞えさするさまになむなり侍りぬべき。今日はいとゞ亂りがはしき心ちどものまどひに聞えさせたがふる事どもゝ侍りなむ。さらばかくおぼし惑へる御心ちも限りあることにて少し志づまらせ給ひなむ程に、聞えさせうけ給はらむ」とてわれにもあらぬさまなればのたまひ出づることも口ふたがりて「げにこそ

聞に惑へる心ちすれ。猶聞え慰め給ひて聊の御返りもあらばなむ」などのたまひおきて立ち煩ひ給ふもかるがるしうさすがに人さわがしければ歸り給ひぬ。今宵しもあらじと思ひつる事どものおたゝめいと程なくきはきはしきをいとあへなしと覺いて近き御さうの人々めしおほせてさるべき事ども仕うまつるべくおきて定めて出で給ひぬ。事の俄なればそぐうなりつる事ども嚴めしう人數などもそひてなむ。大和守もありがたき殿の御心おきてなど悦びかしこまりきこゆ。名殘だになくあさましきことゝ宮はふしまろび給へどかひなし。親と聞ゆともいとかくはならはすまじきものなりけり。見奉る人々もこの御事を又ゆゝしう歎き聞ゆ。大和守のこりの事どもおたゝめて、「かく心ぼそくてはえおはしまさじ。いと御心のひまあらじ」など聞ゆれど猶峯の煙をだにけぢかくて思ひ出で聞えむとこの山里に住みはてなむとおぼいたり。御忌にこもれる僧は東面のそなたの渡殿ゑもやなどにはかなき隔ておつゝかすかにゐたり。西の廂をやつして宮はおはします。明け暮るゝもおぼしわかねど月比へければ九月になりぬ。山おろしいとはげしう木の葉のかくろへなくなりて萬の事いといみじき程なれば、大方の空にもよほされてひるまもなくて覺し歎き、命さへ心にかなはずといとはしういみじうおぼす。さぶらふ人々も萬に物悲しう思ひまどへり。大將殿は日々にとぶらひ聞え給ふ。寂しげなる念佛の僧など慰むばかり萬の物を遣はしとぶらはせ給ひ、宮のお前には哀に心深き言の葉を盡して恨み聞え、かつはつきもせぬ御とぶらひを聞え給へど取りてだに御覽ぜず、すゞろにあさましきことをよわれる御心ちに疑ひなくおぼし

しみて、消え失せ給ひにし事をおぼし出づるに、後の世の御罪にさへやなるらむと胸にみつ心地して、この人の御事をだにかけていへばいとゞつらく心うき涙のもよほしにおぼさる。人々も聞え煩ひぬ。ひとくだりの御返りだになきを、しばしは心惑ひのし給へるなどおぼしけるに、あまりに程經ぬれば悲しき事もかぎりあるを、などかくあまり見しり給はずはあるべき、いふかひなく若々しきやうにとうらめしうことごとのすぢに花や蝶やとかけばこそあらめ、我が心に哀と思ひ物歎かしきかたざまのことをいかにと問ふ人は睦しう哀にこそおぼゆれ、大宮のうせ給へりしをいと悲しとせちに思ひしに、致仕のおとゞのさしも思ふ給へらず、ことわりの世の別れにおほやけおほやけしきさはふばかりの事をけうじ給ひしにつらく心づきなかりしに、六條院のなかなかねんごろに後の御事をも營み給ひにしが、我がかたざまといふ中にも嬉しう見奉りし、その折に故衛門督をば取りわきて思ひつきにしぞかし、人がらのいたうしづまりて物をいたう思ひとゞめたりし心に哀もまさりて人より深かりしがなつかしう覺えしなど、つれづれと物をのみおぼしつゞけて明し暮し給ふ。女君猶この御中の氣色をいかなるにかありけむ、御息所とこそ文かよはしも細やかにし給ふめりしかなと思ひえがたくて、夕暮の空をながめ入りて臥したまへるところに若君してたてまつれ給へる、はかなき紙のはしに、

「哀をもいかにしりてかなぐさめむあるや戀しきなきやかなしき。おぼつかなきこそ心うけれ」とあればほゝゑみて樣々にかく思ひよりてのたまふ。似げなのなきがよそへやとお

ぼす。いと疾くことなしびに、

「いづれとかわきてながめむ消えかへる露も草葉のうへと見ぬ世を。大方にこそ悲しけれ」とかい給へり。猶かく隔て給へることゝ露の哀をばさしおきてたゞならず歎きつゝおはす。猶かく覺束なくおぼしわびて又わたり給へり。御忌などすぐしてのどやかにとおぼし靜めけれど、さてしも忍びはつまじう今はこの御なき名の何かはあながちにもつゝまむ、唯世づきてつひの思ひかなふべきにこそはと覺したちにければ、北の方の御思ひやりをあながちにもあらがひ聞え給はず、さうじみはつようおぼしはなるともかの一夜ばかりの御文をとらへ所にかこちてえしもすゝぎはて給はじとたのもしかりけり。九月十餘日、野山の氣色はふかく見志らぬ人だにたゞにやはおぼゆる、山風に堪へぬ木々の木末も峯の葛葉も心あわたゞしう爭ひ散るまぎれに、たふとき讀經の聲かすかに念佛などの聲ばかりして人のけはひいと少なう、木枯の吹き拂ひたるに鹿は唯籬のもとにたゝずみつゝ山田のひたにも驚かず色こき稻どもの中にまじりてうちなくもうれへがほなり。瀧の聲はいとゞ物思ふ人を驚かしがほに耳かしがましうとゞろきひゞく。叢の蟲のみぞより所なげになきよわりて枯れたる草の下よりりんだうのわれひとりのみ心ながらはひ出でゝ露けく見ゆるなど、皆例のこの比のとなれど折から所からにや、いと堪へ難き程の物悲しさなり。例の妻戸のもとに立ちより給ひてやがて眺め出して立ち給へり。なつかしき程のなほしに色こまやかなる御ぞのうちめいとけうらにすきてかげよわりたる夕日のさすがに何心もなうさしきたるにま

ばゆげにわざとなく扇をさしかくし給へる手つき、女こそかうはあらまほしけれ、それだにかうはあらぬをと見奉る。物思ひのなぐさめにしつべくゑましきかほのにほひにて少將の君をとりわきてめしよす。簀子の程もなければ奥に人やあらむと後めたくてえこまやかにも語らひ給はず。「猶近くてを、なはなち給ひそ、かく山深く分けいる志は隔て殘るべくやは。霧もいと深しや」とてわざとも見入れぬさまに山の方をながめてなほなほと切にのたまへば、鈍色の几帳を簾垂のつまより少しおし出でゝ裾をひきそばめつゝ居たり。大和守の妹なれば離れ奉らぬうちに幼くよりおほしたて給ひければきぬの色いとこくてつるばみの喪ぎぬ一襲小袿着たり。「かく盡せぬ御事はさるものにて聞えむ方なき御心のつらさを思ひそふるに心魂もあくがれはてゝ見る人ごとに咎められ侍れば今は更に忍ぶべき方なし」といと多く恨みつゞけ給ふ。かの今はの御文のさまものたまひ出でゝいみじう泣き給ふ。この人もましていみじう泣きいりつゝ「その夜の御返りさへ見え侍らずなりにしを今は限の御心にやがておぼしいりて暗うなりにし程の空の氣色に御心ちまどひにけるを、さるよわめに例のものゝけのひきいれ奉るとなむ見給へし。過ぎにし御事にもほどほど御心惑ひ給ひぬべかりし折々多く侍りしを、宮の同じさまにしづみ給ひしをこしらへ聞えむの御心づよさになむやうやう物覺え給ひし。この御歎をばお前には唯われかの御氣色にてあきれてくらさせ給ひし」などのどめがたげに打ち歎きつゝはかばかしうもあらずきこゆ。「そよや、そもあまりにおほめかしういふかひなき御心ちなり。今はかたじけなくとも誰をかはよるべに思

ひ聞え給はむ。御山ずみもいと深き峯に世の中をおぼし絶えたる雲の中なめれば聞え通ひ給はむこともかたし。いとかく心うき御氣色聞えしらせ給へ。萬の事さるべきにこそ。世にありへじとおぼすともえたがはぬ世なり。まづはかゝる御別れの御心にかなはゞあるべきことかは」など萬におほくの給へど、聞ゆべきこともなくて打ち歎きつゝ居たり。鹿のいといたく鳴くを「われおとらめや」とて、

「里とほみ小野の篠原わけてきてわれもしかこそ聲もをしまね」とのたまへば、

「ふぢごろも露けき秋の山人はしかのなく音にねをぞそへつる」。よからねど折からに忍びやかなるこわづかひなどをよろしう聞きなし給へり。御せうそことかう聞え給へど「今はかくあさましき夢の世を少しも思ひさます折あらばなむ、絶えぬ御とぶらひも聞えやるべき」とのみすくよかにいはせ給ふ。「いみじういふかひなき御心なりけり」と歎きつゝ歸り給ふ。道すがらも哀なる空を眺めて十三日の月いと花やかにさし出でぬればをぐら山もたどるまじうおはするに一條の宮はみちなりけり。いとゞうちあばれて未申の方のくづれたるを見いるればはるばるとおろしこめて人かげも見えず。月のみ遣水のおもてをあらはにすみなしたるに大納言こゝにてあそびなどし給ひし折々を思ひ出で給ふ。

「見し人のかげすみはてぬ池水にひとりやどもる秋の夜の月」とひとりごちつゝ殿におはしても月を見つゝ心は空にあくがれ給へり。「さも見苦しう、あらざりし御くせかな」と御達もにくみあへり。上はまめやかに心うくあくがれたちぬる御心なめり、もとよりさる方に

ならひ給へる六條院の人々をともすればめでたきためしにひき出てつゝ心よからずあひだちなきものに思ひ給へるわりなしや、われも昔よりおかならひなましかば人めもなれてなかなかすぐしてまし、世のためしにおつべき御心ばへと親はらからよりはじめ奉りめやすきあえものにお給へるを、ありありてすゑにはおぢがましきことやあらむなど、いといたう歎い給へり。夜も明けがた近くかたみにうち解け給ふことなくてそむきそむきに歎きあかして朝霧の晴間もまたず例の文をぞ急ぎ書きたまふ。いと心づきなしとおぼせどありしやうにもばひ給はず。いとこまやかにかきてうち置きて嘯きたまふ。忍び給へどもりて聞きつけらる。

「いつとかはおどろかすべき明けぬ夜の夢さめてとかいひしひとことと。うへより落つるとやかいたまへらむ。おしつゝみて名殘もいかでよからむ」など口ずさび給へり。人めして給ひつ。御返事をだに見つけてしがな、猶いかなることぞとけしき見まほしうおぼす。日たけてぞもて參れる。紫のこまやかなる紙すくよかにて小少將ぞ例の聞えたる。唯同じさまにかひなきよしを書きて いとほしさにかのありつる御文に手習ひすさみ給へるをぬすみたるとて中にひきやりて入れたり。目には見給ひてけりとおぼすばかりの嬉しさぞ いと人わろかりける。そこはかとなく書き給へるを見つゞけ給へれば、

「朝夕になくねをたつるをの山は絕えぬなみだやおとなしの瀧」とやとりなすべからむふることなど物思はしげに かきみだり給へる御手など見所あり。人のうへなどにてかやう

のすき心思ひいらるゝはもどかしう現心ならぬことに見聞きしかど、身のうへにてはげにいと堪へがたかるべきわざなりけり、あやしや、などかうしも思ふらむと思ひかへし給へどえしもかなはず。六條院にも聞しめしていとおとなしう萬を思ひしづめ人のそしり所なくめやすくて過ぐし給ふをおもだゝしう我がいにしへ少しあざればみあだなる名をとり給ひしおもておこしに嬉しう覺しにたるを、いとほしう いづ方にも心苦しき事のあるべきことさしはなれたるなからひにてだにあらで おとゞなどもいかに思ひ給はむ、さばかりの事たどらぬにはあらじ、宿世といふもの遁れわびぬる事なり、ともかくも口いるべきことならずとおぼす。女のためのみこそ何方にもいとほしけれとあいなく聞しめしなげく。紫の上にもきし方行く先のことおぼし出でつゝかうやうのためしを聞くにつけてもなからむ後うしろめたう思ひ聞ゆるさまをのたまへば、御顏うち赤めて 心うくさまでおくらかし給ふべきにやとおぼしたり。女ばかり身をもてなすさまも所せう哀なるべきものはなし。物の哀をもをかしきことをも見知らぬさまにひきいりしづみなどすれば何につけてか世にふるはえばえしさも常なき世の つれづれをも慰むべきぞは、大かた物の心をしらずいふかひなきものにならひたらむもおほしたてけむ親も いと口をしかるべきものにはあらずや、心にのみこめて無言太子とか、法師ばらの悲しきことにする 昔のたとひのやうに惡しき事善き事を思ひしりながらうづもれなむも いふかひなし、我が心ながらも よき程にはいかでたもつべきぞとおぼしめぐらすにも 今はたゞ女一の宮の御ためなり。大將の君參り給へるついであり

て思ひ給へらむ氣色もゆかしければ「御息所の忌はてぬらむな。昨日今日と思ふほどに三そ年よりあなたのことになる世にこそあれ。哀にあぢきなしや。夕の露のかゝる程のむさぼりよ。いかでこのかみそりて萬そむきすてむと思ふを、さものどやかなるやうにても過ぐすかな。いとわろきわざなりや」とのたまふ。「誠にをしげなき人だにおのがじゝは離れ難く思ふ世にこそ侍るめれ」など聞えて「御息所の四十九日のわざなど大和守某のあさん一人あつかひ侍る、いと哀なるわざなりや。はかばかしきよすがなき人は生ける世のかぎりにてかゝる世の果てこそ悲しう侍りけれ」と聞え給ふ。「院よりもとぶらはせ給ふらむ。かのみこいかに思ひ歎き給ふらむ。はやう聞きしよりはこの近き年頃事にふれてきゝ見るに、この更衣こそ口惜しからずめやすき人のうちなりけれ。大方の世につけて惜しきわざなりや。さてもありぬべき人のかううせゆくを院もいみじう驚きおぼしたりけり。かのみここそはこゝに物し給ふ入道の宮よりさしつぎにはらうたう志給ひけれ。人ざまもよくおはすべし」とのたまふ。「御心はいかゞ物し給ふらむ。御息所はこともなかりし人のけはひ心ばせになむ。志たしう打ち解け給はざりしかどはかなきとのついでにおのづから人の用意はあらはなるものになむ侍る」と聞え給ひて宮の御事もかけずいとつれなし。かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと諫めむにかなはじ、用ゐざらむものから我さかしにと出でむもあいなしとおぼして止みぬ。かくて御法事に萬とりもちてせさせ給ふ。ことの聞えおのづから隱れなければ大殿などにも聞き給ひてさやはあるべきなど、女がたの心あさきやうに、おぼしなすぞわりなき

や。かの日は昔の御心あれば君達もまかでとぶらひ給ふ。誦經など殿よりもいかめしうせさせ給ふ。これかれさまざま劣らず志給へれば時の人のかやうのわざに劣らずなむありける。宮はかくて住みはてなむと覺したつことありけれど院に人のもらし奏しければ「いとあるまじきことなり。げに數多とざまかうざまに身をもてなし給ふべき事にもあらねど、後見なき人なむ、なかなかさるさまにてあるまじき名をたち、罪えがましきときこの世後の世中空にもどかしき咎おふわざなる。こゝにかく世を捨てたるに三宮のおなじごと身をやつし給へる、すゑなきやうに人の思ひいふも捨てたる身に思ひなやむべきにはあらねど、必ずさしもやうのことゝ爭ひ給はむもうたてあるべし。世のうきにつけて厭ふはなかなか人わろきわざなり。心と思ひとるかたありて今すこし思ひ志づめ心すましてこそともかうも」と度々聞え給ひけり。このうきたる御名をぞ聞しめしたるべき、さやうのことの思はずなるにつけてうんじ給へるといはれ給はむことをおぼすなりけり。さりとて又あらはれてものし給はむもあはあはしう心づきなきことゝおぼしながら恥しとおぼさむもいとほしきを、何かはわれさへ聞きあつかはむとおぼしてなむこのすぢはかけても聞え給はざりける。大將も、とかくいひなしつるも今はあいなし、かの御心にゆるし給はむことはかたげなめり、御息所の心志りなりけりと人には志らせむ、いかゞはせむ、なき人に少しあさき咎はおほせていつありそめしことぞともなく紛はしてむ、さらがへりてけさうだち涙を盡しかゝづらはむもいとうひうひしかるべしと思ひ給ひて、一條にわたり給ふべき日その日ばかりと定めて大和

守めしてあるべきさはふのたまひ、宮のうちはらひしつらひ、さこそいへども女どちは草しげう住みなし給へりしを、磨きたるやうにしつらひなして御心づかひなどあるべきさはふめでたう壁代御屛風几帳おましなどまでおぼしよりつゝ大和守にのたまひてかの家にぞ急ぎつかうまつらせ給ふ。その日はわれおはしゐて御車御前など奉れ給ふ。宮は更に渡らじとおぼしのたまふを人々いみじう聞え大和守も「更にうけ給はらじ、心ぼそく悲しき御有様を見奉りなげきこのほどの宮仕はたゆるに隨ひて仕うまつりぬ。今は國のことも侍り罷り下りぬべし。宮の內の事も見給へゆづるべき人も侍らず。いとたいだいしういかにと見給ふるを、かく萬におぼしいとなむを、げにこの方にとりて思ひ給ふるには必ずしもおはしますまじき御有様なれど、さこそはいにしへも御心にかなはぬためし多く侍れ。一所やは世のもどきをもおはせ給ふべき。いと幼くおはしますことなり。たけうおぼすとも女の御心ひとつに我が御身をとりしたゝめ顧み給ふべきやうかあらむ。猶人のあがめかしづき給へらむに助けられてこそ深き御心のかしこき御おきてもそれにかゝるべきものなれ。君達の聞えしらせ奉り給はぬなり。かつはさるまじき事をも御心どもに仕うまつりそめ給ひて」といひつゞけて左近少將をせむ。あつまりてきこえこしらふるにいとわりなく、あざやかなる御ぞども人々の奉りかへさするもわれにもあらず、猶いとひたぶるにそぎ捨てまほしうおぼさるゝ御ぐしをかき出で見給へば六尺ばかりにて少しほそりたれど人はかたはにも見奉らず。みづからの御心には、いみじのおとろへや、人に見ゆべき有樣にもあらず、さまざまに心うき

身をとおぼしつゞけてまた臥し給ひぬ。「時たがひぬ。夜も更けぬべし」と皆さわぐ。時雨いと心あわたゞしう吹きまがひ、萬にものがなしければ、

「のぼりにし峯の煙にたちまじり思はぬかたになびかずもがな」。心ひとつにはつよくおぼせどその比は御鋏などやうのものは皆とりかくして人々のまもり聞えければ、かくもてさわがざらむにだに、何のをしげある身にてかをこがましう若々しきやうにはひき忍ばむ、人々もうたておずましかべきわざをとおぼせば、そのほいのごともえ給はず。人々は皆急ぎたちておのおの櫛手箱唐櫃萬の物をはかばかしからぬ袋やうのものなれど皆さきだてゝ運びたれば一人とまり給ふべうもあらで、泣く泣く御車に乘り給ふものから、かたはらのみまもられ給ひてこち渡り給ひし時御心地の苦しきにも御ぐしかきなでつくろひおろし奉り給ひしをおぼし出づるに、目もきりていみじ。御はかしにそへて經箱をそへたるが御かたはらもはなれねば、

「戀しさのなぐさめがたきかたみにて涙にくもる玉のはこかな」。黑きもまだしあへさせ給はず。かの手ならし給へりし螺鈿の箱なりけり。誦經にせさせ給ひしをかたみにとゞめ給へるなりけり。浦島の子が心地なむ。おはしましつきたれば殿の內悲しげもなく人げ多くてあらぬさまなり。御車よせており給ふを更にふる里とおもほえず、疎ましううたておぼさるれば頓にもおり給はず。いと怪しう若々しき御さまかなと人々も見奉り煩ふ。殿はひんがしの對の南面を我が御方に假にしつらひてすみつきがほにおはす。三條殿には人々「俄にあさ

ましうなり給ひぬるかな。いつの程にありしとぞ」と驚きけり。なよゝかにをかしばめることを好ましからずおぼす人はかくゆくりかなることぞ打ちまじり給うける。されど年經にけることを音なく氣色ももらさで過ぐし給ひけるなりとのみ思ひなして、かく女の御心ゆるび給はぬと思ひよる人もなし。とてもかくても宮の御ためこそいとほしけれ。御まうけなどさまかはりて物のはじめゆゝしげなれど物まゐらせなど皆志づまりぬるにわたり給ひて、少將の君をいみじうせめ給ふ。「御志まことにながうおぼされば今日明日を過ぐして聞えさせ給へ。なかなか立ちかへりて物おぼし志づみてなき人のやうにてなむふさせ給ひぬる。こしらへ聞ゆるをもつらしとのみおぼされたれば何事も身のためこそ侍れ。いと煩はしう聞えさせにくゝなむ」と聞ゆ。「いとあやしう推し量り聞えさせしには違ひていはけなく心得難き御心にこそありけれ」とて思ひよれるさま、人の御ためも我がためも世のもどきあるまじうのたまひ續くれば、「いでや只今は又いたづら人に見なし奉るべきにやと、あわたゞしき亂り心ちに萬思ひ給へわかれず。あが君とかくおしたちてひたぶるなる御心な遣はせ給ひそ」と手をする。「いとまだ志らぬよかな。にくゝめざましと人よりけに覺しおとすらむ身こそいみじけれ。いかで人にもことわらせむ」と、いはむ方なしと覺してのたまへば、さすがにいとほしうもあり。「まだ志らぬはげに世づかぬ御心構へのけにこそはと、ことわりはげに何方にかはよる人侍らむとすらむ」と、少しうち笑ひぬ。かく心ごはけれど今はせかれ給ふべきならねばやがてこの人をひきたてゝ推し量りにいり給ふ。宮はいと心うくなさ

けなくあはつけき人の心なりけりと、ねたくつらければ若々しきやうにはいひさわぐともとおぼして塗籠におましひとつしかせ給ひて内よりさして大殿ごもりにけり。これもいつまでにかは、かばかりに亂れ立ちにたる人の心どもはいと悲しう口をしうおぼす。男君はめざましうつらしと思ひ聞え給へどかばかりにては何のもてはなるゝことかはと、のどかにおぼして萬に思ひあかし給ふ。山鳥の心ちぞし給ひける。辛うじて明方になりぬ。かくてのみことゝいへばひたおもてなるべければ出で給ふとて唯聊のひまをだにといみじう聞え給へどいとつれなし。

「恨みわびむねあきがたき冬の夜にまたさしまさる關のいはかど。聞えむ方なき御心なりけり」となくなく出で給ふ。六條院にぞおはして休ひ給ふ。ひんがしのうへ「一條の宮渡し奉り給へることゝかの大殿わたりなどに聞ゆる、いかなる御事にかは」といとおほどかにの給ふ。御簾に御几帳そへたれどそばよりほのかには猶見え奉り給ふ。「さやうにも猶人のいひなしつべきことに侍り。故御息所はいと心強うあるまじきさまにいひはなち給ひしかど、かぎりのさまに御心ちの弱りけるに又見ゆづるべき人のなきや悲しかりけむ。なからむ後のうしろみにとやうなることの侍りしかばもとよりの志も侍りしことにてかく思ひ給へなりぬるをさまざまいかに人あつかひ侍らむかし。さしもあるまじきことをもあやしう人こそ物いひさがなきものにあれ」とうち笑ひつゝ「かのさうじみなむ、猶世にへじと深う思ひたちて尼になりなむと思ひむすぼゝれ給ふめれば、なにかはこなたかなたにきゝにくゝも侍るべ

きを、さやうに嫌疑はなれても、又かの遺言はたがへじと思ひ給へて唯かくいひあつかひ侍るなり。院のわたらせ給へらむにも事のついて侍らばかうやうにまねび聞えさせ給へ。ありありて心づきなき心つかふとおぼしのたまはむをはゞかり侍りつれどげにかやうのすぢにてこそ人のいさめをもみづからの心にも随はぬやうに侍りけれ」と忍びやかに聞え給ふ。「人のいつはりにやと思ひ侍りつるを誠にさるやうある御氣色にこそは。皆世の常のことなれど三條の姫君のおぼさむ事こそいとほしけれ。のどやかにならひ給うて」と聞え給へば、「らうたげにものたまへなす姫君かな。いと鬼々しう侍るさがなものを」とて「などてかそれをもおろかにはもてなし侍らむ。かしこけれど御ありさまどもにてもおしはからせ給へ。なだらかならむのみこそ人はつひのとには侍るめれ。さがなくことがましきも暫しはなまむつかしう煩らはしきやうには憚らるゝことあれど、それにしも随ひはつまじきわざなれば事の亂れ出できぬるのちわれも人もにくげにあきたしや。猶南のおとゞの御心用ゐこそさまざまにありがたう、さてはこの御方の御心などこそはめてたきものには見奉りはて侍りぬれ」などほめ聞え給へば、笑ひ給ひて「物のためしに引きいで給ふ程に身の人わろき覺えこそ顯はれぬべう。さてをかしきことは院のみづからの御くせをば人志らぬやうに聊あだあだしき御心づかひをばたいしとおぼいていましめ申し給ふ、志りうごとにも聞え給ふめるこそさかしだつ人のおのがうへ志らぬやうに覺え侍れ」とのたまへば「さなむ常にこの道をしもいましめ仰せらるゝ。さるはかしこき御敎ならでもいとよくをさめて侍る心を」とてげにを

かしと思ひ給へり。お前に參り給へればかの事は聞しめしたれど何かはきゝがほにもとおぼいて唯うちまもり給へるに、いとめでたくきよらにこの比こそねびまさり給へる御盛なめれ。さるさまのすきごとをし給ふとも人のもどくべきさまもし給はず、鬼神も罪ゆるしつべくあざやかに物淸げに若う盛ににほひをちらし給へり。物思ひしらぬわかうどのほどにはたおはせず、かたほなるところなうねびとゝのほり給へることわりぞかし。女にてなどかめでざらむ、鏡を見てもなどかおごらざらむと我が御子ながらも覺す。日たけて殿には渡り給へり。入り給ふより若君たちすぎすぎうつくしげにてまつはれ遊び給ふ。女君は帳の內にふし給へり。入り給へれど目も見あはせ給はず。つらきにこそはあめれと見給ふもことわりなれど、はゞかり顏にももてなし給はず。御ぞをひきやり給へれば「いづことておはしつるぞ。まろは早う死にき、常に鬼とのたまへば同じくはなりはてなむとて」とのたまふ。「御心こそ鬼よりけにもおはすれ。さまはにくげもなければ得うとみはつまじ」と何心もなういひなし給ふも心やましうて「めでたきさまになまめい給へらむあたりにありふべき身にもあらねばいづちもいづちもうせなむとす。猶かくだになおぼし出でそ。あいなく年比を經けるだに悔しきものを」とて起きあがり給へるさまは いみじうあいぎやうづきてにほひやかにうち赤め給へる顏いとをかしげなり。「かく心幼げに腹立ちなし給へればにや、めなれてこの鬼こそ今は恐しくもあらずなりにたれ。かうがうしきけをそへばや」と戲にいひなし給へば「何事いふぞとよ。おいらかに死に給ひね。まろも死なむ。見ればにくし、聞けば愛ぎやう

なし、見捨てゝ死なむは後めたし」とのたまふにいとをかしきさまのみまさればこまやかに笑ひて「近くこそ見給はざらめ、よそにはなどか聞き給はざらむ。さても契深かなる世をしらせむの御心なゝり。俄にうち續くべかなるよみぢのいそぎはさてこそは契り聞えしか」といとつれなく聞えて、何くれとこしらへ聞え慰め給へばいと若やかに心うつくしうらうたき心はたおはする人なればなほざりごとゝ見給ひながら、おのづからなごみつゝ物し給ふを、いと哀とおぼすものから心は空にて、かれもいと我が心をたてゝつようものものしき人のけはひには見え給はねど、もし猶ほ意ならぬことにて尼になども思ひなり給ひなばをこがましうもあべいかなと思ふに、暫しはとだえおくまじうあわたゞしき心ちして暮れ行くまゝに、今日も御かへりだになきよとおぼして心にかゝりていみじうながめをし給ふ。昨日今日つゆも參らざりける、物聊參りなどしておはす。「昔より御ために志のおろかならざりしさま、おとゞのつらくもてなし給ひしに、世の中のしれがましき名をとりしかど堪へ難きをねんじてこゝかしこすくみ氣色ばみしあたりを數多聞き過ぐしゝ有樣は女だにさしもあらじとなむ、人ももどきし。今思ふにもいかでかはさありけむと、我が心ながらいにしへだに重かりけりと思ひしらるゝを、今はかくにくみ給ふともおぼしすつまじき人々いと所せきまで數そふめれば御心ひとつにもてはなれ給ふべくもあらず。又よしみ給へや、命こそさだめなき世なれ」とてうち泣き給ふこともあり。女も昔の事を思ひ出で給ふに哀にもありがたかりし御中のさすがに契深かりけるかななど思ひ出でたまふ。なよびたる御ぞどもぬぎ給う

て心ことなるをとりかさねて、たきしめ給ひ、めでたうつくろひけさうして出で給ふを、ほかげに見いだして忍び難く涙の出でくれば脱ぎとめ給へるひとへの袖をひきよせて、

「なるゝ身をうらみむよりは松島のあまの衣にたちやかへまし。猶うつし人にてはえすぐすまじかりけり」とひとりごとにのたまふを、立ちとまりて「さも心うき御心かな。

松島のあまのぬれぎぬなれぬとてぬぎかへつてふ名をたゝめやは」。うちいそぎていとなほなほしや。かしこには猶さし籠り給へるを、人々「かくてのみやは。若々しうけしからぬ聞えも侍りぬべきを、例の御有様にて、あるべき事をこそ聞え給はめ」など萬に聞えければ、さもある事とはおぼしながら今より後よその聞えをも我が御心の過ぎにし方をも心づきなくうらめしかりける人のゆかりとおぼしよりてその夜も對面し給はず。「戯れにくゝ珍らかなり」と聞え盡し給ふ。人もいとほしと見奉る。「聊も人心ちするをりあらむに忘れ給はずばともかうも聞えむ。この御服の程は一筋に思ひ亂るゝことなくてだに過ぐさむとなむ深くおぼしのたまはするを、かくいとあやにくにしらぬ人なくなりぬめるを、猶いみじうつらきものに聞え給ふ」と聞ゆ。「思ふ心は又ことざまに後やすきものを、思はずなりける世かな」と打ち歎きて「例のやうにておはしまさば物ごしなどにても思ふことばかり聞えて、御心破るべきにもあらず。數多の年月をも過ぐしつべくなむ」などつきもせず聞え給へど「猶かゝるみだれにそへてわりなき御心なむいみじうつらき。人のきゝ思はむことも萬になのめならざりける身のうさをばさるものにて殊更に心うき御心がまへなり」と又いひかへし恨み

給ひつゝ、遂にのみもてなし給へり。さりとてかくのみやは、人の聞き漏さむこともことわりと、はしたなうこゝの人めもおぼえ給へば「うちうちの御心づかひはこののたまふさまにかなひても志ばしはなさけばまむ。世づかぬ有樣のいとうたてあり、又かゝりとてかきたえ參らずは人の御名いかゞはいとほしかるべき。ひとへに物をおぼしてをさなげなるこそいとほしけれ」などこの人をせめ給へば、げにとも思ひ、見奉るも今は心ぐるしう辱うおぼゆるさまなれば、人かよはし給ふ塗籠の北の口より入れ奉りてけり。いみじうあさましうつらしと、さぶらふ人をもげにかゝる世の人の心なればこれよりまさるめをも見せつべかりけりと、たのもしき人もなくなりはて給ひぬる御身を返す返す悲しうおぼす。男は萬におぼし志るべきことわりを聞え知らせ、言の葉おほう哀にもをかしうも聞え盡し給へど、つらく心つきなしとのみおぼいたり。「いとかういはむ方なきものにおぼされける身の程はたぐひなうはづかしければ、あるまじき心のつきそめけむも心ちなく悔しうおぼえ侍れど、とり返すものならぬうちに何のたけき御名にかはあらむ。いふかひなくおぼしよはれ思ふにかなはぬ時身をなぐるためしも侍るなるを、唯かゝる心ざしをふかき淵になずらへ給ひて捨てつる身とおぼしなせ」と聞え給ふ。單衣の御ぞをひきくゝみてたけきことゝはねをなき給ふさまの心深くいとほしければ、いとうたて、いかなればいとかうおぼすらむ、いみじう思ふ人もかばかりになりぬれば、おのづからゆるぶ氣色もあるを、岩木よりけに靡き難きは契遠うてにくしなど思ふやうあなるを、さやおぼすらむと思ひよるに、あまりなれば心うくて三條の君

の思ひ給ふらむ事、いにしへも何心もなうあひ思ひかはしたりし世の事、年比今はとうらなきさまにうちたゆみとけ給へるさまを思ひ出づるも、我が心もて、いと味氣なう思ひ續けらるれば、あながちにもこしらへ聞え給はず歎きあかし給ひつ。かうのみしれがましうて出で入らむもあやしければ今日はとまりて心のどかに坐す。かくさへひたぶるなるをあさましと宮はおぼいて、いよいよ疎き御氣色のまさるを、をこがましき御心かなとかつはつらきものから哀なり。塗籠も殊にこまかなる物多うもあらでからの唐櫃御厨子などばかり、あるはこなたかなたにかきよせてけぢかうしつらひてぞおはしける。内はくらきこゝちすれど、朝日さし出でたるけはひもり來たるに、うづもれたる御ぞひきやり、いとうたて亂れたるみぐしかきやりなどしてほの見奉り給ふ。いとあてに女しうなまめいたるけはひし給へり。男の御さまはうるはしだち給へる時よりも打ち解けて物し給ふは限もなうきよげなり。故君の殊なることなかりしだに心のかぎり思ひあがり御かたちまほにおはせずと、事の折に思へりし氣色をおぼしいづれは、ましてかういみじう衰へにたる有樣をしばしにても見忍びなむやと思ふもいみじうはづかし。とざまかうざまに思ひめぐらしつゝ我が御心をこしらへ給ふ。唯傍痛うこゝもかしこも人のきゝおぼさむことの罪さらむかたなきに、をりさへいと心うければ慰めがたきなりけり。御手水御かゆなど例のおましの方に參れり。色ことなる御しつらひもいまいましきやうなれば、ひんがし面は屏風をたてゝも屋のきはに香染の御几帳などことごとしきやうに見えぬもの沈の二階などやうのをたてゝ心ばへありてしつらひ

たり。大和守の志わざなりけり。人々もあざやかならぬ色の山吹、掻練、濃ききぬ、青鈍などを着かへさせ薄色のも、青朽葉などをとかくまぎらはして御だいはまゐる。女所にて志どけなく萬の事ならひたる宮のうちにありさま心とゞめて僅なる下人をもいひとゝのへこの人一人のみあつかひおこなふ。かくおぼえぬやんごとなきまらうどの坐すると聞きて、もと勤めざりけるけい司などうちつけに參りてまどころなどいふ方に侍ひて營みけり。かくせめて住みなれがほつくり給ふ程、三條殿かぎりなめりと、さしもやはとこそ、かつは賴みつれ、まめびとの心かはるは名殘なくなむと聞きしは誠なりけりと世をこゝろみはつる心地して、いかさまにしてこのなめげさを見じとおぼしければ、大殿へ方たがへむとて渡り給ひにけるを、女御の御里におはする程などにたいめ志給ひて、少し物思ひはるけ所に覺されて例のやうにも急ぎ渡り給はず。大將殿も聞き給ひて、さればよいと急に物し給ふ本性なり、このおとゞもはたおとなおとなしうのどめたる所さすがになく、いとひきゝりに花やい給へる人々にてめざまし見じ聞かじなどひがひがしき事ども志いで給ひつべきと驚かれ給ひて三條殿に渡り給へれば、君達もかたへはとまり給へれば、姫君たちさてはいとをさなきとをぞゐておはしにける。見つけて悦びむつれあるはうへを戀ひ奉りて憂へ泣き給ふを心苦しとおぼす。せうそこたびたび聞えて迎に奉れ給へど御かへりだになし。かくかたくなしうかるがるしの世やとものしう覺え給へど、おとゞの見聞き給はむ所もあればくらしてみづから參り給へり。寢殿になむ坐するとて例の渡り給ふ方は御達のみ侍らふ。若君達ぞ乳母にそ

ひておはしける。「今更にわかわかしの御まじらひや、かゝる人をこゝかしこにおとしおき給ひてなど寢殿の御まじらひはふさはしからぬ御心のすぢとは年比見知りたれど、さるべきにや、昔より心に離れがたう思ひ聞えて今はかくくだくだしき人のかずかず哀なるをかたみに見すつべきにやは」とたのみ聞えける。「はかなきひとふしにかうはもてなし給ふべくや」といみじうあばめ恨み申し給へば、「何事も今はとみあき給ひにける身なれば今はたなほるべきにもあらぬを、何かは」とて「あやしき人々は覺しすてずは嬉しうこそはあらめ」と聞え給へり。「なだらかの御いらへや。いひもていけば誰が名か惜しき」とてしひて渡り給へともなくてその夜は一人臥し給へり。あやしう中空なる比かなと思ひつゝ君達を前にふせ給ひて、かしこに又いかに覺し亂るらむさま思ひやり聞え、やすからぬ心づくしなればいかなる人からうやうなることをかしうおぼゆらむなど物ごりしぬべう覺え給ふ。明けぬれば「人の見聞かむも若々しきを限とのたまひはてばさて試みむ。かしこなる人々もらうたげに戀ひ聞ゆめりしをえり殘し給へるやうあらむとはみながらも思ひすてがたきを、ともかくももてなし侍りなむ」とおどし聞え給へば、すがすがしき御心にてこの君達をさへや知らぬ所に率て渡し給はむとあやふし。「姫君をいざ給へかし見奉りにかく參りくることもはしたなければ常にも參りこじ。かしこにも人々のらうたきをおなじ所にてだに見奉らむ」と聞え給ふ。まだいといはけなくをかしげにておはす。いと哀と見奉りたまひて「母君の御敎になかなひ給ひそ。いと心うく思ひとる方なき心あるはいと惡しきわざなり」と、いひしらせ奉

り給ふ。おとゞかゝる事を聞き給ひて人わらはれなるやうにおぼし歎く。「志ばしはさても見給はでおのづから思ふところ物せらるらむものを女のかくひききりなるもかへりては輕く覺ゆるわざなり。よしかくいひそめつとならば何かはをれてふとしも歸り給ふ。おのづから人の氣色心ばへは見えなむ」とのたまはせてこの宮に藏人の少將の君を御使にて奉り給ふ。

「契あれや君を心にとゞめおきてあはれと思ひうらめしときく。猶えおぼしはなたじ」とある御文を少將もておはしてたゞいりに入り給ふ。南面の簀子にわらうださし出でゝ人々もの聞えにくし。宮はましてわびしとおぼす。この君は、中にいとかたちよくめやすきさまにてのどやかに見まはしていにしへを思ひ出でたる氣色なり。「參りなれにたる心ちしてうひうひしからぬにさも御覽じゆるさずもやあらむ」などばかりぞかすめ給ふ。「御返しいと聞えにくゝてわれは更にえかくまじ」との給へば「御志もうたてわかわかしきやうに、せじがきはた聞えさすべきにやは」と集まりて聞えさすればまづ打ち泣きて、故上おはせましかばいかに心づきなしとおぼしながらも罪をかくい給はましと思ひ出で給ふに、涙の水莖にさきだつ心ちしてかきやり給はず。

「何ゆゑか世に數ならぬ身ひとつをうしとも思ひかなしともきく」とのみおぼしけるまゝに、かきもとぢめ給はぬやうにておしつゝみて出し給ひつ。少將は人々と物語して「時々さぶらふにかゝる御簾の前はたつきなき心ちし侍るを今よりはよすがある心ちして常に參

るべし。ないげなどもゆるされぬべき年比のしるしあらはれ侍る心地なむし侍る」など氣色ばみおきて出で給ひぬ。いとゞしく心よからぬ御氣色あくがれまどひ給ふ程、大殿の君は日比ふるまゝにおぼし歎くことしげし。ないしのすけかゝる事を聞くに、われを世とともに許さぬものにの給ふなるにかくあなづりにくきことも出できにけるをと思ひて、文などは時々奉ればきこえたり。

「數ならば身にしられまし世のうさを人のためにもぬらす袖かな」。なまけやけしとは見給へど物の哀なる程のつれづれにかれもいとたゞにはおぼえじとおぼすかた心ぞつきにける。

「人の世のうきを哀と見しかども身にかへむとは思はざりしを」とのみあるを、おぼしけるまゝと哀に見る。この昔御中だえの程には、このないしのすけこそ人しれぬものに思ひとめ給へりしかど、ことあらためて後はいとたまさかにつれなくなりまさり給ひつゝ、さすがに君達は數多になりにけり。この御腹には、太郎君、三郎君、四郎君、六郎君、おほい君、中の君、四の君、五の君とおはす。内侍は、三の君、六の君、次郎君、五郎君とぞおはしける。すべて十二人が中にかたほなるなくいとをかしげにとりどりにおひ出で給ひける。内侍腹の君達しもなむかたちをかしう心ばせかどありて皆すぐれたりける。三の君、二郎君は、ひんがしのおとゞにぞとりわきてかしづき奉り給ふ。院も見なれたまひていとらうたくし給ふ。この御なからひのこといひやるかたなくとぞ。

御法

紫の上いたう煩ひ給ひし御こゝちの後、いとあつしくなり給ひてそこはかとなく惱み渡り給ふこと久しくなりぬ。いとおどろおどろしうはあらねど、年月かさなればたのもしげなくいとゞあえかになりまさり給へるを、院のおもほし歎く事かぎりなし。しばしにても後れ聞え給はむことをばいみじかるべくおぼし、みづからの御心ちには、この世に飽かぬことなくうしろめたきほだしだにまじらぬ御身なれば、あながちにかけとゞめまほしき御命ともおぼされぬを、年比の御契かけはなれ思ひ歎かせ奉らむことのみぞ、人しれぬ御心のうちにも物哀におぼされける。後の世のためにと尊き事どもを多くせさせ給ひつゝ、「いかで猶ほいあるさまになりてしばしもかゝづらはむ命の程はおこなひをまぎれなく」とたゆみなく覺しの給へど更にゆるし聞え給はず。さるは我が御心にもしかおぼしそめたるすぢなれば、かくねんごろに思ひ給へるついでに催されて、おなじ道にも入りなむとおぼせど、一度家を出で給ひなば假にもこの世を顧みむとはおぼしおきてず。後の世にはおなじ蓮の座を分けむと契りかはし聞え給ひてたのみをかけ給ふ御中なれど、こゝながらつとめ給はむ程は、おなじ山なりとも峰を隔てゝ、あひ見奉らぬすみかにかけはなれなむ事をのみおぼしまうけたるに、かくいとたのもしげなきさまに惱みあつい給へば、いと心苦しき御有樣を今はとゆき離

れむきざみには捨てがたく、なかなか山水のすみか濁りぬべくおぼしとゞこほるほどに、唯うちあざへたる思ひのまゝの道心起す人々には こよなうおくれ給ひぬべかめり。御ゆるしなくて心ひとつにおぼしたゝむもさまあしくほいなきやうなればこの事によりてぞ女君もうらめしく思ひ聞え給ひける。我が御身をも罪輕かるまじきにやと後めたくおぼされけり。年比わたくしの御願にて書かせ奉り給ひける 法華經千部急ぎて供養し給ふ。我が御殿とおぼす二條院にてぞし給ひける。七僧の法服などしなしな給はす。物の色縫ひ目よりはじめて淸らなる事かぎりなし。大かた何事もいといかめしきわざどもをせられたり。ことごとしきさまにも聞え給はざりければ委しき事どもゝしらせ給はざりけるに、女の御おきてにはいたりふかく佛の道にさへ通ひ給ひける御心の程を、院はいと限なしと見奉り給ひて 大方の御しつらひ何かの事ばかりをなむ營ませ給ひける 樂人舞人などのことは大將の君とりわきて仕うまつり給ふ。內、春宮、きさいの宮達をはじめ奉りて御方々こゝかしこに御誦經ほうもちなどばかりの事をうちし給ふだに所せきに、ましてその比この御いそぎを仕うまつらぬ所なければいとこちたき事どもあり。いつの程にいとかくいろいろおぼしまうけゝむ、げにいそのかみの世々を經たる御願にやとぞ見えたる。花散里と聞えし御方、明石なども渡り給へり。南東の戸をあけておはします。寢殿の西の塗籠なりけり。北の廂に方々の御局どもはさうじばかりをへだてつゝしたり。やよひの十日なれば花盛にて空の景色などもうらゝかに物おもしろく、佛のおはすなる處の有樣遠からず思ひやられて、ことなる深き心もなき

人さへ罪を失ひつべし。薪こるさんだんの聲もそこらつどひたるひゞきおどろおどろしきを、うち休みてしづまりたる程だに哀におぼさるゝを、ましてこの比となりて何事につけても心ぼそくのみおぼしける。明石の御方に三宮して聞えたまへる。

「をしからぬこの身ながらもかぎりとて薪つきなむことのかなしさ」。御かへり心ぼそきすぢは後の聞えも心おくれたるわざにや、そこはかとなくぞあめる。

「薪こるおもひはけふをはじめにてこの世にねがふ法ぞはるけき」。夜もすがらたふときことにうちあはせたる鼓の聲絶えずおもしろし。ほのぼのと明け行く朝ぼらけ、霞の間より見えたる花のいろいろ猶春に心とまりぬべく匂ひわたりて百千鳥のさへづるも笛の音に劣らぬ心ちして物の哀もおもしろさも殘らぬ程に、陵王の舞ひて急になる程の末つかたの樂花やかに賑はゝしく聞ゆるに、皆人のぬぎかけたる物のいろいろなども物の折からにをかしうのみ見ゆ。み子達上達部の中にも、物の上手ども手のこさず遊び給ふ。かみしも心ちよげに興ある氣色どもなるを見給ふにものこり少しと身をおぼしたる御心のうちには萬の事哀におぼえ給ふ。昨日例ならず起き居させ給へりし名殘にや、いと苦しうて臥し給へる、年比かゝる物の折ごとに參りつどひ遊び給ふ人々の御かたち有樣のおのがじゝの才ども琴笛の音をも今日や聞き給ふべきとぢめならむとのみおぼさるれば、さしも目とまるまじき人の顏どもゝ哀に見渡され給ふ。まして夏冬の時につけたる遊び戯ぶれにもなまいどましきしたの心はおのづから立ちまじりもすらめど、さすがに情をかはし給ふ方々は誰も久しくと

まるべき世にはあらざなれど、まづ我ひとり行くへしらずなりなむをおぼしつゞくるいみじう哀なり。ことはてゝおのがじゝ歸り給ひなむとするも遠きわかれめきてをしまる。花散里の御かたに、

「絶えぬべき御法ながらぞたのまるゝ世々にと結ぶ中のちぎりを」。御かへり、

「結びおくちぎりは絶えじ大かたののこりすくなきみのりなりとも」。やがてこのついでに不斷の讀經懺法などたゆみなく尊き事どもをせさせ給ふ。御ず法はことなるしるしも見えで程經ぬれば、例の事になりてうちはへさるべき所々寺々にてぞせさせ給ひける。夏になりては例の暑さにさへいとゞ消え入り給ひぬべき折々多かり。その事とおどろおどろしからぬ御心ちなれど、唯いとよわきさまになり給へれば、むつかしげに所せく惱み給ふ事もなし。さぶらふ人々もいかにおはしまさむとするにかと思ひよるにもまづかきくらしあたらしう悲しき御有樣と見奉る。かくのみおはすれば中宮この院にまかでさせ給ふ。ひんがしの對におはしますべければこなたにはた待ち聞え給ふ。儀式など例に變らねどこの世の有樣を見はてずなりぬるなどのみおぼせば、萬につけて物哀なり。名對面を聞き給ふにもその人かの人など耳とゞめて聞かれ給ふ。上達部などいと多く仕うまつり給へり。久しき御對面のとだえをめづらしくおぼして御物語こまやかに聞え給ふ。院入り給ひて「今夜はすばなれたる心ちして無德なりや。まかりやすみ侍らむ」とて渡り給ひぬ。起き居給へるを嬉しとおぼしたるもいとはかなき程の御なぐさめなり。「方々におはしましてはあなたに渡らせ給はむ

もかたじけなし。参らむことはたわりなくなりにて侍れば」とてしばしはこなたにおはすれば、明石の御方も渡り給ひて心深げにしづまりたる御物語ども聞えかはし給ふ。上は御心のうちにおぼしめぐらす事多かれどさかしげになからむ後などのたまひ出づることもなし。唯なべての世の常なき有樣をおほどかにことずくなゝるものから、あさはかにはあらずのたまひなしたるけはひなどぞ、ことに出でたらむよりも哀に物心ぼそき御氣色はしるう見えける。宮達を見奉り給うても「おのおのゝ御行く末をゆかしく思ひ聞えけるこそかくはかなかりける身を惜む心のまじりけるにや」とて涙ぐみ給へる御顏の匂ひいみじうをかしげなり。などかうのみおぼしたらむとおぼすに中宮うち泣き給ひぬ。ゆゝしげになどは聞えなし給はず、物のついでなどにぞ「年比仕うまつりなれたる人々のことなるよるべなういとをしげなるはこの人かの人侍らずなりなむ後に御心とゞめて尋ねおもほせ」などばかり聞え給ひける。御讀經などによりてぞ例のわが御方に渡り給ふ。三宮はあまたの御中にいとをかしげにてありき給ふを、御心ちのひまには前にすゑ奉り給ひて人の聞かぬまに「まろが侍らざらむにおぼし出でなむや」と聞え給へば「いと戀しかりなむ。まろはうちの上よりも宮よりも母をこそまさりて思ひ聞ゆれ。おはせずば心ちむつかしかりなむ」とて目をすり紛はし給へるさまをかしければほゝゑみながら涙はおちぬ。「おとなになり給ひなばこゝに住み給ひてこの對の前なる紅梅と櫻とは花の折々に心留めてもてあそび給へ。さるべからむをりは佛にも奉り給へ」と聞え給へば、うちうなづきて御顏をまもりて涙の落つべかめれば立ちて

おはしぬ。とりわきておほしたて奉り給へればこの宮と姫宮とをぞ見さし聞え給はむこと口惜しく哀におぼされける。秋待ちつけて世の中すこし涼しくなりては御心ちも聊さはやぐやうなれど猶ともすればかごとがまし。さるは身に志むばかりおぼさるべき秋風ならねど露けきをりがちにてすぐし給ふ。中宮は參り給ひなむとするを今志ばしは御覽ぜよとも聞えまほしうおぼせども、さかしきやうにもありうちの御使の隙なきも煩しければさも聞え給はぬに、あなたにもえ渡り給はねば宮ぞ渡り給ひける。かたはらいたけれどげに見奉らぬもかひなしとて、こなたに御志つらひをことにせさせ給ふ。こよなう瘦せほそり給へれどかくてこそあてになまめかしきことの限なさもまさりてめでたかりけれと、きしかたあまりにほひ多くあざあざとかはせしさかりはなかなかこの世の花のかをりにもよそへられ給ひしを、限もなくらうたげにをかしげなる御さまにていと假初に世を思ひ給へる氣色似るものなく心苦しくすゞろに物がなし。風すごく吹き出でたる夕暮に前栽見給ふとて脇息により居給へるを院渡りて見奉り給ひて「今日はいとよく起き居給ふめるはこの御前にてはこよなく御心もはれはれしげなめりかし」と聞え給ふ。かばかりのひまあるをもいと嬉しと思ひ聞え給へる御氣色を見給ふも心苦しく、つひにいかにおぼしさわがむと思ふにあはれなれば、

「おくと見るほどぞはかなきともすれば風にみだるゝ萩のうは露」。げにぞ折れかへりとまるべうもあらぬ花の露もよそへられたるをりさへ忍びがたきを、

「やゝもせばきえをあらそふ露の世におくれさきだつ程へずもがな」とて御涙をはらひあへ給はず。宮、

「秋風にしばしとまらぬ露の世をたれか草葉のうへとのみ見む」と聞えかはし給ふ。御かたちどもあらまほしく見るかひあるにつけてもかくて千年をすぐすわざもがなとおぼさるれど、心にかなはぬことなればかけとめむ方なきぞ悲しかりける。「今は渡らせ給ひね。みだり心ちいと苦しくなり侍りぬ。いふかひなくなりにける程といひながら いとなめげに侍りや」とて御几帳ひきよせて臥し給へるさまの常よりもいとたのもしげなく見え給へば、いかにおぼさるゝにかとて宮は御手をとらへ奉りてなくなく見奉り給ふに誠に消えゆく露の心ちして限に見え給へば、御誦經の使ども數も知らずたち騒ぎたり。さきざきも斯ていき出で給ふ折にならひ給ひて御ものゝけと疑ひ給ひて夜一夜さまざまのことを盡させ給へどかひもなく、明けはつる程に消えはて給ひぬ。宮も歸り給はでかくて見奉り給へるをかぎりなくおぼす。誰もたれもことわりの別れにてたぐひあることゝもおぼされず、珍らかにいみじく明けぐれの夢にまどひ給ふほどさらなりや、さかしき人おはせざりけり。さぶらふ女房どもあるかぎり更に物覺えたるなし。院はましておぼししづめむ方なければ、大將の君近く參り給へるを御几帳のもとに呼び寄せ奉り給ひて「かく今はかぎりのさまなめるを、年比のほ意ありて思へる事かゝるきざみに その思ひたがへて止みなむがいといとほしきを、 御加持にさぶらふ大とこ達讀經の聲などの皆聲やめて出でぬなめるをさりとも立ちとまりても

のすべきにあらむ。この世には空しき心ちするを佛の御しるし今はかの暗き道のとぶらひだに頼み申すべきをかしらおろすべきよし物し給へ。さるべき僧誰かとまりたる」などのたまふ御けしき心づよくおぼしなすべかめれど、御顏の色もあらぬさまにいみじくたへかね御涙のとまらぬをことわりに悲しく見奉り給ふ。「御ものゝけなどのこれも人の御心亂らむとてかくのみものは侍るを、さもやおはしますらむ。さらばとてもかくても御ほ意のことはよろしき事に侍るなり。一日一夜にても忌むことのしるしこそは空しからず侍るなれど、誠にいふかひなくなりはてさせ給ひて、後の御髮ばかりをやつさせ給ひても、ことなるかの世の御光ともならせ給はざらむものから、目の前の悲びのみまさるやうにて、いかゞ侍るべからむ」と申し給ひて御忌に籠り侍ふべき志ありてまかでぬ僧その人かの人などめしてさるべきことゞもこの君ぞ行ひ給ふ。年比何やかやとおほけなき心はなかりしかど、いかならむ世にありしばかりも見奉らむ、ほのかにも御聲をだに聞かぬことなど心にも離れず思ひ渡りつるものを、聲は遂に聞かせ給はずなりぬるにこそはあめれ、空しき御からにても今一度見奉らむの志かなふべき折は只今より外にいかでかあらむと思ふに、つゝみもあへずなかれて女房のある限り騷ぎまどふを「あなかま、しばし」としづめ顏にて御几帳のかたびらを、物のたまふまぎれに引きあけて見給へば、ほのぼのと明け行く光もおぼつかなければ大となぶら近くかゝげて見奉り給ふに、あかず美しげにめでたう淸らに見ゆる御顏のあたらしさに、この君のかく覗き給ふを見る見るあながちにかくさむの御心もおぼされぬなめり。

「かく何事もまだ變らぬ氣色ながら限りのさまは志るかりけるこそ」とて御袖を顔におしあて給へる程、大將の君も涙にくれて目も見え給はぬを志ひて志をりあけて見奉るに、なかなか飽かず悲しき事たぐひなきに誠に心まどひも志ぬべし。御髮の唯うちやられ給へる程こちたくきよらにてつゆばかり亂れたる氣色もなう艶々と美しげなるさまぞかぎりなき。火のいとあかきに御色はいと志ろく光るやうにて とかくうちまぎらはす事ありし、うつゝの御もてなしよりもいふかひなきさまに何心なくて臥し給へる御有樣の飽かぬ所なしといはむも更なりや。なのめにだにあらずたぐひなきを見奉るに、死にいるたましひのやがてこの御からにとまらむとおもほゆるもわりなきことなりや。仕うまつりたる女房などの 物おもほゆるもなければ、院ぞ何事もおぼしわかれずおぼさるゝ 御心ちをあながちに志づめ給ひて限りの御ことゞもし給ふ。いにしへも悲しとおぼすことも數多見給ひし御身なれど、いとかうおりたちては まだ知り給はざりけることを、すべてきしかた行くすゑたぐひなき心ちし給ふ。やがてその日とかくをさめ奉る。限りありける事なればからを見つゝもえ過ぐし給ふまじかりけるぞ心うき世の中なりける。はるばると廣き野の所もなく立ちこみて限りなくいかめしきさほふなれどいとはかなき烟にて程なくのぼり給ひぬるも例の事なれどあへなくいみじ。空をあゆむ心ちして人にかゝりてぞおはしましけるを見奉る人もさばかりいつかしき御身をと、物の心志らぬげすさへ泣かぬはなかりけり。御おくりの女房はまして夢路にまどふ心ちして車よりもまろび落ちぬべきをぞ もてあつかひける。昔大將の君の御母君

うせ給へりし時の曉を思ひ出づるにもかれは猶物のおぼえけるにや、月のかほのあきらかに覺えしを今夜は唯くれ惑ひ給へる。十四日にうせ給ひてこれは十五日の曉なりけり。日はいと花やかにさしあがりて野邊の露もかくれたるくまなくて世の中おぼしつゞくるにいとゞいとはしくいみじければ、おくるとてもいく世かはふべき。かゝる悲しさのまぎれに昔よりの御ほ意も遂げまほしくおもほせど、心よわき後のそしりをおぼせばこの程を過ぐさむとし給ふに胸のせきあぐるぞ堪へがたかりける。大將の君も御忌に籠り給ひてあからさまにもまかで給はず、明暮近くさぶらひて心苦しくいみじき御氣色をことわりに悲しく見奉り給ひて萬に慰め聞え給ふ。風野分だちて吹く夕暮に昔の事おぼしいでゝ、ほのかに見奉りしものをと戀しく覺え給ふに、又かぎりの程の夢の心ちせしなど人知れず思ひつゞけ給ふに、堪へがたく悲しければ、人めにはさしも見えじとつゝみて阿彌陀佛阿彌陀佛とひき給ふずゝの數にまぎらはしてぞ涙の玉はもてけち給ひける。

「いにしへの秋の夕のこひしきにいまはと見えしあけくれの夢」ぞなごりさへうかりける。やんごとなき僧どもさぶらはせ給ひて、定まりたる念佛をばさるものにて法華經など誦ぜさせ給ふ。かたがたいとあはれなり。臥しても起きても涙のひるよなくきりふたがりて明し暮し給ふ。いにしへより御身の有樣おぼしつゞくるに鏡に見ゆる影をはじめて人には異なりける身ながらいはけなき程より悲しく、常なき世を思ひしるべく佛などのすゝめ給ひける身を心づよくすぐして遂に來しかた行くさきもためしあらじと覺ゆる悲しさを見つる

かな、今はこの世に後ろめたき事殘らずなりぬ、ひた道に行ひにおもむきなむにさはり所あるまじきを、いとかくをさめむ方なき心まどひにては、願はむ道にも入りがたくやとやゝましきをこの思ひ少しなのめに忘れさせ給へと阿彌陀佛を念じ奉り給ふ。所々の御とぶらひうちをはじめ奉りて例の作法ばかりにはあらず いとしげく聞え給ふ。おぼしめしたる心のほどにはさらに何事も目にも耳にもとゞまらず、心にかゝり給ふ事あるまじけれど、人にぼけぼけしきさまに見えじ、今更に我が世の末にかたくなしく心弱きまどひにて世の中をなむ背きにけるとながれとゞまらむ名をおぼしつゝむになむ、身を心に任せぬなげきをさへうちそへ給ひける。致仕のおとゝ哀をも折過し給はぬ御心にて かく世にたぐひなく物し給ふ人のはかなくうせ給ひぬることを口をしく哀におぼして、いとしばしば問ひ聞え給ふ。昔大將の御母上うせ給へりしもこの比のことぞかしとおぼし出づるにいと物悲しく、そのをりかの御身を惜み聞え給ひし人の多くもうせ給ひにけるかな、後れ先だつ程なき世なりけりやなど、しめやかなる夕暮にながめ給ふ。空の氣色もたゞならねば御子の藏人の少將して奉り給ふ。哀なることなどこまやかに聞え給ひて、はしに、

「いにしへの秋さへ今のこゝちしてぬれにし袖に露ぞおきそふ」。をりからに萬のふる事おぼし出でられて何となくその秋の事戀しうかきあつめ、こぼるゝ涙をはらひもあへ給はぬまぎれに、御かへし、

「露けさはむかし今ともおもほえず大かた秋のよこそつらけれ」。物のみ悲しき御心のま

丶ならばまちとり給ひては心よわくも」と「目留め給ひつべきおとゞの御心ざまなればめやすきほどに」と「度々のなほざりならぬ御とぶらひのかさなりぬる事」と悦び聞え給ふ。うすゞみとのたまひしよりは、今すこしこまやかにて奉れり。世の中にさいはひありめでたき人も、あいなう大かたの世にそねまれ、善きにつけても心のかぎりおごりて人のため苦しき人もあるを、あやしきまですゞろなる人にもうけられ、はかなくしいで給ふことも何事につけても世にほめられ、心にくゝ折ふしにつけつゝ、らうらうしくありがたかりし人の御心ばへなりかし。さしもあるまじきおほよその人さへ、その比は風の音蟲の聲につけつゝ涙おとさぬはなし。ましてほのかにも見奉りし人の思ひ慰むべき世なし。年比むつまじく仕うまつり馴れたる人々しばしも殘れる命うらめしき事を歎きつゝ尼になりこの世の外の山ずみなどに思ひたつもありけり。冷泉院のきさいの宮よりもあはれなる御せうそこ絶えず、盡きせぬ事ども聞え給ひて、

「枯れはつる野邊をうしとやなき人の秋に心をとゞめざりけむ。今なむことわり知られ侍りぬる」とありけるを、物おぼえぬ御心にもうちかへし置きがたく見給ふ。いふかひありをかしからむ方のなぐさめには、この宮ばかりこそおはしけれと、聊物まぎるゝやうにおぼしつゞくるにも涙のこぼるゝを、袖のいとまなくえかきやり給はず。

「のぼりにし雲ゐながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に。おしつゝみ給ひても」とばかりうち眺めておはす。すくよかにもおぼされず、われながら殊の外にほれほれし

くおぼし知らるゝ事多かるまぎらはしに女がたにぞおはします。佛のお前に人しげからずもてなしてのどやかにおこなひ給ふ。千年をもろともにとおぼしゝかど、限ある別ぞいと口惜しきわざなりける。今は蓮の露もことことにまぎるまじく後の世をと、ひたみちにおぼしたつ事たゆみなし。されど人ぎゝをはゞかり給ふなむあぢきなかりける。御わざのことゞもはかばかしくのたまひ置きつることとなかりければ、大將の君なむとりもちて仕うまつり給ひける。今日やとのみ我が身も心づかひせられ給ふをり多かるをはかなくてつもりける も夢の心ちのみす。中宮などもおぼし忘るゝ時の間なく戀ひきこえたまふ。

幻

春の光を見給ふにつけてもいとゞくれ惑ひたるやうにのみ御心ひとつは悲しさのあらたまるべくもあらぬに、とには例のやうに人々參り給ひなどすれど、御心地なやましきさまにもてなし給ひて御簾の内にのみおはします。兵部卿の宮わたり給へるにぞ、たゞうちとけたるかたにて對面し給はむとて御せうそこきこえ給ふ。

「我が宿は花もてはやす人もなし何にか春のたづね來つらむ」。宮、うち涙ぐみ給ひて、

「香をとめて來つるかひなく大方の 花のたよりといひやなすべき」紅梅の下に歩み出で給へる御さまのいとなつかしきにぞ これより外に見はやすべき人なくやと見え給へる。花

はほのかに開けさしつゝをかしき程のにほひなり。御あそびもなく例に變りたること多かり。女房なども年比經にけるは墨ぞめの色こまやかにて、きつゝ悲しさも改めがたく思ひさますべき世なく戀ひ聞ゆるに、絕えて御方々にも渡り給はず、まぎれなく見奉るをなぐさめにて慣れ仕うまつる。年比まめやかに御心留めてなどはあらざりしかど時々は見放たぬやうにおぼしたりつる人々も、なかなかかゝる寂しき御ひとりねになりては、いとおほざうにもてなし給ひて夜の御とのゐなどにもこれかれと數多をおましのあたり引きさけつゝ侍らせ給ふ。つれづれなるまゝにいにしへの物語などし給ふ折々もあり。名殘なき御ひじりごゝろの深くなり行くにつけても、さしもありはつまじかりける事につけつゝ、中比物うらめしうおぼしたる氣色の時々見え給ひしなどをおぼし出づるに、などてたはぶれにても又まめやかに心苦しきことにつけても さやうなる心を見え奉りけむ、何事にもらうらうしうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知り給ひながら怨じはて給ふことはなかりしかど、ひとわたりづゝはいかならむとすらむとおぼしたりしに、少しにても心を亂り給ひけむことの いとほしうくやしう覺え給ふさま胸よりも餘る心地し給ふ。その折のことの心をもしり、今も近う仕うまつる人々はほのぼの聞え出づるもあり。入道の宮の渡り始め給へりし程その折はしも色には更に出だし給はざりしかど、事にふれつゝ あぢきなのわざやと思ひ給へりし氣色の哀なりし中にも、雪降りたりし曉に立ちやすらひて 我が身もひえ入るやうに覺えて、空の氣色はげしかりしにいとなつかしうおいらかなるものから、袖のい

たう泣きぬらし給へりけるをひきかくしてせめて まぎらはし給へりし程の用意などを、夜もすがら夢にも又はいかならむ世にかとおぼし續けらる。曙にしも曹司におるゝ女房なるべし、「いみじうも積りにける雪かな」といふを聞きつけ給へる、唯その折の心地するに御傍のさびしきもいふ方なくかなし。

「うき世にはゆき消えなむと思ひつゝおもひの外に猶ぞほどふる」。例のまぎらはしには御てうづめして行ひ給ふ。うづみたる火起し出でゝ御火桶まゐらす。中納言の君中將の君など御前近く御物語きこゆ。獨寢常よりもさびしかりつる夜のさまかな、かくてもいとよく思ひすましつべかりける世を、はかなくもかゝづらひけるかなとうち眺め給ふ。われさへうち捨てゝはこの人々のいとゞ歎きわびむことの哀にいとほしかるべきなど見渡し給ふ。忍びやかにうち行ひつゝ經など讀み給へる御聲を よろしう思はむ事にてだに 涙とまるまじきを、まして 袖のしがらみせきあへぬまで あはれにあけ暮に奉る人々の心地つきせず思ひ聞ゆ。「この世につけては飽かず思ふべきことをさをさあるまじう たかき身には生れながら又人よりもことに口惜しき契にもありけるかな と思ふこと絶えず。世のはかなく憂きをしらすべく佛などのおきて給へる身なるべし。それを強ひて知らぬ顔にながらふれば かく今はの夕近きすゑに いみじき事のとぢめを見つるに、宿世の程もみづからの心のきはも、のこりなく見はてゝ心やすきに今なむ露のほだしなくなりにたるを、 これかれかくて ありしよりげにめならす人々の今はとて行き別れむ程こそ、今ひとときはの心亂れぬべけれ。いとはかなし

かし。わろかりける心の程かな」とて御目おし拭ひかくし給ふに、まぎれずやがてこぼるゝ御涙を見奉る人々ましてせきとめむかたなし。さてうち捨てられ奉りなむがうれはしさをおのおのうち出でまほしけれどさもえ聞えず、むせかへりてやみぬ。かくのみ歎き明し給へる曙、ながめくらし給へる夕暮などのしめやかなる折々は、かのおしなべてにはおぼしたらざりし人々を御前近くてかやうの御物語などし給ふ。中將の君とてさぶらふはまだちひさくより見給ひなれしを、いと忍びつゝ見給ひすぐさずやありけむ、いとかたはら痛きことに思ひて慣れも聞えざりけるを、かくうせ給ひて後は、その方にはあらず人より殊にらうたきものに心留めおぼしたりしものをとおぼし出づるにつけて、かの御かたみのすぢをぞ哀とおぼしたる。心ばせかたちなどもめやすくてうなゐまつに覺えたるけはひたゞならましよりはらうらうしと思ほす。疎き人には更に見え給はず、上達部などもむつましき又御はらからの宮達など常に參り給へれど、對面し給ふことをさをさなし。人に向はむ程ばかりはさかしく思ひしづめ、心をさめむと思ふとも月比にぼけにたらむ身の有樣、かたくなしきひがごとまじりて、末の世の人にもてなやまれむ後の名さへうたてあるべし。おぼゝれてなむ人にも見えざなるといはれむも同じ事なれど、猶音に聞きて思ひやることのかたはなるよりも見苦しきことの目に見るは、こよなくきはまさりてをこなりとおぼせば、大將の君などにだに御簾隔てゝぞ對面し給ひける。かく心かはりし給へるやうに人のいひ傳ふべきころほひをだに思ひのどめてこそはとねんじすぐし給ひつゝうき世をもえ背きやり給はず。御方々

に稀にもうちほのめき給ふにつけては、まづいとせき難き涙の雨のみふりまさればいとわりなくて　いづかたにも覺束なきさまにて過ぐし給ふ。きさいの宮はうちに參らせ給ひて三の宮をぞさうざうしき御なぐさめにはおはしまさせ給ひける。母ののたまひしかばとて對の御前の紅梅取りわきてうしろみありき給へるを　いと哀と見奉り給ふ。二月になれば花の木どもの盛になるもまだしきも、木末をかしう霞み渡れるに、かの御かたみの紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でゝ御覽ず。

「植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らずがほにてきぬる鶯」とうそぶきありかせ給ふ。春深くなりゆくまゝに御前の有樣いにしへに變らぬを　めで給ふ方にはあらねど、しづ心なく何事につけても胸いたうおぼさるれば大かたの世の外のやうに鳥の音も聞えざらむ山のすゑゆかしうのみいとゞなりまさり給ふ。山吹などの心地よげに咲きみだれたるもうちつけに露けくのみ見なされ給ふ。外の花は一重散りて八重咲く花櫻さかり過ぎて樺櫻はひらけ、藤は後れて色づきなどこそはすめるを、その遲く疾き花の心をよくわきていろいろをつくし植ゑおき給ひしかば、時を忘れず匂ひ滿ちたるに若宮「まろが櫻は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに几帳を立てゝかたびらをあげずば風もえ吹きよらじ」とかしこう思ひえたりと思ひてのたまふ。顏のいと美くしきにもうちゑまれ給ひぬ。「おほふばかりの袖もとめけむ人よりはいとかしこうおぼしより給へりかし」などこの宮ばかりをぞもてあそびに見奉り給ふ。「君になれ聞えむこともののこり少しや。命といふもの今しばしかゝ

づらふべくとも對面はえあらじかし」とて例の涙ぐみ給へればいとものしとおぼして、母ののたまひしことをまがまがしうのたまふとて、ふしめになりて御ぞの袖を引きまさぐりなどしつゝまぎらはしおはす。すみの間の高欄におしかゝりて御前の庭をも御簾の内をも見渡してながめ給ふ。女房などもかの御かたみの色かへぬもあり。例の色あひなるもあやなど花やかにはあらず、みづからの御直衣も色は世のつねなれど殊更にやつして無紋を奉れり。御志つらひなどもいとおろそかにことそぎて寂しく物心ぼそげにしめやかなれば、

「今はとてあらしやはてむなき人の心とゞめし春のかきねを」。人やりならずかなしうおぼさる。いとつれづれなれば入道の宮の御方に渡り給ふに、若宮も人に抱かれておはしましてこなたの若君と走り遊び花をしみ給ふ心ばへども深からず、いといはけなし。宮は佛の御前にて經をぞ讀み給ひける。何ばかり深うおぼしとれる御道心にもあらざりしかど、この世にうらめしく御心亂るゝ事もおはせず、のどやかなるまゝにまぎれなく行ひ給ひて一つ方に思ひはなれ給へるもいとうらやまし。かくあざへ給へる女の御志にだにおくれぬることゝ口惜しうおぼさる。あかの花の夕ばえしていとおもしろく見ゆれば、春に心よせたりし人なくて花の色すさまじくのみ見なさるゝを「佛の御かざりにてこそ見るべかりけれ」とのたまひて「對の前の山吹こそ猶世に見えぬ花のさまなれ。ふさの大きさなどよ志な高うなどはおきてざりける花にやあらむ。花やかににぎはゝしきかたは いとおもしろきものになむありける。植ゑし人なき春とも志らず顏にて常よりも匂ひかさねたるこそ哀に侍れ」とのたま

ふ。御いらへに「谷には春も」と何心もなく聞え給ふを、ことしもこそあれ心憂くもとおぼさるゝにつけては、その事のさらでもありなむかしと思ふに違ふふしなくてもやみにしかなと、いはけなかりし程よりの御有樣をいで何事ぞやありしとおぼし出づるには、まづその折かの折かどかどしうらうらうじう匂ひ多かりし心ざま、もてなし、言の葉のみ思ひ續けられ給ふに、例の涙のもろさはふとこぼれ出でぬるもいと苦し。夕暮の霞たどたどしうをかしき程なれば、やがて明石の御方に渡り給へり。久しうさしものぞき給はぬに覺えなき折なれば打ち驚かるれど、さまようけはひ心にくゝもてつけて、猶こそ人には優りたれと見給ふにつけては、又かうざまにはあらでこそ故よしをもてなし給へりしかとおぼしくらべらるゝにも面影に戀しう悲しさのみ增れば、いかにして慰むべき心ぞといとくらべ苦し。こなたにてはのどやかに昔物語など聞え給ふ。「人をあはれと心留めむはいとわるかるべきことゝいにしへより思ひえて、すべていかなる方にもこの世に執とまるべきことなくと心づかひをせしに、大方の世につけて身のいたづらにはふれぬべかりし比ほひなど、とざまかうざまに思ひめぐらしゝに、命をもみづから捨つべく、野山の末にはふらかさむに殊なるさはりあるまじうなむ思ひなりしを末の世に今はかぎりの程近き身にてしもあるまじきほだし多うかゝづらひて、今まで過ぐしてけるが心弱うもどかしきことなど、さしていとすぢの悲しさにのみはのたまはねど、おぼしたるさまのことわりに心苦しきをいとほしう見奉りて、大方の人めに何ばかり惜しげなき人だに心のうちのほだしおのづからおほう侍るなるを、まして

いかてかは心やすくもおぼし捨てむ。さやうにあざへたることはかへりてかるがるしきもどかしさなども立ち出でゝなかなかなる事など侍るなるをおぼしたつ程にぶきやうに侍らむや。また遂に住みはてさせ給ふ方深う侍らむと思ひやられ侍りてこそ。古のためしなどを聞き侍るにつけても心に驚かれ思ふより違ふふしありて世を厭ふついでになるとか。それは猶わるきことゝこそ。猶志ばしおぼしのどめさせ給ひて宮たちなどもおとなびさせ給ひまことに動きなかるべき御有様に見奉りなさせ給はむまでは亂れなく侍らむこそ、心やすくもうれしくも侍るべけれ」などいとおとなびて聞えたるけしきいとめやすし。「さまで思ひのどめむ心深さこそ淺きに劣りぬべけれ」などのたまひて、昔より物を思ふことなど語り出で給ふ中に「故きさいの宮のかくれ給へりし春なむ、花の色を見ても誠に心あらばとおぼえし。それは大方の世につけてをかしかりし御有様をさなくより見奉り志みて、さるとぢめのかなしさも人より殊におぼえしなり。みづからとりわく心ざしにしも物の哀はよらぬわざなり。年經ぬる人におくれて心をさめむかたなく忘れがたきも唯かゝる中のかなしさのみにはあらず。幼き程よりおほしたてしありさま諸共に老いぬる末の世に打ち捨てられて、我が身も人の身も思ひつゞけらるゝ悲しさの堪え難きになむ。すべて物の哀も故あることもをかしきすぢも廣うおもひめぐらす。方々そふことの淺からずなるになむありける」など夜更くるまで今昔の御物語にかくても明しつべき夜をとおぼしながらかへり給ふを女も物哀に思ふべし。我が御心にもあやしくもなりにけるかなとおぼし志らる。さても又例の御

行ひに夜中になりてぞ曉のおましいとかりそめにより臥し給ふ。つとめて御文奉り給ふに、

「なくなくも歸りにしかな假の世はいづくもつひのとこよならぬに」。よべの御有樣はうらめしげなりしかど いとかくあらぬさまにおぼしほれたる御氣色の心苦しさに、身の上はさしおかれて涙ぐまれ給ふ。

「雁がゐし苗代水の絶えしよりうつりし花のかげをだに見ず」。ふりがたうよしある書きざまにもなまめざましきものにおぼしたりしを、末の世にはかたみに心ばせを見ゑるどちにてうしろやすき方にはうちたのむべく思ひかはし給ひながら、またさりとてひたぶるにはたうちとけず、ゆゑありてもてなし給へりし心おきてを、人はさしも見知らざりきかしなどおぼし出づ。せめてさうざうしき時はかやうに唯大方にうちほのめき給ふ折々もあり。昔の御ありさまには名殘なくなりにたるべし。夏の御方より御ころもがへの御裝束奉り給ふとて、

「夏衣たちかへてけるけふばかりふかき思ひもすゝみやはせぬ」。御かへし、

「羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとゞ悲しき」。祭の日いとつれづれにて今日は物見るとて人々心地よげならむかしとてみ社のありさまなどおぼしやる。「女房などいかにさうざうしからむ。里に忍びて出でゝ見よかし」などのたまふ。中將の君ひんがしおもてにうたゝねしたるを歩みおはして見給へればいとさゝやかにをかしきさまして起き上りたり。つらつき花やかに匂ひたる顏もてかくして少しふくだみたる髮のかゝりなどいとをかしげなり。紅のきばみたるけそひたる袴、くわんざう色のひとへ いと濃き鈍色に黑

きなどうるはしからず重なりて、裳、唐衣もぬぎすべしたりけるをとかくひきかけなどするに、葵を傍に置きたりけるをとり給ひて「いかにとかや、この名こそ忘れにけれ」とのたまへば、

「さもこそはよるべの水にみ草ゐめけふのかざしよ名さへわするゝ」とはぢらひて聞ゆ。げにといとほしくて、

「大かたは思ひ捨てゝし世なれども葵はなほやつみをかすべき」など一人ばかりはおぼしはなたぬけしきなり。五月雨はいとゞながめくらし給ふより外の事なくさうざうしきに、十餘日の月花やかにさし出でたる雲間のめづらしきに大將の君御前にさぶらひ給ふ。花たちばなの月かげにいときはやかに見ゆるかをりも追風なつかしければ千世をならせる聲もせなむとまたるゝほどに、俄に立ち出づるむら雲のけしきいとあやにくにておどろおどろしうふりくる雨にそひて、さと吹く風にとうろも吹きまどはして空くらき心地するに、窓をうつ聲などめづらしからぬふるごとをうち誦し給へるも折からにや。妹が垣根におとなはせまほしき御聲なり。「獨住みは殊にかはることなけれどあやしうさうざうしくこそありけれ。深き山住みせむにもかくて身をならはしたらむはことなう心すみぬべきわざなりけり」などのたまひて「女房こゝにくだものなど參らせよ。男ども召さむもことごとしき程なり」などのたまふ。心にはたゞ空を眺め給ふ御氣色のつきせず心苦しければかくのみおぼしまぎれずは、御行ひにも御心すまし給はむことかたくやと見奉り給ふ。ほのかに見し御面影だ

に忘れがたし。ましてことわりぞかしと思ひ居給へり。昨日今日と思ひ給ふるほどに御はてもやうやう近うなり侍りにけり。いかやうにかおきておぼしめすらむと申し給へば「何ばかり世の常ならぬことをかはものせむ。かの志おかれたる極樂のまだらなどこの度なむ供養すべき。經などもあまたありけるをなにがし僧都皆その心くはしう聞き置きたなれば又加へてすべきことどもゝかの僧都のいはむに從ひてなむ物すべき」などのたまふ。「かやうのことゞももとよりとりたてゝおぼしおきてけるはうしろやすきわざなれどこの世にはかりそめの御契なりけりと見給ふにはかたみといふばかり留め聞え給へる人だにものし給はぬこそ口惜しう侍りけれ」と申し給へば、「それはかりそめならず、命ながき人々にもさやうなることの大方少かりけるみづからの口惜しさにこそ。そこにこそはかどはひろげ給はめ」などのたまふ。何事につけても忍びがたき御心よわさのつゝましくて過ぎにしことといたうものたまひ出でぬに、またれつる杜鵑のほのかにうち鳴きたるもいかにしりてかと、聞く人たゞならず。

「なき人を忍ぶるよひの村雨にぬれてやきつる山ほとゝぎす」。いとゞ空をながめ給ふ。大將、

「杜鵑きみにつてなむふるさとの花たちばなは今ぞさかりと」。女房など多くいひあつめたれどとゞめず。大將の君はやがて御とのゐに侍ひ給ふ。さびしき御獨寢の心苦しければ時々かやうに侍ひ給ふをおはせし夜はいとけどほかりし。おましのあたりのいたうも立ち離

れぬなどにつけて思ひ出でらるゝこともおほかり。いと暑きころ涼しき方にてながめ給ふに、池の蓮の盛なるを見給ふにいかにおほかるなどまづおぼし出でらるゝに、ほれぼれしくてつくづくとおはする程に日も暮れにけり。ひぐらしの聲はなやかなるに御前のなでしこの夕ばえを一人のみ見給ふには、實にぞかひなかりける。

「つれづれとわがなきくらす夏の日をかごとがましき蟲の聲かな」。螢のいとおほう飛びちがふも、「夕殿に螢とんで」と例のふるごともかゝるすぢにのみ口なれ給へり。

「夜をしる螢を見てもかなしきは時ぞともなきおもひなりけり」。七月七日も例にかはりたることおほく、御あそびなどもし給はでつれづれに詠めくらし給ひて星合見る人もなし。まだ夜ふかう一所起き居給ひて妻戸押しあけ給へるに前栽のつゆいとしげく渡殿の戸よりとほりて見渡さるればいで給ひて、

「七夕の逢ふせは雲のよそに見てわかれの庭につゆぞおきそふ」。風の音さへたゞならずなり行く比しも、御法事のいとなみにてついたち比はまぎらはしげなり、今まで經にける月日よとおぼすにもあきれて明しくらし給ふ。御正日にはかみしもの人々皆いもひして、かの曼陀羅など今日ぞ供養せさせたまふ。例の宵の御行ひに御手水まゐらする中將の君の扇に、

「君こふる涙はきはもなきものを今日をばなにのはてといふらむ」とかきつけたるをとりて見給ひて、

「人こふる我が身も末になりゆけどのこりおほかる涙なりけり」とかきそへ給ふ。九月になりて九日おほひたる菊を御覽じて、

「もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝるあきかな。神無月は大かたもしぐれがちなる比、いとゞながめ給ひて夕暮の空の氣色などもえもいはぬ心ぼそさにふりしかど」とひとりごちおはす。雲ゐをわたる雁のつばさもうらやましくまもられ給ふ。

「大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬたまのゆくへたづねよ」。何事につけてもまぎれずのみ月日にそへておぼさる、五節などいひて世の中そこはかとなく今めかしげなる頃、大將殿の君達殿上し給ひて參り給へり。同じ程にて二人いとうつくしきさまなり。御をぢの頭中將藏人少將などをみにて靑摺のすがたども淸げにめやすくて、皆うち續きもてかしきつゝ諸共に參り給ふ。思ふ事なげなるさまどもを見給ふに いにしへあやしかりし日影のをりさすがにおぼし出でらるべし。

「宮人はとよのあかりにいそぐけふ日かげもしらでくらしつるかな」。今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去り給ふべきほど近くおぼしまうくるに哀なることつきせず。やうやうさるべきことゞも御心のうちにおぼしつゞけて侍ふ人々にもほどほどにつけてものたまひなど、おどろおどろしく今なむ限りとしなし給はねど、近う侍ふ人々は御ほ意遂げ給ふべき氣色と見奉るまゝに、年の暮れゆくも心ぼそう悲しきことかぎりなし。落ちとまりてかたはなるべき人の御文どもやればをしとおぼされけるにや、少しづゝのこし給ひけるを、

物のついでに御覽じつけてやらせ給ふなどするに、かの須磨のよろぼひ所々より奉り給ひけるもある中に、かの御手なるは殊にゆひあはせてぞありける。みづからしおき給ひけることなれど久しうなりにける世のことゝおぼすに、只今のやうなる墨つきなど實に千とせのかたみにしつべかりけるを見ずなりぬべきよとおぼせば、かひなくて疎からぬ人々二三人ばかり御前にてやらせ給ふ。いとかゝらぬほどのことにてだに過ぎにし人の跡と見るは哀なるを、ましていとゞかきくらし、それとも見わかれぬまで降りおつる御涙の水茎に流れそふを人もあまり心よわしと見奉るべきが、かたはらいたうはしたなければおしやり給ひて、

「しでの山越えにし人をしたふとて跡を見つゝもなほまどふかな」。さぶらふ人々もまほにはえひろげねど、それとほのぼの見ゆるに心惑ひどもおろかならず。この世ながら遠からぬ御別のほどをいみじとおぼしけるまゝにかい給へる言の葉、實にそのをりよりもせきあへぬ悲しさやらむかたなし。いとうたて、今ひとときはの御心惑ひもめゝしく人わろくなりぬべければ、能くも見給はでこまやかに書き給へるかたはらに、

「かきつめて見るもかひなしもしほ草おなじ雲ゐの烟となれ」とかきつけさせ給ひて皆やかせ給ひつ。御佛名も今年ばかりにこそはとおぼせばにや、常よりもことにさくぢやうの聲々などあはれにおぼさる。行く末ながきことを希ふも佛の聞き給はむことかたはらいたし。雪いたうふりてまめやかに積りにけり。導師のまかづるを御前にめしてさかづきなど常の作法よりもさしわかせ給ひて殊に祿などたまはす。年比久しくまゐり公にも仕うまつ

りて院にも御覽じ馴れたる御導師の頭はやうやう色かはりて侍ふも哀におぼさる。例の宮達上達部などあまた參り給へり。梅の花のわづかに氣色ばみはじめて雪にもてはやされたる程をかしきを、御あそびなどもありぬべけれど猶今年までは物の音もむせびぬべき心地し給へば時によりたるものうち誦じなどばかりぞせさせ給ふ。まことや導師の盃のついでに、

「春までの命もしらず雪のうちにいろづく梅をけふかざしてむ」。御かへし、

「千世の春見るべき花といのりおきて我が身ぞ雪とともにふりぬる」。人々おほくよみおきたれど、もらしつ。その日ぞ出で給へる。御かたち昔の御光にも又おほくそひてありがたくめでたく見え給ふを、このふりぬるよはひの僧はあいなう涙もとゞめざりけり。年暮れぬとおぼすも心ぼそきに若宮のなやらはむに音たかゝるべきことなにわざをせさせむと走りありき給ふもをかしき御ありさまを見ざらむことゝ、よろづに忍びがたし。

「物思ふと過ぐる月日もしらぬまに年も我が世もけふやつきぬる」。朔のほどのこと常よりことなるべくとおきてさせたまふ。みこたち大臣の御引出物品々の祿どもなど二なうおぼしまうけてとぞ。

匂宮

光かくれ給ひにしのちかのみかげに立ちつぎ給ふべき人そこらの御末々にありがたかりけ

りゐ。おりゐのみかどをかけ奉らむはかたじけなし。當代の三宮そのおなじおとゞにておはし出で給ひし宮の若君とこの二所なむとりどりにきよらなる御名とり給ひてげにいとなべてならぬ御有樣なめれどいとまばゆきはにはおはせざるべし。唯世の常の人ざまにめでたくあてになまめかしくおはするをもとゝして、さる御なからひに人の思ひ聞えたるもてなしありさまもいにしへの御ひゞきけはひよりもやゝ立ちまさり給へるおぼえがらなむ、かたへはこよなういつくしかりける、紫の上の御心よせことにはぐゝみ聞え給ひしゆゑ。三宮は二條院におはします。春宮をばさるやんごとなきものにおき奉り給ひてみかどきさきいみじく悲しうし奉りかしづき聞えさせ給ふ宮なれば、内ずみをせさせ奉り給へど、猶心安き故郷に住みよくし給ふなりけり。御元服し給ひては兵部卿の宮と聞ゆ。女一宮六條院の南の町の東の對をそのよのしつらひを改めずおはしまして朝夕に戀ひ忍び聞え給ふ。二宮もおなしおとゞの寢殿を時々の御やすみ所にし給ひて梅壺を御曹司にし給ひて右のおほい殿の中姫宮を得奉り給へり。つぎの坊がねにていとおぼえことにおもおもしう人がらもすくよかになむものし給ひける。おほいとのゝ御むすめはいとあまたものし給ふ。大姫君は春宮に參り給ひて またきしろふ人なきさまにて侍ひ給ふ。そのつぎつぎ皆ついでのまゝにこそはと世の人も思ひきこえきさいの宮ものたまはすれど、この兵部卿宮はさしもおぼしたらず、我が御心よりおこらざらむことなどは凄じくもおぼしぬべき御氣色なめり。おとゞもなにか

はやうのものとさのみうるはしうはとしづめ給へど、又さる御氣色あらむをばもてはなれてもあるまじうおもむけて、いといたうかしづき聞え給ふ。六の君なむそのころ少しわれはと思ひのぼり給へるみこたちかんだちめの御心つくすくさはひにものし給ひける。院かくれ給ひて後さまざま集ひ給へりし御方々なくなく遂におはすべきすみかどもにおのおのうつろひ給ひしに花散里と聞えしは東の院をぞ御そうぶんの所にて渡り給ひにける。入道の宮は三條の宮におはします。いまきさきは内にのみさぶらひ給へば、院のうちさびしく人ずくなになりにけるを、右のおとゞ人のうへにていにしへのためしを見聞くにも生けるかぎりの世に心を留めてつくりしめたる人の家居の、名殘なくうちすてられて世のならひも常なく見ゆるはいと哀にはかなさ知らるゝを、我が世にあらむかぎりだに、この院あらさずほとりの大路などひとかげかれはつまじうとおぼしの給はせて、丑寅の町にかの一條の宮を渡し奉らせ給ひてなむ、三條殿と夜ごとに十五日づゝうるはしう通ひ住み給ひける。二條院とてつくりみがき六條院の春のおとゞとて世にのゝしりし玉のうてなも唯一人の御末のためなりけりと見えて、明石の御方はあまたの宮達の御うしろみをしつゝあつかひ聞え給へり。おほい殿はいづかたの御事をも昔の御心おきてのまゝに改めかはることなく、あまねき親心に仕うまつり給ふにも對の上のかやうにてとまり給へらましかば、いかばかり心をつくして仕うまつり見え奉らまし、遂にいさゝかも取りわきて我が心よせと見知り給ふべきふしもなくて過ぎ給ひにしことを、口惜しく飽かず悲しう思ひ出で聞え給ふ。天の下の人院

を戀ひ聞えぬなく、とにかくにつけても世はたゞ火をけちたるやうに何事もはえなきなげきをせぬ折なかりけり。まして殿の内の人々御方々宮達などは更にも聞えず、限なき御事をばさるものにてまたかの紫の上の御有樣を心にしめつゝ萬の事につけて思ひ出で聞え給はぬ時のまなし。春の花の盛はげに長からぬにしも覺えまさるものになむ。二品の宮の若君は院のきこえつけ給へりしまゝに冷泉院のみかどとりわきておぼしかしづき后の宮もみこたちなどおはせず心ぼそうおぼさるゝに、うれしき御うしろみにまめやかにたのみ聞え給へり。御元服なども院にてせさせ給ふ。十四にて二月に侍從になり給ふ。秋右近の中將になりて御たうばりの加階などをさへいづこの心もとなきにか急ぎ加へておとなびさせ給ふ。おはしますおとゞ近き對を曹司にしつらひなどみづから御覽じいれて若き人もわらはしもづかへまで勝れたるをえりとゝのへ、女の御氣色よりもまばゆく整へさせ給へり。上にも宮にもさぶらふ女房の中にもかたちよくあてやかにめやすきは皆うつし渡させ給ひつゝ、院の内を心につけてすみよくありよく思ふべくとのみわざとがましき御あつかひぐさにおぼされ給へり。故致仕のおほい殿の女御と聞えし御腹に女宮たゞ一所おはしけるをなむ限りなくかしづき給ふ御有樣におとらず。后の宮の御おぼえの年月にまさり給ふけはひにこそは。などかさしもと見るまでなむ。母宮は今はたゞ御行をしづかにし給ひて月ごとに御念佛、年に二度の御八講をりをりの尊き御いとなみばかりをし給ひてつれづれにおはしませばこの君の出で入り給ふをかへりては親のやうにたのもしきかげにおぼしたれば、いと哀にて院

にも内にも召しまつはし春宮も次々の宮達も なつかしき御あそびがたきにて伴ひ給へば、いとまなく苦しうて いかで身をわけてしがなと覺え給ひける。をさな心地にほの聞き給ひしことのをりをりいぶかしうおぼつかなく思ひ渡れど問ふべき人もなし。「宮にはことの氣色にても志りけりとおぼされむ。かたはらいたきすぢなれば世とゝもの心にかけて いかなりける事にかは、何の契にてかうやすからぬ思ひ添ひたる身にしもなりいでけむ。ぜんげうたいしの我が身に問ひけむさとりをもえてしがな」とぞひとりごたれ給ひける。

「おぼつかな誰にとはまし いかにしてはじめもはても知らぬ我が身ぞ」。いらふべき人もなし。事にふれて我が身につゝがある心地するもたゞならず物なげかしくのみ 思ひめぐらしつゝ、宮もかく盛の御かたちをやつし給ひて なにばかりの御道心にてか俄に 赴き給ひけむ、かく思はずなりけることのみだれに必ず憂しとおぼしなるふしありけむ、人もまさにもり出で志らじやは、猶つゝむべきことの聞えにより われには氣色を志らする人のなきなめりと思ふ。明暮勤め給ふやうなめれどはかもなくおほどき給へる女の御さとりの程に 蓮の露もあきらかに玉と磨き給はむことかたし、五つのなにがしも猶うしろめたきを、われこの御心地をたすけておなじうは後の世をだにと思ふ。かの過ぎ給ひにけむも 安からぬおもひにむすぼゝれてやなどおしはかるに、世をかへても對面せまほしき心つきて 元服はものうがり給ひけれどすまひはてず、おのづから世の中にもてなされてまばゆきまで 花やかなる御身のかざりも心につかずのみ思ひ志づまり給へり。内にも 母宮の御かたざまの心よせ深

くていと哀なるものにおぼされ、きさいの宮はたもとよりひとつおとゞにて、宮達諸共に生ひ出て遊び給ひし御もてなしをさをさ改め給はず、末に生れ給ひて心苦しうおとなしうもえ見おかぬことゝ、院のおぼしのたまひしを思ひ出て聞え給ひつゝおろかならず思ひ聞え給へり。右のおとゞも我が御こどもの君達よりもこの君をばこまやかにやんごとなくもてなしかしづき奉り給ふ。むかし光君と聞えしはさるまたなき御おぼえながら、猜み給ふ人うちそひ母方の御後見なくなどありしに御心ざまも物深く世の中をおぼしなだらめし程に、ならびなき御ひかりをばまばゆからずもてしづめ給ふ。遂にさるいみじき世のみだれも出できぬべかりしをも事なく過ぐし給ひて後の世の御つとめもおくらかし給はず、よろづさりげなくて久しくのどけき御心おきてにこそありしか。この君はまだしきに世のおぼえいと過ぎて思ひあがりたることこよなくなどぞ物し給ふ。げにさるべくていとこの世の人とは造り出でざりける、假に宿れるかとも見ゆること添ひ給へり。顔かたちもそこはかといづこなむすぐれたるあなきよらと見ゆる所もなきが、たゞいとなまめかしう恥しげに心のおくおほかりげなるけはひ人に似ぬなりけり。かのかうばしさぞこの世のにほひならず、あやしきまでうちふるまひ給へるあたり遠く隔たる程のおひ風もまことに百歩の外も薫りぬべき心地しける。誰もさばかりになりぬる御有樣のいとやつればみたゞありなるやはあるべき。さまざまにわれ人にまさらむとつくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで打ち忍び立ちよらむも物のくまもしるきほのかくれあるまじきにうるさがりてをさをさ取

りもつけ給はねどあまたの御唐櫃にうづもれたるからのかども、この君のはいふよしもなき匂ひをくはへ、御前の花の木もはかなく袖かけたまふ梅の香は春雨の雫にもぬれ身にしむる人おほく、秋の野にぬしなき藤袴ももとのかをりはかくれてなつかしき追風ことにをりなしからなむまさりける。かくあやしきまで人のとがむる香にしみ給へるを、兵部卿宮なむことごとよりもいどましくおぼして、それはわざと萬の勝れたるうつしをしめ給ひ朝夕のことわざにあはせいとなみ、お前の前栽にも春は梅の花園をながめ給ひ、秋は世の人のめづる女郎花さをしかのつまにすめる萩の露にもをさをさ御心うつしたまはず、老を忘るゝ菊に衰へ行く藤袴ものげなきわれもかうなどはいとすさまじき霜枯の比ほひまでおぼし捨てずなど、わざとめきて香にめづる思ひをなむ立てゝこのましうおはしける。かゝる程に少しなよびやはらぎすぎてすきたる方にひかれ給へりと世人は思ひ聞えたり。昔の源氏はすべてかくたてゝその事とやうがはりしみ給へる方ぞなかりしかし。源中將この宮には常に參りつゝあそびなどにもきしろふものゝ音を吹き立て、げにいどましくも若きどち思ひかはし給ひつべき人のさまになむ。例の世人はにほふ兵部卿、かをる中將と聞きにくゝいひつゞけてその比よきむすめおはするやうごとなき所々は心ときめきに聞えごちなどしめ給ふもあれば、宮はさまざまにをかしうもありぬべきわたりをばのたまひよりて人の御けはひありさまをも氣色とり給ふ。わざと御心につけておぼすかたはことになかりけり。冷泉院の一宮をぞさやうにても見奉らばやかひありなむかしとおぼしたるは、母女御もいとおもく

心にくゝ物し給ふあたりにて、姫君の御けはひげにとありがたく勝れてよその聞えもおはしますに、まして少し近くもさぶらひなれたる女房などの委しき御有樣の事にふれて聞え傳ふるなどもあるにいとゞ忍びがたくおぼすべかめり。中將は世の中を深くあぢきなきものに思ひすましたる心なればなかなか心とゞめて行きはなれ難きおもひや殘らむなど思ふに、煩しき思ひあらむあたりにかゝづらはむはつゝましくなど思ひ捨て給ふ。さしあたりて心にしむべきことのなき程さかしだつにやありけむ、人のゆるしなからむ事などはまして思ひよるべくもあらず。十九になり給ふ年三位の宰相にて猶中將もはなれ給はず、みかどきさきの御もてなしにたゞ人にてははゞかりなきめでたき人のおぼえにてものし給へど、心のうちには身を思ひしるかたありて物哀になどもありければ心にまかせてはやりかなるすきごとをさを好まず、萬の事もてしづめつゝおのづからおよすげたる心ざまを人にもしられ給へり。三宮年にそへて心をくだき給ふめる。院の姫宮の御あたりを見るにもひとつ院の内に明暮立ちなれ給へば、事にふれても人のありさまを聞え見奉るにげにいとなべてならず、心にくゝゆゑゆゑしき御もてなし限なきを同じくはげにかやうならむ人を見むにこそ生ける限の心ゆくべきつまなれと思ひながら大方こそへだつることなくおぼしたれ。姫宮の御かたざまのへだてはこよなくけ遠くならはさせ給ふもことわりにわづらはしければあながちにも交らひよらず、若し心より外の心もつかばわれも人もいと惡しかるべきとと思ひしりて物馴れよることもなかりけり。我がかく人にめでられむとなり給へる有樣なれ

ば、はかなくなげの詞をちらし給ふあたりもこよなくもてはなるゝ心なく靡きやすなるほどに、おのづからなほざりのかよひ所もあまたになるを人のためにことごとしくなどもてなさず。いとよくまぎらはしそこはかとなく情なからぬ程のなかなか心やましきを思ひよれる人はいざなはれつゝ三條の宮に參りあつまるはあまたあり。つれなきを見るも苦しげなるわざなめれど、絶えなむよりはと心ぼそきに思ひわびて、さもあるまじききはの人々のはかなき契りにたのみをかけたる多かり。さすがにいとなつかしう見所ある人の御ありさまなれば、見る人皆心にはからるゝやうにて見過ぐさる。宮のおはしまさむ世のかぎりは朝夕に御めかれず御覽ぜられ、見奉らむをだにと思ひのたまへば、右のおとゞもあまた物し給ふ御むすめたちを、一人一人はと心ざし給ひながらえことに出で給はず。さすがにゆかしげなきなからひなるをとは思ひなせど、この君達を置きて外にはなずらひなるべき人を求め出づべきよかはとおぼしわづらふ。やんごとなきよりもないしのすけばらの六の君はいとすぐれてをかしげに心ばへなどもたらひて生ひ出で給ふを、世のおぼえのおとしめざまなるべきしもかくあたらしきを心苦しうおぼして、一條の宮のさるあつかひぐさもたまへられでさうざうしきに迎へとりて奉り給へり。わざとはなくてこの人々に見せそめては必ず心留め給ひてむ、人の有樣をも見知る人はことにこそあるべけれなどおぼして、いといつくしうはもてなし給はず、今めかしくをかしきやうに物ごのみさせて人の心づけむたより多くつくりなし給ふ。のりゆみのかへりあるじのまうけ六條院にていと心ことに志給ひて

御子をもおはしまさせむの心づかひし給へり。その日みこたちおとなにおはするは皆さぶらひ給ふ。きさい腹のは孰ともなくけ高く淸げにおはします。中にもこの兵部卿の宮はげにいと勝れてこよなう見えたまふ。四のみ子常陸の宮と聞ゆる更衣腹のは思ひなしにやけはひこよなう劣り給へり。例の左あながちに勝ちぬ。例よりは疾く事はてゝ大將まかで給ふ。兵部卿の宮常陸の宮后腹の五の宮とひとつ車にまねきのせ奉りて罷で給ふ。宰相中將はまけ方にて音なく罷で給ひにけるを「皇子達おはします御送に參り給ふまじや」と推し留めさせて御子の衞門督、權中納言、右大辨など、さらぬ上達部あまたこれかれにのりまじりいざなひ立てゝ六條院へおはす。道のやゝ程ふるに雪いさゝか散りて艶なるたそがれ時なり。物の音をかしき程に吹き立て遊びて入り給ふをげにこゝをおきていかならむ佛の御國にかはかやうのをり節の心やり所を求めむと見えたり。寢殿の南の廂に常のごと南むきに中少將つきわたり北むきに向へてゑがのみこ達上達部の御座あり。御かはらけなど始まりて物おもしろくなりゆくにもとめこ舞ひてかよれる袖どもの打ちかへす羽風に御前近き梅のいといたく綻ひこぼれたるにほひのさとうち散りわたれるに、例の中將の御かをりのいとゞしくもてはやされていひ知らずなまめかし。はつかにのぞく女房なども闇はあやなく心もとなき程なれど、香にこそげに似たるものなかりけれとめであへり。おとゞもめでたしと見給ふ。かたちよういも常よりまさりて亂れぬさまにをさめたるを見て、「右のすけも聲くはへ給へや。いたうまらうとだゝしや」とのたまへばにくからぬほどに神のますなど。

紅梅

そのころ按察大納言と聞ゆるは故致仕のおとゞの次郎なり。うせ給ひにし右衛門督のさしつぎよ。童よりらうらうしう花やかなる心ばへものし給ひし人にてなりのぼり給ふ。年月にそへてまいていと世にあるかひあり。あらまほしうもてなし御おぼえいとやむごとなかりけり。北の方二人ものし給ひしを、もとよりのはなくなり給ひて、今ものし給ふは、後の大きおとゞの御むすめまき柱離れがたくし給ひし君を式部卿の宮にて故兵部卿の御子にあはせたて給へりしを、御子うせ給ひて後ち忍びつゝ通ひ給ひしかど、年月ふればえさしも憚り給はぬなめり。御子は故北の方の御腹にも二人のみぞおはしければさうざうしとて神佛に祈りて今の腹にぞ男君一人まうけ給へる。故宮の御かたみに女君一所おはす。隔てわかず何れをもおなじごと思ひ聞えかはし給へるを、おのおの御方の人などはうるはしうもあらぬ心ばへうちまじり、なまくねくねしき事も出てくる時々あれど、北の方いとはればれしう今めきたる人にて罪なく取りなし、我が御方ざまに苦しかるべき事をもなだらかに聞きなし、思ひなほし給へば聞きにくからでめやすかりけり。君達同じほどにすぎすぎおとなび給ひぬれば御裳など着せ奉り給ふ。七けんの寢殿廣く大きに造りて南面に大納言殿のおほい君、西に中の君、東に宮の御方と住ませ奉り給へり。大方にうち思ふ程は父宮のおはせぬ心苦しき

やうなれどこなたかなたの御寶物多くなどして内々の儀式有様など心にくゝけだかくなどもてなしてけはひあらまほしうおはす。例のかくかしづき給ふ聞えありて次々に從ひつゝ聞え給ふ人おほく内春宮より御氣色あれど内には中宮おはします。いかばかりの人かはかの御けはひにならび聞えむ、さりとて思ひ劣りひげせむもかひなかるべし。春宮には左のおほい殿の女御並ぶ人なげにてさぶらひ給ふはきしろひにくけれどさのみいひてやは人にまさらむと思ふ女子を宮仕に思ひたえては何のほいかはあらむと覺したちて參らせ奉り給ふ。十七八のほどにてうつくしうにほひ多かるこゝちし給へり。中の君もうちすがいてあてになまめかしうすみたるさまはまさりてをかしうおはすれば、たゞ人にてはあたらしう見せまうき御さまを兵部卿の宮のさもおぼしよらばなどぞおぼしたる。この若君をうちにてなど見つけ給ふ時はめしまどはしたはぶれがたきに走給ふ。心ばへありておく推し量らるゝまみひたひつきなり。「せうとを見てのみはえやまじと大納言に申せよ」などのたまひかくるを、「さなむ」と聞ゆればうちゑみていとかひありと覺したり。「人におとらむ宮仕よりはこの宮にこそはよろしからむ女子は見せ奉らまほしけれ。心のゆくにまかせてかしづき見奉らむに命のびぬべき宮の御さまなり」との給ひながら、まづ春宮の御事をいそぎ給ひて春日の神の御ことわりも我が世にやもし出できて故おとゞの院の女御の御事を胸いたくおぼして止みにしなぐさめの事もあらなむと心のうちに祈りて參らせ奉り給ひつ。いと時めき給ふよし人々聞ゆ。かゝる御まじらひのなれ給はぬ程にはかばかしき御後見なくてはいかゞ

とて北の方そひてさぶらひ給ふは誠に限もなく思ひかしづき後見聞えたまふ。殿はつれづれなる心地して西の御かたはひとつに習ひ給ひていとさうざうしうながめ給ふ。東の姫君の疎々しくかたみにもてなし給はでよるよるは一所に御殿ごもりよろづの御ことならひはかなき御遊びわざをもこなたを師のやうに思ひ聞えてぞ誰も習ひ遊び給ひける。物はぢを世のつねならずし給ひて母北の方にだにさやかにはをさをさし向ひ奉り給はず、かたはなるまでもてなし給ふものから心ばへけはひのうもれたるさまならず愛敬づき給へることはた人よりもすぐれ給へり。かくうちまゐりや何やと我がかたざまをのみ思ひ急ぐやうなるも心苦しきなどおぼして「さるべからむさまをおぼし定めての給へ。おなじことゝこそ仕うまつらめ」と母君にも聞え給ひけれど「更にさやうの世づきたるさま思ひたつべきにもあらぬ氣色なればなかなかならむとは心苦しかるべし、御宿世にまかせて世にあらむかぎりは見奉らむ、後ぞ哀にうしろめたけれど世をそむくかたにてもおのづから人笑へにあはつけき事なくて過ぐし給はなむ」などうちなきて御心ばせの思ふやうなることをぞ聞え給ふ。いづれもわかず親がり給へど御かたちを見ばやとゆかしうおぼしてかくれ給ふこそ心憂けれと恨みて、人知れず見え給ひぬべしやとのぞきありき給へど絶えてかたそばをだにえ見奉り給はず。「上おはせぬほどは立ちかはりて參りくべきを疎々しくおぼしわくる御氣色なれば心うくこそ」など聞えてみすの前に居給へば御いらへなどほのかに聞え給ふ。御聲けはひなどあてにをかしうさまかたち思ひやられて哀に覺ゆる人の御ありさまなり。「君が御姫

君たちを人に劣らじと思ひおごれどこの君にえしも優らずやあらむ、かゝればこそ世の中廣きうちはわづらはしけれ。たぐひあらじと思ふに優る方もおのづからありぬべかめり」などいとゞいぶかしう思ひ聞え給ふ。「月比なにとなく物さわがしき程に御琴の音をだにうけ給はらで久しくなり侍りにけり。西の方に侍る人は琵琶を心に入れて侍る。さもまねび取りつべくや覺え侍るらむ、なまかたほにしたるに聞きにくき物の音がらなり。同じくは御心留めて敎へさせ給へ、おきなはとりたてゝならふ物侍らざりしかど、そのかみ盛りなりし世に遊び侍りし力にや聞き知るばかりのわきまへは何事にもいとつきなくは侍らざりしを、うちとけても遊ばさねど時々うけ給はる御琵琶の音なむ、むかし覺え侍る。故六條院の御傳にて左のおとゞなむこの比世に殘り給へる。源中納言、兵部卿の宮、何事にも昔の人に劣るまじういと契りことに物し給ふ人々にてあそびの方は取りわきて心留め給へるを手づかひ少しなよびたるばち音なむ、おとゞには及び給はずと思ひ給ふるをこの御琴のねこそいと能く覺え給へれ。琵琶は押手しづやかなるをよきにするものなるにぢうさすほどばち音のさまかはりてなまめかしう聞えたるなむ、女の御事にてなかなかをかしかりける。いであそばさむや御琴まゐれ」とのたまふ。女房などはかくれ奉るもをさをさなし。いと若き上﨟だつが見え奉らじと思ふはしも、心にまかせてゐたれば「さぶらふ人さへかくもてなすが安からぬ」と腹立ち給ふ。若君うちへ參らむとのゐ姿にて參り給へる、わざとうるはしきみづらよりもいとをかしく見えていみじくうつくしとおぼしけり。麗景殿に御ことつけ聞え給ふ。

「ゆづりきこえて今宵もえ參るまじく、なやましくなむと聞えよ」とのたまひて「笛すこし仕うまつれ。ともすれば御前の御遊に召し出でらるゝ、かたはらいたしや。またいと若き笛を」とうちゑみて雙調ふかせ給ふ。いとをかしう吹い給へば、「けしうはあらずなりゆくは、このわたりにておのづから物にあはするけなり。猶かきあはせさせ給へ」とせめ聞え給へば苦しとおぼしたる氣色ながら爪彈きにいとよく合せて唯少しかきならし給ふ。かはぶえふつゝかになれたる聲してこの東のつまに軒近き紅梅のいとおもしろく匂ひたるを見給ひて「お前の花心ばへありて見ゆめり。兵部卿の宮うちにおはすなり、一枝をりてまゐれ。知る人ぞしる」とて「あはれ光源氏のいはゆる御盛りの大將などにおはせしころ童にてかやうにて交らひなれ聞えしこそ世と共に戀しう侍れ。この宮達を世の人もいとことに思ひ聞え、げに人にめでられむとなり給へる御有樣なれどもはしがはしにも覺え給はぬは猶たぐひあらじと思ひ聞えし心のなしにやありけむ。大方にて思ひ出で奉るも胸あく世なく悲しきを氣近き人のおくれ奉りていきめぐらふはおぼろけの命長さならしかしとこそ覺え侍れ」など聞え出で給ひて物哀にすごく思ひめぐらしをれ給ふ。ついでの忍びがたきにや花折らせて急ぎ參らせ給ふ。いかゞはせむ昔の戀しき御かたみにはこの宮ばかりこそは佛のかくれ給ひけむ御名殘には阿難が光放ちけむを二度出で給へるかとうたがふ。さかしきひじりのありけるをやみにまどはるけどころに、聞えをかさむかしとて、

「心ありて風のにほはす園の梅にまづうぐひすの問はずやあるべき」と紅の紙にわかや

ぎ書きて、この君の懷紙に取りまぜ押したゝみて出したて給ふを、幼き心にいと馴れ聞えまほしとおもへば急ぎまゐり給ひぬ。中宮の上の御局より御とのゐどころに出で給ふほどなり。殿上人あまた御送にまゐる中に見つけ給ひて「昨日はなどいと疾くはまかでにし。いつ參りつるぞ」などのたまふ。「疾くまかで侍りにしくやしさに、まだ内におはしますと人の申しつれば急ぎまゐりつるや」とをさなげなるものから馴れ聞ゆ。「内ならで心やすき所にも時々はあそべかし。若き人どものそこはかとなくあつまる所ぞ」とのたまふ。この君召しはなちて語らひ給へば、人々は近うもまゐらず罷で散りなどしてしめやかになりぬれば「春宮にはいとま少しゆるされにためりな。いとしげうおもほしまどはすめりしを、時とられて人わろかめり」とのたまへば「まつはさせ給へりしこそ苦しかりしが、御前にはしも」と聞えさして居たれば「われをば人げなしと思ひはなたれたるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。ふるめかしき同じすぢにて東と聞ゆなるはあひ思ひ給ひてむやと忍びて語らひ聞えよ」などのたまふついでに、この花を奉ればうちゑみて「うらみて後ならましかば」とてうちも置かず御覽ず。枝のさま花房色も香も世の常ならず「園に匂へる紅の色にとられて香なむ白き梅には劣れるといふめるを、いとかしこくとりならべても咲きけるかな」とて御心留め給へる花なればかひありてもてはやし給ふ。「今夜はとのゐなめり、やがてこなたにを」とめしこめつれば東宮にもえ參らず、花も耻しく思ひぬべくかうばしくて氣近くふせ給へるを若き心ちにはたぐひなくうれしくなつかしく思ひ聞ゆ。「この花のあるじはなど春宮にはう

つろひ給はざりし。知らず、心知らむ人になどこそ聞き侍りしか」など語り聞ゆ。大納言の御心ばへは我が方ざまに思ふべかめれと聞き合せ給へど思ふ心は殊にしみぬれば、この返事けざやかにものたまひやらず、つとめてこの君のまかづるになほざりなるやうにて、

「花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過さましやは」。「さて猶今は翁どもにさかしらせで忍びやかに」とかへすがへすの給ひて、この君も東のをばやんごとなくむつましう思ひましたり。なかなかこと方の姫君は見え給ひなどして例のはらからのさまなれど、童心地にいとおもりかにあらまほしうおはする心ばへを、かひあるさまにて見奉らばやと思ひありくに春宮の御方のいと花やかにもてなし給ふにつけて、おなじこととは思ひながらいと飽かず口惜しければ、この宮をだに氣近くて見奉らばやと思ひありくにうれしき花のついでなり。これは昨日の御返りなれば見せ奉る。「妬げにもの給へるかな。あまりすきたる方に進み給へるを許し聞えず」と聞き給ひて左の大臣「われらが見奉るには、いとものまめやかに御心をさめ給ふこそをかしけれ、あだ人にせむにたらひ給へる御さまをしひてまめだち給はむも見所すくなくやならまし」などしりうごちて今日もまゐらせ給ふにまた、

「もとつかのにほへる君が袖ふれば花もえならぬ名をやちらさむ。とすきずきしや。あなかしこ」とまめやかに聞え給へり。誠にいひならさむと思ふ所あるにやとさすがに御心ときめきし給ひて、

「花の香をにほはす宿にとめゆかば色にめづとや人のとがめむ」など猶心とけずいらへ

給へるを心やましと思ひ居給へり。北の方まかで給ひてうちわたりの事のたまふ序に「若君の一夜とのゐして罷り出でたりしにほひのいとをかしかりしを人はなほと思ひしを宮のいとおもほしよりて、兵部卿の宮に近づき聞えにけり、うべわれをばすさめたりと氣色とり怨じ給ひしこそをかしかりしか。こゝに御せうそこやありし。さも見えざりしを」とのたまへば「さかし。梅の花めで給ふ君なればあなたのつまの紅梅いとさかりなりしをたゞならで折りて奉れたりしなり。移香はげにこそ心ことなれ、交らひし給はむ女などはさはえしめぬかな。源中納言はかうざまにこのましうはたき匂はせで人香こそ世になけれ。怪しうさきの世の契りいかなりけるむくいにかとゆかしき事にこそあれ。同じ花の名なれど梅はおひ出でけむねこそ哀なれ。この宮などのめで給ふ、さることぞかし」など花によそへてもまづかけ聞え給ふ。宮の御方は物おぼし知る程にねびまさり給へれば何事も見知り聞き咎め給はぬにはあらねど、人に見え世づきたらむ有樣は更にもおぼしはなれたり。世の人も時による心ありてにや、さし向ひたる御方々には心をつくし聞えわび、今めかしきこと多かれどこなたは萬につけ物しめやかに引き入り給へるを、宮は御ふさいのかたに聞き傳へ給うて、深ういかでとおぼしなりにけり。若君を常にまつはしよせ給ひつゝ忍びやかに御文あれど、大納言の君深く心がけ聞え給ひて、さも思ひたちての給ふことあらばと氣色とり心まうけし給ふを見るにいとほしうひき違へてかく思ひよるべくもあらぬ方にしもなげの言の葉を盡し給ふ。かひなげなることゝ北の方もおぼしのたまふ。はかなき御かへりなどもなければま

けじの御心そひておもほしやむべくもあらず。何かは人の御ありさまなどかはさても見奉らまほしう、おひさき遠くなどは見えさせ給ふになど北の方おもほしよる時々あれど、いといたう色めき給ひて通ひ給ふ。忍び所おほく八の宮の姫君にも御志あさからでいとしげうまかでありき給ふ。たのもしげなき御心のあだあだしさなども、いとゞつゝましければ、まめやかにおもほし絶えたるをかだじけなきばかりに忍びて母君ぞたまさかにさかしらがり聞え給ふ。

竹河

これは源氏の御ぞうにも離れ給へりし後ちの大殿わたりにありける、わるごだちのおちとまり殘れるが問はずがたりしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれどかの女どものいひけるは、源氏の御末々にひがごとどもの交りて聞ゆるはわれよりも年の數積りぼけたりける人の、僻事にやなどあやしがりける何れかはまことならむ。內侍のかみの御腹に故殿の御子は男三人女二人なむ坐しけるを、さまざまにかしづきたてむ事をおぼしおきて年月の過ぐるも心もとながり給ひしほどに、あへなくうせ給ひにしかば、夢のやうにていつしかと急ぎおぼしゝ御宮仕もをこたりぬ。人の心時にのみよるわざなりければ、さばかり勢いかめしく坐せしおとゞの御名殘內々の御寶物らうじ給ふ所々、その方の衰へはなけれど大方の有樣引

きかへたるやうに殿の内しめやかになりゆく。かんの君の御近きゆかりそこらこそは世にひろごり給へど、中々やんごとなき御なからひのもとよりも親しからざりしに故殿のなさけ少しおくれ、むらむらしさ過ぎ給へりける御本性にて、心おかれ給ふこともありけるゆかりにや誰にもえなつかしう聞え給はず。六條院にはすべて猶昔に變らず、かずまへ聞え給ひて、うせ給ひなむ後の事ども書きおき給へる御そうぶんの文どもにも、中宮の御次に加へ奉り給へれば、右の大殿などはなかなかその心ありてさるべき折々音づれ聞え給ふ。男君達は御元服などしておのおのおとなび給ひにしかば、殿おはせで後心もとなく哀なることもあれどおのづからなり出で給ひぬべかめり。姫君達をいかにもてなし奉らむとおぼしみだる。うちにも必ず宮仕のほい深きよしをおとゞの奏し置き給ひければ、おとなび給ひぬらむかしと年月を推し量らせ給ひて仰言絶えずあれど、中宮のいよいよならびなくのみなりまさり給ふ御けはひにおされて、皆人無德にものし給ふめる、末にまゐりて遙に目をそばめられ奉らむもわづらはしく、また人におとり數ならぬさまにて見むはた心づくしなるべきをおぼしたゆたふ。冷泉院よりいとねんごろにおぼしのたまはせて、かんの君の昔ほいなくて過ぐし給ひしつらさをさへとりかへし恨み聞え給ひて、「今はまいてさだすぎ、すさまじきありさまに思ひ捨て給ふとも後安き親になずらへてゆづり給へ」といとまめやかに聞え給ひければ、いかゞはあるべきことならむ、自らのいと口惜しき宿世にて思の外に心づきなしとおぼされにしかば、恥しうかたじけなきをこの世の末にや御覧じなほされましなど定めか

ね給ふ。かたちいとようおはする聞えありて心がけ申し給ふ人おほかり。右の大殿の藏人の少將とかいひしは三條殿の御腹にて兄君達よりもひきこしいみじうかしづき給ふ、人がらもいとをかしかりし君いとねんごろに申し給ふ。いづかたにつけてももてはなれ給はぬ御なからひなれば、この君達のむつびまゐり給ひなどするはけどほくもてなし給はず。女房にも氣近うなれよりつゝ思ふ事を語らふにもたよりありてよるひるあたりさらぬ耳かしがましさをうるさきものゝ心苦しきにかんの殿もおぼしたり。母北の方の御文もしばしば奉り給ふ。「いとかろびたる程に侍れどおぼしゆるすかたもや」となむ、おとゞも聞え給ひける。姫君をば更にたゞのさまにもおぼしおきて給はず、中の君をなむ今少し世の聞え輕々しからぬ程になずらひならばさもやとおぼしける。ゆるし給はずばぬすみもとりつべくむくつけきまで思へり。こよなきことゝはおぼさねど女方の心ゆるし給はぬ事のまぎれあるは世の音ぎゝもあはつけきわざなれば聞えつぐ人をも「あなかしこ。あやまちひきいづな」などの給ふにくたされてなむ、わづらはしかりける。六條院の御末に朱雀院の宮の御腹に生れ給りへし君、冷泉院に御子のやうにおぼしかしづく四位の侍從その比十四五ばかりにて いときびはにをさなかるべき程よりは心おきておとなおとなしくめやすく人にまさりたる生ひさきゑるく見え給ふを、かんの君は婿にても見まほしくおぼしたり。この殿はかの三條の宮といと近き程なれば、さるべき折々のあそび所に君達にひかれて見え給ふ時々あり。心にくき女のおはする所なれば若き男の心づかひせぬなう見えしらがひさまよふ中にかたちのよき

はこのたちさらぬ藏人の少將、なつかしく心耻しげにてなまめいたる方はこの四位の侍従の御有樣に似る人ぞなかりける。六條院の御けはひ近うと思ひなすがことなるにやあらむ。世の中におのづからもてかしづかれ給へる人なり。若き人々は心ことにめであへり。かんの殿も「げにこそめやすけれ」などのたまひてなつかしう物聞え給ひなどす。「院の御心ばへを思ひ出で聞えてなぐさむよなういみじうのみ思ほゆるを、その御かたみにも誰をかは見奉らむ。右のおとゞはことごとしき御ほどにて、ついでなき對面もかたきを」などのたまひてはらからのつらに思ひ聞え給へれば、かの君もさるべき所に思ひて參り給ふ。世の常のすきずきしさも見えず、いといたうしづまりたるをぞこゝかしこの若き人ども口惜しくさうざうしきことに思ひていひなやましけり。むつきのついたちごろかんの君の御はらからの大納言高砂謡ひし夜、藤中納言、故大殿の太郎、まきばしらの一つ腹など參り給へり。右のおとゞも御子ども六人ながらひきつれておはしたり。御かたちよりはじめて飽かぬことなく見ゆる人の御有樣おぼえなり、君達もさまざまいと清げにて年のほどよりはつかさくらゐも過ぎつゝ何事を思ふらむと見えたるべし。世と共に藏人の君はかしづかれたるさまことなれどうちしめりて思ふことありがほなり。おとゞは御几帳へだてゝ昔に變らず御物語聞え給ふ。「その事となくてしばしばもえうけたまはらず、年の數そふまゝに內參りよりほかのありきなどうひうひしくなりにて侍ればいにしへの御物語も聞えまほしき折々多く過ぐし侍るをなむ、若きをのこどもはさるべきことには召しつかはせ給へ。必ずその志御覽ぜられ

よといましめ侍る」など聞え給ふ。「今はかく世にふる數にもあらぬやうになりゆく有樣をおぼしかずまふるになむ、過ぎにし御事もいとゞ忘れがたく思う給へられける」と申し給ひけるついでに、院よりのたまはすることほのめかし聞え給ふ「はかばかしう後見なき人のまじらひはなかなか見苦るしきをとかたかた思ひ給へなむわづらふ」と申し給へば「內に仰せらるゝことのあるやうにうけ給はりしを、いづ方に思ほし定むべきことにか、院はげに御位を去らせ給へるにこそさかり過ぎたる心地すれど、世にありがたき御ありさまは ふりがたくのみおはしますめるをよろしうおひ出づる女子侍らましかばと思ひ給へよりながら、恥しげなる御中に交らふべきものゝ侍らでなむ 口惜しう思う給へらるゝ。そもそも女一宮の女御は許し聞え給ふや、さきざきの人さやうのはゞかりにより滯る事も侍りし」と申し給へば「女御なむつれづれにのどかになりにたる有樣も 同じ心にうしろみて慰めまほしきをなど、かのすゝめ給ふにつけていかゞなどだに思う給へよるになむ」と聞え給ふ。これかれこゝに集り給ひて三條の宮に參り給ふ。朱雀院の深き心物し給ふ人々 六條院の方ざまのもかたかたにつけて猶かの入道宮をばえよぎずまゐり給ふなめり。この殿の左近中將、右中辨、侍從の君などもやがておとゞの御供に出で給ひぬ。ひきつれ給へる勢ひことなり。ゆふつけて四位の侍從參り給へり。そこらおとなしき若君達もあまたさまざまに いづれかはわろびたりつる。皆めやすかりつる中に立ち後れてこの君のたち出で給へる、いとこよなくめとまる心ちして例の物めでする若き人達は「猶異なりけり」などいふ。「この殿の姬君の御傍には

これをこそさしならべて見め」と聞きにくゝいふ。げにいと若うなまめかしきさましてうちふるまひ給へる匂香などよのつねならず。姫君と聞ゆれど心おはせむ人はげに人よりはまさるなめりと見知り給ふらむかしとぞ覺ゆる。かんの殿御念誦堂におはして「こなたに」とのたまへば、ひんがしのはしより昇りて戸口の御簾の前に居給へり。お前近き若木の梅心もとなくつぼみて、鶯の初聲もいとおほどかなるに、いとすかせ奉らまほしきさまの志給へれば、人々はかなきことをいふにことずくなに心にくき程なるをねたがりて宰相の君と聞ゆる上﨟のよみかけ給ふ。

「折りて見ばいとゞにほひもまさるやとすこし色めけ梅のはつ花」。口はやしと聞きて、「よそにてはもぎ木なりとやさだむらむ志たに匂へる梅のはつはな。さらば袖ふれて見給へ」などいひすさぶに、まことは色よりもと口々ひきもうごかしつべくさまよふ。かんの君奥の方よりゐざり出で給ひて「うたての御達や恥しげなるまめ人をさへよくこそおもなけれ」と忍びてのたまふなり。まめ人とこそつけられたりけれ、いとくつしたる名かなと思ひ居給へり。あるじの侍從殿上などもまだせねば所々もありかでおはしあひたり。せんかうの折敷二つばかりしてくだものさかづきばかりさしいで給へり。「おとゞはねびまさり給ふまゝに故院にいとようこそ覺え奉り給へれ。この君は似給へる所も見え給はぬを、けはひのいとしめやかになまめいたるもてなしぞかの御若ざかり思ひやらるゝ。かうざまにぞおはしけむかし」など思ひ出で聞え給ひてうち志ほたれ給ふ名殘さへとまりたるかうばしさを

人々はめてくつがへる。侍從の君まめ人の名をうれたしと思ひければ二十餘日の比梅の花盛なるににほひすくなげにとりなされし、すきものならはさむかしとおぼして藤侍從の御許におはしたり。中門入り給ふ程に同じ直衣すがたなる人たてりけり。かくれなむと思ひけるをひきとゞめたれば、この常にたちわづらふ少將なりけり。寢殿の西面に琵琶箏の琴の聲するに心をまどはして立てるなめり。苦しげや、人のゆるさぬ事思ひはじめむは罪深かるべきわざかなと思ふ。琴の聲も止みぬれば「いざしるべ給へ、まろはいとたどたどし」とて引きつれて、西の渡殿の前なる紅梅の木のもとに梅がえをうそぶきて立ちよるけはひの、花よりもしるくさとうち匂へれば、妻戸おしあけて人々あづまをいとよく掻き合せたり。女の琴にてりよの歌はかうしもあはせぬをいたしと思ひて、今ひとかへりおりかへしうたふを、琵琶もになく今めかしう故ありてもてない給へるあたりぞかしと、心とまりぬれば今夜は少しうちとけてはかなしごとなどもいふ。內より和琴さしいでたり。かたみにゆづりて手觸れぬに、侍從の君してかんの殿「故致仕の大臣の御爪音になむ通ひ給へると聞きわたるを、まめやかにゆかしくなむ。今夜は猶鶯にもさそはれ給へ」との給ひ出しければあまえて爪くふべきことにもあらぬをと思ひて、をさをさ心に入らず、かきわたし給へる氣色いとひゞき多く聞ゆ。常に見奉りむつびざりし親なれど、世におはせずと思ふにいと心ぼそきに、はかなきことの序にも思ひ出で奉るに、いとなむあはれなる、大かたこの君はあやしう故大納言の御有樣にいとようおぼえ、琴の音など唯それとこそ覺えつれとてない給ふも、ふるめい給ふ

しるじの涙もろさにや。少將も聲いとおもしろうてさきくさうたふ。さかしら心つきてうち過ぐしたる人もまじらねば、おのづからかたみにもよほされて遊び給ふに、あるじの侍從は故大臣に似奉り給へるにやかやうの方はおくれて盃をのみ進むれば「ことぶきをだにせむや」とはづかしめられて竹河をおなじ聲にいだしてまだ若けれどをかしうたふ、簾のうちよりかはらけさしいづ。「醉のすゝみてはしのぶることもつゝまれず、ひがごとするわざとこそ聞き侍れ、いかにもてない給ふぞ」ととみにうけひかず。こうちきかさなりたるほそながの、人がなつかしうしみたるをとりあへたるまゝにかづけ給ふ。「何ぞもぞ」などさうどきて侍從はあるじの君にうちかづけていぬ。引きとゞめてかづくれど「みづうまやにて夜更けにけり」とてにげにけり。少將はこの源侍從の君のかうほのめきよるめればみな人これにこそ心よせ給ふらめ、我が身はいとゞくんじいたく思ひよわりてあぢきなうぞうらむる。

「人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜のやみ」。うちなげきてたてば内の人のかへし、

「をりからや哀もしらむ梅の花たゞかばかりにうつりしもせし」。あしたに四位の侍從のもとよりあるじの侍從のもとに「よべは いとみだりがはしかりしを、人々いかに見給ひけむと見給へ」とおぼしう假名がちにかきて、はしに、

「竹河のはしうちいでしひとふしに深き心のそこはしりきや」と書きたり。寢殿にもて參りてこれかれ見給ふ「手などもいとをかしうもあるかな。いかなる人今よりかくとゝのひ給

ふらむ。をさなくて院にもおくれ奉り母宮のおどけなうおふしたて給へれど、猶人には優るべきにこそはあめれ」とて、かんの君はこの君達の手など惡しきことを辱め給ふ。返事げにいと若く「よべは水うまやをなむ人々咎め聞ゆめりし。

竹河に夜をふかさじといそぎしもいかなるふしを思ひおかまし」。げにこのふしをはじめにて、この君の御曹司におはしてけしきばみよる。少將の推し量りしもしるく皆人心よせたり。侍從の君も若き心地に近きゆかりにて明暮むつびまほしう思ひけり。三月になりて咲く櫻あれば散りかひくもり、大方の盛なるころ のどやかにおはする所にはまぎるゝことなく端ぢかなる罪もあるまじかめり。そのころ十八九の程にやおはしけむ、御かたちも心ばへもとりどりにぞをかしき。姫君はいとあざやかにけだかう今めかしきさまし給ひてげにたゞ人にてみ奉らばにげなふぞ見え給ふ。櫻の細長山吹などの折にあひたる色あひの、なつかしき程に重りたるすそまで愛敬のこぼれ落ちたるやうに見ゆる、御もてなしなども らうらうじう心恥しきけさへそひ給へり。今一所は薄紅梅にみぐし色にて柳の絲のやうにたをたをと見ゆ。いとそびやかになまめかしうすみたるさまして おもりかに心深きけは優り給へれど、匂ひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる。碁うち給ふとてさし向ひ給へるかんざしみぐしのかゝりたるさまども いと見所あり。侍從の君けんそ志給ふとて近う侍らひ給ふに、兄君達さしのぞき給ひて「侍從のおぼえこよなくなりにけり。御碁のけんそ許されにけるをや」とておとなおとなしきさましてつい居給へば、お前なる人々とかう居なほる。中將、

宮仕の いそがしうなり侍る程に 人におとりにたるは いと本意なきわざかなと 憂へ給へば「辨官はまいて私の宮仕をこたりぬべきまゝに さのみやはおぼしすてむ」など申し給ふ。碁打ちさして耻らひておはさうずる いとをかしげなり。「内わたりなどまかりありきても故殿のおはしまさましかばと思う給へらるゝこと多くこそ」など涙ぐみて見奉り給ふ。廿七八の程に物し給へばいとよくとゝのひてこの御有樣どもをいかでいにしへおぼしおきてしに違へずもがなと思ひ居給へり。お前の花の木どもの中にも 匂ひまさりてをかしき櫻を折らせて「外のには似ずこそ」などもてあそび給ふを「をさなくおはしまさうし時、この花はわがぞわがぞと爭ひ給ひしを、故殿は姫君の御花ぞと定め給ふ。上は若君の御木とさだめ給ひしを、いとさはなきのゝしらねど安からず思ひ給へられしはや」とて「この櫻の老木になりにけるにつけても過ぎにける齡を思ひ給へ出づれば、數多の人に後れ侍りにける身の愁もとめがたうこそ」など泣きみ笑ひみ聞え給ひて例よりはのどやかにおはす。人の婿になりて今は心志づかにも見え給はぬを花に心とめて物し給ふ。かんの君 かくおとなしき人の親になり給ふ、御年の程思ふよりはいと若うきよげに猶盛の御かたちと見え給へり。冷泉院のみかどはおほくはこの御有樣の猶ゆかしう 昔戀しうおぼし出でられければ、何につけてかはとおぼしめぐらして姫君の御事を あながちに聞え給ふにぞありける。院へ參り給はむことはこの君達ぞ猶物のは えなき心地こそすべけれ。萬の事時につけたるをこそ世人もゆるすめれ。げにいと見奉らまほしき御ありさまはこの世にたぐひなくおはしますめれど盛ならぬ

心地ぞするや。琴笛のしらべ花鳥の色をも音をも時にしたがひてこそ人の耳にもとまるものなれ。「春宮はいかゞ」など申し給へば「いざや始よりやんごとなき人のかたはらもなきやうにてのみ物し給ふめればこそ、なかなかにてまじらはむは胸いたく人笑はれなる事もやあらむとつゝましければ、殿おはせましかば行く末の御宿世宿世は知らず只今はかひあるさまにもてなし給ひてましを」などのたまひ出でゝ皆ものあはれなり。中將など立ち給ひて後君達はうちさし給へる碁うち給ふ。「昔より爭ひ給ふ櫻をかけものにて三番に數ひとつ勝ち給はむ方に花をよせてむ」とたはぶれかはし聞え給ふ。くらうなれば端近うて打ちはて給ふ。御簾卷きあげて人々皆いどみねんじ聞ゆ。折しも例の少將、侍從の君の御曹司に來たりけるをうちつれて出で給ひにければ、大方人ずくなゝるに廊の戸のあきたるにやをら寄りて覗きけり。かううれしき折を見つけたるは佛などの顯はれ給へらむに參りたらむ心地するも、はかなき心になむ。夕ぐれの霞のまぎれはさやかならねど、つくづくと見れば櫻色のあやめもそれと見わきつ。げに散りなむ後のかたみにも見まほしくにほひ多く見え給ふを、いとゞことざまになり給はむことわびしく思ひまさる。若き人々のうちとけたる姿どもゆふばえもをかしう見ゆ。右勝たせ給ひぬ。「高麗のらんさうおそしや」などはやりかにいふもあり。右に心よせ奉りて「西のお前によりて侍る木を左になして年比の御あらそひのかゝればありつるぞかし」と右方は心地よげにはげまし聞ゆ。何事と知らねどをかしと聞きてさしいらへもせまほしけれど、うちとけ給へる折心地なくやはと思ひて出でゝいぬ。またかゝる

まぎれもやと影にそひてぞうかゞひありきける。君達は花のあらそひをしつゝ明し暮し給ふに、風荒らかに吹きたる夕つ方亂れおつるがいと口惜しうあたらしければまけ方の姫君、

「櫻ゆゑ風にこゝろのさわぐかな思ひぐまなき花と見るみる」。御かたの宰相君、

「咲くと見てかつは散りぬる花なればまくるを深きうらみとも見ず」と聞えたすくれば、右の姫君、

「風にちることは世のつね枝ながらうつろふ花をたゞにしも見じ」この御方のたいふの君、

「心ありて池の汀におつる花あわとなりても我がかたによれ」。勝方の童べおりて花の下にありきて散りたるをいとおほく拾ひてもてまゐれり。

「大ぞらの風にちれども櫻花おのがものとぞかきつめて見る」。左のなれき、

「櫻花にほひあまたに散らさじと覆ふばかりの袖はありやは。心せばげにこそ見ゆめれ」などいひをらす。かくいふに月日はかなく過ぐすも行く末うしろめたきをかんの殿はよろづにおぼす。院よりは御せうそこ日々にあり。「女御うとうとしく覺しへだつるにや上はこゝに聞え疎むるなめり」といとにくげにおぼしのたまへば「たはぶれにも苦しうなむ。同じくはこの比のほどにおぼしたちね」などいとまめやかに聞え給ふ。さるべきにこそはおはすらめ、いとからうあやにくにの給ふもかたじけなしなどおぼしたり。御調度などはそこらしおかせ給へれば人々のそうぞく何くれのはかなきことをぞ急ぎ給ふ。これを聞くに藏人の少

將は志ぬばかり思ひて母北の方をせめ奉れば聞きわづらひ給ひて「いとかたはらいたきことにつけてほのめかし聞ゆるも、世にかたくなしき闇のまよひになむおぼし知る方もあらば推しはかりて猶慰めさせ給へ」などいとほしげに聞え給ふを、苦しうもあるかな」とうち歎き給ひて「いかなることゝ思う給へ定むべきやうもなきを、院よりわりなくのたまはするに思ひ給へ亂れてなむ。まめやかなる御心ならばこの程をおぼし志づめて慰め聞えむさまをも見給ひてなむ、世の聞えもなだらかならむ」など申し給ふも、この御まゐりすぐして中の君をとおぼすなるべし。さしあはせてはうたてしたりがほならむ、まだ位などもあさへたる程をなどおぼすに、男は更に志か思ひうつるべくもあらず。ほのかに見奉りて後は面影に戀しういかならむ折にとのみ覺ゆるも、かうたのみかゝらずなりぬるを思ひなげき給ふことかぎりなし。かひなきこともいはむとて、例の侍從の曹司にきたれば源侍從の文をぞ見居給へりける。ひきかくすを、さなめりと見て、うばひとりつ。事ありがほにやと思ひていたうも隱さず。そこはかとなくて唯世をうらめしげにかすめたり。

「つれなくて過ぐる月日をかぞへつゝ物うらめしき暮の春かな」。人はかうこそのどやかにさまよくねたげなめれ、我がいと人わらはれなる心いられを、かたへはめなれてあなづりそめられたると思ふも胸いたければ、ことに物もいはれで例かたらふ中將のおもとの曹司のかたに行くも例のかひあらじかしとなげきがちなり。侍從の君はこの御返事せむとて上に參り給ふを見るにいと腹だゝしうやすからず。若き心ちにはひとへに物ぞ覺えける。あさ

ましきまで恨み歎けばこのまへ申すもあまりたはぶれにくゝいとほしといらへもをさをさせず。かの御碁のけんそせし夕暮のこともいひ出でゝ「さばかりの夢をだに又見てしがな。あはれ何をたのみにていきたらむ。かう聞ゆる事ものこり少なう覺ゆればつらきも哀といふことこそ誠なりけれ」とまめだちていふ。哀とていひやるべき方なきことなり。かの慰め給はむ御さま露ばかりうれしと思ふべき氣色もなければ、げにかの夕暮のけんそふなりけむに、いとゞからうあやにくなる心は添ひたるならむとことわりに思ひて聞しめさせたらば、いとゞいかにけしからぬ御心なりけりと疎み聞え給はむ心苦しと思ひ聞えつる心もうせぬ、いと後めたき御心なりけりとむかひびつくれば、「いでやさばれや、今はかぎりの身なれば物恐しくもあらずなりにたり。さても負け給ひしこそいとほしかりしか、おいらかに召し寄せてめぐはせ奉らましかばこよなからましものを」などいひて、

「いでやなぞ數ならぬ身にかなはぬは人にまけじの心なりけり」。中將うちわらひて、

「わりなしや弱きによらむ勝負をこゝろひとつにいかゞまかする」といらふるさへぞつらかりける。

「あはれとて手をゆるせかしいきしにを君にまかする我が身とならば」。泣きみ笑ひみ語らひ明す。またの日は卯月になりにければはらからの君達のうちに參りさまよふに、いたうくつし入りて眺め居給へれば、母北の方は涙ぐみておはす。おとゞも院の聞しめす所もあるべし、何にかはおふなおふな聞き入れむと思ひてくやしう對面の序にもうち出で聞えずなり

にし。「みづから強ちに申さましかばさりともえ違へ給はざらまし」などのたまふ。さて例の「花を見て春はくらしつ今日よりやしげきなげきの下にまどはむ」と聞え給へり。御前にてこれかれ上臈だつ人々この御懸想人のさまざまにいとほしげなるを聞え知らするなかに中將おもと「いきしにをといひしさまの、言にのみはあらず、心苦しげなりし」など聞ゆればかんの君もいとほしと聞き給ふ。おとゞ北の方のおぼす所によりせめて人の御うらみ深くはと取りかへありておぼす、この御まゐりを妨げやうに思ふらむはしもめざましきこと限なきにても、たゞ人にはかけてあるまじきものに故殿のおぼしおきてたりしものを、院に參り給はむだに行末のはえばえしからぬをおぼしたる折しも、この御文とり入れて哀がる。御かへし。

「今日ぞ知る空をながむる氣色にて花に心を移しけりとも」。「あないとほしき戯れにのみも取りなすかな」などいへど、うるさがりて書きかへず。九日にぞまゐりたまふ。右の大殿御車御前の人々數多奉り給へり。北の方もうらめしと思ひ聞え給へど年比もさもあらざりしに、この御事故しげう聞えかよひ給へるを、又かき絶えむもうたてあればかづけものどもよき女のさうぞくあまた奉れ給へり。「あやしううつし心もなきやうなる人のありさまを見給へあつかふほどに、承り留むるともなかりけるを、驚かさせ給はぬもうとうとしくなむとぞありける。おいらかなるやうにてほのめかし給へるをいとほしと見給ふ。おとゞも御文あり「みづからも參るべきと思う給へつるに愼む事の侍りてなむ、をのこどもざうやくにとて

参らす。疎からず召し使はせ給へ」とて源少將兵衛佐など奉れ給へり。「情はおはすかし」とよろこび聞え給ふ。大納言殿よりも人々の御車奉れ給ふ。北の方は故おとゞの御女まきばしらの姫君なればいづ方につけてもむつましう聞え通ひ給ふべけれどさしもあらず。藤中納言はしもみづからおはして中將辨の君達諸共に事行ひ給ふ。殿のおはせましかばと萬につけて哀なり。藏人の君例の人にいみじき詞をつくして「今はかぎりと思ひ侍る命のさすがに悲しきを哀と思ふとばかりだに 一言のたまはせば、それにかけ留められて 暫しもながらへやせむなどあるを、もて參りて見れば姫君二所うち語らひて いといたうくつし給へり。よるひる諸共にならひ給ひて中のとばかりへだてたる西東をだに いといぶせきものにし給ひてかたみに渡り通ひおはするを、よそよそにならむことをおぼすなりけり。心ことにしたて引き繕ひ奉りたまへる御さまいとをかし。殿のおぼしのたまひしさまなどをおぼし出てゞ、物哀なる折からにてとりて見給ふ。おとゞ北の方のさばかり立ち並びて たのもしげなる御中になどかうすゞろごとを思ひいふらむとあやしきにも、かぎりとあるを、まことにやとおぼしてやがてこの御文のはしに、

「あはれてふ常ならぬ世のひとことも いかなる人にかくるものぞは。ゆゝしきかたにてなむほのかに思ひ知りたる」と書き給ひて「かう言ひやれかし」とのたまふを、やがて奉れたるを限なうめづらしきにも折をおぼしとむるさへ いとゞ涙も留らず立ちかへり、「たが名はたゝじなどかごとがましくて、

「生ける世のしには心にまかせねば聞かでややまむ君がひとこと。塚の上にもかけ給ふべき御心の程と思ひ給へましかば、ひたみちにも急がれ侍らましを」などあるに、うたてもいらへをしてけるかな、書きかへでやりつらむよと苦しげにおぼして、物ものたまはずなりぬ。おとなわらはめやすき限をとゝのへられたり、大方の儀式などは內に參り給はましに變ることなし。まづ女御の御方に渡り給ひてかんの君は御物語など聞え給ふ。夜更けてなむ上に參う上り給ひける。后、女御など皆年比經てねび給へるにいと美しげにて盛りに見所あるさまを見奉り給ふはなどてかはおろかならむ。花やかに時めき給ふたゞ人だちて心安くもてなし給へるさましもぞ。げにあらまほしうめでたかりける。かんの君を暫しさぶらひ給ひなむと心留めて思しけるに、いと疾くやをら出で給ひにければ口をしう心うしとおぼしたり。源侍從の君をば明暮お前に召しまつはしつゝ、げに唯昔の光源氏の生ひ出で給ひしに劣らぬ人の御おぼえなり。院の內にはいづれの御方にも疎からず馴れまじらひありき給ふ。この御方にも心よせあり顏にもてなして したにはいかに見給ふらむの心さへそひ給へり。夕暮のしめやかなるに藤侍從とつれてありくにかの御方の御前近く見やらるゝ五葉に藤のいとおもしろく咲きかゝりたるを、水のほとりの石に苔をむしろにてながめ居給へり。まほにはあらねど世の中うらめしげにかすめつゝかたらふ。

「手にかくるものにしあらば藤の花まつよりまさる色を見ましや」とて 花を見上げたる景色などあやしく哀に心苦しくもおもほゆれば、我が心にあらぬ世のありさまにほのめか

す。

「紫の色はかよへど藤の花こゝろにえこそまかせざりけれ」。まめなる君にていとほしと思へり。いと心惑ふばかりは思ひ入れざりしかど口をしうは覺えけり。かの少將の君はしもまめやかにいかにせましとあやまちもしつべく靜めむ方なくなむ覺えける。聞え給ひし人々中の君とうつろふもあり。少將の君をば母北の方の御怨によりさもやと思ほしてほのめかし聞え給ひしを絕えて音づれずなりにたり。院にはかの君達もしたしくもとよりさぶらひ給へど、この參り給ひて後をさをさ參らず。まれまれ殿上の方にさしのぞきても、あぢきなうにげてなむまかり出でける。內には故おとゞの志おき給へるさまことなりしをかく引き違へたる御宮仕を、いかなるにかとおぼして中將をめしてなむのたまはせける。御氣色よろしからず。「さればこそ世の人の心のうちも傾きぬべきことなりとかねて申しゝことをおぼしとるかたことにて、かうおぼしたちにしかばともかくも聞えがたくて侍るに、かゝる仰言の侍るはなにがしらの身のためもあぢきなくなむ侍る」といとものしと思ひて、かんの君を申し給ふ。「いざや只今かう俄にしも思ひたゝざりしを、あながちにいとほしうのたまはせしかば、後見なきまじらひの內わたりはしたなげなめるを、今は心やすき御有樣なめるにまかせ聞えてと思ひよりしなり。誰もたれもびんなからむ事はありのまゝにもいさめ給はで、今ひきかへし右のおとゞもひがひがしきやうにおもむけてのたまふなれば苦しうなむ。これもさるべきにこそは」となだらかにのたまひて心もさわがい給はず「その昔の御す

くせは目に見えぬものなればかうおぼしのたまはするを、これは契り異なるともいかゞは奏しなほすべきことならむ。中宮を憚り聞え給ふとて院の女御をばいかゞし奉り給はむとする。後見や何やとかねておぼしかはすともさしもえ侍らじ。よし見聞き侍らむよう思へば、内は中宮おはしますとてことびとは交らひ給はずや、君に仕うまつることはそれが心やすきこそ昔より興あることにはしけれ。女御はいさゝかなることのたがひめありてよろしからず思ひ聞え給はむに、ひがみたるやうになむ世のきゝみゝも侍らむ」など二所して申し給へば、かんの君いと苦しとおぼしぬ。さるは限りなき御思ひのみ月日に添へてまさる。七月より孕み給ひにけり。うち惱み給へるさまげに人のさまざまに聞え煩はすもことわりぞかし。いかでかはかゝらむ人をなのめに見聞き過ぐしてはやまむとぞ覺ゆる。明暮御あそびをせさせ給ひつゝ侍從も氣近う召し入るれば御琴の音などは聞き給ふ。かの梅がえにあはせたりし中將のおもとの和琴も常に召し出でゝ彈かせ給へば、聞きあはするにもたゞには覺えざりけり。その年かへりてをとこだうかせられけり。殿上の若人どもの中に物の上手多かる比ほひなり。その中にも勝れたるをえらせ給ひて、この四位の侍從右の歌頭なり。かの藏人の少將樂人の數の中にありけり。十四日の月の花やかに曇りなきに御前より出でゝ冷泉院にまゐる。女御もこの御息所も上に御つぼねして見給ふ。上達部親王達ひき連れて參り給ふ。右の大殿致仕の大殿のぞうを離れてきらきらしう清げなる人はなき世なりと見ゆ。內のお前よりもこの院をばいとはづかしうことに思ひ聞えて皆人用意を加ふる中にも、藏人

の少將は見給ふらむかしと思ひやりて志づ心なし。にほひもなく見苦しき綿花もかざす人がらに見わかれてさまも聲もいとをかしくぞありける。竹河謠ひてみはしのもとにふみよる程、過ぎにし夜のはかなかりし遊も思ひ出でられければ、ひがごとも志つべくて涙ぐみけり。后の宮の御方にまゐれば上もそなたに渡らせ給ひて御覽ず。月は夜ふかうなるまゝに晝よりもはしたなう澄み昇りて、いかに見給ふらむとのみ覺ゆれば、ふむ空もなう漂ひありきてさかづきもさして一人をのみ咎めらるゝはめいぼくなくなむ。夜一夜所々にかきありきていと惱しう苦しくて臥したるに、源侍從を院より召したれば「あなくるし。志ばし休むべきに」とむつかりながら參り給へり。御前の事どもなど問はせ給ふ。「かとうはうち過ぐしたる人のさきざきするわざを、選ばれたるほど心にくかりけり」とてうつくしとおぼしためり。ばんずんらくを御口ずさびにし給ひつゝ御息所の御方に渡らせ給へれば御供に參り給ふ。物見に參りたる里人多くて例よりも花やかにけはひ今めかし。渡殿の戸口に暫し居て聲聞き知りたる人に物などのたまふ。「一夜の月かげははしたなかりしわざかな。藏人の少將の月の光に輝きたりし氣色も桂の影にはづるにはあらずやありけむ。雲の上近くてはさしも見えざりき」など語り給へば人々哀と聞くもあり、「闇はあやなきを月ばえ今少し心ことなりと聞えし」などすかしてうちより、

「竹河のその夜のことは思ひいづや志のぶばかりのふしはなけれど」とはかなきことなれど、涙ぐまるゝもげにいと淺くは覺えぬことなりけりとみづから思ひ志らる。

「流れてのたのめむなしき竹河によはうきものと思ひしりにき」。物哀なる氣色を人々をかしがる。さるはおり立ちて人のやうにも侘び給はざりしかど、人ざまのさすがに心苦しう見ゆるなり。「うち出で過ぐすこともこそ侍れ。あなかしこ」とて立つ程にこなたにと召し出づればはしたなき心地すれど參り給ふ。「故六條院のたうかのあしたに女がたにてあそびせられける、いとおもしろかりきと右のおとゞの語られし。何事もかのわたりのさしつぎなるべき人かたくなりにける世なりや。いと物の上手なる女さへ多く集りて、いかにはかなき事もをかしかりけむ」などおぼし遣りて、御琴ども調らべさせ給ひて箏は御息所琵琶は侍從にたまふ。和琴を彈かせ給ひてこのとのなどあそび給ふ。御息所の御琴の音まだかたなりなる所ありしを、いとよう敎へない奉り給ひてけり。今めかしう爪音よくてうたごくのものなど上手にいとよく彈き給ふ。何事も心もとなく後れたることは物し給はぬ人なめり、かたちいとをかしかるべしと猶心とまる。かやうなる折多かればおのづから氣遠からず見なれ給ふ。うたてなれなれしうなどは恨みかけねど、折々につけて思ふ心の違へるなげかしさをかすむもいかゞおぼしけむ、知らずかし。卯月に女宮生れ給ひぬ。ことにけざやかなる物のはえもなきやうなれど、院の御氣色に隨ひて右の大殿よりはじめて御うぶやしなひし給ふ所々おほかり。かんの君つと抱きもちてうつくしみ給ふに、疾う參り給ふべきよしのみあればいかのほどにまゐり給ひぬ。女宮一所おはしますにいと珍しう美しうておはすればいといみじう覺したり。いとゞ唯こなたにのみおはします。女御がたの人々「いとかゝらでありぬべき世

かな」とたゞならずいひ思へり。さうじみの御心どもは殊にかるがるしく背き給ふにはあらねど、さぶらふ人々の中にくせぐせしきことも出で來などしつゝ、かの中將の君のさいへど人のこのかみにての給ひし事かなひて、かんの君もむげにかくいひいひてのはていかならむ、人笑へにはしたなうもやもてなされむ、上の御心ばへは淺からねど年經てさぶらひ給ふ御かたがたよろしからず思ひ放ち給はゞ苦しくもあるべきかなどおもほすに、內には誠にものしとおぼしつゝ度々御けしきありと人の告げきこゆれば煩しくて、おほやけざまにてまじらはせ奉らむことをおぼしてないしのかみを讓り聞え給ふ。おほやけいとかたうし給ふことなりければ、年ごろかう覺しおきしかど得辭し給はざりしを、故おとゞの御心をおぼして久しうなりにける。昔の例など引き出でゝその事かなひぬ。この君の御すくせにて年比申し給ひしはかたきなりけりと見えたり。かくて心安くて內ずみも志給へかしとおぼすにもいとほしう少將の事を母北の方のわざとのたまひしものを、たのめ聞えしやうにほのめかし聞えしもいかに思ひ給ふらむとおぼしあつかふ。辨の君して心美しきやうにおとゞに聞え給ふ。「內よりかゝる仰言のあればさまざまにあながちなるまじらひのこのみと、世のきゝみゝもいかゞと思う給へてなむ煩ひぬる」と聞え給へば「內の御氣色はおぼし咎むるもことわりになむうけ給はる。おほやけごとにつけても宮づかへ志給はぬはさるまじきわざになむ。はやおぼし立つべきになむ」と聞え給へり。又この度は中宮の御氣色とりてぞ參り給ふ。おとゞおはせましかばおしけち給はざらましなど、哀なる事どもをなむ。姉君はかたち

など名だかうをかしげなりと聞し召しおきたりけるを、引き違へ給へるをなま心ゆかぬやうなれど、これもいとらうらうしく心にくゝもてなしてさぶらひ給ふ。さきのかんの君かたちをかへてむとおぼしたつを、かたがたにあつかひ聞え給ふ程に「おこなひも心あわたゞしうこそおぼされめ、今少しいづ方も心のどかに見奉りなし給ひてもどかしき所なくひたみちにつとめ給へ」と君達の申し給へばおぼしとゞこほりて、うちには時々忍びて參り給ふ折もあり。院には煩しき御心ばへのなほ絶えねばさるべき折も更に參り給はず。いにしへを思ひ出でしがさすがに辱なう覺えしかしこまりに、人の皆ゆるさぬ事に思へりしをも知らずがほに思ひて參らせ奉りてみづからさへたはぶれにても若々しきことの世に聞えたらむこそいとまばゆく見苦しかるべけれとおぼせど、さるいみによりとはた御息所にも顯し聞えたまはねば我をむかしより故おとゞは取りわきておぼしかしづき、かんの君は若君を櫻のあらそひはかなき折にも心よせ給ひし名殘におぼしおとしけるよと、うらめしう思ひ聞え給へり。院の上はたましていみじうつらしとぞおぼしの給はせける。「ふるめかしきあたりにさし放ちて思ひおとさるゝもことわりなり」とうち語らひ給ひて哀にのみおぼしまさる。年比ありて又男御子產み給ひつ。そこらさぶらひ給ふ御方々にかゝることなくて年比になりにけるをおろかならざりける御すくせなど世の人おどろく。みかどまして限りなうめづらしとこの今宮をば思ひ聞え給へり。おりゐ給はぬ世ならましかばいかにかひあらまし、今は何事もはえなき世をいと口をしとなむおぼしける。女一宮を限りなきものに思ひ聞え給ひ

しを、かくさまざまうつくしうて數添ひ給へれば、珍らかなる方にていと殊に覺いたるをなむ、女御もあまりかうまでは物しからむと御心動きける。事に觸れてやすからずくねぐねしき事出で來などしておのづから御中も隔たるべかめり。世の事として數ならぬ人のなからひにも、もとよりことわりえたる方にこそあいなきおほよその人も心をよするわざなめれば、院の內の上下の人々いとやんごとなくて久しくなり給へる御方にのみことわりて、はかなき事にもこの御方ざまをよからず取りなしなどするを、御せうとの君達も「さればよ惡しうやは聞えおきける」といとゞ申し給ふ。心やすからず聞き苦しきまゝにかゝらでのどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし、限りなきさいはひなくて宮づかへのすぢは思ひよるまじきわざなりけりと、おほうへは歎き給ふ。聞えし人々のめやすくなりのぼりつゝさてもおはせましにかたはならぬぞ數多あるや。その中に源侍從とていと若うひはづなりと見しは宰相の中將にて、にほふやかをるやと聞きにくゝめでさわがるなる。げにいと人がらおもりかに心にくきを、やんごとなき御子達おとゞの御むすめを、志ありてのたまふなるなども、聞き入れずなどあるにつけて「そのかみは若う心もとなきやうなりしかどめやすくねびまさりぬべかめり」などいひおはさうす。「少將なりしも三位の中將とかいひて覺えありかたちさへあらまほしかりきや」などなま心わろき仕うまつり人はうち忍びつゝ「うるさげなる御有樣よりは」などいふもありていとほしうぞ見えし。この中將は猶思ひそめてし心絕えず、うくもつらくも思ひつゝ左大臣の御むすめを得たれどをさをさ心もとめず、道のは

てなる常陸帶のと、手習にもことぐさにもするはいかに思ふやうのあるにかありけむ。御息所安げなき世のむつかしさに里がちになり給ひにけり。かんの君思ひしやうにはあらぬ御有樣を口をしとおぼす。內の君はなかなか今めかしう心やすげにもてなして、世にも故あり心にくきおぼえにてさぶらひ給ふ。左大臣うせ給ひて、右は左に藤大納言左大將かけ給へる右大臣になり給ふ。次々の人々なりあがりてこの薰中將は中納言に、三位の君は宰相になりてよろこびし給へる人々この御ざうより外に人なき比ほひになむありける。中納言の御よろこびにさきのないしのかんの君に參り給へり。御前の庭にて拜し奉り給ふ。かんの君對面し給ひて「かくいと草深くなりゆく葎の門をよぎ給はぬ御心ばへにも、まづ昔の御こと思ひ出でられてなむ」など聞え給ふ。御聲のあてに愛敬づき聞かまほしう今めきたり。ふりがたくもおはするかな、かゝれば院の上は恨み給ふ御心絕えぬぞかし、今遂にことひき出で給ひてむと思ふ。「よろこびなどは心にはいとしも思う給へねども、まづ御覽ぜられにこそ參り侍れ。よぎぬなどのたまはするはおろかなる罪にうちかへさせ給ふにや」と申し給ふ。「今日はさだすぎにたる身の上など聞ゆべき序にもあらずとつゝみ侍れど、わざと立ちより給はむことはかたきを、對面なくてはたさすがにくだくだしきことになむ。院にさぶらはるゝがいといたう世の中を思ひみだれ中空なるやうにたゞよふを、女御をたのみ聞え又后の宮の御かたにもさりともおぼし許されなむと思ひ給へすぐすに、いづかたにもなめげに許さぬものにおぼされためれば、いとかたはらいたくて宮達はさてさぶらひ給ふ。このいと交らひ

にくげなるみづからはかくて心やすくだに眺めすぐい給へとて まかでさせたるを、それにつけても聞きにくゝなむ。上にもよろしからずおぼしのたまはすなる序あらばほのめかし奏し給へ。とざまかうざまにたのもしく思ひ給ひて いだし立て侍りし程は、いづかたをも心やすくうちとけ頼み聞えしかど、今はかゝる事あやまりにをさなうおほやけなかりけるみづからの心をもどかしくなむ」とうち歎い給ふ氣色なり。「更にかうまで覺すまじき事になむ。かゝる御まじらひの安からぬ事は昔よりさることゝなり侍りにけるを、位を去りて靜におはしまし、何事もけざやかならぬ御有樣となりにたるに 誰もうちとけ給へるやうなれどおのおのうちうちには いかゞ いどましくもおぼす事もなからむ。人は何の咎と見ぬことも我が御身にとりてはうらめしくなむ。あいなき事に心を動し給ふこと女御后の常の御癖なるべし。さばかりのまぎれもあらじものとてやはおぼし立ちけむ。唯なだらかにもてなして御覧じ過ぐすべきことに侍るなり。をのこの方にて奏すべきことにも侍らぬことになむ」といとすくすくしう申し給へば「對面の序にうれへ聞えむと待ちつけ奉りたるかひもなくあはの御ことわりや」とうち笑ひておはする。人の親にてはかばかしがり給へる程よりは、いと若やかにおほどいたる心ちす。御息所もかやうにぞおはすべかめる。宇治の姫君の心とまりて覺ゆるも、かうざまなるけはひのをかしきぞかしと思ひ居給へり。ないしのかみもこの頃まかで給へり。こなたかなたすみ給へるけはひをかしく 大方のどやかに紛るゝことなき御ありさまどものすのうち心耻しうおぼゆれば心づかひせられていとゞもてしづめめやす

きを、おほうへは近うも見ましかばとうちおぼしけり。大臣殿は唯この殿のびんがしなりけり。だい饗のえがの君達などあまたつどひ給ふ。兵部卿宮左のおほい殿ののりゆみのかへりだち、すまひのあるじなどにはおはしましゝを思ひて、今日のひかりとさうじ奉り給ひけれどおはしまさず 心にくゝもてかしづき給ふ。姫君達をさるは心ざしことにいかでかと思ひ聞え給ふべかめれど、宮ぞいかなるにかあらむ御心もとめ給はざりける。源中納言のいとゞあらまほしうねびとゝのひ何事もおくれたる方なくものし給ふをおとゞも北の方も目とゞめ給ひけり。隣のかくのゝしりて行きちがふ車の音さきおふ聲々も昔のこと思ひ出でられてこの殿には物哀にながめ給ふ。「故宮うせ給ひてほどもなくこのおとゞの通ひ給ひし事いとあはつけいやうに、世人はもどくなりしかど、思ひも消えずかくてものしたまふもさすがさる方にめやすかりけり。さだめなの世や。いづれにかよるべき」などのたまふ。左の大殿の宰相中將大饗のまたの日ゆふつけてこゝに參り給へり。御息所里におはすると思ふに いとゞ心げさうそひて「おほやけのかずまへ給ふよろこびなどは何ともおぼえ侍らず。わたくしの思ふとかなはぬなげきのみ年月にそへて思う給へはるけむ方なきと」と涙押しのごふもことさらめいたり。廿七八のほどの いと盛りに匂ひ花やかなるかたちし給へり。「見苦しの君達の世の中を心のまゝにおごりてつかさくらゐをば何ともおもはず過ぐしいますがらふや、故殿おはせましかばこゝなる人々もかゝるすさびごとにぞ心は亂らまし」とうち歎きたまふ。右兵衛督右大辨にて皆非參議なるをうれはしと思へり。侍從ときこゆめりしぞこのご

ろ頭中將ときこゆる。年よはひのほどはかたはならねど人におくるとなげき給へり。宰相はとかくつきづきしく。

橋姫

その頃世にかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。母方などもやんごとなくものし給ひてすぢことなるべきおぼえなどおはしけるを、時移りて世の中にはしたなめられ給ひけるまぎれに、なかなかいと名殘なく御後見なども物うらめしき心々にて、かたがたにつけて世を背きさりつゝ、おほやけわたくしによる所なくさしはなたれ給へるやうなり。北の方も昔の大臣の御むすめなりける。哀に心ぼそく親たちのおぼしおきてたりしさまなど思ひ出で給ふに、たとしへなきこと多かれど、深き御契のふたつなきばかりをうき世のなぐさめにて、かたみにまたなく頼みかはし給へり。年比經るに御子ものし給はで心もとなかりければ、さうざうしくつれづれなるなぐさめに、いかでをかしからむちごもがなと、宮ぞ時々おぼしのたまひけるに、珍しく女君のいと美しげなる生れ給へり。これをかぎりなく哀と思ひかしづき聞え給ふに、又さしつゞき氣色ばみ給ひてこのたびは男にてもなどおぼしたるに同じさまにてたひらかにはお給ひながらいといたく煩ひてうせ給ひぬ。宮あさましくおぼし惑ふ。ありふるにつけていとはしたなく堪へがたきこと多かる世なれど、見捨てがたく哀なる人の

御有樣心ざまにかけとゞめらるゝほだしにてこそすぐしきつれ、一人とまりていとゞすさまじくもあるべきかな、いはけなき人々をも一人はぐゝみたてむほどかぎりある身にていとをこがましうひとわるかるべき事とおぼしたちて、ほいも遂げまほしう志給ひけれど見譲る人もなくて殘しとゞめむをいみじくおぼしたゆたひつゝ年月もふれば、おのおのおよすげまさり給ふ。さまかたちの美しうあらまほしきを明暮の御なぐさめにておのづからぞ過ぐし給ふ。後に生れ給ひし君をば侍ふ人々も「いでやをりふし心憂く」などうちつぶやきて心に入れてもあつかひ聞えざりけれど、かぎりのさまにて何事もおぼしわかざりし程ながらこれをいと心苦しと思ひて、「唯この君をばかたみに見給ひて哀とおぼせ」とばかり唯ひとことなむ宮に聞え置き給ひければ、先の世の契もつらきをりふしなれどさるべきにこそはありけめと、今はと見えしまでいと哀と思ひてうしろめたげにのたまひしをとおぼし出でつゝ、この君をしもいと悲しう志奉り給ふ。かたちなむ誠にいと美くしうゆゝしきまで物し給ひける。姫君は心ばせ志づかによしある方にて見るめもてなしもけだかく心にくきさまぞ志給へる。いたはしくやんごとなきすぢは勝りていづれをもさまざまに思ひかしづき聞え給へど、かなはぬこと多く年月にそへて宮の内物さびしくのみなりまさる。侍ひし人もたづきなき心地するに得忍びあへず、つぎつぎに志たがひてまかでちりつゝ若君の御乳母もさるさわぎにはかばかしき人をしもえりあへ給はざりければ、程につけたる心あさゝにて幼きほどを見捨て奉りにければ唯宮ぞはぐゝみ給ふ。さすがに廣くおもしろき宮の、池山など

の氣色ばかり昔に變らでいといたうあれまさるをつれづれとながめ給ふ。けいしなどもむねむねしき人もなかりければとりつくろふ人もなきまゝに、草青やかにしげり軒のしのぶぞ所えがほに青み渡れる。折々につけたる花紅葉の色をも香をも同じ心にみはやし給ひしにこそ慰むことも多かりけれ、いとゞしくさびしくよりつかむ方なきまゝに、持佛の御飾ばかりをわざとせさせ給ひて明暮行ひ給ふ。かゝるほだしどもにかゝづらふだに思の外に口をしう、我が心ながらもかなはざりけるちぎりと覺ゆるを、まいて何にか世の人めいて今さらにとのみ、年月にそへて世の中をおぼし離れつゝ、心ばかりはひじりになりはて給ひて故君のうせ給ひしこなたは例の人のさまなる心ばへなど戯ぶれにてもおぼし出で給はざりけり。「などかさしも別るゝ程のかなしびは又世にたぐひなきやうにのみこそは覺ゆべかめれど、ありふればさのみやは。猶世の人になずらふ御心づかひをし給ひて、見苦しくたづきなき宮の内もおのづからもてなさるゝわざもや」と、人はもどき聞えて何くれとつきづきしく聞えごつことも類に觸れておほかれど聞し召し入れざりけり。御ねんずのひまひまにはこの君達をもてあそび、やうやうおよすげ給へば琴ならはし、碁うちへんつぎなどはかなき遊びわざにつけても、心ばへどもを見奉り給ふに、姫君はらうらうしく深くおもりかに見え給ふ。若君はおほどかにらうたげなるさまして物づゝみしたるけはひいとうつくしうさまざまに坐す。春のうらゝかなる日影に池の水鳥どもの羽根うちかはしつゝおのがしゝさへづる聲などを常ははかなき事と見給ひしかどもつがひ離れぬを羨しくながめ給ひて君達に

御琴ども敎へ聞え給ふ。いとをかしげに小き御程にとりどりかき鳴らし給ふ。物の音ども哀にをかしく聞ゆれば涙をうけ給ひて、

「うちすてゝつがひさりにし水鳥のかりのこの世にたち後れけむ。心づくしなりや」と目おしのごひ給ふかたちいと淸げにおはします宮なり。年比の御行ひに痩せほそり給ひにたれどさてしもあてになまめきて、君達を冊き給ふ御心ばへに直衣のなえばめるを着給ひてしどけなき御さまいと恥しげなり。姫君御硯をやをらひきよせて手習のやうに書きまぜ給ふを「これに書きたまへ。硯には書きつけざなり」とて紙奉り給へばはぢらひて書き給ふ。

「いかでかくすだちけるぞと思ふにもうき水鳥のちぎりをぞ志る」。よからねどそのをりは哀なりけり。手はおひさき見えてまだよくもつゞけ給はぬ程なり。「若君も書き給へ」とあれば今少しをさなげに久しく書き出で給へり。

「なくなくもはねうちきする君なくばわれぞすもりになるべかりける」。御ぞどもなどなえばみて御前に又人もなくいと寂しくつれづれげなるに、さまざまいとらうたげにて物し給ふを哀に心苦しういかゞおぼさゞらむ。經を片手にも給ひてかつ讀みつゝさうがをし給ふ。姫君に琵琶若君に箏の御琴を、まだをさなけれど常に合せつゝ習ひ給へば聞きにくゝもあらでいとをかしく聞ゆ。父帝にも母女御にも疾くおくれ給ひてはかばかしき御後見のとりたてたる坐せざりければ、ざえなど深くも得習ひ給はず。まいて世の中に住みつく御心おきてはいかでかは知り給はむ。たかき人と聞ゆる中にもあさましうあてにおほどかなる女

のやうにおはすれば、ふるき世の御寶物おほぢおとゞの御そうぶん何やかやとつきすまじかりけれど行くへもなくはかなくうせはてゝ御調度などばかりなむわざとうるはしくて多かりける。參り侍ひ聞え心よせ奉る人もなし。つれづれなるまゝにうたづかさの物の師どもなどやうの勝れたるを召しよせつゝはかなき御遊に心を入れおひ出で給へればその方はいとをかしく勝れ給へり。源氏のおとゞの御弟八宮とぞ聞えしを、冷泉院の春宮におはしましゝ時朱雀院の大后のよこざまにおぼし搆へてこの宮を世の中にたちつぎ給ふべく我が御時もてかしづき奉り給ひけるさわぎに、あいなくあなたざまの御なからひにはさしはなたれ給ひにければいよいよかの御つぎつぎになりはてぬる世にてえまじらひ給はず。又この年比かゝるひじりになりはてゝ、今はかぎりとよろづをおぼし捨てたり。かゝる程に住み給ふ宮燒けにけり。いとゞしき世にあさましうあへなくてうつろひ住み給ふべき所のよろしきもなかりければ宇治といふ所によしある山里も給へりけるに渡り給ふ。思ひ捨て給へる世なれども今はと住み離れなむを哀におぼさる。あじろのけはひ近く耳かしがましき川のわたりにて靜なる思ひにかなはぬ方もあれどいかゞはせむ。花紅葉水の流れにも心をやるたよりによせていとゞしくながめ給ふより外のことなし。かく絶え籠りぬる野山の末にも昔の人ものし給はましかばと思ひ出で聞え給はぬをりなかりけり。

「見し人も宿もけぶりになりにしをなどて我が身のきえのこりけむ」。生けるかひなくぞ覺しこがるゝや。いとゞ山重なれる御すみかに尋ね參る人もなし。あやしきげすなど田舍び

だるやまがつどものみまれになれ參り仕うまつる。峯の朝霧晴るゝ折なくて明し暮し給ふに、この宇治山にひじりだちたる阿ざ梨住みけり。ざえいとかしこくて世の覺えもかるからねどをさをさおほやけごとにも出で仕へず籠り居たるに、この宮のかく近き程に住み給ひて寂しき御さまにたふときわざをせさせ給ひつゝ法文などを讀み習ひ給へばたふとび聞えて常にまゐる。年比學び知り給へる事どもの深き心を解き聞かせ奉り、いよいよこの世のかりそめにあぢきなきことを申し知らすれば「心ばかりには はちすの上に思ひのぼり濁なき池にも住みぬべきをいとかく幼き人々を見捨てむうしろめたさばかりになむえひたみちにかたちをもかへぬ」などへだてなく物語し給ふ。この阿ざ梨は冷泉院にも親しく侍ひて御經など敎へ聞ゆる人なりけり。京に出でたるついでに參りて、例のさるべき文など御覽じて問はせ給ふともあるついでに「八宮のいとかしこく内敎の御ざえさとり深く物し給ひけるかな。さるべきにて生れ給へる人にや物し給ふらむ。心深く思ひすまし給へるほど誠のひじりのおきてになむ見え給ふ」と聞ゆ。「いまだかたちはかへ給はずや。ぞくひじりとかこの若き人々のつけたなる哀なる。」となり」などの給はす。宰相の中將も御前に侍ひ給ひて、我こそ世の中をいとすさまじく思ひ知りながら行ひなど人に目留めらるゝばかりはつとめず、口惜しくて過しけれなど人知れず思ひつゝ、俗ながらひじりになり給ふ心のおきてやいかにと、耳留めて聞き給ふ。「出家の志はもとより物し給へるをはかなきことに思ひとゞこほり今となりては心ぐるしき女子どもの御うへをえ思ひ捨てぬとなむ歎き侍り給ふ」と奏す。さすがにも

のゝ音めづる阿ざ梨にて「げにはたこの姫君達のこと彈きあはせて遊び給へる、河波にきほひて聞え侍るはいとおもしろく極樂思ひやられ侍るや」とこだいにめづれば、帝ほゝゑみ給ひて「さるひじりのあたりにおひ出でゝこの世のかたざまはたどたどしからむとおしはからるゝを、をかしのことや、うしろめたく思ひ捨てがたくもて煩ひ給へらむを、もしまばしもおくれむほどは讓りやはし給はぬ」などぞのたまはする。この院のみかどは十の御子にぞおはしける。朱雀院の故六條院にあづけ聞え給ひし入道の宮の御ためしをおぼし出でゝ、かの君達をがな、つれづれなるあそびがたきになどうちおぼしけり。中將の君はなかなかみこの思ひすまし給へらむ御心ばへを對面して見奉らばやと思ふ心ぞ深くなりぬる。さて阿ざ梨のかへりいるにも「必ず參りて物習ひ聞ゆべくまづうちうちにも氣色給はり給へ」など語らひ給ふ。みかどは御ことづてにて「哀なる御住まひを人づてに聞くこと」など聞え給うて、

「世をいとふ心は山にかよへどもやへたつ雲をきみやへだつる」。阿ざ梨この御使をさきにたてゝかの宮にまゐりぬ。なのめなるきはのさるべき人の使だにまれなる山陰にいと珍しく待ち喜び給ひて、所につけたるさかなゝどしてさるかたにもてはやし給ふ。御かへし、

「あとたえて心すむとはなけれども世をうぢ山にやどをこそかれ」。ひじりのかたをば卑下して聞えなし給へれば猶世に怨殘りけるといとほしく御覽ず。阿ざ梨、中將の君の道心深げに物し給ふ」など語り聞えて「法文などの心得まほしき志なむいはけなかりしよはひより深く思ひながら得去らず世にありふるほどおほやけわたくしにいとまなく明けくらし、わ

ざととぢ籠りて習ひ讀み大方はかばかしくもあらぬ身にしも世の中をそむき顔ならむも憚るべきにあらねど、おのづからうちたゆみ紛はしくてなむ過ぐしくるを、いとありがたき御有樣をうけ給はり傳へしより、かく心にかけてなむ賴み聞えさするなどねんごろに申し給ひし」など語り聞ゆ。宮「世の中をかりそめのことゝ思ひとり、いとはしき心のつきそむることも我が身にうれひある時、なべての世もうらめしう思ひ知るはじめありてなむ道心も起るわざなめるを、年若く世の中思ふにかなひ何事も飽かぬことはあらじと覺ゆる身のほどに、さはた後世をさへたどり知りたまふらむがありがたさ。こゝにはさべきにや。唯いとひ離れよと殊更に佛などのすゝめおもむけ給ふやうなる有樣にて、おのづからこそしづかなる思ひにかなひゆけど、のこり少き心地するにはかばかしくもあらで過ぎぬべかめるを、きしかた行く末更に得たどる所なく思ひ知らるゝを、かへりては心耻しげなるのりの友にこそはものし給ふなれ」などのたまひてかたみに御せうそこかよひ自らもまうで給ふ。げに聞きしよりも哀に住まひ給へるさまより始めていとかりなる草のいほりに思ひなしことそぎたり。同じき山里といへどさるかたにて心とまりぬべくのどやかなるもあるを、いとあらましき水の音波の響に物忘れうちし、よるなど心解けて夢をだに見るべき程もなげにすごく吹き拂ひたり。ひじりだちたる御ためにはかゝるしもこそ心とまらぬもよほしならめ、女君達何心地して過ぐし給ふらむ、世のつねの女しくなよびたる方はとほくやと推しはからるゝ御有樣なり。佛の御方にはさうじばかりを隔てゝぞおはすべかめる。すき心あらむ人は

氣色ばみよりて人の御心ばへをも見まほしうさすがにいかゞとゆかしうもある御けはひなり。されどさるかたを思ひ離るゝ願ひに山深く尋ね聞えたるほいなくすきずきしきなほざりごとを打ち出であざればまむもことにたがひてやなど思ひ返して、宮の御有樣のいと哀なるをねんごろにとぶらひ聞え給ひ、たびたび參り給ひつゝ思ひしやうにうばそくながら行ふ山の深き心、法文などわざとさかしげにはあらでいとよくのたまひ知らす。ひじりだつ人ざえある法師などは世におほかれどあまりこはこはしうけ遠げなるしうとくの僧都僧正のきはゝ世にいとまなくきすくにて物の心をとひあらはさむもことごとしく覺え給ふ。又その人ならぬ佛の御弟子の忌むことを保つばかりのたふとさはあれどけはひいやしくことばだみてこちなげにものなれたるいとものしくて、晝はおほやけごとに暇なくなどしつゝしめやかなるよひの程け近き御枕上などに召し入れ語らひ給ふにも、いとさすがに物むづかしくなどのみあるを、いとあてに心苦しきさまして のたまひ出づる言の葉も同じ佛の御敎をも耳近きたとひにひきまぜ、いとこよなく深き御さとりにはあらねどよき人は物の心をえたまふ方のいとことに物し給うければ、やうやう見馴れ奉り給ふたびごとに常に見奉らまほしうて、いとまなくなどしてほどふる時は戀しうおぼえ給ふ。この君のかくたふとがり聞え給へれば冷泉院よりも常に御せうそこなどありて、年比おとにもをさをさ聞え給はず、いみじく寂しげなりし御すみかにやうやう人め見る時々あり。をりふしにとぶらひ聞え給ふこといかめしうこの君もまづさるべきことにつけつゝをかしきやうにもまめやかなる

さまにも心よせ仕う奉り給ふこと三年ばかりになりぬ。秋の末つ方四季にあてつゝしゑ給ふ御念佛を、この河づらはあじろの浪もこのごろはいとゞ耳かしかましく靜ならぬをとて、かの阿闍梨の住む寺の堂にうつろひ給ひて七日のほど行ひ給ふ。姫君達はいと心ぼそくつれづれまさりてながめ給ひけるころ、中將の君久しく參らぬかなと思ひ出で聞え給うけるまゝに、有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出でたちて、いと忍びて御供に人などもなくやつれておはしけり。河のこなたなれば船などもわづらはで御馬にてなりけり。入りもて行くまゝに霧ふたがりて道も見えぬ繁木の中をわけ給ふに、いとあらましき風のきほひにほろほろと落ち亂るゝ木の葉の露の散りかゝるもいとひやゝかに人やりならずいたくぬれ給ひぬ。かゝるありきなどもをさをさならひ給はぬ心地に心ぼそくをかしくおぼされけり。

「山おろしにたへぬ木の葉の露よりもあやなくもろき我が涙かな」。やまがつの驚くもうるさしとてずゐじんの音もせさせ給はず、柴の籬をわけつゝそこはかとなき水の流れどもをふみしだく駒の足音も猶忍びてと用意し給へるに、かくれなき御にほひぞ風にしたがひて、ぬし知らぬかとおどろくねざめの家々ぞありける。近くなるほどにその事とも聞き別れぬ物の音どもいとすごげに聞ゆ。常にかく遊び給ふと聞くをついでなくて御子の御きんの音の名高きも得聞かぬぞかし、よき折なるべしと思ひつゝ入り給へば、琵琶の聲のひゞきなりけり。わうしきでうにしらべて世の常のかきあはせなれど所がらにや耳馴れぬ心地して、搔き返すばちの音も物淸げにおもしろし。箏の琴哀になまめいたる聲してたえだえ聞ゆ。しゑ

ばし聞かまほしきに忍びたまへど、御けはひしるく聞きつけて、とのゐびとめくをのこなまかたくなしき出で來たり。「しかしかなむ籠り坐します御せうそこをこそ聞えさせめ」と申す。「何かは、しか限りある御行ひの程を紛はし聞えさせむにあいなし。かくぬれぬれ參りていたづらに歸らむうれへを姫君の御方に聞えて哀とのたまはせばなむ慰むべき」とのたまへば、見にくき顔うちゑみて「申させ侍らむ」とてたつを「しばしや」と召しよせて「年比人づてにのみ聞きてゆかしく思ふ御ことの音どもを嬉しきをりかな。暫し少したち隱れて聞くべきもののくまありや。つきなくさし過ぎて參りよらむほど皆ことやめ給ひては、いとほいなからむ」とのたまふ。御けはひ顔かたちのさるなほなほしき心地にもいとめでたくかたじけなく覺ゆれば「人きかぬ時は明暮かくなむあそばせど、しも人にても都のかたより參りたちまじる人侍る時は音もせさせ給はず。大かたかくて女君達おはしますことをばかくさせたまひ、なべての人に知らせ奉らじとおぼしのたまはする」と申せば、うち笑ひて「味氣なき御ものかくしなり。しか忍び給ふなれど皆人ありがたき世のためしに聞き出づべかめるを」とのたまひて「猶しるべせよ。われはすきずきしき心などなき人ぞ。かくておはしますらむ御有樣のあやしくげになべてに覺え給はぬなり」とこまやかにの給へば「あなかしこ、心なきやうに後の聞えや侍らむ」とてあなたのお前はたけのすいがいしこめて皆へだてことなるを、敎へよせ奉れり。御供の人は西の廊によびすゑてこのとのゐあへしらふ。あなたに通ふべかめる透垣の戸を少し押し明けて見給へば、月をかしき程にきり渡れるをながめて、す

だれを少し短く巻き上げて人々居たり。簀子にいと寒げに身ほそくなえばめる童一人同じさまなるおとななど居たり。内なる人ひとりは柱に少し居かくれて琵琶を前に置きてばちを手まさぐりにしつゝ居たるに、雲がくれたりつる月の俄にいと明くさし出でたれば「扇ならでこれしても月はまねきつべかりけり」とてさしのぞきたる顔いみじくらうたげににほひやかなるべし。そひふしたる人は琴の上にかたぶきかゝりて「入る日をかへすばちこそありけれ。さまことにも思ひ及び給ふ御心かな」とてうち笑ひたるけはひ今少しおもりかによしづきたり。「及ばすともこれも月に離るゝものかは」など、はかなきことをうち解けのたまひかはしたる御けはひども、更によそに思ひやりしにはにず、いと哀になつかしうをかし。昔物語などに語り傳へて若き女房などの讀むをも聞くに、必ずかやうのことをいひたるさしもあらざりけむとにくゝおしはからるゝを、げに哀なるものゝくまあるべき世なりけりと心うつりぬべし。霧の深ければさやかに見ゆべくもあらず。又月さし出でなむと覺すほどに奥の方より「人坐す」と告げ聞ゆる人やあらむ、簾垂おろして皆入りぬ。驚き顔にはあらずなごやかにもてなしてやをらかくれぬるけはひども、きぬの音もせず、いとなよゝかに心苦しうていみじうあてにみやびかなるを哀と思ひ給ふ。やをらたち出でゝ京に御車ゐて參るべく人走らせ給ひつ。ありつるさぶらひに折あしく參り侍りにけれどなかなかうれしく思ふこと少し慰めてなむ。「かくさぶらふよし聞えよ。いたうぬれにたるかごとも聞えさせむかし」とのたまへば參りてきこゆ。かく見えやしぬらむとはおぼしもよらでうちとけたりつる

事どもを聞きやし給へらむといといみじくはづかし。怪しくかうばしく匂ふ風の吹きつるを思ひかけぬほどなれば驚かざりける心おぞさよと心も惑ひてはぢおはさうず。御せうそこなどつたふる人もいとうひうひしき人なめるを、をりからにこそ萬のこともと思ひてまだ霧のまぎれなればありつる御簾の前にあゆみ出でゝつい居給ふ。山里びたる若人どもはさしいらへむ言の葉も覺えて、御志とねさし出づるさまもたどたどしげなり。「この御簾の前にははしたなく侍りけり。うちつけに淺き心ばかりにてはかくも尋ね參るまじき山のかげぢに思ひ給ふるを、さまことにこそ。かく露けきたびをかさねてはさりとも御覽じ知るらむとなむたのもしう侍る」といとまめやかにのたまふ。若き人々のなだらかに物聞ゆべきもなく消え返りかゞやかしげなるもかたはらいたければ、女ばらの奧深きをおこし出づる程久しくなりてわざとめいたるも苦しうて「何事も思ひ知らぬありさまにて、知りがほにもいかゞは聞ゆべき」といとよしありてあてなる聲してひき入りながらほのかにのたまふ。「かつ知りながらうきを知らず顏なるも世のさがと思ひ給へ知るを、ひとところしもあまりおぼめかせ給へらむこそ口惜しかるべけれ。ありがたう萬を思ひすましたる御住まひなどにたぐひ聞えさせ給ふ御心のうちは何事も涼しくおしはかられ侍れば、猶かく忍びあまり侍る深さ淺さのほどもわかせ給はむこそかひは侍らめ。世の常のすきずきしきすぢにはおぼし召し放つべくや。さやうのかたはわざとすゝむる人侍るとも靡くべうもあらぬ心强さになむ、おのづから聞し召しあはするやうも侍りなむ。つれづれとのみ過ぐし侍る世の物語も聞

えさせ所に頼み聞えさせ、又かく世離れてながめさせ給ふらむ御心のまぎらはしにもさしも驚かさせ給ふばかり聞えなれ侍らばいかに思ふさまに侍らむ」など多くのたまへば、つゝましくいらへにくゝておこしつるおい人の出できたるにぞ讓り給ふ。たとしへなくさし過して「あなかたじけなや。かたはらいたきおましのさまにも侍るかな。御簾の内にぞ若き人々はものゝほど知らぬやうにこそ」などしたゝかにいふ聲のさだすぎたるもかたはらいたく君達はおぼす。「いとも怪しく世の中に住まひ給ふ人の數にもあらぬ御有樣にてさもありぬべき人々だに、とぶらひかずまへ聞え給ふも見え聞えずのみなりまさり侍るめるに、ありがたき御志のほどは數にも侍らぬ心にもあさましきまで思ひ給へ聞えさせ侍るを、若き御心地にもおぼし知りながら聞えさせ給ひにくきにや侍らむ」といとつゝみなく物馴れたるもなまにくきものからけはひいたう人めきてよしある聲なれば「いとたづきも知らぬ心地しつるにうれしき御けはひにこそ。何事もげに思ひ知り給ひけるたのみこよなかりけり」とて寄り居給へるを几帳のそばより見れば、曙のやうやうものゝ色わかるゝにげにやつし給へると見ゆる狩衣姿のいとぬれしめりたるほどうたてこの世の外のにほひにやと怪しきまでかをりみちたり。このおい人はうち泣きぬ。「さしすぎたる罪もやと思ひ給へ忍ぶれど、哀なる昔の御物語のいかならむ序にうち出で聞えさせかたはしをもほのめかししろしめさせむと、年比ねんずのついでにもうちまぜ思ひ給へわたるしるしにや嬉しきをりに侍るを、まだきにおぼゝれたる涙にくれてえこそ聞えさせ侍らね」とうちわなゝく氣色誠にいみじく物

悲しと思へり。大かたさだすぎたる人は涙もろなるものとは見聞き給へどいとかうしも思へるも怪しうなり給ひて「こゝにかく參ることはたびかさなりぬるを、かく哀知り給へる人もなくてこそ露けき道のほどに一人のみそぼちつれ。うれしきついでなめるをことなのこい給ひそかし」とのたまへば、「かゝる序しも侍らじかし。また侍るとも夜のまのほど知らぬ命の頼むべきにも侍らぬを、さらば唯かゝるふるもの世に侍りけりとばかり志ろしめされ侍らなむ。三條の宮に侍ひし小侍從ははかなくなり侍りにけるとほのかに聞き侍りし。そのかみ睦じう思ひ給へしおなじほどの人多くうせ侍りにける世の末に、遙なる世界より傳はりまうできてこの五年六年のほどなむこれにかくさぶらひ侍る。え志ろしめさじかし。この頃藤大納言と申すなる御このかみの、衞門督にてかくれ侍りにしは、ものゝついでなどにやかの御上とて聞し召し傳ふることも侍らむ。すぎ給ひていくばくも隔たらぬ心地のみし侍る。そのをりの悲しさもまだ袖のかわくをり侍らず思ひ給へらるゝを、手を折りて數へ侍ればかくおとなしくならせ給ひにける、御よはひの程も夢のやうになむ。かの故權大納言の御乳母に侍りしは辨が母になむ侍りし。朝夕に仕うまつり馴れ侍りしかば人數にも侍らぬ身なれど人に知られず御心よりはたあまりけることををりをりうちかすめのたまひしを、今は限になり給ひにし御病の末つ方召しよせていさゝかのたまひおくことなむ侍りしを聞し召すべき故なむひとこと侍れどかばかり聞え出で侍るにのこりをとおぼし召す御心侍らばのどかになむ聞し召しはて侍るべき。若き人々もかたはらいたくさしすぎたりとつきじろ

ひ侍るめるもことわりになむ」とてさすがに打ち出でずなりぬ。あやしく夢がたりかんなぎやうのもの丶問はずがたりするやうに珍らかにおぼさるれど哀に覺束なくおぼし渡ることのすぢを聞ゆればいとおくゆかしけれど、げに人めも繁し、さしぐみにふる物語にかゝづらひて夜を明しはてむもこちごちしかるべければ「そこはかと思ひわくことはなきものからいにしへのことゝ聞き侍るも物哀になむ。さらば必ずこのこり聞かせ給へ。霧晴れゆかばはしたなかるべきやつれをおもなく御覽じ咎められぬべきさまなれば思ひ給ふる心の程よりは口惜しうなむ」とて立ち給ふに、かのおはします寺の鐘の聲かすかに聞えて霧いと深くたちわたれる峯の八重雲思ひやるへだて多く哀なるに、猶この姫君達の御心のうちども心苦しう何事をおぼし殘すらむ、かくいとおくまり給へるもことわりぞかしなどおぼす。

「あさぼらけ家路も見えずたづねこし槇のを山は霧こめてけり。心ぼそくも侍るかな」とたちかへりやすらひ給へるさまを都の人のめなれたるだに猶いとことに思ひ聞え侍るをまいていかゞは珍しう見ざらむ。御かへり聞え傳へにくげに思ひたれば例のいとつゝましげにて、

「雲のゐる峯のかけぢを秋霧のいとゞへだつるころにもあるかな」。少しうち歎き給へる氣色淺からず哀なり。何ばかりをかしきふしは見えぬあたりなれど實に心苦しきこと多かるにもあかうなり行けばさすがにひたおもてなる心地して「なかなかなるほどに承りさしつることと多かるのこりは今少しおもなれてこそは怨み聞えさすべかめれ。さるはかく世の

人めいてもてなし給へば思はずに物おぼしわかざりけりと、うらめしうなむ」とてとのゐびとがしつらひたる西面におはしてながめ給ふ。「あじろは人さわがしげなり。されどひをもよらぬにやあらむすさまじげなる氣色なり」と御供の人々見知りていふ。あやしき船どもに柴刈り積みおのおの何となき世のいとなみどもに行きかふさまどものはかなき水の上に浮びたる、誰も思へば同じことなる世のつねなさなり。我はうかばず玉の臺にしづけき身と思ふべき世かはと思ひつゞけらる。硯召してあなたに聞え給ふ。

「はし姫の心をくみてたかせさす棹のしづくにそでぞぬれぬる。ながめ給ふらむかし」とてとのゐびとにもたせ給へり。寒げにいらゝぎたる顔してもて參る。御かへし紙のかなどおぼろげならむは恥しげなるを、疾きをこそはかゝるをりはとて、

「さしかへる宇治の川をさ朝夕のしづくや袖をくたしはつらむ。身さへうきて」といとをかしげに書き給へり。まほにめやすく物し給ひけりと心とまりぬれど御車ゐて參りぬと人々さわがし聞ゆればとのゐびとばかりを召しよせて「かへり渡らせ給はむほどに必ず參るべし」などのたまふ。ぬれたる御ぞどもは皆この人にぬぎかけ給ひてとりにつかはしつる御直衣に奉りかへつ。おい人の物語心にかゝりておぼし出でらる。思ひしよりはこよなくまさりておほどかにをかしかりつる御けはひども面かげに添ひて、猶思ひ離れがたき世なりけりと心弱く思ひ知らる。御文奉り給ふ。けさうだちてもあらず、白き色紙のあつごえたるに筆はひきつくろひえりて墨つき見所ありて書き給ふ。「うちつけなるさまにやとあいなく留

め侍りて、のこり多かるも苦しきわざになむ。かたはし聞え置きつるやうに今よりは御簾の前も心やすくおぼし許すべくなむ。御山ごもりはて侍らむ日數もうけ給はりおきて いぶせかりし霧のまよひもはるけ侍らむ」などぞいとすくよかに書き給へる。左近のぞうなる人御使にて「かのおい人尋ねて文もとらせよ」とのたまふ。とのゐ人がさむげにてさまよひしなど哀におぼしやりて大きなるひわりごやうのもの數多せさせ給ふ。又の日かの御寺にも奉り給ふ。山ごもりの僧どもこのごろの嵐にはいと心ぼそく苦しからむを、さておはしますほどの布施給ふべからむとおぼしやりて 絹綿など多かりけり。御行はてゝ出で給ふあしたなりければ行ひ人どもに綿絹袈裟衣などすべてひとくだりの程づゝあるかぎりの大とこたちにたまふ。とのゐ人かの御ぬぎすてのえんにいみじきかりの御ぞども えならぬ白き綾の御ぞのなよなよといひ知らず匂へるをうつしきて、身をはたえかへぬものなれば似つかはしからぬ袖の香を人ごとに咎められめでらるゝなむ なかなかところせかりける。心にまかせて身を安くもふるまはれず、いとむくつけきまで人の驚くにほひを失ひてばやと思へど、所せき人の御うつりがにてえもすゝぎすてぬぞあまりなるや。 君は姫君の御返事 いとめやすくこめかしきををかしく見給ふ。宮にも「かく御せうそこありき」など人々聞えさせ御覽ぜさすれば「何かは。けさうだちてもてない給はむもなかなかうたてあらむ。例の若き人に似ぬ御心ばへなめるを、なからむ後もなどひとことうちほのめかしてしかば、さやうにて心ぞとめたらむ」などのたまひけり。御みづからもさまざまの御とぶらひの山の岩屋に餘りして

となどのたまへるに、まうでむとおぼして、三の宮のかやうにおくまりたらむあたりのみまさりせむこそをかしかるべけれとあらましごとにだにのたまふものを。聞えはげまして御心さわがし奉らむとおぼして、のどやかなる夕暮に參り給へり。例のさまざまなる御物語聞えかはし給ふついでに宇治の宮のこと語り出でゝ、見し曉のありさまなどくはしく聞え給ふに、宮いとせちにをかしとおぼいたり。さればよと御氣色を見ていとゞ御心動きぬべくいひつゞけ給ふ。「さてそのありけむ返事はなどか見せ給はざりし。まろならましかば」と怨み給ふ。「さかし。いとさまざま御覽ずべかめる端をだに見せ給はぬ。かのわたりはかくいともうもれたる身にひきこめてやむべきけはひにも侍らねば必ず御覽ぜさせばやと思ひ給ふれど、いかでか尋ねよらせ給ふべき。かやすきほどこそすかまほしくはいとよくすきぬべき世に侍りけれ。うちかくろへつゝ多かめるかな。さるかたに見所ありぬべき女の物思はしきうち忍びたるすみかも山里めいたるくまなどにおのづから侍るべかめり。この聞えさするわたりはいとよづかぬひじりざまにてこちごちしうぞあらむと年比は思ひあなづり侍りて耳をだにこそ留め侍らざりけれ。ほのかなりし月影の見劣りせずばまほならむはや。けはひ有樣はたさばかりならむをぞあらまほしきほどと覺え侍るべき」など聞え給ふ。はてはてはまめだちていとねたく、おぼろげの人に心移るまじき人のかく深く思へるを、おろかならじとゆかしうおぼすことかぎりなくなり給ひぬ。「猶又々よく氣色見給へ」と人をすゝめ給ひて限りある御身のほどのよだけさをいとはしきまで心もとなしとおぼしたれば、をかしくて「い

てやよしなくぞ侍る。志ばし世の中に心とゞめじと思ひ給へるやうある身にてなほざりごともつゝましう侍るを、心ながらかなはぬ心つきそめなばおほきに思ひにたがふべきことなむ侍るべき」と聞え給へば「いてあなことごとし。例のおどろおどろしきひじりことば見はてゝしがな」とて笑ひ給ふ。心のうちにはかのふる人のほのめかしゝすぢなどのいとゞうち驚かされて物哀なるにをかしと見ることもめやすしと聞くあたりも何ばかり心にもとまらざりけり。十月になりて五六日のほどに宇治へまうで給ふ。「あじろをこそこの頃は御覧ぜめ」と聞ゆる人々あれど「何かはそのひをむしにあらそふ心にてあじろにもよらむ」とそぎ捨て給ひて、かろらかに網代車にてかとりの直衣指貫ぬはせて殊さらび着給へり。宮待ち喜び給ひて所につけたる御あるじなどをかしう志なし給ふ。暮れぬれば大となぶら近くて、さきざき見さし給へる文どもの深きなど、阿闍梨もさうじおろして義などいはせ給ふ。うちもまどろまず。河風のいとあらましきに木の葉の散りかふおと水のひゞきなど哀もすぎて物恐しく心ぼそき所のさまなり。明けがた近くなりぬらむと思ふ程に、ありし志のゝめ思ひ出でられて、琴の音の哀なることのついでつくり出でゝ「さきのたび霧にまどはされ侍りし曙にいと珍しきものゝ音ひと聲うけたまはりしのこりなむ、なかなかにいといぶかしう飽かず思ひ給へらるゝ」など聞え給ふ。「色をも香をも思ひ捨てゝし後昔聞きしことも皆忘れてなむ」とのたまへど、人召してきんとりよせて「いとつきなくなりにたりや。志るべする物の音につけてなむ思ひ出でらるべかりける」とて琵琶めしてまらうどにそゝのかし給ふ。と

りて志らべ給ふ。「更にほのかに聞き侍りし同じものとも思ひ給へられざりけり。御琴の響がらにやとこそ思ひ給へしか」とて心とけてもかきたて給はず。「いであなさがなや。志か御耳とまるばかりのてなどはいづくよりか此處までは傳はりこむ。あるまじき御事なり」とてきんかきならし給へるいと哀に心凄し。かたへは峯の松風のもてはやすなるべし。いとたどたどしげにおぼめき給ひて心ばへある手ひとつばかりにてやめ給ひつ。「このわたりに覺えなくて折々ほのめく箏の琴の手こそ心得たるにやと聞く折侍れど心留めてなどもあらで久しうなりにけりや。心にまかせて各かきならすべかめるは河波ばかりやうち合すらむ。ろなうものゝようにすばかりの はうしなどもとまらじとなむ覺え侍る」とて「かきならし給へ」と彼方に聞え給へど「思ひよらざりしひとりごとを聞き給ひけむだにある物をいと片はならむ」とひきいりつゝ皆聞き給はず。度々そゝのかし聞え給へどとかく聞えすまひてやみ給ひぬればいと口惜しう覺ゆ。そのついでにもかく怪しう世づかぬ思ひやりにてすぐす有樣どもの思の外なることなど恥しうおぼいたり。「人にだにいかで知らせじとはぐゝみすぐせど今日明日とも知らぬ身ののこりすくなさにさすがに行く末遠き人はおちあふれてさすらへむこと、これのみこそげに世を離れむきはのほだしなりけれ」と打ち語らひ給へば心苦しう見奉り給ふ。「わざとの御後見だちはかばかしきすぢに侍らずともうとうとしからずおぼし召されむとなむ思ひ給ふる。志ばしもながらへ侍らむ命のほどは ひとこともかく打ち出で聞えさせてむさまをたがへ侍るまじくなむ」など申し給へば「いと嬉しきこと」とおぼし

の給ふ。さて曉方宮の御行し給ふほどにかのおい人召し出でゝあひ給へり。姫君の御後見にて侍はせ給ふ。辨の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬほどなれどみやびかに故あるけはひしてものなど聞ゆ。故權大納言の君の世とともに物を思ひつゝ病づきはかなくなり給ひにし有樣を聞え出でゝ泣くことかぎりなし。げによその人の上と聞かむだに哀なるべきふる事どもをまして年比覺束なくゆかしういかなりけむ事のはじめにかと佛にもこのことをさだかに知らせ給へと念じつるしるしにや、かく夢のやうに哀なる昔がたりを覺えぬついでに聞きつけつらむとおぼすに涙とゞめがたかりけり。「さてもかくその世の心知りたる人も殘り給へりけるを珍らかにも恥しうも覺ゆることのすぢに猶かくいひ傳ふるたぐひやまたもあらむ。年ごろかけても聞き及ばざりけるを」との給へば「小侍從と辨とはなちて又知る人侍らじ。ひとことにても又こと人にまねび侍らず。かくものはかなく數ならぬ身のほどに侍れど、よるひるかの御かげにつき奉りて侍りしかば、おのづから物の氣色をも見奉りそめしに御心よりあまりておぼしける時々唯二人の中になむ、たまさかの御せうそこの通ひも侍りし。かたはらいたければ委しく聞えさせず。今はのとぢめになり給ひていさゝかのたまひおく事の侍りしを、かゝる身には置き所なくいぶせく思う給へ渡りつゝ、いかにしてかは聞し召し傳ふべきと、はかばかしからぬねんずのついでにも思ひ給へつるを、佛は世におはしましけりとなむ思う給へ知りぬる。御覽ぜさすべきものも侍り。今は何かは燒きも捨て侍りなむ。かく朝夕のきえを知らぬ身のうち捨て侍りなば落ち散るやうもこそと いとう

しろめたく思ひ給ふれど、この宮わたりにも時々ほのめかせ給ふを待ち出で奉りしかば少したのもしく、かゝるをりもやと念じ侍りつる力出でまうできてなむ。更にこれはこの世の事にも侍らじ」となくなく細かに、生れ給ひける程のこともよく覺えつゝ聞ゆ。「空しうなり給ひしさわぎに母に侍りし人はやがて病づきて ほども經ず隱れ侍りにしかば、いとゞ思ひ給へ沈み藤衣もたちかさね悲しきことを思ひ給へしほどに、年比よからぬ人の心をつけたりけるが人をはかりごちて西の海の はてまでとりもてまかりにしかば、京のことさへ跡絶えてその人もかしこにてうせ侍りにし後十年あまりにてなむあらぬ世の心地してまかりのぼりたりしを、この宮は父方につけて童より參り通ふ故侍りしかば今はかう世にまじらふべきさまにも侍らぬを、冷泉院の女御どのゝ御かたなどこそは昔聞きなれ奉りしわたりにて參りよるべく侍りしかどはしたなく覺え侍りてえさし出で侍らでみやまがくれのくちきになりにて侍るなり。小侍從はいつかうせ侍りにけむ。そのかみの若盛りと見侍りし人は數少くなり侍りにける。末の世に多くの人に後るゝ命を悲しく思ひ給へてこそさすがにめぐらひ侍れ」など聞ゆるほどに例の明けはてぬ。「よしさらばこの昔物語はつきすべうなむあらぬ。又人聞かぬ心安き所にて聞えむ。侍從といひし人はほのかに覺ゆるは 五つ六つばかりなりし程にや。俄に胸を病みてうせにきとなむ聞く。かゝる對面なくば罪重き身にて過ぎぬべかりける」ことなどのたまふ。さゝやかにおしまきあはせたるほぐどものかびくさきを袋にぬひ入れたる取り出でゝ奉る。「御前にてうしなはせ給へ、我猶生くべくもあらずなりにたり

とのたまはせてこの御文をとり集めて給はせたりしかば小侍從に又あひ見侍らむついでにさだかに傳へ參らせむと思ひ給へしを、やがて別れ侍りにしも私事には飽かず悲しうなむ思ひ給ふる」と聞ゆ。つれなくてこれはかくい給ひつ。かやうのふる人はとはずがたりにや怪しきことのためしにいひ出づらむと苦しくおぼせど、かへすがへすもちらさぬよしをちかひつる、さもやと又思ひ亂れ給ふ。御粥こはいひなど參り給ふ御とぶらひに必ず參るべければを今日はうちの御物忌もあきぬらむ。院の女一宮惱み給ふ御とぶらひに必ず參るべければかたがたいとまなく侍るを又この比過ぐして山の紅葉散らぬさきに參るべき」よし聞え給ふ。「かく志ば志ばたちよらせ給ふひかりに、山の陰も少し物あきらむる心地してなむ」などよろこび聞えたまふ。歸り給ひてまづこの袋を見給へば唐の浮線綾を縫ひて上といふ文字をうへに書きたり。細き組して口の方をゆひたるに、かの御名の封つきたり。あくるも恐しうおぼえ給ふ。いろいろの紙にてたまさかに通ひける御文の返事五つ六つぞある。さてはかの御手にて「病は重くかぎりになりにたるに又ほのかにも聞えむことかたくなりぬるをゆかしう思ふことはそひにたり。御かたちも變りておはしますらむがさまざま悲しき」ことをみちのくにがみ五六枚につぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて、

「めの前にこの世をそむく君よりもよそにわかるゝたまぞ悲しき」。またはしに「めづらしく聞き侍る二葉のほどもうしろめたう思ひ給ふる方はなけれど、

命あらばそれとも見まし人志れずいはねにとめし松のおひすゑ」。かきさしたるやうに

いと亂りがはしくて「侍從の君に」と上には書きつけたり。紙魚といふ蟲のすみかになりてふるめきたるかびくさゝながらあとは消えず。唯今書きたらむにもたがはぬ言の葉どものこまごまとさだかなるを見給ふにげに落ち散りたらましかばとうしろめたういとほしきことどもなり。かゝること世にまたあらむやと心ひとつにいとゞ物思はしさそひて、內へ參らむとおぼしつるも出でたゝれず。宮の御前に參り給へればいと何心もなく若やかなるさまし給ひて經讀み給ふを恥ぢらひてもてかくし給へり。何かはしりにけりとも知られ奉らむなど心にこめてよろづに思ひ居たまへり。

椎本

二月の二十日のほどに兵部卿の宮初瀨にまうで給ふ。ふるき御願なりけれどおぼしもたゝで年頃になりにけるを、宇治のわたりの御中やどりのゆかしさに、多くはもよほされ給へるなるべし。うらめしといふ人もありける里の名の、なべてむつましうおぼさるゝ故もはかなしや。上達部いとあまた仕うまつり給ふ。殿上人などはさらにもいはず世に殘る人少く仕うまつれり。六條院よりつたはりて右の大殿志り給ふ所は、河よりをちにいと廣くおもしろくてあるに、御まうけせさせ給へり。おとゞもかへさの御迎へに參り給ふべくおぼしたるを俄なる御物忌の重く愼み給ふべく申したれば、え參らぬよしのかしこまり申し給へり。宮、な

ますさまじとおぼしたるに、宰相の中將、今日の御迎へに參りあひ給へるになかなか心やすくて、かのわたりのけしきも傳へよらむと御心ゆきぬ。おとゞをばうちとけて見えにくゝことごとしきものに思ひ聞え給へり。御子の公達、右大辨、侍從の宰相、權中將、頭少將、藏人の兵衛佐など皆さぶらひ給ふ。帝后も心ことに思ひ聞え給へる宮なれば大かたの御おぼえもいとかぎりなく、まいて六條院の御かたざまはつぎづきの人も、皆私の君に心よせ仕うまつり給ふ。所につけたる御しつらひなどをかしうしなして、碁すぐろくたぎのばんどもなどとり出でゝ、心々にすさびくらし給ひつ。宮はならひ給はぬ御ありきに惱ましくおぼされて、こゝにやすらはむの御心も深ければ、うちやすみ給ひて夕つ方ぞ御琴など召して遊び給ふ。例のかう世ばなれたる所は水の音ももてはやして、物の音すみまさる心地して、かのひじりの宮にも唯さしわたる程なれば、追風に吹き來るひゞきを聞き給ふに、昔の事おぼし出でられて、「笛をいとをかしくも吹きとほしたるかな。誰ならむ。昔の六條院の御笛の音聞きしはいとをかしげに愛敬づきたるねにこそ吹き給ひしか。これは澄みのぼりて、ことごとしきけのそひたるは、致仕のおとゞの御ぞうの笛の音にこそ似たなれ」などひとりごちおはす。「哀に久しくなりにけるや。かやうの遊などもせで、あるにもあらですぐし來にける年月の、さすがに多く算へらるゝこそかひなけれ」などのたまふついでにも、姫君たちの御有樣あたらしく、かゝる山ふところにひき籠めては、止まずもがなとおぼし續けらる。宰相の君の、同じうは近きゆかりにて見まほしげなるを、さしも思ひよるまじかめり、まいて今やうの心淺

からむ人をばいかでかはなどおぼし亂れて、つれづれとながめたまふ。所は春の夜もいと明しがたきを、心やり給へる旅寢のやどりはゑひのまぎれにいと疾う明けぬる心地して、飽かず歸らむことを宮はおぼす。はるばるとかすみ渡れる空に、散る櫻あれば今ひらけそむるなどいろいろ見渡さるゝに、河ぞひ柳のおきふし靡く水かげなどおろかならずをかしきを、見ならひ給はぬ人はいと珍しく見捨て難しとおぼさる。宰相はかゝるたよりをすぐさずかの宮に詣うでばやとおぼせど、あまたの人めをよきて一人漕ぎ出で給はむふなわたりのほども輕らかにやと思ひやすらひ給ふほどに、かれより御文あり。

「山風にかすみ吹きとく聲はあれどへだてゝ見ゆるをちのしら波」。さうにいとをかしう書き給へり。宮おぼすあたりと見給へばいとをかしくおぼいて、「この御かへりは我せむ」とて、

「をちこちのみぎはの波はへだつともなほ吹きかよへ宇治の河風」。中將はまうで給ふ。あそびに心入れたるきんだちさそひて、さしやり給ふほど、酣醉樂遊びて、水にのぞきたる廊に造りおろしたる橋の心ばへなど、さる方にいとをかしうゆゑある宮なれば、人々心して船よりおり給ふ。こゝはまたさまことに、山ざとびたる網代屏風などの、ことさらにことそぎて見所ある御しつらひを、さる心ちしてかきはらひいといたうしなし給へり。いにしへのねなど、いとになきひきものどもをわざとまうけたるやうにはあらでつぎつぎひき出で給ひて、壹越調のこゝろに櫻人遊び給ふ。あるじの宮の御きんをかゝるついでにと人々思ひ給

へれど、箏のことをぞ心にもいれずをりをりかきあはせ給ふ。耳なれぬけにやあらむ、いと物深くおもしろしと若き人々思ひしみたり。所につけたるあるじいとをかしうし給ひて、よそに思ひやりし程よりは、なま孫王めく賤しからぬ人あまた、おほきみ四位のふるめきたるなど、かく人め見るべきをりと、かねていとほしがり聞えけるにや、さるべきかぎり參りあひて、瓶子とる人もきたなげならず、さる方にふるめきてよしよししうもてなし給へり。まらうどたちは、御むすめたちのすまひ給ふらむ御有樣思ひやりつゝ、心つくす人もあるべし。かの宮はまいてかやすきほどならぬ御身をさへ處せくおぼさるゝを、かゝる折にだにと忍びかね給ひて、おもしろき花の枝を折らせ給ひて、御供にさぶらふ上わらはのをかしきして奉り給ふ。

「山櫻にほふあたりに尋ねきておなじかざしを折りてけるかな。野をむつましみ」とやありけむ。御かへりはいかでかはなど、聞えにくゝおぼしわづらふ。「かゝるをりのこと、わざとがましくもてなし、程の經るもなかなかにくきことになむ」など、ふる人ども聞ゆれば、中の君にぞ書かせ奉り給ふ。

「かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春のたび人。野をわきてしも」といとをかしげにらうらうしく書き給へり。げに河風も心わかぬさまに吹き通ふ物の音どもおもしろく遊び給ふ。御迎に藤大納言、仰言にて參り給へり。人々あまた參り集ひ、物さわがしくてきほひ歸り給ふ。若き人々飽かずかへりみのみせられける。宮は又さるべきついでしてとお

ぼす。花ざかりにて、四方の霞もながめやる程の見所あるに、からのもやまとのも歌ども多かれど、うるさくて尋ねも聞かぬなり。物さわがしくて思ふまゝにもえいひやらずなりにしを飽かず宮はおぼして、しるべなくても御文は常にありける。宮も「猶聞えたまへ。わざとけさうだちてももてなさじ。なかなか心時めきにもなりぬべし。いとすき給へるみこなればかゝる人など聞き給ふが、猶もあらぬすさびなめり」とそゝのかし給ふ。時々中の君ぞ聞え給ふ。姫君はかやうのこと、たはぶれにもてはなれ給へる御心深さなり。いつとなく心ぼそき御有樣に、春のつれづれはいとゞ暮し難くながめ給ふ。ねびまさり給ふ御さまかたちどもいよいよまさり、あらまほしくをかしきもなかなか心苦しう、かたほにもおはせましかばあたらしくをしき方の思ひは薄くやあらましなど明暮おぼしみだる。姉君廿五、中の君廿二にぞなり給ひける。宮は重く愼み給ふべき年なりけり。物心ぼそくおぼして、御おこなひ常よりもたゆみなくし給ふ。世に心とゞめ給はねば出でたちいそぎをのみおぼせば、涼しき道にも赴き給ひぬべきを、唯この御事どものいといとほしく、かぎりなき御心づよさなれど、必ず今はと見捨て給はむ御心は亂れなむと、見奉る人もおしはかりきこゆるを、おぼすさまにはあらずともなのめにさても人ぎゝくちをしかるまじう、見ゆるされぬべききはの人の、まごゝろにうしろみ聞えむなど思ひより聞ゆるあらば知らずがほにてゆるしてむ、ひとところ世に住みつき給ふよすがあらば、それを見ゆづる方に慰めおくべきを、さまで深き心に尋ね聞ゆる人もなし。まれまれはかなきたよりにすきごと聞えなどする人、また若々しき人

の心のすさびに、物まうでの中やどり、ゆききのほどのなほざりごとに氣色ばみかけて、さすがにかくながめ給ふ有樣などおしはかりあなづらはしげにもてなすはめざましうて、なげのいらへをだにせさせ給はず。三宮ぞなほ見では止まじとおぼす御心深かりける。さるべきにやおはしけむ。宰相の中將その秋中納言になり給ひぬ。いとゞにほひまさり給ふ。世のいとなみに添へてもおぼすこと多かり。いかなることといぶせく思ひ渡りし年比よりも心苦しうて、過ぎ給ひにけむいにしへざまの思ひやらるゝに、罪輕くなり給ふばかり、おこなひもせまほしくなむ、かのおい人をば哀なるものに思ひおきて、いちじるきさまならず、とかくまぎらはしつゝ心よせとぶらひ給ふ。宇治にまうでゝ久しうなりにけるを思ひ出でゝ參り給へり。七月ばかりになりにけり。都にはまだ入りたゝぬ秋の氣色を音羽の山近く風の音もいとひやゝかに槇の山邊も僅に色づきて、猶尋ね來たるにをかしう珍しうおぼゆるを、宮はまいて例よりも待ち喜び聞え給ひて、この度は心ぼそげなる物語いと多く申し給ふ。「なからむ後この君達をさるべきものゝたよりにもとぶらひ、思ひ捨てぬものにかずまへ給へ」などおもむけつゝ聞え給へば、「ひとことにても承りおきてしかば更に思う給へをこたるまじくなむ。世の中に心をとゞめじとはぶき侍る身にて、何事もたのもしげなきおひさきのすくなさになむ侍れど、さる方にてもめぐらひ侍らむかぎりは、變らぬ志を御覽じ知らせむとなむ思う給ふる」など聞え給へば、いとうれしとおぼいたり。夜深き月のあきらかにさし出でゝ、山のは近き心ちするに、ねんずいとあはれに志給ひて昔物がたり志給ふ。「この頃の世はいか

ゞなりにたちらむ。くぢらうなどにてかやうなる秋の月に、御前の御あそびのをりにさぶらひあひたる中に、物の上手とおぼしきかぎりとりどりにうちあはせたる拍子などことごとしきよりも、よしありとおぼえある女御更衣の御つぼねつぼねの、おのがじゝはいどましく思ひうはべのなさけをかはすべかめるを、夜深きほどの人のけしめりぬるに、心やましくかいしらべ、ほのかにほころび出でたる物の音など聞き所あるが多かりしかな。何事にも女はもてあそびのつまにしつべく、物はかなきものから人の心を動かすくさはひになむあるべき。されば罪の深きにやあらむ。子の道のやみを思ひやるにも、をのこはいとしも親の心をみださずやあらむ。女はかぎりありていふかひなき方に思ひ捨つべきにも、猶いと心苦しかるべき」など大方のことにつけてのたまへる、いかゞさおぼさゞらむと心苦しく思ひやらるゝ御心のうちなり。「すべて誠にしか思ひ給へすてたるけにや侍らむ。みづからのことにては、いかにもいかにも深う思ひ知る方の侍らぬを、げにはかなきことなれど、聲にめづる心こそ背きがたきことに侍りけれ。さかしうひじりだつ迦せうもさればや立ちて舞ひ侍りけむ」など聞えて、飽かず一聲聞きし御琴の音を、せちにゆかしがり給へば、うとうとしからぬはじめにもとやおぼすらむ、御みづからあなたに入り給ひてせちにそゝのかし聞え給ふ。箏の琴をぞいとほのかに、掻きならして止み給ひぬる。いとゞ人のけはひも絶えて哀なる空のけしき、所のさまにわざとなき御あそびの心に入りて、をかしうおぼゆれど、うちとけてもいかでかはひきあはせ給はむ。「おのづからかばかりならしそめつるのこりは、よごもれるどち

にゆづり聞えてむ」とて、宮は佛の御前に入り給ひぬ。

「我なくて草のいほりは荒れぬともこのひとことは枯れじとぞ思ふ。かゝる對面も、この度や限ならむと物心ぼそきに忍びかねて、かたくなしきひがごと多くもなりぬるかな」とてうちなき給ふ。まらうど、

「いかならむ世にかかれせむ長きよのちぎり結べる草のいほりは。すまひなどおほやけごとどもまぎれ侍る頃過ぎてさぶらはむ」など聞え給ふ。こなたにてかの問はずがたりのふる人めし出でゝのこり多かる物語などせさせ給ふ。入り方の月は隈なくさし入りてすきかげなまめかしきに、君達もおくまりておはす。世の常のけさうびてはあらず、心深う物語のどやかに聞えつゝものし給へば、さるべき御いらへなど聞えたまふ。三宮はいとゆかしうおぼいたる物をと、心のうちには思ひ出でつゝ、我が心ながら猶人にはことなりかし、さばかり御心もてゆるび給ふことのさしもいそがれぬよ、もてはなれてはたあるまじき事とはさすがにおぼえず、かやうにて物をも聞えかはし、をりふしの花紅葉につけてあはれをもなさけをもかよはすににくからず物し給ふあたりなれば、すくせことにてほかざまにもなり給はむはさすがに口惜しかるべくりやうじたる心ちしけり。まだ夜深きほどに歸り給ひぬ。心ぼそくのこりなげにおぼいたりし御けしきを思ひ出で聞え給ひつゝ、騒しき程過してまうでむとおぼす。兵部卿の宮もこの秋のほどに紅葉見におはしまさむと、さるべきついでをおぼしめぐらす。御文は絶えず奉り給ふ。女はまめやかに思すらむとも思ひ給はねば、煩しく

もあらではかなきさまにもてなしつゝ折々に聞えかはし給ふ。秋深くなり行くまゝに、宮はいみじう物心ぼそくおぼえ給ひければ、例の靜なる所にて念佛をもまぎれなくせむとおぼして、君達にもさるべき事聞え給ふ。「世の事としてつひの別を遁れぬわざなめれど、思ひ慰む方ありてこそ悲しさをもさますものなめれ。又見ゆづる人もなく心ぼそげなる御有樣どもをうちすてゝむがいみじきこと。されどもさばかりの事に妨げられて長き世の闇にさへ惑はむがやくなさ。かつ見奉るほどだに思ひすつる世を、さりなむうしろの事知るべきことにはあらねど、我が身ひとつにあらず、過ぎ給ひにし御おもてぶせにかるがるしき心どもつかひ給ふな。おぼろげのよすがならで人のことにうちなびきこの山里をあくがれ給ふな。たゞかう人に違ひたるちぎりことなる身とおぼしなして、こゝに世をつくしてむと思ひとり給へ。ひたぶるに思ひしなせばことにもあらず過ぎぬる年月なりけり。まして女はさる方に堪へ籠りて、いちじるくいとほしげなるよそのもどきを、おはざらむなむよかるべき」などのたまふ。ともかくも身のならむやうまではおぼしも流されず、唯いかにしてか後れ奉りては世に片時もながらふべきとおぼすに、かく心ぼそきさまの御あらましごとに、いふかたなき御心まどひどもになむ。心のうちにこそ思ひ捨て給ひつらめど、明暮御傍にならはい給ひて、俄に別れ給はむはつらき心ならねど、げにうらめしかるべき御有樣になむありける。あす入り給はむとての日は例ならずこなたかなたたゝずみありき給ひて見給ふ。「いとものはかなくかりそめのやどりにてすぐい給ひける御住ひのありさまを、なからむ後いかにして

かは若き人の塒へ籠りてはすぐい給はむにと涙ぐみつゝねんずし給ふさまいと淸げなり。おとなびたる人々召し出でゝ、「うしろやすく仕うまつれ。何事ももとよりかやすく世に聞えあるまじききはの人は、末のおとろへも常の事にてまぎれぬべかめり。かゝるきはになりぬれば人は何とも思はざらめど、口惜しうてさすらへむ契かたじけなくいとほしきことなむ多かるべき。物さびしく心ぼそき世を經るは例のことなり。生れたる家のほどおきてのまゝにもてなしたらむなむ、きゝみゝにも我が心ちにもあやまちなくはおぼゆべき。にぎはゝしく人かずめかむと思ふとも、その心にもかなふまじき世とならば、ゆめゆめかろがろしく善からぬ方にもてなし聞ゆな」などのたまふ。まだ曉に出で給ふとてもこなたに渡り給ひて、「なからむ程心ぼそくなおぼしわびそ。心ばかりはやりて遊びなどはし給へ。何事も思ひにえかなふまじき世をなおぼしいれそ」など顧みがちにて出で給ひぬ。ふた所いとゞ心ぼそく物思ひ續けられて、起き臥しうち語らひつゝ、「ひとりひとりなからましかばいかでか明しくらさまし。今ゆくすゑも定めなき世にて若し別るゝやうもあらば」など泣きみ笑ひみ、たはぶれごともまめごとも同じ心に慰めかはして過し給ふ。かの行ひ給ふ三昧今日はてぬらむといつしかと待ち聞え給ふ夕暮に、人まゐりて「今朝よりなやましうてなむえ參らぬ。風かとてとかくつくろふとものする程になむ。さるは例よりも對面心もとなきを」と聞え給へり。胸つぶれていかなるにかとおぼし歎き御ぞども綿厚くていそぎせさせ給ひて奉れなどし給ふ。二三日はおり給はず、いかにいかにと人奉り給へど「殊におどろおどろしくはあらず。そ

こはかとなく苦しうなむ。少しもよろしうならば今ねんじて」などことばにて聞え給ふ。阿闍梨つとさぶらひて仕うまつりけり。「はかなき御なやみと見ゆれどかぎりのたびにもおはしますらむ。君達の御事何かおぼし嘆くべき。人は皆御宿世といふものことごとなれば御心にかゝるべきにもおはしまさず」といよいよおぼし離るべきことを聞え知らせつゝ、「今さらにな出で給ひそ」と諫め申すなりけり。八月二十日のほどなりけり。大方の空の氣色もいとゞしきころ、君だちは朝夕霧の晴るゝ間もなくおぼし嘆きつゝながめ給ふ。有明の月のいと華やかにさし出でゝ水のおもてもさやかに澄みたるを、そなたの蔀あげさせて見出し給へるに、鐘の聲かすかに響きて明けぬなりと聞ゆるほどに人きて、「この夜中ばかりになむうせ給ひぬる」となくなく申す。心にかけていかにとは絶えず思ひ聞え給へれど、うち聞き給ふにはあさましく物おぼえぬ心地して、いとゞかゝることに涙もいづちかいにけむ、たゞうつぶし臥し給へり。いみじきことも見る目の前にて覺束なからぬこそ常のことなれ。覺束なさそひて、おぼし歎くことことわりなり。しばしにても後れ奉りて世にあるべきものとおぼしならはぬ御心地どもにて、いかでかは後れじと泣きしづみ給へど、かぎりある道なりければ何のかひなし。阿ざ梨年頃契り置き給ひけるまゝに後の御事もよろづに仕うまつる。「なき人になり給へらむ御さまかたちをだに今一度見奉らむ」とおぼしのたまへど、「今更になでふさることかは侍るべき。日頃も又逢ひ見給ふまじきことを聞え知らせつれば、今はましてかたみに御心とゞめ給ふまじき御心づかひを習ひ給ふべきなり」とのみ聞ゆ。おはしましけ

る御有樣を聞き給ふにも、阿ざ梨のあまりさかしきひじり心をにくゝつらしとなむおぼしける。入道の御ほいは昔より深くおはせしかど、かう見ゆづる人なき御事どもの見捨てがたきを、生けるかぎりは明暮え去らず見奉るを、世に心ぼそき世のなぐさめにも、おぼし離れ難くてすぐい給へるを、かぎりある道にはさきだち給ふも、慕ひ給ふ御心も、かなはぬわざなりけり。中納言殿には聞き給ひて、いとあへなく口惜しく、今一度心のどかにて聞ゆべかりける事多う殘りたる心地して、大方世の有樣思ひつゞけられていみじう泣い給ふ。またあひ見むこと難くやなどのたまひしを、猶常の御心にも朝夕のへだて知らぬ世のはかなさを、人よりけに思う給へりしかば、耳なれて昨日今日と思はざりけるを、かへすがへす飽かず悲しくおぼさる。阿ざ梨のもとにも、君達の御とぶらひもこまやかに聞え給ふ。かゝる御とぶらひなどまた音づれ聞ゆる人だになき御有樣なれば、物おぼえぬ御心地どもにも、年頃の御心ばへのあはれなめりしなどをも思ひ知り給ふ。世の常の程の別れだにさしあたりては、又類ひなきやうにのみ皆人の思ひ惑ふものなめるを、慰む方なげなる御身どもにていかやうなる心地どもおぼし給ふらむとおぼしやりつゝ、のちの御わざなどあるべき事ども推しはかりて阿ざ梨にもとぶらひ給ふ。こゝにもおい人どもにことよせて御誦經などの事も思ひやり聞えたまふ。あけぬ夜の心地ながら九月にもなりぬ。野山の氣色まして袖の時雨を催しがちに、ともすれば爭ひ落つる木の葉の音も、水のひゞきも、涙の瀧もひとつものゝやうにくれ惑ひて、「かうてはいかでか限あらむ御命もしばしめぐらひ給はむ」とさぶらふ人々は心ぼ

そくいみじく慰め聞えつゝ思ひ惑ふ。こゝにも念佛の僧さぶらひて、おはしましゝ方は佛をかたみに見奉りつゝ、時々參り仕うまつりし人々の、御忌に籠りたるかぎりはあはれに行ひてすぐす。兵部卿宮よりも度々とぶらひ聞えたまふ。さやうの御返りなど聞えむ心地も志給はず。おぼつかなければ、中納言にはかうもあらざなるを我をば猶思ひ放ち給へるなめりとうらめしくおぼす。紅葉の盛に、文など作らせ給はむとて出で立ち給ひしを、かくこのわたりの御せうえうびんなき頃なれば、おぼしとまりて口惜しくなむ。御忌もはてぬ。限あれば涙もひまもやとおぼしやりて、いと多く書きつゞけ給へり。時雨がちなる夕つかた、

「をじかなく秋の山里いかならむ小萩がつゆのかゝるゆふぐれ。只今の空の氣色をおぼし知らぬがほならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野邊もわけてながめらるゝ比になむ」などあり。「げにいとあまり思ひ知らぬやうにてたびたびになりぬるを、猶聞え給へ」など、中の君を例のそゝのかして書かせ奉りたまふ。今日までながらへて硯など近くひき寄せて見るべきものとやは思ひし、心憂くも過ぎにける日數かなとおぼすに、又かきくもり物見えぬ心地し給へば、おしやりて「猶えこそ書き侍るまじけれ。やうやうかう起きゐられなどし侍る。げに限ありけるにこそとおぼゆるもうとましう心憂くて」とらうたげなるさまに泣きしをれておはするもいと心苦し。夕暮の程より來ける御使、宵すこし過ぎてぞ來たる。「いかでか歸り參らむ。今夜は旅寢して」といはせ給へど、「立ちかへりこそ參りなめ」といそげば、いとほしうて我さかしう思ひしづめ給ふにあらねど、見わづらひ給ひて、

「涙のみきりふたがれる山里はまがきに鹿ぞもろごゑになく」。黒き紙に夜の墨つきもたどたどしければ、ひきつくろふ所もなく筆に任せておし包みて出し給ひつ。御使は、木幡山のほども雨もよにいと恐しげなれど、さやうの物おぢすまじきをえり出で給ひけむ、むつかしげなるさゝのくまをこまひきとゞむる程もなくうちはやめて片時に参りつきぬ。おまへに召しても、いたくぬれて参りたれば祿たまふ。さきざき御覽ぜしにはあらぬ手の、今少しおとなびまさりてよしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覽じつゝ、とみにもおほとのごもらねば、「待つとて起きおはしまし、又御覽ずるほどの久しきは、いかばかり御心にしむことならむ」と、御前なる人々さゝめきこえて、にくみ聞ゆ。ねぶたければなめり。まだ朝霧深きあしたにいそぎ起きて奉り給ふ。

「朝霧に友まどはせる鹿の音を大かたにやはあはれとも聞く。もろごゑは劣るまじくこそ」とあれど、あまりなさけだゝむもうるさし。ひと所の御蔭にかくろへたるをたのみ所にてこそ何事も心やすくて過しつれ、心より外にながらへて、思はずなるでとのまぎれつゆにてもあらば、うしろめたげにのみおぼしおくめりし、なき御たまにさへきづやつけ奉らむと、なべていとつゝましう恐しうて聞え給はず。この宮などをばかろらかにおしなべてのさまにも思ひ聞え給はず。なげの走りかい給へる御筆づかひ、言の葉もをかしきさまになまめき給へる御けはひをあまたは見知り給はねど、これこそはめでたきなめれと見給ひながら、そのゆゑゆゑしくなさけある方に、ことをまぜ聞えむもつきなき身の有樣どもなれば、何かたゞ

かゝる山ぶしだちて過してむとおぼす。中納言殿の御返りばかりは、かれよりもまめやかなるさまに聞え給へば、これよりもいとけうとげにはあらず聞え通ひ給ふ。御いみはてゝもみづからまうで給へり。東の廂のくだりたる方にやつれておはするに、近うたち寄り給ひて、ふる人召し出でたり。闇に惑ひ給へる御あたりにいとまばゆく匂ひ滿ちて入りおはしたれば、かたはらいたうて御いらへなどをだにえ志給はねば、「かやうにはもてない給はで昔の御心むけに從ひ聞え給はむさまならむこそ、聞えうけたまはるかひあるべけれ。なよび氣色ばみたるふるまひをならひ侍らねば、人づてに聞え侍るは言の葉も續き侍らず」とあれば、「あさましう今までながらへ侍るやうなれど、思ひさまさむ方なき夢に惑はれ侍りてなむ、心より外に空のひかり見侍らむもつゝましうて、端近うもえみじろき侍らぬ」と聞え給へれば「ことゝいへば限なき御心の深さになむ。月日のかげは御心もて、はればれしくもていでさせ給はゞこそ罪も侍らめ。行く方もなくいぶせうおぼえ侍り。又おぼさるらむは志ばしをもあきらめ聞えまほしくなむ」と申し給へば、「げにこそいとたぐひなげなめる御有樣を、慰め聞え給ふ御心ばへの淺からぬ程」など人々聞え志らす。御心地にもさこそいへ、やうやう心志づまりてよろづ思ひ知られたまへば、昔ざまにてもかうまで遙けき野邊を分け入り給へる志なども思ひ知り給ふべし。少しゐざりより給へり。おぼすらむさま、又のたまひ契りしことなど、いとこまやかになつかしういひて、うだて雄々しきけはひなどは見え給はぬ人なれば、けうとくすゞろはしくなどはあらねど、知らぬ人にかく聲を聞かせ奉り、すゞろに

たのみ顔なることなども、ありつる日比を思ひ續くるもさすがに苦しうてつゝましけれど、ほのかにひとことなどいらへ聞え給ふさまの、げによろづ思ひほれ給へるけはひなれば、いと哀と聞き奉り給ふ。黑き几帳のすきかげのいと心苦しげなるに、ましておはすらむさま、ほの見し明けぐれなど思ひ出でられて、

「色かはるあさぢを見ても墨染にやつるゝ袖をおもひこそやれ」とひとりごとのやうにのたまへば、

「色かはる袖をばつゆのやどりにて我が身ぞさらにおきどころなき。はつるゝいとは」と末はいひけちて、いといみじく忍び難きけはひにて入り給ひぬなり。ひきとゞめなどすべき程にもあらねば飽かずあはれにおぼゆ。おい人ぞこよなき御かはりに出で來て、昔今をかきあつめ、悲しき御物語ども聞ゆる。ありがたくあさましき事どもを見たる人なりければ、かうあやしう衰へたる人ともおぼし捨てられず、いとなつかしう語らひ給ふ。「いはけなかりし程に故院に後れ奉りて、いみじう悲しきものは世なりけりと思ひ知りにしかば、人となり行くよはひにそへてつかさくらゐ世の中のにほひも何ともおぼえずなむ。唯かうしづやかなる御住ひなどの心にかなひ給へりしを、かくはかなく見なし奉りつるにいよいよいみじく、かりそめの世思ひ知らるゝ心も催されにたれど、心苦しうてとまり給へる御事どもほだしなど聞えむはかけがけしきやうなれど、ながらへてもかの御事あやまたず、聞えうけたまはらまほしきになむ。さるは覺えなき御ふる物語きゝしより、いとゞ世の中に跡とめむとも

おぼえずなりにたりや」とうち泣きつゝのたまへば、この人はましていみじく泣きてえも聞えやらず。御けはひなどの唯それかとおぼえ給ふに、年比うち忘れたりつるいにしへの御事をさへ取り重ねて聞えやらむ方もなくおぼゝれ居たり。この人はかの大納言の御めのと子にて、父はこの姫君達の母北の方の、母方のをぢ、左中辨にてうせにけるが子なりけり。年比遠き國にあくがれ、母君もうせ給ひて後かの殿には疎くなり、この宮には尋ねとりてあらせ給ふなりけり。人もいとやんごとなからず、宮仕なれにたれど心地なからぬものに宮もおぼして、姫君達の御うしろみだつ人になし給へるなりけり。むかしの御事は年比かく朝夕に見奉りなれ心隔つるくまなく思ひ聞ゆる君達にも、ひとことうち出で聞ゆるついでなく忍びこめたりけれど、中納言の君はふる人の問はずがたり皆例の事なれば、おしなべてあはあはしうなどはいひひろげずとも、いと恥しげなめる御心どもには聞き置き給へらむかしと推しはからるゝに、妬くもいとほしくもおぼゆるにぞ、又もてはなれてはやまじと思ひよらるゝつまにもなりぬべき。今は旅寢もすゞろなる心地して歸り給ふにも、これやかぎりのなどのたまひしを、などかさしもやはとうちたのみて又見奉らずなりにけむ秋やはかはれる。あまたの日數も隔てぬ程におはしにけむ方も知らず、あへなきわざなりや。殊に例の人めいたる御けつらひなく　いとことそぎ給ふめりしかど、いと物淸げにかき拂ひあたりをかしくもてない給へりし御住ひも、大とこたち出でいり、こなたかなたひき隔てつゝ御念誦の具どもなどぞ變らぬさまなれど、佛は皆かの寺に移り奉りてむとすと聞ゆるを聞き給ふにも、か

ゝるさまの人かげなどさへ絕えはてむ程とまりて思ひ給はむ心地どもをくみ聞え給ふも、いと胸痛うおぼしつゞけゝる。「いたく暮れ侍りぬ」と申せば、ながめさして立ち給ふに、雁なきてわたる。

「秋霧のはれぬ雲ゐにいとゞしくこの世をかりといひしらすらむ」。兵部卿の宮に對面し給ふ時は、まづこの君達の御事をあつかひぐさにし給ふ。今はさりとも心やすきをおぼして、宮はねんごろに聞え給ひけり。はかなき御返りも聞えにくゝつゝましき方に女がたはおぼいたり。世にいといたうすき給へる御名のひろごりて好ましく艶におぼさるべかめるも、かういとうづもれたる葎の下よりさし出でたらむてつきも、いかにうひうひしくふるめきたらむなど、思ひくつし給へり。さてもあさましうて明し暮さるゝは月日なりけり。かく賴み難かりける御世を昨日今日とは思はで、唯大かた定なきはかなさばかりを明暮のことに聞き見しかば、我も人も後れさきだつ程しもやはへむなどうち思ひけるよ、きし方を思ひ續くるも、何のたのもしげなる世にもあらざりけれど、唯いつとなくのどかに眺めすぐし、物恐しくつゝましきこともなくて經つるものを、風の音も荒らかに、例見ぬ人かげもうちつれこわづくれば、まづ胸つぶれて物恐しく侘しう覺ゆることさへそひにたるが、いみじう堪へ難きことゝ、二所うち語らひつゝほすよもなくてすぐしたまふに年も暮れにけり。雪霰ふりしくころはいづくもかくこそはある風の音なれど、今始めて思ひいりたらむ山住の心地し給ふ。女ばらなど、「あはれとしはかはりなむとす。心ぼそく悲しきことを、改まるべき春待

ち出でゝしがな」と心をけたずいふもありがたきことかなと聞き給ふ。向ひの山にも時々の御念佛に籠り給ひし故こそ、人もまゐりかよひしか、阿闍梨もいかゞと大方にまれに音づれ聞ゆれど、今は何しにかはほのめき参らむ、いとゞ人目の絶えはつるもさるべきことゝ思ひながら、いと悲しくなむ。何とも見ざりしやまがつもおはしまさで後たまさかにさしのぞき参るは、めづらしく覺え給ふ。この比の事とてたきゞこのみ拾ひて参る山人どももあり。阿闍梨のむろより炭などやうの物奉るとて、「年比に習ひ侍りにける宮仕の、今はとて絶え侍らむが心ぼそきになむ」と聞えたり。必ず冬ごもる山風防ぎつべき綿きぬなど遣しゝを、おぼし出でゝやり給ふ。法師ばらわらはべなどののぼり行くも見えみ見えずみいと雪深きを、泣く泣く立ち出でゝ見送り給ふ。「みぐしなどおろい給うてもさる方にておはしまさましかばかやうに通ひ参る人もおのづから繁からまし。いかに哀に心ぼそくとも、あひ見奉ること絶えて止まゝしやは」などかたらひ給ふ。

「君なくて岩のかげ道絶えしより松の雪をもなにとかは見る」。中の君、

「奥山の松葉につもる雪とだに消えにし人を思はましかば。うらやましくぞ またもふりそふや」。中納言の君は、新しき年はふとしもえとぶらひ聞えざらむと覺しておはしたり。雪もいとゞ所せきによろしき人だに見えずなりにたるを、なのめならぬけはひしてかろらかに物し給へる心ばへの、淺うはあらず思ひ知られ給へれば、例よりはみいれておましなどひきつくろはせ給ふ。墨染ならぬ御火桶、物の奥なる取り出でゝ、塵かき拂ひなどするにつけ

ても、宮の待ち喜び給ひし御氣色などを人々も聞え出づ。たいめし給ふことをばつゝましくのみおぼいたれど、思ひくまなきやうに人の思ひ給へれば、いかゞはせむとて聞え給ふ。うちとくとはなけれど、さきざきよりは少し言の葉續けて、物などのたまへるさまいとめやすく心恥しげなり。かやうにてのみはえすぐしはつまじと思ひなり給ふも、いとうちつけなる心かな。猶移りぬべき世なりけりと思ひ居給へり。「宮のいとあやしく恨み給ふことの侍るかな。哀なりし御一ことを承り置きしさまなど、事の序にもや漏し聞えたりけむ。又いと隈なき御心のさがにて推し量り給ふにや侍らむ。こゝになむともかくも聞えさせなすべきとたのむを、つれなき御氣色なるはもてそこなひ聞ゆるぞと度々怨じ給へば、心より外なる事と思ひ給へれど、里のしるべいとこよなうもえあらがひ聞えぬを、何かはいとさしももてなし聞え給ふらむ。すい給へるやうに人は聞えなすべかめれど、心の底怪しう深うおはする宮なり。なほざりごとなどのたまふわたりの、心がらうて靡きやすなるなどを珍しからぬものに思ひおとし給ふにやとなむ聞くことも侍る。なに事にもあるに從ひて心をたつる方もなく、おどけたる人こそ、唯世のもてなしに從ひてとあるもかゝるもなのめに見なし少し心に違ふふしあるにもいかゞはせむ、さるべきぞなども思ひなすべかめれば、なかなか心長きためしになるやうもあり、くづれそめては、龍田の川の濁る名をもけがし、いふかひなく名殘なきやうなることなども皆うちまじるめれ。心の深くしみ給ふべかめる御心ざまにかなひ、事に背くこと多くなどもし給はざらむをば、更にかろがろしくはじめをはり違ふやうなる

ことなど見せ給ふまじき氣色になむ。人の見奉り知らぬことをいとよう見聞えたるを、もし似つかはしくさもやとおぼしよらば、そのもてなしなどは心のかぎり盡して仕うまつりてむかし。御中道のほどみだりあしこそいたからめ」といとまめやかにていひ續け給へば、我が御みづからの事とはおぼしもかけず、人の親めきていらへむかしとおぼしめぐらし給へど、猶いふべき言の葉もなき心ちして、「いかにとかはかけがけしげにのたまひ續くるに、なかなか聞えむことも覺え侍らで」とうち笑ひ給へるも、おいらかなるものからけはひをかしう聞ゆ。「必ず御自ら聞しめしおふべき事とも思ひ給へず。それは雪を踏み分けて參り來たる志ばかりを御覧じわかむ。御このかみ心にても過ぐさせ給ひてよかし。かの御心よせは又ことにぞはべかめる。ほのかにのたまふさまもはべめりしを、いさやそれも人のわき聞え難きことなり。御かへりなどはいづかたにかは聞え給ふ」と問ひ申し給ふに、ようぞたはぶれにも聞えざりける、何となけれどかうのたまふにもいかに恥しう胸つぶれましと思ふに、え答へやり給はず。

「雪ふかき山のかけはし君ならでまたふみ通ふあとを見ぬかな」と書きてさし出し給へれば、「御ものあらがひこそなかなか心おかれ侍りぬべけれ」とて、

「つらゝとぢこまふみしだく山河をしるべしがてらまづや渡らむ。さらばしも、かげさへ見ゆるしるしも淺うは侍らじ」と聞え給へば、思はずにものしうなりて殊にいらへ給はず。けざやかにいと物遠くすゝみたるさまには見え給はねど今やうの若人達のやうにえんげに

もてなさで、いとめやすくのどかなる心ばへならむとぞ推し量られ給ふ人の御けはひなる。かうこそはあらまほしけれと思ふに違はぬ心地し給ふ。事に觸れて氣色ばみよるも知らずがほなるさまにのみもてなし給へば、心恥しうて昔物語などをぞ物まめやかに聞え給ふ。「暮れはてなば雪いとゞ空もとぢぬべう侍り」と御供の人々こわづくれば、かへり給ひなむとて「心苦しう眺めくらさるゝ御住ひのさまなりや。唯山里のやうにいと靜なる所の、人も行きまじらぬ所に侍るを、さもおぼしかけばいかに嬉しく侍らむ」などのたまふも、いとめでたかるべきことかなと片耳に聞きてうち笑む女ばらのあるを、中の君は、いと見苦しういかにさやうにはあるべきぞと見聞き居給へり。御くだものよしあるさまにてまゐり、御供の人々にもさかななどめやすき程にて、かはらけさし出させ給ひけり。かの御うつりがもてさわがれし殿居人ぞ、かづらひげとかいふつらつき心つきなくてある、はかなの御たのもし人やと見給ひて、召し出でたり。「いかにぞ、おはしまさで後心ぼそからむ」など問ひ給ふ。うちひそみつゝ心よわげになく。「世の中に賴むよるべも侍らぬ身にて、一所の御かげに隱れて三十餘年を過し侍りにければ、今はまして野山にまじり侍らむも、いかなる木の本をかはたのむべく侍らむ」と申して、いとゞ人わろげなり。おはしましゝ方あけさせ給へれば、塵いたう積りて佛のみぞ花のかざり衰へず行ひ給ひけりと見ゆる。御床など取りやりてかき拂ひたり。ほいをも遂げばと契り聞えしこと思ひ出でゝ、

「立ちよらむかげと賴みし椎がもと空しき床になりにけるかな」とて柱により居給へる

をも、若き人々はのぞきてめで奉る。日暮れぬれば近き所々にみさうなど仕うまつる人々に、みまくさとりに遣りける。君も知り給はぬに田舎びたる人々、おどろおどろしくひき連れ參りたるを、あやしうはしたなきわざかなと御覽ずれど、おい人にまぎらはし給ひつ。大方かやうに仕うまつるべく、仰せ置きて出で給ひぬ。』年かはりぬれば空の氣色うらゝかなるに、みぎはの氷解けわたるにつけても、かうまでながらへけるもありがたくもと眺め給ふ。ひじりの坊より、「雪消えに摘みて侍るなり」とて澤の芹峯の蕨など奉りたり。いもひの御臺に參れる。「所につけては、かゝる草木のけしきに從ひて、行きかふ月日のしるしも見ゆるこそをかしけれ」など人々のいふを、何のをかしきならむと聞き給ふ。

「君がをる峯のわらびと見ましかば知られやせまし春のしるしも」。

「雪深きみぎはのこぜり誰がためにつみかはやさむ親なしにして」などはかなきことをうち語らひつゝ明けくらし給ふ。中納言殿よりも、宮よりも折すぐさず訪らひ聞え給ふ。うるさく何となき事多かるやうなれば例の書きもらしたるなめり。花ざかりの頃、宮かざしをおぼし出でゝ、そのをり見聞き給ひし君達なども、「いとゆゑありしみこの御住ひを、またも見ずなりにしこと」など大方のあはれを口々聞ゆるに、いとゆかしうおぼされたり。

「つてに見し宿の櫻をこの春はかすみへだてず折りてかざさむ」と心をやりてのたまへりけり。あるまじきことかなと見給ひながらいとつれづれなる程に、見所ある御文の、うはべばかりをもてけたじとて、

「いづくとか尋ねて折らむ墨染に霞こめたるやどのさくらを」。猶かくさしはなちてつれなき御氣色の見ゆれば、誠に心うしとおぼしわたる。御心に餘り給ひては、唯中納言を、とざまかうざまに責め恨み聞え給へば、をかしと思ひながら、いとうけばりたる後見顏にうちいらへ聞えて、あだめいたる御心ざまをも見顯す時々は、「いかでかかゝらむには」など申し給へば、宮も御心づかひし給ふべし。「心にかなふあたりをまだ見つけぬ程ぞや」とのたまふ。おほい殿の六の君をおぼし入れぬこと、なまうらめしげにおとゞもおぼしたりけり。されどゆかしげなきなからひなるうちにも、おとゞのことごとしく煩しくて何事のまぎれをも見咎められむがむつかしきと、したにはのたまひてすまひ給ふ。その年三條の宮燒けて、入道宮も六條院にうつろひ給ひ、何くれと物騷しきにまぎれて、宇治のわたりを久しう音づれ聞え給はず。まめやかなる人の御心は又いとことなりければ、いとのどかにおのがものとはうち頼みながら、女の心ゆるび給はざらむかぎりは、あざればみなさけなきさまに見えじと思ひつゝ、昔の御心忘れぬ方を深く見知り給へとおぼす。その年常よりも暑さを人々わぶるに、河づら凉しからむはやと思ひ出でゝ、俄にまうで給へり。朝すゞみの程に出で給ひければ、あやにくにさしくる日影もまばゆくて宮のおはせし西の廂に殿居人召し出でゝおはす。そなたのもやの佛の御まへに、君達ものし給ひけるを、けぢかゝらじとて、我が御方にわたり給ふ。御けはひ忍びたれどおのづからうちみじろき給ふ程近く聞えければ、猶あらじにこなたに通ふさうじのはしの方にかけがねしたる所に、穴の少しあきたるを見置き給へり

ければ、とに立てたる屛風をひきやりて見給ふ。こゝもとに几帳をそへ立てたる、あな口をしと思ひてひきかへるをりしも、風の簾垂をいたう吹きあぐべかめれば、「あらはにもこそあれ。その御几帳おし出でゝこそ」といふ人あなり。をこがましきものゝ嬉しうて見給へば、高きも短きも、几帳をふたまのすに押し寄せて、このさうじに向ひて、あきたるさうじよりあなたにとほらむとなりけり。まづ一人たち出でゝ、几帳よりさしのぞきて、この御供の人人のとかう行きちがひ涼みあへるを見給ふなりけり。濃きにび色のひとへに、くわざうの袴のもてはやしたる、なかなかさまかはりて、花やかなりと見ゆるは、着なし給へる人がらなめり。帶はかなげにしなして、珠數ひき隱しても給へり。いとそびやかに、やうだいをかしげなる人の、かみうちきに少したへぬ程ならむと見えて、末まで塵のまよひなく、つやつやとこちたう美くしげなり。かたはらめなどあならうたげと見えて、匂ひやかにやはらかにおほどきたるけはひ、女一宮もかうざまにぞおはすべきとほの見奉りしも思ひくらべられてうちなげかる。またゐざり出でゝ、かのさうじはあらはにもこそあれと見おこせ給へる用意、うちとけたらぬさまして、よしあらむとおぼゆ。頭つきかんざしのほど、今少しあてになまめかしきさまなり。「あなたに屛風も添へて立てゝ侍りつ。急ぎてしものぞき給はじ」と若き人々何心なくいふあり。「いみじうもあるべきわざかな」とて、うしろめたげにゐざり入り給ふ程、け高う心にくきけはひ添ひて見ゆ。黑きあはせ一かさね同じやうなる色あひを着給へれど、これはなつかしうなまめきて、哀げに心苦しうおぼゆ。髮さばらかなる程に落ちたる

なるべし、末少しほそりて、色なりとかいふめるひすゐだちていとをかしげにいとをよりかけたるやうなり。紫の紙に書きたる經を、片手に持ちたまへる手つき、かれよりもほそさまさりてやせやせなるべし。立ちたりつる君もさうじ口に居て、何事にかあらむ、こなたを見おこせて笑ひたる、いとあいぎやうづきたり。

總角

あまた年耳なれ給ひにし河風も、この秋はいとはしたなく物悲しくて、御はての事急がせ給ふ。大方のあるべかしきことどもは、中納言殿、阿闍梨などぞ仕うまつり給ひける。こゝには法服の事、經のかざり、こまかなる御あつかひを、人の聞ゆるに從ひて營み給ふも、いとものはかなくあはれに、かゝるよその御後見なからましかばと見えたり。みづからも詣で給ひていまはと脱ぎ捨て給ふ程の御とぶらひあさからず聞え給ふ。阿闍梨もこゝに參れり。みやうがうの絲ひき亂りて、「かくても經ぬる」などうち語らひ給ふほどなりけり。結びあげたるたゝりのすだれのつまより几帳のほころびにすきて見えければ、その事と心得て「我が涙をば玉にぬかなむ」とうちずし給へり。伊勢のごもかうこそはありけめとをかしう聞ゆるも、うちの人は聞き知りがほにさしいらへ給はむもつゝましくて、物とはなしにとか貫之がこの世ながらの別をだに心ぼそきすぢにひきかけゝむをなど、げにふることぞ人の心をのぶる

たよりなりけるを思ひ出で給ふ。御願文つくり、經ほとけ供養せらるべき心ばへなど書き出で給へる硯のついでに、まらうど、

「あげまきに長きちぎりを結びこめ　おなじ所によりもあはなむ」と書きて見せ奉り給へば、例のとうるさければ、

「ぬきもあへずもろき涙の玉のをに長きちぎりをいかゞむすばむ」とあれば、「あはずはなにを」とうらめしげに眺め給ふ。自らの御うへは、かくそこはかとなくもてけちて恥しげなるに、すかすかともえのたまひよらで、宮の御事をぞまめやかに聞え給ふ。さしも御心に入るまじきことを、かやうの方に少しすゝみ給へる御本性にて聞えそめ給ひけむ、まけじたましひにやとゞざまかうざまにいとよくなむ御氣色見奉る。「誠にうしろめたうはなるまじげなるを、などかうあながちにしもてはなれ給ふらむ。世の有樣などおぼしわくまじくは見奉らぬを、うたて遠々しくのみもてなさせ給へば、かばかりうらなくたのみ聞ゆる心に違ひてうらめしくなむ。ともかくもおぼしわくらむさまなどを、さはやかにうけ給はりにしがな」といとまめだちて聞え給へば、「違へ聞えじの心にてこそは、かうまであやしき世のためしなる有樣にてへだてなくもてなし侍れ。それをおぼしわかざりけるこそは、淺き事もまじりたる心地すれ。げにかゝる住ひなどに心あらむ人は思ひ殘すこともあるまじきを、何事にも後れそめにけるうちにこのたまふめるすぢは、いにしへも更にかけて、とあらばかゝらばなど行く末のあらましごとにとりまぜて　のたまひ置く事もなかりしかば、猶かゝるさまに

て世づきたる方を思ひ絕ゆべくおぼしおきてけるとなむ思ひ合せ侍れば、ともかくも聞えむ方なくて、さるは少し世でもりたるほどにてみやまがくれには心苦しう見え給ふ人の御うへを、いとかく朽木にはなしはてずもがなと人知れずあつかはしうおぼえ侍れば、いかなるべき世にかあらむ」とうち歎きて物思ひ亂れ給ひけるけはひいとあはれげなり。けざやかにおとなびてもいかでかはさかしがり給はむとことわりにて、例のふる人召し出でゝぞ語らひ給ふ。「年頃は唯後の世ざまの心ばへにて進み參りそめしを、物心ぼそげにおぼしなるめりし御末の頃ほひ、この事どもを心に任せてもてなし聞ゆべくなむのたまひ契りてしを、おぼしおきて奉り給ひし御有樣どもには違ひて、御心ばへどものいとゞあやにくに物つよげなるはいかにおぼし置きつる方の事なるにや既かと疑はしき事さへそひてなむ。おのづから聞き傳へ給ふやうもあらむ。いとあやしき本性にて、世の中に心をとむる方なかりつるを、さるべきにてやかうまでも聞えなれにけむ。世の人もやうやういひなすやうあるべかめるに、同じうは昔の御事も違へ聞えず、我も人も世の常に心とけて聞え通はゞやと思ひよるは、つきなかるべき事にてもさやうなるためしなくやはある」などのたまひ續けて、「宮の御事をもかう聞ゆるにうしろめたうはあらじとうちとけ給ふさまならぬはうちうちにさりとも思ほしむけたる事のさまあらむ。猶いかにいかに」とうち眺めつゝのたまへば、例のわろびたる女房などは、かゝる事にはにくきさかしらもいひまぜてことよがりなどもすめるを、いとさはあらず、心の中には、あらまほしかるべき御事どもをと思へど、「もとよりかく人に違ひ

給へる御くせどもに侍ればにや、いかにもいかにも世のつねになにやかやなどおもひより給へる御氣色になむ侍らぬ。かくてさぶらふこれかれも、年比だに何のたのもしげある木の本のかくろへも侍らざりき。身を捨て難く思ふかぎりはほどほどにつけてまかでちり、昔のふるきすぢなる人も、多く見奉りすてたるあたりに、まして今は暫しも立ちとまり難げに侘び侍りつゝ、おはしましゝ世にこそ限ありてかたほならむ御有樣はいとほしくもなど、こだいなる御うるはしさにおぼし滯りつれ。今はかう又たのみなき御身どもにて、いかにもいかにも世に靡き給へらむを、あながちに譏り聞えむ人は、かへりて物の心をも知らずいふかひなき事にてこそはあらめ。いかなる人かいとかうて世をばすぐしはて給ふべき。松の葉をすきてつとむる山伏だに生ける身の捨て難さによりてこそは、佛の御教をも道々別れては行ひなすなれ、などやうの善からぬ事を聞え知らせ、若き御心ども亂れ給ひぬべき事多く侍るめれど、たわむべくもものし給はず、中の君をなむいかで人めかしうもあつかひなし奉らむと思ひ聞え給ふべかめる。かく山深う尋ね聞えさせ給ふめる御志の、年經て見奉りなれ給へるけはひも疎からず思ひ聞えさせ給ひ、今はとざまかうざまにこまかなるすぢに聞え通ひ給ふめるに、かの御方をさやうに趣けて聞え給はゞとなむおぼすべかめる。宮の御文など侍るめるは更にまめまめしき御事ならじと侍るめる」と聞ゆれば、「あはれなる御一言を聞き置き奉りにしかば、露の世にかゝづらはむかぎりは、聞え通はむの心あれば、いづかたにも見え奉らむ。同じ事なるべきを、さまではた、おぼしよるなる、いと嬉しき事なれど、心の引くかたなむかばかり思ひ捨つるよに 猶とまりぬべきものなりければ、改めてさはえ思ひ直

すまじくなむ。世の常になよびかなるすぢにもあらずや。只かように物隔て事のこいたるさまならずさしむかひて とにかくに定めなき世の物語を隔なく聞えて、つゝみ給ふ御心の隈殘らずもてなし給はむなむはらからなどのさやうにむつまじき程なるもなくて、いとさうざうしくなむ。世の中の思ふ事のあはれにもをかしうもうれはしうも、時につけたる有樣を心にこめてのみ過ぐる身なれば、さすがにたづきなくおぼゆるに疎かるまじう賴み聞ゆる。きさいの宮はたなれなれしうさやうにそこはかとなき思のまゝなるくだくだしさを、聞えふるべきにもあらず。三條の宮は親と思ひ聞ゆべきにもあらぬ御わかわかしさなれど、限あればたやすくなれ聞えさせずかし。その外の女はすべていと疎くつゝましう恐しうおぼえて心からよるべなく心ぼそきなり。なほざりのすさびにてもけさうだちたることはいとまばゆくありつかず、はしたなきこちごちしさにて、まいて心にしめたる方のことは、うち出づることも難くてうらめしうもいぶせくも思ひ聞ゆる氣色をだに見え奉らぬこそ、我ながら限なくかたくなしきわざなれ。宮の御事をも、さりともあしざまには聞えじと任せてやは見給はぬ」などいひ居給へり。おい人はた、かばかり心ぼそきにあらまほしげなる御有樣を、いとせちにさもあらせ奉らばやと思へど、いづかたも恥しげなる御有樣どもなれば思のまゝにはえ聞えず。今宵はとまり給ひて物語などのどやかに聞えまほしうてやすらひ暮し給ひつ。あざやかならず物恨みがちなる御氣色やうやうわりなくなりゆけば、わづらはしうてうちとけて聞え給はむ事も、いよいよ苦しけれど、大方にてはありがたうあはれなる人の御

心なれば、こよなうもてなし難うて對面志たまふ。佛のおはする中の戶をあけて、みあかしの火けざやかにかゝげさせて すだれに屛風をそへてぞおはする。とにもおほとなぶら參らすれど、「惱しうてむらいなるを、あらはに」など諫めてかたはらふし給へり。御くだものなどわざとはなく志なして參らせ給へり。御供の人々にも、ゆゑゆゑしきさかななどして出させ給へり。らうめいたる方に集りて、このおまへは人げ遠くもてなして、志めじめと物語聞え給ふ。うちとくべうもあらぬものから、懷しげにあいぎやうづきて物のたまへるさまの、なのめならず心に入りて 思ひいらるゝもはかなし。かくほどもなきものゝへだてばかりをさはり所にて、覺束なく思ひつゝ過ぐす心おぞさの、あまりをこがましうもあるかなと思ひ續けらるれど、つれなくて大方の世の中のことゞも、あはれにもをかしうもさまざま聞く所多く語らひ聞え給ふ。內には人々近うなどのたまひおきつれど、さしももてはなれ給はざらなむと思ふべかめれば、いとしもまもり聞えず、さし志ぞきつゝ皆よりふして、佛の御ともし火もかゝぐる人もなし。物むつかしうて忍びて人めせど驚かず、「心地のかき亂りなやましう侍るを、ためらひて曉方にも又聞えむ」とて入り給ひなむとする氣色なり。「山路分け侍りつる人はまして いと苦しけれど、かう聞えうけ給はるに慰めてこそ侍れ。うち捨てゝ入らせ給ひなばいと心ぼそからむ」とて屛風をやをら押しあけて入り給ひぬ。いとむくつけうてなからばかり入り給へるに、引きとゞめられて、いみじうねたう心憂ければ、「へだてなきとはかゝるをやいふらむ。 珍らかなるわざかな」とあばめ給へるさまの いよいよをかしけれ

ば、「隔てぬ心を更におぼしわかねば、聞え知らせむとぞかし。珍らかなりともいかなる方におぼしよるにかはあらむ。佛の御前にてちかごともたて侍らむ。うたて、なおぢさせ給ひそ。御心破らじと思ひそめて侍れば、人はかくしも推し量り思ふまじかめれど、世に違へる志れものにて過ぐし侍るぞや」とて心にくきほどなるほかげに、みぐしのこぼれかゝりたるをかきやりつゝ見給へば、人の御けはひ思ふやうにかをりをかしげなり。かう心ぼそうあさましき御すみかに、すいたらむ人はさはり所あまるじげなるを、我ならで尋ね來る人もあらましかば、さでや止みなまし、いかに口惜しきわざならましときし方の心のやすらひさへあやふくおぼえ給へど、いふかひなく憂しと思ひて、泣き給ふ御氣色のいといとほしければ、かくはあらで、おのづから心ゆるびし給ふ折もありなむと思ひわたる。わりなきやうなるも心苦しくて、さまよくこしらへ聞え給ふ。「かゝる御心の程を思ひよらであやしきまで聞えなれにたるを、ゆゝしき袖の色など見顯し給ふ心あさゝに、みづからのいふかひなさも思ひ知らるゝに、樣々慰む方なく」と恨みて、何心もなくやつれ給へる墨染のほかげを、いとはしたなく侘しと思ひ惑ひ給へり。いとかうしもおぼさるゝやうこそはと、はづかしきに聞えさせむ方なし。「袖の色を引きかけさせ給ふはしもことわりなれど、こゝら御覽じなれぬる志のしるしには、さばかりのいみおくべく、今始めたる事めきてやはおぼさるべき。なかなかなる御わきまへ心になむ」とてかの物の音聞きし有明の月かげより始めて、折々の思ふ心の忍び難くなりゆくさまをいと多く聞え給ふに、恥しうもありけるかなと疎ましう、かゝる心ばへ

ながらつれなくまめだち給ひけるかなと聞き給ふ事おほかり。御傍なるみじかき几帳を佛の御方にさし隔てゝかりそめにそひふし給へり。みやうがうのいとかうばしく匂ひて、志きみのいと華やかに薫れるけはひも、人よりはけに佛をも思ひ聞え給へる御心にて わづらはしく、墨染の今更に折ふし心いられしたるやうに、あはあはしう思ひそめしに違ふべければ、かゝるいみなからむ程にこの御心にも、さりとも少したわみ給ひなむなどせめてのどかに思ひなし給ふ。秋の夜のけはひはかゝらぬ所だにおのづからあはれ多かるを、まして峰の嵐も籬の蟲も心細げにのみ聞きわたさる。常なき世の御物語に時々さしいらへ給へるさま、いと見所多くめやすし。いぎたなかりつる人々は、かうなりけりと氣色とりて皆いりぬ。宮ののたまひしさまなどおぼし出づるに、げにながらへば心の外にかくあるまじき事も見るべきわざにこそはと物のみ悲しうて、水の音に流れそふ心地志給ふ。はかなく明けがたになりにけり。御供の人々おきてこわづくり、馬どものいばゆるをも、旅のやどりのあるやうなど人の語るをおぼしやられてをかしうおぼさる。光見えつる方のさうじを押しあけ給ひて空のあはれなるを諸共に見給ふ。女も少しゐざり出で給へるに、程もなき軒の近さなれば、志のぶの露もやうやう光り見えもて行く。かたみにいとえんなるさまかたちどもを、「何とはなくて唯かやうに月をも花をも同じ心にもてあそび、はかなき世の有樣を聞え合せてなむすぐさまほしき」といとなつかしきさまして語らひ聞え給へば、やうやう恐しさも慰みて、「かういとはしたなからで物隔てゝなど聞えば、誠に心のへだては更にあるまじくなむ」と

いらへ給ふ。あかくなりゆき村鳥の立ちさまよふ羽風近う聞ゆ。夜深きあしたの鐘の音かすかにひゞく。今だにいと見苦しきをといとわりなう恥しげにおぼしたり。「ことありがほに朝露もえ分け作るまじ。又人はいかゞ推し量り聞ゆべき。例のやうになだらかにもてなさせ給ひて、唯世に違ひたる事にて、今より後もたゞかやうにあなさせ給ひてよ。世にうしろめたき心はあらじとおぼせ。かばかりあながちなる心の程も、あはれとおぼし知らぬこそかひなけれ」とて出で給はむの氣色もなし。あさましうかたはならむとて「今より後は。さればこそ。もてなし給はむまゝにあらむ。今朝はまた聞ゆるに隨ひ給へかし」とていとすべなしとおぼしたれば、「あなくるしや。曉のわかれやまだ知らぬことにてげに惑ひぬべきを」となげきがちなり。庭鳥もいづかたにかあらむ、ほのかにおとなふに、都思ひいでらる。

「山里のあはれ志らるゝ聲々にとりあつめたるあさぼらけかな」。女君、

「鳥の音も聞えぬ山とおもひしを世にうきことは尋ねきにけり」。さうじ口まで送り奉り給ひて、よべ入りし戶口より出でゝふし給へれどまどろまれず。名殘戀しうて、いとかく思はましかば、月頃も今まで心のどかならましやなど、かへらむことも物憂くおぼえ給ふ。姫君は人の思ふらむとのつゝましきに、とみにもうちふされ給はで、たのもしき人なくて世を過ぐす身の心うきを、ある人どもゝよからぬこと、何やかやとつきづきに隨ひつゝいひ出づめるに、心よりほかの事ありぬべきよなめりとおぼし廻らすには　この人の御けはひ有樣のうとましくはあるまじく、故宮もさやうなる心ばへあらばと　をりをりのたまひおぼすめり

しかど、みづからは猶かくて過ぐしてむ、我よりはさまかたちも盛に、あたらしげなる中の君を、人なみなみに見なしたらむこそ嬉しからめ、人のうへになしては心の至らむかぎり思ひ後見てむ、みづからのうへのもてなしは、又誰かは見あつかはむ、この人の御さまのなのめにうち紛れたる程ならば、かく見馴れぬる年頃のしるしにうちゆるぶ心もありぬべきを、恥しげに見えにくき氣色も、なかなかいみじうつゝましきに、我が世はかくて過ぐしはてゝむと思ひつゞけてねなきがちにて明し給へるに、名殘いと惱ましければ中の君のふし給へる奥の方にそひふし給ふ。例ならず人のさゝめきし氣色もあやしとこの君はおぼしつゝね給へるに、かくておはしたれば、うれしくて御ぞひき着せ奉り給ふに、所せき御うつりがのまぎるべくもあらずくゆりかゝる心地すれば、殿居人がもてあつかひけむ思ひ合せられて、誠なるべしといとほしうてねぬるやうにて物ものたまはず。まらうどは辨のおもとよび出で給ひてこまかに語らひ置き、御せうそこすくずくしう聞えおきて出で給ひぬ。あげまきをたはぶれにとりなしゝも心もてひろばかりのへだても、對面しつるとやこの君もおぼすらむと、いみじう耻しければ、心地あしとて惱み暮し給ひつ。人々「日は殘なくなり侍りぬ。はかばかしうはかなき事をだに又仕うまつる人もなきに、折惡しき御惱みかな」と聞ゆ。中の君くみなどしはて給ひて、「心ばなどは、えこそ思ひより侍らね」とせめて聞え給へば、暗うなりぬるまぎれに、起き給ひて諸共にむすびなどし給ふ。中納言殿より御文あれど「今朝よりいと惱しうなむ」とて人づてにぞ聞え給ふ。「さも見苦しう、わかわかしうおはす」と人々

つぶやき聞ゆ。御ぶくなどはてゝ、脱ぎ捨てたまへるにつけても「片時も後れ奉らむものと思はざりしを、はかなく過ぎにける月日のほどをおぼすに、いみじう思の外なる身のうさ」と泣きしづみ給へる御さまどもいと心苦しげなり。月頃くらうならはし給へる御姿、うすにびにていとなまめかしうて中の君はげにいと盛にて、美くしげなるにほひまさり給へり。御ぐしなどすましつくろはせて見奉り給ふに、世の物思忘るゝ心ちしてめでたければ、人知れず思ふさまにかなひて、人に見え給はむにさりともちかおとりしては思はずやあらむとたのもしう嬉しうて、今は又見ゆづる人もなく、親心にかしづきたてゝ見聞え給ふ。かの人はつゝみ聞え給ひし藤の衣も改め給へつらむ、なが月もしづ心なくて又おはしたり。「例のやうに聞えむ」と又御せうそこあるに、「心あやまりして、煩しうおぼゆれば」ととかう聞えすまひて對面し給はず。「思の外に心憂き御心かな。人もいかに思ひ侍らむ」と御文にて聞え給へり。「今はとて脱ぎ捨て侍りし程の心まどひに、なかなかしづみ侍りてなむ聞えぬ」とあり。恨み侘びて、例の人召してよろづにのたまふ。世にしらぬ心ぼそさのなぐさめには この君をのみ頼み聞えたる人々なれば、思ひにかなひ給ひて世の常のすみかにうつろひなどし給はむを、いとめでたかるべき事にいひあはせて、「唯入れ奉らむ」と皆語らひ合せけり。姫君その氣色をば深う見しり給はねど、かうとりわきて人めかしなづけ給ふめるに、うちとけてうしろめたき心もやあらむ、昔物語にも心もてやは、とあるかゝることもあめる、うちとくまじきは人の心にこそあめれと思ひより給ひて、せめてうらみふかくは この君をおし出で

む、劣りざまならむにてだにさても見そめてはあさはかにはもてなすまじき心なめるを、ましてほのかにも見そめては慰みなむ、ことに出でゝはいかでかは、ふとさる事をまちとる人のあらむ、ほいになむあらぬとうけひく氣色のなかなるは、かたへは人の思はむ事をあいなう、淺き方にやなどつゝみ給ふならむと覺しかまふるを、氣色だに知らせ給はずば、罪もやえむと身をつみていとほしければ、よろづにうち語らひて、「昔の御おもむけも、世の中をかく心ぼそうて過ぐしはつとも、なかなか人わらへにかるがるしき心つかふななどのたまひおきしを、おはせし世の御ほだしにて行ひの御心を亂りし罪だにいみじかりけむを、今はとてさばかりのたまひし一言をだにたがへじと思ひ侍れば、心ぼそくなどもことに思はぬをこの人々のあやしう心ごはきものににくむめるこそいとわりなけれ。げにさのみやうのものと過ぐし給はむも、明け暮るゝ月日にそへても、御事をのみこそあたらしう心苦しう悲しきものに思ひ聞ゆるを、君だに世の常にもてなし給ひて、かゝる身の有樣もおもだゝしく慰むばかり見奉りなさばや」と聞え給へば、いかにおぼすにかと心憂くて「ひと所をのみやは、さて世にはて給へとは聞え給ひけむ。はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、數そひたるやうにこそおぼされためりしか。心細き御なぐさめには、かう朝夕に見奉るよりいかなる方にか」となま怨めしく思ひ給へれば、げにといとほしうて、「猶これかれうたてひがひがしきものにいひ思ふべかめるにつけて思ひ亂れ侍るぞや」といひさし給ひつ。暮れ行くに、まらうどはかへり給はず。姫君いとむつかしとおぼす。辨參りて、御消息ども聞え傳へて、恨み給

ふを、ことわりなるよしを、つぶつぶと聞ゆれば、いらへも志給はずうち歎きていかにもてなすべき身にかは、ひと所おはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれ奉りて、宿世といふなる方につけて身を心ともせぬよなれば、皆例のことにてこそは人わらへになるとがをも隱すなれ、あるかぎりの人は年つもりさかしげにおのが志しは思ひつゝ、心をやりて似つかはしげなる事を聞え志らすれど、こははかばかしきことかは、人めかしからぬ心どもにて、唯一方にいふにこそはと見給へば、引き動しつばかりきこえあへるも、いと心憂くうとましうてだうぜられ給はず。同じ心に何事も語らひ聞え給ふ。中の君はかゝるすぢには今少し心もえず、おほどかにて何とも聞きいれ給はねば、「あやしうもありける身かな」と唯奥ざまに向きておはす。「例の色の御ぞども、奉りかへよ」などそゝのかし聞えつゝ皆さる心すべかめる氣色を、あさましく、げに何のさはり所かはあらむ、ほどもなくてかゝる御住ひのかひなき、山なしの花ぞのがれむ方なかりける。まらうどは、かくけ志ように、これかれにも口入れさせず、忍びやかにいつありそめけむこともなく、もてなしてこそと思ひそめける事なれば、御心ゆるし給はずば、いつもいつもかくてすぐさむとおぼしのたまふを、このおい人のおのが志ゝ語らひてけ志ようにさゝめきなどす。さはいへど深からぬけにや、老いひがめるにや、いとほしくぞ見ゆる。姫君おぼし煩ひて、辨が參れるにのたまふ。「年比も人に似ぬ御心よせとのみのたまひわたりしを聞きおき、今となりてはよろづにのこりなく賴み聞えて、あやしきまでうちとけにたるを、思ひしにたがふさまなる御心ばへのまじりて恨み

給ふめるこそわりなけれ。世に人めきてあらまほしき身ならばかゝる御ことをも何かはもてはなれても思はまし。されど昔より思ひ離れそめたる心にていと苦しきを、この君のさかり過ぎ給はむも口惜しげに、かゝる住ひもたゞこの御ゆかりに所せくのみおぼゆるを、誠に昔を思ひ聞え給ふ志ならば、同じ事に思ひなし給へかし。身をわけたる心のうちは皆ゆづりて見奉らむ心地なむすべき。猶かやうによろしげに聞えなされよ」とはぢらひたるものからあるべきさまをのたまひつゞくれば、いとあはれと見奉る。「さのみこそはさきざきも御氣色を見給ふればいとよく聞えさすれど、さはえ思ひ改むまじき。兵部卿宮の御うらみ深さまさるめれば、又そなたざまにいとよくうしろみ聞えむ」となむ聞え給ふ。「それも思ふやうなる御事どもなり。二所ながらおはしまして、ことさらにいみじき御心盡してかしづき聞えさせ給はむには、えしもかく世にありがたき御事どもさしつどひ給はざらまし。かしこけれどかくいとたつきなげなる御有樣を見奉るに、いかになりはてさせ給はむとうしろめたう悲しうのみ見奉るを、後の御心は知りがたけれど、うつくしくめでたき御すくせどもにこそおはしましけれとなむかつかつ思ひ聞ゆる。故宮の御ゆゐごん違へじとおぼしめす方はことわりなれど、それはさるべき人のおはせず、志なほどならぬ事やおはしまさむとおぼして誡め聞えさせ給ふめりしにこそ。この殿のさやうなる心ばへ物し給はましかば、一所をうしろ安く見置き奉りていかにうれしからましと折々のたまはせしものを、ほどほどにつけて思ふ人に後れ給ひぬる人は、高きもくだれるも心の外にあるまじきさまにさすらふ類ひだに

こそ多く侍るめれ。それ皆例の事なめればもどきいふ人も侍らず。ましてかくばかりことさらにも作り出でまほしげなる人の御有樣に、志深うありがたげに聞え給ふを、あながちにもて離れさせ給ひて、おぼしおきつるやうに行ひのほいをとげ給ふとも、さりとて雲霞をやは」などすべてこと多く申し續くれば、いとにくゝ心づきなくおぼして、ひれふし給へり。中の君もあいなくいとほしき御氣色かなと見奉り給ひて、諸共に例のやうにおほとのごもりぬ。うしろめたういかにもてなさむとおぼえ給へど、ことさらめきてさしこもりかくろへ給ふべき物の隈だになき御住ひなれば、なよゝかにをかしき御ぞうへに引き着せ奉り給ひて、まだけはひあつき程なれば少しまろびのきて臥し給へり。辨はのたまひつるさまを、まらうどに聞ゆ。いかなればいとかうしも世を思ひ離れ給ふらむ、ひじりだち給へりしあたりにて常なきものに思ひ知り給へるにやとおぼすに、いとゞ我が心に通ひておぼゆれば、さかしだちにくゝもおぼえず。「さらば物ごしなどにも今はあるまじき事におぼしなるにこそはあなれ。今夜ばかりおほとのごもるらむあたりに、忍びてたばかれ」とのたまへば、心して人とくしづめなど、心知れるどちは思ひかまふ。宵少し過ぐるほどに風の音荒らかにうち吹くに、はかなきさまなる蔀などはひしひしとまぎるゝ音に、人の忍び給へるふるまひは、え聞きつけ給はじと思ひて、やをら導きつる。同じ所におほとのごもれるを、うしろめたしと思へど、常のことなれば、ほかほかにともいかゞ聞えむ。御けはひをもたどたどしからず、見奉り給へつらむと思ひけるに、うちもまどろみ給はねば、ふと聞き給ひてやをら起き出で給ひぬ。

いと疾くはひ隱れ給ひぬるに、何心もなく寢入り給へるをいといとほしく、いかにするわざぞと胸つぶれて諸共に隱れなばやと思へど、さもえ立ちかへられでわなゝくわなゝく見給へば、火のほのかなるにうちき姿にていとなれがほに、几帳のかたびらをひきあげて入りぬるを、いみじういとほしく、いかにおぼえ給はむと思ひながら、あやしき壁のつらに屛風を立てたるうしろのむつかしげなるに居給ひぬ。あらましごとにてだにつらしと思ひ給へるを、まいていかにめづらかにおぼし疎まむといと心苦しきにも、すべてはかばかしきうしろみなくて落ちとまる身と物悲しきを思ひ續け給ふに、今はとて山に登り給ひし夕の御さまなど只今の心地していみじく戀しく悲しくおぼえ給ふ。中納言は一人ふし給へるを、心しけるにやと嬉しくて心ときめきし給ふに、やうやうあらざりけりと見る。今少し美くしくらうたげなる氣色はまさりてやとおぼゆ。あさましげにあきれ惑ひ給へるを、げに心も知らざりけりと見ゆればいといとほしくもあり、又おしかへして隱れ給へらむつらさのまめやかに心うくねたければ、これをもよそのものとはえ思ひ離れまじけれど、猶ほいの違はむ口惜しくて、うちつけにあさかりけりともおぼえ奉らじ。このひとふしは猶過ぐして遂にすくせのかれずは、こなたざまにならむも何かはこと人のやうにやはと思ひさまして、例のをかしくなつかしきさまに語らひてあかし給ひつ。老い人どもはしそじつと思ひて、中の君はいづこにかおはしますらむ、怪しきわざかなとたどりあへり。「さりともあるやうあらむ」などいふ。「大方例の見奉るに、皺のぶる心ちしてめでたくあはれに見まほしき御かたち有樣を、など

ていともてはなれては聞え給ふらむ。何かこれは世の人のいふめる、恐しき神ぞつき奉りつらむ」と齒はうちすきて、あいぎやうなげにいひなす女あり。又「あなまがまがし。なぞのものかつかせ給はむ。たゞ人に遠くておひ出でさせ給ふめれば、かゝる事にもつきづきしげにもてなし聞え給ふ人もなくおはしますに、はしたなくおぼさるゝにこそ。今おのづから見奉りなれ給ひなば思ひ聞え給ひてむ」など語らひて、「とくうちとけて思ふやうにておはしまさなむ」といふいふ寢入りて、いびきなどかたはらいたくするもあり。逢ふ人からにしもあらぬ秋の夜なれど、ほどもなく明けぬるこゝちして、いづれとわくべくもあらずなまめかしき御けはひを、人やりならず飽かぬ心ちして、「あひおぼせよ。いと心憂くつらき人の御さま見習ひ給ふなよ」など、のちせを契りて出で給ふ。我ながらあやしく夢のやうにおぼゆれど、猶つれなき人の御氣色、今一度見はてむの心に思ひのどめつゝ、例の出でゝふし給へり。辨參りていとあやしく、「中の君はいづくにおはしますらむ」といふを、いと恥しく思ひかけぬ御心地にいかなりけむことにかと思ひふし給へり。昨日のたまひし事をおぼしいでゝ、姫君をつらしと思ひ聞え給ふ。明けにける光につきてぞ壁の中のきりぎりすはひいで給へる。おぼすらむことのいといといとほしければ、かたみに物もいはれ給はず。ゆかしげなう心憂くもあるかな、今より後も心ゆるびすべくもあらぬ世にこそと思ひ亂れ給へり。辨はあなたに參りて、あさましかりける御心づよさを聞き顯して、いとあまりふかく人にくかりけることゝいとほしくおもほれ居たり。「きし方のつらさは猶殘りあるこゝちして、よろづに思ひ慰め

つるを、今夜なむ誠に恥しく身も投げつべき心ちする。捨てがたくおとし置き奉りたまへりけむ心苦しさを思ひ聞ゆる方こそ、又ひたぶるに身をもえ思ひ捨つまじけれ。かけかけしきすぢは、いづかたにも思ひ聞えじ。憂きもつらきも、かたがたに忘られ給ふまじくなむ。宮などの恥しげなく聞え給ふめるを、同じくは高くと思ふ方ぞ殊に物し給ふらむと心得はてつれば、いとゞことわりに恥しくて又參りて人々に見え奉らむこともねたくなむ。よしかくをこがましき身の上、また人にだに洩らし給ふな」とゑんじ置きて、例よりも急ぎ出で給ふ。「誰が御ためもいとほしく」とさゝめきあへり。姫君もいかにしつることぞ、もしおろかなる心も物し給はゞと、胸つぶれて心苦しければ、すべてうちあはぬ人々のさかしらをにくしとおぼす。さまざま思う給ふに、御文あり。例よりは嬉しとおぼえ給ふもかつはあやし。秋の氣色も知らずがほに、靑き枝のかたえは、いとこくもみぢしたるを、

「おなじえをわきてそめける山姫にいづれかふかき色ととはゞや」。さばかり恨みつる氣色もなくことずくなにことそぎておしつゝみ給へるを、そこはかとなくもてなして止みなむとなめりと見給ふも心さわぎて、耳かしがましう「御かへり」といへば、聞え給へとゆづらむもうたておぼえて、さすがに書きにくゝ思ひ亂れ給ふ。

「山姫のそむるこゝろはわかねどもうつろふ方やふかきなるらむ」。ことなしひに書き給へるがをかしく見えければ、猶えゑんじはつまじくおぼゆ。身をわけてなどゆづり給ふ氣色は度々見えしかど、うけひかぬにわびてかまへ給へるなめり、そのかひなくかくつれなから

むも、いとほしくなさけなきものに思ひ置かれて、いよいよはじめの思ひかなひ難くやあらむ、とかく言ひ傳へなどすめる、おい人の思はむ所もかろがろしく、とにかくに心を染めけむだに悔しく、かばかりの世の中を思ひすてむの心に、みづからもかなはざりけりと人わろく思ひ知らるゝを、ましておしなべたるすきものゝまねに、同じあたりに返す返す漕きめぐらむ、いと人わらへなる棚なし小船めきたるべしなどよもすがら思ひ明し給ひて、まだ有明の空もをかしき程に、兵部卿宮の御方に參り給ふ。三條の宮燒けにし後は、六條院にぞうつろひ給へれば近くては常に參り給ふを、宮もおぼすやうなる御心地し給ひけり。紛るゝことなく、あらまほしき御住ひに、おまへの前栽外のには似ず、同じき花のすがたも木草の靡きざまも、ことに見なされて、遣り水にすめる月の影さへ繪に書きたるやうなるに、思ひつるもしるく起きおはしましけり。風につきて吹き來るにほひのいとしるくうちかをるに、ふとそれと驚かれて、御直衣奉り亂れぬさまに引き繕ひて出で給ふ。はしをのぼりもはてずつい居給へれば、猶うへになどものたまはで、高欄により居給ひて世の中の御物語聞えかはし給ふ。かのわたりのことをも物のついでにおぼし出でゝ、よろづに恨み給ふもわりなしや。みづからの心にだにかなひがたきをと思ふ思ふ、さもおはせなむと思ひなるやうのあれば、例よりはまめやかにあるべきさまなど申し給ふ。あけぐれの程あやにくに霧わたりて空のけはひひやゝかなるに、月は霧に隔てられて木の下も暗くなまめきたり。山里のあはれなるありさま思ひいで給ふ。宮「このごろの程に。必ずおくらかし給ふな」と語らひ給ふを猶煩しが

れば、

「女郎花さけるおほ野をふせぎつゝ心せばくやしめをゆふらむ」とたはぶれ給ふ。

「霧ふかきあしたのはらの女郎花こゝろをよせて見る人ぞみる。なべてやは」などねたましく聞ゆれば「あなかしかまし」とはてはては腹立ち給ひぬ。年頃かくのたまへど、人の御有様をいかならむとうしろめたく思ひしに、かたちなども見おとし給ふまじく推し量らるゝ心ばせの、ちかおとりするやうもやなどぞあやうく思ひ渡りしを、何事も口惜しくは物し給ふまじかめりと思へば、かのいとほしくうちうちに思ひたばかり給ふ有樣も違ふやうならむもなさけなきやうなるを、さりとてさはたえ思ひ改むまじくおぼゆれば、まづゆづり聞えて、いづ方の恨をもおはじなどしたに思ひ構ふる心をも知り給はで、心せばくとりなし給ふもをかしければ「例のかろらかなる御心ざまに、物思はせむこそ心苦しかるべけれ」などおやかたになりて聞え給ふ。「よし見給へ。かばかり心にとまることなむまだなかりつる」などいとまめやかにの給へば、「かの心どもにはさもやとうち靡きぬべき氣色は見えずなむ侍る。仕うまつりにくき宮仕にこそ侍れや」とて、おはしますべきやうなどこまかに聞えしらせ給ふ。廿六日彼岸のはてにてよき日なりければ、人知れず心づかひしていみじく忍びてゐて奉る。きさいの宮など聞しめし出でゝはかゝる御ありきいみじくせいし聞え給へばいと煩しきを、せちにおぼしたる事なれば、さりげなくともてあつかふもわりなくなむ。ふなわたりなども所せければ、ことごとしき御やどりなども借り給はず。そのわたりいと近きみさ

うの人の家にいと忍びて宮をばおろし奉り給うておはしぬ。見咎め奉るべき人もなけれど、殿居人は僅に出でありくにも、氣色しらせじとなるべし、例の中納言殿おはしますとてけいめいしあへり。君だちなま煩はしく聞き給へど、うつろふ方ことににほはし置きてしかばと姫君はおぼす。中の君は思ふ方ことなめりしかばさりともと思ひながら、心憂かりし後はありしやうに姉君をも思ひ聞え給はず、心おかれて物し給ふ。何やかやと御せうそこのみ聞え通ひていかなるべき事にかと人々も心苦しがる。宮をば御馬にて、暗きまぎれにおはしまさせ給うて、辨召し出でゝ、「こゝもとに唯一言聞えさすべきことなむ侍るを、おぼし放つさま見奉りてしに、いと恥しけれどひたやごもりにてえやむまじきを、今志ばしふかしてを、ありしさまには導き給ひてむや」など、うらもなく語らひ給へば、いづかたにも同じ事にこそはと思ひて參りぬ。さなむと聞ゆれば、さればよ思ひ移りにけりと嬉しくて、心おちゐて、かの入り給ふべき道にはあらぬ廂のさうじをいとよくさして對面し給へり。「一言聞えさすべきが又人聞くばかりのゝしらむはあやなきを、いさゝかあけさせ給へ。いといぶせし」と聞え給へど、「かくてもいとよく聞えぬべし」とて、あけ給はず。今はとうつろひなむをたゞならじとていふべきにや、何かは例ならぬ對面にもあらず、人にくゝいらへで、夜もふかさじなど思ひてかばかりも出で給へるに、障子のなかより御袖をとらへて引きよせていみじううらむれば、いとうたてもあるわざかな、何に聞きいれつらむとくやしうむつかしけれど、こしらへて出してむとおぼして、こと人と思ひわき給ふまじきさまにかすめつゝ語らひ給へ

る心ばへなどいとあはれなり。宮は敎へ聞えつるまゝに、一夜の戸口によりて扇を鳴し給へば、辨も參りて導き聞ゆ。さきざきもなれにける道のしるべ、をかしとおぼしつゝいり給ひぬるをも、姫君は知り給はでこしらへいれてむとおぼしたり。をかしうもいとほしくもおぼえて、うちうちに心も知らざりける恨みおかれむも罪さり所なき心地すべければ、「宮の慕ひ給ひつれば、え聞えいなびで、こゝにおはしつる。音もせでこそ紛れ給ひぬれ。このさかしだつめる人や、かたらはれ奉りぬらむ。なかぞらに人わらへにもなり侍りぬべきかな」とのたまふに、今少し思ひよらぬことの、めもあやに心づきなうなりて、「かうよろづに珍らかなりける御心の程を知らで、いふかひなき心をさなさも見え奉りにけるをこたりに、おぼしあなづるにこそは」といはむ方なく思う給へり。「今はいふかひなし。ことわりは返す返す聞えさせても、あまりあらばつみもひねらせ給へ。やんごとなき方におぼしよるめるを、すくせなどいふめるもの更に心にかなはぬものに侍るめれば、かの御志はことに侍りけるを、いとほしく思ひ給ふるに、かなはぬ身こそおき所なく心憂く侍りけれ。猶いかゞはせむにおぼしよわりね。このみさうじのかためばかりいと強きも、誠に物清く推し量り聞ゆる人も侍らじ。しるべといざなひ給へる人の御心にも、まさにかく胸ふたがりて明すらむとはおぼしなむや」とてさうじをも引き破りつべき氣色なれば、いはむ方なく心づきなけれどこしらへむと思ひしづめて、「このたまふすくせといふらむ方は目にも見えぬことにて、いかにもいかにも思ひたどられず、しらぬ涙のみきりふたがる心地してなむ。こはいかにもてなし給ふ

ぞと夢のやうにあさましきに、後の世のためしにいひいづる人もあらば、昔物語などに殊更にをこめきて作り出でたるものゝたとひにこそはなりぬべかめれ。かくおぼしかまふる心のほどをも、いかなりけるとかは推し量り給はむ。猶いとかくおどろおどろしう心憂くなとりあつめまどはし給ひそ。心よりほかにながらへば少し思ひのどまりて聞えむ。心地も更にかきくらすやうにていとなやましきを。こゝにうちやすまむ。許し給へ」といといみじく侘び給へば、さすがにことわりをばいと能くのたまふが心恥しくらうたくおぼえて、「あが君、御心に從ふことの類ひなければこそかくまでかたくなしくなり侍れ。いひ知らずにくゝ疎ましきものにおぼしなすめれば、聞えむ方なし。いとゞ世に跡とゞむべくなむおぼえぬ」とて、「さらばへだてながらも聞えさせむ。ひたぶるになうちすてさせ給ひそ」とて、許し奉り給へれば、はひいりてさすがに入りもはて給はぬを、いとあはれと思ひて、「かばかりの御けはひをなぐさめにて、明し侍らむ。ゆめゆめ」と聞えてうちもまどろまず。いとゞしき水の音に目もさめて、夜半の嵐に山鳥の心ちして明しかね給ふ。例の明け行くけはひに鐘の聲など聞ゆ。いぎたなくて出で給ふべき氣色もなきよと、心やましくこわづくり給ふも、げにあやしきわざなり。

「しるべせし我やかへりて惑ふべきこゝろもゆかぬあけぐれの道。かゝるためし世にありけむや」とのたまへば、

「かたかたにくらすこゝろを思ひやれ人やりならぬ道にまどはゞ」とほのかにのたまふ

を、いと飽かぬ心地すれば、「いかにてよなう隔たりて侍るめれば、いとわりなうこそ」などよろづに恨みつゝ、ほのぼのと明けゆくほどに、よべの方より出で給ふなり。いとやはらかにふるまひなし給へるにほひなど、えんなる御心げさうにはいひしらずしめ給へり。ねび人どもは いとあやしく心え難く思ひ惑はれけれど、さりともあしざまなる御心あらむやはと慰めたり。暗き程にと急ぎ歸り給ふ。道の程もかへるさはいと遙けくおぼされて、心安くもえ行き通はざらむことの、かねていと苦しきを、夜をや隔てむと思ひ惱み給ふなめり。まだ人さわがしからぬ朝の程におはしつきぬ。廊に御車よせており給ふ。ことやうなる女車のさましてかくろへ入り給ふに、皆わらひ給ひて「おろかならぬ宮仕の御志となむ思ひ給ふる」と申し給ふ。しるべのをこがましさをば、いと妬くてうれへも聞え給はず。宮はいつしかと御文奉り給ふ。山里には誰もたれもうつゝの心地し給はず思ひ亂れ給へり。樣々におぼしかまへけるを、色にも出し給はざりけるよとうとましうつらく姉君をば思ひ聞え給ひて、目も見あはせ奉り給はず。知らざりしさまをも、さはさはとはえあきらめ給はで、ことわりに心苦しく思ひ聞え給ふ。人々もいかに侍りしことにかなど、御氣色見奉れど、おぼしほれたるやうにてたのもし人のおはすれば、あやしきわざかなと思ひあへり。御文もひきときて見せ奉り給へど、更に起きあがり給はねば、「いと久しくなりぬ」と御つかひわびけり。

「世のつねに思ひやすらむ露ふかき道のさゝ原わきてきつるも」。書きなれ給へる墨つきなどのことさらにえんなるも、大かたにつけて見給ひしは、をかしうおぼえしを、後めたう物

思はしうて我さかし人にて聞えむもいとつゝましければ、まめやかにあるべきやうをいみじくせめて書かせ奉り給ふ。志をん色の細長ひとかさねに、みへがさねの袴具してたまふ。御使苦しげに思ひたれば、つゝませて供なる人になむ送らせ給ふ。ことごとしき御使にもあらず、例奉れ給ふうへわらはなり。殊更に人に氣色もらさじとおぼしければ、よべのさかしがりしおい人のしわざなりけりとものしくなむ聞しめしける。その夜もかのしるべさそひ給へど、「冷泉院に必ず侍ふべき事侍れば」とてとまり給ひぬ。例のことにふれてすさまじげによをもてなすとにくゝおぼす。いかゞはせむ、ほいならざりし事とて、おろかにやはと思ひよわり給ひて、御しつらひなどうちあはぬすみかのさまなれど、さる方にをかしくしなして待ち聞え給ひけり。遙なる御中道を、急ぎおはしましたりけるも、嬉しきわざなるぞかつはあやしき。さうじみは我にもあらぬさまにて、つくろはれ奉りたまふまゝに、濃き御ぞのいたくぬるれば、さかし人もうちなきつゝ、「世の中に久しくもとおぼえ侍らねば、明暮のながめにも唯御事をのみなむ心苦しう思ひ聞ゆるに、この人々もよかるべきさまのことゝ、聞きにくきまでいひしらすめれば、年經たる心どもには、さりとも世のことわりをも知りたらむはかばかしくもあらぬ心ひとつをたてゝ、かうでのみやは見奉らむと思ひなるやうもありしかと、只今かく思ひもあへず恥しきことゞもに亂れ思ふべくは更に思ひかけ侍らざりしに、これやげに人のいふめる遁れ難き御契なりけむ。いとこそ苦しけれ。少しおぼし慰みなむに、知らざりしさまをも聞えむ。にくしとなおぼしいりそ、罪もぞ得給ふ」とみぐしをな

でつくろひつゝ聞え給へば、いらへもし給はねど、さすがにかくおぼしのたまふが、げにうしろめたく悪しかれともおぼしおきてじを、人わらへに見苦しきこととそひて、見あつかはれ奉らむがいみじきを、よろづに思ひ居給へり。さる心もなくあきれ給へりしけはひだになべてならずをかしかりしを、まいて少し世の常になよび給へるは御志もまさるに、たはやすく通ひ給はざらむ山道のはるけさも、胸いたきまでおぼして、心深げにかたらひたのめ給へど、あはれともいかにとも思ひわき給はず。いひしらずかしづくものゝ姫君も、少し世の常の人げ近く親せうとなどいひつゝ、人のたゝずまひをも見なれ給へるは、物の恥しさもなのめにやあらむ。家にあがめ聞ゆる人こそなけれ、かく山ふかき御あたりなれば、人に遠く物深くてならひ給へるこゝちに、思ひかけぬ有樣のつゝましく恥しく、何事も世の人に似ずあやしう田舍びたらむかしとはかなき御いらへにてもいひ出でむ方なくつゝみ給へり。さるはこの君しもぞらうらうしくかどある方のにほひはまさり給へる。三日にあたる夜は「もちひなむ參る」と人々の聞ゆれば、殊更にさるべき祝ひのことにこそはとおぼして、御前にてせさせ給ふもたどたどしう、かつはおとなになりておきて給ふも、人の見るらむこと憚られて、おもてうち赤めておはするさま、いとをかしげなり。このかみ心にや、のどかにけ高きものから、人のためあはれになさけなさけしうぞおはしける。中納言殿より「よべ參らむと思ひ給へしかど、宮仕のらうもしるしなげなめる世に、思う給へ恨みてなむ。今夜はざうやくもやと思ひ給へれど、殿居所のはしたなげに侍りし、亂り心地いとゞ安からでやすらはれ侍

る」と、みちのくに紙においつき書き給ひて、まうけのものどもこまやかに縫ひなどもせざりけるいろいろおしまきなどしつゝ、みそ櫃あまたかけごにいれて、おい人のもとに、人々の料にとて賜へり。宮の御方にさぶらひけるに從ひて いと多くもえとり集め給はざりけるにやあらむ、たゞなる絹綾など、志たには入れかくしつゝ、御料とおぼしき二くだり、いと清らにしたるを、單衣の御ぞの袖に、こだいのことなれど、

「さよ衣きてなれきとはいはずとも かごとばかりはかけずしもあらじ」とおどし聞え給へり。こなたかなたゆかしげなき御ことを、恥しういとゞ見給ひて、御かへりもいかゞ聞えむとおぼし煩ふほど、御使かたへはにげかくれにけり。あやしき志も人をひかへてぞ御かへしたまふ。

「へだてなき心ばかりはかよふとも なれし袖とはかけじとぞ思ふ」。心あわたゞしく思ひ亂れ給へる名殘に、いとゞなほなほしきをおぼしけるまゝと、待ち見給ふ人は唯あはれにぞ思ひなされ給ふ。宮はその夜內に參り給うて、えまかで給ふまじげなるを、人知れず御心もそらにておぼし歎きたるに、中宮「猶かくひとりおはしまして世の中にすい給へる御名のやうやう聞ゆる、猶いと惡しき事なり。何事も物好ましく立てたる心なつかひ給ひそ。上もうしろめたげにおぼしの給ふ」と里ずみがちにおはしますを諫め聞え給へば、いと苦しとおぼして、御殿居所に出で給ひて御文かきて奉れ給へる。名殘もいたくうちながめておはしますに中納言の君參り給へり。そなたの心よせとおぼせば例よりも嬉しうて、「いかゞすべき、い

とかく暗くなりぬめるを心も亂れてなむ」と歎しげにおぼしたり。能く御氣色を見奉らむとおぼして、「日ごろ經てかく參り給へるを、今夜さぶらはせ給はで急ぎまかで給ひなむ、いとゞよろしからぬことにや、おぼし聞えさせ給はむ。臺盤所の方にてうけたまはりつれば、人知れず煩はしき宮仕のしるしに、あいなきかんだうや侍らむと顏の色違ひ侍りつる」と申し給へば、「いと聞きにくゝぞおぼしのたまふや。多くは人のとりなすことなるべし。世にとがめあるばかりの心は、何事にかはつかふらむ。すべて所せき身の程こそなかなかなるわざなりけれ」とて、誠にいとはしくさへおぼしたり。いとほしう見奉り給ひて、「同じ御さわがれにこそはおはすなれ。今夜の罪にはかはり聞えさせて、身をもいたづらになし侍りなむかしこはたの山に馬はいかゞ侍るべき。いとゞものゝ聞えやさはり所なからむ」と聞え給へば、たゞくれにくれて更けにける夜なれば、おぼしわびて御馬にて出で給ひぬ。「御供にはなかなかつかふまつらじ、御うしろみを」とてこの君は內にさぶらひ給ふ。中宮の御方に參り給へれば、「宮は出で給ひぬなり。あさましくいとほしき御さまかな。いかに人見奉るらむ。上きこしめしてはいさめ聞えぬがいふかひなきとおぼしのたまふこそわりなけれ」とのたまはす。あまた宮達のおとなびとゝのひ給へど、大宮はいよいよ若くをかしきけはひなむまさり給ひける。女一宮もかくぞおはしますべかめる。いかならむ折にかかばかりにても物近く御聲をだに聞え奉らむとあはれにおぼゆ。すいたる人の思ふまじき心づかふらむも、かうやうなる御なからひの、さすがにけ遠からずいりたちて心にかなはぬ折の事ならむかし、我が心

のやうに、ひがひがしき心のたぐひやは又世にあべかめる、それだに猶動きそめぬるあたりはえこそ思ひたへねと思ひ居給へり。さぶらふかぎりの女房のかたち、心ざまいづれとなくわろびたるなくめやすくとりどりにをかしき中にも、あてにすぐれて目にとまるあれど、更に更に亂れそめじの心にていときすくにもてなし給へり。殊更に見えしらがふ人もあり。大方恥しげにもてしづめ給へるあたりなれば、うはべこそ心ばかりもてしづめたれ、心々なる世の中なりければ、色めかしげにすゝみたるしたの心もりて見ゆるもあるを、さまざまにをかしくもあはれにもあるかなと、立ちても居ても唯常なき有樣を思ひありき給ふ。かしこには、中納言殿の、ことごとしげにいひなし給へりつるを、夜更くるまでおはしまさで御文のあるを、さればよと胸つぶれておはするに、夜中近うなりてあらましき風のきほひにいともなまめかしく淸らにて匂ひおはしたるも、いかゞおろかにおぼえ給はむ。さうじみも聊かうち靡きて思ひ知り給ふことあるべし。いみじくをかしげにさかりと見えて、引きつくろひ給へるさまは、まして類ひあらじはやとおぼゆ。さばかりよき人をおほく見給ふ御目にだに、けしうはあらずとかたちよりはじめて多くちかまさりしたりとおぼさるれば山里のおい人どもは、まして口つきにくげにうちゑみつゝ、「かくあたらしき御有樣を、なのめなるきはの人の見奉り給はましかばいかに口惜しからまし。思ふやうなる御すくせ」と聞えつゝ、姫君の御心を、あやしくひがひがしくもてなし給ふを、もどきくちひそみ聞ゆ。盛り過ぎたるさまどもに　あざやかなる花のいろいろ似つかはしからぬをさしぬひきつゝ、ありつかずとりつく

ろひたる姿どもの、罪ゆるされたるもなきを見渡され給ひて、姫君、我もやうやう盛り過ぎぬる身ぞかし、鏡を見ればやせやせになりもてゆくを、おのがじゝはこの人どもゝ、われあしとやは思へる、うしろではしらず顔にひたひ髪をひきかけつゝ、色どりたる顔づくりをよくしてうちふるまふめり、我が身にては、まだいとあれがほどにはあらず、目も鼻もなほしとおぼゆるは心のなしにやあらむとうしろめたくて、見出して臥し給へり。恥かしげならむ人に見えむことはいよいよかたはらいたく、今一年二年あらば衰へまさりなむ、はかなげなる身の有樣をと、御手つきのほそやかにかよわくあはれなるをさしいでゝも世の中を思ひつゞけ給ふ。宮はありがたかりつる御いとまの程をおぼしめぐらすに、猶心やすかるまじきことにこそはといと胸ふたがりておぼえ給ひける。大宮の聞え給ひしさまなど語り聞え給ひて、「思ひながらとだえあらむを、いかなるにかとおぼすな。夢にてもおろかならむにかくまでも參りくまじきを、心のほどやいかゞと疑ひて、思ひ亂れ給はむが心苦しさに、身を捨てゝなむ。常にかくはえ惑ひありかじ。さるべきさまにて近くわたし奉らむ」といと深く聞え給へど、絶え間あるべくおぼさるらむは、おとに聞きし御心の程しるきにやと心おかれて、我が御ありさまからさまざま物歎しくてなむありける。明けゆくほどの空に妻戸押しあけ給ひて諸共にいざなひ出でゝ見給へば、霧わたれるさま所からのあはれ多くそひて、例のしばつむ船のかすかに行きかふ、跡の白浪めなれずもあるすまひのさまかなと、色なる御心にはをかしくおぼしなさる。山の端の光やうやう見ゆるに、女君の御かたちのまほに美くし

げにて、かぎりなくいつきすゑたらむ姫君もかばかりこそはおはすべかめれ、思ひなしの我が方ざまのいといつくしきぞかし、こまやかなるにほひなどうちとけて見まほしうなかなかなる心ちす。水の音なひなつかしからず、宇治橋のいと物ふりて見え渡さるゝなど、霧晴れ行けばいとゞあらましき岸のわたりを、「かゝる處にいかで年をへ給ふらむ」などうち涙ぐまれ給へるをいと恥しと聞き給ふ。男の御さまのかぎりなくなまめかしく淸らにて、この世のみならず契りたのめ聞え給へば、思ひよらざりしことゝは思ひながら、なかなかかのめなれたりし中納言の恥しさよりはとおぼえ給ふ。かれは思ふかたことにて いといたくすみたる氣色の見えにくゝ恥しげなりしに、よそに思ひ聞えしはましてこよなく遙に、一くだりかき出で給ふ御返しだにつゝましくおぼえしを、久しうとだえ給はむは 心ぼそからむと思ひならるゝも、我ながらうたてと思ひしり給ふ。人々いたくこわづくりもよほし聞ゆれば、京におはしまさむ程、はしたなからぬ程にといと心あわたゞしげにて、心より外ならむ夜がれを、かへすがへすのたまふ。

「中絶えむものならなくにはし姫のかたしく袖や夜はにぬらさむ」。出でがてに立ち返りつゝやすらひ給ふ。

「たえせじのわがたのみにや宇治橋のはるけき中を待ちわたるべき」。ことには出でねど物なげかしき御けはひ限なくおぼされけり。若き人の御心にしみぬべく、類ひすくなげなるあさげの姿を見送りて、名殘とまれる御移り香なども人知れず物あはれなるは、ざれたる御

心かな。今朝ぞものゝあやめも見ゆる程にて人々のぞきて見奉る。「中納言殿は、なつかしく恥しげなるさまぞそひ給へりける。思ひなしの今ひときはにや、この御さまはいとことに」などめで聞ゆ。道すがら心苦しかりつる御氣色をおぼしいでつゝ、立ちもかへりなまほしくさまあしきまでおぼせど、世の聞えを忍びて歸らせ給ふほどに、えたはやすくも紛れさせ給はず、御文は明くる日ごとにあまたかへり奉らせ給ふ。おろかにはあらぬにやと思ひながら、おぼつかなき日數の積るを いと心づくしに見じと思ひしものを、身にまさりて心苦しくもあるかなと姫君はおぼし歎かるれど、いとゞこの君の思ひしづみ給はむにより つれなくもてなして、みづからだに猶かゝること思ひ加へじといよいよふかくおぼす。中納言の君も待ち遠にぞおぼすらむかしと思ひやりて、我があやまちにいとほしくて宮を聞えおどろかしつゝ絶えず御氣色を見給ふに、いといたくおもほしいれたるさまなれば、さりともとうしろやすかりけり。九月十日の程なれば、野山の氣色も思ひやらるゝに、時雨めきてかきくらし空のむら雲おそろしげなる夕暮、宮いとゞしづ心なくながめ給ひて、いかにせむと御心ひとつを出で立ちかね給ふをり、推し量りて參り給へり。「ふるの山里いかならむ」とおどろかし聞え給ふ。いと嬉しとおぼして、諸共にいざなひ給へば、例のひとつ御車にておはす。分け入り給ふまゝにぞまいて眺め給ふらむ心のうちいとゞ推し量られ給ふ。道のほども唯この事の心苦しきを語らひ聞え給ふ。たそがれ時のいみじく心ぼそげなるに、雨は冷やかにうちそゝぎて秋はつる氣色のすごきに、うちしめりぬれ給へるにほひどもは、世のものに似ずえん

にてうちつれ給へるを、やまがつどもはいかゞ心惑ひもせざらむ。女ばら日ごろうちつぶやきつる名殘なくゑみさかえつゝおましひきつくろひなどす。京にさるべき所々に行きちりたるむすめどもめひだつ人二三人尋ねよせて參らせたり。年ごろあなづり聞えける心あさき人々、珍らかなるまらうどゝ思ひ驚きたり。姬君もをり嬉しく思ひ聞え給ふに、さかしら人のそひ給へるぞ恥しくもありぬべくなまわづらはしう思へど、心ばへののどかに物深くものし給ふを、げに人はかうは坐せざりけりと見あはせ給ふにありがたしと思ひ知らる。宮を所につけてはいとことにかしづき入り奉りて、この君はあるじがたに心やすくもてなし給ふものから、まだまらうとゐの、かりそめなる方に出しはなち給へればいとからしと思ひ給へり。恨み給ふもさすがにいとほしくて物ごしに對面し給ふ。「たはぶれにくゝもあるかな。かくてのみや」といみじく恨み聞え給ふ。やうやうことわり知り給ひにたれど、人の御うへにても物をいみじく思ひしづみ給ひて、いとゞかゝる方を憂きものに思ひはてゝ、猶ひたぶるに、いかでかくうちとけしあはれと思ふ人の御心も必ずつらしと思ひぬべきわざにこそあめれ、我も人も見おとさず心違はで止みにしがなと思ふ心づかひ深くし給へり。宮の御有樣なども問ひ聞え給へば、かすめつゝ、さればよとおぼしくのたまへば、いとほしくて、おぼしたるさま、氣色を見ありくやうなど語り聞え給ふ。例よりは心うつくしう語らひて、「猶かく物思ひ加ふる程少し心地も鎭まりて聞えむ」とのたまふ。人にくゝけどほくはもてはなれぬものから、さうじのかためもいとつよし。しひて破らむをばつらくいみじからむと

おぼしたれば、おぼさるゝやうこそあらめ、かるがるしくことざまに靡き給ふことは、はた世にあらじと、心のどかなる人はさはいへどよく思ひまづめ給ふ。「唯いと覺束なく物隔てたるなむ胸あかぬ心ちするを、ありしやうにて聞えむ」とせめたまへど「常よりも我が㑊に恥づるころなれば、うとましと見給ひてむも、さすがに心苦しきはいかなるにか」とほのかにうち笑ひ給へるけはひなど、あやしうなつかしうおぼゆ。「かゝる御心にたゆめられ奉りて、つひにいかなるべき身にかゝ」となげきがちにて、例の遠山鳥にて明けぬ。宮はまだ旅ねなるらむともおぼさで、「中納言のあるじがたに心のどかなる氣色こそうらやましけれ」とのたまへば、女君あやしと聞き給ふ。わりなくておはしましては程なくかへり給ふが飽かず苦しきに、宮も物をいみじくおぼしたる御心のうちを知り給はねば女がたには、又いかならむ人わらへにやと思ひなげき給へば、げに心づくしに苦しげなるわざかなと見ゆ。京にもかくろへて渡り給ふべき所もさすがになし。六條院には、左のおほいとの片つ方に住み給ひて、さばかりいかでかとおぼしたる六の君の御事をおぼしよらぬになまうらめしと思ひ聞え給ふべかめり。すきずきしき御さまとゆるしなくそしり聞え給ひて、うちわたりにも憂へ聞え給ふべかめれば、いよいよおぼえなくて、出しすゑ給はむもはゞかることといとおほかり。なべてにおぼす人のきはゝ宮仕のすぢにてなかなか心やすげなり。さやうのなみなみにはおぼされず。若し世の中うつりて、帝きさいのおぼしおきつるまゝにもおはしまさば、人よりたかきさまにこそなさめなど、只今はいと華やかに、御心にかゝり給へるまゝに、もてな

さむ方なく苦しかりけり。中納言は、三條の宮つくりはてゝ、さるべきさまにて渡し奉らむとおぼす。げにたゞ人は心やすかりけり。かくいと心苦しき御氣色ながら安からず忍び給ふからに、かたみに思ひ惱み給ふべかめるも心苦しくて、忍びてかくかよひ給ふよしを中宮などにも漏し聞しめさせて、しばしのさわがれはいとほしくとも女がたの御ためは咎もあらじ、いとかく夜をだに明し給はぬ苦しげさよ、いみじくもてなしてあらせ奉らばやなど思ひて、あながちにもかくろへず、ころもがへなどはかばかしく、誰かはあづからむなどおぼして、御帳のかたびらかべしろなど、三條の宮つくりはてゝわたり給はむ心まうけにしおかせ給へるを、まづさるべきやうなむなどいと忍びて聞え給ひて奉れ給ふ。さまざまなる女房のさうぞく、御めのとなどにものたまひつゝ、わざともせさせ給ひけり。十月一日ごろ「あじろもをかしきほどならむ」とそゝのかし聞え給ひて、紅葉御覽ずべう申し給ふ。親しき宮人ども殿上人のむつましくおぼすかぎりいと忍びてとおぼせど、所せき御いきほひなれば、おのづからことひろごりて、左のおほいとのゝ宰相の中將も參り給ふ。さてはこの中納言殿ばかりぞ上達部は仕うまつり給ふ。たゞ人はおほかり。「かしこにはろなう中やどりし給はむを、さるべきさまにおぼせ。さきの春も花見に尋ね參りこしこれかれ、かゝるたよりにことよせて、時雨のまぎれに見奉り顯すやうもぞ侍る」などこまやかに聞え給へり。みすかけかへ、こゝかしこかきはらひ、岩がくれに積れる紅葉の朽葉少しはるけ、遣水のみ草はらはせなどぞし給ふ。よしあるくだものさかななどさるべき人なども奉れ給へり。かつはゆかしげなけれ

どいかゞはせむ、これもさるべきにこそはと思ひゆるして心まうけし給へり。船にてのぼりくだり漕ぎめぐりおもしろく遊び給ふも聞ゆ。ほのぼの有樣見ゆるを、そなたに立ち出でゝ若き人々見奉る。さうじみの御有樣はそれと見わかねども、紅葉をふきたる船のかざりの錦と見ゆるに、聲々ふき出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおぼゆ。世の人の靡きかしづき奉るさま、かく忍び給へる道にもいと殊にいつくしきを見給ふにも、げに七夕ばかりにてもかゝる彥星の光をこそ待ち出でめなどおぼえたり。文作らせ給ふべき心まうけに博士などもさぶらひけり。たそがれどきに、御船さしよせてあそびつゝ文つくり給ふ。紅葉をうすくこくかざして海仙樂といふものを吹きておのおの心ゆきたる氣色なるに、宮はあふみの海の心地して、をち方人のうらみいかにとのみ御心そらなり。時につけたる題出してうそぶきずしあへり。人のまよひすこししづめておはせむと中納言もおぼして、さるべきやうに聞え給ふほどに、內より中宮のおほせごとにて、宰相の兄の衞門の督ことごとしき隨身ひきつれてうるはしきさまして參り給へり。かうやうの御ありきはしのび給ふとすれどおのづからことひろごりて、後のためしにもなるわざなるを、おもおもしき人數あまたもなくて俄におはしましにけるを聞しめしおどろきて、殿上人あまた具して參りたるにはしたなくなりぬ。宮も中納言も苦しとおぼして物の興もなくなりぬ。御心のうちをばしらずゑひみだれて遊びあかしつ。今日はかくてとおぼすに、又宮の大夫さらぬ殿上人などあまた奉り給へり。心あわたゞしくて口をしくかへり給はむそらなし。かしこには御文をぞ奉れ給

ふ。をかしやかなることもなく、いとまめだちておぼしけることどもをこまごまと書き續け給へれど、人めしげうさわがしからむにとて御かへりなし。數ならぬ有樣にてはめでたき御あたりにまじらはむかひなきわざかなといとゞおぼししり給ふ。よそにて隔たる月日は覺束なさもことわりにさりともなどなぐさめ給ふを、近き程にのゝしりおはして、つれなくすぎ給ふなむつらくも口惜しくも思ひ亂れ給ふ。宮はましていぶせくわりなしとおぼすことかぎりなし。あじろのひをも心よせ奉りていろいろの木の葉にかきまぜもてあそぶを、しも人などはいとをかしきことに思へば、人に從ひつゝ心ゆく御ありきに、みづからの御心地は胸のみつとふたがりて空をのみながめ給ふに、このふる宮のこずゑはいとことにおもしろく、常磐木にはひまじれる蔦の色なども物ふかげに見えてとほめさへすごげなるを、中納言の君もなかなかたのめ聞えけるをうれはしきわざかなとおぼゆ。こぞの春御供なりし君達は花の色を思ひ出でゝ、後れてこゝに眺め給ふらむ心細さをいふ。かう忍び忍びに通ひ給ふとほのぎゝたるもあるべし、心しらぬもまじりて、大かたにとやかくやと人の御うへはかゝる山がくれなれどおのづから聞ゆるものなれば、「いとをかしげにこそ物し給ふなれ。箏の琴上手にて、故宮の明暮遊びならはし給ひければ」などくちぐちにいふ。宰相中將、

「いつぞやも花のさかりにひとめ見し木の本さへや秋はさびしき」、あるじ方と思ひていへば、中納言、

「櫻こそ思ひしらすれさきにほふ花ももみぢもつねならぬ世を」。衞門督、

「いづこよりあきはゆきけむ山里の紅葉のかげはすぎうきものを」。宮の大夫、

「見し人もなき山里の岩がきにこゝろながくもはへるくずかな」。中においしらひてうちなき給ふ。御子の若くおはしける世のことなど、思ひ出づるなめり。宮、

「秋はてゝさびしさまさる木のもとを ふきなすぐしそ峯の松風」とていたう涙ぐみたまへるを、ほのかに知る人は、げにふかくおぼすなりけり。今日のたよりを過ぐし給ふ御心苦しさと見奉る人あれど、ことごとしく引き續きておはしましようず。つくりける文どものおもしろき所々うちずじ、やまと歌もことにつけて多かれど、かやうのゑひなさのまぎれにましてはかばかしき事あらむやは。かたはし書きとゞめてだに見苦しくなむ。彼處には過ぎ給ひぬるけはひを、遠うなるまで聞ゆるさきの聲々たゞならずおぼえ給ふ。心まうけしつる人々もいと口惜しとおもへり。姫君はまして猶音に聞く月草の色なる御心なりけり。ほのかに人のいふを聞けば「男といふものはそらごとをこそいとよくすなれ。思はぬ人をおもひがほにとりなす言の葉多かるもの」とこの人數ならぬ女ばらの昔物語にいふを、さるなほなほしき中にこそはけしからぬ心あるもまじるらめ、何事もすぢことなるきはになりぬれば、人の聞き思ふこともつゝましう所せかるべきものと思ひしはさしもあるまじきわざなりけり。あだめき給へるやうに故宮も聞き傳へ給ひてかうやうにけ近き程までは、おぼしよらざりしものを、あやしきまで心深げにのたまひわたり、思の外に見奉るにつけてさへ、身の憂さを思ひそふるがあぢきなくもあるかな、かう見劣りする御心を、かつはかの中納言もいかに

思ひ給ふらむ、こゝにも殊に耻かしげなる人はうち變らねど、おのおの思ふらむが人わらへにをこがましき事と思ひ亂れ給ふに、心地も違ひていと惱しうおぼえ給ふ。さうじみはたまさかに對面し給ふ時、限なく深きことをたのめ契り給へれば、さりともこよなうはおぼし變らじと、覺束なきもわりなきさばかりこそは物し給ふらめと、心の中に思ひ慰め給ふかたあり。程經にけるが思ひ入られ給はぬにしもあらぬに、なかなかにてうち過ぎ給ひぬるを、つらうも口惜しうもおもほゆるに、いとゞ物あはれなり。忍びがたき御氣色なるを、人なみなみにもてなして、例の人めきたる住ひならば、かうやうにもてなし給ふまじきをなど、姉君はいとゞしくあはれと見奉り給ふ。我も世にながらへばかうやうなる事見つべきにこそはあめれ、中納言の、とざまかうざまにいひありき給ふも、人の心を見むとなりけり、心ひとつにもてはなれて思ふともこしらへやる限てそあれ、或人のこりずまにかゝる筋のことをのみいかでと思ひためれば、心より外に遂にもてなされぬべかめり、これこそは返す返すもさる心ちして、世をすぐせとのたまひおきしは、かゝる事もやあらむのいさめなりけれ、さもこそは憂き身どもにて さるべき人々にも後れ奉らめ、やうのものと人わらへなる事を添ふる有樣にて、なき御影をさへ惱し奉らむがいみじさ、猶我だにさる物思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきにいかでなくなりなむとおぼし沈むに、心ちも誠に苦しければ、物も露ばかり參らず、たゞなからむ後のあらましごとを明暮思ひ續け給ふに物心ぼそくて、この君を見奉り給ふもいと心苦しう、我にさへ後れ給ひていかにいみじう慰むる方なからむ、あた

らしくをかしきさまを、明暮のみものにて、いかで人々しうも見なし奉らむと思ひあつかふをこそ、人知れぬ行く先のたのみにも思ひつれ、限なき人にものし給ふとも、かばかり人わらへなるめを見てむ人の、世の中に立ちまじり、例の人ざまにて經給はむは、類ひ少く心憂からむなどおぼし續くるに、いふかひもなく、この世には聊思ひ慰む方なくて過ぎぬべき身どもなめりと、心ぼそくおぼす。宮は立ちかへり、例のやうに忍びてと出で立ち給ひけるを、「内にかゝる御忍びごとにより山里の御ありきもゆくりかにおぼし立つなりけり。かるがるしき御有樣と、世人も志たに譏り申すなり」と衛門督の漏し申し給ひければ、中宮も聞しめし歎き、うへもいとゞゆるさぬ御氣色にて、大方心に任せ給へる御里住みのあしきなりけりときびしき事ども出で來て、内につと侍らはせ奉り給ふ。左の大臣殿の六の君をうけひかずおぼしたることなれど、おしたちて參らせ給ふべく皆定めらる。中納言殿聞き給ひてあいなく物を思ひありき給ふ。我があまりことやうなるぞや、さるべき契やありけむ、みこのうしろめたしとおぼしたりしさまもあはれに忘れがたく、この君達の御有樣けはひもことなる事なくて、世に衰へ給はむことの惜しくもおぼゆるあまりに、人々しうもてなさばやとあやしきまでもてあつかはるゝに、宮もあやにくにとりもちてせめ給ひしかば、我が思ふかたはことなるにゆづらるゝ有樣もあいなくて、かくもてなしてしを思へばくやしくもありけるかな、いづれも我が物にて見奉らむに咎むべき人もなしかし、取り返すものならねどをこがましう心ひとつに思ひ亂れ給ふ。宮はまして御心にかゝらぬをりなく戀しううしろめたし

とおぼす。「御心につきておぼす人あらばこゝにまゐらせて、例ざまにのどやかにもてなし給へ。すぢことに思ひ聞えたまへるに、かるびたるやうに人の聞ゆべかめるも、いとなむ口惜しき」と大宮は明暮聞え給ふ。時雨いたくしてのどやかなる日、女一宮の御方に參り給へれば、お前に人多くもさぶらはず、しめやかに御繪など御覽ずる程なり。御几帳ばかり隔てゝ、御物語聞え給ふ。限もなくあてにけだかきものから、なよびかにをかしき御けはひを、年ごろ二つなきものに思ひ聞え給ひて、又この有樣になずらふ人世にありなむや、冷泉院の姫君ばかりこそ、御おぼえの程内々の御けはひも心にくゝ聞ゆれど、うちいでむ方もなくおぼしわたるに、かの山里人は、らうたげにあてなる方の劣り聞ゆまじきぞかしなどまづ思ひ出づるに、いとゞ戀しさまさるなぐさめに御繪どものあまたちりたるを見給へば、をかしげなる女繪どもの、戀する男のすまひなどかきまぜ、山里のをかしき家居など心々に世の有樣書きたるを、よそへらるゝこと多くて御目とまり給へば、少し聞え給ひて、かしこへ奉らむとおぼす。在五が物語を書きて、妹にきん敎へたる所の、人のむすばむといひたるを見て、いかゞおぼすらむ、少し近く參りより給ひて、「いにしへの人もさるべき程は隔なくこそならはして侍りけれ。いとうとうとしうのみもてなさせ給ふこそ」と忍びて聞え給へば、いかなる繪にかとおぼすに、おしまきよせてお前にさし入れ給へるを、うつぶして御覽ずるみぐしのうち靡きてこぼれ出でたるかたそばばかりほのかに見奉り給ふが、飽かずめでたく、少し物のへだてたる人と思ひ聞えましかばとおぼすに、忍びがたくて、

「若草のねみむものとは思はねどむすぼゝれたるこゝちこそすれ」。お前なりつる人々は、この宮をば殊にはぢ聞えて物のうしろにかくれたり。ことしもこそあれ、うたて怪しとおぼせば、物ものたまはず。ことわりにてうらなくものをといひたる姫君も、ざれてにくゝおぼさる。紫のうへのとりわきてこの二所をばならはし聞え給ひしかば、あまたの御中に隔なく思ひかはし聞え給へり。世になくかしづき聞え給ひて、さぶらふ人々もかたほに少しあかぬ所あるははしたなげなり。やんごとなき人の御むすめなどもいと多かり。御心のうつろひやすきは、珍しき人々にはかなく語らひつきなど志給ひつゝ、かのわたりをおぼし忘るゝ折なきものから、音づれ給はで日ごろ經ぬ。待ち聞え給ふ所は、絶間遠き心ちして、猶からなめりと心ぼそうながめ給ふに、中納言おはしたり。なやましげに志給ふと聞きて、御とぶらひなりけり。いと心ち惑ふばかりの御惱みにもあらねど、ことつけて對面し給はず。「驚きながら遙けき程を參り來つるを、猶かのなやみ給ふらむ御あたり近く」とせちに覺束ながり聞え給へばうち解けてすまひ給へる方のみすの前に入れ奉る。いとかたはらいたきわざと苦しがり給へど、けにくゝはあらで、御ぐしもたげ御いらへなど聞え給ふ。宮の御心も行かで、おはし過ぎにし有樣など語り聞え給ひて、「のどかにおぼせ。心いられしてな恨み聞え給ひそ」など教へ聞え給へば、「こゝにはともかくも聞え給はざめり。なき人の御いさめは、かゝる事にこそと見侍るばかりなむいとほしかりける」とて泣き給ふ氣色なり。「いと心苦しう、我さへ恥しき心ちして「世の中はとてもかくてもひとつざまにてすぐす事難くなむ侍るを、いか

なる事をも御覧じ知らぬ御心どもには、偏にうらめしなどおぼすこともあらむを、強ひておぼしのどめよ。うしろめたうは世にあらじとなむ思ひ侍る」など人の御上をさへ あつかふも、かつはあやしくおぼゆ。よるよるはましていと苦しげにし給ひければ、疎き人の御けはひの近きも中の君の苦しげにおぼしたれば、「猶例のあなたに」と人々聞ゆれど、「ましてかく煩ひ給ふほどの覺束なさを、思ひのまゝに參りきていだし放ち給へれば、いとわりなくなむ。かゝる折の御あつかひも誰か はかばかしく仕うまつる」など辨のおもとに語らひ給ひて、みずほふども始むべきことなどのたまふ。いと見苦しう殊更にもいとはしき身をと聞き給へど、思ひぐまなくのたまはむもうたてあれば、さすがにながらへよと思ひ給へる心ばへもあはれなり。又のあしたに、「少しもよろしく おぼさるや。昨日ばかりにてだに聞えさせむ」とあれば、「日比ふればにや、今日はいと苦しうなむ。さらばこなたに」と言ひ出し給へり。いとあはれにいかに物し給ふべきにかあらむ、ありしよりはなつかしき御氣色なるも胸つぶれておぼゆれば、近うまかでてよろづの事を聞え給ふ。「苦しうてえ聞えず、少したためらはむ程に」とて、いとかすかにあはれなるけはひを、限なう心苦しうて歎き居給へり。さすがにつれづれとかくておはしがたければ いとうしろめたけれどかへり給ふ。「かゝる御住まひは猶苦しかりけり。處去り給ふにことよせてさるべき處にうつろはし奉らむ」など聞えおきて、阿闍梨にも、御いのり心に入るべくのたまひ知らせて出で給ひぬ。この君の御供なる人の、いつしかとこゝなる若き人を語らひよりたるありけり。おのがじゝの物語に、「かの宮の

御忍びありき制せられ給ひて、内にのみ籠りおはしますこと、左の大臣殿の姫君をなむあはせ奉り給ふべかなるを、女方は年比の御ほいなれば、おぼし滯ることなくて、年の内にありぬべかなり。宮はしぶしぶにおぼして、うちわたりにもたゞすきがましき事に御心を入れて、みかどきさいの御いましめにしづまり給ふべくもあらざめり。我が殿こそ猶あやしう人に似給はず、あまりまめにおはしまして、人にはもてなやまれ給へ。こゝにかく渡り給ふのみなむ、めもあやにおぼろけならぬことゝ人申す」などかたりけるを「さこそいひつれ」など人々の中にて語るを聞き給ふにも、いとゞ胸ふたがりて、今はかぎりにこそあなれ、やんごとなき方に定まり給はぬほどの、なほざりの御すさびにかくまでおぼしけむを、さすがに中納言などの思はむ所をおぼして、言の葉のかぎり深きなりけりと思ひなし給ふに、ともかくも人の御つらさは思ひ知られず、いとゞ身の置所なき心地して、しをれふし給へり。よわき御心ちは、いとゞ世に立ちとまるべうもおぼえず、恥しげなる人々にはあらねど、思ふらむところ苦しければ聞かぬやうにてね給へるを、姫君、物思ふ時のわざと聞きしうたゝねの御さまの、いとらうたげにて、かひなを枕にてね給へるに、御ぐしのたまりたる程など、ありがたう美くしげなるを見やりつゝ、親の諫めし言の葉も、返す返す思ひ出でられ給ひて悲しければ、罪深くなる底にはよもしづみ給はじ、いづくにもいづくにもおはすらむ方にむかへ給ひてよ、かういみじく物思ふ身どもをうちすて給ひて、夢にだに見え給はぬよと思ひ續け給ふ。夕暮の空の氣色いとすごくしぐれて、木の下吹きはらふ風の音などたとへむかたなく、きしかた

行くさき思ひ續けられてそひふし給へるさま、あてにかぎりなく見え給ふ。白き御ぞに、髮はけづることも志給はで程經ぬれど迷ふすぢなくうちやられて、日ごろに少し青み給へるしもなまめかしさまさりて、ながめ出し給へるまみひたひつきのほども、見知らむ人に見せまほし。ひるねの君風のいと荒きに驚かされて起きあがり給へり。山吹薄色など花やかなる色あひに、御顏は殊更にそめにほはしたらむやうに、いとをかしうはなばなとして聊物思ふべきさまも志給へらず。「故宮の夢に見え給へる、いと物おぼしたるけしきにて、このわたりにこそほのめき給へれ」と語り給へれば、いとゞしく悲しさそひて、「うせ給ひて後、いかで夢にも見奉らむと思ふを、更にこそ見奉らね」とて二所ながらいみじう泣き給ふ。このごろ明暮思ひ出で奉れば、ほのめきもやおはすらむ、いかでおはすらむ處に尋ね參らむ、罪深げなる身どもにてと、後の世をさへ思ひやり給ふ。人の國にありけむ香の煙ぞいとえまほしくおぼさるゝ。いと暗うなるほどに、宮より御使あり。をりは少し物思ひ慰みぬべし。御方はとみにも見給はず。「猶心うつくしくおいらかなるさまに聞え給へ。かうてはかなうもなり侍りなば、これより名殘なき方にもてなし聞ゆる人もや出でこむとうしろめたきを、まれにもこの人の思ひ出で聞え給はむに、さやうなるあるまじき心つかふ人はえあらじと思へば、つらきながらなむ頼まれ侍る」と聞え給へば、「おくらさむとおぼしけるこそいみじう侍れ」と、いよいよ顏を引き入れ給ふ。「限あれば片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけりと思ひ侍るぞや。明日知らぬ世の さすがになげかしきも、誰がために惜しき 命にか

は」とておほとなぶら參らせて見給ふ。例のこまやかに書き給ひて、

「ながむるは同じ雲井をいかなればおぼつかなさをそふる時雨ぞ」。かく袖ひづるなどいふこともやありけむ。耳なれにたるを、猶あらじことゝ見るにつけてもうらめしさまさり給ふ。さばかり世にありがたき御ありさまかたちを、いとゞいかで人にめでられむと、好しくえんにもてなし給へれば、若き人の心よせ奉り給はむもことわりなり。程經るにつけても戀しう、さばかり所せきまで契り置き給ひしを、さりともいとかくては止まじと思ひ直す心ぞ常にそひける。「御かへり今夜參りなむ」と聞ゆれば、これかれそゝのかし聞ゆれば、たゞひとことなむ。

「あられふる深山のさとは朝夕にながむる空もかきくらしつゝ」。かくいふは神無月のつごもりなりけり。月もへだゝりぬるよと宮はしづ心なくおぼされて、今夜今夜とおぼしつゝ、さはりおほみなる程に、五節など疾く出できたる年にて、うちわたり今めかしくまぎれがちにて、わざともなけれどすぐい給ふ程に、あさましう待ちどほなり。はかなう人を見給ふにつけても、さるは御心にはなるゝ折なし。左の大臣殿のわたりの事、大宮も猶「さるのどやかなる御うしろみをまうけ給ひて、その外の尋ねまほしうおぼさるゝ人あらば參らせておもおもしくもてなし給へ」と聞え給へど、「暫しさ思う給ふるやう」など聞えすまひ給ひて、誠につらきめはいかでか見せむなどおぼす御心を知り給はねば、月日にそへて物をのみおぼす。中納言も、見しほどよりはかろびたる御心かな、さりともと思ひ聞えけるもいとほ

じく心からおぼえつゝ、をさをさ參り給はず、山里にはいかにいかにとゝぶらひ聞え給ふ。この月となりては、少しよろしうおはすと聞き給ひけるに、おほやけわたくし物さわがしきころにて、五六日人も奉り給はぬに、いかならむと打ち驚かれて、わりなきことの繁さをうち捨てゝまうで給ふ。ずほふは怠りはて給ふまでとのたまひ置きけるを、よろしくなりにけるとて、阿闍梨をも返し給ひければ、いと人ずくなにて、例のおい人出できて御ありさま聞ゆ。「そこはかといたき處もなく、おどろおどろしからぬ御惱みに物をなむ更に聞し召さぬ。もとより人に似給はず、あえかにおはしますうちに、この宮の御事出で來にし後、いとゞ物おぼしたるさまにて、はかなき御くだものだに御覽じいれざりしつもりにや、あさましく弱くなり給ひて更に頼むべくも見え給はず、世に心憂く侍りける身の命の長さにて、かゝる事を見奉れば、まづいかで先だち聞えなむと、思ふ給へいりて侍り」といひもやらず泣くさまことわりなり。「などか斯とも告げ給はざりける。院にも内にもあさましう事繁きころにて、日ごろもえ聞えざりつる覺束なさ」とてありし方に入り給ふ。御枕がみ近くて物聞え給へど、御聲もなきやうにてえいらへ給はず。「かく重くなり給ふまで、誰も誰も告げ給はざりけるがつらう思ふに、かひなき事」と恨みて、例の阿闍梨、大方世に志るしありと聞ゆる人のかぎり、あまたさうじ給ふ。御修法どきやう明くる日より始めさせ給はむとて、とのひとあまた參り集ひ、かみしもの人立ち騷ぎたれば心ぼそさの名殘なくたのもしげなり。暮れぬれば、例のあなたにと聞えて、御湯づけなど參らせむとすれど、近くてだに見奉らむとて、南の

廂は僧の座なれば、東おもての今少しけ近き方に屛風など立てさせて入り居給ふ。中の君苦しとおぼしたれど、この御中を猶もてはなれ給はぬなりけりと皆思ひて、疎くもてなし隔て奉らず。そやよりはじめて、法華經を不斷讀ませ給ふ。聲たふときかぎり十二人していとたふとし。火はこなたの南のまにともして内はくらきに、几帳をひきあげて少しすべり入りて見奉り給へば、おい人ども二三人ぞさぶらふ。中の君はふと隱れ給ひぬれば、いと人ずくなに心ぼそくてふし給へるを、「などか御聲をだに聞かせ給はぬ」とて、御手をとらへて驚かし聞え給へば「心地にはおぼえながら物いふがいと苦しくてなむ。日ごろ音づれ給はざりつれば、覺束なくて過ぎ侍りぬべきにやと口惜しうこそ侍りつれ」と息のしたにのたまふ。かくまたれ奉りつる程まで、參りこざりけることとて、さくりもよゝとなき給ふ。御ぐしなど少しあつくぞおはしける。「何の罪なる御心ちにか、人の歎きおふこそかくはあなれ」と御耳にさしあてゝ物をおほく聞え給へば、うるさうも恥しうもおぼえて、顏をふたぎ給へり。いとゞなよなよとあえかにて臥し給へるを、空しう見なしていかなる心ちせむと胸もひしけておぼゆ。「日ごろ見奉り給へらむ御心地も、安からずおぼされつらむ。今夜だに心安くうちやすませ給へ。とのゐ人さぶらふべし」と聞え給へば、うしろめたけれど、さるやうこそはとおぼして、少ししぞき給へり。ひたおもてにはあらねどはひよりつゝ見奉り給へば、いと苦しく恥しけれど、かゝるべき契こそありけめとおぼして、こよなうのどやかにうしろやすき御心を、かの片つかたの人に見くらべ奉り給へばあはれとも思ひ知られにたり。空しくなりな

む後の思ひ出にも、心ではく思ひぐまなからじとつゝみ給ひて、はしたなくもえおし放ち給はず。夜もすがら人をそゝのかして、御湯など參らせ奉り給へど、露ばかりまゐる氣色もなし。いみじのわざや、いかにしてかはかけとゞむべきと、言はむ方なく思ひ居給へり。不斷經の曉がたの、居かはりたる聲のいとたふときに、阿闍梨もよゐにさぶらひてねぶりたる、うち驚きて陀羅尼よむ。おいかれにたれどいとくうづきてたのもしう聞ゆ。「いかゞ今夜はおはしましつらむ」など聞ゆるついでに故宮の御事など聞え出でゝ、鼻ゐばしばうちかみて「いかなる所におはしますらむ。さりとも涼しき方にぞと思ひやり奉るを、さいつころの夢になむ見えおはしましゝ。俗の御かたちにて、世の中を深う厭ひ離れしかば心とまることなかりしを、聊うち思ひしことに亂れてなむ。唯ゐばしねがひの處を隔たれるを思ふなむいとくやしき。すゝむるわざせよといとさだかに仰せられしを、たちまちに仕うまつるべきことのおぼえ侍らねば、堪へたるにゐたがひておこなひゐ侍る。法師ばら五六人して、なにがしの念佛なむ仕うまつらせ侍る。さては思ひ給へえたること侍りて常不經をなむつかせ侍る」など申すに君もいみじう泣き給ふ。かの世にさへ妨げ聞ゆらむ罪の程を、苦しき心地にもいとゞ消え入りぬばかりおぼえ給ふ。いかでかのまだ定まり給はざらむ先にまうでゝ同じ所にもと聞きふし給へり。阿闍梨はとずくなにて立ちぬ。この常不經そのわたりの里々京までありきけるを、曉の嵐にわびて阿闍梨のさぶらふあたりを尋ねて、中門のもとに居て、いとたふとくつく、ゑかうの末つ方の心ばへいとあはれなり。まらうどもこなたに進みたる御心

にて、あはれ忍ばれ給はず、中の君せちにおぼつかなくて奥の方なる几帳のうしろにより給へるけはひを聞き給ひて、あざやかに居なほり給ひて「不經の聲はいかゞ聞かせ給ひつらむ。おもおもしき道には行はぬことなれど、たふとくこそはべりけれ」とて、

「志もさゆる汀の千鳥うちわびてなく音悲しきあさぼらけかな」とことばのやうに聞え給ふ。つれなき人の御けはひにもかよひて、思ひよそへらるれど、いらへにくゝて、辨してぞ聞え給ふ。

「あかつきの霜うちはらひなく千鳥物思ふ人のこゝろをやしる」。似つかはしからぬ御かはりなれどゆゑなからず聞えなす。かやうのはかなしごともつゝましげなるものから、なつかしうかひあるさまに取りなし給ふものを、今はとて別れなばいかなる心地せむと思ひ惑ひ給ふ。宮の夢に見え給ひけむさまおぼし合するに、かう心苦しき御有樣どもをあまがけりてもいかに見給ふらむと推しはかられて、おはしましゝ御寺にも御誦經せさせ給ふ。所々に御いのりの使出したてさせ給ふ。公にも私にも、御暇のよし申し給ひて、祭、祓よろづにいたらぬことなく志給へど、物の罪めきたる御病にもあらざりければ何の志るしも見えず。みづからもたひらかにあらむと佛をも念じ給はゞこそあらめ、猶かゝるついでにいかでうせなむ、この君のかくそひゐて殘なくなりぬるを、今はもてはなれむかたなし、さりとてかうおろかならず見ゆめる心ばへの、見おとりして、我も人も見えむが、心安からずうかるべきこと、もし命志ひてとまらば、病にことつけてかたちをもかへてむ、さてのみこそ長き心をも

かたみに見はつべきわざなれと思ひ志み給ひて、とあるにてもかゝるにても、いかでこの思ふこととしてむとおぼすを、さまでさかしき事はえうち出で給はで中の君に「心地のいよいよたのもしげなくおぼゆるを、いむこととなむいと志るしありて、命のぶる事と聞きしを、さやうに阿闍梨にのたまへ」と聞え給へば、皆泣きさわぎて、いとあるまじき御ことなり、かくばかりおぼし惑ふめる中納言殿もいかゞあへなきやうに思ひ聞え給はむと似げなき事に思ひて、たのもし人にも申しつがねば、口惜しうおぼす。かく籠り居給へれば、聞きつぎつゝ御とぶらひにふりはへ物し給ふ人もあり。おろかにおぼされぬことゝ見奉れば、殿人志たしきけいしなどは、おのおのよろづの御いのりをせさせ歎ききこゆ。とよのあかりは今日ぞかしと京思ひやり給ふ。風いたう吹きて雪の降るさまあわたゞしう荒れ惑ふ。みやこにはいとかうしもあらじかしと、人やりならず心ぼそうて、疎くて止みぬべきにやと思ふちぎりはつらけれど、恨むべうもあらず。なつかしうらうたげなる御もてなしを、唯志ばしにても、例になして思ひつる事ども語らはゞやと思ひ續けてながめ給ふ。光もなくて暮れはてぬ。

「かきくもり日かげも見えぬ奥山に心をくらすころにもあるかな」。たゞかくておはするをたのみに皆思ひ聞えたり。例の近き方に居給へるに、御几帳などを風のあらはに吹きなせば、中の君奥に入り給ふ。見苦しげなる人々も、かゞやきかくれぬる程に、いと近うよりて、「いかゞおぼさるゝ。心地に思ひ殘すことなく念じ聞ゆるかひなく、御聲をだに聞かずなりにたればいとこそ侘しけれ。おくらかし給はゞいみじうつらからむ」となくなく聞え給ふ。

物おぼえずなりにたるさまなれど、顔をばいとよくかくし給へり。「よろしきひまあらば、聞えまほしき事も侍れど、たゞ消え入るやうにのみなりゆくは口惜しきわざにこそ」といとあはれと思ひ給へるけしきなるに、いよいよせきとゞめ難くて、ゆゝしうかく心ぼそげに思ふとは見えじとつゝみ給へど、聲もをしまれず。いかなるちぎりにて限なく思ひ聞えながらつらき事多くて別れ奉るべきにか、少し憂きさまをだに見せ給はゞなむ思ひさますふしにもせむとまもれど、いよいよあはれげにあたらしくをかしき御有樣のみ見ゆ。かひななどもいと細うなりてかげのやうに弱げなるものから、色あひ變らず白う美くしげになよなよとして、白き御ぞどものなよびかなるに、ふすまを押しやりて、中に身もなきひゝなをふせたらむ心地して、御ぐしはいとこちたうもあらぬほどにうちやられたる、枕より落ちたるきはのつやつやとめでたうをかしげなるも、いかになり給ひなむとするぞと、あるべきものにもあらざめりと見るが惜しき事たぐひなし。こゝら久しくなやみてひきもつくろはぬけはひの、心とけず恥しげに、限なうもてなしさまよふ人にもおほうまさりてこまかに見るまゝに、たましひもしづまらむ方なし。「つひにうち捨て給ひては世にしばしもとまるべきにもあらず。命若しかぎりありてとまるべうとも深き山にさすらへなむとす。唯いと心苦しうて、とまり給はむ御事をなむ思ひ聞ゆる」と、いらへさせ奉らむとてかの御事をかけ給へば、顔かくし給ふ御袖を少し引きなほして「かくはかなかりけるものを、思ひぐまなきやうにおぼされたりつるもかひなければ、このとまり給はむ人を、同じ事と思ひ聞え給へとほのめかし

聞えしに、違へ給はざらましかば、うしろ安からましとこれのみなむうらめしきふしにて、とまりぬべくおぼえ侍る」とのたまへば、「かくいみじう物思ふべき身にやありけむ。いかにもいかにもことざまに、この世を思ひかゝづらふ方の侍らざりつれば、御おもむけに隨ひ聞えずなりにし。今なむくやしう心苦しうもおぼゆる。されども後めたくな思ひ聞え給ひそ」などこしらへて、いと苦しげにしたまへば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さまざまにげんあるかぎりして加持參らせ給ふ。我も佛を念ぜさせ給ふことかぎりなし。世の中を殊更に厭ひ離れねど、すゝめ給ふ佛などのいとかくいみじきものは思はせ給ふにやあらむ。見るまゝに物の枯れ行くやうにて消えはて給ひぬるはいみじきわざかな。引きとゞむべき方なく、あしずりもしつべく、人のかたくなしと見むこともおぼえず。かぎりと見奉り給ひて、中の君の後れじと思ひ惑ひ給へるさまもことわりなり。あるにもあらず見え給ふを、例のさかしき女ばら、今はいとゆゝしきことゝ引きさけ奉る。中納言の君は、さりともいかゞかゝる事あらじ、夢かとおぼして、おほとなぶらを近うかゝげて見奉り給ふに、隱し給ふ顏も、唯寢給へるやうにて變り給へる所もなくうつくしげにてうち臥し給へるを、かくながらむかしからのやうにても見るわざならましかばと、思ひ惑はる。今はのことゞもするに、御ぐしをかきやるに、さとうちにほひたる、たゞありしながらのにほひに、なつかしうかうばしきもありがたう、何事にてこの人を少しもなのめなりしと思ひさまさむ、誠に世の中を思ひ捨てはつるしるべならば、恐しげにうきことの悲しさも、さめぬべきふしをだに見つけさせ給へと佛

を念じ給へど、いとゞ思ひのどめむ方なくのみあれば、いふかひなくて、ひたぶるに煙にだになしはてゝ、むとおもほして、とかく例の作法どもするぞあさましかりける。空を歩むやうにたゞよひつゝ、限のありさまさへはかなげにて、煙も多くむすぼゝれ給はずなりぬるもあへなしとあきれてかへり給ひぬ。御いみに籠れる人かず多くて、心ぼそさは少し紛れぬべけれど、中の君は人の見思ふらむことも恥しき身の心うさを思ひ沈み給ひて、又なき人に見え給ふ。宮よりも御とぶらひいと繁く奉れ給ふ。思はずにつらしと思ひ聞え給へりしけしきもおぼしなほらで止みぬるをおぼすに、いと憂き人の御ゆかりなり。中納言、かく世のいと心憂く覺ゆるついでにほい遂げむとおぼさるれど、三條の宮のおぼさむ事にはゞかり、この君の御事の心苦しさとに思ひみだれて、かののたまひしやうにて、かたみにも見るべかりけるものを、志たの心は身を分け給へりとも、うつろふべくはおぼえざりしを、かう物思はせ奉るよりは唯うち語らひて、盡きせぬなぐさめにも見奉り通はましものをなどおぼす。かりそめに京にも出で給はず、かき絶え慰む方なくて籠りおはするを、世の人もおろかならず思ひ給へることゝ見聞きて、うちよりはじめ奉りて、御とぶらひ多かり。はかなくて日ごろは過ぎ行く。七日々々の事どもいとたふとくせさせ給ひつゝ、おろかならずけうじ給へど、かぎりあれば、御ぞの色のかはらぬを、かの御方の心よせわきたりし人々の、いとくろう着かへたるをほの見給ふも、

「くれなゐにおつる涙もかひなきはかたみの色をそめぬなりけり」。ゆるし色のこほりと

けぬると見ゆるを、いとゞぬらしそへつゝながめ給ふさま、いとなまめかしう淸げなり。人々のぞきつゝ見奉りて、「いふかひなき御事をばさるものにて、この殿のかく見習ひ奉りて、今はとよそに思ひ聞えむこそあたらしう口惜しけれ。思の外なる御すくせにもおはしけるかな。かく深き御心の程を、かたかたに背かせ給へるよ」と泣きあへり。「この御方には、昔の御かたみに今は何事も聞え承らむとなむ思ひ給ふる。うとうとしくおぼし隔つな」と聞え給へど、萬の事うき身なりけりと物のみつゝましくて、まだ對面して物など聞え給はず。この君はけざやかなる方に今少しこめき、け高くおはするものから、なつかしうにほひある心ざまぞ劣り給へりけると、事にふれておぼゆ。雪のかきくらし降る日、ひねもすにながめくらして、世の人のすさまじきことにいふなる、しはすの月夜の曇りなくさしいでたるを、すだれ卷きあげて見給へば、向ひの寺の鐘の聲、枕をそばだてゝ、今日も暮れぬとかすかなるを聞きて、

「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」。風のいとはげしければ蔀おろさせ給ふに、四方の山の鏡と見ゆる汀の氷、月かげにいとおもしろし。京の家のかぎりなくとみがくも、えかうはあらぬはやとおぼゆ。僅にいき出でゝものし給はましかば諸共に聞えましと思ひつゞくるぞ、胸よりあまる心ちする。

「戀ひわびてしぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡をけなまし」。なかばなる偈敎へむ鬼もがな、ことつけて身もなげむとおぼすぞ心ぎたなきひじり心なりける。人々近う呼びい

て給ひて御物語などせさせ給ふけはひなどのいとあらまほしう、のどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心にしめてめでたしと思ひ奉る。老いたるは口惜しういみじき事をいとゞ思ふ。「御心地の重くならせ給ひしことも、唯この宮の御事を思はずに見奉り給ひて、人わらへにいみじとおぼすめりしを、さすがにかの御かたには、かく思ふとしられ奉らじと唯御心ひとつに世を恨み給ふめりしほどに、はかなき御くだものをも聞しめしいれず、たゞよわりになむ弱らせ給ふめりし。うはべにはなにばかりことごとしく物深げにももてなさせ給はで、したの御心のかぎりなく、何事もおぼすめりしに、故宮の御いましめにさへ違ひぬることに、あいなう人の御うへをおぼし惱みそめしなり」と聞えて、折々にのたまひしことなど語りいでつゝ、誰も誰も泣き惑ふこと盡せず。我が心から、あぢきなきことを思はせ奉りけむことゝとりかへさまほしく、なべての世もつらきに、念誦をいとあはれにし給ひて、まどろむ程なくあかし給ふに、まだ夜深き程の雲のけはひいと寒げなるに、人々聲あまたして、馬のおときこゆ。何人かは、かゝるさ夜中にゆきをわくべきと、大とこたちも驚き思へるに、宮かりの御ぞにいたうやつれて、ぬれぬれ入り給ふなりけり。うちたゝき給ふさま、さなゝりと聞き給ひて、中納言はかくろへたる方に入り給ひて忍びておはす。御いみは日數殘りたりけれど、心もとなくおぼしわびて、夜一夜ゆきに惑はされてぞおはしましける。日ごろのつらさも紛れぬべき程なれど對面し給ふべき心ちもせず。おぼし歎きたるさまの恥しかりしを、やがて見なほされ給はずなりにしも、今より後の御心あらたまらむはかひなかるべく思

ひしみて物し給へれば、誰も誰もいみじうことわりを聞えしらせつゝ、物ごしにてぞ日ごろのをこたり盡せずのたまふをつくつくと聞き居給へる。れこもいとあるかなきかにて、後れ給ふまじきにやと聞ゆる御けはひの心苦しさを、後めたういみじと宮もおぼしたり。今日は御身を捨てゝとまり給ひぬ。物ごしならでといたくわび給へど、「今少し物おぼゆる程にて侍らば」とのみ聞え給ひてつれなきを、中納言も氣色聞き給ひて、さるべき人めし出でゝ、「御有樣にたがひて心淺きやうなる御もてなしの、昔も今も心うかりける月ごろの罪は、さも思ひ聞え給ひぬべきことなれど、にくからぬさまにこそかうがへ奉り給はめ。かやうなる事まだ見知らぬ御心にて苦しうおぼすらむ」など、忍びてさかしがり給へば、いよいよこの君の御心も恥しうて、え聞え給はず。「あさましう心憂くおはしけり。聞えしさまをもむげに忘れ給ひけること」とおろかならず歎きくらし給へり。よるの氣色いとゞ烈しき風の音に、人やりならず歎きふし給へるもさすがにて、例の物へだてゝ聞え給ふ。ちゞのやしろをひきかけて、行くさき長きことを契り聞え給ふも、いかでかくくちなれ給ひけむと心憂けれど、よそにてつれなき程の疎ましさより、あはれに人の心もたをやぎぬべき御さまを、ひとかたにもえうとみはつまじかりけりと、唯つくづくと聞き給ひて、

「きしかたを思ひいづるもはかなきを 行く末かけてなにたのむらむ」とほのかにのたまふ。なかなかいぶせう心もとなし。

「行く末をみじかきものと思ひなば めのまへにだにそむかざらなむ。何事もいとかうみ

るほどなき世を、罪深くなおぼしないそ」とよろづにこしらへ給へど、「心地もなやましくなむ」とて、入り給ひにけり。人の見るらむもいと人わろくて歎きあかし給ふ。恨みむもことわりなるほどなれど、あまりに人にくゝもとつらき涙のおつれば、ましていかに思ひつらむと、さまざまあはれにおぼししらる。中納言のあるじがたに住みなれて、人々安らかによびつかひ人もあまたして、物参らせなどし給ふを、あはれにもをかしうも御覽ず。いといたう痩せ青みほれぼれしきまで物を思ひたれば、心苦しと見給ひて、まめやかにとぶらひ給ふ。ありしさまなどかひなきことなれどこの宮にこそは聞えめと思へど、うち出でむにつけてもいと心よわくかたくなしく見え奉らむにはゞかりてことずくなゝり。ねをのみ泣きて日數經にければ顏がはりのしたるも、見苦しくはあらでいよいよ物淸げになまめいたるを、女ならば必ず心うつりなむと、おのがけしからぬ御心ならひにおぼしよるもなまうしろめたかりければ、いかで人のそしりをもうらみをもはぶきて、京にうつろはしてむとおぼす。かくつれなきものからうちわたりにも聞し召して、いとあしかるべきにおぼしわびて、今日はかへらせ給ひぬ。おろかならず言の葉をつくし給へど、つれなきは苦しきものをとひとふしを思ししらせまほしくて心とけずなりぬ。年のくれがたにはかゝらぬ所だに、空の氣色例には似ぬを、荒れぬ日なく降り積む雪にうち眺めつゝ明し暮し給ふ心地、つきせず夢のやうなり。御わざもいかめしうせさせ給ふ。宮よりも御誦經などこちたきまでとぶらひ聞え給ふ。かくてのみやは新しき年さへなげきすぐさむ、こゝかしこにも覺束なくて、閉ぢ籠り給へる

ことを聞え給へば、今はとてかへり給はむ心ちもたとへむかたなし。かくおはしならひて、人しげかりつる名殘なくならむを、思ひわぶる人々、いみじかりし折のさしあたりて悲しかりしさわぎよりも、うちしづまりていみじくおぼゆ。時々をりふしをかしやかなる程に聞えかはし給ひし年ごろよりも、かくのどやかにて過ぐし給へる日ごろの御ありさまけはひのなつかしく、なさけぶかうはかなきことにもまめなるかたにも、思ひやり多かる御心ばへを、今は限に見奉りさしつることゝおぼゝれあへり。かの宮よりは、「猶かう參りくることもいと難きを思ひわびて、近うわたい奉るべきことをなむ、たばかり出でたる」と聞え給へり。きさいの宮聞しめしつけて、中納言もかくおろかならず思ひほれてゐたなるは、げにおしなべて思ひがたうこそは誰もおぼさるらめと心苦しがり給ひて、二條院の西の對にわたい給ひて、時々も通ひ給ふべく忍びて聞え給ひければ、女一宮の御方にことよせて、おぼしなるにやとおぼしながら、覺束なかるまじきは嬉しくてのたまふなりけり。さななりと中納言も聞え給うて、三條の宮つくりはてゝ、渡い奉らむことを思ひしものを、かの御かはりになずらへても、見るべかりけるをなど、ひきかへし心ぼそし。宮のおぼしよるめりしすぢはいと似げなきことに思ひはなれて、大かたの御うしろみは我ならでは又誰かはとおぼすとや。

早蕨

やぶしわかねば、春の光を見給ふにつけても、いかでかくながらへにけむ月日ならむと夢のやうにのみおぼえ給ふ。行きかふ時々に隨ひ花鳥の色をもねをも同じ心におきふし見つゝ、はかなきことをももとする末をとりていひかはし、心ぼそき世のうさもつらさもうち語らひ合せ聞えしにこそ慰む方もありしか、をかしきことあはれなるふしをも、聞き知る人もなきまゝに、よろづかきくらし、心ひとつを碎きて、宮のおはしまさずなりにし悲しさよりも、やゝうちまさりて戀しく侘しきに、いかにせむと明け暮るゝも知らず惑はれ給へど、世にとまるべきほどは限あるわざなりければ、ゑなれぬもあさまし。阿闍梨のもとより、「年あらたまりては何事かおはしますらむ。御いのりはたゆみなく仕うまつり侍り。今はひと所の御ことをなむやすからず念じ聞えさする」など聞えてわらびつくづくしをかしきこに入れて、「これはわらはべの供養じて侍る初穗なり」とて奉れり。手はいとあしうて、歌はわざとがましくひき放ちてぞ書きたる。

「君にとてあまたの春をつみしかば常をわすれぬはつわらびなり。御前によみ申さしめ給へ」とあり。大事と思ひまはして詠み出しつらむとおぼせば、歌の心ばへもいとあはれにて、なほざりにさしもおぼされぬなめりと見ゆる言の葉を、めでたく好ましげに書き盡し給

へる人の御文よりは、ことなくめとまりて涙もこぼるれば、返事かゝせ給ふ。

「この春はたれにか見せむなき人のかたみにつめる峰のさわらび」。使に祿とらせさせ給ふ。いと盛ににほひ多くおはする人のさまざまの御物思ひに少しうちおも痩せ給へるしも、いとあてになまめかしき氣色まさりてむかし人にもおぼえ給へり。並び給へりし折はとりどりにて更に似給へりとも見えざりしを、うち忘れては ふとそれかとおぼゆるまで通ひ給へるを、中納言殿の、からをだに留めて見奉るものならましかばと、朝夕に戀ひ聞え給ふめるに、同じくは見え奉り給ふ御すくせならざりけむよと、見奉る人々は口惜しがる。かの御あたりの人の通ひくるたよりに、御有樣は絶えず聞きかはし給ひけり。讒せずおぼゝれ給ひて新しき年ともいはず、いやめになむなり給へると聞き給ひても げにうちつけの心淺さには物し給はざりけりと、いとゞ今ぞ哀も深く思ひ知らるゝ。宮はおはしますことのいと所せくありがたければ、京にわたし聞えむとおぼし立ちにたり。內宴など物騒しき頃すぐして、中納言の君、心に餘ることをも又誰にかは語らはむとおぼし侘びて兵部卿の宮の御方に參り給へり。しめやかなる夕暮なれば宮うちながめ給ひて端近くぞおはしましける。箏の御琴搔きならしつゝ、例の御心よせなる梅の香をめでおはする。しづえを押し折りて參り給へるにほひのいとえんにめでたきを、折をかしうおぼして、

「折る人の心にかよふ花なれやいろには出でずしたににほへる」とのたまへば、

「見る人にかごとよせける花のえを心してこそ折るべかりけれ。わづらはしく」と戯ぶれ

交し給へり。いとよき御あはひなり。こまやかなる御物語どもになりては、かの山里の御ことをぞまづはいかにと宮は聞え給ふ。中納言も過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬよし、折々につけてあはれにもをかしうも泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞え出で給ふに、ましてさばかり色めかしう涙もろなる御くせは、人の御上にてさへ袖もしぼるばかりになりて、かひがひしくぞあひしらひ聞え給ふめる。空の氣色もはた、げにぞあはれ知りがほに霞みわたれる。よるになりて烈しう吹き出づる風の氣色まだ冬めきていと寒げに、おほとなぶらも消えつゝ、闇はあやなきたとたどしさなれど、かたみにきゝさし給ふべくもあらず、盡せぬ御物語を、えはるけやり給はて、夜もいたう更けぬ。世にためしありがたかりける中のむつびを、いでさりともいとさのみはあらざりけむと殘りありげに問ひなし給ふぞわりなき御心ならひなめるかし。さりながらも物に心え給ひて、歎かしき心のうちもあきらむばかり、かつはなぐさめ、又あはれをもさまし、さまざまに語らひ給ふ御さまのをかしきにすかされ奉りて、げに心に餘るまで思ひむすぼゝるゝことども、少しづゝ語り聞え給ふぞこよなく胸のひまあく心ちし給ふ。宮もかの人近く渡し聞えてむとする程の事ども語らひ聞え給ふを、「いと嬉しきことにも侍るかな。あいなくみづからのあやまちとなむ思ひ給へらるゝ。飽かぬむかしの名殘をまた尋ぬべきかたも侍らねば、大方には何事につけても心よせ聞ゆべき人となむ思ひ給ふるを、もしびんなくやおぼし召さるべき」とて、かのこと人となし思ひわきそと譲り給ひし心おきてをも、少しは語り聞え給へど、い

はせの森のよぶこ鳥めいたりし世のことは殘したりけり。心のうちにはかく慰め難きかたみにも、げにさてこそかやうにあつかひ聞ゆべかりけれと悔しき事やうやうまさり行けど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はゞあるまじき心もこそ出でくれ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむと思ひはなる。さてもおはしまさむにつけても、誠に思ひうしろみ聞えむかたは又誰かはとおぼせば、御わたりの事ども心まうけせさせ給ふ。かしこにもよきわか人わらはなどもとめて人々は心ゆきがほに急ぎ思ひたれど、今はとてこのふしみをあらしはてむも いみじう心ぼそければ歎かれ給ふ事盡せぬを、さりとても又せめて心ごはく、堪へ籠りてもたけかるまじく、淺からぬ中の契も絕えはてぬべき御住ひをいかにおぼしえ給ふぞとのみ恨み聞え給ふも、少しはことわりなれば、いかゞすべからむと思ひ亂れ給へり。きさらぎのついたちごろとあれば、程近くなるまゝに花の木どものけしきばむも殘りゆかしく、峯の霞のたつを見すてむこともおのがとこよにてだにあらぬ旅寢にて、いかにはしたなく人わらはれなることもこそなど、萬につゝましく心ひとつに思ひ明し暮し給ふ。御ぶくもかぎりあることなれば脫ぎすて給ふに、みそぎも淺き心ちぞする。おやひと所は見奉らざりしかば戀しきこともおもほえず、その御かはりにも この度の衣を深く染めむと心にはおぼしのたまへど、さすがにさるべきゆゑもなきわざなれば飽かず悲しきことかぎりなし。

中納言殿より御車ごぜんの人々はかせなど、奉れ給へり。

「はかなしやかすみの衣たちしまに花のひもとくをりも來にけり」。げにいろいろいと淸

らにて奉れ給へり。御わたりの程のかづけものどもなど、ことごとしからぬものから品々こまやかにおぼしやりつゝ、いとおほかり。折につけては忘れぬさまなる御心よせのありがたく、「はらからなども、えいとかうまではおはせぬわざぞ」など人々は聞えしらす。あざやかならぬふる人どもの心には、かゝる方を心にしめて聞ゆ。若き人々は「時々も見奉りならひて、今はとことざまになり給はむをさうざうしくいかに戀しく覺えさせ給はむ」と聞えあへり。みづからは渡り給はむこと、明日とてのまだつとめておはしたり。例のまらうどゐの方におはするにつけても、今はやうやう物馴れて、我こそは人よりさきにかうやうにも思ひそめしかなど、ありしさまのたまひし心ばへを思ひ出でつゝ、さすがにかけはなれ、殊の外になどははしたなめ給はざりしを、我が心もてあやしうも隔たりにしかなと胸いたく思ひつゞけられ給ふ。かいまみせしさうじの穴も思ひ出でらるればよりて見給へど、このうちをばおろし籠めたればいとかひなし。うちにも人々思ひ出で聞えつゝうちひそみあへり。中の君はまして催さるゝ御涙の川にあすのわたりもおぼえ給はず、ほれぼれしげにて眺め臥し給へるに「月頃のつもりもそこはかとなけれどいぶせく思ひ給へらるゝを、かた端もあきらめ聞えさせて慰め侍らばや。例のはしたなく、なさし放たせ給ひそ。いとゞあらぬ世の心地し侍り」と聞え給へれば、「はしたなしと思はれ奉らむとしも思はねど、いさや心ちも例のやうにもおぼえず、かき亂りつゝいとゞはかばかしからぬひがごともやとつゝましうてなむ」と心苦しげにおぼいたれど、「いとほし」などこれかれ聞えて、中のさうじの口にて對面し給

へり。いと心はづかしげになまめきて、又この度はねびまさり給ひにけりと目も驚くまでにほひ多く、人にも似ぬ用意などあなめでたの人やとのみ見え給へるを、姫君は面影さらぬ人の御事をさへ思ひ出で聞え給ふに、いとあはれと見奉り給ふ。「つきせぬ御物語なども、今日はこといみすべくや」などいひさしつゝ、「渡らせ給ふべき所近く、この頃過ぐしてうつろひ侍るべければ、夜中曉とつきづきしき人のいひ侍るめる、何事の折にも疎からずおぼしの給はせば、世に侍らむかぎりは聞えさせうけ給はりて、すぐさまほしうなむ侍るを、いかゞはおぼし召すらむ。人の心さまざまに侍る世なればあいなくやなど、一方にもえこそ思ひ侍らね」と聞え給へば、「宿をばかれじと思ふ心深く侍るを、近くなどのたまはするにつけても、よろづに亂れ侍りて聞えさせやるべき方もなくなむ」と、所々いひけちて、いみじくものあはれと思ひ給へるけはひなど、いとようおぼえ給へるを、心からよそのものに見なしつるといとくやしく思ひ給へれど、かひなければそのよの事かけてもいはず、忘れにけるにやと見ゆるまでけざやかにもてなし給へり。御まへ近き紅梅の色も香もなつかしきに、鶯だに見すぐしがたげにうち鳴きて渡るめれば、まして春やむかしのと心を惑はし給ふどちの御物語にをりあはれなりかし。風のさと吹きいるゝに、花の香もまらうどの御にほひも、橘ならねどむかし思ひ出でらるゝつまなり。つれづれのまぎらはしにも世のうきなぐさめにも心とゞめてあそび給ひしものをなど心にあまり給へば、

「見る人もあらしにまよふ山里にむかしおぼゆる花の香ぞする」。いふともなくほのかに

てたえだえ聞えたるを、懷しげにうちずしなして、
「袖ふれし梅はかはらぬにほひにてねごめうつろふ宿やことなる」。堪へぬ涙をさまよくのごひかくしてこと多くもあらず「又も猶かやうにてなむ何事も聞えさせよるべき」など聞え置きて立ち給ひぬ。御わたりにあるべき事ども人々にのたまひおく。このやどもりに、かの髭がちの殿居人などはさぶらふべければ、このわたりの近きみさうどもなどに、その事どものたまひあづけなどまめやかなる事どもをさへ定め置き給ふ。辨ぞかやうの御供にも思ひかけず、長き命いとつらくおぼえ侍るを、人もゆゝしく思ふべければ、今は世にあるものとも人に知られじとてかたちも變へてけるを、强ひて召し出でゝいとあはれと見給ふ。例の昔物語などせさせ給ひて、「こゝには猶時々は參り來べきを、いとたづきなく心ぼそかるべきを、かくて物し給はむは、いと哀に嬉しかるべきことになむ」などえもいひやらず泣き給ふ。「いとふにはへてのび侍る命のつらく、又いかにせよとてうち捨てさせ給ひけむとうらめしくなべての世を思ひ給へしづむに罪もいかに深く侍らむ」と思ひける事どもをうれへかけ聞ゆるも、かたくなしけれど、いとよく言ひ慰め給ふ。いたくねびにたれど昔淸げなりける名殘をそぎ捨てたれば、額のほどさま變れるに少し若くなりて、さる方にみやびかなり。思ひわびてはなどかゝるさまにもなし奉らざりけむ、それにのぶるやうもやあらまし、さてもいかに心深く語らひ聞えてあらましなど一方ならずおぼえ給ふに、この人さへうらやましければ、かくろへたる几帳を少し引きやりてこまやかにぞ語らひ給ひける。むげに

思ひぼけたるさまながら、物うちいひたる氣色用意口をしからずゆゑありける人の名殘と見えたり。

「さきに立つ涙の川に身をなげば人におくれぬいのちならまし」とうちひそみ聞ゆ。「それもいと罪深かなることにこそ。かの岸にいたること、などかさしもあるまじき事にて深き底に沈みすぐさむもあいなし。すべて空しく思ひとるべき世になむ」などのたまふ。

「身を投げむ涙の川に沈みても戀しきせゞに忘れしもせじ」。いかならむ世に少しも思ひ慰むることありなむと、はてもなき心ちし給ふ。かへらむ方もなく眺められて日も暮れにけれど、すゞろに旅寢せむも人の咎むることやとあいなければかへり給ひぬ。おもほしのたまへるさまをかたりて、辨はいとゞ慰め難くくれ惑ひたり。皆人は心ゆきたる氣色にて物ぬひいとなみつゝ、老いゆがめるかたちもしらずつくろひさまよふに、いよいよやつして、

「人は皆急ぎたつめる袖のうらにひとりもしほをたるゝあまかな」とうれへ聞ゆれば、

「しほたるゝあまの衣にことなれやうきたる浪にぬるゝわが袖。世にすみつかむこともいとありがたかるべきわざとおぼゆれば、さまに隨ひてこゝをばあれはてじとなむおもふを、さらば對面もありぬべけれど、暫しのほども心ぼそくて立ちとまり給ふを見おくに、いとゞ心もゆかずなむ。かゝるかたちなる人も必ずひたぶるにしも世へ籠らぬわざなめるを、猶世のつねに思ひなして時々も見え給へ」など、いとなつかしう語らひ給ふ。昔の人のもてつかひ給ひしさるべき御調度どもなどは、皆この人にとゞめ置き給ひて、「かく人より深く

思ひしづみ給へるを見れば、さきの世もとりわきたる契もやものし給ひけむと思ふさへ、むつましくあはれになむ」とのたまふに、いよいよわらはべの戀ひて泣くやうに心をさめむ方なくおぼゝれ居たり。皆かきはらひよろづとりしたゝめて御車ども寄せて、御ぜんの人々四位五位いとおほかり。御みづからもいみじうおはしまさまほしけれど、ことごとしくなりてなかなかあしかるべければ、唯忍びたるさまにもてなして心もとなくおぼさる。中納言殿よりも、ご前の人々数おほく奉れ給へり。大かたの事をこそ宮よりはおぼし掟きつめれ。細やかなるうちうちの御あつかひは唯この殿より思ひよらぬことなくとぶらひ聞え給ふ。日暮れぬべしと、内にもとにも催し聞ゆるに心あわたゞしう、いづちならむと思ふにもいとはかなく悲しとのみおぼえ給ふに、御車に乗る。たいふの君といふ人のきこゆ。

「ありふればうれしきせにも逢ひけるを身をうぢ河になげてましかば」。うちゑみ たるを、辨の尼の心ばへにこよなうもあるかなと心づきなう見給ふ。今ひとり、

「過ぎにしが戀しきことも忘れねど今日はたまづもゆくこゝろかな」。いづれも年經たる人々にて皆かの御かたをば心よせまほしく聞えためりしを、今はかく思ひ改めて こといみするも心うの世やとおぼえ給へば物もいはれ給はず、道のほどはるけくけはしき山路のありさまを見給ふにぞ、つらきにのみ思ひなされし人の御中のかよひを、ことわりのたえまなりけりと少しおぼし知られける。七日の月のさやかにさし出でたる 影をかしく霞みたるを見給ひつゝ、いと遠きにならはず苦しければうちながめられて、

「ながむれば山よりいでゝ行く月も世にすみわびて山にこそ入れ」。さまかはりてつひにいかならむとのみ危く行く末うしろめたきに、年頃何事をか思ひけむとぞ とりかへさまほしきや。宵うち過ぎてぞおはしつきたる。みもしらぬさまに目も輝くこゝちする殿づくりの、三つば四つばなる中にひき入れて、みやいつしかと待ちおはしましければ、御車のもとに自ら寄らせ給ひておろし奉り給ふ。御しつらひなどあるべきかぎりして、女房のつぼねつぼねまで御心とゞめさせ給ひけるほどしるく見えて、いとあらまほしげなり。いかばかりのことにかと見え給へる御有樣の、俄にかく定まり給へば、おぼろげならずおぼさるゝことなめりと、世の人も心にくゝ思ひ驚きけり。中納言は三條の宮に、この廿よ日のほどに渡り給はむとてこの頃は日々におはしつゝ見給ふに、この院近きほどなれば、けはひも聞かむとて夜更くるまでおはしけるに、奉り給へるご前の人々かへり參りて有樣など語り聞ゆ。いみじう御心に入りてもてなし給ふなるを聞き給ふにも、かつは嬉しきものから、さすがに我が心ながらをこがましく胸うち潰れて「物にもがなや」と返す返すひとりごたれて、

「しなてるやにほのみづうみに漕ぐ船の まほならねどもあひ見しものを」とぞいひくたさまほしき。左のおほ殿は、六の君を宮に奉り給はむことこの 月にとおぼし 定めたりけるに、かく思ひの外の人をこの程よりさきにとおぼし顔にかしづきすゑ給ひて 離れおはすれば、いと物しげにおぼしたりと聞き給ふも いとほしければ、御文は時々奉り給ふ。おん裳着のこと、世に響きて急ぎ給へるをのべ給はむも人わらへなるべければ、廿餘日に着せ奉り給

ふ。同じゆかりに珍しげなくともこの中納言をこそ人に讓らむが口惜しきに、さもやなしてまし、年頃人志れぬものに思ひけむ人をもなくなして物心ぼそくながめ居給ふなるをなどおぼしよりて、さるべき人して氣色とらせ給ひけれど、世のはかなさを目に近く見しにいと心憂く身もゆゝしくおぼゆれば、いかにもいかにもさやうの有樣は物うくなむとすさまじげなるよし聞き給ひて、いかでかこの君さへおふなおふなこと出づることを、物憂くはもてなすべきぞと恨み給ひけれど、親しき御中らひながらも、人ざまのいと心はづかしげに物し給へば、え強ひても聞え動かし給はざりけり。花盛の程二條院の櫻を見やり給ふに、ぬしなき宿のとまづ思ひやられ給へば、「心やすくや」などひとりごちあまりて、宮の御許に參り給へり。こゝがちにおはしまし着きていとようすみ馴れ給ひにたれば、めやすのわざやと見奉るものから、例のいかにぞや覺ゆる心のそひたるぞあやしきや。されどじちの御心ばへはいとあはれに後やすくぞ思ひ聞え給ひける。何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つかた宮はうちへ參り給はむとて、御車のさうぞくして人々多く參り集まりなどすれば、立ち出で給ひて對の御方へ參りたまへり。山里のけはひひきかへて御簾の內心にくゝ住みなして、をかしげなるわらはのすきかげほのみゆるして御せうそこ聞え給へれば、御褥さし出でゝ、昔の心志れる人なるべし、出で來て御返りきこゆ。「朝夕のへだてもあるまじう思ひ給へらるゝほどながら、その事となくて聞えさせむも、なかなかなれなれしきとがめもやとつゝみ侍る程に、世の中變りにたる心ちのみぞし侍るや。おまへの梢も霞へだてゝ見え侍るに、あはれな

る事多くも侍るかな」と聞えて、うち眺めて物し給ふけしき心苦しげなるを、げにおはせましかば、覺束なからず行きかへり、かたみに花の色鳥の聲をも折につけつゝ、少し心ゆきてすぐしつべかりける世をなど おぼし出づるにつけては、ひたぶるに堪へ籠り給へりし住ひの心ぼそさよりも飽かず悲しう口惜しきことぞいとゞまさりける。人々も「世の常にうとうとしくなもてなし聞え給ひそ。かぎりなき御心のほどをば、今しもこそ見奉り知らせ給ふさまをも見え奉らせ給ふべけれ」など聞ゆれど、人づてならずふとさし出で聞えむ事の猶つゝましきを、やすらひ給ふ程に、宮出で給はむとて御まかり申しに渡り給へり。いと淸らにひき繕ひけさうじ給ひて見るかひある御さまなり。中納言はこなたになりけりと見給ひて、「などかむげにさし放ちては出しすゑ給へる。御あたりにはあまりあやしと思ふまでうしろやすかりし心よせを、我がためはをこがましきこともやと覺ゆれど、さすがにむげにへだて多からむは罪もこそうれ。近やかにて昔物語もうち語らひ給へかし」など聞え給ふものから「さはありともあまり心ゆるびせむも又いかにぞや。疑はしきかたの心にもぞあるや」とうち返しのたまへば、一かたならずわづらはしけれど、我が御心にもあはれ深く思ひしられにし人の御心を、今しもおろかなるべきならねば、かの人も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御かはりとなずらへ聞えて、かう思ひ知りけりと見え奉るふしもあらばやとはおぼせど、さすがにとやかくやと方々にやすからず聞えなし給へば、苦しうおぼされけり。

寄生

その頃藤壺と聞ゆるは故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞えさせし時人よりさきに參り給ひにしかば、むつましう哀なる方の御思ひはことに物し給ふめれど、その志るしと見ゆるふしもなくて年經給ふに、中宮には宮達さへあまたこゝらおとなび給ふめるに、さやうのことも少なくて唯女宮一所をぞ持ち奉り給へりける。わがいと口惜しう人におされ奉りぬる宿世歎かしく覺ゆるかはりに、この宮をだにいかで行末の心も慰むばかりにて見奉らむとかしづき聞え給ふことおろかならず。御かたちもいとをかしくおはすれば帝もらうたきものに思ひ聞えさせ給へり。女一宮を世にたぐひなきさまにもてかしづき聞えさせ給ふに、おほかたの世のおぼえこそ及ぶべうもあらね、うちうちの御有樣はをさをさ劣らず。父おとゞの御いきほひいかめしかりし名殘いたく衰へねば、殊に心もとなきことなどなくて、侍ふ人々のなりすがたよりはじめたゆみなく時々につけつゝとゝのへ好みて、今めかしくゆゑゆゑしきさまにもてなし給へり。十四になり給ふ年、御裳着せ奉り給はむとて春よりうちはじめて、ことごとなくおぼし急ぎて何事もなべてならぬさまにとおぼしまうく。いにしへより傳はりたりける寶物ども、この折にこそはと搜し出でつゝいみじく營み給ふに、女御夏頃もの〻けに煩ひ給ひていとはかなくうせ給ひぬ。いふかひなく口惜しきことを內

にもおぼし歎く。心ばへなさけなさけしく懷しき所おはしつる御方なれば殿上人ども、「こよなくさうざうしかるべきわざかな」と惜み聞ゆ。大方さるまじきさはの女官などまで忍び聞えぬはなし。宮はまして若き御心ちに心ぼそう悲しくおぼし入りたるを、聞し召して心苦しく哀に思し召さるれば御なゝなぬか過ぐるまゝに忍びて參らせ給へり。日々に渡らせ給ひつゝ見奉らせ給ふ。黑き御ぞにやつれておはするさま いとゞらうたげにあてなる氣色まさり給へり。御心ざまもいとよくおとなび給ひて 母女御よりも今少ししづやかにおもりかなる所はまさり給へるを、うしろ安くは見奉らせ給へど、誠には御母方とても後見と頼ませ給ふべききをぢなどやうのはかばかしき人もなし。僅に大藏卿すりのかみなどいふは 女御にもこと腹なりけり。殊に世の覺えおもりかにもあらず やんごとなからぬ人々をたのもし人にておはせむに、女は心苦しき事多かりぬべきこそいとほしけれなど、御心ひとつなるやうにおぼしあつかふも安からざりけり。お前の菊うつろひはてゝ盛なる頃 空の氣色も哀にうちしぐるゝにも、まづこの御方に渡らせ給ひて昔のことなど聞えさせ給ふに、御いらへなどもおほどかなるものから いはけなからず うち聞えさせ給ふをうつくしく 思ひ聞えさせ給ふ。かやうなる御さまを見知りぬべからむ人のもてはやし聞えむもなどかはあらざらむ。朱雀院の姬宮を六條院に讓り聞え給ひしをりの定めどもなどおぼし出づるに暫しはいでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなましと聞ゆる事どもありしかど、源中納言の人より異なるありさまにてかく萬を後見奉るにこそ、そのかみの御おぼえ衰へずやんごとなきさまに

てはながらへ給ふめれ、さらずば御心より外なる事ども出できて おのづから人にかろめられ給ふこともやあらましなどおぼしつゞけて、ともかくも御覧ずる世にや思ひ定めましとおぼしよるには、やがてその序のまゝに この中納言より外によろしかるべき人またなかりけり。宮達の御傍にさし並べたらむに何事もめざましくはあらじを、もとより思ふ人もたりとて聞きにくき事などうらまずまじうはためあるを、遂にはさやうの事なくてしもえあらじ、さらぬさきにさもやほのめかしてましなど折々おぼしめしけり。御碁などうたせ給ふ。暮れ行くまゝに時雨をかしき程に花の色も夕ばえしたるを御覧じて、人めして「唯今殿上に誰々か」と問はせ給ふに「中務のみこ、かんづけのみこ、中納言源の朝臣さぶらふ」と奏す。「中納言の朝臣こなたに」と仰せごとありて、参り給へり。げにかく取りわきて召し出づるもかひありて遠く薫れる匂ひより始め人に異なるさま⿰し給へり。「今日の⿰ぐれ常より殊に長閑なるを、遊などすさまじき方にて いとつれづれなるを、いたづらに日を送るたはぶれにてもこれなむよかるべき」とて碁盤召し出でゝ御碁のかたきに召しよす。いつもかやうにけ近くならしまつはし給ふにならひたれば、さにこそはと思ふに、「よきのりものはありぬべけれど、かるがるしくはえ渡すまじきを何をかは」などのたまはする御氣色いかゞ見ゆらむ、いとゞ心づかひして侍ひ給ふ。さてうたせ給ふに三番にかずひとつ負けさせ給ひぬ。「ねたきわざかな」とて「まづ今日はこの花一枝ゆるす」とのたまはすれば、御いらへ聞えさせでおりておもしろき枝を折りて參り給へり

「世のつねの垣根ににほふ花ならば心のまゝに折りて見ましを」と奏し給へる、用意あさからず見ゆ。

「霜にあへず枯れにし園の菊なれど殘の色はあせずもあるかな」とのたまはす。かやうに折々ほのめかさせ給ふ御氣色を人づてならずうけ給はりながら例の心のくせなればいそがしくしも覺えず。いでや本意にもあらずさまざまにいとほしき人々の御ことどもをもよく聞き過ぐしつゝ年經ぬるを今さらにひじりやうのもの、世にかへり出でむ心ちすべきことゝ思ふもかつはあやしや。殊更に心を盡す人だにこそあなれとは思ひながら、后腹におはせばしもと覺ゆる心のうちぞあまりおほけなかりける。かゝる事を左大臣殿ほの聞き給ひて、六の君はさりともこの君にこそはしぶしぶなりともまめやかに恨みよらば遂にはえいなびはてじとおぼしつるを、思のほかなる事出できぬべかめりと妬くおぼされければ、兵部卿の宮はた、わざとにはあらねど折々につけつゝをかしきさまに聞え給ふ事絶えざりければ、さばれなほざりの御すきにはありともさるべきにて御心とまるやうもなどかなからむ、水もるまじく思ひ定むともなほなほしききはにくだらむはたいと人わろく飽かぬこゝちすべしなどおぼしなりにたり。「女ごうしろめたげなる世の末にてみかどだに婿もとめ給ふめる世にましてたゞ人のさかりすぎむもあいなし」などそしらはしげにのたまひて、中宮にもまめやかに恨み申し給ふこと度かさなりければ、きこしめし煩ひて「いとほしくかくおふなおふな思ひ心ざして年へたまひぬるをあやにくに遁れ聞え給はむもなさけなきやうならむ。

みこたちは御後見からこそともかくもあなれ、うへの御世も末になり行くとのみおぼしのたまふめるをたゞ人こそひとかたにさだまりぬれば又心をわけむこともかたげなめれ。それだにかのおとゞのいとまめだちながらこなたかなたうらやみなくもてなしてものし給はずやはある。ましてこれは思ひおきて聞ゆることもかなはゞあまたも侍はむになどかあらむ」など例ならずことつゞけてあるべかしう聞えさせ給ふに、我が御心にももとよりもてはなれてはたおぼさぬことなればあながちにはなどてかはあるまじきさまにも聞えさせ給はむ、唯いとことうるはしげなるあたりにとりこめられて心安くならひ給へるありさまの所せからむことをなまぐるしくおぼすに物うきなれど、げにこのおとゞにあまりゑんぜられてむもあいなからむなどやうやうおぼしよわりにたるなるべし。あだなる御心なればかのあぜちの大納言の紅梅の御方をもなほおぼしたえず、花紅葉につけてものたまひ渡りつゝ、いづれをもゆかしうはおぼされけり。されどその年は變りぬ。女二宮も御ぶくはてぬればいとゞ何事にかは憚り給はむ。「さも聞え出でばとおぼし召したる御けしきになむ」と告げ聞ゆる人々もあるを、あまりしらず顔ならむもひがひがしうなめげなりなどおぼしおこして、さるべきたよりしてけしきばみ聞え給ふをりをりもあるに、はしたなきやうはなどてかはあらむ。その程におぼし定めたなりとつてにも聞きみづから御氣色をも見れど、心のうちには猶飽かで過ぎ給ひにし人の悲しさのみ忘らるべき世なくおぼゆれば、うたてかく契深く物し給ひける人のなどてかはさすがにうとくてはすぎにけむと心得難く思ひ出でらる。口惜

しきゐなりともかの御ありさまに少しも覺えたらむ人は心もとまりなむかし。昔ありけむ香の烟につけてだに今ひとたび見奉るものにもがなとのみ覺えて、やんごとなき方ざまにいつしかなどは急ぐ心もなし。左のおほい殿には急ぎたちて八月ばかりにと聞え給ひてけり。二條院の對の御方には聞き給ふに、さればよ、いかでかは數ならぬ有樣なめれば、必ず人笑へに憂き事出でこむものぞとは思ふおもふ過しつる世ぞかし、あだなる御心と聞き渡りしをたのもしげなく思ひながら、めに近くては殊につらげなることも見えず哀に深き契をのみし給へるを、俄にかはり給はむほどいかゞはやすき心地はすべからむ、たゞ人のなからひなどのやうにいとしも名殘なくなどはあらずとも、いかにやすげなきこと多からむ、猶いと憂き身なめれば遂には山住みに歸るべきなめりなどおぼすにも、やがて跡絶えなましよりは山がつの待ち思はむも人笑へなりかし、かへすがへすも故宮ののたまひ置きしことにたがひて草のもとおかれにける心かるさを恥しうもつらくも思ひ知られ給ふ。故姫君のいとゐどけなくものはかなきさまにのみ何事をも思しのたまひしかど、心の底のつしやかなる所はこよなくもおはしけるかな、中納言の君の今に忘らるべき世なく歎き渡り給ふめれど、若し世におはせましかば又かやうにおぼす事はありもやせまし、それをいとふかういかでさはあらじと思ひ入り給ひてとざまかうざまにもて離れむことをおぼしてかたちをもかへてむとし給ひしぞかし、必ずさるさまにてぞおはせまし、今思ふに、いかにおもりかなる御心おきてならまし、なき御かけども　我をばいかにこよなきあはつけさと見給ふらむ

と恥しう悲しくおぼせど、何かはかひなきものからかゝるけしきをも見え奉らむと忍びかへしつゝ聞きも入れぬさまにてすぐし給ふ。宮は常よりも哀になつかしうおきふし語らひ契りつゝ、この世のみならず長きことをのみぞたのめ聞え給ふ。さるはこのさつきばかりより例ならぬさまに惱しうし給ふこともありけり。こちたく苦しがりなどはし給はねど常よりも物參ることいとゞなくふしてのみおはするを、まださやうなる人の有樣などよくも見知り給はねば、たゞあつき頃なればかくおはするなめりとぞおぼしける。さすがに怪しとおぼし咎むることもありて「もしいかなるぞ。さる人こそさやうには惱むなれ」などのたまふ折もあれど、いと恥しうし給ひてさりげなくのみもてなし給へるを、さし過ぎ聞え出づる人もなければたしかにも得知り給はず。八月になりぬればその日などほかよりぞ傳へ聞き給ふ。宮は隔てむとにはあらねどいひ出でむ程心苦しういとほしくおぼされてさものたまはぬを女君はそれさへぞ心憂く覺え給ふ。忍びたることもあらず世の中なべて知りたることをその程などだにのたまはぬことゝ、いかゞうらめしからざらむ。かく渡り給ひにし後はことなることなければうちに參り給うてもよるとまることはことにし給はず、こゝかしこの御よがれなどもなかりつるを、俄にいかに思ひ給はむと心苦しきまぎらはしに、この頃は時々御とのゐとて參りなどし給ひつゝかねてよりならはし聞え給ふをも唯つらき方にのみぞ思ひおかれ給ふべき。中納言殿もいといとほしきわざかなと聞き給ふに、花ごゝろにおはする宮なれば哀とはおぼすともいまめかしきかたに必ず御心うつろひなむかし、女がたもい

とゐたゝかに物し給ふわたりにてゆるびなく聞えまつはし給はゞ月頃もさもならひ給はで待つ夜おほく過し給はむこそ哀なるべけれなど思ひよるにつけても、あいなしや、我が心よ何しにゆづり聞えけむ、昔の人に心をゐめてし後大方の世をも思ひ離れて住みはてたりしかたの心も濁りそめしかば、唯かの御事をのみとざまかうざまには思ひながらさすがに人の心許されであらむことは始より思ひしほいなかるべしと憚りつゝ、唯いかにして少しも哀と思はれてうち解け給へらむ氣色をも見むと行くさきのあらましごとのみ思ひ續けしに、人は心にもあらずもてなしてさすがに一かたにてもえさし放つまじう思ひ給へるなぐさめに、同じ身ぞといひなしてほいならぬかたにおもむけ給ひしが妬くうらめしかりしかば、まづその心おきてをたがへむとて急ぎせしわざぞかしなど、あながちにめゝしう物ぐるほしくゐてありきたばかり聞えしほど思ひ出づるもいとけしからざりける心かなと返す返すぞくやしき、宮もさりともその程の有樣思ひ出で給はゞわが聞かむ所をも少しは憚り給はじやと思ふに、いでや今はそのをりのことなどかけてものたまひ出でざめりかし。猶あだなるかたに進み移りやすなる人は、女のためのみにもあらず、たのもしげなくかるがるしきこともありぬべきなめりかしなどにくゝ思ひ聞え給ふ。わが誠にあまりひとかたにゐみたる心ならひに人はいとこよなくもどかしく見ゆるなるべし、かの人をむなしう見奉りなしてし後おもふには、帝の御むすめをたまはむとおぼしおきつるも嬉しくもあらず、この君をえましかばとおぼゆる心の月日にそへてまさるも唯かの御ゆかりと思ふに思ひ離れがたきぞ

かし、はらからといふ中にも限なく思ひかはし給へりしものを今はとなり給ひにしはてにもとまらむ人を同じことゝ思へとて萬は思はずなることもなし、唯かの思ひおきてしさまをたがへ給へるのみなむ、口惜しううらめしきふしにてこの世には殘りぬべきとのたまひしものを、あまがけりてもかやうなるにつけてはいとゞつらしとや見給ふらむなど、つくづくと人やりならぬひとりねし給ふよなよなは、はかなき風の音にもめのみさめつゝきしかた行くさきの人の上さへあぢきなき世を思ひめぐらし給ふ。なげのすさみに物をもいひふれけぢかくつかひならし給ふ人々の中には、おのづからにくからずおぼさるゝもありぬべけれど、誠には心とまるもなきこそさはやかなれ、さるはかの君達のほどに劣るまじききはの人々も、時世に隨ひつゝ衰へて心細げなる住まひするなどを尋ねとりつゝあらせなどいと多かれど、今はと世を背きはなれむ時この人こそとりたてゝ心とまるほだしになるばかりのことはなくて過ぐしてむと思ふ心づかひ深かりしを、いでさもわろくわが心ながらねぢけてもあるかななど、常よりもやがてまどろまず明し給へるあしたに、霧のまがきより花のいろいろおもしろく見えわたる中に、朝顔のはかなげにてまじりたるを猶殊にめとまる心ちし給ふ。あくるまさきてとか常なき世にもなずらふるが心苦しきなめりかし。格子もあげながらいとかりそめにうち臥しつゝ明し給へば、この花の開くる程をも唯一人のみぞ見給ひける。人召して、「北の院に參らむに、ことごとしからぬ車さしいださせよ」とのたまへば「宮は昨日よりうちになむおはしますなる。よべ御車ゐてかへり侍りにき」と申す。「さ

ばれ、かの對の御方の惱み給ふなるとぶらひ聞えむ。今日はうちに參るべき日なればたけぬさきに」とのたまひて御さうぞくし給ふ。出で給ふまゝにおりて花の中にまじり給へるさまも殊更にえんだち色めきてももてなし給はねど、怪しうたゞうち見るになまめかしう耻しげにて　いみじうけしきだつ色ごのみどもになずらふべくもあらず、おのづからをかしうぞ見え給ひける。朝顏をひきよせ給ふに、露いたうこぼる。

「けさのまの色にやめでむおく露の消えぬにかゝる花とみるみる。はかな」などひとりごちてをりても給へり。女郎花をばみすぎてぞ出で給ひぬる。明けはなるゝまゝに霧たちみちたる空をかしきに、女どちはしどけなくあさいし給へらむかし、格子妻戸などうちたゝきこわづくらむこそうひうひしかるべけれ、あさまだきまだき來にけりと思ひながら、人めして中門のあきたるより見せ給へば、「み格子ども皆まゐりて侍るべし。女房のけはひなどし侍りつ」と申せば、おりて霧のまぎれにさまよく歩み入り給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見るに、露にうちしめり給へるかをり例のいとさまことに匂ひくれば猶めざましうおはすかし。「心をあまりをさめ給へるこそにくけれ」などあいなく若き人々などは聞えあへり。驚きがほにもあらずよきほどに打ちそよめきて御しとねさし出でなどするさまもいとめやすし。「これに侍へと許させ給ふほどは人々しきこゝちすれど、猶かゝるみすのまへにさし放たせ給へるうれはしさになむしばしばも得さぶらはぬ」とのたまへば、「さらばいかゞは侍るべからむ」と聞ゆ。「北おもてなどやうのかくれぞかし。かゝるふるびとなど

のさぶらはむにことわりなるやすみどころはそれもまた唯御心なれば變へ聞ゆべきにも侍らず」とてなげしにおしかゝりて坐すれば、例の人々「猶あしこもとに」などそゞのかし聞ゆ。もとよりけはひはやりかに雄々しくなどは物し給はぬ人がらなるを、いよいよしめやかにもてなしをさめ給へれば、今はみづから聞え給ふことも、やうやうたてつゝましかりしかた、少しづゝうすらぎておもなれ給ひにたり。「惱ましうおぼさるらむさまもいかなれば」など問ひ聞え給へど、はかばかしくも御いらへ聞え給はず、常よりもしめり給へるけしきの心苦しきも哀におしはかられ給ひて、こまやかに世の中のあるべきやうなどを、はらからやうのものゝあらましやうに教へ慰め聞えたまふ。聲などもわざと似給へりとも覺えざりしかど、あやしきまで唯それとのみ聞ゆるに、人め見苦しかるまじくはすだれもひきあげてさしむかひ聞えまほしく、うち惱み給へらむかたちゆかしう覺え給ふも、猶世の中に物思はぬ人もえあるまじきわざにやあらむとぞ思ひ知られ給ふ。「人々しくきらきらしきかたには侍らずとも心に思ふことあり、なげかしく身をもてなやむさまになどはなくて過ぐしつべきこの世とみづから思ひ給へしを、心から悲しきこともをこがましく悔しき物思ひをもかたがたに安からず思ひ侍るこそいとあいなけれ。つかさくらゐなどいひて大事にすめることわりのうれへにつけて歎き思ふ人よりも、これや今少し罪の深さはまさるらむ」などいひつゝをり給へる花を扇にうち置きて見居給へるが、やうやうあかみもて行くもなかなか色あはひをかしう見ゆれば、やをらさしいれて、

「よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花」。ことさらびてしももてなさぬに露を落さでもたまへりけるよとをかしく見ゆるに、おきながら枯るゝけしきなれば、「消えぬまにかれぬる花のはかなさにおくるゝ露はなほぞまされる」。何にかゝれる」といと忍びてこともつゞけずつゝましげにいひけち給へるほど猶いとよく似給へるかなと思ふにもまづぞかなしき。「秋の空は今少しながめのみまさり侍る。つれづれのまぎらはしにもとてさいつころ宇治に物して侍りき。庭もまがきもまことにあれはてゝ侍りしに堪へがたきこと多くなむ。故院のうせ給ひて後、二三年ばかりの末に世をそむき給ひし、嵯峨の院にも六條院にもさしのぞく人の心をさめむ方なくなむ侍りける。木草の色につけても水の流にそへても涙にくれてのみなむ歸り侍りける。かの御あたりの人はかみしも心淺き人なくなむ惑ひ侍りけるまゝに、かたがたつどひものせられける人々も皆ところどころにあがれちりつゝおのおのの思ひ離るゝ住まひをし給ふめりしに、はかなき程の女房などはまして心をさめむかたなく覺えけるまゝに、物覺えぬ心にまかせつゝ山はやしに行きまじり、すゞろなる田舍人になりなど哀に惑ひちるこそ多く侍りけれ。さてなかなか皆あらしはて忘草おほして後なむこの左のおとゞも渡りすみ、宮達などもかたがたものし給へば昔に返りたるやうに侍るめる。さる世にたぐひなき悲しさと見給へしほどのことも、年月ふれば思ひさますをりの出でくるにこそはと見給ふるに、げにかぎりあるわざなりけりとなむ見え侍りし。かくは聞えさせながらも、かのいにしへの悲しさはまだいはけなく侍りける程にて いとさし

も志まぬにや侍りけむ。猶この近き夢こそさますべきかたなく思ひ給へらるゝはおなじご
と世の常なきかなしびなれど、罪深きかたはまさりて侍るにやとそれさへなむ心憂く侍る」
とて泣き給へるほどいと心深げなり。むかしの人をいとしも思ひ聞えざらむ人だに、この人
の思ひ給へる御けしきを見むにはすゞろにたゞにもあるまじきを、まいてわれも物を心ぼ
そく思ひ亂れ給ふにつけては、いとゞ常よりも面影に戀しく悲しく思ひ聞え給ふ心なれば、
今すこしもよほされて物も得聞え給はずためらひかね給へるけはひをかたみにいと哀と思
ひかはし給ふ。「世のうきよりはなど人はいひしをも、さやうに思ひくらぶる心もことにな
くて年ごろは過し侍りしを、今なむ猶いかでしづかなるさまにても過さまほしく思ひ給ふる
を、さすがに心にもかなはざめれば辨の尼こそうらやましく侍れ。この二十日あまりの程は
かの近き寺の鐘の聲も聞き渡さまほしく覺え侍るを、忍びて渡させ給ひてむやと聞えさせ
ばやとなむ思ひ侍りつる」とのたまへば「あらさじとおもほすとも、いかでかは。心やすきを
のこだにいとゆきゝのほどあらましき山道に侍れば思ひつゝなむ月日も隔たり侍る。故宮
の御忌日は、かの阿闍梨にさるべき事ども皆いひおき侍りにき。かしこは猶たふときかたに
おぼしゆづりてよ。時々見給ふるにつけては心惑ひの絶えせぬもあいなきに罪うしなふさ
まになし侍りなばやとなむ思ひ侍るを、またいかゞ思しおきつらむ。ともかくも定めさせ給
はむに隨ひてこそはとてなむ。あるべからむやうにのたまはせよかし。何事もうとからずう
けたまはらむのみこそほいかなふにては侍らめ」などまめだちたることゞもを聞え給ふ。經

佛などこの上も供養じ給ふべきなめり。かやうなるついでにことつけてやをら籠り居なばやとおもむけ給へるけしきなれば、「いとあるまじきことなり。猶何事も心のどかにおぼしなせ」など教へ聞え給ふ。日さしあがりて人々參り集まりなどすれば、あまり長居もことあり顏ならむによりいで給ひなむとて、「いづこにてもみすのとにはならひ侍らねばはしたなき心ちし侍りてなむ。今又かやうにもさぶらはむ」とて立ち給ひぬ。宮のなどかなき折にはきつらむと思ひ給ひぬべき御心なるもわづらはしくて、侍のべたうなる右京のかみ召して、「よべまかでさせ給ひぬと承りて參りつるをまだしかりければ口惜しきを、うちにや參るべき」とのたまへば、「今日はまかでさせ給ひなむ」と申せば、「さらば夕つ方も」とて出で給ひぬ。猶この御けはひありさまを聞き給ふたびごとに、などて昔の人の御心おきてをもてたがへて思ひぐまなかりけむと、くゆる心のみまさりて心にかゝりたるもむつかしく、なぞや人やりならぬ心ならむと思ひかへし給ふ。そのまゝにいまださうじにていとゞおこなひをのみし給ひつゝ明し暮したまふ。母宮は猶いと若くおほどきて物しどけなき御心にも、かゝる御けしきをいとあやふくゆゝしとおぼして「いく世しもあらじを、見奉らむほどはかひあるさまにて見え給へ。世の中を思ひ捨て給はむをもかゝる身にてはさまたげ聞ゆべきにもあらぬを、この世にてはいふかひなき心地すべき心惑ひにいとゞ罪やうらむ」とのたまふが辱くいとほしくて、よろづを思ひけちつゝ御前にては物思ひなきさまをつくり給ふ。左のおほいとのには六條院の東のおとゞを磨きしつらひて限なくよろづをとのゝへて待ち聞え給ふに、

いざよひの月やうやうさしあがるまで心もとなければ、いとしも御心にいらぬことにていかならむと安からずおぼしてあないし給へば、「この夕つかたうちより出で給ひて二條院になむおはしますなる」と人申す。おぼす人も給へればと心やましけれど、こよひ過ぎむも人わらへなるべければ、御子の頭中將して聞え給へり。

「大ぞらの月だにやどるわが宿にまつよひすぎて見えぬ君かな」。宮はなかなか今なむとも見えじ心苦しとおぼしてうちにおはしけるを、御文聞え給へりける。御返りやいかゞありけむ。猶いと哀におぼされければ忍びて渡り給へりけるなり。らうたげなる有樣を見捨てゝ出づべき心ちもせず、いとほしければよろづに契りつゝ慰めかねてもろともに月を眺めておはするほどなりけり。女君は日頃もよろづに思ふ事多かれど いかでけしきにいださじとよろづに念じ返しつゝつれなきさまし給ふことなれば、殊に聞きも咎めぬさまにおほどかにもてなしておはするさまいと哀なり。中將の參り給へるを聞き給ひて、さすがにかれもいといとほしければ出で給はむとて、「今いと疾く參りこむ。ひとり月な見給ひそよ。心そらなればいと苦し」と聞えおき給ひて、なまかたはらいたければかくれのかたより寢殿へ渡り給ふ。御うしろでを見送るに、ともかくも覺えねど唯枕のうきぬべき心ちのすれば、心憂きものは人の心なりけりと われながら思ひ知らる。をさなきほどより心ぼそく哀なる身どもにて世の中を思ひとゞめたるさまにもおはせざりし。二所をたのみ聞えさせて さる山里に年經しかど、唯いつとなくつれづれにすごうはありながらいとかく心にしみて 世をうきも

のとも思ひ知らざりしに、打ち續きあさましき御事どもを思ひし程は世に又とまりて片時ふべくもおぼえず戀しう悲しきことのたぐひあらじと思ひしを、命長くて今までもながらふれば人の思ひたりし程よりは人かずにもなるやうなる有樣を長かるべきことゝは思はねど、見るかぎりはにくげなき御心ばへもてなしなるに、やうやう思ふこと薄らぎてありへつるを、このふしの身のうさはたいはむかたなく限と覺ゆるわざなりけり。ひたすら世になくなり給ひにし人々よりはさりともこれは時々もなどかはとも思ふべきを、今宵かく見捨てゝ出で給ふつらさにきしかた行くさき皆かきみだり心細くいみじきが我が心ながら思ひやるかたなく心憂くもあるかな、おのづからながらへばなど慰めむことをおもふに、更に姨捨山の月のみすみのぼりて夜更くるまゝによろづ思ひ亂れたまふ。松風の吹きくる音も、あらましかりし山おろしに思ひくらぶればいとのどかに懷かしうめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉のおとには劣りておぼゆ。

「山里のまつのかげにもかくばかり身にしむあきの風はなかりき。きしかたは忘れにけるにやあらむ」。おいびとどもなど「今はいらせ給ひね。月見るは忌み侍るものを。あさましうはかなき御くだものをだに御覽じ入れねばいかならせ給はむ。あな見苦しや。ゆゝしう思ひ出でらるゝことも侍るを。いとこそわりなけれ」などいふ。若き人々は「心うの世や」とうち歎きて「この御ことよ、さりともかくておろかにはよもなりはて給はじ。さいへど、もとの志深う思ひそめつる中は名殘なからぬものぞ」などいひあへるもさまざまに聞にくゝ、今は

いかにもいかにもかけていはざらなむ、たゞにこそ見めとおぼさるゝは、人にはいはせじわれひとり恨み聞えむとにやあらむ。いでや中納言殿のさばかり哀なる御心深さをなどそのかみの人々はいひあはせて、人の御すくせのあやしかりけることよといひあへり。宮はいと心苦しくおぼしながら色めかしき御心は、いかでめでたきさまに待ち思はれむと心げさうして、えならずたきしめ給へる御けはひはいはむ方なし。まちつけ給へる所の有樣もいとをかしかりけり。人の御程さゝやかにあえかになどはあらでよきほどになりあひたる心ちし給へるを、いかならむものものしくあざやぎて心ばへもたをやかなるかたはなく物ほこりかになどやあらむ、さあらむこそうたてあるべけれなどおぼせど、さやうなる御けはひにはあらぬにや御志おろかなるべうもおぼされざりけり。秋の夜なれどふけにしかばにや程もなく明けぬ。歸り給ひても對へはふとも得渡り給はず。しばしおほとのごもりて起きてぞ御文書き給ふ。「御けしきけしうはあらぬなめり」とおまへなる人々つきじろふ。「對の御方こそ心苦しけれ。あめのしたにあまねき御心なりともおのづからけおさるゝこともありなむかし」などたゞにしもあらず皆馴れ仕う奉りたる人々なれば、やすからずうちいふことゞもありて、すべて猶妬げなるわざにぞありける。御返りもこなたにてこそはとおぼせど夜のほどの覺束なさも常のへだてよりはいかゞと心苦しければ急ぎわたり給ふ。ねくたれの御かたち、いとめでたくみどころありていり給へるに、ふしたるもうたてあれば少し起きあがりておはするに、打ち赤み給へる顔のにほひなど今朝しもことにをかしげさまさりて見え給へ

ば、あいなく涙ぐまれて志ばしうちまもり聞え給ふを、恥しくおぼしてうちうつぶし給へる髪のかゝりかんざしなど猶いとありがたげなり。宮もなまはしたなさにこまやかなることなどはふともえ言ひ出で給はず、おもがくしにや、「などかくのみなやましげなる御けしきならむ。あつきほどのことゝかのたまひしかば、いつしかとすゞしきほど待ち出でたるも猶はればれしからぬは見苦しきわざかな。さまざまにせさすることもあやしう志るしなき心地のみこそすれ。さはありとも、ずほふはまたのべてこそはよからめ。志るしあらむ僧もがな。なにがし僧都をぞよゐにさぶらはすべかりける」などやうなるまめごとをのたまへば、かゝるかたにもことよきは心づきなく覺え給へど、むげにいらへ聞えざらむもれいならねば、「昔もあやしう人に似ぬありさまにてかやうの折は侍りしかど、おのづからいとよくをこたるものを」とのたまへば、「いとよくこそさはやかなれ」と打ち笑ひて、なつかしうあいぎやうづきたるかたはこれにならぶ人はあらじかしと思ひながら、猶又とくゆかしきかたの心いられも立ちそひ給へるは御志のおろかにもあらぬなめりかし。されど見給ふほどはかはるけぢめもなきにや、後の世までと誓ひたのめ給ふことゞものつきせぬを聞くにつけても、げにこの世はいと短かゝめる。命まつまもつらき御心に見えぬべければ後の契やたがはぬ事もあらむと思ふにこそ、猶こりずまに又もたのまれぬべけれとていみじうねんずべかめれど得忍びあへぬにやけふは泣き給ひぬ。日ごろもいかでかく思ひけりと見え奉らじとよろづに思ひまぎらはしつるを、さまざまに思ひ集むることし多かればさのみもえも

て隠されぬにや、こぼれそめてはとみにもえためらひ給はぬを、いと恥しく侘しと思ひていたくそむき給へば、志ひてひきむけ給ひつゝ、「聞ゆるまゝに哀なる御有様と見つるを、猶隔てたる御心こそ物じ給ひけれな。さらずば夜の程におぼじかはりにたるか」とてわが御袖して涙をのごひ給へば、「夜のまの心がはりこそそのたまふにつけて推しはかられ侍りぬれ」とて少しほゝゑみぬ。「げにあが君や、をさなの御物いひや。されど誠には心にくまのなければいと心やすし。いみじうこととえりして聞ゆとも、いと志るかるべきわざぞ。むげに世のことわりを知り給はぬこそ らうたきものからわりなけれ。よしわが御身になしても思ひめぐらし給へ。身を心ともせぬ有様なりかし。若し思ふやうなる世もあらば人にまさりける志の程も知らせ奉るべきひとふしなむある。たはやすくことといづべきことにもあらねば命のみこそ」などのたまふほどに、かしこに奉り給へる御使、いといたうゑひすぎにければ少し憚るべきことも忘れて、けざやかにこの南おもてに参れり。あまの刈るめづらしきたまもにかづきうづもれたるを、さなめりと人々見る。いつの程に急ぎ書き給ひつらむと見るも安からずはありけむかし。宮もあながちにかくすべきにはあらねど、さしぐみは猶いとほしきを少しの用意はあれかしとなまかたはらいたけれど、いまはかひなければ女房して御文とり入れさせ給ふ。同じくは隔なきさまにもてなしはてゝむとおぼしてひきあげ給へるに、まゝはゝの宮の御手なめりと見ゆれば今少し心安くてうち置き給へり。せんじがきにてもうしろめたのわざや。「さかしらはかたはらいたさにそゝのかし侍れど、いとなやましげにてなむ。

女郎花志をれぞまさるあさ露のいかに置きけるなごりなるらむ」。あてやかにをかしう書き給へり。「かごとがましげなるもわづらはしや。誠は心安くてしばしはあらむと思ふ世を、思のほかにもあるかな」などはのたまへど又二つなくてさるべきものに思ひならひたるたゞ人の中こそかやうなることのうらめしさなども見る人苦しくはあれ、思へばこれはいとかたし、つひにかゝるべき御事なり、宮達と聞ゆる中にもすぢことに世の人思ひ聞えたれば、いくたりもいくたりもえ給はむこともどきあるまじければ、人もこの御方をいとほしなど思ひたらぬなるべし、かばかりものものしくかしづきすゑ給ひて、心苦しきかたおろかならずおぼしたるをぞさいはひおはしけるときこゆる、みづからの心にも、あまりにならはし給ひて、俄にはしたなかるべきがなげかしきなめり、かゝる道をいかなれば淺からず人の思ふらむと、昔物語などを見るにも人の上などにてもあやしう聞き思ひしはげにおろかなるまじきわざなりけりと、わが身になしてぞ何事も思ひ知られ給ひける。宮は常よりも哀にうち解けたるさまにもてなし給ひて、「むげに物參らざなるこそいとあしけれ」などのたまひて、よしある御くだもの召しよせ、又さるべき人めして殊更にてうぜさせ給ひなどしつゝそゝのかし聞え給へどいとはるかにのみおぼしたれば「見苦しきわざかな」と歎き聞え給ふに、暮れぬれば夕つ方寢殿へ渡り給ひぬ。風涼しくおほかたの空をかしき頃なるに、今めかしきにすゝみ給へる御心なれば、いとゞしくえんなるに、物おもはしき人の御心の中はよろづに忍びがたき事のみぞ多かりける。ひぐらしの鳴く聲にも山の陰のみ戀しくて、

「おほかたにきかましものをひぐらしの聲うらめしき秋の暮かな」。今宵はまだふけぬにいて給ふなり。御さきの聲の遠くなるまゝにあまも釣するばかりになるも、我ながらにくき心かなと思ふ思ふ聞き臥し給へり。はじめより物を思はせ給ひし有樣などを思ひ出づるもうとましきまでおもほゆ。このなやましき事もいかならむとすらむ、いみじう命短きぞうなれば、かやうならむついでにもやはかなくなりなむとすらむなど思ふには惜しからねど、悲しうもあり又いと罪深うもあなるものをなどまどろまれぬまゝに思ひ明し給ふ。その日はきさいの宮なやましげにおはしますとて、誰も誰も參りつどひ給へれど、いさゝかなる御かぜにおはしましければことなることもおはしまさずとて、おとゞは晝まかで給ひにけり。中納言の君さそひ聞え給ひてひとつ御車にてぞまかで給ひにける。今宵の儀式いかならむ、淸らを盡さむとおぼすべかめれど限あらむかし。この君も心恥しけれど、ぁたしきかたの覺えはわがかたざまに又さるべき人もおはせず、物のはえにせむに心ことにはたおはする人なればなめりかし。例ならずいそがしうまうで給ひて、人の御うへに見なしたるを、口惜しとも思へらず、なにやかやともろ心にあつかひ給へるを、おとゞは人知れずなまねたしとぞおぼしける。よひ少し過ぐる程におはしましたり。寢殿の南の廂ひんがしによりておまし參れり。御臺八つ、例の御皿などうるはしげに淸らにて又ちひさき臺二つにけそくの皿どもいといまめかしうせさせ給ひてもちひ參らせ給へり。珍しからぬことかきおくこそにくけれ。おとゞ渡り給ひて、「夜いたう更けぬるを」と女房してそゝのかし聞え給へどいとあされて

とみにも出で給はず、北の方の御はらからの左衛門督藤宰相などばかり物し給ふ。辛うじて出で給へる御さまいと見るかひある心ちす。あるじの頭中將御盃さゝげて御臺まゐる。つぎつぎの御かはらけ、二たび三たびまゐり給ふ。源中納言のいたうすゝめ給へるに宮少しほゝゑみ給へり。わづらはしきわたりをとふさはしからず思ひていひしをおぼし出づるなめり。されど見知らぬやうにていとまめなり。ひんがしのたいに出で給ひて御供の人々もてはやし給ふ。おぼえある殿上人どもいとおほかり。四位六人は女のさうぞくにほそながそへて、五位十人はみへがさねのからぎぬ、もの腰も皆けぢめあるべし。六位四人は綾のほそなが、袴などかつは限あることを飽かずおぼしければ、物の色しざまなどをぞ淸らをつくし給へりける。めしつぎとねりなどの中にみだりがはしきまでいかめしうなむありける。げにかくにぎはゝしう華やかなることは、見るかひあれば物語などにもまづいひたてたるにやあらむ。されどくはしうはえぞ算へたてざりけるとや。中納言殿のごぜんの中に、なまおぼえあざやかならぬや暗きまぎれに立ちまじりたりけむ。かへりてうち歎きて、「わが殿のなどかおいらかにこの殿の御婿にうちならせ給ふまじき。あぢきなき御ひとりずみなりや」と中門のもとにてつぶやきけるを聞きつけ給ひてをかしとなむおぼしける。夜の更けてねぶたきに、かのもてかしづかれける人々は心地よげにゑひみだれてよりふしぬらむかしと、うらやましきなめりかし。君は入りて臥し給ひて、はしたなげなるわざかな、ことごとしげなるさましたる親の出でゐて離れぬなからひなれど、これかれ火あかうかゝげてすゝめ聞ゆる盃など

をいとめやすくもてなし給ふめりつるかなと、宮の御ありさまをめやすく思ひ出で奉り給ふ。げに我にてもよしと思ふをんなごをもたらましかば、この宮をおき奉りてうちにだにえ參らせざらましと思ふに、誰も誰も宮に奉らむと心ざし給へるむすめは猶源中納言にこそと、とりどりにいひならぶなることそ我がおぼえの口惜しくはあらぬなめれ、さるはいとあまり世づかずふるめいたるものをなど心おごりもせらる。うちの御けしきあること誠におぼしたらむに、かくのみものうく覺えばいかゞすべからむ、おもだゝしき事にはありともいかゞはあらむ、いかにぞ故君にいとよく似給へらむ時に嬉しからむかしと思ひよらるゝはさすがにえもてはなるまじき心なめりかし。例のねざめがちなるつれづれなれば、あぜちの君とて人よりは少し思ひまし給へるがつぼねにおはして、その夜は明し給ひつ。明け過ぎたらむを人の咎むべきにもあらぬに、苦しげに急ぎおき給ふを、たゞならず思ふべかめり。

「うちわたし世にゆるしなき關川をみなれそめけむ名こそをしけれ」。いとほしければ、

「深からずうへは見ゆれどせき川のしたのかよひはたゆるものかは」。深しとのたまはむにてだにたのもしげなきを、このうへの淺さはいとゞ心やましう覺ゆらむかし。妻戸を押しあけて「まことはこのそらを見給へ。いかでかこれを知らず顏にてはあかさむとよ。えんなる人まねにはあらで、いとゞ明しがたくなり行くよなよなのねざめにはこの世後の世までなむ思ひやられて哀なる」などいひまぎらはしてぞ出で給ふ。殊にをかしきことのかずを盡さねどさまのなまめかしき見なしにやあらむ、なさけなくなどは人に思はれ給はず。かりそ

めのたはぶれごとをも いひそめ給へる人の、けぢかくてだに見奉らばやとのみ思ひ聞ゆるにや。あながちに世を背き給へる宮の御方にえんを尋ねつゝ參り集まりて侍らふも、哀なることほどほどにつけつゝ多かるべし。宮は女君の御ありさまひるみ聞え給ふに、いとゞ御志まさりにけり。おほきさよき程なる人のやうだいいと淸げにて、髮のさがりばかしらつきなどぞものよりことにあなめでたと見え給ひける。色あひあまりなるまで匂ひて、ものものしくけだかき顏のまみいと恥しげにらうらしう、すべて何事もたらひてかたちよき人といはむに飽かぬ所なし。はたちにひとつふたつぞあまりたまへりける。いはけなき程ならねばかたなりに飽かぬ所なく、あざやかに盛の花と見え給へり。限なくもてかしづき給へるにかたほならず。げに親にては心も惑はし給ひつべかりけり。唯やはらかにあいぎやうづきらうたきことはかの對の御方はまづおぼし出でられける。物のたまふいらへなども、はぢらひ給へれど又あまり覺束なくはあらず。すべていとみどころおほくかどかどしげなり。よき若人どもも三十人ばかり、わらは六人、かたほなるなく、さうぞくなども例の麗はしきことはめなれておぼさるべかめれば、引きたがへ心得ぬまでこのみそし給へる。三條殿腹のおほい君を春宮に參らせ給へるよりも、この御ことをばいとことに思ひおきて聞え給へるも、宮の御おぼえありさまからなめり。かくてのち二條院にえ心安くも渡り給はず。かろらかなる御身ならねばおぼすまゝに晝の程などもえ出で給はねば、やがて同じ南の町に年頃ありしやうにおはしまして、暮るれば又えひきよぎても渡り給はずなどして待遠になるをりをりあるを、か

丶らむずる事とは思ひしかどさしあたりてはいとかうしもやは名殘なかるべき、げに心あらむ人は數ならぬ身を知らでまじらふべき世にもあらざりけりと、かへすがへすも山路わけ出でけむ程うつゝとも覺えず悔しく悲しければ、猶いかで忍びて渡りなむ、むげに背くさまにはあらずともしばし心をも慰めばや、にくげにもてなしなどもせばこそうたてもあらめなど心ひとつに思ひあまりて、恥しけれど中納言殿に御文奉れ給ふ。「一日の御ことは阿闍梨の傳へたりしに委しう聞き侍りにき。かゝる御心の名殘なからましかばいかにいとほしくと思ひ給へらるゝにもおろかならずのみなむ。さりぬべくはみづからも」と聞え給へり。みちのくにがみにひきもつくろはずまめだちて書き給へるしもいとをかしげなり。故宮の御忌日に例の事どもいとたふとくせさせ給へりけるを、喜び聞え給へるさまのおどろおどろしうはあらねどげに思ひ知り給ふなめりかし。例はこれより奉る御返りをだに、うち解けずつゝましげにおぼしてはかばかしくも續け給はぬを、みづからとさへのたまへるが珍しく嬉しきに心ときめきもしぬべし。宮の今めかしくこのみたち給へる程にておぼし怠りにけるも、げに心苦しくおしはからるればいと哀にて、をかしやかなることもなき御文をうちもおかずひき返しひき返し見居給へり。御返りはうけ給はりぬ。「一日はひじりだちたるさまにて殊更に忍び侍りしも、さ思ひ給ふるやう侍るころほひにてなむ名殘とのたまはせたるこそ、少し淺くなりにたるやうにとうらめしう思ひ給へらるれ。よろづは今さぶらひてなむ。あなかしこ」とすくよかに白き色紙のこはごはしきにてあり。さて又の日の夕つ方ぞ

渡り給へる。人知れず思ふ心しそひたれば、あいなく心づかひいたうせられて、なよゝかなる御ぞどもをいとゞ匂はしそへ給へるはあまりおどろおどろしきまであるにちやうじぞめの扇もてならし給へるうつりがなどさへ たとへむ方なくめでたし。女君もあやしかりし夜のことなど思ひ出で給ふ折々なきにしもあらねば、まめやかに哀なる御心ばへの人に似ず物し給ふを見るにつけて、さてもあらましをとばかりは思ひもやし給ふらむ、いはけなき程にしおはせねば、うらめしき人の御有様を思ひくらぶるには何事もいとゞこよなく思ひ知られ給ふにや、常にはへだて多かるもいとほしく物思ひ知らぬさまに思ひ給ふらむなど思ひ給ひて、今日はみすの内に入れ奉り給ひて もやのみすに几帳そへて我は少しひきいりてたいめし給へり。「わざと召しとはべらざりしかど例ならず許させ給へりしよろこびにすなはちも参らまほしく侍りしを、宮渡らせ給ふと承りしかば折悪しくやはとてけふになし侍りにける。さは年頃のしるしもやうやうあらはれ侍るにや。隔少しうすらぎ侍りにける御簾のうちよ。珍しく侍るわざかな」とのたまふに、猶いとはづかしくいひ出でむ言の葉もなき心ちすれど、「一日嬉しく聞き侍りし心の中を、例の唯むすぼゝれながら過し侍りなば思ひ知るかたはしをだにいかでかはと口惜しさに」といとつゝましげにのみのたまふが、いたくしぞきてたえだえほのかに聞ゆれば心もとなくて、「いと遠くも侍るかな。まめやかに聞えさせ承らまほしき世の物語も侍るものを」とのたまへば、げにとおぼして少しみじろきより給ふけはひを聞き給ふにもふと胸うちつぶるれど、さりげなくいとゞしづめたるさまして

宮の御心ばへ思はずに淺うおはしけりとおぼしく、かつはいひもうとめ又なぐさめもかたがたにしづしづと聞え給ひつゝおはす。女君は、人の御うらめしさなどは打ち出で語らひ聞え給ふべき事にもあらねば、唯世やは憂きなどやうに思はせてことずくなに紛はしつゝ、山里にあからさまに渡し給へとおぼしくいとねんごろに思ひてのたまふ。「それはしも心ひとつにまかせてはえ仕うまつるまじきことに侍るなり。猶宮に唯心美くしう聞させ給ひてその御けしきに従ひてなむよく侍るべき。さらずは少しもたがひめありて心輕くもなどおぼしものせむにいとあしう侍りなむ。さだにあるまじうは道のほどの御おくりむかへもおりたちて仕うまつらむに何の憚りかは侍らむ。うしろやすく人に似ぬ心の程は宮も皆知らせ給へり」などはいひながら、をりをりは過ぎにし方のくやしさを忘るゝをりなく、物にもがなやと、とりかへさまほしきさまなどほのめかしつゝ、やうやう暗うなり行くまでおはするにいとうるさく覺えて、「さらば心ちも惱ましくのみ侍るを、又よろしく思ひ給へらむほどになにごとも」とて入り給ひぬるけしきなるが、いと口惜しければ、「さてもいつばかりにおぼしたつべきにか。いとしげう侍りし道の草も少しうち拂はせ侍らむかし」と心とりに聞え給へば、暫し入りさして、「この月は過ぎぬべかめればついたちのほどにもとこそは思ひ侍れ。唯いと忍びてこそよからめ。何か世のゆるしなどことごとしうは」とのたまふ聲の、いみじうらうたげなるかなと常よりも昔思ひ出でらるゝにえつゝみあへでよりゐ給へる柱のもとのすだれのしたより、やをらおよびて御袖をひかへつ。女、さりやあな心うと思ふに、

何事かはいはれむ、もののいはでいとゞひき入り給へば、それにつきていとなれがほになからは内に入りてそひふし給へり。「あらずや。忍びてはよかるべうおぼすヿもありけるが、嬉しきはひがみゝかと聞えさせむとぞうとうとしくおぼすべきにもあらぬを、心うの御けしきや」と怨み給へば、いらへすべき心ちもせず、思はずにくゝ思ひなりぬるを、せめて思ひ志づめて、「思の外なりける御心のほどかな。人の思ふらむヿよ。あさまし」とあばめて泣きぬべき氣色なる、少しはことわりなればいとほしけれど、「これはとがあるばかりのヿかは。かばかりの對面はいにしへをもおぼし出でよかし。すぎにし人の御許しもありしものを、いとこよなうおぼされにけるこそ、なかなかうたてあれ。すきずきしくめざましき心はあらじと心安くおぼせ」とていとのどやかにもてなし給へれど、月頃悔しと思ひ渡る心のうちの苦しきまでなり行くさまをつぶつぶといひつゞけ給ひて、許すべきけしきにもあらぬに、せむ方なくいみじとも世の常なり、なかなかむげに心知らざらむ人よりも恥しう心づきなくてない給ひぬるを、「こはなぞ。あなわかわかし」とはいひながらいひ知らずらうたげに心苦しきものから川意深く恥しげなるけはひなどの、見し程よりもこよなくねびまさり給へりけるなどを見るに、心からよそ人に志なしてかく安からず物を思ふヿと悔しきにも又げにねはなかれけり。近うさぶらふ女房二人ばかりあれど、すゞろなる男の入り來たるならばこそはこはいかなることぞとも參りよらめ、かくうとからず聞えかはし給ふ御なからひなめればさるやうこそはあらめと思ふにかたはらいたければ、知らずがほにてやをら志ぞきぬる

ぞいとほしきや。男君はいにしへを悔ゆる心の忍びがたきなども いと志づめがたかりぬべかめれど、昔だにありがたかりし御心の用意なれば猶いと思ひのまゝにもてなし聞え給はざりけり。かやうのすぢはこまかにもえなむまねびつゞけざりける。かひなきものから人めのあいなきを思へば、萬に思ひ返して出で給ひぬ。まだよひと思ひつれど、曉近うなりにけるを、見咎むる人もやあらむとわづらはしきも、女の御ためのいとほしきぞかし。惱ましげに聞き渡る御心ちはことわりなりけり。いと恥しと思ひ給へりつる腰の志るしに 多くは心苦しう覺えてもやみぬるかな例のをこがましの心やと思へどなさけなからむことは猶いとほいなかるべし。又たちまちの我が心亂れにまかせてあながちなる心をつかひて 後心安くしもえあらざらむものから、わりなく忍びありかむ程も心づくしに、女のかたがたおぼし亂れむことよなどさかしく思ふにせかれず 今のまも戀しきぞわりなかりける。更に見ではえあるまじく覺え給ふもかへすがへすあやにくなる心なりや。昔よりは少し細やぎて あてにらうたかりつるけはひなどは、たちはなれたりとも覺えず、身にそひたる心ちして更にことごとも覺えずなりにたり。宇治にいと渡らまほしげにおぼい給ふめるを さもや渡し聞えてましなど思へど、まさに宮は許し給ひてむや、さりとて忍びてはたいとびんなからむ、いかさまにしてかは人目見苦しからで思ふ心の行くべきなど、心もあくがれてながめふし給へり。まだいと深きあしたに御文あり。例のうはべはいとけざやかなるたてぶみにて、

「いたづらにわけつるみちの露しげみ むかしおぼゆる秋の空かな。 御けしきの心うさは

ことわり知らぬつらさのみなむ聞えさせむかたなく」とあり。御かへしなからむも人の例ならず見咎むべきをいと苦しければ「うけたまはりぬ。いとなやましうてえ聞えさせず」とばかり書き給へるを、あまりことずくなゝるかなとさうざうしくて、をかしかりつる御けはひのみ戀しう思ひ出でらる。少し世の中をも知り給へるけにや、さばかりあさましうわりなしとは思ひ給へりつるものから、ひたぶるにいぶせくなどはあらで いとらうらうしく恥しげなる氣色もそひて、さすがになつかしういひこしらへなどして いだし給へるほどの御心ばへなどを思ひ出づるも妬うも悲しうもさまざまに心にかゝりて わびしくおぼゆ。何事もいにしへにはいと多くまさりて思ひ出でらる。何かはこの宮かれはて給ひなば我をたのもし人に志給ふべきにこそはあめれ、さてもあらはれて心安きさまにはえあらじを忍びつゝ又思ひます人なき心のとまりにてこそはあらめなど唯この事のみつと覺ゆるぞけしからぬ心なるや。さばかり心深げにさかしがり給へど男といふものゝ心うかりけることよ。なき人の御悲しさは いふかひなき方にても いとかう苦しきまではなかりけり。これはよろづにぞ思ひめぐらされ給ひける。「今日は宮渡らせ給ひぬ」など人のいふを聞くにもうしろみの心はうせて胸うちつぶれていとうらやましう覺ゆ。宮は日頃になりにけるは わが御心さへうらめしうおぼされて俄に渡り給へるなりけり、何かは心隔てたるさまにも見え奉らじ、山里にと思ひたつにもたのもし人に思ふ人もうとましき心添ひ給へりけりと見給ふに、世の中いと所せう思ひなられて猶いとうき身なりけりと唯消えせぬほどはあるにまかせておいらか

ならむと思ひはてゝ、いとらうたげに心うつくしきさまにもてなして居給へれば、いとゞ哀に嬉しくおぼされて日頃のをこたりなどかぎりなくのたまふ。御腹も少しふくらかになりにたるに、かの恥ぢ給ふしるしの帶のひきゆはれたるほどなどいとあはれに、まだかゝる人をけぢかくても見給はざりければ珍しくさへおぼしたり。うち解けぬ所にならひ給ひてよろづのこと心安くなつかしうおぼさるゝまゝに、おろかならぬことゞもを盡せずのたまひ契るを聞くにつけても、かくのみことよきわざにやあらむとあながちなりつる人の御けしきも思ひ出でられて、年頃哀なる御心ばへとは思ひ渡りつれどかゝるかたざまにては哀をもあるまじきことと思ふにぞ、この御行くさきのたのめはいでやと思ひながらも少し耳とまりける、さてもあさましうたゆめたゆめて入り來たりしほどよ、昔の人にうとくて過ぎにしことなど語り給ひし心ばへはげにありがたかりけれど、猶うちとくべくあらざりけりかしなどいよいよ心づかひせらるゝにも、久しくとだえ給はむ事はいと物恐しかるべく覺え給へば、ことに出でゝはいはねど過ぎぬる方よりは少しまつはしざまにもてなし給へるを、宮はいとゞ限なう哀とおぼしたるに、かの人の御うつりがのいと深うしみ給へるが世の常の香のかにいれたきしめたるにも似ずしるき匂ひなるを、その道の人にしおはすれば怪しと咎めいで給ひて、いかなりしことぞとけしきとり給ふに、殊のほかにもてはなれぬことにしあればいはむかたなくわりなくていと苦しと覺えたるを、さればよ必ずさることはありなむ、よもたゞには思はじと思ひ渡ることぞかしと御心さわぎけり。さるはひとへの御ぞなど

もぬぎかへ給ひてけれど怪しう心より外にぞ身にしみにける。「かばかりにてはのこりありてしもあらじ」と萬に聞きにくゝのたまひつゞくるに、心うくて身ぞおきどころなき。「思ひ聞ゆるさまとなるものを、我にこそさきになどかやうにうち背くきはゝことにこそあれ。又御心おき給ふばかりのほどやはへぬる。思のほかにうかりける御心かな」とすべてまねぶべくもあらず、いとい・とほしげに聞え給へどともかくもいらへ給はぬさへいとねたくて、

「また人になれける袖のうつりがを我が身にしめてうらみつるかな」。女はあさましうのたまひつゞくるに、いふべきかたもなくいかゞはとて、

「見なれぬる中の衣とたのみしを かばかりにてやかけはなれなむ」とてうち泣き給へるけしきの限なう哀なるを見るにも、かゝればぞかしといとゞ心やましくて、我もほろほろとこぼし給ふぞ色めかしき御心なるや。誠にいみじきあやまちありとも ひたぶるにはえぞうとみはつまじく、らうたげに心苦しきさまのし給へればえも怨みはて給はず、のたまひさしつゝかつはこしらへ聞え給ふ。又の日も心のどかに大殿ごもり起きて御てうづ御かゆなどもこなたにまゐらす。御しつらひなども さばかり輝くばかり高麗もろこしの錦綾をたちかさねたるめうつしには、よのつねにうちなれたる心ちして人々のすがたも なえばみたるうちまじりなどしていとしづかに見まはさる。君はなよゝかなるうす色どもに 撫子のほそながが襲ねてうち亂れ給へる御さまの、何事もいとうるはしく ことごとしきまで盛なる人の御よそひ、何くれに思ひくらぶれどけ劣りてもおぼえず。なつかしうをかしきは志のおろかな

らぬにはおなきなめりかし、まろに美くしくこえ給へりし人の少しほそやぎたるに色はいよいよ白うなりてあてにをかしげなり、かゝる御うつりがなどの いちじるからぬをりだに愛ぎやうづきらうたき所などの猶人には多くまさりておぼさるゝまゝにはこれをはらからなどにはあらぬ人のけぢかくいひ通ひてことにふれつゝおのづから聲けはひをも聞き見馴れむはいかでかたゞにも思はむ、必ずしか思ひよりぬべきことなるをと我がいとくまなき御心ならひにおぼし知らるれば、常に心をかけてしるきさまざまなる文などやあると近きみ厨子こからびつなどやうのものをもさりげなくて見給へど、さるものもなし。唯いとすくよかにことずくなにてなほなほしきなどぞ わざとしなけれど物にとりまぜなどしてもあるを、あやし猶いとかくのみはあらじかしとうたがはるゝに、いとゞけふはやすからずおぼさるることわりなりかし。かの人のけしきも心あらむ女の哀と思ひぬべきを、などてかはことの外にはさしはなたむ、いとよきあはひなればかたみにぞ思ひかはすらむかしと思ひやるぞわびしくはらだゝしくねたかりける。猶いとやすからざりければ、その日もえいで給はず。六條院には御文をぞ二たび三たび奉れ給ふを、いつのほどにつもる御言の葉ならむとつぶやくおい人どもゝあり。中納言の君は宮のかく籠りおはするを聞くにしも心やましく覺ゆれど、わりなしや、わが心のをこがましうあしきぞかし、うしろやすくと思ひそめてしあたりのことをかくは思ふべしやと、しひてぞ思ひ返して、さはいへどえおぼし捨てざめりかしと嬉しくもあり、人々のけはひなどのなつかしきほどに、なえばみためりしを思ひやり給ひ

て、母宮の御方に參り給ひて、「よろしきまうけのものどもやさぶらふ。つかふべきことなむ」と申したまへば、「例のたゝむ月の法事のれうに白きものどもなどやあらむ。染めたるなどは今はわざともしおかぬをいそぎてこそせさせめ」とのたまへば、「なにかことごとしきようにも侍らず、侍はむに淸けなる細長ども、「とて、みくしげ殿などに問はせたまひて、女のさうぞくどもあまたくだりに淸けなる細長どもゝ、たゞあるにしたがひて、たゞなる絹綾などとりぐしたまふ。みづからの御れうとおぼしきには、わが御料にありけるくれなゐのうちめなべてならぬに白き綾どもなどあまたかさね給へるに、袴のぐなかりけるにいかにかありけむ、こしのひとつありけるを引き結びくはへて、

「むすびける契ことなる下紐をたゞひとすぢにうらみやはする」。たいふの君とて、おとなおとなしき人のむつましげなる人につかはす。「とりあへぬさまの見苦しきを、つきづきしうもてかくしてなむ」とのたまひて、御料のは忍びやかなれど箱にてつゝみもことなり。御覽ぜさせねど、さきざきもかやうなる御心しらひは常の事にてめなれにたれば、氣色ばみかへしなどひこじろふべきにもあらねば、いかゞなども思ひ煩はで人々にとりちらしなどしたれば、おのおのさし縫ひなどす。若き人々のお前近う仕うまつるなどをぞ、とりわきてはつくろひたつべき。しもづかへどものいたうなえばみたりつる姿どもなど、白き袷などにてけちえんならぬぞなかなかめやすかりける。誰かは何事をも後見聞ゆる人のあらむ。宮はおろかならぬ御志の程にて萬をいかでとおぼしおきてたれど、こまかなるうちうちのことまで

はいかゞはおぼしよらむ。かぎりもなく人にのみかしづかれてならはせたまへれば、世の中のうちあはずさびしきといかなるものとも知り給はぬ、ことわりなり。えんにそゞろさむく花の露を翫びて世はすぐすべきものとおぼしたる程よりは、思ほす人のためなれば、おのづからをりふしにつけつゝまめやかなることまでもあつかひ知らせ給ふこそ有難くめづらかなることなめれば、いでやなどそしらはしげに聞ゆる御めのとなどもありけり。わらはべなどのなりあざやかならぬ、をりをりうちまじりなどしたるを女君はいとはづかしう、なかなかなる住まひにもあるかななど人知れずはおぼすことなきにしもあらぬに、ましてこの頃は世に響きたる御有樣の華やかさに、かつは宮の內の人の見思ふらむとも人げなきことゝおぼし亂るゝこともそひて歎かしきを、中納言の君はいとよくおしはかり聞え給へば、うとからむあたりには見苦しうくだくだしかりぬべき心ぉらひのさまも、あなづるとはなけれど何かはことごとしくもてたて顔ならむも、なかなか覺えなく見咎むる人やあらむとおぼすなりけり。今ぞ又例のめやすきさまのものどもなどせさせ給ひて御小袿織らせ綾のれう賜はせなどし給ひける。この君しもぞ宮にも劣り聞え給はず、さまことにかしづきたてられて、かたはなるまで心おごりもし世を思ひすまして、あてなる心ざまはこよなけれど、故みこの御山ずみをみそめ給ひしよりぞ、寂しき所のあはれさはさまことなりけりと心苦しうおぼされて、なべての世をも思ひめぐらし深きなさけをもならひ給ひにける。いとほしの人ならはじやとぞ。かくて猶いかでうしろやすくおとなしき人にてやみなむと思ふにもおたが

はず、心にかゝりて苦しければ御文などをありしよりはこまやかにて、ともすれば忍びあまりたる氣色見せつゝ聞え給ふを、女君いとわびしきことそひにたる身とおぼしなげかる。ひとへに知らぬ人ならば、あなものぐるほしと、はしたなめさしはなたむにも安かるべきを、昔よりさまことなるたのもし人にならひきて今さらに中あしうならむもなかなか人めあしかるべし・さすがに淺はかにもあらぬ御心ばへありさまの哀を知らぬにはあらず、さりとて心かはし顏にあへしらはむもいとつゝましく、いかゞはすべからむと萬に思ひ亂れ給ふに、さぶらふ人々も少しものゝいふかひありぬべく若やかなるは皆あたらしき心ちして、見給ひなれたる人とてはかの山里のふる女ばらなり。思ふことをも同じ心になつかしういひあはすべき人のなきまゝには、故姫君を思ひ出で聞え給はぬをりなし。おはせましかば、この人もかゝる心もそへ給はましやといとかなしう、宮のつらくなり給はむなげきよりもこのこといと苦しう覺ゆ。男君もしひて思ひわびて例のしめやかなる夕つ方おはしたり。やがてはしに御しとねさし出させ給ひて「いと惱ましき程にてなむえ聞えさせぬ」と人して聞え出し給へるを聞くに、いみじうつらくて淚の落ちぬべきを人めにつゝめばしひて紛はして「惱ませ給ふをりは知らぬ僧なども近く參りよるを、くすしなどのつらにても み簾の内には侍ふまじうやは。かく人づてなる御せうそこなむかひなき心ちする」と聞え給ひて、いとものしげなる御氣色なるを一夜物のけしき見し人々、げにやいと見苦しう侍るめりとて、も屋の御簾うちおろしてよゐの僧の座に入れ奉るを、女君誠に心ちもいと苦しけれど、人のかういふ

に、うたてけちえんならむも又いかゞとつゝましければ、物うながら少しゐざり出でゝたいめし給へり。いとほのかに、時々ものゝたまふ御けはひの昔の人のなやみそめ給へりしころ、まづ思ひ出でらるゝもゆゝしう悲しうてかきくらす心ちし給へば、とみに物もいはれず、ためらひつゝぞ聞え給ふ。こよなくおくまり給へるもいとつらくて、すのしたより几帳を少しおし入れて例のなれなれしげに近づきより給ふがいと苦しければ、わりなしとおぼして少將の君といふ人を近う召しよせて、「胸なむいたき。しばしおさへて」とのたまふを聞き給ひて、「胸はおさへたるいと苦しう侍るものを」と打ち歎きてゐなほり給ふ程も、げにぞしたやすからぬ。「いかなればかくしも常に惱しうはおぼさるらむ。人に問ひ侍りしかば、しばしこそ心ちもあしかなれ さて又よろしきをりありなどこそ教へ侍りしか。あまりわかわかしくもてなさせ給ふなめりかし」とのたまふに、いとはづかしうて、「胸はいつともなくかくこそは侍れ。昔の人もさこそはものし給ひしか。長かるまじき人のするわざとか人もいひ侍るめる」とぞのたまふ。げに誰もちとせの松ならぬよをと思ふには、いと心苦しう哀なれば、この召しよせたる人のきかむもつゝまれず、かたはらいたきすぢのことをこそえりとゞむれ。昔より思ひ聞ゆるさまなどをかの御みゝひとつには心得させながら人は又かたはにも聞くまじきさまに、よくめやすくぞいひなし給ふを、げに有難き御心ばへにもと聞き居たりけり。何事につけても故君の御事をぞ盡せず思ひ給へる。「いはけなかりしほどより世の中を思ひ離れて止みぬべき心づかひをのみならひ侍りしを、さるべきにや侍りけむ、うと

きものからおろかならず思ひそめ奉りしひとふしに、かのほいのひじり心はさすがにたがひやしにけむ、慰めばかりに此處にも彼處にも行きかゝづらひて人の有樣を見むにつけて紛るゝこともやあらむなど思ひよるをりをり侍れど、更にほかざまには靡くべうも侍らざりけり。よろづに思ひ給へわびては心のひく方の强からぬわざなりければ、すきがましきやうにおぼさるらむと恥しけれど、あるまじき心のかけても侍らばこそめざましからめ、唯かばかりの程にて時々思ふことをも聞えさせ承りなどして隔てなくのたまひ通はむを誰かは咎めいづべき。世の人に似ぬ心のほどは皆人にもどかるまじく侍るを猶うしろやすくを思ほしたれ」など怨みゝなきみ聞え給ふ。「うしろめたく思ひ聞えば、かく怪しと人も見思ひぬべきまでは聞え侍るべくや。年頃こなたかなたにつけつゝ見知ることどもの侍りしかばこそ、さまことなるたのもし人にて今はこれよりなどさへ驚かし聞ゆれ」とのたまへば「さやうなる折も覺え侍らぬものを、いとかしこきことにおぼしおきてのたまはするや、この御山里いでたちいそぎに辛うじてめしつかはせ給ふべき。それもげに御覽じ志るかたありてこそはとおろかにやは思ひ侍る」などのたまひて、猶いとものうらめしげなれど聞く人あれば思ふまゝにもいかでかはつゞけ給はむ。との方をながめいだしたれば、やうやう暗うなりにたるに蟲の聲ばかりまぎれなくて、山の方をぐらくて何のあやめも見えぬに、いと志めやかなるさましてよりゐ給へるも煩はしとのみ内にはおぼさる。「限だにある」など、いと忍びやかにうちずじて「思ひ給へわびて侍り。音なしの里もともめまほしきを、かの山里のわたり

に、わざと寺などはなくとも昔覺ゆる人がたをもつくり繪にも書きとめて行ひ侍らむとなむ思ひ給へなりにたる」とのたまへば、「哀なる御願ひに又うたてみたらし川近き心ちする。人がたこそ思ひやりいとほしう侍れ。こがねもとむる繪師もこそなど、うしろめたうぞ侍るや」とのたまへば、「そよそのたくみも繪師もいかでか心にはかなふべきわざならむ。近き世に花ふらせたるたくみもはべりけるを、さやうならむへん化の人もかな」など、とざまかうざまに忘れむ方なきよしを歎き給ふ氣色のいと心深げなるも、いとほしうわづらはしうて今少しすべりよりて、「人がたのついでに、いと怪しく思ひよるまじきことをこそ思ひ出で侍れ」とのたまふけはひの少しなつかしきも、いと嬉しく哀にて、「何事にか」といふまゝに几帳のもとより手をとらふれば、いとうるさく思ひならるれど、いかさまにしてかゝる心をやめてなだらかにあらむと思へば、この近き人の思はむことのあいなくて、さりげなくもてなし給へり。「年頃は世にあらむとも知らざりし人の、この夏頃遠き處よりものして尋ね出でたりしを、疎くは思ふまじけれど、またうちつけに、さしも何かはむつび思はむと思ひ侍りしを、さいつころきたりしこそ、あやしきまで昔の人の御けはひに通ひたりしかば哀に覺えなり侍りしか、かたみなど、かう思ほしのたまふめるはなかなか何事もあさましうもてはなれたりとなむ皆人々もいひ侍りしを、いとさしもあるまじき人の、いかでかはありけむ」とのたまふを夢がたりかとまで聞く。「さるべき故あればこそは、さやうにもむつび聞えらるらめ。などか今までかくもかすめさせ給はざらむ」とのたまへば「いさや、その故もいかなり

けむことゝも思ひわかれ侍らず。物はかなき有樣どもにて世におちとまりさすらへむとすらむとのみうしろめたげにおぼしたりしことゞもを、唯一人かきあつめて思ひ知られ侍るに、又あいなきことをさへ打ち添へて人も聞き傳へむこそ、いといとほしかるべけれ」とのたまふ氣色を見るに、宮の忍びてものなどのたまひけむ人の、しのぶ草摘み置きたりけるなるべしと見知りぬ。似たりとのたまふゆかりに耳とまりて、「かばかりにても同じうはいひはてさせ給ひてよ」といぶかしがり給へど、さすがにかたはらいたくて、えこまかにも聞え給はず。「尋ねむとおぼす心あらば、そのわたりとは聞えつべけれど、委しうはしもえ知らずや。又あまりいはゞ御心おとりもしぬべきことになむ」とのたまへば、「世をうみなかにもたまのありかたづねには心の限りすゝみぬべきを、いとさまでは思ふべきにはあらざなれど、いとかく慰めむ方なきよりはと思ひより侍る。ひとかたの願ひばかりには、などてかは山里のほんぞんにも思ひ侍らざらむ。猶たしかにのたまはせよ」とうちつけにせめ聞え給ふ。「いさやいにしへの御許しもなかりしことを、かうまでももらし聞ゆるもかつはいと口かるけれど、へん化のたくみもとめ給ふいとほしさにこそ、かくも」とて、「いと遠き所に年頃へにけるを母なる人のいとうれはしきことに思ひてあながちに尋ねよりしを、はしたなくもえいらへで侍りしにものしたりしなり。ほのかなりしかばにや何事も思ひしほどよりは見苦しからずなむ見えし。これをいかさまにもてなさむと歎くめりしに、佛にならむはいとこよなきことにこそはあらめ。さまではいかでかは」など聞えたまふ。さりげなくてかう

うるさき心を、いかではなつわざもがなと思ひ給へると見るはつらけれど、さすがにあはれなり。あるまじきことゝは深く思ひ給へるものから、けしようにはしたなきさまにはえもてなし給はぬも見知り給へるにこそはと思ふ心時めきに夜もいたう更け行くを、内には人めいとかたはらいたく覺え給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば男君ことわりとは返すがへす思へど、猶いとうらめしう口惜しきに、思ひしづめむ方もなき心ちして涙のこぼるゝも人わろければ、よろづに思ひみだるれど、ひたぶるにあさはかならむもてなしはた猶いとうたて我がためもあいなかるべければ、念じかへして常よりもなげきがちにて出で給ひぬ。かくのみ思ひてはいかゞすべからむ、苦しうもあべいかな、いかにしてかは大かたの世のもどきあるまじきさまにて、さすがに思ふ心のかなふわざをばすべからむなど、おりたちれんじたる心ならねばにや、我がため人のためも心安かるまじきことをわりなくおぼしあかす。似たりとのたまひつる人をも、いかでかは誠かとは見るべき、さばかりのきはなれば思ひよらむにかたうはあらずとも人のほいにもあらずは、うるさくこそあるべけれなど、猶そなたざまには心もたゝず、宇治の宮を久しう見給はぬ時はいとゞ昔遠くなる心ちして、すゞろに心ぼそければ、ながつきはつかあまりのほどにおはしたり。いとゞしく風のみ吹き拂ひて心すごうあらましげなる水の音のみやどもりにて人かげもことに見えず。見るにまづかきくらし悲しきことぞかぎりなき。辨の尼召し出でたれば、さうじ口に靑にびの几帳さし出でゝ參れり。「いとかしこけれど、ましていと恐しげに侍れば、つゝましくなむ」とまほには出でこず。

「いかにながめ給ふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき物語も聞えむとてなむ。はかなくも積る年月かな」とて涙をひとめうけておはするに、老びとはいとゞ更にせきもあへず、「人のうへにてあいなくものを思ほすめりし頃の空ぞかしと思ひ給へ出づるに、いつと侍らぬ中にも秋の風は身にしみてつらう覺え侍りて、げにかのなげかせ給ふめりしも、しるき世の中の御ありさまをほのかに承るもさまざまになむ」と聞ゆれば、「とあることもかゝることも、ながらふればなほるやうもあるを、味氣なくおぼししみけむこそわがあやまちのやうに猶悲しけれ。この頃の御ありさまは何かそれこそよのつねなれ。されどうしろめたげには見え聞え給はざめり。いひてもいひてもむなしき空にのぼりぬる煙のみこそ誰ものがれぬことながら後れさきだつほどは猶いとゞいふかひなかりけれ」とてもまた泣き給ひぬ。阿闍梨召して、例のかの御忌日の經佛のことなどのたまふ。「さて此處にかく時々ものするにつけても、かひなきことの安からず覺ゆるがいとやくなきを、この寢殿こぼちて、かの山寺の傍に堂建てむとなむ思ふを同じうはとく始めてむ」とのたまひて、堂いくつ廊ども僧房など、あるべきことゞも書きいでのたまひなどせさせ給ふを「いとたふときこと」と聞えしらす。「昔の人のゆゑある御住まひにしめ造り給ひけむ所をひきこぼたむもなさけなきやうなれど、その御志も功德の方にはすゝみぬべくおぼしけむを、とまり給はむ人々をおぼしやりて、えさはおきて給はざりけるにや。今は兵部卿宮の北の方こそは知り給ふべければ、かの宮の御料ともいひつべくなりにたり。さればこゝながら寺になさむことはびんなかるべし。

心にまかせてさりえせじ。所のさまもあまりに川づら近くけしようにもあれば猶寢殿をうしなひてことざまにも造りかへむの心にてなむ」とのたまへば「とざまかうざまにいともかしこうたふとき御心なり。むかし、別を悲みてかばねをつゝみてあまたの年くびにかけて侍りける人も佛の御はうべんにて、かのかばねの嚢を捨てゝ遂にひじりの道にも入り侍りにける。この寢殿を御覽ずるにつけて御心動きおはしますらむ。ひとへにたいだいしき御事なり。又後の世の御すゝめともなるべきことに侍りけり。急ぎ仕うまつらすべし。こよみの博士のえらび申して侍らむ日をうけ給はりて物のゆゑしりたらむたくみ二三人をたまはりてこまかなることゞもは佛の御教のまゝに仕うまつらせ侍らむ」と申す。とかくのたまひ定めて、みさうの人ども召して、このほどのことゞも阿闍梨のいはむまゝにすべきよしなど仰せ給ふに、はかなく暮れぬればその夜はとゞまり給ひぬ。この度ばかりこそは見めとおぼして、たちめぐりつゝ見給へば、佛も皆かの寺に移してければ尼君のおこなひの具のみあり。いとはかなげに住まひたるを哀にいかにしてすぐすらむと見給ふ。「この寢殿はかへて建つべきやうあり。造り出でむほどはかの廊に物し給へ。京の宮にとり渡さるべきものなどあらば、みさうの人召してあるべからむやうに物し給へ」など、まめやかなることゞもを語らひ給ふ。ほかにてはかばかりさだすぎたらむ人を何かと見入れ給ふべきにもあらねど、よるも近くふせて昔物語などせさせ給ふ。故權大納言の君の御有樣も聞く人なきに心安くていとこまやかに聞ゆ。「今はとなり給ひしほどに珍しくおはしますらむ御有樣をいぶかしきもの

に思ひ聞えさせ給ふめりし御氣色などの思ひ給へ出でらるゝに、かく思ひかけ侍らぬ世の末に、かくて見奉り侍るなむ、かの御世にむつましう仕う奉りおきし志るしのおのづから侍りけると、嬉しくも悲しくも思ひ給へ知られ侍る。「心うき命のほどにて、かくさまざまのことを見給へすぐし思ひ給へ知り侍るなむ、いと恥しう心うくなむ侍る。宮よりも時々は參りて見奉れ、覺束なくたえ籠りはてぬるは、こよなう思ひへだてけるなめりなどのたまはするをりをり侍れど、ゆゝしき身にてなむ。阿彌陀佛よりほかには見奉らまほしき人もなくなりにて侍る」など聞ゆ。故姫君の御事どもはたつきもせず、年頃の御有樣など語りて、何のをりなにとのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなくよみ給ひける歌がたりなどを、つきなからずうちわなゝきたれど、こめかしう、ことずくなゝるものから、をかしかりける人の御心ばへかなとのみ、いとゞ聞きそへ給ふ。宮の御方は今少しいまめかしきものから、心許さゞらむ人のためには、はしたなくもてなし給ひつべくこそものし給ふめるを、我にはいと心深くなさけなさけしとは見えて、いかで過してむとこそ思ひ給へれなど心の中に思ひくらべ給ふ。さて物のついでに、かのかたしろのことをいひ出で給へり。「京にこの頃侍らむとはえ知り侍らず。人づてに承りしことのすぢなゝり。故宮のまだかゝる山ずみもし給はず、故北の方うせ給へりけるほど近かりけるころ中將の君とて侍ひける上臈の心ばせなどもけしうは侍らざりけるを、いと忍びてはかなきほどに物のたまはせけるを知る人も侍らざりけるに、をんなごをなむ産みて侍りけるを、さもやあらむとおぼすことのありけるからに、あいなく

煩しうものしきやうにおぼしなりて、またとも御覧じ入るゝことも侍らざりけり。あいなくそのことにおぼしこりて、やがて大かたひじりにならせ給ひにけるを、はしたなく思ひてえ侍はずなりにけるが、みちのくのかみのめになりてくだりけるをひとゝせのぼりて、その君たひらかに物し給ふよし、このわたりにもほのめかし申したりけるを聞し召しつけて、更にかゝるせうそこあるべきことにもあらずとのたまはせ放ちければ、かひなくてなむ歎き侍りける。さて又常陸になりてくだり侍りにけるが、この年頃おとにも聞え給はざりつるが、この春のぼりてかの宮には尋ね參りたりけるとなむほのきゝ侍りし。かの君の年ははたちばかりになり給ひぬらむかし。いと美しく生ひ出で給ふが悲しきことなどこそ中頃は文にさへ書きつゞけてなむはべめりしか」と聞ゆ。委しう聞きあきらめ給ひて、さらば誠にてもあらむかし、見ばやと思ふ心出で來ぬ。「昔の御けはひにかけてもふれたらむ人は知らぬ國までも尋ね知らまほしき心ちのあるを、かずまへ給はざりけれど思ふにけぢかき人にこそはあなれ。わざとはなくともこのわたりに音なふ折あらむついでに、かくなむいひしと傳へ給へ」などばかりのたまひ置く。「母君は故北の方の御めひなり。辨も離れぬなからひに侍るべきを、そのかみはほかほかに侍りて委しうも見給へなれざりき。さいつころ京より大輔がもとより申したりしは、かの君なむいかでかの御墓にだに參らむとのたまふなる、さる心せよなど侍りしかど、まだこゝにさしはへてはおとなはず侍るめり。今さらにさ樣のついでにかゝるおほせごとなど傳へ侍らむ」と聞ゆ。明けぬれば歸り給はむとて、よべ後れてもて參

れる絹綿などやうのもの阿闍梨におくらせ給ふ。尼君にもたまふ。法師ばら尼君のげすどもの料にとてぬのなどいふものをさへ召してたぶ。心ぼそき住ひなれど、かゝる御とぶらひたゆまざりければ身のほどには、いとめやすくしめやかにてなむ行ひける。木枯のたへがたきまで吹きとほしたるに、殘る梢もなくちりしきたる紅葉をふみ分けゝる跡も見えぬを見わたして、とみにもえ出で給はず。いと氣色ある深山木にやどりたる蔦の色ぞまだ殘りたる。こだになど少しひきとらせ給ひて宮へとおぼしくてもたせ給ふ。

「やどり木と思ひいでずばこのもとの　旅ねもいかにさびしからまし」とひとりごち給ふを聞きて、尼君、

「荒れはつるくち木のもとをやどりきと思ひおきけるほどの悲しさ」。飽くまでふるめきたれど、故なくはあらぬをぞいさゝかの慰めにはおぼされける。宮に紅葉奉れ給へれば男宮おはしますほどなりけり。南の宮よりとて何心もなくもて參りたるを、女君例のむつかしきこともこそと苦しくおぼせど、とりかくさむやは。宮「をかしき蔦かな」とたゞならずのたまひてめしよせて見給ふ。御文には「日頃何事かおはしますらむ。山里に侍りていとゞ峯の朝霧に惑ひ侍りつる、御物語もみづからなむ。かしこの寢殿、堂になすべきこと阿闍梨に物しつけ侍りにき。御許し侍りてこそはほかに移すことも物し侍らめ。辨の尼君にさるべきおほせごとはつかはせ」などぞある。「よくもつれなく書き給へる文かな。まろありとぞ聞きつらむ」とのたまふも少しはげにさやありつらむ。女君はことなきを嬉しと思ひ給ふに、あなが

ちにかくのたまふをわりなしとおぼしてうち怨じて居給へる御さま、萬の罪も許しつべくをかし。「返事書いたまへ。見じや」とてほかざまにそむき給へり。あまえて書かざらむも怪しければ、「山里の御ありきの羨しくも侍るかな。かしこはげにさやうにてこそよくと思ひ給へしを、殊叓に又いはほの中もとめむよりは、あらしはつまじう思ひ侍るを、いかにもさるべきさまになさせ給はゞおろかならずなむ」と聞え給ふ。かうにくき氣色もなき御むつびなめりと見給ひながら我が御心ならひに、たゞならじとおぼすが安からぬなるべし。かれがれなる前栽の中に尾花のものよりことに手をさし出でゝ招くがをかしう見ゆるに、またほに出でさしたるも露をつらぬきとむる玉の緒はかなげにうちなびきなど、例のことなれど夕風なほ哀なりかし。

「ほにいでぬもの思ふらししのずゝき招くたもとの露しげくして」。なつかしきほどの御ぞどもに直衣ばかり着たまひて琵琶を彈きゐたまへり。わうしき調のかきあはせをいと哀にひきなし給へば、女君も心に入り給へることにて物ゑんじもえしはて給はず、ちひさき御几帳のつまより脇息によりかゝりて、ほのかにさしいで給へるいと見まほしくらうたげなり。

「秋はづるのべの氣色もしのずゝきほのめく風につけてこそしれ。我が身ひとつの」とて涙ぐまるゝがさすがに恥しければ扇をまぎらはしておはする心の中もらうたくおしはからるれど、かゝるにこそ人もえ思ひはなたざらめと疑はしきがたゞならでうらめしきなめり。菊のまだよくもうつろひはてゞ、わざとつくろひたてさせ給へるはなかなかおそきに、いか

なるひともとにかあらむ。いと見所ありてうつろひたるをとりわきて折らせ給ひて、「花の中にひとへに」とずじ給ひて、「なにがしのみこの、この花めでたる夕ぞかし、いにしへ天人のかけりて琵琶の手敎へけるは。何事も淺くなりにたる世は物うしや」とて御琴さしおき給ふを、口惜しとおぼして、「心こそ淺くもあらめ、昔を傳へたらむことさへはなどてかさしも」とて、覺束なき手などをゆかしげにおぼいたれば、「さらばひとりごとはさうざうしきにさしいらへし給へかし」とて人召して箏の御琴とりよせさせて彈かせたてまつり給へど、「昔こそまねぶ人ものし給ひしかど、はかばかしう聞きもとめずなりにしものを」とてつゝましげにて手もふれ給はねば、「かばかりのことも隔て給へるこそ心うけれ。この頃見るあたりは、まだいと心とくべきほどにもあらねど、かたなりなるうひことをもかくさずこそあれ。すべて女はやはらかに心美くしきなむよきこととこそその中納言も定むめりしか。かの君にはたかうもつゝみ給はじ、こよなき御中なめれば」などまめやかにうらみられてぞうち歎きて少ししらべ給ふ。ゆるびたりければ、ばんしき調にあはせ給ふ。かきあはせなど、つまおとをかしう聞ゆ。伊勢の海謠ひ給ふ御聲のあてにをかしきを女ばら物のうしろに近づき參りて、ゑみひろごりてゐたり。「ふたごゝろおはしますはつらけれど、それもことわりなれば猶わがお前をばさいはひびとゝこそ申さめ。かゝる御ありさまにまじらひ給ふべくもあらざりし年頃の御住まひを又歸りなまほしげにおぼしてのたまはするこそいと心うけれ」など、たゞいひにいへば、若き人々は、「あなかまや」と制す。御ことども敎へ奉りなどしつゝ、三四日籠りお

はして、御物忌などことつけ給ふを、かの殿にはうらめしくおぼして、おとゞうちより出で給ひけるまゝに此處に參り給へれば、宮ことごとしげなるさまして、「何しにいましつるぞとよ」とむつかり給へど、あなたに渡り給ひてたいめし給ふ。「ことなることなき程はこの院を見で久しうなり侍るも哀にこそ」など昔の御物語など少し聞え給ひて、やがてひきつれ聞え給ひて出で給ひぬ。御子どもの殿ばら、さらぬ上達部殿上人なども いと多くひき續き給へる、御いきほひこちたきを見るに、ならぶべくもあらぬぞくしいたかりける。人々のぞきて見奉りて、「さも淸らにおはしけるおとゞかな。さばかりいづれともなく若うさかりにて淸げにおはさうずる御子どもの似給ふべきもなかりけり。あなめでたや」といふもあり、又「さばかりやんごとなげなる御さまにて、わざと御迎に參り給へるこそにくけれ。やすげなの世や」など打ち歎くもあるべし。御自らもきし方を思ひ出づるよりはじめ、かの華やかなる御なからひに立ちまじるべくもあらず、かすかなる身のおぼえをといよいよ心ぼそければ、猶心安く籠り居なむのみこそめやすからめなどいとゞ覺え給ふ。はかなくて年も暮れぬ。むつきのつごもりがたより例ならぬさまに惱み給ふを、宮又御覽じ知らぬことにて、いかならむとおぼし歎きて、みずほふなど所々にてあまたせさせ給ふ。又々始めそへさせ給ふ。いといたう煩ひ給へば、きさいの宮よりも御とぶらひあり。かくて三とせになりぬれど、一所の御志こそおろかならね。大かたの世にはものものしうもてなし聞え給はざりつるを、このをりぞ、いづこにもいづこにも聞し召し驚きて御とぶらひども聞え給ひける。中納言の君は宮

のおぼし騒くらむにも劣らず、いかにおはせむと歎きて心苦しくうしろめたくおぼさるれど、限ある御とぶらひばかりこそあれ、あまりもえまうで給はで忍びてぞ御いのりなどもせさせ給ひける。さるは女二の宮の御もぎたゞこのごろになりて世の中ひゞきいとなみのゝしる。よろづのこと帝の御心ひとつなるやうにおはし急げは、御後見なきしもぞなかなかめでたげに見えける。女御のしおき給へることをばさるものにて、つくもどころさるべきずりやうどもなどとりどりに仕うまつる事どもいと限なし。やがてその程に參りそめ給ふべきやうにありければ、男がたも心づかひし給ふころなれど、例のことなればそなたざまには心もいらで、この御こととのみいとほしうおぼし歎かる。二月のついたちごろに、なほしものとかいふことに權大納言になりて右大將かけ給ひつ。右のおほい殿左にておはしけるが辭し給へる所なりけり。よろこびに所どころありき給ひて、この宮にも參り給へり。いと苦しうし給へば、こなたにおはします程なりければやがて參り給へり。僧などさぶらひて、いとびんなきかたにと驚き給ひて、あざやかなる御なほし、御したがさねなど奉り、ひきつくろひて、おりてたふの拜したまふ御有樣どももとりどりにいとめでたし。やがて今宵つかさの人に祿たまふ。あるじの所にとさうじ奉り給ふを、惱み給ふ人によりてぞおぼしたゆたひ給ふめる。左のおほい殿のし給ひけるまゝにとて六條院にてなむありける。ゑんがのみこたち、上達部、大饗に劣らず、あまりさわがしきまでなむつどひ給ひける。この宮もわたり給ひて、しづ心なければまだことはてぬに急ぎ歸り給へるを、おほい殿の御方には「いと飽かずめざま

しう」とのたまふ。劣るべうもあらぬ御程なるを只今のおぼえの華やかさにおぼしおごりておじたちもてなし給へるなめりかし。からうじてその曉に男にてうまれ給へるを、宮もいとかひあるさまにて嬉しくおぼしたり。大將殿も喜びに添へて嬉しくおぼす。よべおはしましたりしかしこまりに、やがてこの御よろこびも打ち添へてたちながら參り給へり。かく籠りおはしませば參り給はぬ人なし。御うぶやしなひ三日は例の唯宮の御わたくしごとにて、五日の夜、大將殿よりとんじき五十具、ごてのぜに、わうはんなどは世のつねのやうにて、こもちのお前のついかさね三十、ちごの御ぞいつへがさねにて御むつきなどぞことごとしからず忍びやかに志なし給へれど、こまかに見ればいとわざとめなれぬ心ばへにぞ見えける。宮のお前にも、せんかうのをしき、たかつきどもにて、ふずく參らせたまへり。女房のお前にはついかさねをばさるものにて、ひわりご三十、さまざま志つくしたることどもあり。人目にことごとしくはことさら志なし給はず。七日の夜はきさいの宮よりの御うぶやしなひなれば參り給ふ人々いと多かり。宮の大夫をはじめて殿上人上達部數知らず參り給へり。内にも聞し召して、宮の始めておとなび給ふなるにはいかでかはとのたまはせて御はかし奉らせ給へり。九日も、おほい殿より仕うまつらせ給へり。よろしからずおぼすあたりなれど宮のおぼさむ所あれば、御子の君達など參り給ひて、すべていと思ふことなげにめでたければ、御みづからも月頃物思はしく心ちの惱しきにつけても心ぼそうおぼしわたりつるに、かくおもだゝしう今めかしき事どもの多かれば少しは慰みもや志給ふらむ、大將殿は、かくのみお

となびはて給ふめれば、いとゞわがかたざまはけどほくやならむ、又宮の御志も、えおろかならじと思ふは口惜しけれど又始よりの心おきてを思ふには いとうれしうもあり。かくてその月二十日あまりのほどにぞ、藤壺の宮の御もぎのことありて、またの日なむ大將參り給ひける。その夜のことは忍びたるさまなり。天の下ひゞきていつくしく見えつる御かしづきにたゞ人のぐし奉り給ふぞ猶飽かず心苦しく見ゆる。「さる御ゆるしはありながらも只今かくしも急がせ給ふまじきことぞかし」とそしらはしげに思ひのたまふ人もありけれど、おぼしたちぬることとすがすがしうおはします御心にて、きし方のためしなきまで同じくばもてなさむとおぼしおきつるなめり。みかどの御婿になる人は昔も今も多かれど、かく盛の御世にたゞ人のやうに婿どり急がせ給へるたぐひは少くやありけむ。左のおとゞも珍しかりける人の御おぼえ宿世なり。「故院だに朱雀院の御末にならせ給ひて、今はとやつし給ひしきはにこそかの母宮をえ奉り給ひしか、我はまいて人も許されぬものを、ひろひたりしや」とのたまひつれば宮はげにとおぼすに、恥しうて御いらへもえ聞え給はず。三日の夜は大藏卿よりはじめて、かの御かたの心よせになさせ給へる人々けいしにおほせごとたまひて忍びやかなれど、かのごぜん、隨身、車ぞひ、舍人などまで祿たまはす。そのほどのことは私ごとのやうにぞありける。かくてのちは忍び忍びに參り給ふ。心のうちには猶忘れ難きいにしへざまのみ覺えて、晝は里に起き臥しながめくらして暮るれば心よりほかに急ぎ參り給ふも、ならはぬ心ちにいと物うく苦しうて、まかでさせ奉らむことをぞおぼしおきてける。母宮は

いと嬉しきことにおぼして、おはします寢殿を讓り聞え給ふべくのたまへど、いとかたじけなからむとて御ねんず堂のあはひに廊をつゞけて造らせ給ふ。西おもてにうつろひ給ふべきなめり。ひんがしの對どもなども燒けて後、麗しくあたらしくあらまほしきをいよいよ磨きそへつゝこまかにしつらはせ給ふ。かゝる御心づかひを内にも聞し召して程なく打ち解けうつろひ給はむをいかゞとおぼしたり。帝ときこゆれど心のやみは同じことになむおはしましける。母宮の御許に御使ありける御文にも唯この御事をのみなむ聞えさせ給へりける。故朱雀院のとりわきてこの尼君の御ことをば聞え置かせ給ひしかば、かく世をそむき給へれどおとろへず何事ももとのまゝに、奏せさせ給ふことなどは必ず聞し召しいれ、御用意深かりけり。かくやんごとなき御心どもに、かたみに限りもなくもてかしづきさわがれ給ふおもだゝしさも、いかなるにかあらむ、心のうちには殊に嬉しくも覺えず、猶ともすれば、うちながめつゝ宇治の寺造ることをば急がせ給ふ。宮の若君のいかになり給ふ日、かぞへとり給ひて、そのもちひのいそぎを心に入れて、こものひわりごなどまでみいれつゝ、よのつねのなべてにはあらずとおぼし心ざして、ぢん、紫檀、しろがね、こがねなど道々の細工どもいと多く召し侍はせ給へば、我劣らじとさまざまの事どもをしいづめり。みづからも例の宮のおはしまさぬひまにおはしたり。心のなしにやあらむ、今少しおもおもしく、やんごとなげなる氣色さへ添ひにたりと見ゆ。今はさりともむつかしかりしすゞろごとなどは思ひまぎれ給ひにたらむと心安くてたいめし給へり。されどありしながらの氣色にまづ涙ぐみて「心に

もあらぬまじらひ、いとゞ思のほかなるものにてそと、世を思ひ給へ亂るゝことのみなむまさりにたる」と、あいだちなくぞ憂へ給ふ。「いとあるまじき御ことかな。人もこそおのづからほのかにも漏り聞き侍れ」などはのたまへど、かばかりめでたげなる事どもにもなぐさまず忘れがたう覺え給ふらむ心深さよと哀に思ひ聞え給ふに、おろかにもあらず思ひ知られたまふ。おはせましかばと口惜しう思ひ出で聞え給へど、それもわが有樣のやうにうらやみなく身を怨むべかりけるかし、何事も數ならでは世の人めかしきこともあるまじかりけりと覺ゆるにぞ、いとゞかの打ち解けはてゝやみなむと思ひ給へりし御心おきては猶殊に重々しう思ひ出でられ給ふ。若君をせちにゆかしがり聞え給へば、恥しけれど何かはへだて顏にもあらむ、わりなきことひとつにつけて怨みらるゝよりほかにはいかでこの人の御心にたがはじとおぼして、自らはともかくもいらへ聞え給はで、めのとしてさしいでさせ給へり。さらなることなれば、にくげならむやは。ゆゝしきまで白く美くしうて、たかやかに物語し、うちゑみ給へる顏を見るに我がものにて見まほしう、うらやましきも世の思ひはなれがたくなりぬるにやあらむ。されどいふかひなくなり給ひにし人の世の常の有樣にてかやうならむ人をもとゞめおき給へらましかばとのみ覺えて、この頃おもだゝしげなる御あたりに、いつしかなどは思ひよらぬこそあまりすべなき君の御心なめれ。かくめゝしくねぢけて、まねびなすこそいとほしけれ。しかわろびかたほならむ人を帝のとりわきせちに近づけてむつび給ふべきにもあらじものを、まことしきかたざまの御心おきてなどこそは めやすくものし給ひけ

めとぞ推し量るべき。げにいとかく幼きほどを見せ給へるも哀なれば例よりは物語などこまやかに聞え給ふほどに、暮れぬれば心やすく夜をだにふかすまじきを苦しう覺ゆれば、なげくなげく出で給ひぬ。「をかしの人の御にほひや。をりつればとかいふやうに鶯も尋ね來ぬべかめり」など煩しがる若き人もあり。夏にならば三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、うづき朔日頃せちぶんとかいふこと、まだしきさきに渡し奉りぬ。あすとての日、藤壺にうへわたらせ給ひて藤の花の宴せさせ給ふ。南の廂の御簾あげて御いしたてたり。おほやけわざにて、あるじの宮の仕うまつり給ふにはあらず。上達部殿上人のきやうなど藏づかさより仕うまつれり。左のおとゞ、按察の大納言、藤中納言、左兵衛督、みこ達は三宮、常陸宮などさぶらひ給ふ。南の庭の藤の花のもとに殿上人の座はしたり。こうらう殿のひんがしにがくその人々召して暮れ行くほどに、さう調吹きて、うへの御あそびに宮の御方より御琴ども笛などいださせ給へば、おとゞをはじめ奉りておまへにとりつゝ參り給ふ。故六條院の御手づから書き給ひて入道宮に奉らせ給ひし、きんの譜二卷、五葉の枝につけたるをおとゞ取り給ひて奏し給ふ。つぎつぎに、きん、さうの御琴、琵琶、和琴など朱雀院のものどもなりけり。笛はかの夢につたへしいにしへのかたのみをまたなきものゝ音なりとめでさせ給ひければ、このをりのきよらより又はいつかははえばえしきついでのあらむとおぼして、とうで給へるなめり。おとゞ和琴、三宮琵琶、とりどりにたまふ。大將の御笛はけふぞ世になき音のかぎりは吹きたて給ひける。殿上人の中にもさうがにつきなからぬどもは召し出でつゝ、いとお

もしろう遊ぶ。宮の御方よりふずくまゐり給ふ。沈の折敷四つ、紫檀のたかづき、藤のむらごの打敷にをりえだぬひたり。しろがねのやうき、瑠璃の御さかづき、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛督まかなひ仕うまつり給ふ。御盃まゐり給ふに、おとゞきりてはびんなかるべし、宮達の御中に、はたさるべきおはせねば大將にゆづり聞え給ふを憚り申し給へど、御氣色もいかゞありけむ御盃棒げて、「をし」とのたまへるこわづかひもてなしさへ例のおほやけごとなれど人に似ず見ゆるも、けふはいとゞみなしさへ添ふにやあらむ。さし返し給はりて、おりて舞踏し給へる程いとたぐひなし。上﨟のみ子達おとゞなどのたまはり給ふだに、めでたきことなるを、これはましで御婿にて、もてはやされ奉り給へる御おぼえおろかならず珍しきに、かぎりあればくだりたる座に歸りつき給ふ程、心苦しきまでぞなむ見えける。按察の大納言は我こそかゝるめも見むと思ひしか、ねたのわざやと思ひ居給へり。この宮の御母女御をぞ昔心かけ聞え給へりけるを參り給ひて後も猶思ひはなれぬさまに聞えかよはしなどし給ひて、はては宮をえ奉らむの心つきたりければ御後見望む氣色もらし申しけれど、聞し召しだに傳へずなりにければいと心やましと思ひて「人がらはげにちぎりことなめれど、なぞ時の帝のかくおどろおどろしきまで、むこかしづきし給ふべき、またあらじかし。九重の内におはします殿近きほどにて唯人の打ち解け侍ひて、はては宴や何やともてさわがるゝことは」などいみじうそしりつぶやき申し給ひければ、さすがにゆかしければ參りて心の中にぞ腹立ちゐ給ひける。紙燭さして歌ども奉る。ぶんだいのもとによりつゝ、おくほどの氣色は

おのおのあたり顔なりけれど、例のいかに怪しげにふるめいたりけむと思ひやれば、あながちに皆も尋ねかヽず。かみのまちも上﨟とて御口つきどもは異なること見えざめれど、あるしばかりとて、一つ二つぞ問ひ聞きたりし。これは大將の君のおりて御かざしをりて參り給へりけるとか。

「すべらぎのかざしにをると藤の花およばぬえだに袖かけてけり」。うけばりたるぞにくきや。

「よろづ世をかけてにほはむ花なればけふをもあかぬ色とこそみれ」。またたれとか、

「君がためをれるかざしは紫の雲におとらぬ花のけしきか」。

「世のつねの色とも見えず雲井までたちのぼりける藤なみの花」。これやこのはらだつ大納言のなりけむとこそ見ゆれ。かたへはひがごとにもやありけむ、かやうにことなるをかしきふしもなくのみぞあなりし。夜ふくるまヽに御あそびいとおもしろし。大將の君の、あなたふと謡ひ給へる聲ぞ限なくめでたかりける。按察も昔勝れ給へりし御聲のなごりなれば今もいとものものしうてうちあはせ給へり。左のおほい殿の御七郎、わらはにてさうの笛ふく、いと珍しかりければ御ぞたまはす。おとゞおりて舞踏し給ふ。曉近くなりてなむ歸らせ給ひける。祿ども、上達部、みこ達にはうへよりたまはす。殿上人がくその人々には宮の御方より品々に賜ひけり。そのよさりなむ宮まかでさせ奉り給ひける。儀式いと心ことなり。うへの女房さながら御送仕うまつらせ給ひける。ひさしの御車にて、ひさしなき糸毛三つ、び

らうげのこがねづくり六つ、たゞのびらうげ二十、網代二つ、女房三十人、わらはおもづかへ八人づゝ侍ふに、又迎のいだし車十二、ほんぞの人々のせてなむありける。御送の上達部殿上人、六位など、いふかぎりなう淸らをつくさせ給へりけり。かくて心安くうち解けて見奉り給ふにいとをかしげにおはす。さゝやかにあてにおめやかにて、こゝはと見ゆる所なくおはすれば宿世の程口惜しからざりけりと心おごりせらるゝものから、過ぎにし方の忘られ ばこそはあらめ、猶まぎるゝをりなく物のみ戀しく覺ゆれば、この世にては慰めかねつべきわざなめり。佛になりてこそは怪しくつらかりける契のほどを何の報とあきらめて思ひはなれめと思ひつゝ、寺のいそぎにのみ心を入れ給へり。加茂の祭など、さわがしきほど過して、二十餘日のほどに例の宇治へおはしたり。造らせ給ふ御堂見給ひて、すべきことどもおきてのたまひなどして、さて例の朽木のもとを見給ひ過ぎむが猶哀なれば、そなたざまにおはするに、女車のことごとしきさまにはあらぬひとつ、あらましきあづまをとこの腰に物おへるあまた具して、おも人數多くたのもしげなる氣色にてはしより今渡りくる見ゆ。田舍びたるものかなと見給ひつゝ殿はまづ入り給ひて、ご前どもなどは又たち騷ぎたるほどに、この車もこの宮をさしてくるなりけりと見ゆ。御隨身どもかやかやといふをせいし給ひて「何人ぞ」と問はせ給へば聲うちゆがみたるもの、「常陸の前司殿の姫君の初瀨の御寺にまうでゝ歸り給へるなり。初めもこゝになむやどり給へりし」と申すに、おいや、聞きし人なゝりとおぼし出でゝ、人々をばことかたにかくし給ひて、「はや御車入れよ。此處に又ひとやどり給

へど北面になむ」といはせ給ふ。御供の人も皆狩衣姿にてことこどしからぬ姿どもなれど猶けはひやまるからむ、煩はしげに思ひて、皆馬どもひきさげなどしつゝかしこまりつゝぞをる。車は入れて廊の西のつまにぞよする。この寢殿はまだあらはにて簾垂もかけず、おろし籠めたる中の二まに立て隔てたるさうじの穴より覗き給ふ。御ぞの鳴れば、ぬぎおきてなほし指貫のかぎりを着てぞおはする。とみにもおりで尼君にせうそこして、かくやんごとなげなる人のおはするをたれぞなどあないするなるべし。君は車をそれと聞き給へるより、ゆめその人にまろありとの給ふなと、まづ口がためさせ給ひてければ皆さ心得て、「はやおりさせ給へ。まらうどはものし給へどこと方になむ」といはせたり。若き人のある、まづおりて簾垂うちあぐめり。御前どものさまよりはこのおもとなれてめやすし。又おとなびたる人今一人おりて、「早う」といふに、「怪しくあらはなる心ちこそすれ」といふ聲、ほのかなれどいとあてやかに聞ゆ。「例の御ことこなたはさきざきもおろしこめてのみこそは侍るめれ。さては又いづくのあらはなるべきぞ」と心をやりていふ。つゝましげにおるゝを見ればまづかしらつきやうだいほそやかに、あてなる程はいとよう物思ひ出でられぬべし。扇をつとさしかくしたれば顔は見えぬ程心もとなくて胸打ち潰れつゝ見給ふ。車はたかく、おるゝ所はくだりたるをこの人々は安らかにおりなしつれど、いと苦しげにやゝ見て久しくおりてゐざり入る。濃きうちきに撫子とおぼしき細長、わかなへ色の小うちき着たり。四尺の屛風をこのさうじにそへて建てたるが、かみより見ゆる穴なれば殘るべくもあらず。こなたをばうしろめ

たげに思ひて、あなたざまに向きてぞそひふしぬる。「さも心苦しげにおはしましつるかな。いづみ河の船わたりも誠にけふはいと恐しうこそありつれ。この二月には水のすくなかりしかばよかりしなりけり。いでやありきは、あづまぢを思へばいつこか恐しからむ」など、ふたりして苦しとも思ひたらずいひゐたるに、しうはおともせでひれふしたり。かひなをさし出でたるが、まろらかにをかしげなる程も常陸殿などいふべくも見えず誠にあてなり。やうやう腰痛きまでたちすくみ給へど人のけはひせじとて猶動かで見給ふに、若き人「あなかうばしや。いみじきかうのかこそすれ。尼君のたき給ふにやあらむ」とおどろく。おい人「誠にあなめでたのものゝ香や。京びとはなほいとこそみやびかに今めかしけれ。てんがにいみじきことゝおぼしたりしかど、あづまにてかゝるたきものゝ香はえあはせ出で給はざりきかし。この尼君のすまひは、かくいとかすかにおはすれど、さうぞくのあらまほしう、にび色あを色といへどいときよらにぞあるや」など譽め居たり。あなたのすのこよりわらはきて、「御湯など參らせ給へ」とてをしきどもとりつゞきてさし入る。くだものとりよせなどしてものけ給はる。これなどおこせど驚かねば、ふたりして栗などやうのものにやほろほろとくふも、聞き知らぬ心ちにはかたはらいたくてしぞき給へど、又ゆかしくなりつゝ猶たちよりたちより見給ふ。これよりまさるきはの人々を、きさいの宮をはじめて、こゝかしこにてかたちよきも心あてなるをもこゝらあくまで見ならし給ふべけれど、おぼろけならでは目も心もとゞまらず、あまり人にもどかるゝまでものし給ふ御心ちに只今は、なにばかりすぐれて

見ゆることもなき人なれど、かくたちさりがたくあながちにゆかしきもいとあやしき心なり。尼君はこの殿の御方にも御せうそこ聞え出したりけれど「御心ちなやましとて今のほどうちやすませ給へるなり」と御供の人々心志らひていひたりければ、この君を尋ねまほしげにおぼしのたまひしかば、かゝる序に物いひふれむとおぼすによりて、日を暮し給ふにやと思ひて、かく覗き給ふらむとは知らず、例のみさうのあづかりどもの參れるわりごやなにやとこなたにも入れたるを、あづまびとどもにもくはせなどことども行ひおきて、うちけさうじてまらうどの方に來たり。譽めつるさうぞく、げにいとかはちかにて、みめも猶よしよししく清げにぞある。「きのふおはしつきなむと待ち聞えさせしを、などかけふも日たけては」といふめれば、このおい人、「いと怪しう苦しげにのみせさせ給へれば、きのふはこのいづみ河のわたりにとゞまりて、けさもむごに御心ちためらひて」など、いちへておこせば、今ぞおきゐたる、尼君をはぢらひて、そばみたるかたはらめ、これよりはいとよく見ゆ。誠にいとよしあるまみの程、かんざしのわたり、かれをも委しくつくづくとしも見給はざりし御かほなれど、これを見るにつけて唯それと思ひ出でらるゝに例の涙おちぬ。尼君のいらへうちずる聲けはひのほのかなれど宮の御方にもいとよく似たりと聞ゆ。哀なりける人かな、かゝりけるものを今まで尋ねも志らで過しけることよ、これより口惜しからむきはの志なならむゆかりにてだに、かばかり通ひ聞えたらむ人を見ては、おろかにえ思ふまじき心ちするに、ましてこれは知られ奉らざりけれど誠に故宮の御子にこそはありけれと見なし給ひては限な

う哀にうれしく覺え給ふ。只今もはひよりて世の中におはしけるものをといひ慰めまほし、蓬萊まで尋ねて、かんざしのかぎりを傳へて見給ひけむ帝は猶いといぶせかりけむ、これはこと人なれど慰め所ありぬべきさまなりと覺ゆるは、この人に契のおはしけるにやあらむ。尼君は物語少しゝてとく入りぬ。人の咎めつるかをりを近くて覗き給ふなめりと心得てければ、打ち解けごとも語らはずなりぬるなるべし。日も暮れもて行けば君もやをら出でゝ御ぞなど着給ひてぞ、例召し出づるさうじ口に尼君召し出で給ひて、ありさまなど問ひ給ふ。「をりしも嬉しくまうできあひたるをいかにぞ、かの聞えしことは」とのたまへば「しかおほせごと侍りし後は、さるべきついで侍らばと待ち侍りしに、こぞは過ぎて この二月になむ、初瀬詣のたよりに對面して侍りし。かの母君に思し召したるさまは、ほのめかし侍りしかば、いとかたはらいたく忝き御よそへにこそは侍るなれとなむ侍りしかど、そのころほひはのどやかにもおはしまさずとうけ給はりし。をりびんなく思ひ給へつゝみてなむ、かくなども聞えさせ侍らざりしを、又この月にもまうでゝけふ歸り給へるなめり。行きかへりの中やどりには、かうむつびらるゝも唯過ぎにし御けはひを尋ね聞えらるゝ故になむ侍るめる。かの母君はさはることありて、このたびはひとり物し給ふめれば、かくおはしますとも何かは物し侍らむ」と聞ゆ。「田舍びたる人どもに忍びやつれたるありきも見えじとて口がためつれどいかゞあらむ。げすどもは隱れあらじかし。さていかゞすべき。一人物し給ふらむこそなかなか心やすかなれ。かく契深くてなむ參りきあひたると傳へ給へかし」とのたまへ

ば、「うちつけにいつのほどなる御契にかは」とうち笑ひて、「さらばしか傳へ侍らむ」とているに、

「かほ鳥の聲もきゝしにかよふやとしげみをわけて今日ぞ尋ぬる」。唯口ずさみのやうにのたまふを、入りてかたり聞えけり。

東屋

筑波山を分け見まほしき御心はありながら、は山のしげりまであながちに思ひ入らむも、いと人ぎゝかろがろしう、片腹痛かるべき程なれば、おぼし憚りて御せうそこをだにえ傳へさせ給はず。かの尼君の許よりぞ母北の方にのたまひしさまなど、たびたびほのめかしおこせけれど、まめやかに御心とまるべきこととも思はねば、唯さまでも尋ね知り給ふらむことゝばかり、をかしう思ひて、人の御ほどの只今の世にありがたげなるをも、かずならましかばなどぞ萬に思ひける。かみの子どもは母なくなりにけるなどあまた、このはらにも姫君とつけてかしづくあり。まだ幼きなどすぎすぎに五六人ありければ、さまざまにこのあつかひをしつゝ、こと人と思ひ隔てたる心のありければ、常にいとつらきものにかみをも怨みつゝ、いかで引きすぐれて、おもだゝしき程にしなしても見えにしがなと、明暮この母君は思ひあつかひける。さまかたちのなのめにとりまぜてもありぬべくは、いとかうしも何かは苦しきま

てもてなやまゝし。同じこと思はせてもありぬべき世を物にもまじらず哀にかたじけなくおひ出で給へば、あたらしく心苦しきものに思へり。むすめ多かりと聞きてなまきんだちめく人々もおとなひいふ、いとあまたありけり。初の腹の二三人は皆さまざまにくばりておとなびさせたり。今はわが姫君を思ふやうにて見奉らばやと明暮まもりてなでかしづくこと限なし。かみも賤しき人にはあらざりけり。上達部のすぢにて、なからひも物きたなき人ならず德いかめしうなどあれば、ほどほどにつけては思ひあがりて家の内もきらきらしく物淸げに住みなし、ことごのみしたる程よりは怪しうあらゝかに田舍びたる心ぞつきたりける。若うよりさるあづまの方の遙なる世界にうづもれて年經ければにや、聲などほどほどうちゆがみぬべく、物うちいふ少しだみたるやうにて、がうけのあたりおそろしく煩はしきものに憚りおぢ、すべていとまたくすきまなき心もあり、をかしきさまに琴笛の道はとほう、弓をなむいとよく引きける。なほなほしきあたりともいはず勢ひにひかされてよき若人どもつどひ、さうぞく有樣はえならず整へつゝ腰折れたる歌合物語庚申をし、まばゆく見苦しく遊びがちにこのめるを、この懸想の君達らうらうしくこそあるべけれ。かたちなむいみじかなるなど、をかしきかたにいひなして心を盡しあへる中に、左近少將とて年廿二三ばかりのほどにて心ばせしめやかに、ざえありといふかたは人に許されたれど、きらきらしう今めいてなどは、えあらぬにや、通ひし所なども絕えていとねんごろにいひわたりけり。この母君あまたかゝることといふ人々の中に この君は人がらもめやすかなり。心定りて物思ひ知

りぬべかめるを、人もあてなりや、これよりまさりてことごとしききはの人はた、かゝるあたりを、さはいへど尋ねよらじと思ひて、この御方に取りつぎて、さるべきをりをりはをかしきさまに返事などせさせ奉る。心ひとつに思ひまうけて、かみこそおろかに思ひなすとも我は命をも譲りてかしづきてむ、さまかたちのめでたきを見つきなば、さりともおろかになどはよも思ふ人あらじとおもひたちて、八月ばかりと契りててうどをまうけ、はかなきあそびものをせさせても、さまことにやうをかしう蒔繪らでんのこまやかなる心ばへまさりて見ゆるものをばこの御方にと取りかくして、おとりのをこれなむよきとて見すれば、かみはよくしも見知らず、そこはかとなきものどもの、人のてうどといふ限は唯取り集めてならべすゑつゝ、めをはつかにさし出づるばかりにて、琴琵琶の師とて内教坊のわたりより迎へとりつゝならはす。手ひとつひきとれば師を立ちゐをがみて喜び、祿を取らすること埋むばかりにてもてさわぐ。はやりかなるこくの物など教へて、師とをかしき夕暮などに彈き合せて遊ぶ時は涙もつゝまずをこがましきまで さすがに物めでしたり。かゝる事どもを母君は少し物のゆゑしりて、いと見苦しと思へばことにあへしらはぬを、あこをば思ひおとし給へりと常に怨みけり。かくてかの少將契りし程を待ちつけて、同じくは疾くとせめければ我心ひとつにかう思ひいそぐもいとつゝましう、人の心の知りがたさを思ひて、初より傳へそめける人の來たるに近う呼び寄せて語らふ。「よろづ多く思ひ憚ることのあるを、月頃かうのたまひて程の經ぬるを、なみなみの人にも物し給はねば、かたじけなう心苦しうて、かう思ひ

立ちにたるを親などものし給はぬ人なれば、心ひとつなるやうにて片腹いたう、打ちあはぬさまに見え奉ることもやとかねてなむ思ふ。若き人々あまた侍れど。思ふ人具したるはおのづからと思ひゆづられてこの君の御ことをのみなむ、はかなき世の中を見るにもうしろめたくいみじきを、物おぼし知りぬべき御心ざまと聞きて、かうよろづのつゝましさを忘れぬべかめるに、若し思はずなる御心ばへもみえば人わらへに悲しうなむあるべき」といひけるを、少將の君にまうでゝ志か志かなむと申しけるに氣色あしくなりぬ。「初より更にかみの御娘にあらずといふことをなむ聞かざりつる。同じことなれど人ぎゝもけおとりたる心地して、出いりせむにもよからずなむあるべき。ようもあないせでうかひたること傳へける」とのたまふに、いとほしくなりて、「くはしくも知り給へず、女どもの知るたよりにて仰ごとを傳へはじめ侍りしに、なかにかしづく娘とのみ聞き侍れば、かみのにこそはとこそ思ひ給へつれ、こと人の子も給へらむとも問ひ聞き侍らざりつるなり。かたち心も勝れてものし給ふこと母上のかなしうし給ひて、おもだゝしうけだかきことをせむとあがめかしづかると聞き侍りしかば、いかでかのへんのこと傳へつべからむ人もがなとのたまはせしかば、さるたより知り給へりと取り申しゝなり。更にうかひたる罪侍るまじきことなり」と腹惡しく詞多かるものにて申すに、君いとあてやかならぬさまにて、「かやうのあたりにいき通はむ人のをさをさ許さぬことなれど、今やうのことにて咎あるまじうもてあがめて後見だつに罪隠してなむあるたぐひもあめるを、同じことゝうちうちには思ふとも、よその覺えなむへ

つらひて人いひなすべき。源少納言讃岐の守などのうけばりたる氣色にて出て入らむに、かみにもをさをさ受けられぬさまにてまじらはむなむ、いと人げなかるべき」とのたまふ。この人つゐそうありうたてある人の心にてこれをいと口惜しう、こなたかなたにいとほしう思ひければ、「誠にかみの娘とおぼさば、まだ若うなどおはすとも志か傳へ侍らむかし。中にあたるなむ姫君とてかみはいとかなしう志給ふなる」ときこゆ。「いさや初より志かいひよれることをおきて又いはむこそうたてあれ。されどわがほいは、かのかんのぬしの人がらもものものしく、おとなしき人なれば後見にもせまほしう見る所ありて思ひ始めしことなり。もはら顏かたちの勝れたらむ女のねがひもなし。志なあてに艶ならむ女を願はゞやすく得つべし。されどさびしうことうち合はぬみやび好める人のはてはては物清くもなく人にも人とも覺えたらぬを見れば、少し人に譏らるゝともなだらかにて世の中をすぐさむ事を願ふなり。かみにかくなむと語らひて、さもとゆるす氣色あらば何かはさも」とのたまふ。この人は妹のこの西の御方にあるたよりに、かゝる御文なども取り傳へ始めけれど、かみには委しくも見え知られぬものなりけり。たゞいきにかみの居たりける前に行きて、「とり申すべきことありてなむ」といはす。かみこのわたりに時々出入はすと聞けど、前には呼び出でぬ人の何事いひにかあらむとなま荒々しき氣色なれど「左近少將殿の御せうそこにてなむ侍ふ」といはせたればあひたり。語らひ難げなる顏して近う居寄りて、「月頃うちの御方にせうそこ聞えさせ給ふを御ゆるしありて、この月の程にと契り聞えさせ給ふこと侍るを、日を

はからひ、いつしかとおもほす程にある人の申しけるやう、誠に北の方の御腹にものし給へど、かんの殿の御娘にはおはせず、きんだちのおはし通はむに、世の聞えなむ諂ひたるやうならむ、ずりやうの御婿になり給ふ。かやうの君達は唯私の君の如く思ひかしづき奉りて、手に捧げたるごと思ひあつかひ後見奉るにかゝりてなむ、さるふるまひし給ふ人々ものし給ふめるを、さすがにその御願ひはあながちなるやうにて、をさをさうけられたまはで、けおとりておはし通はむことびんなかりぬべきよしをなむ、せちに譏り申す人々あまた侍るなれば、只今おぼし煩ひてなむ。初めより唯きらきらしう人の後見と頼み聞えむに堪へ給ふべき御覺えをえらび申して聞えはじめ申しゝなり。更にこと人物し給はむといふこと知らざりければ、もとの御志のまゝに、まだ幼きもあまたおはすなるをゆるい給はゞいと嬉しくなむ。御氣色見てまうでこと仰せられつれば」といふに、守「更にかゝる御せうそこ侍るよし委くうけたまはらず。誠に同じ事に思ひ給ふべき人なれど、善からぬわらはべあまた侍りてはかばかしからぬ身にさまざま思ひ給へあつかふ程に、母なるものも、これをこと人と思ひ分けたることゝくねりいふことと侍りて、ともかくも口入れさせぬ人のことに侍れば、ほのかにおかなむ仰せらるゝ事侍るとは聞き侍りしかど、なにがしをとり所におぼしける御心は知り侍らざりけり。さるはいとうれしく思ひ給へらるゝ御事にこそ侍るなれ。いとらうたしと思ふめのわらは侍り。あまたの中にこれをなむ命にもかへむと思ひ侍る。のたまふ人々あれど今の世の人の御心定めなく聞え侍るに、なかなか胸痛き目をや見むの憚りに思ひ定む

る事もなくてなむ。いかでうしろ安くも見給へ置かむと明暮かなしく思ひ給ふるを、少將殿におき奉りては、故大將殿にも若くより參り仕うまつりき。家の子にて見奉りしにいときやうざくに仕うまつらまほしと心つきて思ひ聞えしかど、はるかなる所に打ち續きて過し侍る年頃の程に、うひうひしく覺え侍りてなむ、參りも仕うまつらぬを、かゝる御志の侍りけるを、返すがへすかしこまりながら仰のごと奉らむは易き事なれど、月頃の御心たがへたるやうに、この人思ひ給へむことをなむ思ひ給へ憚り侍る」といとこまやかにいふ。よろしげなめりとうれしく思ふ。「何かとおぼし憚るべきにも侍らず。かの御志は唯ひと所の御ゆるし侍らむを願ひおぼして、いはけなく年足らぬほどにおはすとも、しんじちの親のやんごとなく思ひおきて給へらむをこそほいかなふにはせめ。もはらさやうのほどりばみたらむふるまひすべきにもあらずとなむのたまひつる。人がらはいとやんごとなく、おぼえ心にくゝおはする君なりけり。若き君達とてすきずきしくあてびてもおはしまさず、世の有樣もいとよく知り給へり。領じ給ふ所々もいと多く侍り。まだころの御德なきやうなれど、おのづから人の御けはひのありけるやう、なほびとの限なき富といふめる勢ひには優り給へり。來年四位になり給ひなむ、こたびのとうは疑ひなく帝の御口づからごて給へるなり。よろづの事たらひてめやすき朝臣のめをなむ定めざなるはや、さるべき人えりて後見を設けよ、上達部にはわれしあれば、けふあすといふばかりになしあげてむとこそおほせらるなれ。何事もたゞこの君ぞ帝にも親しく仕うまつり給ふなる。御心はたゝ、いみじうかうざくに重々しくなむ

おはしますめる。あたら人の御婿を、から聞え給ふ程に思ほし立ちなむこそよからめ。かの殿には、我も我も婿とり奉らむと所々侍るなれば、こゝに志ぶ志ぶなる御けはひあらばほかざまにもおぼしなりなむ。これ唯うしろ安きことをとり申すなり」と、いと多くよげにいひつゞくるに、いとあさましく鄙びたるかみにて、打ちゑみつゝ聞き居たり。「この頃の御德などの、心もとなからむ事はなのたまひそ。なにがしいのち侍らん程は、いたゞきにも捧げ奉りてむ。心もとなく何を飽かぬとかおぼすべき。たとひあへずして仕うまつりさしつとも、のこりの寶物領じ侍る所々、ひとつにても又とり爭ふべき人なし。子ども多く侍れど、これはさまことに思ひそめたるものに侍り。唯まごゝろにおぼしかへりみさせ給はゞ、大臣の位をもとめむとおぼし願ひて世になき寶物をも盡さむと志給はむに、なきもの侍るまじ。たうじの帝志か惠み申し給ふなれば御後見は心もとなかるまじ。これかの御ためにも、なにがしがめのわらはのためにもさいはひとあるべき事にやとも知らず」と、よろしげにいふ時に、いとうれしくなりて妹にもかゝることともかたらず、あなたにも寄りつかで、かみのいひつることを いともいともよげにめでたしと思ひて聞ゆれば、君少し鄙びてぞあるとは聞き給へど、にくからず打ち笑みて聞き居たまへり。大臣にならむ、ぞくらうを取らむなどぞ、あまりおどろおどろしきことゝ耳とゞまりける。「さてかの北の方にはかくとものしつや。志ことに思ひ始め給ふらむに、引きたがへたらむ、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらむ。いさや」とおぼしたゆたひたるを、「何か北の方もかの姫君をばいとやむごとな

きものに思ひかしづき奉り給ふなりけり。唯中のこのかみにて年もおとなび給ふを心苦しき事に思ひて、そなたにとおもむけて申されけるなり」と聞ゆ。月頃は叉なく、よのつねならずかしづくといひつるものゝ、うちつけにかくいふもいかならむと思へども、猶ひとわたりはつらしと思はれ、人には少し譏らるともながらへて頼もしきことをこそと、いとまたくかしこき君にて思ひとりてければ、日をだにとりかへで契りし暮にぞおはしはじめける。北の方は人知れずいそぎ立ちて人々のさうぞくせさせ、しつらひなどよしよししうし給ふ。御方をもかしら洗はせ取りつくろひて見るに、少將などいふ程の人に見せむもをしくあたらしきさまを、哀や親に知られ奉りておひたち給はましかば、おはせずなりにたりとも、大將殿ののたまふらむさまに、おほけなくともなどかは思ひ立たざらまし、されどうちうちにこそかく思へ、ほかのおとぎゝはかみの子とも思ひわかず、またじちを尋ね知らむ人もなかなかおとしめ思ひぬべきこそ悲しけれなど思ひつゞく。いかゞはせむ、盛過ぎ給はむもあいなし。賤しからずめやすき程の人のかくねんごろにのたまふめるを、など心ひとつに思ひ定むるも、なかだちのかくことよくいみじきに、女はましてすかされたるにやあらむ。あすあさてと思へば心あわたゞしくいそがしきに、こなたにも心のどかに居られたらず、そゝめきありくに、かみとより入り來て、ながながと滯る所もなく言ひ續けて「我を思ひ隔てゝ、あこの御懸想びとを奪はむと志給ひけるが、おほけなく心をさなきこと、めでたからむ御むすめをば、ようぜさせ給ふ君達あらじ、賤しくことやうならむなにがし等か女ごをこそ賤しうも尋

ねのたまふめれ。かしこく思ひ企てられけれど、もはらほいなしとて、ほかざまへ思ひなり給ひぬべかなれば、同じくいと思ひてなむ、さらば御心と許し申しつる」など怪しくあうなく人の思はむ所も知らぬ人にて、言ひちらし居たり。北の方あきれて物もいはれで、とばかり思ふに、世の中の心うさをかきつらね、涙も墮ちぬばかり思ひ續けられて、やをら立ちぬ。こなたに渡りて見るに、いとらうたげにをかしげにて居給へるに、さりとも人には劣り給はじとは思ひ慰む。めのとゝ二人、「心うきものは人の心なりけり。おのれは同じごと思ひあつかふとも、この君のゆかりと思はむ人のためには命をも譲りつべくこそ思へ、親なしと聞きあなづりて、まだ幼くなりあはぬ人をさし越えて、かくはいひなるべしや。かく心憂く近きあたりに見じ聞かじと思ひぬれど、かみのかくおもだゝしきことに思ひてうけとり騒ぐめれば、あさましくあひあひにたる、世の人の有樣を、すべてかゝることに口入れじと思ふ。いかでこゝならぬ所に、志ばしありにしがな」と打ち歎きつゝいふ。めのともいと腹だゝしく、わが君をかくおとしむることゝ思ふに、「何かこれも御さいはひにて、たがふことゝも知らず、かく心口をしくいましける君なれば、あたら御さまをも見知らざらまし。わが君をば心ばせあり、物思ひ知りたらむ人にこそ見せ奉らまほしけれ。大將殿の御さまかたちの、ほのかに見奉りしに、さも命延ぶる心地し侍りしかな、哀にはた聞えたまふなり。御すくせに任せて、さもおぼしよりねかし」といへば、「あなおそろしや。人のいふを聞けば、年頃おぼろけならむ人をば、見じとのたまひて、左の大殿、按察大納言、式部卿宮などの、いとねんごろ

にほのめかし給ひけれど、聞きすぐして、帝の御かしづきむすめをえ給へる君は、いかばかりの人をか、まめやかにはおぼさむ。かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとはおぼしもしなむ。それはたげにめでたき御あたりなれども、いと胸痛かるべきことなり。宮のうへのかくさいはひびと〻世に申すなれど、物思はしげにおぼしたるを見れば、いかにもいかにも二心なからむ人のみこそめやすくたのもしきことにはあらめ、我が身にても知りにき。故宮の御有樣は、いとなさけなさけしく、めでたくをかしくおはせしかど、人數にもおぼさゞりしかば、いかばかりかは心憂くつらかりし。このいといふかひなくなさけなく、さまあしき人なれど、ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年頃をも過しつるなり。をりふしの心ばへの、かやうに愛ぎやうなくよういなきこそにくけれ。歎かしくうらめしきこともなく、かたみに打ちいさかひても心に合はぬことをばあきらめつ。上達部みこ達にてみやびかに心はづかしき人の御あたりといふとも、我が數ならではかひあらじ、萬の事我が身からなりけりと思へば萬に悲しくこそ見奉れど、いかにして人わらひならず、したて奉らむ」とかたらふ。守はいそぎ立ちて「女房などこなたにめやすきあまたあなるを、この程はあらせ給へ。やがて帳なども新しくしたてられためる方を、ことにはかになりにためれば、取りわたしとかく改むまじ」とてこの西の方に來て、立ちゐとかくしつらひさわぐ。めやすきさまにさばらかに、あたりあたりあるべきかぎりしたる所を、さかしらに屛風ども持て來て、いぶせきまでたて集めて厨子、二階など、あやしきまでしくはへて、心をやりていそげ

ば、北の方見苦しく見れど、口入れじといひてしかば、たゞに見聞く。御かたは北おもてに居給へり。かみ、「人の御心は見知りはてぬ。唯同じ子なれば、さりともいとかくは思ひ放ち給はじとこそ思ひつれ。されば世に母なき子はなくやはある」とて娘を晝よりめのと二人なでつくろひ立てたれば、にくげにもあらず。年十五六のほどにて、いとちひさやかにふくらかなる人の、髮美くしげにて小うちきのほどなるすそいとふさやかなり。これをいとめでたしと思ひてなでつくろふ。何か人のことざまに思ひかまへられける人をしもと思へど、人がらのあたらしく、かうさくにものし給ふ君なれば、われもわれもと婿に取らまほしくする人の多かなるに、取られなむも口惜しくてなむと、かのなかひとに謀られていふもいとをこなり。男君もこの程の、いかめしく思ふやうなること、萬の罪あるまじう思ひて、その夜もかへずきそめぬ。母君御方のめのと、いとあさましく思ふ。ひがひがしきやうなれば、とかく見あつかふも心づきなければ宮の北の方の御もとに御文奉る。「その事と侍らでは、なれなれしくやとかしこまりて、え思ひ給ふるまゝにも聞えさせぬを、愼むべきこと侍りて、しばし所がへさせむと思ひ給ふるに、いと忍びて侍ひ給ひぬべき、かくれのかた候はゞ、いともいとも嬉しくなむ、數ならぬ身ひとつの影に隱れもあへず、哀なることのみ多く侍る世なれば、たのもしき方にはまづなむ」と、うち泣きつゝ書きたる文を哀とは見給ひけれど、故宮のさばかり許し給はで止みにし人を、我ひとり殘りて、知り語らはむもいとつゝましく、又見苦しきさまにて、世にあぶれむも知らず顏にて聞かむこそ、心苦しかるべけれ、ことなるよ

なくて、かたみにちりぼはむも、なき人の御ためにも見苦しかるべきわざを、覺し煩ふ。たいふがもとにも、いと心苦しげにいひやりたりければ、「さるやうこそは侍らめ。人にくゝはしたなくもなの給はせそ。かゝるおとりの物の人の御中にまじり給ふも世の常のことなり。あまりいとなさけなくの給ふまじき事なり」など聞えて、「さらばかの西の方にかくろへたる所ものしつ。いと嬉しと思ほして人知れず出でたつ。御方もかの御あたりをば、むつび聞えまほしと思ふ心なれば、なかなかかゝる事どもの出で來たるを、うれしと思ふ。かみ少將のあつかひを、いかばかりめでたきことをせむと思ふに、そのきらきらしかるべき事も知らぬ心には、唯あらゝかなるあづまぎぬどもを、おしまろがして投げ出でつ。くひものも所せきまでなむ運び出でゝのゝしりけるを、げすなどは、それをいとかしこきなさけに思ひければ、君もいとあらまほしく、心かしこくとりよりにけりと思ひけり。北の方この程を見捨てゝ、知らざらむもひがみたらむと思ひ念じて、唯するまゝに任せて見居たり。まらうどの御でゐさぶらひとまつらひさわげば、家はひろけれど源少納言東の對にはすむ。をのこゞなどの多かるに所もなし。この御方にまらうどすみつきぬれば、らうなどほとりばみたらむにすませ奉らむも飽かずいとほしくおぼえて、とかく思ひめぐらす程、宮にとは思ふなりけり。この御方ざまにかずまへ給ふ人のなきを、あなづるなめりと思へば、ことにゆるい給はざりしあたりを、あながちに參らす。めのと若き人々、二三人ばかりして西の廂の北に寄りて、人げ遠き

方につぼねしたり。年頃かく遙なりつれど、疎くおぼすまじき人なれば、參るときは恥ぢ給はず、いとあらまほしくけはひことにて若君の御あつかひをしておはする、御有樣うらやましく覺ゆるもあはれなり。我も故北の方には離れ奉るべき人かは、仕うまつるといひしばかりに、かずまへられ奉らず口惜しくて、かく人にはあなづらるゝと思ふには、かく志ひて睦び聞ゆるもあぢきなし。こゝには御物忌といひてければ人もかよはず、二三日ばかり母君も居たり。こたみは心のどかに、この御ありさまを見る。宮わたり給ふ。ゆかしくて物のはざまより見れば、いと淸らに櫻を折りたるさまし給ひて我がたのもし人に思ひて、つらううらめしけれど、心には違はじと思ふ。常陸守よりさまかたちも人のほどもこよなく見ゆる、五位四位ども、あひひざまづき侍ひて、この事かの事と、あたりあたりの事ども啓し、供などまうす。又若やかなる五位ども、顏も知らぬ供も多かり。わが繼子の式部のぞうにて藏人なる、內の御使にて參れり。御あたりにもえ近く參らず、こよなき人の御けはひを、あはれこは何人ぞ、かゝる御あたりにおはするめでたさよ、よそに思ふ時は、めでたき人々と聞ゆとも、つらき目見せ給はゞと物うく推し量り聞えさせつらむあさましさよ、この御有樣かたちを見れば、七夕ばかりにても、かやうに見奉りかよはむは、いといみじかるべきわざかなと思ふに、若君抱きてうつくしみおはす。女君短き几帳を隔てゝ座するを推しやりて物など聞え給ふ。御かたちどもいと淸らに似合ひたり。故宮のさびしくおはせし御有樣を思ひくらぶるに、宮達と聞ゆれど、いとこよなきわざにこそありけれと覺ゆ。几帳の內に入り給ひぬれば若君は

めのとなどもてあそび聞ゆ。人々參りあつまれど、なやましとて大殿籠りくらしつ、御藥こなたにまゐる。萬のことけだかく心ことに見ゆれば、我がいみじき事を盡すと見思へどなほなほしき人のあたりは、口惜しかりけりと思ひなりぬれば、我が娘もかやうにてさし並べたらむにかたはならじかし、ゆだけき勢ひをたのみて、父ぬしの、后にもなしてむと思ひたる人々は、おなじ我が子ながら、けはひこよなきをおもふも、猶今よりのちも心はたかふべかりけりと、夜一夜あらましごとに思ひつゞけゝり。宮日たけて起き給ひて、きさいの宮例のなやましく志給へば、まゐるべしとて御さうぞくなどし給ひて おはす。ゆかしう覺えてのぞけば、うるはしく引きつくろひ給へる、はた似るものなく、けだかくあいぎやうつき淸らにて、若君をえ見捨て給はて、もてあそびおはす。御かゆこはいひなど參りてぞ、こなたより出で給ふ。けさよりまゐりて、さぶらひの方にやすらひける人々今ぞ參りて物など聞ゆる中に、淸げだちて、なでふことなき人のすさまじき顏したる、なほし着て太刀佩きたるあり。お前にて何とも見えぬを、「かれぞこの常陸のかみの婿の少將な。初はこの御方にと定めけるを、かみの娘をえてこそいたはられめなどいひて、かじけたるめのわらはをえたるなゝり。いさこの御あたりの人はかけてもいはず、かむの君の方より、よくきくたよりのあるなり」と、おのがどちいふ。聞くらむとも知らで、人のかくいふにつけても胸つぶれて、少將をめやすき程と思ひける心も口をしく、げに異なることなかべかりけりと思ひて、いとゞしくあなづらはしく思ひなりぬ。若君のはひ出でゝ御簾のつまより覗き給へるをうち見給ひて、

立ち返りよりおはしたり。「御心よろしく見え給はゞやがてまかでなむ。猶苦しく思給はゞ、こよひは殿ゐにぞ。今は一夜をへだつるも、覺束なきこそ苦しけれ」とて暫し慰め遊ばして出で給ひぬるさまの、返す返す見るとも見るとも、飽くまじくにほひやかにをかしければ、出で給ひぬる名殘さうざうしくぞながめらるゝ。女君の御前に出で來て、いみじくめで奉れば、田舍びたるとおぼして笑ひ給ふ。「故上のうせ給ひしほどは、いふかひなく幼き御程にていかにならせ給はむと、見奉る人も故宮もおぼし歎きしを、こよなき御宿世の程なりければ、さる山ぶところの中にも生ひ出でさせ給ひしにこそありけれ。口惜しく故姫君のおはしまさずなりにたるこそ、飽かぬことなれ」など、打ち泣きつゝ聞ゆ。君も打ち泣き給ひて、「世の中のうらめしく心ぼそきをりをりも、又かくながらふれば少しも思ひ慰めつべきをりもあるを、いにしへたのみ聞えける影どもに後れ奉りけるは、なかなかによのつねに思ひなされて、見奉り知らずなりにければ、あるを、猶この御ことはつきせずいみじくこそ。大將殿の萬の事に心の移らぬよしをうれへつゝ、淺からぬ御心のさまを見るにつけても、いとこそ口惜しけれ」とのたまへば、「大將殿はさばかり世にためしなきまで、帝のかしづき覺したなるに、心おごりし給ふらむかし。おはしまさましかば、猶このことせかれしも思給はざらましや」など聞ゆ。「いさやうのものと人笑はれなる心地せましも、なかなかにやあらまし。見はてぬにつけて、心にくゝもある世にこそはと思へど、かの君はいかなるにかあらむ、怪しきまで物忘れせず。故宮の御後の世をさへ思ひやり深く、後見ありき給ふめる」など、心美し

う語り給ふ。「かの過ぎにし御かはりに尋ねて見むと、この數ならぬ人をさへなむ、かの辨の尼君にはのたまひける。さもやと思ひ給へよるべき事には侍らねど、ひともとゆゑにこそはと、かたじけなけれど、哀になむ思ひ給へらるゝ、御心深さなる」などいふついでに、この君をもて煩ふこと、なくなくかたる。こまかにはあらねど人も聞きけりと思ふに、少將の思ひあなづりけるさまなどほのめかして、「命侍らむ限は何か朝夕の慰めぐさにて見過しつべし。打ち捨て侍りなむ後は、思はずなるさまにちりぼひ侍らむが悲しさに、尼になして深き山にやゑすゑて、さる方に世の中を思ひ絶えて侍らましなどなむ、思ひ給へ侘びては、思ひより侍る」といふ。「げに心苦しき御有樣にこそはあなれど、何か人にあなづらるゝ御有樣は、かやうになりぬる人のさがにこそ。さりともえ堪へこもらぬわざなりければ、まいていとあるまじき御ことなり。やつい給はむも、いとほしげなる御さまにこそ」など、いとおとなびてのたまへば、母君いと嬉しと思ひたり。ねびにたるさまなれど、よしなからぬさまして淸げなり。いたく肥えすぎにたるなむ常陸殿とは見えける。「故宮のつらう情なくおぼし放ちたりしに、いとゞ人げなく、人にもあなづられ給ふと見給ふれど、かう聞えさせ御覽ぜらるゝにつけてなむいにしへの憂さも慰み侍る」など、年頃の物語浮島の哀なりしことも聞え出づ。「我が身一つのとのみ、いひ合する人もなき筑波山のありさまもかくあきらめ聞えさせて、いつもいつもいとかくて侍はまほしく思ひ給へなり侍りぬれど、かしこには善からぬ あやしのもの

ども、いかに立ち騒ぎもとめ侍らむ。さすがに心あわたゞしく思ひ給へらるゝ。かゝる程の有樣に身をやつすは口惜しきものになむ侍りけると、身にも思ひ知らるゝを、この君は唯任せ聞えさせて知り侍らじ」などかこち聞えかくれば、げに見苦しからでもあらなむと見給ふ。かたちも心ざまも、えにくむまじうらうたげなり。物はぢもおどろおどろしからず、さまよう子めいたるものから、かどなからず、近く侍ふ人々にも、いとよく隱れて居給へり。物などいひたるも、昔の人の御さまに怪しきまで覺え奉りてぞあるや。かの人がたもとめ給ふ人に見せ奉らばやと打ち思ひ出で給ふをりしも、大將殿參り給ふと人聞ゆれば、例の御几帳引きつくろひて心づかひす。このまらうどの母君「いで見奉らむ、ほのかに見奉りける人の、いみじきものに聞ゆめれど、宮の御有樣にはえならびたまはじ」といへば、御前に侍ふ人々「いさやえこそ聞え定めね」と聞えあへり。「むかひておはせしさま、宮はいとなさけなげに、見にくゝこそ見え給ひしか。とり放ちては、いづれもともかくも分れず、かたちよき人は人をけつこそにくけれ」とのたまへば、人々わらひて、「されどお前にはおされ奉り給はざめり。いかばかりならむ人か、宮をばけち奉らむ」などいふ程に、今ぞ車よりおり給ふなりと聞く程かしかましきまでおひのゝしりて、とみにも見え給はず。またれたる程に、歩み入り給ふさまを見れば、げにあなめでた、をかしげとも見えずながらぞ、なまめかしうあてに淸げなるや。すゞろに見えぐるしうはづかしくて、額髮なども引きつくろはれて心はづかしげに、用意多くきはもなきさまぞし給へる。うちより參り給へるなるべし。御前どものけはひ

あまたして、「よべ后の宮の悩み給ふよしうけ給はりて、參りたりしかば、宮達の侍ひ給はざりしかば、いとほしく見奉りて、宮の御かはりに今まで侍ひ侍りつる。けさもいとけだいして參らせ給へるを、あいなう御あやまちに推し量り聞えさせてなむ」と聞え給へば、「げにおろかならず、思ひやり深き御用意になむ」とばかりいらへ聞え給ふ。宮は內にとまり給ひぬるを見おきて、たゞならずおはしたるなめり。例の物語いと懷しげに聞え給ふ。事に觸れて唯いにしへの忘れがたく、世の中の物憂くなりまさるよしを、あらはにはいひなさで、かすめ憂へ給ふ。さしもいかでか世を經て、こゝろに離れずのみはあらむ。猶淺からずいひそめてしことのすぢなれば、名殘なからじとにやなど見なし給へと、人の御氣色はしるきものなれば見もて行くまゝに、哀なる御心ざまを、岩木ならねば思ほししる。恨み聞え給ふことも多かれば、いとわりなく打ちなげきて、かゝる御心をやむるみそぎをせさせ奉らまほしくおぼすにやあらむ、かの人がたのたまひ出でゝ、いと忍びてこのわたりになむと、ほのめかし聞え給ふを、かれもなべての心地はせず、ゆかしくなりにたれど、打ちつけにふと移らむ心地、はたせず、「いでやその本尊願ひみて給ふべくはこそ尊からめ。時々心やましくば、なかなか山水も濁りぬべく」とのたまへば、「はてはてはうたての御ひじり心や」と、ほのかに笑ひ給ふも、をかしう聞ゆ。「いでさらば傳へはてさせ給へかし。この御のがれ言葉こそ思ひ出づれば、ゆゝしく」とのたまひても、またなみだぐみぬ。

「見し人のかたしろならば身にそへて戀しきせゞのなでものにせむ」と例のたはぶれに

いひなして、まぎらはし給ふ。
「みそぎ河せゞに出さむなでものを身に添ふかげとたれかたのまむ。ひくてあまたにとかや、さかしらなれど、いとほしくぞ侍るや」とのたまへば、「つひによるせはさらなりや。いとうれたきやうなる、水の泡にも爭ひ侍るかな、搔き流さるゝなでもの、いでまことぞかし。いかで慰むべきことぞ」などいひつゝ、暗うなるもうるさければ、かりそめに物したる人怪しと思ふらむとつゝましきを、こよひは猶疾くかへり給へねと、こしらへやり給ふ。「さらばばそのまらうどに、かゝる心の願ひ年經ぬるを、うちつけになど、淺うはおもひなるまじうのたまはせ知らせ給ひて、はしたなげなるまじうはこそ。いとうひうひしうならひにて侍る身は、何事もをこがましきまでなむ」と語らひ聞えおきて出で給ひぬるに、この母君、いとめでたく思ふやうなる御さまかなとめでゝ、めのとのゆくりかに思ひよりて、たびたび言ひしことを　あるまじきことにいひしかど此の御有樣を見るには天の川を渡りても、かゝる彥星の光をこそ待ちつけさせめ、我が娘はなのめならむ人に見せむはをしげなるさまを、ゑびすめきたる人をのみ見ならひて少將をかしこきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。より居給へりつるまきばしらもしとねも名殘にほへるうつり香、いへばいとことさらめきたるまで有難し。時々見奉る人だに、たびごとにめで聞ゆ。「經などを讀みて功德の勝れたることあめるにも、かのかうばしきをやむごとなきことに佛ののたまひ置けるもことわりなりや。藥王ぼんなどにも取りわきてのたまへる牛頭栴檀とかや、おどろおどろしき物の名な

れど、まづかの殿の近くふるまひ給へば、佛はまことし給ひけりとこそ覺ゆれ。幼くおはしけるより行もいみじくしたまひければよ」などいふもあり。また「さきの世こそゆかしき御有樣なれ」など、口々めづることどもを、すゞろにゑみて聞き居たり。君は忍びてのたまへることをほのめかしのたまふ。「思ひそめつることと志うねきまでかろがろしからずものし給ふめるを、げに只今のありさまなどを思ふは煩はしき心地すべけれど、かの世を背きてもなど思ひより給へらむも同じことに思ひなして、試み給へかし」とのたまへば「つらきめ見せず人にあなづられじの心にてこそ、鳥の音聞えざらむ住ひまで思ひ給へおきつれ、げに人の御ありさまけはひを見奉り思ひ給ふるは、しもづかへの程などにても、かゝる人の御あたりに馴れ聞えむはかひありぬべし。まいて若き人は心つけ奉りぬべく侍るめれど數ならぬ身に物思ひのたねをや、いとゞまかせて見侍らむ。たかきもみじかきも、女といふものはかゝるすぢにてこそ。この世後の世まで苦しき身となり侍るなれど、思ひ給へ侍ればなむ、いとほしく思ひ給へ侍る。それも唯御心になむ。ともかくもおぼし捨てず、物せさせ給へ」と聞ゆれば、いと煩はしくてなりて「いさやきし方の心深さに打ち解けて、行くさきの有樣は知り難きを」とうち歎きて、殊に物ものたまはずなりぬ。明けぬれば車などゐて來てかみのせうそこなどいと腹だゝしげにおびやかしたれば「かたじけなく萬にたのみ聞えさせてなむ。猶志ばしかくさせ給ひて、いはほの中にとも、いかにとも思ひ給へめぐらし侍る程、かずに侍らずとも思ほしはなたず、何事をも敎へさせ給へ」など打ち泣きつゝ聞え置きて、この御かた

もいと心ぼそく、ならはぬ心地に立ちはなれむことを思へど、今めかしくをかしく見ゆるあたりに暫しも見なれ奉らむと思へば、さすがに嬉しくおもほえけり。車引き出づる程の少し明うなりぬるに、宮うちよりまかでたまふ。若君覺束なく覺え給ひければ、忍びたるさまにて御車なども例ならでおはしますに、さしあひて推し留めたてたれば廊に御車寄せており給ふ。「なぞの車ぞ、暗き程に急ぎ出づるは」と目留めさせ給ふ。かやうにてぞ忍びたる所には紛れ出づるかしと御心ならひにおぼしよるもむくつけし。「常陸殿のまかでさせ給ふ」と申す。若やかなる御前ども「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへるを聞くも、げにこよなの身の程やと悲しく思ふ。唯この御方のことを思ふゆゑにぞ、おのれも人々しくならまほしく覺えける。ましてさうじみをなほなほしくやつして見むことは、いみじくあたらしく思ひなりぬ。宮入り給ひて、「常陸殿といふ人やこゝに通はし給ふ。心ある朝ぼらけに急ぎ出でつる車そひなどこそ、ことさらめきて見えつれ」など、猶おぼし疑ひてのたまふ。聞きにくゝ片腹いたしとおぼして、「たいふなどが若くてのころ友だちにてありける人は殊に今めかしうも見えざめるを、ゆゑゆゑしげにものたまひなすかな。人の聞き咎めつべきことをのみ、常にとりない給ふこそ、なき名はたてゝ」とうちそむき給ふも、らうたげにをかし。明くるも知らず大殿籠りたるに人々あまた參り給へば寢殿に渡り給ひぬ。きさいの宮はことごとしき御惱みにもあらで、をこたり給ひにければ心地よげにて左の大殿の君達など碁うち韻ふたぎなどしつゝ遊び給ふ。夕つ方宮こなたに渡らせ給へれば、女君は御ゆするの程などなりけり。

人々もおのおの打ちやすみなどしてお前には人もなし。ちひさきわらはのあるして、「をり惡しき御ゆするの程こそ見苦しかめれ、さうざうしくてやながめむ」と聞え給へば、げにおはしまさぬひまひまにこそ例はすませ、怪しう日頃も物うがらせ給ひて、けふ過ぎばこの月は日もなし。ながつきかみなづきいかでかはとて、仕うまつらせつるを」と大輔いとほしがり、若君も寢給へりければ、そなたにこれかれある程に、宮はたゝずみありき給ひて西の方に例ならぬわらはの見えつるを今まゐりのあるかなどおぼして、さしのぞき給ふ。中の程なるさうじのほそめにあきたるより見給へば、さうじのあなたに一尺ばかり引きさげて屛風立てたり。そのつまに几帳簾に添へて立てたり。かたびらひとへを打ちかけて、しをんいろの花やかなるに女郎花の織物と見ゆるかさなりて袖口さし出でたり。屛風のひとひらたゝまれたるより、心にもあらで見ゆるなめり。今まゐりの口惜しからぬなめりとおぼして、この廂に通ふさうじを、いとみそかにおしあけ給ひて、やをら歩みより給ふも人知らず。こなたの廊のなかの坪せんざいのいとをかしう いろいろに咲き亂れたるに、やりみづのわたりの石高き程いとをかしければ、はし近くそひ臥して眺むるなりけり。あきたるさうじを今少し押し開けて屛風のつまよりのぞき給ふに、宮とは思ひもかけず、例こなたに來馴れたる人にやあらむと思ひて、起きあがりたるやうだい、いとをかしう見ゆるに、例の御心はすぐし給はで、きぬの裾をとらへ給ひて、こなたのさうじ引きたて給ひて屛風のはざまに居給ひぬ。あやしと思ひて、扇をさしかくして見返りたるさまいとをかし。扇を持たせながら、とら

へ給ひて「誰ぞ名のりてこそゆかしけれ」とのたまふに、むくつけくなりぬ。さる物のつらに顏をほかざまにもてかくして、いといたう忍び給へれば、このたゞならずほのめかし給はむ大將にや、かうばしきけはひなども思ひわたさるゝに、いと恥しくせむかたなし。めのと人げの例ならぬを怪しと思ひて、あなたなる屛風を押しあけて來たり、「これはいかなる事にか侍らむ。怪しきわざにも侍るかな」と聞ゆれど、憚り給ふべき事にもあらず。かくうちつけなる御心わざなれど、言葉おほかる御本じやうなれば、なにやかやとのたまふに、暮れはてぬれど「誰と聞かざらむほどは許さじ」とて馴れ馴れしく臥し給ふに宮なりけりと思ひはつるに、めのといはむ方なくあきれて居たり。おほとなぶらは燈籠にて、今わたらせ給ひなむと人々いふなり。お前ならぬかたの御格子どもぞおろすなる。こなたは離れたる方にしなして高き棚厨子ひとよろひばかりたて、屛風の袋に入れ込めたる所々に寄せ掛け、何かのあらゝかなるさまにしなしたり。かく人の物し給へばとて、通ふ道のさうじひとまばかりぞあけたるを、右近とて大輔が娘の侍ふ來て、格子おろしてこゝに寄りくなり。「あなくらや。まだおほとなぶらも參らざりけり。御格子を苦しきに急ぎまゐりてやみに惑ふよ」とて引き上ぐるに宮もなま苦しと聞き給ふ。めのとはたいと苦しと思ひて物包せず、はやりかにおぞき人にて「物聞え侍らむ。こゝにいと怪しきことの侍るに、見給へこうじてなむ。え動き侍らでなむ」、「何事ぞ」とさぐりよるに、袿姿なる男の、いとかうばしくて添ひ臥し給へるを例のけしからぬ御樣と思ひよりにけり。女の心合せ給ふまじきことと推し量らるれば「げにいと見苦

しきことにも侍るかな。右近はいかにか聞えさせむ。今參りて御前にこそは忍びて聞えさせめ」とてたつを、あさましくかたはに誰も誰も思へど、宮は怖ぢ給はず、あさましきまであてにをかしき人かな、猶なに人ならむ、右近がいひつる氣色も、いとおしなべての今まゐりにはあらざめりと、心えがたくおぼされて、といひかくいひ怨み給ふ。心づきなげに氣色ばみてもてなさねど、唯いみじう死ぬばかり思へるが、いとほしければ情ありてこしらへ給ふ。右近うへに「しかしかこそおはしませ。いとほしくいかに思ほすらむ」と聞ゆれば、「例の心憂き御さまかな。かの母もいかにあはあはしく、けしからぬさまに思ひ給はむとすらむ。うしろ安くと返すがへすいひ置きつるものを」と、いとほしくおぼせど、いかゞ聞えむ、侍ふ人々も少し若やかによろしきは見捨て給ふなく、怪しき人の御くせなれば、いかでかは思ひより給ひけむと、あさましきにものもいはれ給はず。「上達部あまた參り給ふ日にて、遊び戯ぶれ給ひては例もかゝる時は遲くも渡り給へば、皆打ち解けてやすみ給ふぞかし。さてもいかにすべきことぞ。かのめのとこそおずましかりけれ。つとそひてゐてまもり奉りひきもかなぐり奉りつべくこそ思ひたりつれ」と、少將とふたりしていとほしがる程に、内より人參りて、大宮この夕暮より御胸惱ませ給ふを、只今いみじく重く惱ませ給ふよし申さす。右近「心なきをりの御なやみかな、聞えさせむ」とて立つ。少將「いでや今はかひなくもあべいことを、をこがましく、あまりなおびやかし聞え給ひそ」といへば、「いなまだしかるべし」と、忍びてさゝめきかはすを、うへはいと聞きにくき人の御本じやうにこそあめれ、少し心あら

む人は我があたりをさへ疎みぬべかめりと覺す。參りて御使の申すよりも今少しあわたゞしげに申しなせば動き給ふべきさまにもあらぬ御氣色に「たれが參りたる。例のおどろおどろしく切す」とのたまはすれば、「宮の侍に、平のしげつねとなむ名のり侍りつる」と聞ゆ。出で給はむとの いとわりなく口惜しきに、人目もおぼされぬに、右近立ち出でゝ、この御使をにしおもてにて問へば、申しつぎつる人もよりきて、「中務の宮も參らせ給ひぬ。大夫は只今なむ參りつる道に、御車引き出づる見侍りつ」と申せば、げに俄に時々惱み給ふをりをりもあるをとおぼすに、人のおぼすらむこともはしたなくなりて、いみじう恨み契り置きて出で給ひぬ。恐しき夢の覺めたる心地して、汗に押しひたして臥し給へり。めのとうちあふぎなどして、「かゝる御住ひはよろづにつけて、つゝましうびんなかりけり。かくおはしましそめて、更によきこと侍らじ。あなおそろしや。限なき人と聞ゆとも、安からぬ御有樣は、いとあぢきなかるべし。よそのさし離れたらむ人にこそ、善しとも惡しとも覺えられ給はめ、人ぎゝも片腹痛きことゝ思う給へて、かまのさうを出して、つと見奉りつれば、いとむくつけく、げすげすしき女とおぼして手をいといたくつませ給へるこそ、猶人のけさうだちて、いとをかしくも覺え侍りつれ。かの殿には、けふもいみじくいさかひ給ひけり。唯一と所のうへを見あつかひ給ふとて、我が子どもをばおぼし捨てたり。まらうどのおはする程の御たびゐ見苦しと、あらあらしきまでぞ聞え給ひける。しもびとさへ聞き、いとほしがりけり。すべてこの少將の君ぞ、いと愛ぎやうなくおぼえ給ふ。この御事侍らざらましかばうちうちやすから

ず、むつかしき事は折々侍りとも、なだらかに年頃のまゝにて、おはしますべきものを」など、打ち歎きつゝいふ。君は只今はともかくも思ひめぐらされず、唯いみじくはしたなく、見知らぬめを見つるに添へても、いかに思すらむと思ふに、侘しければ、うつぶし伏して泣き給ふ。いと苦しと見あつかひて、「何かかくおぼす。母おはせぬ人こそ、たつぎなう悲しかるべけれ。よそのおぼえは、父なき人はいと口惜しけれど、さがなき繼母にくまれむよりは、これはいとやすく。ともかくもし奉り給ひてむ、なおぼし屈せそ。さりともはつせの觀音おはしませば、哀と思ひ聞え給はむ。ならはぬ御身に、たびたびおきりてまで給ふことは人のかくあなづりざまにのみ思ひ聞えたるを、かくもありけりと思ふばかりの御さいはひおはしませとこそ念じ侍れば、あが君は人わらはれにては止み給ひなむや」と、世を安げにいひ居たり。宮は急ぎて出で給ふなり。内近き方にやあらむ、こなたのみかどより出で給へば物のたまふ御聲もきこゆ。いとあてにかぎりもなく聞えて、心ばへあるふる事など打ちずじ給ひて過ぎ給ふほど、すゞろに煩はしく覺ゆ。うつし馬ども引き出して、とのゐに侍ふ人十餘人ばかりして參り給ふ。うへいとほしくうたて思ふらむとて、知らずがほにて、「大宮惱み給ふとて參り給ひぬれば、こよひは出で給はじ。ゆするのなごりにや、心地も惱ましくて起き居侍らぬを。わたり給へ、つれづれにもおぼさるらむ」と聞え給へり。「みだり心地のいと苦しう侍るを、ためらひて」と、めのとして聞え給ふ。「いかなる御心地ぞ」と、立ち返りとぶらひ聞え給へば、「何心地ともおぼえず、唯いと苦しく侍り」と聞え給へば、少將右近、めましろ

ぎをして、片腹痛くぞおぼすらむといふも、たゞなるよりはいとほし。いと口惜しく心苦しきわざかな、大將の心留めたるさまにのたまふめりしを、いかにあはあはしく思ひおとさむ、かくのみみだりがはしくおはする人は聞きにくゝじちならぬことをもくねりいひ、又誠に少し思はずならむことをも、さすがに見ゆるしつべうこそおはすめれ、この君はいはでうしと思はむこと、いと恥しげに心深きを、あいなく思ふこと添ひぬる人の上なめり、年頃見ず知らざりつる人のうへなれど、心ばへかたちを見れば、え思ひ放つまじうらうたく心苦しきに、世の中はありがたくむつかしげなる物かな、我が身の有樣はあかぬ事多かる心地すれどかく物はかなきめも見つべかりける身の、さははふれずなりにけるにこそ、げにめやすきなりけれ、今は唯このにくき心添ひ給へる人の、なだらかにて思ひはなれなば、更に何事も思ひ入れずなりなむと思ほす。いと多かるみぐしなれば、とみにもえほしやられず、起き居給へるもくるし。白き御ぞひとかさねばかりにておはする、細やかにてをかしげなり。この君は誠に心地も惡しくなりにたれど、めのと「いとかたはらいたし。ことしもあり顏におぼすらむを、唯おほどかにて見え奉り給へ。右近の君などには事のありさま初より語り侍らむ」と、責めてそゞのかしたてゝ、こなたの御さうじのもとにて、「右近の君に物聞えさせむ」といへば、立ちて出でたれば、「いと怪しく侍りつることのなごりに、身もあへなうなり給ひて、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとほしく見侍る。お前にて慰め聞えさせ給へとてなむ、あやまちもおはせぬ御身を、いとつゝましげに思ほし侘びにためるも、さすがにこ

そ。いさゝかにても世を知り給へる人こそあれ、いかでかはとことわりにいとほしく見奉る」とて、引き起して參らせ奉る。我にもあらず人の思ふらむことも恥しけれど、いとやはらかにおほどきすぎ給へる君にて、押し出でられて居給へり。ひたい髮などの、いたうぬれたるをもてかくして、火の方に背き給へるさま、うへをたぐひなく見奉るに、けおとるとも見えず、あてにをかし。これにおぼしつきなば、めざましげなることはありなむかし。いとかゝらぬをだに珍しき人をかしうしたまふ御心をと、二人ばかりぞお前にて、えはぢあへ給はねば見居たりける。物語いとなつかしくし給ひて、「例ならずつゝましき所など、な思ひなし給ひそ。故姫君のおはせずなり給ひし後、忘らるゝよなくいみじく、身もうらめしく、たぐひなき心地してすぐすに、いとよく思ひよそへられ給ふ御さまを見れば、慰む心地して哀になむ。思ふ人もなき身に昔の御志のやうに思ほさば、いと嬉しくなむ」など語らひ給へど、いと物つゝましくてまたひなびたる心に、いらへ聞えむともなくて、「年頃いと遙にのみ思ひ聞えさせしに、かう見奉り侍るは何事も慰む心地し侍りてなむ」とばかり、いと若びたる聲にていふ。繪など取り出させて、右近にことわり讀せて見給ふに、向ひて物はぢもえしあへ給はず、心に入れて見給へるほかげ、更にこゝと見ゆる所なく、こまかにをかしげなり。額つきまみのかほりたる心地して、いとおほどかなるあてさは、唯それとのみ思ひ出でらるれば、繪はことに目も留め給はで、いと哀なる人のかたちかな、いかでかうしもありけるにかあらむ、故宮にいとよく似奉りたるなめりかし、故姫君は宮の御方さまに、我は母上に似奉りた

りとこそは、ふる人どもいふなりしが、げに似たる人はいみじきものなりけりとおぼしくらぶるに涙ぐみて見給ふ。かれは限なくあてに氣高きものから、なつかしうなよゝかに、かたはなるまで、なよなよとたはみたるさまし給へりしにこそ。これはまだもてなしのうひうひしげに、よろづの事をつゝましうのみ思ひたるけにや、見所多かるなまめかしさぞ劣りたる。ゆゑゆゑしきけはひだにもてつけたらば、大將の見給はむにも、更にかたはなるまじなど、このかみ心に思ひあつかはれ給ふ。物語などし給ひて曉がたになりてぞ寢給ふ。傍に臥せ給ひて、故宮の御事ども、年頃おはせし御有樣など、まほならねど語り給ふ。いとゆかしうて見奉らずなりにけるを、いと口惜しう悲しと思ひたり。よべの心しりの人々は、「いかなりつらむな。いとらうたげなる御さまを、いみじうおぼすとも、かひあるべきことかは。いとほしと」いへば、右近ぞ「さもあらじ、かの御めのとの引きすゑて、すゞろ語りうれへし、氣色もてはなれてぞいひし。宮もあひても逢はぬやうなる心ばへにこそ、打ちうそぶき口すさび給ひしか、いさや殊更にもやあらむ、そは知らずかし。よべのほかげのいとおほどかなりしも、ことあり顔には見え給はざりしを」など、うちさゝめきていとほしがる。めのと車こひて常陸殿へいぬ。北の方にかうかうといへば胸つぶれさわぎて、人もけしからぬさまにいひ思ふらむ、さうじみもいかゞおぼすべき、かゝるすぢの物にくみは、あて人もなきものなりと、おのが心ならひにあわたゞしく思ひなりて、夕つ方まゐりぬ。宮おはしまさねば心やすくて、「怪しく心幼げなる人を參らせおきて、うしろやすくはたのみ聞えさせながら、いたちの侍

らむやうなる心地のし侍れば、よからぬものともに悪み怨みられ侍り」と聞ゆ。「いとさいふばかりの幼げさにはあらざめるを、うしろめたげに氣色ばみたる御まかげこそ煩はしけれ」とて笑ひ給へるが、心恥しげなる御まみを見るも、心のおにゝ恥しくぞ覺ゆる。いかにおぼすらむと思へばえもうち出で聞えず、「かくて侍ひ給ふは、年頃の願ひのみつこゝちして、人のもり聞き侍らむもめやすく、おもだゝしきことになむ思ひ給ふるを、さすがにつゝましきことになむ侍りけるを、深き山のほいは、みさをになむ侍るべきを」とて、打ち泣くもいといとほしくて「こゝには何事かうしろめたく覺え給ふべき。とてもかくてもうとうとしく、思ひ放ち聞えばこそあらめ。けしからずだちて、よからぬ人の時々ものし給ふめれど、その心を皆人見知りためれば、心づかひして、びんなうはもてなし聞えじと思ふを、いかに推し量り給ふにか」とのたまふ。「更に御心をばへだてありても思ひ聞えさせ侍らず、片腹痛うゆるしなかりしすぢは、何にかけても聞えさせ侍らむ、その方ならでも、おぼし放つまじきつなも侍るをなむ、とらへ所に頼み聞えさする」など、おろかならず聞えて、「あすあさてかたき物忌に侍るを、おほぞうならぬ所にてすぐして、又も參らせ侍らむ」と聞えて誘ふ。いとほしくほいなきわざかなとおぼせど、えとゞめ給はず、あさましうかたはなるとに驚きさわぎたれば、をさをさ物も聞えでいでぬ。かやうのかたゝがへどころと思ひて、ちひさき家設けたりけり。三條わたりにざればみたるが、まだ作りさしたる所なれば、はかばかしきしつらひもせでなむありける。「あはれこの御身ひとつを、よろづにもて惱み聞ゆるかな。心にかたは

ぬ世には、ありなまじきものにこそありけれ。みづからばかりは唯ひたぶるに志なきなしからず、人げなテ、たゞさる方にはひこもりて過しつべし。この御ゆかりは心うしと思ひ聞えしあたりを、むつび聞ゆるに、びんなき事も出できなば、いと人わらへなるべし。あぢきなし、ことやうなりとも、こゝな人にも知らせず忍びておはせよ、おのづからともかくも仕う奉りてむ」と言ひ置きて、自らは歸りなむとす。君は打ち泣きて、世にあらむこと、所せげなる身と思ひくし給へるさま、いと哀なり。親はたましして、あたらしく惜しければ、つゝがなくて思ふごと見なさむと思ひ、さるかたはらいたき事につけて、人にもあはあはしく思はれいはれむが、安からぬなりけり。心地なくなどはあらぬ人の、なま腹立ちやすく、思ひのまゝにぞすこしありける。かの家にもかくろへてはすゑたりぬべけれど、志かかくろへたらむを、いとほしと思ひてかくあつかふに、年頃かたはら去らず明暮見ならひて、かたみに心ぼそく、わりなしと思へり。「こゝはまだかくあばれて、あやうげなる所なめり。さる心したまへ、ざうしざうしにあるものども召し出でゝ使ひ給へ、とのゐ人のことなどいひ置きて侍るも、いとうしろめたけれど、かしこに腹立ち怨みらるゝが、いと苦しければ」と、うち泣きてかへる。少將のあつかひを、かみは又なきものに思ひ急ぎて、もろごゝろにさま惡しく、いとなまずとゑんずるなりけり。いと心憂くこの人により、かゝるまぎれどもゝあるぞかしと、またなく思ふ方のことのかゝれば、つらく心うくて、をさをさ見いれず。かの宮のお前にて、いと人げなく見えしに、多く思ひおとしてければ、私物に思ひかしづかましをなど、思ひしこと

は止みにたり。こゝにてはいかゞ見ゆると、まだ打ち解けたるさま見ぬにと思ひて、のどかに居給へる晝つかた、こなたに渡りてものよりのぞく。白き綾のなつかしげなるに、今やう色のうちめなども清らなるを着て、はしの方にせんざい見るとてゐたるは、いづくかはおとる、いと清げなめるはと見ゆ。むすめまだかたなりに、何心もなきさまにて添ひ臥したり。宮のうへの並びておはせし御さまどもの、思ひ出づれば、口惜しのさまどもやと見ゆ。前なるごだちに物など言ひ戯ぶれて打ち解けたるは、いと見しやうににほひなく、人わろげにも見えぬを、かの宮なりしは、こと少將なりけりと思ふ折しもいふことよ、「兵部卿の宮の萩の、猶殊におもしろくもあるかな。いかでさる種ありけむ、同じ枝さしなどの、いと艶なるこそ、一日參りて出で給ふ程なりしかば、え折らずなりにき。ことだに惜しきと、宮のうちずじ給へりしを若き人たちに見せたらましかば」とて我も歌よみ居たり。いでや心ばせの程を思へば人とも覺えず、いでぎえは、いとこよなかりけるに何事いひ居たるぞとつぶやかなれど、いと心地なげなるさまは、さすがにあたらねば、いかゞいふとて、こゝろみに、

「しめゆひし小萩がうへもまよはぬにいかなる露にうつる下葉ぞ」とあるに、いとほしく覺えて、

「宮城野の小萩がもとゝ知らませばつゆも心をわかずぞあらまし。いかでみづから聞えさせあきらめむ」といひたり。故宮の御事聞きたるなめりと思ふにいとゞいかで人とひとしくとのみ思ひあつかはる。あいなう大將殿の御さまかたちぞ戀しう面影に見ゆる。同じうめ

でたしと見奉りしかど宮は思ひ離れ給ひて心もとまらず、あなづりて押し入り給へりけるを、思ふもねたし、この君はさすがに尋ねおぼす心ばへのありながら、うちつけにもいひかけ給はず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、萬につけて思ひ出でらるれば若き人はましてかくや思ひ出で聞え給ふらむ、我がものにせむと、かくにくき人を思ひけむこそ見苦しき事なるべかりけれなど唯心にかゝりて眺めのみせられて、とてやかくてやと、よろづに善からむあらましごとを思ひつゞくるに、いとかたし。やんごとなき御身のほど御もてなし見奉り給へらむ人は今少しなのめならず、いかばかりにてかは心を留め給はむ、世の人の有様を見聞くに、劣り優り賤しうあてなる志なに從ひてかたちも心もあるべきものなりけり、我が子どもを見るに、この君に似るべきやはある、少將をこの家の内に、又なきものに思へども、宮に見くらべ奉りしかば、いとも口惜しかりしに推し量らる、當代の御かしづきむすめを、え奉り給へらむ人の御めうつしには、いともいともはづかしく、つゝましかるべきものかなと思ふも、すゞろに心地もあくがれにけり。旅のやどりはつれづれにて、庭の草もいぶせき心地するに、いやしきあづまこゑしたるものどもばかりのみいでいり、慰めに見るべきせんざいの花もなし。打ちあばれて、はればれしからで明し暮すに、宮のうへの御有樣思ひ出づるに若い心地に戀しかりけり。あやにくだち給へりし人の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何事にかありけむ、いと多く哀げにのたまひしかな、名殘をかしかりし御うつりがも、まだ殘りたる心地して恐しかりしも思ひ出でらる。母君だつやと、いと哀げなる文をかきて

おこせ給ふ。おろかならず心苦しう思ひあつかひ給ふめるに、かひなうもてあつかはれ奉るこ とゝ打ちなかれて、「いかにつれづれに見習はぬ心地し給ふらむ。しばし忍び過し給へ」とある返事に、「つれづれは何か心やすくてなむ。

ひたぶるにうれしからまし世の中にあらぬ所とおもはましかば」。幼げにいひたるを見るまゝにほろほろと打ち泣きてからうまどはしはふるゝやうにもてなすよといみじければ

「うき世にはあらぬ所をもとめても君がさかりを見るよしもがな」となほなほしきことどもをいひかはしてなむ心をのべける。」かの大将殿は例の秋深くなりゆく頃、習ひにしことなれば、ねざめねざめに物忘れせず、哀にのみ覺え給ひければ、宇治のみ堂つくりはてつと聞き給ふに、みづからおはしましたり。久しう見給はざりつるに、山の紅葉も珍しうおぼゆ。毀ちし寢殿、こたみはいとはればれしうつくりなしたり。昔いとことそぎて、ひじりだち給へりしすまひを思ひ出づるに、故宮も戀しうおぼえ給ひて、さまかへてけるも、口惜しきまでおぼさるれば常よりもながめ給ふ。もとありし御しつらひは、いとたふとげにて、今片つかたを女しく、こまやかになど、一かたならざりしを、あじろ屛風、なにかのあらあらしきなどは、かのみ堂の僧坊のぐに殊更になさせ給へり。山里めきたるぐどもを殊更にせさせ給ひて、いたうもことそがず、いと清げにゆゑゆゑしくしつらはれたる、遣水のほとりなる岩に居給ひて、とみにも立たれず、

「絶えはてぬ清水になどかなき人のおもかげをだにとゞめざりけむ」。涙をのごひつゝ辨

の尼君の方に立ちより給へれば、いとかなしと見奉るに、唯ひそみにひそむ。なげしにかりそめに居給ひて、簾垂のつまを引き上げて物がたりし給ふ。几帳にかくろへて居たり。ことのついでに、「かの人はさいつころ宮にと聞きしを、さすがにうひうひしく覺えてこそ、音づれよらね。猶これより傳へはて給へ」とのたまへば、「一日かの母君の文侍りき。いみたがふとて、こゝかしこになむあくがれ給ふめる。この頃もあやしき小家にかくろへものし給ふめるも、いと心苦しく、少し近き程ならましかば、そこにわたして心安かるべきを、あらましき山道に、たはやすくもえ思ひ立たでなむと侍りし」と聞ゆ。「人々のかく恐しく住める道にまろこそふりがたくわけくれ、何ばかりの契にかと思ふは哀になむ」とて、例の涙ぐみ給へり。「さらばその心安からむ所にせうそこしたまへ、みづからやはかしこに出で給はぬ」とのたまへば、「仰せ言を傳へ侍らむことはやすし。今更に京を見侍らむことは物うくて宮にだにえ參らぬを」と聞ゆ。「などてかともかくも人の聞き傳へばこそあらめ、あたごのひじりだに時に從ひては出でずやはありける。深きちかひを破りて人の願を滿て給はむこそ、たふとからめ」とのたまへば「人わたすことも侍らぬに聞きにくきこともこそ出でまうで來れ」と、苦しげに思ひたれど、「猶よきをりなゝるを」と、例ならずしひて、「あさてばかり車奉らむ。そのたびの所尋ねおき給へ。ゆめをこがましくひがわざすまじうを」と、ほゝゑみてのたまへば、煩はしく、いかにおぼすことならむと思へど、おうなくあはあはしからぬ御心ざまなれば、おのづから我が御爲にも人聞きなどはつゝみ給ふらむと思ひて「さらばうけ給はりぬ。近き

程にこそ御文などを見せさせ給へかし。ふりはへさかしらめきて、心ちらびのやうに思はれ侍らむも今更にいがたうめにや、つゝましくてなむ」と聞ゆ。「文はやすかるべきを、人の物いひいとうたてあるものなれば、右大將は常陸のかみの娘をなむ、よばふなるなどもとりなしてむをや。そのかんのぬし、いとあらあらしげなめり」とのたまへば、うち笑ひて、いとほしと思ふ。暗うなれば出で給ふ。下草のをかしき花ども紅葉などをらせ給ひて宮に御覧ぜさせ給ふ。かひなからずおはしぬべけれど、かしこまり置きたるさまにて、いたうもなれ聞え給はずぞあめる。うちよりたゞの親めきて、入道の宮にも聞え給へば、いとやんごとなきかたは限なく思ひ聞え給へり。こなたかなたとかしづき聞え給ふ宮仕にそへて、むつかしき私の心の添ひたるも苦しかりけり。のたまひしまだつとめて、むつましくおぼす下﨟の侍一人、顔知らぬ牛飼つくり出でゝつかはす。御さうのものどもの田舎びたる召し出でゝ「つけよ」とのたまふ。必ず出づべくのたまへりければ、いとつゝましく苦しけれど、打ちけさうじつくろひてのりぬ。野山の氣色を見るにつけても、いにしへよりのふることゞも思ひ出でられて、「眺め暮してなむきつきける。いとつれづれに人めも見えぬ所なれば心やすく引き入れて、「かくなむ參り來つる」と、あるべのをのこしていはせたれば、初瀬のともにありし若人出できておろす。怪しき所をながめ暮し明すに、昔がたりもあつべき人のきたれば嬉しく呼び入れ給ひて、親と聞えける人の御あたりの人と思ふに、むつましきなるべし。「哀に人あれず見奉りし後よりは思ひ出で聞えぬをりなけれど、世の中かばかり思ひ給へ捨てたる身に

て、かの宮にだに參り侍らぬを、この大將殿の怪しきまでのたまはせしかば、思ひ給へ起してなむ」と聞ゆ。君もめのとも、めでたしと見置き聞えてし人の御さまなれば忘れぬさまにのたまふらむも哀なれど、俄にかくおぼしたばかるらむとは思ひもよらず、宵うち過ぐる程に宇治より人參れりとて、門忍びやかに打ち叩く。さにやあらむと思へば、辨あけさせたれば、車をぞひき入るなる。怪しと思ふに、尼君に對めん給はらむとて、この近き御さうのあづかりの名のりをせさせ給へれば、戶口にゐざり出でたり。雨少しうちそゝぐに、風はいとひやゝかに吹き入りて、いひ知らず薰りくれば、かうなりけりと、たれもたれも心ときめきしつべき御けはひをかしければ、用意もなくあやしきに、まだ思ひあへぬ程なれば心さわぎて、「いかなることにかあらむ」といひあへり。「心やすき所にて月頃の思ひあまることも聞えさせむとてなむ」といはせ給へり。いかに聞ゆべきことにかと君は苦しげに思ひて居給へれば、めのと見苦しがりて、「しかおはしましたらむを、立ちながらやは返し奉り給はむ。かの殿にこそかくなむと忍びて聞えめ。近き程なれば」といふ。「うひうひしくなどてかさはあらむ。若き御どち物聞え給はむは、ふとしもしみつくべくもあらぬを、怪きまで心のどかに物深うおはする君なれば、よも人のゆるしなくて打ち解け給はじ」などいふ程、雨やゝ降りくれば、空はいとくらし。とのゐびとのあやしき聲したるやぎやうちして、「やかの辰巳のすみのくづれいとあやうし。この人の御車入るべくば引き入れて御門さしてよ。かゝるひとの供人こそ、心はうたてあれ」などいひあへるも、むくむくしく聞き習はぬ心地し給ふ。さのゝ

わたりに家もあらなくになど口ずさびて、さとびたる簀子のはしつかたに居給へり。

「さしとむるむぐらやしげきあづま屋の　あまりほどふる雨ぞゝきかな」とうちはらひ給へるおひ風、いとかたはなるまで、あづまの里人も驚きぬべし。とざまかうざまに聞えのがれむ方なければ、南のひさしにおまし引きつくろひて入れ奉る。心やすくもたいめし給はぬを、これかれをしいでたり。遣戸といふものさして、いさゝかあけたれば、「飛彈のたくみもうらめしきへだてかな。かゝるものゝとには、まだゐならはず」と愁へ給ひて、いかゞし給ひけむ、入り給ひぬ。かの人がたの願ものたまはで、唯覺えなきものゝはざまより見しより、すゞろに戀しきこと、さるべきにやあらむ怪しきまでぞ、思ひ聞ゆるとぞ語らひ給ふべき。人のさまいとらうたげにおほどきたれば、見おとりもせず、いと哀とおぼしけり。程もなう明けぬる心地するに鳥などは鳴かで、おほぢ近き所におほどれたる聲して、いかにとか聞きも知らぬなのりをして打ち群れて行くなどぞ聞ゆる。かやうの朝ぼらけに見れば、ものいたゞきたるものゝ、鬼のやうなるぞかしと聞き給ふも、かゝる蓬のまろねに、ならひ給はぬ心地に、をかしうもありけり。とのゐびとも門あけて出づる音す。おのおの入りて臥しなどするを聞き給ひて、人召して車妻戸に寄せさせ給ふ。かき抱きて乘せ給ひつ。誰も誰もあやしう、あへなきことを思ひさわぎて、「なが月にもありけるを心うのわざや。いかにしつることぞ」と歎けば、尼君もいといとほしく、思のほかなることどもなれど、「おのづからおぼすやうあらむ。うしろめたうな思ひ給ひそ。ながつきはあすこそせちぶと聞きしか」といひ慰む。今日

は十三日なりけり。「尼君こたみはえ參らじ。宮のうへきこし召さむこともあるに、忍びて行きかへり侍らむも、いとうたてなむ」と聞ゆれど、またきこの事聞かせ奉らむも心恥しく覺え給ひて、「それは後にも罪さり申し給ひてむ。かしこにあるべくなくては、たつきなき所を」と責めてのたまふ。「人一人やはべるべき」とのたまへば、この君に添ひたる侍從とのりぬ。めのと尼君のともなりしわらはなども後れて、いと怪しき心地して居たり。近き程にやと思へば宇治へおはするなりけり。牛などひきかふべき心まうけし給へり。河原過ぎ法さう寺のわたりおはしますに、夜は明けはてぬ。若き人はいとほのかに見奉りて、めで聞えて、すゞろにこひ奉るに、世の中のつゝましさも覺えず、君ぞいとあさましきに物も覺えで、うつぶしふしたるを、「石高きわたりは苦しきものを」とて抱き給へり。うすものゝほそながを車のなかに引き隔てたれば、花やかにさし出でたる朝日かげに、尼君はいとはしたなく覺ゆるにつけて、故姫君の御ともにこそ、かやうにても見奉りつべかりしが、ありふれば思かけぬことをも見るかなと悲しう覺えて、つゝむとすれど、うちひそみつゝ泣くを、侍從はいとにくゝものゝはじめに、かたちことにて乘りそひたるをだに思ふに、なぞかくいやめなると、にくゝをこにも思ふ。老いたるものは、すゞろに淚もろにあるものぞと、おろそかに打ち思ふなりけり。君も見る人はにくからねどそらの氣色につけても、きしかたの戀しさまさりて、山深く入るまゝに霧立ちわたる心地し給ふ。打ち眺めてより居給へる、袖のかさなりながら、ながやかに出でたりけるが、川霧にぬれて御ぞのくれなゐなるなるに、御なほしの花のおどろお

どろしううつりたるを、おとしかけのたかき所に見つけて引き入れ給ふ。

「かたみぞと見るにつけてもあさぎりの所せきまでぬるゝ袖かな」と心にもあらず、ひとりごち給ふを聞きて、いとゞ志ぼるばかり尼君の袖も泣きぬらすを、若き人あやしう見苦しきよかな、心ゆくみちに、いとむつかしきこと添ひたる心地す。忍びがたげなる鼻ずゝりを聞き給ひて我も忍びやかに打ちかみ給ひて、さすがにいかゞ思ふらむといとほしければ、あまたの年頃、この道を行きかふたび重るを思ふに、そこはかとなく物哀なるかな。「少し起きあがりて、この山の色も見給へ。いとうもれたりや」と、強ひてかきおこし給へば、をかしき程にさしかくして、つゝましげに見出したるまみなどは、いとよく思ひ出でらるれど、おいらかにあまりおほどき過ぎたるぞ心もとなかめる。いといたうこめいたるものから用意の淺からず物し給ひしはやと、猶行くかたなき悲しさは空しきそらにも滿ちぬべかめり。おはしつきて、哀なきたまややどりて見給ふらむ、誰によりて、かくすゞろに惑ひありくものにもあらなくにと思ひ續け給ひて、おりては少し心志らひて立ち去り給へり。女は母君の思ひ給はむことなど、いとなげかしけれど、艶なるさまに心深く哀に語らひ給ふに、思ひ慰めておりぬ。尼君はこなたに殊更におりて廊にぞ寄するを、わざと思ふべき住ひにもあらぬを、よういこそあまりなれと見給ふ。みさうより例の人々騷しきまで參り集る。をんなの御だいは尼君の方よりまゐる。道はしげかりつれど、この有樣はいとはればれし。河の氣色も山の色も、もてはやしたるつくりざまを見出して、日頃のいぶせさ慰みぬる心地すれど、いかにもてない給

はむとするにかと、うきて怪しう覺ゆ。殿は京に御文書き給ふ。「まだなりあはぬ佛の御飾など見給へおきて、けふよろしき日なりければ、急ぎ物し侍りて、みだり心地のなやましきに、物忌なりけるを思ひ給へ出でゝなむ、けふあすこゝに愼み侍るべき」など、母宮にも姫宮にも聞え給ふ。打ち解けたる御有樣今少しをかしくて、入りおはしたるもはづかしけれど、もてかくすべくもあらで居給へり。女の御さうぞくなど、いろいろによくと思ひて志かさねたれど、少し田舍びたることもうちまじりてぞ、昔のいとなえばみたりし御姿の、あてになまめかしかりしのみ思ひいでられて、髮のすそのをかしげさなどは、こまごまとあてなり。宮のみぐしのいみじくめでたきにも、劣るまじかりけりと見給ふ。かつはこの人をいかにもてなしてあらせむとすらむ、只今ものものしげにて、かの宮にむかへすゑむも、おとぎゝびんなかるべし。さりとてこれかれあるつらにて、おほぞうにまじらはせむはほいなからむ。志ばしこゝにかくしてあらむと思ふも、見ずばさうざうしかるべく、哀におぼえ給へば、おろかならず語らひ暮し給ふ。故宮の御こともの給ひ出でゝ、昔物語をかしうこまやかにいひ戲ぶれ給へど唯いとつゝましげにてひた道に耻ぢたるを、さうざうしうおぼす。誤りてもかう心もとなきはいとよし、敎へつゝも見てむ、田舍びたるざれ心もてつけて、志な志なしからず、はやりかならましかばしも、かたしろふようならましと思ひなほし給ふ。こゝにありけるきん、さうのこと召し出でゝ、かゝることはた、ましてえせじかしと口惜しければ、ひとり志らべて、宮うせ給ひて後、こゝにてかゝるものに、いと久しう手觸れざりつかしと、めづら

しく我ながら覺えて、いとなつかしくまさぐりつゝながめ給ふに、月さし出でぬ。宮の御きんの音のおどろおどろしくはあらで、いとをかしく哀に彈き給ひしはやとおぼし出でゝ、「昔誰も誰もおはせし世に、こゝに生ひ出で給へらましかば、今少し哀はまさりなまし。みこの御ありさまは、よその人だに哀に戀しくこそ思ひ出でられ給へ、などてさる所には年頃經給ひしぞ」とのたまへば、いと耻しくて、白き扇をまさぐりつゝ、添ひふしたるかたはらめ、いとくまなうしろうて、なまめいたるひたひ髮のひまなど、いとよく思ひ出でられて哀なり。まいてかやうのことはつきなからず、敎へなさばやとおぼして、「これは少しほのめい給ひたりや。あはれ我がつまといふとは、さりとも手ならし給ひけむ」など問ひ給ふ。「そのやまとことばだに、つきなくならひにければ、ましてこれは」といふ。いとかたはに心後れたりとは見えず。こゝにおきて、え思ふまゝにもこざらむことをおぼすが、今より苦しきは、なのめにはおぼさぬなるべし。きんは押しやりて、「楚王のたいのうへのよるのきんの聲」と、ずんじ給へるも、かの弓をのみひくあたりにならひて、いとめでたく思ふやうなりと、侍從も聞き居たりけり。さるは扇の色も、心おきつべきねやのいにしへをば知らねば、ひとへにめで聞ゆるぞ、後れたるなめるかし。ことこそあれ、怪しくもいひつるかなとおぼす。尼君の方よりくだものまゐれり、箱のふたに紅葉蔦など折りしきて、ゆゑなからず取りまぜてしきたるかみに、ふつゝかに書きたるもの、くまなき月にふと見ゆれば、目とゞめ給ふ程に、くだものいそぎにぞ見えける。

「やどり木は色かはりぬる秋なれどむかしおぼえて澄める月かな」とふるめかしく書きたるを、はづかしくも哀にもおぼされて、

「里の名もむかしながらに見し人のおもかはりせるねやの月かげ」。わざとかへりごとはなくてのたまふを、侍從なむ傳へけるとぞ。

浮船

宮、猶かのほのかなりし夕をおぼし忘るゝ世なし。ことごとしきほどにはあるまじげなりしを、人がらのまめやかにをかしうもありしかなと、あだなる御心には口惜しくて止みにしよゝ妬うおぼさるゝまゝに、女君をもかうはかなきことゆゑ、あながちにかゝるすぢの物憎みし給ひけり。思はずに心うしと、はづかしめ怨み聞え給ふをりをりは、いと苦しうて、ありのまゝにや聞えてましとおぼせど、やんごとなきさまにはもてなし給はざなれど、あさはかならぬ方に心とゞめて人の隱し置き給へる人を、物いひさがなく聞え出でたらむにも、さて聞きすぐし給ふべき御心ざまにもあらざめり。侍ふ人の中にも はかなう物をもの給ひふれむとおぼし立ちぬるかぎりは、あるまじき里までも尋ねさせ給ふ御さまよからぬ本じやうなるに、さばかり月日を經ておぼししむるあたりは、まして必ず見苦しき事取り出で給ひてむ。ほかより傳へ聞き給はむは いかゞはせむ、いづかたざまにも いとほしくこそはありと

も、防ぐべき人の御心ざまならねば、よその人よりは聞きにくゝなどばかりぞ覺ゆべき、とてもかくても我がをこたりにては、もてそこなはしと思ひかへし給ひつゝ、いとほしながらも聞え出で給はず。ことざまにつきづきしくはえいひなし給はねば、おしこめて物怨じしたる、世の常の人になりてぞおはしける。かの人はたとしへなくのどかにおぼしおきてゝ、まちどほなりと思ふらむと心苦しうのみ思ひやり給ひながら、所せき身の程を、さるべきついでなくて、かやすく通ひ給ふべき道ならねば、神のいさむるよりもわりなし。されど今いとよくもてなさむとす。山里の慰めと思ひおきてし心あるを、少し日數も經ぬべきことゞも作り出でゝ、のどやかに行きても見む。さてしばしは人の知るまじきすみどころして、やうやうさる方に、かの心をものどめ置き、我がためにも人のもどきあるまじく、なのめにてこそよからめ。俄に何人ぞ、いつよりなど聞き咎められむも物騒しく、初の心にたがふべし。又宮の御方の聞きおぼさむことも、もとの所をきはぎはしうゐてはなれ、昔をわすれ顔ならむも、いとほいなしなどおぼししづむるも例のいとのどけさ過ぎたる心からなるべし。わたすべき所おぼし設けて忍びてぞ造らせ給ひける。少し暇なきやうにもなり給ひにたれど、宮の御方には猶たゆみなく心よせ仕うまつり給ふこと同じやうなり。見奉る人も怪しきまで思へど、世の中をやうやうおぼし知り、人のありさまを見聞き給ふまゝに、これこそは誠に昔を忘れぬ心ながさの名殘さへ淺からぬためしなめれと哀もすくなからず、ねびまさり給ふまゝに人がらも世のおぼえも、さまことにものし給へば、宮の御心のあまりたのもしげなき

時々は思はずなりける宿世かな、故姫君のおぼしおきてしまゝにもあらで、かく物思ひ憚るべき方にしもかゝりそめけむよとおぼすをりをり多くなむ。されどたい面し給ふことはかたし。年月もあまり昔を隔て行き、うちうちの御心を深う知らぬ人は、なほなほしきたゞ人こそ、さばかりのゆかり尋ねたるむつびをも忘れぬに、つきづきしけれ、なかなかかう限あるほどに、例にたがひたるありさまぞなどいひ思はむもつゝましければ宮の絶えずおぼし疑ひたるを、いよいよ苦しうおぼし憚り給ひつゝ、おのづから疎きさまになり行くを、さりとても絶えず同じ心の變り給はぬなりけり。宮もあだなる御本じやうこそ見まうきふしもまじれ、若君のいと美くしうおよすけ給ふまゝに、ほかにはかゝる人も出でくまじきにやと、やんごとなきものにおぼして、うちとけなつかしき方には人にまさりてもてなし給へば、ありしよりは少し物思ひ靜まりてすぐし給ふ。む月の一日過ぎたる頃渡り給ひて、若君の年まさり給へるをもてあそびうつくしみ給ふ晝つ方、ちひさきわらはは、緑のうすえふなるつゝみ文の大きやかなるに、小さきひげこを小松につけたる、又すくずくしきたてぶみとり副へて、あうなく走りまゐる。女君に奉れば、宮「それはいづくよりぞ」とのたまふ。「宇治より大輔のおとゞにとて、もてわづらひ侍りつるを、例のお前にてぞ御覽ぜむとて、とり侍りぬる」といふも、いとあわたゞしき氣色にて、「このこはかねを造りて、色どりたることなりけり。松もいとよう似て造りたる枝ぞとよ」と、ゑみていひつゞくれば、宮も笑ひ給ひて、「いで我ももてはやしてむ」とめすを、女君いとかたはらいたくおぼして、「文は大輔がりやれ」との

たまふ。御顏の赤みたれば、宮、大將のさりげなくしなしたる文にて、宇治の名のりもつきづきしとおぼしよりて、この文をとり給ひつ。さすがにそれならむ時にとおぼすに、いとまばゆければ「あけて見むよ、怨じやし給はむとする」とのたまへば、「見苦しう。何かはその女どちの中に書き通はしたらむうちとけ文をば御覽ぜむ」とのたまふが、さわがぬ氣色なれば、「さば見むよ。女の文がきは、いかゞある」とてあけ給へれば、いと若やかなる手にて、「おぼつかなくて年も暮れ侍りにける。山里のいぶせさこそ峰の霞もたえまなくて」とて、はしに、「これ若君のお前に、あやしう侍るめれど」と書きたり。ことにらうらうじきふしも見えねど、覺えなきを御目たてゝ、この立文を見給へば、げに女の手にて、「年改りて何事かさぶらふ。御私にも、いかにたのもしき御悅多く侍らむ。こゝにはいとめでたき御住ひの心深きを猶ふさはしからず見奉る。かくてのみつくづくとながめさせ給ふよりは、時々は渡り參らせ給ひて御心も慰めさせ給へと思ひ侍るに、つゝましく恐しきものにおぼしこりてなむ、物憂き事に歎かせ給ふめる。若君のお前にとて、卯槌參らせ給ふ。おほきおまへの御覽ぜざらむ程に御覽ぜさせ給へ」となむ、こまごまと、こといみもえしあへず、物なげかしげなるさまのかたくなしげなるも、うち返しうち返し怪しと御覽じて、「今はのたまへかし。誰がぞ」とのたまへば、「昔かの山里にありける人のむすめの、さるやうありて、この頃かしこに侍るとなむ聞き侍りし」と聞え給へば、おしなべて仕うまつるとは見えぬ文がきをと心え給ふに、かの煩はしきことゝあるにおぼしあはせつ。卯槌をかしう、つれづれなりける人のしわざと見

えたり。またぶりに山たちばなつくりて、つらぬき添へたる枝に、

「まだふりぬものにはあれど君がため深きこゝろにまつと知らなむ」と、ことなるとなきを、かの思ひわたる人のにやとおぼしよりぬるに、御目とまりて、「返事し給へ。なさけなし。かくい給ふべき文にもあらざめるをなど御氣色のあしき、まかりなむよ」とて立ちたまひぬ。女君少將などして、「いとほしくもありつるかな。幼き人の取りつらむを、人はいかでか見ざりつるぞ」など忍びてのたまふ。「見給へましかば、いかでかは參らせまし。すべてこは心ちなうさしすぐして侍り。おひさき見えて人はおほどかなるこそ、をかしけれ」などにくめば、「あなかま。幼き人な腹だてそ」とのたまふ。こぞの冬人の參らせたるわらはの、顏はいと美しかりければ宮もいとらうたくし給ふなりけり。我が御方におはしまして、あやしうもあるかな、宇治に大將の通ひ給ふことは年頃絕えずと聞く中にも、忍びて夜泊り給ふ時もありと人のいひしを、いとあまりなる人のかたみとて、さるまじき所に旅寢し給ふらむことゝ思ひつるは、かやうの人かくし置き給へるなるべしと、おぼしうることもありて、御文のことにつけ、つかひ給ふ大內記なる人の、かの殿に親しきたよりをおぼし出でゝ、お前に召す。まゐれり。ゐんふたぎすべきに、集どもえり出でゝ、こなたなる厨子につむべきことなどのたまはせて、「右大將の宇治へいまするなほ絕えはてずや。寺をこそいとかしこく造りたなれ。いかでか見るべき」とのたまへば、「いとかしこくいかめしく造られて、不斷の三昧堂など、いとたふとくおきてられたりとなむ聞き給ふる。かよひ給ふとは、こぞの秋頃よりは、

ありしよりも志ば志ば物し給ふなり。志もの人々の忍びて申志しは、女をなむ隠しすゑさせ給へる。けしうはあらずおぼす人なるべし。あのわたりにらうじ給ふ所々の人、皆仰にて參り仕うまつる。とのゐにさしあてなどしつゝ、京よりもいと忍びて、さるべき事など問はせ給ふ。いかなるさいはひびとの、さすがに心ぼそくて居給へるならむとなむ、唯このしはすの頃ほひ申すと聞き給へし」ときこゆ。いと嬉しくも聞きつるかなと思ほして、「たしかにその人とはいはずや。かしこにもとよりある尼ぞとぶらひ給ふと聞きし」。「尼は廊になむ住み侍りける。この人は今たてられたるになむ。きたなげなき女房などもあまたして、口惜しからぬけはひにてゐて侍る」と聞ゆ。「をかしきとかな。何の心ありて、いかなる人をかはさてすゑ給ひつらむ。猶いと氣色ありて、なべての人に似ぬ御心なりや。左のおとゞなど、この人のあまり道心に進みて山寺によるさへともすれば泊り給ふなる、輕々しさともどき給ふと聞きしを、げになどかさしも佛の道には忍びありくらむ、猶かのふるさとに心をとゞめたるとなむ聞きし。かゝることこそはありけれ、いづら人よりはまめなるとさかしがる人しも、ことに人の思ひいたるまじき、くまあるかまへよ」とのたまひて、いとをかしとおぼえたり。この人はかの殿にいとむつましく仕うまつるけいしの聟になむありければ、かくし給ふ事も聞くなるべし。御心のうちには、いかにしてこの人を見し人かとも見定めむ、かの君のさばかりにてすゑたるは、なべてのよろしき人にはあらじ、このわたりには、いかでかうとからぬにかあらむ、心をかはしてかくし給へりけるも、いとねたうおぼゆ。唯そのことをこの

頃はおぼし志みたり。のりゆみ內宴などすぐして心のどかなるに、つかさめしなどいひて人の心盡すめる方は何ともおぼさねば、宇治へ忍びておはしまさむことをのみおぼしめぐらす。この內記は望むことありて、よるひるいかで御心に入らむと思ふ頃、例よりは懷しう召しつかひて、「いと難き事なりとも我がいはむことはたばかりてむや」などのたまふ。「かしこまりて侍ふ」。「いとびんなきことなれど、かの宇治に住むらむ人は、はやうほのかに見し人の行くへも知らずなりにしが、大將に尋ねとられにけりと聞き合することこそあれ。たしかには知るべきやうもなきを、唯物より覗きなどして、それかあらぬかと見定めむとなむ思ふ。聊か人に知らるまじきかまへは、いかゞすべき」とのたまへば、あな煩はしと思へど、「おはしまさむことは、いと荒き山ごえになむ侍れど、殊に程遠くは侍はずなむ。夕つ方出でさせおはしまして、ゐねの時にはおはしまし着きなむ、さて曉にこそは歸らせ給はめ。人の知り侍らむことは、唯御供にさぶらひ侍らむこそは、それも深き心はいかでか知り侍らむ」と申す。「さかし。むかしも一たび二たび通ひしみちなり、輕々しきもどきおひぬべきが、物の聞えのつゝましきなり」とて、返すがへすあるまじきことに我が御心にもおぼせど、かうまでうち出で給ひつれば得思ひ留め給はず、御供に昔もかしこのあない知れりし者ふたりみたり、この內記、さては御めのとごの藏人よりかうふり得たる若き人、むつましきかぎりをえり給ひて、大將けふあすよもおはせじなど、內記に能くあない聞き給ひて出で立ち給ふにつけても、いにしへをおぼし出づ。あやしきまで心を合せつゝ、ゐてありきし人のために、う

しろめたきわざにもあるかなと、おぼし出づることもさまざまなるに、京の內だにむげに人知らぬ御ありきは、さはいへどえし給はぬ御身にしも怪しきさまのやつれ姿して、み馬にておはする、心地も物恐しくやゝましけれど、ものゝゆかしきかたは進みたる御心なれば山深うなるまゝに、いつしかいかならむ、見合することもなくて歸らむこそ、さうざうしくあやしかるべけれとおぼすに、心もさわぎ給ふ。ほふさう寺のほどまでは御車にて、それよりぞみ馬には奉りける。急ぎて、よひ過ぐる程におはしましぬ。內記、あないよく知れるかの殿の人に問ひ聞きたりければ、とのゐ人あるかたにはよらで、あし垣しこめたるにしおもてを、やをら少しこぼちて入りぬ。我もさすがにまだ見ぬ御住ひなれば、たどたどしけれど人しげうなどしあらねば、しんでんの南おもてにぞ、火ほのぐらう見えて、そよそよと音する。參りて「まだ人は起きて侍るべし。これよりおはしまさむ」としるべして入れ奉る。やをらのぼりて格子のひまあるを見つけて寄り給ふに、伊豫すはさらさらと鳴るもつゝまし。新しう淸げに造りたれど、さすがにあらあらしくてひまありけるを、誰かは來て見むとうちとけて穴もふたがぬなるべし。几帳のかたびら打ち懸けておしやりたり。火あかうともして物縫ふ人三四人居たり。わらはのをかしげなる絲をぞよる。これが顏まづかのほかげに見たまひしそれなり。うちつけめかと猶疑はしきに、右近と名のりし若き人もあり。君はかひなをまくらにて、火をながめたるまみ、髮のこぼれかゝりたる額つき、いとあてやかになまめきて、對の御方にいとようおぼえたり。この右近物折るとて、「かくて渡らせ給ひなば、とみにしも得歸

り渡らせ給はじを、殿はこのつかさめしのほどすぐして、つたいち頃には必ずおはしましなむと、きのふの御つかひも申しけり。御文にはいかゞ聞えさせ給へりけむ」といへど、いらへもせず、いと物思ひたるけしきなり。「折しもはひかくれさせ給へるやうならむが、見苦しさ」といへば、向ひたる人、「それはかくなむ渡り給ひぬると御せうそこ聞えさせ給ひつらむこそよからめ。輕々しういかでかは音なくてははひかくれさせ給はむ。御物まうでの後は、やかで渡りおはしましねかし。かくて心ぼそきやうなれど心にまかせて安らかなる御住ひにならひて、なかなか旅心地すべしや」などいふ。またあるは、「猶暫しかくて待ち聞えさせ給はむぞ、のどやかにさまよかるべきや。京へなど迎へ奉らせ給へらむ後、おだしくて親にも見え奉らせ給へかし。このおとゞのいと急にものし給ひて、俄にかう聞えなし給ふなめりかし。昔も今も物ねんじして長閑なる人こそ、さいはひは見はて給ふなれ」などいふなり。右近「などてこのまゝを留め奉らずなりにけむ。老いぬる人はむづかしき心のあるにこそ」と惱むは、めのとやうの人を譏るなめり。げににくきものありきかしとおぼし出づるも夢の心ちぞする。かたはらいたきまで打ち解けたることどもをいひて、「宮のうへこそいとめでたき御さいはひなれ。左のおとゞのさばかりめでたき御勢ひにていかめしう罵り給ふなれど、若君生れ給ひて後は、こよなくぞおはしますなる。かゝるさかしら人どものおはせで御心のどかにかしこうもてなして、おはしますこそはあめれ」といふ。「殿だにまめやかに思ひ聞え給ふ事變らずば劣り聞え給ふべきことかは」といふを、君少し起きあがりて、「いと聞きにく

きこと、よその人にこそ劣らじとも、いかにとも思はめ。かの御事なかけてもいひそ。漏り開ゆるやうもあらば片腹痛からむ」などいふ。何ばかりのしぞくにかはあらむ、いとよくも似通ひたるけはひかなと思ひくらぶるに、心恥しげにて、あてなる所はかれはいとこよなし。これはたゞらうたげに、こまかなる所ぞいとをかしき。よろしうなりあはぬ所を見つけたらむにてだに、さばかりゆかしとおぼしゝめたる人を、それと見てさて止み給ふべき御心ならねばましてくまもなく見給ふに、いかでかこれを我が物にはなすべきと、わりなくおぼし惑ひぬ。物へ行くべきなめり、親はあるべし。いかでこゝならで、又は尋ね逢ふべき。こよひの程にはまたいかゞすべきと心もそらになり給ひて、猶まもり給へば、右近「いとねぶたし。よべもすゞろに起き明してき。つとめての程にもこれは縫ひてむ。急がせ給ふとも御車は日たけてぞあらむ」といひて、しさしたるものどもとり具して几帳に打ち懸けなどしつゝ、うたゝねのさまに寄り臥しぬ。君も少し奥に入りて臥す。右近北おもてにいきて、暫しありてぞ來たる。君の跡近く臥しぬ。ねぶたしと思ひければ、いと疾う寢入りぬる氣色を見給ひて、又せむやうもなければ忍びやかにこの格子をたゝき給ふ。右近聞きつけて「誰ぞ」といふ。こわづくり給へば、あてなるしはぶきと聞き知りて、殿のおはしたるにやと思ひて起きて出でたり。「まづこれあけよ」とのたまへば、「怪しう覺えなき程にも侍るかな。夜はいたう更けてはべらむものを」といふ。「物へ渡り給ふべかなりと仲信がいひつれば、驚かれつるまゝに出で立ちて、いとこそわりなかりつれ。まづ開けよ」とのたまふ聲、いとようまねび似せたまふ

て忍びたれば、思ひもよらずかい放つ。「道にていとわりなく恐しき事のありつれば怪しき姿になりてなむ。火暗うなせ」とのたまへば、あないみじとあわて惑ひて、火は取りやりつ。「われ人に見すなよ。來たりとて人おどろかすな」といとらうらうじき御心にて、もとよりほのかに似たる御聲を唯かの御けはひにまねびて入り給ふ。ゆゝしきことのさまとのたまへる、いかなる御姿ならむといとほしくて、我もかくろへて見奉る。いとほそやかになよなよとさうぞきて、かのかうばしきことも劣らず。近う寄りて、御ぞども脱ぎ、なれがほに打ち臥し給へれば、「例のおましにこそ」などいへど物ものたまはず。御ふすままゐりて寢つる人々起して、少ししぞきて皆寢ぬ。御供の人など、例のこゝには知らぬならひにて、「哀なる夜のおはしましさまかな。かゝる御有様を御覽じ知らぬよ」など、さかしらがる人もあれど、「あなかま給へ。よごゑはさゝめくしもぞ、かしかましき」などいひつゝ寢ぬ。女君はあらぬ人なりけりと思ふに、あさましういみじけれど聲をだにせさせ給はず。いとつゝましかりし所にてだに、わりなかりし御心なれば、ひたぶるにあさまし。初よりあらぬ人と知りたらば聊いふかひもあるべきを、夢の心ちするに、やうやうそのをりのつらかりしこと、年頃思ひわたるさまのたまふに、この宮と知りぬ。いよいよはづかしく、かのうへのおぼさむことなど思ふに、又猛きことなければ、限りなうなく。宮もなかなかにて、たはやすくあひ見ざらむことなどをおぼすに、泣き給ふ。夜はたゞあけに明く。御供の人來てこわづくる。右近聞きて參れり。出で給はむこゝちもなく飽かずあはれなるに、又おはしまさむことも難ければ京には求

めさるわがるとも、けふばかりはかくてあらむ、何事も生けるかぎりのためてこそあれ、只今出でおはしまさば誠に死ぬべくおぼさるれば、この右近を召し寄せて、「いと心ちなしと思はれぬべけれど、けふは得出づまじうなむある。をのこどもは、このわたり近からむ所に、よくかくろへてさぶらへ。時方は京へものして、山寺に忍びてなむと、つきづきしからむさまに、いらへなどせよ」とのたまふに、いとあさましくあきれて、心もなかりける夜のあやまちを思ふに、心地も惑ひぬべきを思ひしづめて、今は萬におぼゝれ騒ぐとも、かひあらじものからなめげなり。怪しかりしをりに、いと深うおぼしつれたりしも、かうのがれざりける御宿世にこそありけれ、人のしたるわざかはと思ひ慰めて、「今日御迎にと侍りしを、いかにせさせ給はむとする御ことにか、かう遁れ聞えさせ給ふまじかりける御宿世は、いと聞えさせ侍らむかたなし。をりこそいとわりなく侍れ。今日は出でおはしまして御志侍らば長閑にも」と聞ゆ。およすけてもいふかなとおぼして、「我は月頃物思ひつるに、ほれはてにければ人のもどかむも知らず、ひたぶるに思ひなりにたり。少しも身のことを思はゞ、かゝらむ人のかゝるありきは思ひたちなむや。御かへりには、けふは物忌などいへかし。人にしらるまじきことを誰がためにも思へかし。こと事はかひなし」とのたまひて、この人の世に知らず、哀におぼさるゝまゝには萬のそしりも忘れ給ひぬべし。右近出でゝ、「このおとなふ人に、かくなむのたまはするを猶いとかたはならむとを申させ給へ、あさましう珍らかなる御有様は、さ思し召すとも、かゝる御供の人どもの御心にこそあらめ、いかでかう心をさなうは、ゐて奉り

給ひしぞ。なめげなることを聞えさするやまかづなども侍らましかば、いかならまし」といふ。内記は「げにいと煩しくもあるかなと思ひたてり。「時方と仰せらるゝは誰にか、さなむ」とつたふ。笑ひて「からがへ給ふことゞもの恐しければ、さらずとも逃げてまかでぬべし。まはやかにはおろかならぬ御氣色を見奉れば、誰も誰も身を捨てゝなむ。よしよしとのゐびとも皆起きぬなり」とて急ぎ出でぬ。右近人に知らすまじうは、いかゞはたばかるべきと、わりなう覺ゆ。人々起きぬるに、「殿はさるやうありて、いみじう忍びさせ給ふ氣色見奉れば道にていみじき事のありけるなめり。御ぞどもなど、よさり忍びてもて參るべくなむ仰せられつる」などいふ。ごだち「あなむくつけや、木幡山はいと恐しかなる山ぞかし。例の御さきもおはせ給はず、やつれておはしましけむよ。あないみじや」といへば、「あなかまあなかま。げすなどの塵ばかりも聞きたらむに、いといみじからむ」といひ居たる、心ちおそろし。あやにくに殿の御使のあらむ時、いかにいはむと、初瀬の觀音、けふことなくてくらし給へと大願をぞ立てける。石山にけふ詣でさせむとて、母君の迎ふるなりけり。この人々も皆さうじし、きよまはりてあるに、「さらばけふは得渡らせ給ふまじきなめりな。いと口惜しきこと」といふ。日たかくなれば格子などあげて右近ぞ近く仕うまつりける。も屋の簾垂は皆おろし渡して物忌などかゝせてつけたり。母君もやみづからおはするとて、夢見さわがしかりつといひなすなりけり。御てうづなど參りたるさまは例のやうなれど、まかなひめざましうおぼされて、「そこにあらはせ給はゞ」とのたまふ。女いとさまよう心にくき人を見習ひたるに、時の

まも見ざらむは死ぬべしとおぼしこがるゝ人を、志深しとはかゝるをいふにやあらむと思ひ知らるゝにも怪しかりける身かな。誰も物の聞えあらば、いかにおぼさむと、まづかのうへの御心を思ひ出で聞ゆれど、知らぬを、「返すがへすいと心うし。猶あらむまゝにのたまへ。いみじきげすといふとも、いよいよ哀なるべき」と、わりなう問ひ給へど、そのいらへは絶えてせず。ことことはいとをかしく、けぢかきさまにいらへ聞えなどして、なびきたるを、いと限なうらうたしとのみ見給ふ。日高くなる程に迎への人きたり。車二、馬なる人々の例の荒らかなる七八人、をのこどもおほく、しなじなしからぬけはひ、さへづりつゝ入りきたれば、人々片腹痛がりつゝ、「あなたにかくれよ」といはせなどす。右近、いかにせむ、殿なむおはするといひたらむに、京にさばかりの人のおはしおはせず、おのづから聞き通ひて、かくれなきこともこそあれと思ひて、この人々にもことにいひ合せず、返事かく。「よべより穢れさせ給ひて、いと口惜しき事をおぼし歎くめりしに、こよひ夢見さわがしく見えさせ給へれば、けふばかりつゝしませ給へとてなむ、物忌にて侍る。返すがへす口惜しく、物のさまたげのやうに見奉り侍る」と書きて、人々に物などくはせてやりつ。尼君にもけふは物忌にて渡り給はぬといはせたり。例はくらし難くのみ霞める山ぎはを眺め侘び給ふに、暮れ行くは侘しくのみおぼしいらるゝ人にひかれ奉りて、いとはかなう暮れぬ。まぎるゝことなく、のどけき春の日に見れども見れどもあかず、そのことぞと覺ゆるくまなく、愛ぎやうづきなつかしくをかしげなり。さるはかの對の御方には劣りたり。大殿の君の盛ににほひ給へるあたりに

ては、こよなかるべき程の人を、たぐひなくおぼさるゝ程なれば、まだ知らずをかしとのみ見給ふ。女はまた大將殿をいときよげに、又かゝる人あらむやと見しかど、こまやかに匂ひ淸らなることは、こよなくおはしけりと見る。硯ひきよせて、手習などし給ふ。いとをかしげに書きすさび、繪などを見所多く書き給へれば、若き心地には思ひもうつりぬべし。「心よりほかに得見ざらむほどは、これを見給へよ」とて、いとをかしげなるをとこをんな、諸共にそひ臥したるかたを書き給ひて、「常にかくてあらばや」などのたまふも、なみだおちぬ。

「長き夜をたのめてもなほ悲しきはたゞあす知らぬ命なりけり。いとかう思ふこそゆゝしけれ。心に身をも更に得まかせず、萬にたばからむほど誠に死ぬべくなむ覺ゆる。つらかりし御有樣を、なかなか何に尋ねけむ」などのたまふ。女ぬらし給へる筆をとりて、

「心をばなげかざらまし命のみさだめなき世と思はましかば」とあるを、かはらむをばうらめしう思ふべかりけりと見給ふにも、いとらうたし。いかなる人の心がはりを見ならひてなどほゝゑみて、大將のこゝに渡しそめ給ひけむほどを返すがへすゆかしがり給ひて問ひ給ふを、苦しがりてえいはぬことを、かうのたまふこそうちゑじたるさまも若びたり。おのづからそれは聞き出でむとおぼすものから、いはせまほしきぞわりなきや。夜さり京へ遣しつる大夫參りて右近に逢ひたり。「后の宮よりも御使參りて、左のおとゞもむつかり聞えさせ給ひて人に知らせ給はぬ御ありきは、いとかるがるしくなめげなることもあるを、すべて内などに聞しめさむとも身のためなむいとからきと、いみじく申させ給ひけり。東山にひ

じり御覧じにとなむ、人には物し侍りつる」など語りて、「女こそ罪深うおはするものにはあれ。すゞろなるけざうの人をさへ惑はし給ひて、そらごとをさへせさせ給ふよ」といへば、「ひじりの名をさへつけ聞えさせ給ひてければ、いとよし。私の罪もそれにてほろぼし給ふらむ。誠にいとあやしき御心の、げにいかで習はせ給ひけむ。かねてかうおはしますべしと、うけたまはらましにも、いとかたじけなければ、たばかり聞えさせてましものを、あうなき御ありきにこそは」と、あつかひ聞ゆ。参りてさなむとまねび聞ゆれば、げにいかならむとおぼしやるに、「所せき身こそわびしけれ。輕らかなる程の殿上人などにて、しばしあらばや。いかゞすべき、かうつゝむべき人めも得憚りあふまじくなむ。大將もいかに思はむとすらむ。さるべき程とはいひながら、怪しきまで昔よりむつましき中に、かゝる心のへだての知られたらむ時、耻かしう、またいかにぞや。世のたとひにいふこともあれば待遠なる我がをこたりをも知らず怨みられ給はむをさへなむ思ふ。夢にも人に知られ給ふまじきさまにて、こゝならぬ所にゐて離れ奉らむ」とぞのまたふ。今日さへかくて籠り居給ふべきならねば、出で給ひなむとするにも、袖の中にぞとゞめ給へらむかし。明けはてぬさきにと人々おはぶきおどろかし聞ゆ。妻戸に諸共にゐておはして、得出でやり給はず。

「世に知らず惑ふべきかなさきに立つ涙も道をかきくらしつゝ」。女も限なく哀と思ひけり。

「涙をもほどなき袖にせきかねていかに別れをとゞむべき身ぞ」。風の音もいとあらまし

う、霜ふかき曉におのがきぬぎぬも、ひやゝかになりたる心地して御馬に乘り給ふ程引き返すやうにあさましけれど、御供の人々いと戲れにくしと思ひて、たゞいそがしにいそがし出づれば、我にもあらで出で給ひぬ。この五位二人なむ御馬の口には侍ひける。さかしき山ごえはてゝぞ、おのおの馬には乘る。汀の氷を踏みならす馬の足音さへ心ぼそくものがなし。昔もこの道にのみてこそは、かゝる山ぶみはし給ひしかば、怪しかりける里の契かなとおぼす。二條院におはしまし着きて、女君のいと心憂かりし御物かくしもつらければ、心安き方に大殿籠りぬるに寢られ給はず、いとさびしきに物思ひまされば、心弱く對に渡り給ひぬ。何心もなく、いと淸げにておはす。珍しくをかしと見給ひし人よりも、又これは猶ありがたきさまはし給へりかしと、見給ふものから、いとよく似たるを思ひ出で給ふも胸ふたがれば、痛く物おぼしたるさまにて、み帳に入りて大殿ごもる。女君をもゐて入り聞え給ひて、「心ちこそいと惡しけれ。いかならむとするにかと心ぼそくなむある。まろはいみじく哀と見おい奉るとも、御ありさまはいとゝくかはりなむかし。人のほいは必ずかなふなれば」とのたまふ。けしからぬことをも、まめやかにさへのたまふかなと思ひて、「かう聞きにくきことの漏り聞えたらば、いかやうに聞えなしたるにかと人も思ひより給はむこそあさましけれ、心憂き身には、すゞろなることも、いとくるしく」とて背き給へり。宮もまめだち給ひて、「誠につらしと思ひ聞ゆることもあらむは、いかゞおぼさるべき。まろは御ためにはおろかなる人かは。人もありがたしなど咎むるまでこそあれ。人にはこよなう思ひおとし給ふべかめり。

それもさるべきにこそはとことわらるゝを隔て給ふ御心の深きなむ、いと心うき」とのたまふにも、宿世のおろかならで尋ねよりたるぞかしとおぼし出づるに、涙ぐまれぬ。まめやかなるをいとほしう、いかやうなる事を聞き給へるならむと驚かるゝに、いらへ聞え給はむこともなし。物はかなきさまにて見そめ給ひしに、何事をも輕らかに推し量り給ふにこそはあらめ、すゞろなる人をしるべにて、その心よせを思ひ知りはじめなどしたるあやまちばかりに、覺え劣る身にこそとおぼしつゞくるも、よろづ悲しくて、いとゞらうたげなる御けはひなり。かの人見つけたりとは、しばし知らせ奉らじとおぼせば、ことざまに思はせて怨み給ふを、たゞこの大將の御事を、まめまめしくのたまふとおぼすに、人やそらごとをたしかなるやうに聞えたらむなどおぼす。ありやなしやを聞かぬまは見え奉らむもはづかし。うちより大宮の御文あるに驚き給ひて猶心解けぬ御氣色にて、あなたに渡り給ひぬ。「きのふのおぼつかなさを惱しくおぼされたなる。よろしくば參り給へ。久しうもなりにけるを」などやうに聞え給へれば、さわがれ奉らむも苦しけれど、誠に御心地もたがひたるやうにて、その日は參り給はず。上達部などあまた參り給へど、み簾の内にてくらし給ふ。夕つ方右大將參り給へり。「こなたにを」とて、うち解けながらたいめんし給へり。「惱ましげに坐しますと侍りつれば、宮にもいとおぼつかなく思し召してなむ。いかやうなる御惱にか」と聞え給ふ。見るからに心さわぎのいとゞまされば、ことずくなにて、ひじりだつといひながら、こよなかりける山ぶし心かな、さばかり哀なる人をさて置きて、心のどかに月日を待ち侘びさすらむ

よとおぼす。例はさしもあらぬことの序にだに我はまめ人ともてなし、名のり給ふをねたがり給ひて、萬にのたまひやぶるを、かゝること見あらはいたるを、いかにのたまはまし。されどさやうの戯ぶれどもかけ給はず、いと苦しげに見え給へば、「ふびんなるわざかな。おどろおどろしからぬ御心のさすがに日かずふるは、いと惡しきわざに侍る。御かせよくつくろはせ給へ」など、まめやかに聞え置きて出で給ひぬ。恥しげなる人なりかし、我が有樣をいかに思ひくらべけむなど、さまざまなることにつけつゝも、たゞこの人を時のま忘れずおぼし出づ。かしこには石山もとまりて、いとつれづれなり。御文には、いといみじきことを書き集め給ひてつかはす。それだに心安からず、時方と召しゝ大夫のずさの心も知らぬしてなむやりける。右近がふるく知れりける人の、殿の御供にて尋ね出でたる、さらがへりてねんごろがると友だちにはいひ聞かせたり。よろづ右近ぞ空言ならひける。月もたちぬ、かうおぼし入らるれど、おはしますことはいとわりなし。かうのみ物を思はゞ更に得ながらふまじき身なめりと心ぼそさを添へて歎きたまふ。大將殿少しのどかになりぬる頃、例の忍びておはしたり。寺に佛など拜み給ふみずきやうせさせ給ふ。僧にものたまひなどして夕つ方こゝには忍びたれど、これはわりなくもやつし給はず、ゑぼしなほしの姿、いとあらまほしく淸げにて歩み入り給ふより恥しげに用意ことなり。女いかで見え奉らむとすらむと空さへ恥しく恐しきに、あながちなりし人の御有樣うち思ひ出でらるゝに、又この人に見え奉らむを思ひやるなむいみじう心憂き。我は年頃見る人をも皆思ひ變りぬべき心地なむするとのたまひ

しを、げにその後御心ち苦しとて、いづくにもいづくにも例の御有樣ならで、みずほふなど騷ぐなるを聞くに、又いかに聞きておぼさむと思ふもいと苦し。この人はた、いとけはひことに心深く、なまめかしきさまして久しかりつる程のをこたりなどのたまふもこと多からず、戀し悲しとおりたゝねど、常にあひ見ぬ戀の苦しさを、さまよき程にうちのたまへる、いみじくいふには勝りて、いと哀と人の思ひぬべきさまをしめ給へる人がらなり。えんなる方はさるものにて行く末長く人のたのみぬべき心ばへなど、こよなくまさり給へり。思はずなるさまの心ばへなど漏り聞かせたらむ時、なのめならずいみじくこそあべけれ、あやしううつしごゝろもなう覺しいらるゝ人を哀と思ふも、それはいとあるまじく輕きことぞかし、この人に憂しと思はれて忘れ給ひなむ心ぼそさは、いと深うしみぬべければ、思ひ亂れたる氣色を月頃にこよなう物の心知り、ねびまさりにけり。つれづれなるすみかのほどに思ひ殘す事はあらじかしと見給ふも心苦しければ、常よりも心とゞめて語らひ給ふ。「つくらする所やうやうよろしうしなしてけり。一と日なむ見しかば、此所よりはけぢかき水に花も見給ひつべし。三條宮も近き程なり。明暮覺束なきへだてもおのづからあるまじきを、この春の程に、さりぬべくは渡してむ」と思ひてのたまふも、かの人の長閑なるべき所、思ひまうけたりと、きのふものたまへりしを、かゝることも知らで、さおぼすらむよと、哀ながらもそなたに靡くべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におぼゆれば、我ながらもうたて心うの宮と思ひつゞけて泣きぬ。「御心ばへのかゝらでおいらかなりしこそ長閑に嬉しかり

しか。人のいかに聞え知らせたることのある、少しもおろかならむ志にては、かうまで參りくべき身の程、道の有樣にもあらぬを」などついたち頃の夕づく夜に、少しはし近く臥して眺めいだし給へり。男は過ぎにし方の哀をもおぼし出でゝ、女は今よりそひたる身のうさを歎き加へて、かたみに物思はし。山の方は霞隔てゝ、寒き洲崎に立てるかさゝぎのすがたも處からはいとをかしう見ゆるに、宇治橋のはるばると見渡さるゝに、柴つみ船の所々に行きちがひたるなど、ほかにては目なれぬ事どものみ取り集めたる所なれば、見給ふ度ごとに猶そのかみの事の唯今の心地して、いとかゝらぬ人を見かはしたらむだに、珍しきなかの哀多くそひぬべきほどなり、まいて戀しき人によそへられたるもこよなからず、やうやう物の心知り、都なれ行くありさまのをかしきも、こよなくみまさりしたる心地し給ふに、女はかきあつめたる心のうちに催さるゝ涙、ともすれば出でたつを、慰めかね給ひつゝ、

「宇治橋の長きちぎりは朽ちせじをあやぶむかたに心さわぐな。今見給ひてむ」との給ふ。

「絶間のみ世にはあやうき宇治橋を朽ちせぬものと猶たのめとや」。さきざきよりもいと見捨てがたく、しばしも立ちとまらまほしくおぼさるれど、人の物いひの安からぬに、今さらなり、心安きさまにてこそなどおぼしなして曉にかへり給ひぬ。いとようもおとなびたりつるかなと心苦しくおぼし出づること、ありしにまさりけり。きさらぎの十日のほどに、内に文作らせ給ふとてこの宮も大將も參りあひ給へり。をりにあひたるものゝしらべどもに宮の御聲はいとめでたくて梅がえなど謠ひ給ふ。何事も人よりはこよなう勝り給へる御さま

にて、すゞろなることおぼしいらるのみなむ、罪深かりける。雪俄に降りみだれ、風など烈しければ御あそび疾くやみぬ。この宮の御とのゐどころに人々參り給ふ。物まゐりなどして、うちやすみ給へり。大將人に物のたまはむとて、すこしはし近く出で給へるに、雪やうやうつもり、星の光におぼおぼしきを、やみはあやなしと覺ゆるにほひありさまにて、「衣かたしきこよひもや」とうちずじ給へるも、はかなきことを口すさびにのたまへるも怪しく哀なる氣色そへる人ざまにて、いと物深げなり。ことしもこそあれと宮はねたるやうにて御心さわぐ、おろかには思はぬなめりかし。かたしく袖を我のみ思ひやる心地しつるを、同じ心なるも哀なり、侘しくもあるかな、かばかりなる本つ人をおきて、我が方にまさる思ひは、いかでかつくべきぞと妬うおぼさる。つとめて雪のいと高う積りたるに、文奉り給はむとてお前に參り給へる御かたち、この頃いみじくさかりに淸げなり。かの君も同じほどにて、今ふたつみつまさるけぢめにや少しねびまされる氣色用意などぞ殊更にも作りたらむやうに、あてなる男のほんにしつべく物し給ふ。みかどの御聟にてあかぬことなしとぞ世の人もことわりける。さえなども、おほやけおほやけしきかたも後れずぞおはすべき。文講じ果てゝ皆人まかで給ふ。宮の御文を勝れたりとずじ罵れど、なにとも聞き入れ給はず、いかなる心地にて、かゝる事をもしいづらむと空にのみ思ほしほれたり。かの人の御氣色にもいとゞ驚かれ給ひければ、あさましうたばかりておはしましたり。京には友待つばかり消え殘りたる雪、山深く入るまゝにやゝ降り積りたり。常よりも、わりなきまれの細道をわけ給ふ程、御供の

人も泣きぬばかりおそろしう、煩はしきことをさへ思ふ。しるべの内記は式部の少輔をなむかけたりける。いづ方もいづ方もことごとしかるべきつかさながら、いとつぎづきしく引きあげなどしたる姿もをかしかりけり。かしこにはおはせむとありつれど、かゝる雪にはとうち解けたるに、夜更けて右近にせうそこしたり。あさましう哀と君も思へり。右近いかになりはて給ふべき御有様にかと、かつは苦しけれど、こよひはつゝましさも忘れぬべし。いひかへさむ方もなければ、同じやうに睦ましくおぼいたる若き人の、心ざまあうなからぬを語らひて、「いみじくわりなきこと、同じ心にもてかくし給へ」といひてけり。諸共に入れ奉る。道の程にぬれ給へる御ぞのかの、所せう匂ふも、もてわづらひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむ、もてまぎらはしける。夜の程に立ち歸り給はむも、なかなかなるべければ、こゝの人めもいとつゝましさに、時方にたばからせ給ひて、河よりをちなる人の家にゐておはせむとかまへたりければ、さきだてゝ遣したりける。夜ふくるほどに參れり。「いと能く用意して侍ふ」と申さす。こはいかにし給ふことにかと右近もいと心あわたゞしければ、ねおびれて起きたる心地もわなゝかれてあやしわらはべの雪遊びしたるけはひのやうにぞ、ふるひあがりける。いかでかなどもいひあへさせ給はず、かきいだきて出で給ひぬ。右近はこゝのうしろみにとゞまりて、侍従をぞ奉る。いとはかなげなるものとあけくれ見いだす。ちひさき船に乘り給ひて、さし渡り給ふほど、遥ならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心ぼそく覺えて、つとつきていだかれたるも、いとらうたしとおぼす。有明の月すみのぼりて、水のお

もてもくもりなきに「これなむ橘の小島」と申して、御船しばしさしとゞめたるを見給へば、大きやかなる岩のさまして、ざれたる常盤木の蔭繁れり。「かれ見給へ。いとはかなけれど、千年も經べき緣の深さを」とのたまひて、

「年ふともかはらむものかたちばなの小島のさきに契るこゝろは」。女もめづらしからむ道のやうにおぼえて、

「たちばなの小島は色もかはらじをこのうき船ぞゆくへ知られぬ」。をりから人のさまに、をかしくのみ何事もおぼしなす。かの岸にさし着きており給ふに、人に抱かせ給はむは、いと心苦しければ抱き給ひて、助けられつゝ入り給ふを、いと見苦しく、何人をかくもてさわぎ給ふらむと見奉る。時方が叔父の因幡の守なるがらうずるさうに、はかなう造りたる家なりけり。まだいとあらあらしきに、網代屏風など御覽じも知らぬしつらひにて風も殊にさはらず、垣のもとに雪むらぎえつゝ今もかき曇りつゝ降る。日さし出でゝ軒の垂氷の光りあひたるに、人の御かたちもまさる心ちす。宮もところせき道の程に輕らかなるべき程の御ぞどもなり。女もぬぎすべさせ給ひてしかば、ほそやかなるすがたつき、いとをかしげなり。ひきつくろふこともなく、うちとけたるさまを、いと恥しくまばゆきまできよらかなる人にさしむかひたるよと思へど、紛れむ方もなし。なつかしき程なる白きかぎりを五つばかり、袖口裾のほどまでなまめかしく、いろいろにあまた襲ねたらむよりも、をかしうきなしたり。常に見給ふ人とても、かくまでうちとけたる姿などは見習ひ給はぬを、かゝるさへぞ猶珍ら

かにをかしうおぼされける。侍從もいとめやすき若人なりけり。これさへかゝるを殘りなう見るよと女君はいみじと思ふ。宮も「これは又誰ぞ。我が名もらすなよ」と口がため給ふをいとめでたしと思ひ聞えたり。こゝのやどもりにて住みけるもの、時方をしうと思ひてかしづきありけば、このおはします遣戸を隔てゝ所えがほに居たり。聲ひきしゞめかしこまりて物語しけるを、いらへも得せずをかしと思ひけり。「いと恐しく占ひたる物忌により、京の內をさへ去りて謹むなり。ほかの人よすな」といひたり。人目も絶えて心やすく語らひくらし給ふ。かの人のものし給へりけむに、かくて見えけむかしとおぼしやりて、いみじく怨み給ふ。二の宮をいとやんごとなくて、もち奉り給へる有樣なども語り給ふ。かの耳とゞめ給ひし一ことは、のたまひ出でぬぞにくきや。時方御てうづ御くだものなど、とりつぎて參るを御覽じて、「いみじくかしづかるめるまらうどのぬし、きてな見えそや」といましめ給ふ。侍從色めかしきわかうどの心地に、いとをかしうと思ひて、この大夫とぞ物語してくらしける。雪の降り積れるに、我がすむ方を見やり給へば、霞のたえだえに木末ばかり見ゆ。山は鏡を懸けたるやうに、きらきらと夕日にかゞやきたるに、よべわけこし道のわりなきなど、哀おほうそへて語り給ふ。

「峯の雪みぎはのこほりふみわけて君にぞまどふ道はまどはず」。木幡の里に馬はあれどなど、あやしき硯めし出でゝ手習し給ふ。

「ふりみだれ汀にこほる雪よりもなかぞらにてぞ我はけぬべき」と書きけちたり。この中

空を咎め給ふ。げににくゝも書きてけるかなと、恥しくてひきやりつ。さらでだに見るかひある御さまを、いよいよあはれにいみじと人の心にしめられむと盡し給ふ言の葉氣色いはむかたなし。御物忌二日とたばかり給へれば、心のどかなるまゝに、かたみに哀とのみ深くおぼしまさる。右近はよろづに例のいひまぎらはして、御ぞなど奉りたり。けふは亂れたる髮少しけづらせて、こきぬに紅梅の織物など、あはひをかしく着かへて居給へり。侍從もあやしきしびら着たりしをあざやきたれば、そのもをとり給ひて君に着せ給ひて、御手水まゐらせ給ふ。姫宮にこれを奉りたらば、いみじきものにし給ひてむかし。いとやんごとなききはの人多かれど、かばかりのさましたるはかたくやと見給ふ。かたはなるまで遊び戯れつゝ暮し給ふ。忍びてゐてかくしてむ事をかへすがへすのたまふ。そのほどかの人に見えたらばといみじき事どもを誓はせ給へば、いとわりなき事と思ひて、いらへもやらず涙さへ落つる氣色、更に目のまへだに思ひうつらぬなめりと胸痛うおぼさる。恨みても泣きても萬のたまひあかして、夜深くゐて歸り給ふ。例のいだき給ふ。「いみじくおぼすめる人は、かうはよもあらじよ。見知り給ひたりや」とのたまへば、げにと思ひて、うなづきて居たる、いとらうたげなり。右近妻戸放ちて入れ奉る、やがてこれより別れて出で給ふも飽かずいみじとおぼさる。かやうのかへさは猶二條院にぞおはします。いと惱ましうし給ひて物なども絶えて聞しめさず、日を經て青み痩せ給ふ御氣色變るを、うちにもいづくにもおもほし歎くに、いとゞ物さわがしくて御文だにこまかには得書き給はず。かしこにもかのさかしきめのと、娘の

子産む所に出でたりける、歸り來にければ心やすくも得見ず、かくあやしき住ひを唯かの殿のもてなし給はむさまをゆかしく待つことにて、母君も思ひ慰めたるに、忍びたるさまながらも近く渡してむことをおぼしなりにければ、いとめやすく嬉しかるべきことに思ひて、やうやう人もとめ、わらはのめやすきなど迎へておこせ給ふ。我が心にもそれこそはあるべきことに初より待ち渡れとは思ひながら、あながちなる人の御事を思ひ出づるに、恨み給ひしさま、のたまひし事ども面かげにつとそひて、いさゝかまどろめば夢に見え給ひつゝ、いとうたてあるまでおぼゆ。雨降りやまで、日頃多くなるころ、いとゞ山路おぼし絶えて、わりなくおぼされければ、おやのかうこは所せきものにこそとおぼすもかたじけなし。盡きせぬ事ども書き給ひて、

「ながめやるそなたの雲も見えぬまで空さへくるゝころのわびしさ」。筆にまかせて書き亂り給へるしも見どころあり、をかしげなり。殊にいと重くなどはあらぬ若き心ちにいとかゝる心を思ひもまさりぬべけれど、初より契り給ひしさまも、さすがにかれは猶いと物深う、人がらのめでたきなども世の中を知りにしはじめなればにや、かゝる憂き事聞きつけて思ひ疎み給ひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひ惑ふ。おやにも思はずに心づきなしとこそはもてわづらはれめ。かく心いられし給ふ人はた、あだなる御心の本じやうとのみ聞きしかば、かゝる程こそあらめ、またかうながらも京にかくしすゑ給ひ、ながらへてもおぼしかずまへむにつけては、かのうへおぼさむこと、よろづかくれなき世なりければ怪し

かりし夕暮のまるべばかりにだに、かうたづね出で給ふめり。まして我がありさまのともかくもあらむを聞き給はぬやうはありなむやと思ひたどるに、我が心もきずありて、かの人にうとまれ奉らむ、猶いみじかるべしと思ひ亂るゝをりしも、かの殿より御使あり。これかれと見るもいとうたてあれば猶事多かりつるを見つゝ臥し給へれば、侍從右近見合せて、「猶うつりにけり」といはぬやうにていふ、「ことわりぞかし。殿の御かたちをたぐひおはしまさじと見しかど、この御有樣はいみじかりけり。うち亂れ給へる愛ぎやうよ、まろならばかばかりの御思ひを見る見る、得かくてあらじ、きさいの宮にも參りて常に見奉りてむ」といふ。右近「うしろめたの御心のほどや。殿の御ありさまにまさり給ふ人は誰かはあらむ、かたちなどは知らず、御心ばへけはひなどよ。猶この御事はいと見苦しきわざかな。いかゞならせ給はむとすらむ」と、ふたりしてかたらふ。心ひとつに思ひしよりは空ごともたより出できにけり。後の御文には、「思ひながら日頃になること、時々はそれよりも、おどろかい給はむこそ思ふさまならめ。おろかなるにやは」など、はしがきに、

「水まさるをちの里人いかならむはれぬながめにかきくらすころ。常よりも思ひやり聞ゆることとまさりてなむ」と、白きしきしにてたてぶみなり。御手もこまかにをかしげならねど、書きざまゆゑゆゑしく見ゆ。宮はいと多かるをちひさく結びなし給へる、さまざまをかし。「まづかれを人見ぬ程に」と聞ゆ。「けふは得聞ゆまじ」とはぢらひて、手ならひに、

「里の名を我身にまれればやましろの宇治のわたりぞいとゞ住みうき」。宮の書き給へりし

給を時々見て泣かれけり。ながらへてあるまじきことぞと、とざまかうざまに思ひなせどほかにたえ籠りてやみなむはいと哀におぼゆべし。

「かきくらしはれせぬ峰のあま雲にうきて世をふる身をもなさばや。まじりなば」と聞えたるを、宮はよゝと泣かれ給ふ。さりとも戀しと思ふらむかしとおぼしやるにも物思ひて居たらむさまのみ、おもかげに見え給ふ。まめ人はのどかに見給ひつゝ、哀いかにながむらむと思ひやりて、いとこひし。

「つれづれと身をしる雨のをやまねば袖さへいとゞみかさまさりて」とあるを、うちも置かず見給ふ。女宮に物語など聞え給ひてのついでに、「なめしともやおぼさむとつゝましながら、さすがに年經ぬる人の侍るを、怪しき所に捨て置きて、いみじく物思ふなるが心苦しさに近う呼び寄せてと思ひ侍る。昔より異やうなる心ばへ侍りし身にて、世の中をすべて例の人ならで見すぐしてむと思ひ侍りしを、かく見奉るにつけてひたぶるにも捨て難ければ、ありと人にも知らせざりし人のうへさへ心苦しう罪得ぬべき心ちして」など聞え給へば、「いかなることに心置くものとも知らぬを」と、いらへ給ふ。「うちになど、あしざまに聞しめさする人や侍らむと世の人の物いひぞ。いとあぢきなくけしからず侍るや。されどそれは、さばかりの數にだに侍るまじ」など聞え給ふ。つくりたる所に渡してむとおぼしたつに、かゝるれうなりけりなど花やかにいひなす人やあらむなど苦しければ、いと忍びてさうじはらすべき事など人しもこそあれ、この内記が知る人の親、大藏の大夫なるものに睦ましく心

安きまゝにのたまひつけたりければ、聞きつぎて、宮にはかくれなく聞えけり。「納師どもなども御隨身どもの中にある睦まじきとのびとなどをえりて、さすがにわざとなむせさせ給ふ」と申すにいとゞおぼしさわぎて、我が御めのとの遠さずらうのめにてくだる家下つかたにあるを「いと忍びたる人ゐばしかくいたらむ」と語らひ給ひければいかなる人にかはと思へど大事とおぼしたるに、かたじけなければ「さらば」と聞えけり。これを設け給ひて少し御心のどめ給ふ。この月のつごもりがたにくだるべければ、やがてその日渡さむとおぼしかまふ。「かくなむと思ふ。ゆめゆめ」といひやり給ひつゝ、おはしまさむことはいとわりなくあるうちに、こゝにも、めのといとさかしければかたかるべきよしを聞ゆ。大將殿は卯月の十日となむ定め給へりける。さそふ水あらばとは思はず、いと怪しくいかにゐなすべき身にかあらむと、うきたる心地のみすれば、母の御もとにゐばし渡りて思ひめぐらす程あらむとおぼせど、少將のめ、子產むべき程近くなりぬとて、ずほふどきやうなどひまなくさわげば石山にも得出でたつまじ、母ぞこち渡り給へる。めのと出で來て、「殿より人々のさうぞくなども、こまかにおぼしやりてなむ。いかで淸げに何事もと思ひ給ふれど、まゝが心ひとつには怪しくのみぞゐいで侍らむかし」など、いひ騷ぐが心地よげなるを見給ふにも、君はけしからぬ事どもの出で來て、人わらへならば誰も誰もいかに思はむ、あやにくのたまふ人はた、八重たつ山にこもるとも必ず尋ねて我も人もいたづらになりぬべし。猶心やすく隱れなむことを思へど、けふものたまへるを、いかにせむと心地惡しく臥し給へり。「などか例ならず、

痛く青み痩せ給へる」と驚き給ふ。日頃怪しくのみなむ、はかなきものも聞しめさず、惱ましげにせさせ給ふ」といへば、「あやしきことかな。もの丶けなどにやあらむ」と、いかなる御心ちぞと思へど石山もとまり給ひにきかしといふも、かたはらいたければふしめなり。暮れていと月あかし。有明の空を思ひ出づる、涙のいととゞめがたきは いとけしからぬ心かなと思ふ。母君昔物語などして、あなたの尼君呼び出で丶、故姫君の御ありさま、心深くおはして、さるべき事もおぼし入れたりしほどに目にみすみす消え入り給ひにし事などかたる。「おはしまさましかば、宮のうへなどのやうに聞え通ひ給ひて、心ぼそかりし御有樣ども、いとこよなき御さいはひにぞ侍らましかし」といふにも、我がむすめはこと人かは思ふやうなる宿世のおはしはてば劣らじをなど思ひつゞけて、「世と共にこの君につけては、物をのみ思ひ亂れしけしきの少しうちゆるびて、かく渡り給ひぬべかめれば、此所に參りくること必ずしも殊更には得思ひたち侍らじ。かゝるたいめんのをりをりに昔の事も心のどかに聞え承らまほしけれども」などかたらふ。「ゆゝしき身とのみ思ひ給へしみにしかばこまやかに見え奉り聞えさせむも何かはとつゝましくてすぐし侍りつるを、うち捨てゝ渡らせ給ひなば、いと心ぼそくなむ侍るべけれど、かゝる御住ひは心もとなくのみ見奉るを嬉しくも侍るべかめるかな。世に知らず、おもおもしく、おはしますべかめる殿の御有樣にて、かく尋ね聞えさせ給ひしも、おぼろけならじと聞え置き侍りにし。うきたることにやは侍る」などいふ。「後は知らねど只今はかくおぼし離れぬさまにの給ふにつけても、唯御志るべをなむ思ひ出で聞

ゆる。宮のうへのかたじけなく哀におぼしたりしも、つゝましき事などのおのづから侍りしかば、中空にところせき御身なりと思ひ歎き侍りて」といふ。尼君うち笑ひて、「この宮のいと騒がしきまで色におはしますなれば、心ばせあらむ若き人、さぶらひにくげになむ、おほかたはいとめでたき御ありさまなれど、さるすぢのことにて、うへのなめしとおぼさむなむわりなきと大輔が娘のかたり侍りし」といふにも、さりや、ましてと君は聞きふし給へり。「あなむくつけや。みかどの御娘をもち奉り給へる人なれど、よそよそにて悪しくも善くもあらむはいかゞはせむと、おほけなく思ひなし侍る。よからぬ事を引き出で給へらましかば、すべて身には悲しくいみじと思ひ聞ゆとも、また見奉らざらまし」などいひかはす事どもに、いとゞ心膽もつぶれぬ。猶我が身をうしなひてばや、遂に聞きにくきことは出できなむと思ひ續くるに、この水の音の恐しげに響きて行くを、「かゝらぬ流もありかし。世に似ずあらましき所に、年月をすぐし給ふを、哀とおぼしぬべきわざになむ」など、母君ゐたり顔にいひ居たり。昔よりこの河のはやく恐しきことをいひて、「さいつころ渡守がうまごのわらは、竿さしはづして落ち入り侍りにける。すべていたづらになる人多かる水に侍り」と人々もいひあへり。君はさても我が身行くへも知らずなりなば、誰も誰もあへなくいみじとしばしこそ思ひ給はめ、ながらへて人わらへに憂き事もあらむは、いつかその物思ひの絶えむとすると思ひかくるには、さはり所もあるまじう、さはやかによろづ思ひなさるれど、うち返しいとかなし。親のよろづに思ひいふ有樣を、寢たるやうにてつくづくと思ひ亂る。なやま

しげにて瘠せ給へるを、めのとにもいひて、「さるべき御いのりなどをせさせ給へ。祭祓へなどもすべきやう」などいふ。みたらし川にみそぎせまほしげなるを、かくも知らでよろづにいひさわぐ。人ずくなゝめり、よくさるべからむあたりを尋ねて今まゐりはとゞめ給へ。やんごとなき御なからひは、さうじみこそ何事もおいらかにおぼさめ。よからぬなかとなりぬるあたりは煩しきこともありぬべし。かいひそめて、さる心し給へ」など、思ひ至らぬ事なくいひ置きて、かしこにわづらひ侍る人も覺束なしとてかへるを、いと物思はしくよろづ心ぼそければ又あひ見でもこそと思へば心地の惡しく侍るにも見奉らぬがいとおぼつかなく覺え侍るを、しばしも參りこまほしくこそと慕ふ。「さなむ思ひ侍れど、かしこもいと物さわがしく侍り。この人々もはかなき事などえしやるまじく、せばくなど侍ればなむ。たけふのこふにうつろひ給ふとも忍びては參り來なむを。なほなほしき身のほどは、かゝる御ためこそいとほしく侍れ」など、うち泣きつゝの給ふ。殿の御文はけふもあり、惱ましと聞えたりしを、いかゞととぶらひ給へり。「みづからと思ひ侍るを、わりなきさはり多くてなむ。この程のくらし難さこそ、なかなか苦し」などあり。宮は「きのふの御返りもなかりしを、いかにおぼしたゞよふぞ。風のなびかむ方もうしろめたくなむ。いとゞほれまさりてながめ侍る」など、これは多く書き給へり。雨降りし日、きあひたりし御使どもぞけふも來たりける。殿のみ隨身、かの少輔が家にて時々見るをのこなれば、「まうどは何しにこゝにはたびたび參るぞ」と問ふ。「わたくしにとぶらふべき人のもとにまうでくるなり」といふ。「私の人にや、えんな

る文はさしとらする。氣色あるまうどかな。物がくしはなぞ」といふ。「まことはこのかうの君の御文、女房に奉り給ふ」といへば、こと違ひつゝあやしと思へど、此所にて定めいはむもことやうなるべければ、おのおの參りぬ。かどかどしきものにて共にあるわらはを、「このをのこにさりげなくて目つけよ。左衞門の大夫の家にや入る」と見せければ、「宮に參りて式部の少輔になむ御文はとらせ侍りつる」といふ。さまで尋ねむものとも おとりの げすは思はず、事の心をも深う知らざりければ舍人の人に見顯はされにけむぞ口惜しきや。殿に參りて、今出で給はむとするほどに御文奉らす。なほしにて、六條院にきさいの宮出でさせ給へる頃なれば參り給ふなりけり。ことごとしく御前などもあまたもなし。「御文參らする人にあやしき事の侍りつる。見給へ定めむとて今まで侍ひつる」といふを、ほの聞き給ひて歩み出で給ふまゝに、「何事ぞ」と問ひ給ふ。この人の聞かむもつゝましと思ひて、かしこまりて居る、殿も然か見知り給ひて出で給ひぬ。宮例ならず惱ましげに坐すとて宮達も皆參り給へり。上達部など多く參りつどひて、さわがしけれど異なる事もおはしまさず。かの內記はじやうぐわんなれば後れてぞ參れる。この御文も奉るを宮、臺盤所におはしまして戶口に召し寄せてとり給ふを、大將御前の方より出で給ひ、そばめに見通し給ひて、せちにおぼすべかめる文の氣色かなと、をかしさに立ちとゞまり給へり。引てあけて見給ふ。くれなゐのうすえふに、こまやかに書きたるべしと見ゆ。文に心入れてとみにも向き給はぬに、おとゞも立ちて、とざまにおはすれば、この君はざうしより出で給ふとて、おとゞ出で給ふとうちし

はぶきて、おどろかい奉り給ふ。ひき隱し給へるにぞ、おとゞさしのぞき給へる。驚きて御ひもさし給ふ。殿もついゐ給ひて「まかで侍りぬべし。例の御じやけの久しく起らせ給はざりつるを、恐しきわざなりや。山のざす只今さうじに遣はさむ」と、いそがしげにて立ち給ひぬ。夜更けて皆出で給ひぬ。おとゞは宮をさきに立て奉り給ひて、あまたの御子どもの上達部君達ひきつゞけてあなたに渡り給ひぬ。この殿は後れて出で給ふ。隨身氣色ばみつる、あやしとおぼしければ、ごぜんなどおりて火ともすほどに隨身召しよす。「申しつることは何事ぞ」と問ひ給ふ。「けさかの宇治に、出雲の權守、時方のあそんのもとに侍るをのこの紫の薄えふにて、櫻につけたる文を西の妻戸によりて女房にとらせ侍りつる見給へつけて、しかしか問ひ侍りつれば、ことたがひつゝ、そらごとのやうに申し侍りつるを、いかに申すぞとて、わらはべして見せ侍りつれば、兵部卿の宮に參り侍りて式部少輔道定の朝臣になんその返事はとらせ侍りける」と申す。君あやしとおぼして、「その返事はいかやうにして出しつるぞ」「それは見給へず。ことかたより出し侍りにける下人の申し侍りつるは赤き色紙のいと淸らなるとなむ申し侍りつる」と聞ゆ。おぼしあはするに、たがふことなし。さまで見せつらむを、かどかどしとおぼせど、人々近ければ委しくものたまはず。道すがら猶いと恐しく限なくおはする宮なりや、いかなりけむ序に、さる人ありと聞き給ひけむ、いかでいひより給ひけむ、田舍びたるあたりにて、かやうのすぢのまぎれは、えしもあらじと思ひけるこそをさなけれ、さても知らぬあたりにこそ、さるすきごとをものたまはめ、昔よりへだてなく

て、あやしきまで知るべし、ゐてありき奉りし身にしも、うしろめたくおぼしよるべしやと思ふに、いと心づきなし。對の御方の御事をいみじく思ひつゝ、年頃すぐすは、我が心のおさはこよなかりけり、さるはそれ今は始めて、さま惡しかるべき程にもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、唯心のうちの隈あらむは我がためも苦しかるべきによりこそ思ひ憚るもをこなるわざなりけれ、この頃かくなやましくし給ひて例よりも人しげきまぎれに、いかではるばるとかきやり給ひつらむ、おはしやそめにけむ、いと遙なるけさうの道なりや、怪しくて、おはし所尋ねられ給ふ日もありと聞えきかし、さやうの事におぼし亂れて、そこはかとなく惱み給ふなるべし、昔をおぼし出づるにも、えおはせざりし程のなげきは、いといとほしげなりきかしとつくづくと思ふに、女のいたく物思ひたるさまなりしも、かたはし心えそめ給ひては、萬おぼしあはするにいとうし。ありがたきものは人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら色めきたる方はそひたる人ぞかし、この宮の御ぐにては、いとよきあはひなりと思ひも讓りつべく、のく心ちし給へど、やんごとなく思ひそめし人ならばこそあらめ、猶さるものにておきたらむ、いまはとて見ざらむはた戀しかるべしと人わろくいろいろ心の中におぼす。我すさまじく思ひなりて捨て置きたらば、必ずかの宮呼びとり給ひてむ、人のため後のいとほしさをも殊にたどり給ふまじ、さやうにおぼす人こそ一品の宮の御方に人二三人參らせ給ひたなれ、さて出で立ちたらむを見聞かむ、いとほしくなど猶捨てがたく、氣色見まほしくて御文つかはす。例の御隨身召して御みづから人ま

に召し寄せたり。「道定のあそんは猶仲信が家にやかよふ」。「さなむ侍る」と申す。宇治へは常にや、このありけむをのこはやるらむ。かすかにて居たる人なれば道定も思ひかくらむかしと、うちうめき給ひて、「人に見えでをまかれ。をこなり」とのたまふ。かしこまりて。少輔が常にこの殿の御事あないし、かしこの事問ひしも思ひ合すれど物慣れて得申し出でず。君もげすにくはしくは知らせじとおぼせば問はせ給はず。かしこには、御使の例より繁きにつけても物思ふことさまざまなり。たゞかくぞのたまへる。

「波こゆるころとも知らず末の松まつらむとのみ思ひけるかな。人に笑はせ給ふな」とあるを、いと怪しと思ふに、胸もふたがりぬ。御返り事を心えがほに聞えむも、いとつゝましく、ひがごとにてあらむも怪しければ、御文はもとのやうにして「ところたがへのやうに見え侍ればなむ、怪しく惱ましくて何事も」と書きそへて奉りつ。見給ひて、さすがにいたくもしたるかな、かけて見及ばぬ心ばへよとほゝゑまれ給ふも、にくしとは得おぼしはてぬなめり。まほならねどほのめかし給へる氣色を、かしこにはいとゞ思ひそふ。遂に我が身はけしからず怪しくなりぬべきなめりと、いとゞ思ふ所に右近來て、「殿の御文は、などて返し奉らせ給ひつるぞ。ゆゝしくいみ侍るなるものを」といへば、「ひがごとのあるやうに見えつれば所たがへかとて」とのたまふ。あやしと見ければ道にてあけて見けるなりけり。よからずの右近がさまやな。見つとはいはであないとほし。「苦しき御事どもにこそ侍れ。殿は物の氣色御覽じたるべし」といふに、おもてざとあかみて物ものたまはず、文見つらむとは思はねば、

ことざまにてかの御氣色見る人の語りたるにこそはと思ふに、誰かさいふぞなども問ひ給はず、この人々の見思ふらむことも いみじく耻かし。我が心もてありそめしことならねども心憂き宿世かなと思ひ入りて寢たるに、侍從と二人して、「右近が姉の、常陸にて人ふたり見侍りしを、ほどほどにつけては、たゞかくぞかし。これも劣らぬ志にて思ひ惑ひて侍りしほどに、女は今の方に少し心よせまさりてぞ侍りける。それにねたみて遂に今のをば殺してしぞかし。さて我も住み侍らずなりにき。國にもいみじきあたらつはもの一人失ひつ。又このあやまちしたるも善きらうどうなれど、かゝるあやまちしたるものを、いかでかつかはむとて國の內をも追ひ拂はれぬ。すべて女のたいだいしきぞとて、たちのうちにも置い給へらざりしかば、あづまの人になりて、まゝも今に戀ひ泣き侍るは罪深くこそ見給ふれ。ゆゝしき序のやうに侍れど、かみも下もかゝるすぢのことは、おぼし亂るゝはいと惡しきわざなり。御命までにはあらずとも 人の御ほどほどにつけて侍ることなり。死ぬるにまさる耻なることも善き人の御身にはなかなか侍るなり。ひとかたにおぼし定めてよ。宮も御志勝りて、まめやかにだに聞えさせ給はゞ、そなたざまにもなびかせ給ひて物ないたく歎かせ給ひそ。痩せ衰へさせ給ふも、いとやくなし。さばかりうへの思ひいたづき聞えさせ給ふものを、まゝかこの御いそぎに心を入れて惑ひゐて侍るにつけても、それよりこなたにと聞えさせ給ふ御事こそ、いとゞ苦しくいとほしけれ」といふに、今一人「うたて恐しきまでな聞えさせ給ひそ。何事も御宿世にてこそあらめ。唯御心の中に少しおぼしなびかむ方を、さるべきにおぼ

しならせ給へ。いでやいとかたじけなくいみじき御氣色なりしかば、人のかくおぼし急ぐめりし方に心もよらずしばしはかくろへても御思ひのまさらせ給はむによらせ給ひねとぞ思ひ侍る」と、宮をいみじくめで聞ゆる心なれば、ひたみちにいふ。「いさや右近は、とてもかくても事なくすぐさせ給へと初瀬石山などにぐわんをなむ立て侍る。この大將殿のみぞうの人々といふものは、いみじきぶだうのものどもにてひとるゐこの里にみちて侍るなり。おほかたこの山城大和に殿のりやうじ給ふ所々の人なむ皆このうどねりといふものゝゆかりかけつゝ侍るなる。これが聟の右近の大夫といふものを本として萬の事をおきて仰せられたなるなり。善き人の御中どちはなさけなきことし出でよとおぼさずとも、物の心得ぬ田舍人どものとのゐびとにて、かはりがはりさぶらへば、おのが番に當りて聊なる事もあらせじなど、あやまちもし侍りなむ、ありしよの御ありきは、いとこそむくつけく思ひ給へられしか、宮はわりなくつゝませ給ふとて御供の人もゐておはしまさず。やつれてのみおはしますを、さるものゝ見つけ奉りたらむは、いといみじくなむ」と言ひ續くるを、君猶我を宮に心よせ奉りたると思ひてこの人々のいふ、いと恥しく、心地にはいづれとも思はず唯夢のやうにあきれて、いみじく入られ給ふをば、などかくしもとばかり思へど、たのみ聞えて年頃になりぬる人を今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじとものも思ひ亂るれ。げによからぬ事も出で來らむ時と、つくづくと思ひ居たり。「まろはいかで死なばや。世づかず心憂かりける身かな。かく憂きことあるためしは、げすなどの中にだにも多くやはあなる」とて、

うつぶしふし給へば、「かくな思し召しそ安らかにおぼしなせとてこそ聞えさせ侍れ。おぼしぬべき事をも、さらぬ顏にのみ長閑に見えさせ給へるを、この御事の後、いみじく心いられをせさせ給へば、いと怪しくなむ見奉る」と、心知りたるかぎりは皆かく思ひ亂れさわぐに、めのとおのが心をやりて、ものそめいとなみ居たり。今まゐりわらはなどの、めやすきを呼びとりつゝ、「かゝる人御覽ぜよ。あやしくてのみ臥させ給へるは、ものゝけなどの妨げ聞えさせむとするにこそ」となげく。殿よりは、かのありし返事をだにのたまはで日頃經ぬ。このおどしゝうどねりといふものぞ來たる。げにいとあらあらしく、ふつゝかなるさましたるおきなの聲かな。さすがに氣色ある、女房にものとり申さむといはせたれば、右近しも逢ひたり。「殿に召し侍りしかば、けさ參り侍りて只今なむ罷り歸り侍りつる。さふじども仰せられつる序に、かくておはします程に、夜中曉のことにも、なにがしらかくて侍ふと思ほして、とのゐびとわざとさし奉らせ給ふこともなきを、この頃聞し召せば、女房の御許に知らぬ所の人通ふやうになむ聞し召すことある、たいだいしきことなり。とのゐに侍ふものどもは、そのあない問ひ聞きたらむ、知らではいかゞ侍ふべきと問はせ給へるに、承らぬことなれば、なにがしは身の病重く侍りて、とのゐ仕うまつることは月頃怠りて侍ればあないも得知り侍らず。さるべきをのこどもは、けだいなくもよほし侍はせ侍るを、さのごとき非常の事の侍らはむをば、いかでか承らぬやうは侍らむとなむ申させ侍りつる。用意してさぶらへ。びんなき事もあらば重く勘當せしめ給ふべきよしなむ仰せ言侍りつれば、いかなる仰せ言にか

と、恐れ申しはべる」といふを聞くに、ふくろふの鳴かむよりも、いとものおそろし。いらへもやらで、「さりや聞えさせしに、違はぬ事どもを聞しめせ。物の氣色御覧じたるなめり。御せうそこも侍らぬよ」などなげく。めのとはほのうち聞きて「いと嬉しく仰せられたり。ぬすびと多かなるわたりにとのゐ人も始のやうにもあらず。皆身のかはりぞといひつゝ、あやしきげすをのみ參らすれば、やぎやうをだにせぬに」とよろこぶ。君はげに只今いと惡しくなりぬべき身なめりとおぼすに、宮よりはいかにいかにと昔の亂るゝわりなさをのたまふ。いとわづらはしくなむ。とてもかくても、ひとかたひとかたにつけて、いとうたてあることは出できなむ、わが身ひとつのなくなりなむのみこそめやすからめ、昔は懸想ずる人の有樣の、いづれとなきに思ひ煩ひてだにこそ身を投ぐるためしもありけれ、ながらへば、必ずうきことと見えぬべき身の、なくならむは何か惜しかるべき、親も暫しこそ歎き給はめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘草つみてむ、ありながらもてそこなひ、人わらへなるさまにてさすらへむは、まさる物思ひなるべしなど思ひなる。こめきおほどかに、たをたをと見ゆれど、けだかう世の有樣をも知る方すくなくて、おふしたてたる人にしあれば、少しおす（イぞ）かるべきことを思ひよるなりけむかし。むつかしきほぐなどやりて、おどろおどろしく一たびにもしたゝめず、とうだいの火に燒き、水に投げ入れさせなど、やうやう失ふ。心知らぬごだちは、物へ渡り給ふべければ、つれづれなる月日を經て、はかなく志集め給へる手習などをやり給ふなめりと思ふ。侍從などぞ見つくる時は、「などかくはせさせ給ふ。哀なる御中に、御

心留めて書きかはし給へる文は人にこそ見せさせ給はざらめ、物の底におかせ給ひて御覽ずるなむ、ほどほどにつけてはいと哀にはべる。さばかりめでたき御紙つかひ、かたじけなき御言の葉を盡させ給へるを、かくのみやらせ給ふ、なさけなきこと」といふ。「何か、むつかしく長かるまじき身にこそあめれ。おちとゞまりて、人の御ためもいとほしからむ、さかしらにこれを取り置きけむよなど、漏り聞き給はむこそ恥しけれ」などのたまふ。心細き事を思ひもて行くには、まだえ思ひ立つまじきわざなりけり。親をおきてなくなる人は、いと罪深くなるものをなど、さすがにほの聞きたることをも思ふ。廿日あまりにもなりぬ。かの家あるじ、廿八日にくだるべし。宮は「その夜必ず迎へむ。しもびとなどに、よく氣色見ゆまじき心づかひし給へ。こなたざまよりは夢にも聞えあるまじ。疑ひ給ふな」などのたまふ。さてあるまじきさまにて、おはしたらむに、今一たび物をも聞えず、おぼつかなくて返し奉らむことよ、又時のまにても、いかでこゝには寄せ奉らむとする、かひなく恨みて歸り給はむさまなどを思ひやるに、例のおもかげ離れず、絶えず悲しくて、この御文を顏におしあてゝ、しばしはつゝめども、いといみじくなき給ふ。右近「あが君、かゝる御氣色遂に人見奉りつべし。やうやう怪しなど思ふ人も侍るべかめり。かうかゝづらひ思ほさで、さるべきさまに聞えさせ給ひてよ。右近侍らば、おほけなきことも、たばかり出し侍らば、かばかり小き御身ひとつは、空よりもゐて奉らせ給ひなむ」といふ。とばかりためらひて、「かくのみいふこそいと心憂けれ。さもありぬべきことゝ思ひかけばこそあらめ、あるまじきことゝ皆思ひとる

に、わりなく、かくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなる事を思出で給はむとするにかなど思ふにつけて身のいと心憂きなり」とて返事も聞き給はずなりぬ。宮かくのみ猶うけひく氣色もなくて、返事さへ絶えだえになるは、かの人のあるべきさまにいひしたゝめて、少し心やすかるべきかたに思ひ定りぬるなめり、ことわりとおぼすものから、いと口惜しくねたく、さりとも我をば哀とおぼしたりしものを、あひ見ぬとだえに人々のいひ知らするかたによるならむかしなどながめ給ふに、行くかた知らず、むなしき空にみちぬる心地し給へば、例のいみじくおぼしたちておはしましぬ。あしがきのかたを見るに、例ならず、「あれは、たぞ」といふ聲々いざとげなり。たちのきて、心しりのをのこを入れたれば、それをさへ問ふ。さきざきのけはひにも似ずわづらはしくて「京よりとみの御文あるなり」といふ。右近がずさの名を呼びて逢ひたり。いと煩しくいとゞおぼゆ。「更にこよひは不用なり、いみじく忝きこと」といはせたり。宮、などかくもてはなるらむとおぼすにわりなくて「まづ時方入りて侍従に逢ひて、さるべきさまにたばかれ」とて遣す。かどかどしき人にて、とかくいひかまへて、尋ねて逢ひたり。「いかなるにかあらむ、かの殿ののたまはすることありとて、とのゐにあるものどものさかしがりたちたる頃にて、いとわりなきなり。お前にもものをのみいみじくおぼしためるは、かゝる御事の忝なきをおぼし亂るゝにこそはと心苦しくなむ見奉る。更にこよひは人げしき見侍りなば、なかなかにいと惡しかりなむ。やがてさも御心づかひせさせ給ふべからむ夜、こゝにも人知れず思ひかまへてなむ聞えさすべかめる」めのとのいざと

き事なども語る。大夫「おはします道のおぼろけならず、あながちなる御氣色に、あへなく聞えさせむことなむ たいだいしき。さらばいざ給へ、共に委しく聞えさせ給へ」といざなふ。「いとわりなからむ」といひしろふ程に、夜もいたく更け行く。宮は御馬にて少し遠く立ち給へるに、さとびたる犬どもの出で來てのゝしるもいとおそろしく、人ずくなにいと怪しき御ありきなれば、すゞろならむものゝ走り出で來たらむも、いかさまにかと侍ふかぎり心をぞ惑はしける。「猶疾く疾く參りなむ」といひさわがしてこの侍從をゐて參る。かみわきよりかいこして、やうだいいとをかしき人なり。馬に乘せむとすれど更にきかねば、きぬの裾をとりて立ちそひて行く。我がくつをはかせて、みづからは供なる人の あやしきものをはきたり。參りて「かくなむ」と聞ゆれば、語らひ給ふべきやうだになければ、やまがつの垣根のおどろむぐらの影に、あふりといふ物を敷きておろし奉る。我が御心ちにも、あやしきありさまかな、かゝる道にそこなはれて、 はかばかしくはえ ある まじき身なめりとおぼし續くるに、泣き給ふことかぎりなし。心よわき人は、ましていといみじく悲しと見奉る。いみじきあだ、おににつくりたりとも、おろかに見捨つまじき人の御有樣なり。ためらひ給ひて、「唯ひとことどもえ聞えさすまじきか。いかなれば今更にかゝるぞと、猶人々のいひなしたるやうあるべし」とのたまふ。有樣委しく聞えて、「やがてさ思し召さむ日を、かねてさべきさまにたばからせ給へ。かく忝き事どもを見奉り侍れば、身を捨てゝも思ひ給へたばかり侍らむ」と聞ゆ。我も人目をいみじくおぼせば ひと方に怨み給はむやうもなし。夜はいたく更け行く

に、このものとがめする犬の聲絶えず、人々追ひさけなどするに、弓ひきならし怪しきをのこどもの聲して、「火あやふし」などいふも、いと心あわたゞしければ、かへり給ふほど、いへばさらなり。

「いづくにか身をば捨てむと白雲のかゝらぬ山もなくなくぞゆく」。さらばやとてこの人を返し給ふ。御氣色なまめかしくあはれに、夜深き露にしめりたる御かのかうばしさなど、たとへむかたなし。泣く泣くぞ歸りきたる。右近はいひきりつるよしいひ居たるに、君はいよいよ思ひ亂るゝこと多くて臥し給へるに、入り來て、ありつるさま語るに、いらへもせねど枕のやうやううきぬるをかつはいかに見るらむとつゝまし。つとめても怪しからむまみを思へば、むごに臥したり。物はかなげに帶うちかけなどして經讀む。親にさきだちなむ罪失ひ給へとのみ思ふ。ありし繪を取り出でゝ見て、書き給ひし手つき、顏のにほひなどのむかひ聞えたらむやうに覺ゆれば、よべ一言をだに聞えずなりにしは、猶今ひとへまさりていみじと思ふ。かの心のどかなる さまにて見むと、行く末遠かるべき事をのたまひわたる人も、いかゞおぼさむといとほしう、憂きさまにいひなす人もあらむこそ、思ひやり恥しけれど、心淺くけしからず人わらへならむを聞かれ奉らむよりはと思ひつゞけて、

「歎きわび身をば捨つともなきかげにうき名流さむことをこそ思へ」。親もいと戀しく、例はことに思ひ出でぬはらからの みにくやかなるもこひし。宮のうへを思ひ出で聞ゆるにも、すべて今一たびゆかしき人多かり。人は皆おのおのものそめ急ぎ、何やかやといへど耳

にも入らず。よるとなれば人に見つけられず出でゝ行くべき方を思ひまうけつゝ、寢られぬまゝに心地も悪しく皆たがひにたり。明けたてば、川の方を見やりつゝ、羊のあゆみよりも程なき心ちす。宮はいみじき事どもをのたまへり、今さらに人や見むと思へば、この御返事をだに思ふまゝにも書かず。

「からをだにうき世の中にとゞめずばいづこをはかと君もうらみむ」とのみ書きて出しつ。かの殿にも、いまはの氣色見せ奉らまほしけれど、ところどころに書きおきて、離れぬ御中なれば遂に聞き合せ給はむ事いと憂かるべし、すべていかになりけむと、誰にも覺束なくて止みなむと思ひ返す。京より母の御文持て來たり。「寢ぬる夜の夢に、いとさわがしくて見え給ひつれば、ずきやう所々にせさせなどし侍る。やがてその夢の後、寢られざりつるけにや、只今晝寢して侍る夢に、人のいむといふことなむ見え給ひつれば驚きながら奉る。能くつゝしませ給へ。人離れたる御住ひにて、時々立ちよらせ給ふ人の御ゆかりも、いと恐しく、惱しげに物せさせ給ふ、折しも夢のかゝるを、よろづになむ思ひ給ふる。參りこまほしきを、少將の方の猶いと心もとなげに、もののけだちて惱み侍れば片時も立ち去ることゝ、いみじくいはれ侍りてなむ。その近き寺にも御ず經せさせ給へ」とて、その料のもの、文など書きそへて持て來たり。限と思ふ命の程を知らで、かくいひつゞけ給へるもいと悲しと思ふ。寺へ人やりたる程、返事かく。いはまほしきこと多かれど、つゝましくてたゞ、

「のちにまたあひ見むことを思はなむこの世のゆめに心まどはで」。ずきやうの鐘の風に

つきて聞えくるを、つくづくと聞き臥し給へり。

「鐘のおとの絶ゆる響にねをそへて我が世盡きぬと君に傳へよ」。くわんじゆ持て來たるに書きつけて、こよひは得歸るまじといへば、物の枝にゆひつけて置きつ。めのと、「あやしく心ばしりのするかな、夢も騒しくとのたまはせたりつ。とのゐびとよく侍へ」といはするを、苦しと聞き臥し給へり。「物聞し召さぬいとあやし。御湯づけ」などよろづにいふを、さかしがるめれど、いと見にくゝおいなりて、我なくはいづくにかあらむと思ひやり給ふもいと哀なり。世の中にえありはつまじきさまをほのめかしていはむなどおぼすには、まづ驚かされて、さきだつ涙をつゝみ給ひて物もいはれず。右近程近く臥すとて、「かくのみ物をおもほせば、物思ふ人のたましひはあくがるなるものなれば夢も騒がしきならむかし。いづかたとおぼし定りて、いかにもいかにもおはしまさなむ」とうちなげく。なえたるきぬを顏におしあてゝ臥し給へりとなむ。

蜻蛉

かしこには人々おはせぬを、覓めさわげどかひなし。物語の姫君の人にぬすまれたらむあしたのやうなれば委しくもいひつゞけず。京よりありし使の歸らずなりにしかばおぼつかなしとて又人おこせたり。「まだ鳥の鳴くになむ出し立てさせ給へる」と使のいふに「いかに聞

えむ」と乳母よりはじめてあわて惑ふことかぎりなし。思ひうる方なくて唯さわぎあへるをかの心知れるどちなむ、いみじく物を思ひ給へりしさまを思ひ出づるに身をなげ給へるとは思ひよりける。なくなくこの文をあけたれば「いとおぼつかなさにまどろまれ侍らぬけにや、今宵は夢にだにうちとけても見えず物におそはれつゝ心地も例ならずうたて侍るを、猶いとおそろしく物へわたらせ給はむことは近くなれど、そのほどこゝに迎へ奉りてむ。今日は雨降り侍りぬべければ」などあり。よべの御かへりをもあけて見て右近いみじくなく。さればよ、心ぼそきことは聞え給ひけり、我れになどかいさゝかのたまふことのなかりけむ、をさなかりし程より露心おかれ奉ることなくちりばかりへだてなくて習ひたるに、今はかぎりの道にしも我れをおくらかし、氣色をだに見せ給はざりけるがつらきことゝ思ふに、足ずりといふことをして泣くさま若き子どものやうなり。いみじくおぼしたる御氣色は見奉り渡れど、かけてもかくなべてならずおどろおどろしき事おぼしよらむものとは見えざりつる人の御心ざまを、猶いかにしつる事にかとおぼつかなくいみじ。乳母はなかなか物も覺えで唯「いかさまにせむ、いかさまにせむ」とぞいはれける。宮にもいと例ならぬ氣色ありし御返りいかに思ふならむ、我をさすがにあひ思ひたるさまながらあだなる心なりとのみ深く疑ひたれば、外へいき隠れむとにやあらむとおぼしさわぎて御使あり。あるかぎり泣きまどふ程にきて御文もえ奉らず「いかなるぞ」とげす女に問へば、「上の今宵俄にうせ給ひにければ物もおぼえ給はず。たのもしき人もおはしまさぬをりなればさぶらひ給ふ人々は唯物

にあたりてなむまどひ給ふ」といふ。心も深く知らぬをのこにて委しうも問はでまゐりぬ。「かくなむ」と申させたるに夢と覺えていとあやし。いたくわづらふとも聞かず、日比なやましとのみありしかど昨日の返事はさりげもなくて常よりもをかしげなりしものをと覺しやる方なければ「時方いきて氣色見、たしかなる事問ひ聞け」とのたまへば、「かの大將殿いかなる事か聞き給ふことと侍りけむ、とのゐするものおろかなりなど　いましめ仰せらるゝとて下人の罷り出づるをも見とがめ問ひ侍るなれば、ことづくることなくて時方まかりたらむを物の聞え侍らばおぼしあはすることなどや侍らむ。さて俄に人のうせ給ひつらむ所はろ・なうさわがしく人ゑげく侍らむを」と聞ゆ。「さりとていとおぼつかなくてやあらむ。猶とかくさるべきさまにかまへて例の心知れる侍從などにあひていかなる事をかくいふぞとあないせよ。げすはひがごともいふなり」とのたまへば、いとほしき御氣色もかたじけなくて夕つかたゆく。かやすき人は疾くいきつきぬ。雨少し降りやみたれどわりなき道にやつれてげすのさまにて來たれば人多く立ちさわぎて「今宵やがてをさめ奉るなり」などいふを聞く心地もあさましく覺ゆ。右近にせうそこしたれどもえあはず。「只今物おぼえず起きあがらむ心ちもせでなむ。さるはこよひばかりこそかくも立ちより給はめ。え聞えぬよと」といはせたり。「さりとてかく覺束なくてはいかゞ歸り侍らむ。今一所だに」とせちにいひたれば侍從ぞあひたりける。「いとあさましくおぼしもあへぬさまにてうせ給ひにたればいみじといふにもあかず夢のやうにて誰もたれも惑ひ侍るよし申させ給へ。少し心地ものどめ侍りてなむ。

日比も物おぼしたりつるさま一夜いと心苦しと思ひ聞えさせ給へりし有樣なども聞えさせ侍るべき。このけがらひなど人の忌み侍るほど過ぐして今一度たちより給へ」といひて泣くといみじ。內にも泣く聲々のみして乳母なるべし。「あが君やいづかたにかおはしましぬる。かへり給へ。空しきからをだに見奉らぬがかひなく悲しくもあるかな。明暮見奉りても飽かず覺え給ひいつしかかひある御さまを見奉らむとあしたゆふべに賴み聞えつるこそ命ものび侍りつれ。うち捨て給ひてかく行くへも知らせ給はぬ事鬼神もあが君をばえらうじ奉らじ。人のいみじく惜む人をばたいしやくも返し給ふなり。あが君を取り奉らむ人にまれ鬼にまれ返し奉れ。なき御からをも見奉らむ」といひつゞくるが心得ぬどもまじるをあやしと思ひて「猶のたまへ。もし人のかくしも聞え給へるかたじかに聞しめさむと御身のかはりに出し立てさせ給へる御使なり。今はとてもかくてもかひなきことなれど、後にも聞しめしあはすることの侍らむに違ふとまじらば參りたらむ御使の罪になるべし。又さりともと賴ませ給ひて 君達に對面せよと仰せられつる御心ばへも辱しとはおぼされずや。女の道に惑ひ給ふことは人の御門にも深きためしどもありけれど、又かゝることこの世にはあらじとなむ見奉る」といふに、げにいと哀なる御使にこそあれ、かくすとすとも、かくて例ならぬ事のさま、おのづから聞えなむと思ひて、「などかいさゝかにても人やかくい奉り給ふらむと思ひよるべき事あらむにはかくしもあるかぎり惑ひ侍らむ。日比いといみじく物をおぼしいるめりしかば、かの殿のわづらはしげにほのめかし聞え給ふとなどもありき。御母に物し給

ふ人もかくのゝしる乳母なども初めより知りそめたりし方に渡り給はむとなむ急ぎ立ちてこの御事をば人知れぬさまにのみ辱く哀と思ひ聞えさせ給へりしに御心みだれけるなるべし。あさましうて心と身をなくなし給へるやうなれば、かく心のまどひにひがひがしく言ひ續けらるゝなめり」とさすがにまほならずほのめかす。心得がたく思ひて「さらばのどかに參らむ。立ちながら侍るもいとことそぎたるやうなり。今御みづからもおはしましなむ」といへば、「あなかたじけな。今さら人の知り聞えさせむもなき御ためはなかなかめでたき御宿世見ゆべき事なれど忍び給ひしことなればまたもらさせ給はでやませ給はむなむ御志に侍るべき。こゝにはかく世づかずうせ給へるよしを人に聞かせじ」とよろづにまぎらはすを、玄ねんに事どもの氣色もこそ見ゆれと思へばとかくそゝのかしやりつ。雨のいみじかりつるまぎれに母君の渡り給へり。更にいはむ方もなく目の前になくなしたらむ悲しさはいみじくとも世の常にてたぐひあることなり。これはいかにおつる事ぞと惑ふ。かゝる事どものまぎれありていみじう物思ひ給ふらむとも知らねば身をなげ給へらむとも思ひもよらず。鬼や食ひつらむ、狐めくものや取りもていぬらむ、昔物語の怪しき物の事のたとひにか、さやうなる事もいふなりしと思ひいづ。さてはかのおそろしと思ひ聞ゆるあたりに心など惡しき御乳母やうのものやかう迎へ給へしと聞きて、めざましがりてたばかりたる人もやあらむとげすなどを疑ひ「今まゐりの心知らぬやある」と問へば「いと世ばなれたりとて、ありならはぬ人はこゝにてはかなき事もえせず、今疾く參らむといひつゝなむ、みなその急ぐ

べき事どもなど取り具しつゝかへり出で侍りにし」とて、もとよりある人だにかたへはなくていと人ずくななる折になむありける。侍從などこそ日比の御氣色思ひいで身をうしなひてばやなど泣きいり給ひし折々の有樣書きおき給へる文をも見るに、なきかげにと書きすさび給へるもの、硯の下にありけるを見つけて河の方を見やりつゝ響きのゝしる水の音を聞くにも疎ましく悲しと思ひつゝさて「うせ給ひけむ人をとかく言ひ騷ぎていづくにもいづくにもいかなる方になり給ひにけむとおぼし疑はむもいとほしき事」といひ合せて「忍びたる事とても御心よりおこりてありし事ならず。親にてなき後に聞き給へりともいとやさしき程ならぬを、ありのまゝに聞えてかくいみじく覺束なき事どもをさへかたがた思ひ惑ひ給ふさまは少しあきらめさせ奉らむ。なくなり給へる人とてもからを置きてもあつかふこそ世の常なれ。世づかぬ氣色にて日比も經ば更にかくれあらじ。猶聞えて今は世の聞えをだにつくろはむ」と語らひて忍びてありしさまを聞ゆるにいふ人も消えいりえいひやらず、聞く心地も惑ひつゝ、さはこのいとあらましと思ふ河に流れうせ給ひにけりと思ふに、いとゞ我れも落ち入りぬべき心地して「おはしましにけむ方を尋ねてからをだにはかばかしくをさめむ」との給へど「更になにのかひ侍らじ。行くへも知らぬ大海の原にこそおはしましにけめ。さるものから人のいひ傳へむ事はいと聞きにくし」と聞ゆれば、とざまかうざまに思ふに胸のせきのぼる心ちして、いかにもいかにもすべき方も覺え給はぬを、この人々二人して車よせさせておましども氣近う使ひ給ひし御調度どもみなながらぬぎおき給へる御ふ

すまなどやうの物を取りいれてめのとごのだいとこそれがをぢの阿闍梨その弟子の睦しきなどもとより知りたる老法師など御忌に籠るべき限りして人のなくなりたるけはひにまねびて出し立つるを、めのと母君はいといみじくゆゝしとふしまろぶ。大夫うどねりなどおどし聞えしものども參りて「御葬送の事は殿にことのよし申させ給ひて、日定められていかめしうこそ仕うまつらめ」などいひけれど「殊更にこよひ過すまじ、いと忍びてと思ふやうあればなむ」とてこの車をむかひの山の前なる原にやりて人も近うもよせず、このあない知りたる法師のかぎりしてやかす。いとはかなくてけぶりははてぬ。田舍人どもはなかなかかゝる事をことごとしくしなしこといみなど深くするものなりければ、「いとあやしう例の作法などあることどもゝし給はず、げすげすしくあへなくてせられぬるとかな」と謗りければ、かたへおはする人は「殊更にかくなむ、京の人はし給ふなる」などさまざまになむ安からずいひける。かゝる人どもの言ひ思ふよだに包ましきを、まして物の聞えかくれなき世の中に大將殿わたりにからもなくうせ給ひにけりと聞かせ給はゞ必ず思ほし疑ふこともあらむを宮はた同じ御なからひにてさる人のおはしおはせず暫しこそ忍ぶともおぼさめ、遂にはかくれあらじ又定めて宮をしも疑ひ聞え給はじ、いかなる人か居てかくしけむなどぞおぼしよせむかし、いき給ひての御宿世はいと氣高くおはせし人のげになきかげにいみじき事をや疑はれ給はむと思へば、こゝのうちなる下人どもにもけさのあわたゞしかりつるまどひに氣色も見聞きつるには口かため、あないしらぬには聞かせじなどぞたばかりける。ながら

へては誰にもおづやかにありしさまをも聞えてむ。只今は悲しささめぬべきと、ふと人づてに聞しめさむは猶いといとほしかるべき事なるべしと、この人二人ぞ深く心のおにそひたればもてかくしける。大將殿は、入道の宮のなやみ給ひければ石山にこもり給ひて騒ぎ給ふころなりけり。さていとゞかしこはおぼつかなうおぼしけれど、はかばかしうさなむといふ人はなかりければ、かゝるいみじき事にもまづ御使のなきを人めも心憂しと思ふに、みさうの人なむ參りておかおかと申させければ、あさましき心地し給ひて御使そのまたの日まだつとめて參りたり。「いみじき事は聞くまゝにみづから物すべきにかく惱み給ふことによりつゝしみてかゝる所に日を限りて籠りたればなむ。よべのことはなどかこゝにせうそこして日を延べてもさる事はするものを、いと輕らかなるさまにて急ぎせられにける。とてもかくても同じいふかひなさなれど、とぢめのことをしもやまがつのそしりをさへ負ふなむ、こゝのためもからき」などかのむつましき大藏の大夫してのたまへり。御使の來たるにつけてもいとゞいみじきに聞えむ方なき事どもなれば唯涙におぼゝれたるばかりをかごとにてはかばかしうもいらへずなりぬ。殿は猶いとあへなくいみじと聞き給ふにも、心うかりける所かな、鬼などや住むらむ、などて今までさる所にすゑたりつらむ、思はずなるすぢのまぎれあるやうなりしもかく放ち置きたるに心やすくて人もいひをかし給ふなりけむかしと思ふにも、我がたゆく世づかぬ心のみくやしく御胸いたく覺え給ふ。なやませ給ふあたりにかゝる事おぼし亂るゝもうたてあれば京におはしぬ。宮の御方にも渡り給はず「ことごとしき程

にも侍らねどゆゝしき事を近う聞き侍れば、心の亂れ侍るほどもいまいましうて」など聞え給ひて盡せずはかなくいみじき世を歎き給ふ。ありしさまかたちいと愛敬づきをかしかりしけはひなどのいみじく戀しく悲しければ、うつゝの世にはなどかくしも思ひ入れずのどかにて過ぐしけむ。只今は更に思ひしづめむ方なきまゝに悔やしき事の數知らず、かゝることのすぢにつけていみじう物思ふべき宿世なりけり。さまことに心ざしたりし身の思の外にかく例の人にてながらふるを佛などのにくしと見給ふにや、人の心を起させむとて佛のし給ふ方便は慈悲をもかくしてかやうにこそはあなれと思ひつゞけ給ひつゝ行ひをのみし給ふ。かの宮はたまして二三日は物も覺え給はず、うつしこゝろもなきさまにていかなる御ものゝけならむなどさわぐに、やうやう涙つくし給ひておぼししづまるにしもぞ、ありしさまは戀しういみじく思ひ出でられ給ひける。人には唯御病の重きさまをのみ見せてかくすゞろなるいやめの氣色知らせじと、かしこくもてかくすとおぼしけれどおのづからいとしるかりければ「いかなることにかくおぼし惑ひ御命もあやふきまでしづみ給ふらむ」といふ人もありければかの殿にもいとよくこの御氣色を聞き給ふに、さればよ、猶よその文通はしのみにはあらぬなりけり。見給ひては必ずさおぼしぬべかりし人ぞかし。ながらへましかばたゞなるよりは我がためにをこなる事も出できなましとおぼすになむ、こがるゝ胸も少しさむる心地し給ひける。宮の御とぶらひに日々に參り給はぬ人なく、世のさわぎとなれる比ことごとしきはならぬ思ひに籠りゐて參らざらむもひがみたるべしとおぼして參り給ふ。そ

の比式部卿宮と聞ゆるもうせ給ひにければ御をぢの服にて薄鈍なるも心の中に哀に思ひよそへられてつきづきしく見ゆ。少し面やせていとゞなまめかしき事まさり給へり。人々まかでゝしめやかなる夕暮なり。宮ふししづみてのみはなき御心地なれば疎き人にこそあひ給はね、御簾の内にも例いり給ふ人には對面し給はずもあらず、見え給はむもあいなくつゝましく見給ふにつけてもいとゞ涙のまづせきがたさをおぼせど、思ひしづめて「おどろおどろしき心地にも侍らぬを、皆人はつゝしむべき病のさまなりとのみ物すれば、内にも宮にもおぼしさわぐがいと苦しく、げに世の中の常なきをも心ぼそく思ひ侍る」との給ひて押し拭ひまぎらはし給ふとおぼす涙の やがて滯らずふりおつれば、いとはしたなれど必ずしもいかでか心えむ。唯めゝしく心弱きとや見ゆらむとおぼすもはづかし。さりや唯この事をのみおぼすなりけり、いつよりなりけむ、我れをいかにをかしと物笑ひし給ふ心ちに月比おぼし渡りつらむと思ふに、この君は悲しさは忘れ給へるを、こよなくもおろかなるかな、物のせちに覺ゆる時はいとかゝらぬ事につけてだに空飛ぶ鳥の鳴き渡るにももよほされてこそ悲しけれ、わがかくすゞろに心弱きにつけても若し心を得たらむに、さいふばかり物の哀も知らぬ人にもあらず、世の中のつねなきことをしみて思へる人しもつれなきと、うらやましくも心にくゝもおぼさるゝものからまきばしらは哀なり。これに向ひたらむさまもおぼしやるに、かたみぞかしともうちまもり給ふ。やうやう世の物語聞え給ふに いとこめてしもはあらじとおぼして、「昔より心にこめてしばしも聞えさせぬ事殘し侍るかぎりはいといぶせくのみ

思う給へられしを今はなかなかの上臈になりにて侍り。まして御暇なき御有樣にて、心のどかにおはします折も侍らねば殿居などにその事となくてはえさぶらはず、そこはかとなくて過ぐし侍りてなむ、昔御覽ぜし山里にはかなくてうせ侍りにし人の、同じゆかりなる人覺えぬ所に侍りと聞きつけ侍りて、時々さて見つべくやと思ひ給へしに、あいなく人のそしりも侍りぬべかりし折なりしかばこの怪しき所に置きて侍りしををさをさまかりて見る事もなく、又かれも某一人をあひたのむ心もことになくてやありけむとは見給ひつれど、やんごとなくものものしきすぢに思ひ給へばこそはあらめ、見るにはた殊なるとがも侍らずなどして心やすくらうたしと思ひ侍りつる人のいとはかなくなり侍りにける、なべての世の有樣を思ひ給へ續け侍るにも悲しくなむ。聞しめすやうも侍るらむかし」とて今ぞ泣き給ふ。これもいとかうは見え奉らじ、をこなりと思ひつれどこぼれそめてはいととめがたし。氣色のいさゝかみだり顏なるを怪しくいとほしとおぼせどつれなくて「いと哀なる事にこそ。昨日ほのかに聞き侍りき。いかにとも聞ゆべく思う給へながら、わざと人に聞かせ給はぬよと聞き侍りしかばなむ」とつれなくの給へど、いと堪へがたければことずくなにておはします。「さる方にても御覽ぜさせばやと思ひ給へりし人になむ。おのづからさもや侍りけむ。宮にも參り通ふべき故侍りしかば」など少しづゝ氣色ばみて「御心地例ならぬ程はすゞろなる世の事聞しめしいれ御耳驚くもあいなきわざになむ。よく謹ませ給へ」など聞えおきて出で給ひぬ。いみじくもおぼしたりつるかな。いとはかなかりけれどさすがに高き人の宿世なり

けり、たうじのみかど后のさばかりかしづき奉り給ふ御子かほかたちよりはじめて、只今の世にはたぐひおはせざめり、見給ふ人とてもなのめならずさまざまにつけて限りなき人をおきてこれに御心を識し、世の人立ちさわぎてずほうどきやうまつりはらへと道々にさわぐはこの人をおぼすゆかりの御心ちのあやまりにこそはありけれ、我れもかばかりの身にて時のみかどの御むすめをもち奉りながらこの人のらうたく覺ゆる方は劣りやはまつる、まして今はと覺ゆるには心をのどめむ方なくもあるかな。さるはをこなり、かゝらじと思ひ忍ぶれどさまざまに思ひ亂れて「人木石にあらざれば皆なさけあり」とうちずして臥し給へり。後のしたゝめなどもいとはかなくしてけるを、宮にもいかゞ聞き給ふらむといとほしくあへなく母のなほなほしくてはらからあるはなどさやうの人はいふ事あなるを思ひて事そぐなりけむかしなど心づきなくおぼす。おぼつかなさも限りなきをありけむさまもみづから聞かまほしとおぼせどながごもりし給はむもびんなし。いきといきて立ちかへらむも心苦しなどおぼしわづらふ。月たちて今日ぞ渡らましとおぼし出で給ふ日の夕暮いと物あはれに御前近き橘の香のなつかしきに杜鵑の二聲ばかりなきてわたる。「宿にかよはゞ」とひとりごち給ふも飽かねば、北の宮にこゝに渡り給ふ日なりければ橘折らせて聞え給ふ。

「忍びねや君もなくらむかひもなき死出のたをさに心かよはゞ」。宮は女君の御さまのいとよく似たるを、哀とおぼして二所ながめ給ふ折なりけり。氣色ある文かなと見給ひて、

「橘のかをるあたりはほとゝぎすこゝろしてこそなくべかりけれ。わづらはし」と書き給

ふ。女君この事の氣色は皆見知り給ひてけり。哀にあさましきはかなさのさまざまにつけて心深き中に我れ一人物思ひ知らねば今までながらふるにや、それもいつまでと心ぼそくおぼす。宮もかくれなきものからへだて給ふもいと苦しければ、ありしさまなど少しは取り直しつゝ語り聞え給ふ。「かくし給ひしがつらかりし」など、泣きみ笑ひみ聞え給ふにもこと人よりはむつましく哀なり。ことごとしくうるはしくて例ならぬ御事のさまも驚き惑ひ給ふ所にては御とぶらひの人しげく、父おとゞせうとの君たちひまなきもいとうるさきにこゝはいと心安くてなつかしくぞおぼされける。いと夢のやうにのみ猶いかでいと俄なりけることにかはとのみいぶせければ、例の人々召して右近を迎につかはす。母君も更にこの水の音けはひを聞くに我れもまろび入りぬべく悲しく心うき事のとまるべくもあらねばいと侘しうて踊り給ひにけり。念佛の僧どもをたのもしきものにていとかすかなるに入り來れば、ことごとしく俄に立ちめぐりしとのゐびとども見とがめず、あやにくに限りのたびしも入れ奉らずなりにしよと思ひいづるもいとほし。さるまじきことを思ほしこがるゝことゝ見苦しく見奉れど、こゝに來てはおはしましゝよなよなの有樣いだかれ奉り給ひて船にのり給ひしけはひのあてに美しかりしとなどを思ひ出づるに心強き人なく哀なり。右近あひていみじうなくもことわりなり。「かくの給はせて御使になむ參りきつる」といへば「今更に人もあやしといひ思はむもつゝましくまゐりてもはかばかしく聞しめしあきらむばかり物聞えさすべき心地も志侍らず。この御忌はてゝあからさまに物になど人にいひなさむも少

し似つかはしかりぬべき程になしてこそ。心より外の命侍らばいさゝか思ひ靜まらむ折になむ仰言なくとも參りてげにいと夢のやうなりし事どもゝ語り聞えまほしき」といひて今日は動くべくもあらず。大夫もなきて「更にこの御中の事こまかに知り聞えさせ侍らず、物の心も知り侍らずながらたぐひなき御志を見奉り侍りしかば君達をも何かは急ぎてしも聞えうけ給はらむ。遂には仕うまつるべきあたりにこそと思ひ給へしを、いふかひなく悲しき御事の後はわたくしの御志もなかなか深さまさりてなむ」と語らふ。「わざと御車などおぼしめぐらして奉れ給へるを空しくてはいといとほしうなむ。今一所にても參り給へ」といへば侍從の君よび出でゝ「さば參り給へ」といへば「まして何事をかは聞えさせむ。さてもこの御忌の程にはいかでかいませ給はぬか」といへば「なやませ給ふ御ひゞきにさまざまの御つゝしみども侍るめれど忌あへさへ給ふまじき御氣色になむ。又かく深き御契にては籠らせ給ひてもこそおはしまさめ。のこりの日いくばくならず。猶一所參り給へ」とせむれば、侍從ぞ、ありし御さまもいと戀しう思ひ聞ゆるにいかならむ世にかは見奉らむ、かゝる折にと思ひなして參りける。黑ききぬども着て引きつくろひたるかたちもいと淸げなり。裳は只今我れより上なる人なきにうちたゆみて色もかへざりければ薄色なるを持せて參る。おはせましかばかの道にぞ忍びて出で給はまし、人知れず心よせ聞えしものをなど思ふにも哀なり。道すがら泣くなくなむ來ける。宮はこの人參れりと聞しめすも哀なり。女君にはあまりうたてあれば聞え給はず。寢殿におはしましてわたどのにおろし給へり。ありけむさまなど委し

う問はせ給ふに「日比おぼしなげきしさまその夜泣き給ひしさまあやしきまでことずくなにおぼおぼとのみ物し給ひていみじとおぼす事をも人にうちいで給ふことはかたく物づゝみをのみ志給ひしけにやのたまひおくとも侍らず。夢にもかく心強きさまにおぼしかくらむとは思ひ給へずなむ侍りし」など委しう聞ゆれば、ましていといみじうさるべきにてともかくもあらましよりも、いかばかり物を思ひたちてさる水に溺れけむとおぼしやるに、これを見つけてせきとめたらましかばとわきかへる心ち志給へどかひなし。「御文を燒き失ひ給ひしなどになどてめをたて侍らざりけむ」など夜一夜語らひ給ふに聞えあかす。かのくわんじゆに書きつけ給へりし母君の返事などを聞ゆ。何ばかりのものとも御覽ぜざりし人もむつましく哀におぼさるれば「我がもとにあれかし。あなたももてはなるべくやは」とのたまへば「さてさぶらむにつけても物のみ悲しからむを思ひ給へれば今この御はてなど過ぐして」と聞ゆ。「又もまゐれ」などこの人をさへ飽かずおぼす。曉歸るにかの御料にとて設けさせ給へりける櫛の箱一よろひ衣箱一よろひ贈物にせさせ給ふ。さまざまにせさせ給ふとは多かりけれど、おどろおどろしかりぬべければ、唯この人に仰せたる程なりけり。何心もなく參りてかゝるどものあるを人はいかゞ見むすゞろにむつかしきわざかなと思ひわぶれどいかゞは聞えかへさむ。右近と二人忍びて見つゝ、つれづれなるまゝにこまかに今めかしう志あつめたる事どもを見てもいみじうなく。さうぞくもいとうるはしう志あつめたる物どもなれば、かゝる御服にこれをいかでかかくさむなどもてぞわづらひける。大將殿も猶い

と覺束なきにおぼしあまりておはしたり。道のほどより昔の事どもかき集めつゝ、いかなる契りにてこの父みこの御許にきそめけむ、かゝる思ひかけぬはてまで思ひあつかひ、このゆかりにつけては物をのみ思ふよ、いと尊くおはせしあたりに佛をしるべにて後世をのみ契りしに心ぎたなき末のたがひめに思ひ知らするなめりとぞ覺ゆる。右近召し出でゝ「ありけむさまさもはかばかしうきかず。猶盡せずあさましうはかなければ忌のこりも少なくなりぬ。過ぐしてと思ひつれどしづめあへず物しつるなり。いかなる心ちにてか俄にはかなくなり給ひにし」と問ひ給ふに、尼君なども氣色見てければ遂に聞き合せ給はむをなかなかくしても事違ひて聞えむにそこなはれぬべし、怪しき事のすぢにこそ、そらごとも思ひ廻らしつゝならひしか、かくまめやかなる御氣色にさしむかひ聞えてはかねてといはむかくいはむと思ひ設けし詞をも忘れ、煩しう覺えければありしさまの事どもを聞えつ。あさましうおぼしかけぬすぢなるに物もとばかりの給はず、更にあらじと覺ゆるかな、なべての人の思ひいふことをもこよなくことずくなに おほどかなりし人は、いかでさるおどろおどろしきことは思ひ立つべきぞ、いかなるさまにこの人々もてなしていふにかあらむと御心も亂れまさり給へど宮もおぼし歎きたるけしきいとしるし。こゝの有樣も しかつれなしつくりたらむけはひはおのづから見えぬべきを、かくおはしましたるにつけても 悲しくいみじきことをかみしもの人集ひて泣きさわぐをと聞き給へば「御供に具して失せたる人やある。猶ありけむさまをたしかにいへ。我をおろかなりと思ひて 背き給ふことはよもあらじとなむ思

ふ。いかやうなる、たちまちにいひしらぬことありてかさるわざはし給はむ。我なむえ信ず
まじき」とのたまへば、いといとほしくされば よとわづらはしくて おのづから聞し召しけ
む、「もとよりおぼすさまならでおひ出で給へりし人の世ばなれたる御住ひの後はいつとな
く物をのみおぼすめりしかど、たまさかにもかくおはしますを待ち聞えさせ給ふに、もとよ
りの御身のなげきをさへ慰め給ひつゝ心のどかなるさまにて時々も見奉らせ給ふべきやう
にいつしかとのみ言に出でゝはの給はねどおぼしわたるめりしを、その御ほ意かなふべき
さまにうけ給はる事どもゝ侍りしに、かくて侍ふ人どもゝ嬉しきことに思ひ給へいそぎかの
つくば山も辛うじて心ゆきたる氣色にて渡らせ給はむことをいとなみ思ひ給へしに、心得
ぬ御せうそこ侍りけるに、このとのゐなど仕うまつるものどもゝ女房達らうがはしかなりな
ど戒め仰せらるゝことなど申して、物の心えず荒々しき田舍人どもの怪しきさまにとりな
し聞ゆる事ども侍りしを、その後久しう御せうそこなども侍らざりしに、心憂き身なりとの
みいはけなかりし程より思ひ知るを、人かずにいかで見なさむとのみよろづに思ひあつか
ひ給ふ母君のなかなかなることの人わらはれになりはてばいかに思ひなげかむなど、おも
むけてなむ常になげき給ひし。そのすぢより外に何事をかと思ひ給へよるにたへ侍らずな
む。鬼などのかくし聞ゆとも聊殘る所も侍るなるものを」とて泣くさまもいみじければいか
なることにかと紛れつる御心も失せてせきあへ給はず。「われは心に身をもまかせずけんそ
うなるさまにもてなされたる有樣なれば覺束なしと思ふ折も今近くて人の心おくまじくめ

やすきさまにもてなして行く末長くをと思ひのどめつゝ過しつるを、おろかに見なし給ひけむこそなかなかわくる方ありけると覺ゆれ。今はかくだにいはじと思へど又人の聞かばこそあらめ、宮の御ことゝいつよりありそめけむ。さやうなるにつけてやいとかたはに人の心を惑はし給ふ宮なれば常にあひ見奉らぬなげきに身をも失ひ給へるとなむ思ふ。なほいへ。我には更になかくしそ」との給へば、たしかにこそは聞き給ひてけれといといとほしくて「いと心うき事聞しめしけるにこそは侍るなれ。右近も侍はぬ折りは侍らぬものをとながめ休らひておのづから聞しめしけむ、この宮の上の御方に忍びて渡らせ給へりしをあさましく思ひかけぬ程に入りおはしたりしかど、いみじき事を聞えさせ侍りて出でさせ給ひにき。それにおぢ給ひてかの怪しく侍りし所に渡らせ給へりしなり。その後音にも聞えじとおぼしてやみにしをいかでか聞かせ給ひけむ。唯そのきさらぎばかりより音づれ聞えさせ給へし御文はいと度々侍りしかど御覽じ入るゝことも侍らざりき。いとかたじけなくなかなかうたてあるやうになどぞ右近など聞えさせしかば、ひとたびふたたびや聞えさせ給ひけむ。それより外の事は見給へず」と聞えさす。かうぞいはむかし、志ひて問はむもいとほしくてつくづくと打ちながめつゝ宮をめづらしく哀と思ひ聞えても我が方をさすがにおろかに思はざりける程にいとあきらむる所なくはかなげなりし心にて、この水の近きをたよりにてかく思ひよるなりけむかし、我がこゝにさし放ちすゑざらましかばいみじううき世にふともいかでか必ず深き谷をもとめて出でましと、いみじううき水の契かなと、この川の疎ま

しうおぼさるゝこといと深し。年比哀と思ひそめたりし方にて荒き山路を行きかへりしに今は又心うくて、この里の名をだにえきくまじき心地し給ふ。宮の上ののたまひはじめし人がたとつけたりしさへゆゝしう唯我があやまちに失ひつる人なりと思ひもて行くには、母の猶かろびたる程にて後のうしろみもいとあやしくことそぎてしなしけるなめりと、心ゆかず思ひつるを委しく聞き給ふになむ、いかに思ふらむ、さばかりの人の子にてはいとめでたかりし人を忍びたることは必ずしもえ知らで、我がゆかりにいかなる事のありけるならむとぞ思ふならむかしなど萬にいとほしくおぼす。けがらひといふことはあるまじけれど御供の人めもあればのぼり給はで、御車のしぢを召して妻戸の前にぞ居給ひけるも見苦しけれどいとしげき木の下に苔をおましにて、とばかり居給へり。今はこゝを來て見むことも心うかるべしとのみ見めぐらし給ひて、

「われもまたうきふる里をあれはてばたれやどり木のかげをしのばむ」。阿闍梨今はりしなりけり。めして このほふじのことおきてさせたまふ。念佛の僧のかずそひなど せさせ給ふ。罪いと深くなるわざとおぼせばかろむべきことをぞすべき。七日七日に經佛供養すべきよしなどこまかにのたまひて いと暗うなりぬるに歸り給ふもあらましかば今夜歸らむやはとのみなむ尼君にせうそこせさせ給へれど「いともいともゆゝしき身をのみ思ひ給へしづみていとゞ物を覺え給へられずほれ侍りてなむうつぶしふして侍る」と聞えて出で來ねば強ひても立ちより給はず、道すがら疾く迎へとり給はずなりにけることくやしう、水の音の

聞ゆるかぎりは心のみさわぎ給ひて、からをだに尋ねずなりにける事あさましくても止みぬるかな、いかなるさまにていづれの底のうつせにまじりけむなどやる方なくおぼす。かの母君は京に子うむべきむすめのことによりつゝしみさわげば例の家にもえいかず、すゞろなる旅居のみして思ひ慰む折もなきに、又これもいかならむと思へどたひらかに産みてけり。ゆゝしければえよらず。殘の人々のうへも覺えずほれまどひてすぐすに大將殿より御使忍びてあり。物覺えぬ心地にもいとうれしくあはれなり。「あさましきことはまづ聞えむと思ひ給へしを、心ものどまらず目もくらき心地して、まいていかなる闇にか惑はれ給ふらむとその程を過ぐしつるに、はかなくて日比も經にけるをなむ。世のつねなさもいとゞ思ひのどめむかたなくのみ侍るを思の外にもながらへば過ぎにしなごりとは必ずさるべき事にも尋ね給へ」などこまかに書き給ひて御使にはかの大藏大夫をぞ給へりける。「心のどかに萬を思ひつゝ年比にさへなりにける程必ずしも志あるやうには見給はざりけむ。されど今より後何事につけても必ずわすれ聞えじ。又さやうにを人しれず思ひ聞え給へをさなき人どもゝあなるを、おほやけに仕うまつらむにも必後見思ふべくなむ」などことばにものたまへり。「痛くしも忌むまじきけがらひなれば深うもふれ侍らず」などいひなしてせめてよびすゑたり。御返りなくなくかく。「いみじき事にしなれ侍らぬ命を心うく思ひ給へ歎き侍るに、かゝる仰言見給ふべかりけるにやとなむ年比は心細きありさまを見給へながらそれは數ならぬ身のをこたりに思ひ給へなしつゝ忝き御ひとことを行く末長く頼み聞えさせ侍り

しに、いふかひなく見給ひはてゝは里の契もいと心憂く悲しくなむ。さまざまに嬉しき仰言に命のび侍りて今暫しながらへ侍らば猶賴み聞え侍るべきにこそと思ひ給ふるにつけても目の前の涙にくれ侍りてえ聞えさせやらず」など書きたり。御使になべての祿などは見苦しき程なり。飽かぬ心地もすべければかの君に奉らむと心ざしてもたりけるよきはんさいの帶たちのをかしきなど袋に入れて車に乘るほど「これは昔の人の御志なり」とて贈らせてけり。殿に御覽ぜさすれば「いとすゞろなるわざかな」とのたまふ。「詞にはみづからあひ侍りたうびていみじくなくなく萬の事のたまひてをさなきものどもの事まで仰せられたるがいともかしこきに、又數ならぬほどはなかなかいと耻しう人になにゆゑなどは知らせ侍らで、あやしきさまどもを皆まゐらせ侍りて侍はせむとなむ物し侍りつる」と聞ゆ。げに異なる事なきゆかりむつびにぞあるべけれど、みかどにもさばかりの人のむすめ奉らずやはある、それにさるべきにて時めかしおぼさむをば人の謗るべきことかは、たゞ人はたあやしき女世にふりにたるなどをもちゐるたぐひ多かり、かの守のむすめなりけりと人のいひなさむにも我がもてなしのそれにけがるべくありそめたらばこそあらめ、一人の子をいたづらになして思ふらむ親の心に猶このゆかりこそ面だゝしかりけれと、思ひ知るばかり用意は必ず見すべき事とおぼす。かしこには常陸の守たちながらきて、をりしもかくて居給へることなど腹立つ。年比いつぐになむおはするなどありのまゝにも知らせざりければはかなきさまにておはすらむと思ひいひけるを、京になど迎へ給ひて後、めいぼくありてなど知らせむ

と思ひけるほどに、かゝれば今はかくさむもあいなくてありしさま泣くなく語る。大將殿の御文どもとり出でゝ見すれば善き人かしこくしてひなびものめでする人にて驚きおくしてうち返しうちかへし「いとめでたき御さいはひを捨てゝうせ給ひにける人かな。おのれも殿人にて參り仕うまつれども近く召しつかひ給ふこともなく いとけ高くおはする殿なり。若きものどものこと仰せられたるはたのもしきことになむ」など喜ぶを見るにもましておはせましかばと思ふに、ふしまろびてなかる。守も今なむうちなきける。さるはおはせし世にはなかなかかゝるたぐひの人しも尋ね給ふべきにしもあらずかし。我があやまちにて失ひつるもいとほし。慰めむとおぼすによりなむ人のそしりねんごろに尋ねじとおぼしける。四十九日のわざなどせさせ給ふにもいかなりけむとにかはと覺せば、とてもかくても罪得まじきことなればいと忍びてかのりしの寺にてせさせ給ひける六十僧のふせなどおほきにおきてられたり。母君も來居てことどもそへたり。宮よりは右近がもとにしろがねの壺にこ金入れて賜へり。人見咎むばかりおほきなるわざはえし給はず。右近が志にて志たりければ心知らぬ人は「いかでかくなむ」などいひける。殿の人どもむつまじきかぎり數多たまへり。怪しく音もせざりつる人のはてをかくあつかはせ給ふ。誰ならむと今驚く人のみ多かるに常陸の守きて、心もなくあるじがりをるなむ、あやしと人々見ける。少將の子うませていかめしき事せさせむとまどひ、家の内になき物はすくなくもろこし新羅のかぎりをもまつべきに、限りあればいとあやしかりけり。この御法事の忍びたるやうにおぼしたれどけはひことよな

きを見るにいきたちましかば我が身にならふべくもあらぬ人の御宿世なりけりと思ふ。宮の上も誦經し給ひ七僧のまへのこともせさせ給ひけり。今なむ、かゝる人もたまへりけりとみかとまで聞しめしておろかにもあらざりける人を宮にかしこまり聞えてかくしおき給ひけるを、いとほしとおぼしける。二人の人の御心の中ふりずかなしくあやにくなりし御思のさかりにかきたえてはいといみじけれどあだなる御心はなぐさむやなど試み給ふこともやうやうありけり。かの殿はかくとりもちて何やかやとおぼして殘の人をはぐゝませ給ひても猶いふかひなき事を忘れ難くおぼす。后の宮の御きやうぶくの程は猶かくておはしますに二の宮なむ式部卿になり給ひにける。おもおもしうて常にしも參り給はず。この宮はさうざうしく物哀なるまゝに一品の宮の御方をなぐさめ所に志給ふ。よき人のかたちをもえまほに見給はぬのこりおほかり。大將殿のからうじていと忍びて語らひ給ふ。小宰相の君といふ人かたちなども清げなり。心ばせある方の人とおぼされたり。同じことを搔きならすつま音もばち音も人にはまさり文をかき物うちいひたるもよしあるふしをなむそへたりける。この宮も年比いといたきものに志給ひて例のいひやぶり給へど、などかさしもめづらしげなくはあらむと心強くねたきさまなるを、まめ人はすこし人より異なりとおぼすになむありける。かく物おぼしたるさまも見知りければ忍びあまりて聞えたり。

「あはれ志る心は人におくれねど數ならぬ身にきえつゝぞふる。かへたらば」とゆゑある紙に書きたり。物哀なる夕ぐれ志めやかなるほどをいとよく推し量りていひたるもにくか

らず。

「つれなしとこゝら世を見るうき身だに人の知るまで歎きやはする。このよろこび哀なりし折からもいとゞなむ」など云ひに立ちより給へり。いと恥しげにものものしげにてなべてかやうになどもならはし給はぬ人からもやんごなきにいと物はかなき住ひなりかし。つぼねなどいひてせばくほどなきやりどぐちにより居給へる、かたはらいたく覺ゆれど、さすがにあまりひげしてもあらでいとよき程に物なども聞ゆ。見し人よりもこれは心にくきけそひてもあるかな、などてかく出でたちけむ、さるものにて我もおいたらましものをとおぼす。人しれぬすぢはかけても見せ給はずはちすの花の盛に御八講せらる。六條院の御ため紫の上など皆おぼしわけつゝ御經佛など供養せさせ給ひていかめしく尊くなむなりける。五卷の日などはいみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきて參りて物見る人多かりけり。五日といふあさ座にはてゝ御堂の飾とりさけ御しつらひあらたむるに、北の廂もさうじども放ちたりしかば皆入りたちてつくろふ程、西の渡殿に姫宮おはしましけり。物きゝこうじて女房もおのおの局にありつゝ御前はいと人少なゝる夕暮に、大將殿直衣着かへて、今日まかづる僧の中に必のたまふべき事あるにより釣殿の方におはしたるに、皆まかでぬれば池の方にすゞみ給ひて人少なゝるに、かくいふ宰相の君などかりそめに几帳などばかり隔てゝうちやすむうへつぼねしたり。こゝにやあらむ人のきぬの音するとおぼしてめだうの方のさうじの細く明きたるよりやをら見給へば、例さやうの人の居たるけはひには似ず

はればれしく志つらひたれば、なかなか几帳どもの立てちがへたるあはひより見とほされてあらはなり。ひを物の蓋に置きてわるとてもてさわぐ人々おとな三人ばかり童と居たり。唐ぎぬも汗衫も着ず皆うちとけたれば御前とは見給はぬに白きうすもの丶御ぞ着給へる人の手にひを持ちながらかく爭ふを少しゑみ給へる御顔いはむ方なく美しげなり。いとあつさの堪へがたき日なればこちたき御髮の苦しうおぼさるゝにやあらむ、少しこなたになびかしてひかれたる程たとへむものなし。こゝらよき人を見集むれど似るべくもあらざりけりと覺ゆ。御前なる人は誠に土などの心地ぞするを、思ひ志づめて見れば黃なるすゞしのひとへ薄色なる裳着たる人の扇うちつかひたるなど用意あらむはやとふと見えてなかなか物あつかひにいと苦しげなり。「唯さながら見給へかし」とて笑ひたるまみ愛敬づきたり。聲聞くにぞこの志の人とは志りぬる。心づよくわりて手毎にもたり。かしらにうち置き胸にさしあてなどさまあしうする人もあるべし。この人は紙につゝみて御前にもかくて參らせたればいと美しき御手をさしやり給ひてのごはせ給ふ。「いなもたらじ。志づくむつかし」とのたまふ御聲いとほのかに聞くも限りもなく嬉し。またいとちひさくおはしましゝ程にわれも物の心も知らで見奉りし時めでたのちごの御さまやと見奉りし。その後絶えてこの御けはひをだに聞かざりつるものをいかなる神佛のかゝる折見せ給へるならむ、例のやすからず物思はせむとするにやあらむと、かつは志づ心なくてまもり立ちたる程に、こなたの對の北面にすゞみける下﨟女房のこのさうじはとみの事にてあけながらおりにけるを思ひ出でゝ

人もこそ見つけてさわがるれと思ひければまどひ入る。この直衣姿を見つくるに誰ならむと心さわぎておのがさま見えむことも知らず、簀子よりたゞきにくれば、ふとたちさりて誰とも見えじ。すきずきしきやうなりと思ひて隠れ給ひぬ。このおもとはいみじきわざかな、御几帳をさへあらはにひきなしてけるよ、左の大殿の君達ならむ、うとき人はたこゝまでくべきにもあらず、物の聞えあらば誰かさうじあけたりしと必ず出できなむ、ひとへも袴もすゞしなめりと見えつる人の御姿なればえ人も聞きつけ給はぬならむかしと思ひこうじてをり。かの人はやうやうひじりになりし心をひとふしたがへそめて様々なる物思ふ人ともなるかな、そのかみ世を背きなましかば今は深き山に住みはてゝかく心亂らましやはなどおぼし續くるもやすからず。など年比見奉らばやと思ひつらむ、なかなか苦しうかひなかるべきわざにこそと思ふ。つとめて起き給へり。女宮の御かたちいとをかしげなめるはこれより必ず優るべきことかはと見えながら、更に似給はずこそありけれ、あさましきまであてにかをりえもいはざりし御さまかな、かたへは思ひなしかをりからかとおぼして「いとあつしや。これより薄き御ぞ奉れ。女は例ならぬ物着たるこそ時々につけてをかしけれ」とてあなたに參りて大貳に「うすものゝひとへの御ぞ縫ひてまゐれといへ」とのたまふ。御前なる人はこの御かたちのいみじき盛りにおはしますをもてはやし聞え給ふとをかしう思へり。例のねんずし給ふ我が御方におはしましなどして、晝つかた渡り給へれば、のたまひつる御ぞ御几帳にうちかけたり。「なぞこは奉らぬ。人おほく見る時なむすきたる物着たるは傍側に

覺ゆる。唯今はあへなむ」とて手づから着せ奉り給ふ。御袴も昨日の同じくれなゐなり。みぐしのおほさ、すそなどはおとり給はねど猶樣々なるにや似るべくもあらず。ひ召して人々にわらせ給ふ。とりてひとつ奉りなど志給ふ心のうちもをかし。繪に書きて戀しき人見る人はなくやはありける、ましてこれは慰めむに似げなからぬ御程ぞかしと思へど、昨日かやうにてわれまじりゐ、心に任せて見奉らましかばと覺ゆるに、心にもあらずうちなげかれぬ。「一品宮に御文は奉り給ふや」と聞え給へば「内にありし時上のさのたまひしかば聞えしかど久しうさもあらず」とのたまふ。「唯人にならせ給ひにたりとてかれよりも聞えさせ給はぬにこそは心うかなれ。今大宮の御前にて恨み聞えさせ給ふと啓せむ」とのたまふ。「いかゞ恨み聞えむ。うたて」とのたまへば、「下すになりにたりとておぼしおとすなめりと見れば驚かし聞えぬとこそは聞えめ」とのたまふ。その日はくらして　またのあしたに大宮にまゐり給ふ。例の宮もおはしけり。丁子に深く染めたる羅の單衣を　こまやかなる直衣に着給へるいとこのましげなり。女の御身なりのめでたかりしにも劣らず白く淸らにて猶ありしよりはおもやせ給へるいと見るかひあり。覺え給へりと見るにもまづ戀しきを、いとあるまじきことゝ志づむるぞたゞなりしよりは苦しき。繪をいと多く持たせて參り給へりける女房してあなたに參らせ給ひてわれも渡らせ給ひぬ。大將も近く參りより給ひて御八講のたふとく侍りしことといにしへの御事少し聞えつゝ　殘りたる繪見給ふついでに「この里にものし給ふ御子の雲の上はなれて思ひくし給へるこそいとほしう見給ふれ。姫宮の御方より御せうそこも

侍らぬを、かく品定り給へるにおぼし捨てさせ給へるやうに思ひて心ゆかぬ氣色のみ侍るをかやうのもの時々ものせさせ給はなむ。なにがしがおろしてもてまからむ、はた見るかひも侍らじかし」と聞え給へば「怪しくなどてか捨て聞え給はむ。内にては近かりしにつきて時々も聞えかよひ給ふめりしを、所々になり給ひし折にとだえそめ給へるにこそあらめ。今そゝのかし聞えむ。それよりもなどかは」と聞え給ふ。「かれよりはいかでかは。もとより數まへさせ給はざらむをもかく志たしくして侍ふべきゆかりによせておぼし召しかずまへさせ給はむをこそ嬉しくは侍るべけれ。まして、さも聞えなれ給ひにけむを今捨てさせ給はむはからき事に侍り」と啓せさせ給ふをすきばみたる氣色あるかとはおぼしかけざりけり。立ちいでゝ一夜の志の人にあはむ、ありし渡殿もなぐさめに見むかしとおぼして御前をあゆみ渡りて西ざまにおはするを、御簾のうちの人は心ことに用意す。げにいとさまよく限なきもてなしにて渡殿の方は左のおほい殿の君達など居て物いふけはひすれば、妻戸の前に居給ひて「大方にはまゐりながらこの御方のげざんに入る事のかたく侍れば、いとおぼえなくおきなびはてにたる心地志はべるを、今よりはと思ひおこし侍りてなむ。ありつかず若き人どもぞ思ふらむかし」と甥の君達の方を見やり給ふ。「今よりならはせ給ふこそげに若くならせ給ふならめ」などはかなきことをいふ。人々のけはひもあやしうみやびかにをかしき御方の有様にぞある。その事となけれど世の中の物語などしつゝ、志めやかに例よりは居給へり。姫宮はあなたに渡らせ給ひけり。「大宮大將のそなたに參りつるか」と問ひ給ふ。「御供に

參りたる大納言の君小宰相の君に物のたまはむとこそは侍るめりつれ」と聞ゆれば「まめ人
のさすがに心留めて物語するこそ心地後れたらむ人は苦しけれ、心の程も見ゆらむかし。小
宰相などはいと後やすし」とのたまひて御はらからなれどこの君をば猶はづかしく人も用
意なくて見えざらなむと覺いたり。「人よりは心よせ給ひて局などに立ちより給ふべし。物
語こまやかに志給ひて夜更けて出でなどし給ふ折々も侍れど例のめなれたるすぢには侍ら
ぬにや。宮をこそいと情なくおはしますと思ひて御いらへをだに聞えず侍るめれ。忝きこ
と」といひてわらへば、宮も笑はせ給ひて「いと見苦しき御さまを思ひ知るこそをかしけれ。
いかでかゝる御癖やめ奉らむ。はづかしやこの人々も」とのたまふ。「いと怪しきことをこそ
聞き侍りしか。この大將殿のなくなし給ひてし人は、宮の御二條の北の方の御弟なりけり。
ことはらなるべし。常陸の前の守某がめはをばとも母ともいひ侍るなるはいかなるにか。そ
の女君に宮こそいと忍びておはしましけれ。大將殿や聞きつけ給ひたりけむ、俄に迎へ給は
むとてまもりめそへなど、ことごとしく志給ひける程に、宮もいと忍びておはしましながら
え入らせ給はず、あやしきさまに御馬ながら立たせ給ひつゝぞかへらせ給ひける。女も宮を
思ひ聞えさせけるにや、俄に消えうせにけるを、身なげたるなめりとてこそ乳母やうの人ど
もは泣き惑ひ侍りけれ」と聞ゆ。宮もいとあさましと覺して「誰かさる事はいふぞとよ。いと
いとほしく心憂きことかな。さばかりめづらかならむことはおのづから聞えありぬべきを、
大將もさやうにはいはで、世の中のはかなくいみじき事、かく宇治の宮のぞうの命みじかゝ

りけるよをこそいみじう悲しと思ひてのたまひしか」とのたまふ。「いざや下すはたしかならぬことをもいひ侍るものをと思ひ侍れど、かしこに侍りける下童の唯この比宰相が里に出でまうできてたしかなるやうにこそいひ侍りけれ。かくあやしうてうせ給へること人に聞かせじ、おどろおどろしくおぞきやうなりとていみじくかくしけることどもとや。さて委しくは聞かせ奉らぬにやありけむ」と聞ゆれば「更にかゝる事又まねぶなどいはせよ。かゝるすぢに御身をもてそこなひ人にも心づきなきものに思はれ給ふべきなめり」と、いみじう覺えたり。その後姫宮の御方より二宮に御せうそこありけり。御手などのいみじううつくしげなるを見るにもいとうれしく、かくてこそ疾く見るべかりけれとおぼす。數多をかしき繪どもおほく大宮も奉らせ給へり。大將殿うちまさりてをかしきども集めてまゐらせ給ふ。せり川の大將のとを君の女一宮思ひかけたる秋の夕暮に思ひ侘びて出でいきたるかたをかしう書きたるをいとよく思ひよせらる。しかばかりおぼしなびく人のあらましかばと思ふ身ぞ口をしき。

「荻の葉に露ふきむすぶ秋風も夕ぞわきて身にはしみける」と書きてもそへまほしくおぼせど、さやうなる露ばかりの氣色にても漏りたらばいと煩はしげなる世なればはかなきことをもえほのめかし出づましく、かく萬に何やかやと物を思ひ思ひのはては昔の人ものしたまはましかばいかにもいかにも外ざまに心わけましや、時のみかどの御娘を給ふともえ奉らざらまし、又さ思ふ人ありと聞しめしながらはかゝる事もなからましを、猶心うく我が

心亂り給ひけるはし姫かなと思ひあまりては又宮の上にとりかゝりて戀しうつらくもわりなきことぞをこがましきまでくやしき、これに思ひわびてさしつぎにはあさましくてうせにし人のいと心をさなく滞る所なかりける輕々しさをば思ひながら、さすがにいみじと物を思ひ入りけむほど我が氣色例ならずと心の鬼になげきしづみて居たりけむ有樣を聞き給ひしも思ひ出でられつゝ、おもりかなる方ならで唯心安くらうたきかたらひ人にてあらせむと思ひしには、いとらうたかりし人を思ひもていけば宮をも思ひ聞えじ、女をもうしと思はじ、唯我が有樣の世づかぬをこたりぞなどながめ入り給ふ時々多かり。心のどかにさまよくおはする人だにかゝるすぢには身も苦しき事自からまじるを、宮はまして慰めかね給ひつゝ、かのかたみに飽かぬ悲しさをものたまひいづべき人さへなきを、對の御方ばかりこそは哀などのたまへど深くも見馴れ給はざりける。うちつけのむつびなればいと深くしもいかでかはあらむ。またおぼすまゝに戀しやいみじやなどのたまはむにはかたはらいたければ、彼所にありし侍從をぞ例の迎へさせ給ひける。皆人どもいきちりて乳母とこの人二人なむとりわきて覺したりしも忘れがたくて、侍從はよそ人なれど猶語らひてありふるに、世づかぬ川の音もうれしき瀨もやありとたのみし程こそなぐさめけれ。心憂くいみじく物おそろしくのみ覺えて京になむあやしき所にこの比來て居たりける。尋ね出で給ひてかくて侍へとのたまへど、御心はさるものにて人々のいはむともさるすぢの事まじりぬるあたりはきゝにくき事もあらむと思へばうけひき聞えず。后の宮に參らむとなむおもむければいと

よかなり。さて人知れずおぼしつかはむ」とのたまはせけり。心ぼそくよるべなきも慰むやとて知るたよりもとめてまゐりぬ。きたなげなくてよろしき下臈なりとゆるして人もそしらず大將殿も常に參り給ふを見る度ごとに物のみ哀なり。いとやんごとなきもの丶姫君のみ參りつどひたる宮と人もいふをやうやう目留めて見れど猶見奉りし人に似たるはなかりけりと思ひありく。この春うせ給ひぬる式部卿の宮の御女を繼母の北の方殊にあひ思はでせうとの右馬の督にて人がらもことなることなき心かけたるをいとほしうなども思ひたらでさるべきさまになむ契ると聞しめすたよりありて「いとほしう父宮のいみじうかしづき給ひける女君を徒らなるやうにもてなさむことなどのたまはせければいと心ぼそくのみ思ひ歎き給ふ有樣にて懷しうかく尋ねのたまはする」などせうとの侍從もいひてこの比迎へとらせ給ひてけり。姫宮の御ぐにていとこよなからぬ御ほどの人なればやんごとなく心ことにて侍ひ給ふ。かぎりあれば宮の君などうちいひて裳ばかりひきかけ給ふぞいと哀なりける。兵部卿の宮この君ばかりや戀しき人に思ひよそへつべきさましたらむ、父みこははらからぞかしなど例の御心は人をこひ給ふにつけても人ゆかしき御くせやまでいつしかと御心かけ給ひてけり。大將、もどかしきまでもあるわざかな、昨日今日といふばかり春宮にやなどおぼし、我にも氣色ばませ給ひきかし、かくはかなき世のおとろへを見るには水の底に身をしづめてももどかしからぬわざにこそなど思ひつ丶人よりは心よせ聞え給へり。この院におはしますをば內よりもひろくおもしろく住みよきものにして常にしも侍はぬ人ども

ゝ皆うちとけ住みつゝはるばると多かる對ども廊渡殿にみちたり。左大臣殿昔の御けはひにも劣らずすべて限もなくいとなみ仕うまつりたまふ。厳めしうなりにたる御ぞうなればなかなかいにしへよりも今めかしきことはまさりてさへなむありける。この宮例の御心ならば月比の程にいかなるすきごとどもをしいで給はまし。こよなくしづまり給ひて人めには少しおひなほりし給ふかなと見ゆるを、このころぞ又宮の君に、本性あらはれてかゝづらひありき給ひける。涼しくなりぬとて宮内に參り給ひなむとすれば秋のさかり紅葉の比を見ざるむこそなど若き人々は口惜しがりて皆參りつどひたるころなり。水になれ月をめでゝ御あそび絶えず、常よりも今めかしければ、この宮ぞかゝるすぢはいとこよなくもてはやし給ふ。朝夕めなれても猶今見む初花のさまし給へるに、大將の君はいとさしも入りたちなどし給はぬほどにてはづかしう心ゆるびなきものに皆思ひたり。例の二所參り給ひて御前におはする程に、かの侍從は物より覗き奉るに、いづ方にもいづかたにもよりてめでたき御宿世見えたるさまにて世にぞおはせましかし。あさましくはかなく心うかりける御心かなど人にはそのわたりのことかけてしり顔にもいはぬことなれば心ひとつに飽かず胸いたく思ふ。宮はうちの御物語などこまやかに聞えさせ給へば今一所はたち出で給ふ。見つけられ奉らじ、しばし御はてをも過さず心淺しと見え參らじと思へば隠れぬ。ひんがしの渡殿にあきあひたる戸口に人々あまた居て物語など忍びやかにする所におはして「某をぞ女房はむつまじとおぼすべきや。女だにかく心やすくはよもあらじかし。さすがにさるべからむこ

と教へ聞えぬべくもあり。やうやう見知り給ふべかめればいとなむ嬉しき」とのたまへばいといらへにくゝのみ思ふ。中に辨のおもとゝてなれたるおとな「そもむつましく思ひ聞ゆべきゆゑなき人の耻ぢ聞え侍らぬや。ものはさてこそはなかなか侍るめれ。必ずそのゆゑ尋ねてうちとけ御覽ぜらるゝにしも侍らねど、かばかりおもなくつくりそめてける身に おはざらむもかたはらいたくてなむ」と聞ゆれば「恥づべきゆゑあらじと思ひ定め給ひてけるこそ口惜しけれ」などのたまひつゝ見れば、からぎぬは脱ぎすべしおしやりうちとけて手習しけるなるべし、硯の蓋にすゑて心もとなき花の末々たをりてもてあそびけりと見ゆ。かたへは几帳のあるにすべりかくれ、あるはうちそむき、おしあけたる戸の方にまぎらしつゝ居たる頭つきどもゝをかしと見渡し給ひて硯ひきよせて、

「をみなへし亂るゝ野邊にまじるとも露のあだ名を我にかけめや。心やすくはおほさで」

とたゞこの草紙にうしろしたる人に見せ給へば、みじろきなどもせずのどかにいと疾く、

「花といへば名こそあだなれ女郎花なべての露にみだれやはする」と書きたるて、唯片そばなれどよしづきて大方めやすければ誰ならむと見給ふ。今まうのぼりける道にふたげられて滯り居たるなるべしと見ゆ。辨のおもてはいとけざやかなる翁言にくゝ侍りとて、

「旅ねして猶こゝろみよ女郎花さかりの色にうつりうつらず。さて後定め聞えさせむ」

といへば、

「宿かさはひと夜はねなむおほかたの花にうつらぬ心なりとも」とあれば「何かはづかし

めさせ給ふ。大かた野邊のさかしらをこそ聞えさすれ」といふ。はかなきことを唯少しの給ふも人はのこり聞かまほしくのみ思ひ聞えたり。「心なし、道あけ侍りなむよ。わきてもかの御物耻のゆゑ必ありぬべき折にぞあめる」とて立ち出で給へば、おしなべてかく殘なからむと思ひやり給ふこそ心うけれと思へる人もあり。ひんがしの高欄におしかゝりて夕かげになるまゝに花のひもとく御前の叢を見渡し給ふ。ものゝみ哀なるに中についてはらわた絶ゆるは秋の天といふことをいと忍びやかにずんじつゝ居給へり。ありつるきぬの音なひおるきけはひしてもやの御さうじよりとほりてあなたに入るなり。宮の歩みおはして「これよりあなたに參りけるは誰ぞ」と問ひ給へば「かの御方の中將の君」と聞ゆなり。猶あやしのわざや、誰にかとかりそめにも打ち思ふ人に やがてかくゆかしげなく聞ゆる名ざしよといとほしく、この宮には皆めなれてのみ覺え奉るべかめるも口惜しっをりたちてあながちなる御もてなしに女は、さもこそまけ奉らめ、わがさも口惜しうこの御ゆかりにはねたく心うくのみあるわざかな、いかでこのわたりにもめづらしからむ人の、例の心入れて騷ぎ給はむを語らひとりて 我が思ひしやうにやすからずとだにも思はせ奉らむ、誠に心ばせあらむ人は我が方にぞよるべきや、されどかたいものかな人の心はと思ふにつけて、對の御方のかの御有樣をばふさはしからぬものに思ひ聞えて、いとびんなきむつびになり行き、大方のおぼえをば苦しと思ひながら、猶さし放ちがたきものにおぼし知りたるぞありがたく哀なりける。さやうなる心ばせある人こゝらの中にあらむや、入りたちて深く見ねば知らぬぞかし、ねざめ

がちにつれづれなるを少しはすきもならはゞやなど思ふに今は猶つきなし。例の渡殿をありしに習ひてわざとおぼしたるもあやし。姫宮よるはあなたに渡らせ給ひければ人々月見るとてこの渡殿にうちとけて物語する程なりけり。箏の琴いとなつかしうひきすさぶつまおとをかしうきこゆ。思ひがけぬによりおはして「などかくねたましがほにかきならし給ふ」との給ふに、皆驚かるべかめれど少しあげたる簾垂うちおろしなどもせず、起きあがりて「似るべきこのかみや侍るべき」と應ふる聲中將の御もとゝかいひつるなりけり。「まろこそは御母方のをぢなれ」とはかなきことをのたまひて例のあなたに坐しますべかめる。「何わざをかこの比御里住の程にせさせ給ふ」など味氣なく問ひ給ふ。「いづこにても何事をかは唯かやうにてこそは過ぐさせ給ふめれ」といふにをかしの御身のほどやと思ふに、すゞろなるなげきのうち忘れてゐつるもあやしと思ひよる人もこそとまぎらはしにさし出でたる和琴をたゞさながらかきならし給ふ。りちの調べはあやしく折にあふと聞く聲なれば聞きにくゝもあらねど、ひきはて給はぬをなかなかなりと心入れたる人は消えかへり思ふ。我が母宮も劣り給ふべき人かは、きさい腹と聞ゆばかりのへだてこそあれ、みかどみかどのおぼしかしづきたるさま異ならざりけるを猶この御あたりはいと殊なりけるこそあやしけれ、明石の浦は心にくかりける所かなゝど思ひ續くることゞもに、我が宿世はいとやんごとなしかし、ましてならべてもち奉らばと思ふぞいとかたきや、宮の君はこの西の對にぞ御かたしたりける、若き人々のけはひ數多して月めであへり、いであはれこれも又同じ人ぞかし

と思ひ出で聞えて「御子の昔心よせ給ひしものを」といひなしてそなたへ坐しぬ。童のをかしきとのゐ姿にて二三人出でゝありきなどしけり。見つけて入るさまどもゝかゞやかし。これぞ世のつねと思ふ。南面の隅の間によりてうちこわづくり給へば少しおとなびたる人出で來たり。「人知れぬ心よせなど聞えさせ侍れば、なかなか皆人聞えさせふるしつらむことをうひうひしきさまにてまねぶやうになり侍り。まめやかになむことより外をもとめ侍る」とのたまへば「君にも言ひ傳へず、さかしだちていと思ほしがけざりし御有様につけても故宮の思ひ聞えさせ給へりしことなど思ひ給へ出でられてなむ、かくのみ折々聞えさせ給ふなる御志りうごとをも喜び聞え給ふめる」といふ。なみなみの人めきて心地なのさまやと物うければ「もとよりおぼし捨つまじきすぢよりも今はましてさるべきことにつけても思ほし尋ねむなむ嬉しかるべき。うとうとしう人づてなどにてもてなさせ給はゞえこそ」とのたまふに、げにと思ひさわぎて君をひきゆるがすめれば「松も昔のとのみながめらるゝにもとよりなどの たまふすぢはまめやかにたのもしうこそは」と人づてともなくいひなし給へる聲、いと若やかに愛敬づきやさしき所そひたり。唯なべてのかゝるすみかの人と思はゞいとをかしかるべきを只今はいかでかばかりも人に聲聞かすべきものとならひ給ひけむとなまうしろめたし。かたちもいとなまめかしからむかしと見まほしきけはひの志たるをこの人ぞ又例のかの御心亂るべきつまなめると、をかしうもありがたの世やとも思ひ居給へり。これこそは限なき人のかしづきおほし たて給へる姫君又かばかりぞ多くはあるべき。あやし

かゝりけることはさる聖の御あたりに山のふところより出で來たる人々のかたほなるはなかりけるこそ。このはかなしやかろ かろしやなど思ひなす人もかやうのうち見るけしきはいみじうこそをかしかりしかと何事につけても唯かの ひとつゆかりをぞ思ひ出で給ひける。あやしうつらかりける契どもをつく づくと思ひ續けながめ給ふ夕暮、かげろふの物はかけに飛びちがふを、

「ありと見て手にはとられず見れば又行くへもしらず消えし蜻蛉。あるなきかの」と例のひとりごち給ふとかや。

手習

そのころ横川に某僧都とかいひて いとたふとき人すみけり。八十お餘りの母五十ばかりの妹ありけり。ふるきぐわんありてはつせにまうでたり。むつまじうやんごとなく思ふ弟子の阿闍梨をそへて佛經供養すること行ひけり。事ども多くして歸る道に奈良坂といふ山越えける程よりこの母の尼君心ち惡しうしければ、かくてはいかでかのこりの道をもおはしつかむともてさわぎて宇治のわたりに知りたりける人の家ありけるに留めて今日ばかりやすめ奉るに、猶いたうわづらへば横川にせうそこしたり。山ごもりのほ意ふかく今年は出でじと思ひけれど、かぎりのさまなる親の道の空にてなくやならむと驚きて急ぎものし給へり。

惜むべくもあらぬ人のさまをみづからも弟子の中にも驗あるして加持しさわぐをいへあるじ聞きて「みたけさうじおけるをいたう老い給へる人の重く惱み給ふはいかゞ」と後めたげに思ひていひければ、さもいふべきこといとほしう思ひて、いとせばくむつかしうもあればやうやうゐて奉るべきに、中神ふたぶりて例すみ給ふ方はいむべかりければ、故朱雀院の御領にて宇治の院といひし所このわたりならむと思ひ出でゝ院守僧都知り給へりければ一二日宿らむといひにやり給へりければ、泊瀨になむ昨日皆參りにけるとていとあやしき宿守の翁を呼びて率て來たり。「おはしまさばはや。いたづらなる院の寢殿にこそ侍るめれ。物詣の人は常にぞやどり給ふ」といへば「いとよかなり。公所なれど人もなく心やすきを」とて見せにやりたまふ。この翁例もかく宿る人を見ならひたりければおろそかなるしつらひなどして來たり。まづ僧都渡り給ふ。いといたく荒れて恐しげなる所かなと見給ひて「大とこ達經讀め」などのたまふ。この泊瀨にそひたりし阿闍梨と同じやうなる今一人何事のあるにかつきづきしき程の下﨟法師に火ともさせて人もよらぬ後の方にいきたり。森かと見ゆる木の下をうとましげのわたりやと見入れたるに白き物のひろごりたるぞ見ゆる。「かれは何ぞ」と立ちとまりて火をあかくなして見れば物のゐたるすがたなり。「狐の變化したるか。にくし、見顯さむ」とて一人は今少し歩みよる。今一人は「あなような。よからぬものならむ」といひてさやうのものしぞくべき印つくりつゝさすがになほまもる。頭の髮あらばふとりぬべき心地するにこの火燈したる大とこ憚もなくあうなきさまにて近くなりてそのさまを見れば

髮は長くつやつやとして大きなる木の根のいとあらあらしきにより居ていみじうなく。「珍しきことにも侍るかな。僧都の御坊に御覽ぜさせ奉らばや」といへば「げに怪しき事なり」とて一人はまうでゝ「かゝることなむ」と申す。「狐の人に變化するとは昔より聞けどまだ見ぬものなり」とてわざとおりておはす。かの渡り給はむとすることによりて下すども皆はかばかしきは御厨子所などあるべかしきことどもをかゝるわたりには急ぐものなりければゐしづまりなどしたるに、唯四五人してこゝなるものを見るにかはることもなし。怪しうて時のうつるまで見る。疾く夜も明けはてなむ人か何ぞと見顯さむと心にさるべき眞言を讀み、印をつくりて試るにしるくや思ふらむ、「此は人なり、更にひざうのけしからぬものにあらず。寄りて問へ。なくなりたる人にはあらぬにこそあめれ。もし死にたりける人を捨てたりけるがよみがへりたるか」といふ。「何のさる人をかこの院の内に捨て侍らむ。たとひ誠に人なりとも狐こだまやうのものゝ、あざむきてとりもて來たらむにこそ侍らめ。いと不便にも侍りけるかな。けがらひあるべき所にこそ侍るめれ」といひて、ありつる宿守のをのこを呼ぶ。山彥の答ふるもいとおそろし。あやしのさまに額おしあげて出で來たり。「こゝには若き女なとやすみ給ふ。かゝる事なむある」とて見すれば「狐のつかうまつるなり。この木のもとになむ時々怪しきわざなむし侍る。一昨年の秋もこゝに侍る人の子の二つばかりに侍りしをとりてまうで來たりしかども見驚かず侍りき」、「さてそのちごは死にやしにし」といへば「生きて侍りき。狐はさてこそは人をおびやかせどことにもあらぬやつ」といふ樣いとなれたり。

かの夜深きまゐりものゝ所に心をよせたるなるべし。僧都「さらばさやうのものゝしたるわざか猶能く見よ」とてこの物おぢせぬ法師をよせたれば「鬼か神か狐かこだまか。かばかりの天の下の驗ざのおはしますにはえかくれ奉らじ。名のり給へ名のりたまへ」ときぬをとりて引けば顏をひき入れていよいよなく。「いであなさがなのこだまの鬼や。まさにかくれなむや」といひつゝ顏を見むとするに昔ありけむ目も鼻もなかりける。め鬼にやあらむとむくつけきをたのもしういかきさまを人に見せむと思ひてきぬをひき脱がせむとすればうつぶして聲たつばかりなく。「何にまれかく怪しき事なべて世にあらじ」とて見はてむと思ふに「雨いたく降りぬべし。かくておいたらば死にはて侍りぬべし。垣のもとにこそ出さめ」といふ。僧都「まことの人のかたちなり。その命絶えぬを見る見る捨てむ事はいみじきことなり。池に泳ぐいを山に鳴く鹿をだに人に捕へられて死なむとするを見つゝ助けざらむはいとかなしかるべし。人の命久しかるまじき物なれど殘の命一二日をもをしまずはあるべからず。鬼にも神にも領ぜられ人に追はれ人にはかりごたれてもこれよこざまの死にをすべきものにこそあめれ。佛の必ず救ひ給ふべききはなり。猶試にしばし湯をのませなどして助け試みむ。遂に死ぬべくばいふ限にあらず」とのたまひてこの大とこして抱き入れさせ給ふを弟子ども「たいだいしきわざかな。いたう煩ひ給ふ人の御あたりに善からぬ物をとり入れてけがらひ必出で來なむとす」ともどくもあり。又「物の變化にもあれ目に見すみす生ける人をかゝる雨にうち失はせむはいみじき事なれば」など心々にいふ。下すなどはいとさわが

しく物をうたていひなすものなれば人さわがしからぬかくれの方になむ臥せたりける。御車寄せており給ふほど「痛う苦しがり給ふ」とてのゝしる。すこしゝづまりて僧都「ありつる人はいかゞなりぬる」と問ひ給ふ。「なよなよとして物もいはず、いきもし侍らず。何か物にけどられにける人にこそ」といふを妹の尼君聞きて「何事ぞ」と問ふ。「しかしかの事をなむそぢにあまる年珍らかなるものを見給へつる」とのたまふ。うち聞くまゝに、「おのが寺にて見し夢ありき。いかやうなる人ぞまづそのさま見む」と泣きてのたまふ。「唯この東の遣戸になむ侍る。はや御覽ぜよ」といへば急ぎ行きて見るに人もよりつかで捨ておきたりける。いと若う美しげなる女の白き綾の衣一襲紅の袴ぞ著たる。かうはいみじうかうばしくてあてなるけはひ限なし。たゞ我が戀ひ悲むむすめの歸りおはしたるなめりとて、なくなく御達を出して抱き入れさす。いかなりつらむとも有樣見ぬ人は恐しからで抱き入れつ。生けるやうにもあらでさすがに目をほのかに見あげたるに「物のたまへや。いかなる人かかくては物し給へる」といへど物覺えぬさまなり。湯とりて手づからすくひ入れなどするにたゞよわりに絕え入るやうなりければなかなかいみじきわざかなとて「この人なくなりぬべし。加持し給へ」と驗ざの阿闍梨にいふ。「さればこそ怪しき御物あつかひなりとはいへ」と神などの御爲に經讀みつゝ祈る。僧都もさし覗きて「いかにぞ何のしわざぞとよく調じて問へ」とのたまへどいとよわげに消えもて行くやうなれば「得生き侍らじ。すゞろなるけがらひに籠りて煩ふべきことさすがに いとやんごとなき人にこそ侍るめれ。死にはつともたゞにやは捨て

させ給はむ。見苦しきわざかな」といひあへり。「あなかま人に聞かすな。煩しきこともぞあ
る」など口がためつゝ、尼君は親の煩ひ給ふよりもこの人を生けはてゝ見まほしう惜みてう
ちつけにそひ居たり。知らぬ人なれど、みめのこよなうをかしければいたづらになさじと見
るかぎりあつかひさわぎけり。さすがに時々目見あげなどしつゝ涙の盡せず流るゝを「あな
心うや。いみじう悲しと思ふ人のかはりに佛の導き給へると思ひ聞ゆるを、かひなくなり給
はゞなかなかなる事をや思はむ。さるべき契にてこそかく見奉るらめ。猶いさゝか物のたま
へ」といひつゞくれど辛うじて「いき出でたりとも怪しき不用の人なり。人に見せでよるこ
の河に落し入れ給ひてよ」と息のしたにいふ。「まれまれ物のたまふを嬉しと思ふに、あない
みじや、いかなればかくのたまふぞ。いかにしてさる所にはおはしつるぞ」と問へども物も
いはずなりぬ。身にもし疵などやあらむとて見れどこゝはと見ゆる所なく美しければあさ
ましく悲しく誠に人の心惑はさむとて出で來たる假のものにやと疑ふ。二日ばかり籠り居
て二人の人を祈り加持する聲絶えず、怪しきことを思ひさわぐ。そのわたりの下すなどの僧
都に仕うまつりける、かくておはしますなりとて訪ひ出で來るも物語などしていふを聞け
ば「故八宮の御むすめ右大將殿の通ひ給ひしが殊に惱み給ふこともなくて俄にかくれ給へ
りとてさわぎ侍る。その御葬送の雜事ども仕うまつり侍るとて昨日は得參り侍らざりし」と
いふ。さやうの人のたましひを鬼のとりもて來たるにやと思ふにも、かつ見るみるあるもの
とも覺えず危く恐しとおぼす。人々「よべ見やられし火はしかことごとしき氣色も見えざり

しを」といふ。「殊更ことそぎていかめしうも侍らざりしといふ。けがらひたる人とて立ちながら追ひ返しつ。大將殿は宮の御むすめもち給へりしはうせ給ひて年比になりぬるものを、誰をいふにかあらむ。姫宮を置き奉り給ひて世にことごゝろおはせじ」などいふ。尼君宜しくなり給ひぬ。方もあきぬればかくうたてある所に久しうおはせむもびんなしとてかへる。「この人は猶いと弱げなり。道の程もいかゞものし給はむ。いと心苦しき事」といひあへり。車二つして老人乘りたまへるには仕うまつる尼ふたり、次のにはこの人をふせて傍に今一人乘りそひて道すがら行きもやらず車とめて湯參りなどし給ふ。比叡坂本に小野といふ所にぞ住み給ひける。そこに坐し着く程いと遠し。「なかやどりをぞ設くべかりける」などいひて夜更けておはし着きぬ。僧都は親をあつかひ娘の尼君はこの知らぬ人をはぐゝみて皆抱きおろしつゝやすむ。老の病のいつともなきが苦しと思ひ給へしとほ道のなごりこそ志ばし煩ひ給ひけれ、やうやうよろしうなり給ひにければ僧都はのぼり給ひぬ。かゝる人なむ率て來たるなど法師のあたりには善からぬ事なれば見ざりし人にはまねばす、尼君も皆口がためさせつゝ、もし尋ね來る人もやあると思ふも靜心なし。いかでさる田舍人の住むあたりにかゝる人おちあぶれけむ、物詣など志たりける人の心ちなど煩ひけむを繼母などやうの人のたばかりて置かせたるにやなとぞ思ひよりける。かはに流してよといひし一言より外に物も更にのたまはねば、いと覺束なく思ひていつしか人にもなして見むと思ふに、つくづくとして起きあがるよもなくいとあやしうのみ物し給へば遂に生くまじき人にやと思ひな

がら、うち捨てむもいとほしういみじ。夢がたりも志出でゝ始より祈らせし阿闍梨にも忍びやかにけしやくことせさせ給ふ。うちはへてあつかふ程に四五月も過ぎぬ。いと侘しうかひなき事を思ひわびて僧都の御許に「猶おり給ひてこの人助け給へ。さすがに今日までもあるは死ぬまじかりける人をつきしみりやうじたる物のさらぬにこそあめれ。あがほとけ京に出で給はゞこそはあらめ、こゝまではあへなむ」などいみじき事を書き續けて奉れ給へれば「いとあやしきことかな。かくまでもありける人の命をやがてうち捨てゝましかばさるべき契ありてこそは我しもみつけゝめ。試に助けはてむかし。それにとまらずばがふ盡きにけりと思はむ」とており給ひけり。悦び拜みて月比の有樣をかたる。「かく久しう煩ふ人はむつかしき事おのづからあるべきを、聊衰へずいと淸げに掛けたる所なくのみ物し給ふ。さてかぎりと見えながらもかくて生きたるわざなりけり」などおふなおふななくなくのたまへば、「見つけしより珍らかなる人の御有樣かな。いでとてさし覗きて見給ひて、實にいときやうざくなりける人の御ようめいかな。くどく報いにこそかゝるかたちにも生ひ出で給ひけめ。いかなるたがひめにてかくそこなはれ給ひけむ。もしさにやと聞き合せらるゝこともなしや」と問ひ給ふ。「更に聞ゆることもなし。何かは初瀨の觀音の給へる人なり」とのたまへば「何かそれ緣に志たがひてこそ導き給ふらめ。たねなき事はいかでか」などのたまひあやしがり給ひてずほふはじめたり。おほやけの召しにだに隨はず深く籠りたる山を出で給ひてすゞろにかゝる人のためになむ行ひさわぎ給ふと物の聞えあらむいと聞きにくかるべしと

おぼし弟子どもゝいひて人に聞かせじとかくす。僧都「いてあなかまだいとこたち、われ無慚の法師にて忌むことの中に破る戒は多からめど女のすぢにつけてまだそしり取らず過つことなし。齡六十にあまりて今更に人のもどきおはむはさるべきにこそはあらめ」とのたまへば、「善からぬ人のびんなくいひなし侍る時には佛法のきずとなり侍ることなり」と心よからず思ひていふ。「このずほふの程にしるし見えずは」といみじき事どもを誓ひ給ひて夜一夜加持し給へる曉に人にかりうつして「何やうの物かく人を惑はしたるぞ」と、有樣ばかりいはせまほしうて、弟子の阿闍梨とりどりに加持し給ふ。月比はいさゝかも顯れざりつるものゝけ調ぜられて「おのれはまゝまでまうで來てかく調ぜられ奉るべき身にもあらず。昔は行ひせし法師の いさゝかなる世に恨を留めて漂ひありきしほどに、よき女のあまた住み給ひし所にすみつきてかたへは失ひてしに、この人は心と世を恨み給ひて 我いかで死なむといふことをよるひるのたまひしにたよりを得ていと暗き夜一人ものし給ひしをとりてしなり。されど觀音とざまかうざまにはぐゝみ給ひければこの僧都にまけ奉りぬ。今はまかりなむ」とのゝしる。「かくいふは何ぞ」と問へば、つきたる人物はかなきけにや、はかばかしくもいはず、さうじみの心地はさはやかに聊物覺えて見まはしたれば、一人見し人の顏はなくて皆老法師ゆがみ衰へたるものゝみ多かれば、知らぬ國に來にける心ちしていとかなし。ありし世の事思ひ出づれど、住みけむ所誰といひし人とだにたしかにはかばかしうも覺えず。唯、我はかぎりとて身を投げし人ぞかし、いづくに來にけるにかとせめて思ひ出づればいと

いみじと物を思ひなげきて皆人の寢たりしに妻戸を放ちて出でたりしに風烈しう川波も荒う聞えしを一人物恐しかりしかばきしかたゆくさきも覺えずすのこの端に足をさしおろしながら行くべき方も惑はれて、歸り入らむも中空にて心強くこの世にうせなむと思ひたちしををこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何もくひて失ひてよといひつゝつくづくと居たりしを、いと淸げなる男のよりきて、いざたまへおのがもとへといひて抱く心ちのせしを、宮と聞えし人のし給ふと覺えしほどより心惑ひにけるなめり、知らぬ所にすゑおきてこの男は消え失せぬと見しを、遂にかくほ意のごともせずなりぬると思ひつゝいみじう泣くと思ひしほどに、その後の事は絶えていかにもいかにもおぼえず、人のいふを聞けば多くの日比も經にけり、いかに憂きさまを知らぬ人にあつかはれ見えつらむとはづかしう遂にかくて生きかへりぬるかと思ふも口惜しければいみじおぼえてなかなかしづみ給へる日比はうつしごゝろもなきさまにて物いさゝか參ることもありつるを露ばかりの湯をだにまゐらず。「いかなればかくたのもしげなくのみはおはするぞ。うちはへぬるみなどし給へることはさめ給ひてさはやかに見え給へば嬉しう思ひ聞ゆるを」となくなくたゆむをりなくそひ居てあつかひ聞え給ふ。ある人々もあたらしき御さまかたちを見れば心を盡してぞ惜みまもりける。心には猶いかで死なむとぞ思ひわたり給へど、さばかりにていきとまりたる人の命なればいとしふねくてやうやう頭もたげ給へば物まゐりなどし給ふにぞなかなかおも瘦せもて行きいつしかと嬉しう思ひ聞ゆるに「尼になし給ひてよ。さてのみなむ生くやうも

あるべきことのたまへば、いとほしげなる御さまをいかでかさはなし奉らむとて唯いたゞきばかりをそぎ五戒ばかりをうけさせ奉る。心もとなけれどもとよりをれをれしき人の心にて、えさかしく強ひてものたまはず。僧都は「今はかばかりにていたはりやめ奉り給へ」といひ置きてのぼり給ひぬ。夢のやうなる人を見奉るかなと尼君は喜びて せめておこしすゑつゝみぐし手づからけづり給ふ。さばかりあさましう引きゆひてうちやりつれど、いたうも亂れず。ときはてたればつやつやとけうらなり。一年たらぬつくも髮多かる所にて目もあやにいみじき天人の天降れるを見たらむやうに思ふも あやふき心ちすれど「なぞかいと心うくかばかりいみじく思ひ聞ゆるに御心を隔てゝは見え給ふ。「いづくに誰と聞えし人の、さる所にはいかで坐せしぞ」とせめて問をいと恥かしと思ひて「怪しかりし程に皆忘れたるにやあらむ、ありけむさまなども更に覺え侍らず。たゞほのかに思ひ出づる事とてはたゞいかでこの世にあらじと思ひつゝ夕暮ことに端近くてながめし程に前近く大きなる木のありし下より人の出できて率て行く心地なむせし。それより外の事は 我ながら誰とも得思ひ出でられ侍らず」といとらうたげにいひなして「世の中に猶ありけりといかで人に知られじ。聞きつくる人もあらばいといみじうこそ」とて泣い給ふ。あまり問ふを苦しとおぼしたれば得問はず。かぐや姬を見つけたりけむ竹取の翁よりも珍しき心ちするに、いかなる物のひまに消え失せむとすらむとおづ心なくぞおぼしける。このあるじもあてなる人なりけり。むすめの尼君は上達部の北の方にてありけるが、その人なくなり給ひて後 娘唯一人をいみじくかしづ

きてよき君達を聟にして思ひあつかひけるを、その娘の君のなくなりにければ心うしいみじと思ひ入りてかたちをもかへかゝる山里には住み始めたるなりけり。世と共に戀ひわたる人のかたみにも思ひよそへつべからむ人をだに見出でゝしがなとつれづれと心ぼそきまゝに思ひ歎きけるを、かく覺えぬ人のかたちけはひも勝りざまなるをえたればうつゝの事とも覺えず、あやしき心地しながらうれしと思ふ。ねびにたれどいと淸げによしありて有樣もあてはかなり。昔の山里よりは水のおともなごやかなり。作りさまゆゑある所の木立おもしろくぜんざいなどもをかしくゆゑを盡したり。秋になりゆけば空の氣色も哀なるを、門田の稻刈るとて所につけたる物まねびしつゝ若き女どもは歌謠ひ興じあへり。ひたひきならす音もをかしく見し東路などの事なども思ひ出でられて、かの夕霧の御息所の坐せし山里よりは今少し入りて山にかたかけたる家なれば、松蔭しげく風の音もいと心細きにつれづれと行ひをのみしつゝいつとなくしめやかなり。尼君ぞ月などあかき夜はきんなど彈き給ふ。少將の尼君などいふ人は琵琶彈きなどしつゝ遊ぶ。「かゝるわざはし給ふや。つれづれなるに」などいふ。昔もあやしかりける身にて心のどかにさやうの事すべき程もなかりしかば、聊をかしきさまならずもおひ出でにけるかなとかくさだ過ぎにける人の心をやるめるをりをりにつけては思ひ出づ。猶あさましくものはかなかりけるとわれながら口惜しければ手ならひに、

「身をなげし淚の河のはやき瀨をしがらみかけてたれかとゞめし」。思の外に心うければ

行く末もうしろめたくうとましきまで思ひやらる。月のあかき夜な夜なおい人どもはえんに歌よみいにしへ思ひ出でつゝさまざまの物語などするにいらふべき方もなければつくづくとうちながめて、

「われかくてうき世の中にめぐるとも誰かはしらむ月のみやこに」。今はかぎりと思ひし程は戀しき人多かりしかどこと人々はさしも思ひ出でられず。唯親いかに惑ひ給ひけむ、乳母よろづにいかで人なみになさむと思ひいられしをいかにあへなき心ちしけむ、いづこにあらむ我が世にあるものとはいかでか知らむ。同じ心なる人もなかりしまゝに萬隔つる事なく語らひ見なれたりし右近などもをりをりは思ひ出でらる。若き人のかゝる山里に今はと思ひたへ籠るは難きわざなりければ唯いたく年經にける尼七八人ぞ常の人にてはありける。それらがむすめうまごやうのものども京に宮仕するもことざまにてあるも時々ぞ來通ひける。かやうの人につけて見しわたりにいき通ひおのづから世にありけりと誰にも誰にも聞かれ奉らむこと いみじく恥かしかるべし。いかなるさまにてさすらへけむなど思ひやり萬怪しかるべきを思へば、かゝる人々にかけても見えず。たゞ侍從こもきとて尼君のわが人にしたりける二人をのみぞこの御方にいひわけたりける。みめも心ざまも昔見しみやこ鳥に似たることなし。何事につけても世の中にあらぬ所はこれにやあらむとぞかつは思ひなされける。かくのみ人に知られじと忍び給へば誠に煩しかるべきゆゑある人にも物し給ふらむとて委しき事、ある人々にも知らせず。尼君の昔の婿の君今は中將にて物し給ひ

ける、弟の禪師の君僧都の御許にものし給ひける。山ごもり志たるをとぶらひにはらからの君だち常にのぼりけり。横川に通ふ道のたよりによせて中將こゝにおはしたり。さきうちおひてあてやかなる男の入り來るを見出して忍びやかにて坐せし人の御有様けはひぞさやかに思ひ出でらるゝ。これもいと心細き住ひのつれづれなれど住みつきたる人々は物清げにをかしう志なして、垣ほに植ゑたるなでしこもおもしろく女郎花桔梗など咲きはじめたるに色々の狩衣姿のをのこどもの若きあまたして君も同じさう束にて南面に呼びすゑたればうちながめて居たり。年廿七八のほどにてねびとゝのひ心地なからぬさまもてつけたり。尼君さうじ口に几帳立てゝ對面し給ふ。まづうち泣きて「年比のつもりには過ぎにし方いとゞけどほくのみなむ侍るを山里のひかりに猶待ち聞えさすることのうち忘れずやみ侍らぬを、かつはあやしく思ひ給ふるゝとのたまへば心の中あはれに「過ぎにし方の事ども思ひ給へられぬ折なきをあながちにすみはなれ顔なる御有樣に怠りつゝなむ、山ごもりもうらやましう常に出でたち侍るを同じくばなど慕ひまどはさるゝ人々に妨げらるゝやうに侍りてなむ、今日は皆省きすてゝ物し侍りつる」とのたまふ。「山ごもりの御うらやみはなかなか今やうだちたる御物まねびになむ。昔をおぼし忘れぬ御心ばへも世になびかせ給はざりけるとおろかならず思ひ給へらるる折多く」などいふ。人々にすゐばんなどやう物のくはせ君にもはすのみなどやうの物出したればなれにしあたりにてさやうの事もつゝみなき心地して村雨の降り出づるに留められて物語志めやかに志給ふ。いふかひなくなりにし人よりも

この君の御心ばへなどの いと思ふやうなりしを、よそのものに思ひなしたるなむ いと悲しき。など忘れがたみをだに留め給はずなりにけむと戀ひ忍ぶ心なりければ、たまさかにかく物し給へるにつけても珍しく 哀に覺ゆべ かめるまゝに 問はずがたりもおいでつべし。姫君はわれは我と思ひ出づる方多くてながめ出し給へるさま いとうつくし。白きひとへのいとなさけなくあざやぎたるに 袴もひはだ色に習ひたるにや、光も見えず黑きを着せ奉りたればかゝる事どもゝ見しには變りてあやしうもあるかなと思ひつゝ こはごはしういらゝぎたるものども着給へるしも いとをかしき姿なり。御前なる人々「故姫君のおはしまいたる心ちのみし給ふに、中將殿をさへ見奉ればいとあはれにこそ。同じくば昔のさまにておはしまさせばや。いとよき御あはひならむかし」といひあへるを、あないみじや、世にありていかにもいかにも人に見えむこそ。それにつけてぞ昔の事思ひ出でらるべき、さやうのすぢは思ひ絶えて忘れなむと思ふ。尼君入り給へるまにまらうと雨の氣色を見煩ひて少將といひし人の聲を聞き知りて呼びよせ給へり。「昔見し人々は皆こゝに物せらるらむやと思ひながらもかう參り來ることもかたくなりにたるを、心あさきにや、誰もたれもみなし給ふらむ」などのたまふ。仕うまつりなれにし人にて哀なりし昔の事ども思ひ出でたる序に「かの廊のつま入りつるほど風さわがしかりつるまぎれに簾垂のひまよりなべてのさまにはあるまじかりつる人のうちたれ髮の見えつるは 世をそむき給へるあたりに誰ぞとなむ見驚かれつる」とのたまふ。姫君の立ち出で給へりつるうしろでを見給へりけるなめりと思ひて、ましてこまかに

見せたらば心とまり給ひなむかし、昔の人はいとこよなく劣り給へりしをだに まだ忘れ難く思ひ給ふめるをと心ひとつに思ひて「過ぎにし御事を忘れ難く慰めかね給ふめりし程に、覺えぬ人を得奉り給ひて明暮の見物に思ひ聞え給ふめるをうち解け給へる御有樣をいかで御覽じつらむ」といふ。かゝる事こそはありけれとをかしくて、何人ならむ、げにいとをかしかりつとほのかなりつるをなかなか思ひ出づ。こまかに問へどその儘にもいはず。「おのづから聞しめしてむ」とのみいへどうちつけに問ひ尋ねむもさま惡しき心地して「雨も止みぬ。日も暮れぬべし」といふにそゞのかされて出で給ふ。前近き女郎花を折りて「なにゝほふらむ」と口ずさみて獨りごち立てり。「人の物いひをさすがにおぼし咎むるこそ」など、こだいの人どもは物めでをしあへり。「いと淸げにあらまほしくもねびまさり給ひにけるかな。同じくば昔のやうにても見奉らばや」とて、藤中納言の御あたりには絕えず通ひ給ふやうなれど、心も留め給はず、親の殿がちになむ物し給ふとこそいふなれ」と尼君ものたまひて「心憂く物をのみおぼし隔てたるなむいとつらき。今は猶さるべきなめりとおぼしなして はればれしくもてなし給へ。この五年六年時の間も忘れず、戀し悲しと思ひつる人のうへもかく見奉りて後よりはこよなく思ひ忘れにて侍る。思ひ聞え給ふべき人々世におはすとも今は世になきものにこそはやうやうおぼしなりぬらめ。萬の事さしあたりたるやうにはえしもあらぬわざになむ」といふにつけてもいとゞ淚ぐみて「隔て聞ゆる心は侍らねど、怪しくていきかへりける程に萬の事夢のやうにたどられてあらぬ世に生れたらむ人はかゝる心地すらむと

覺え侍れば、今は知るべき世にあらむとも思ひ出でず、ひたみちにこそむつまじく思ひ聞ゆれ」とのたまふさまもげに何心なくうつくしくうち笑みてぞまもり居給へる。中將は山におはし着きて、僧都もめづらしがりて世の中の物語し給ふ。その夜はとまりて聲たふとき人々に經などよませて夜一夜あそび給ふ。禪師の君こまかなる物語などするついでに「小野に立ち寄りて物哀にもありしかな。世を捨てたれど猶さばかりの心ばせある人こそ見えつれ。あらはなりとや思ひつらむ、立ちてあなたに入りつるうしろでなべての人とは見えざりつ。さやうの所によき女は置きたるまじきものにこそあめれ。明暮見るものは法師なり。おのづからめなれて覺ゆらむ。不便なることぞかし」とのたまふ。禪師の君「この春初瀬に詣でゝ怪しく見出でたる人となむ聞き侍りし」とて見ぬことなればこまかにはいはず。「哀なりけることかな、いかなる人にかあらむ。世の中を憂しとてぞさる所には隱れ居けむかし。昔物語の心地もするかな」とのたまふ。またの日歸り給ふにも「過ぎがたくなむ」とておはしたり。さるべき心づかひしたりければ昔思ひ出でたる御まかなひの少將の尼なども袖口さまことなれどもをかし。いとゞいやめに尼君はものし給ふ。物語のついでに「忍びたるさまに物し給ふらむは誰にか」と問ひ給ふ。わづらはしけれどほのかにも見つけ給ひでけるをかくし顏ならむもあやしとて、「忘れ侘び侍りていとゞ罪深うのみ覺え侍りつるなぐさめにこの月比見給ふる人になむ。いかなるにか、いと物思しげきさまにて世にありと人に知られむ事

を苦しげに思ひて物せらるれば、かゝる谷の底には誰かは尋ね聞えむと思ひつゝ侍るを、いかでかは聞き顯させ給ひつらむ」といらふ。「うちつけ心ありて參り來むにだに山深き道のかごとは聞えつべし。ましておぼしいそふらむ方につけては、ことごとに隔て給ふまじきことにこそは。いかなるすぢに世を恨み給ふ人にか、慰め聞えばや」などゆかしげにのたまふ。いで給ふとてたゝうがみに、

「あだしのゝ風になびくな女郎花われしめゆはむ道とほくとも」と書きて少將の尼して入れたり。尼君も見給ひて「この御かへり書かせ給へ。いと心にくきけつき給へる人なればうしろめたくもあらじ」とそゝのかせば「いとあやしき手をばいかでか」とて更に聞き給はねばはしたなきことなりとて「尼君聞えさせつるやうに世づかず人に似ぬ人にてなむ。

うつしうゑて思ひみだれぬをみなへしうき世をそむく草の庵に」とあり。こたみはさもありぬべしと思ひゆるして歸りぬ。文などわざとやらむもさすがにうひうひしう、ほのかに見しさまは忘れず物思ふらむすぢ何事と知らねどあはれなれば八月十日あまりのほどに小鷹狩のついでにおはしたり。例の尼呼び出でゝ「一目見しより靜心なくて」などのたまへり。いらへ給ふべくもあらねば尼君「まつちの山のとなむ見給ふる」といひ出し給ふ。對面し給へるにも「心苦しきさまにて物し給ふと聞き侍りし人の御上なむのこりゆかしく侍る。何事も心にかなはぬ心地のみし侍れば山住もしはべらまほしき心ありながらゆるい給ふまじき人々に思ひさはりてなむ過し侍るに、世に心ちよげなる人のうへはかくくしたる人の心

からにやふさはしからずなむ。物思ふらむ人に思ふ事を聞えばや」など心留めたるさまに語らひ給ふ。「心ちよげならぬ御願は聞えかはし給はむに、つきなからぬさまになむ見え侍れど。例の人にてはあらじといとうたゝあるまで世を恨み侍るめれば、のこり少なき齢の人だに今はとそむき侍る時はいと物心ぼそく覺え侍りしものを、世をこめたる盛にては遂にいかゞとなむ見給へ侍る」とおやがりていふ。「入りてもなさけなし。猶聊にても聞え給へ。かゝる御住ひはすゞろなることも哀知るこそ世の常のことなれ」などこしらへていへど「人に物聞ゆらむ方も知らず。何事もいふかひなくのみこそ」といとつれなくて臥し給へり。「まらうどはいづらあなこゝろう、秋を契れるはすかし給ふにこそありけれ」など、うらみつゝ、

「松むしの聲をたづねてきつれどもまたをぎはらの露にまどひぬ」。「あないとほし。これをだに」などせむれば、さやうに世づいたらむこといひ出でむもいと心うく又いひそめてはかやうの折々にせめられむもむつかしう覺ゆればいらへをだにし給はねば、あまりいふかひなく思ひあへり。尼君はやうは今めきたる人にぞありけるなごりなるべし。

「秋の野の露わけきたるかりごろもむぐらしげれる宿にかこつな」となむ煩はしがり聞え給ふめる」といふをうちにも猶かく心より外に世にありと知られはじむるをいと苦しとおぼす。心の內をば知らで男君をもあかず思ひ出でつゝ戀ひわたる人々なれば「かくはかなきついでにもうち語らひ聞え給はむに、心より外に世にうしろめたくは見え給はぬものをよのつねなるすぢはおぼしかけずともなさけなからぬほどに御いらへはかりは聞え給へか

し」などひきうごかしつべくいふ。さすがにかゝる古代の心どもにはありつかず今めきつゝ腰折歌このましげにわかやぐ氣色どもは いとうしろめたう覺ゆ。限りなく憂き身なりけりと見はてゝし命さへあさましう長くていかなるさまに さすらふべきならむ。ひたぶるになきものと人に見聞き捨てられてもやみなばやと思ひふし給へるに、中將は大方物思はしきことのあるにや、いといたううち歎きつゝ忍びやかに笛を吹きならして「鹿の鳴く音に」などひとりごつけはひまことに心地なくはあるまじ。「過ぎにしかたの思ひ出でらるゝにもなかなか心づくしに今はじめて哀とおぼすべき人はたかたげなれば見えぬ山路にもえ思ひなすまじうなむ」と恨めしげにて出でなむとするに、尼君「などあたら夜を御覧じさしつる」とてゐざり出でたまへり。「なにかをちなる里も試み侍りぬれば」などいひすさみていたうすきがましからむもさすがに便なし。いとほのかに見えしさまの目とまりしばかりにつれづれなる心なぐさめに思ひ出づるに、あまりもてはなれ奥深げなるけはひも所のさまにはあはずすさまじと思へば歸りなむとするを笛の音さへあかず、いとゞおぼえて、

「ふかき夜の月をあはれと見ぬ人や山の端ちかき宿にとまらぬと、なまかたはなることをかくなむ聞え給ふ」といふに心ときめきして、

「山のはに入るまで月をながめみむねやのいたまもしるしありやと」などいふにこの大尼君笛の音をほのかに聞きつけたりければさすがにめでゝ出で來たり。此所彼所うちしはぶき淺ましきわなゝき聲にて なかなか昔の事などもかけていはず。誰とも思ひわかぬなる

べし。「いでそのきんのこと彈き給へ。橫笛は月にはいとをかしきものぞかし。いづらくそたち琴とりて參れ」といふにそれなめりと推し量りに聞けど、いかなる所にかゝる人いかでこもり居たらむ。定めなき世ぞこれにつけて哀なる。ばんしきでうをいとをかしく吹きて「いづらさらば」とのたまふ。むすめの尼君これもよきほどのすきものにて「昔聞き侍りしよりもこよなく覺え侍るは山風をのみ聞きなれ侍りにける耳からにや」とて「いでやこれは僻事になりて侍らむ」といひながらひく。今やうはをさをさなべての人の今は好まずなり行くものなればなかなか珍しく哀に聞ゆ。松風もいとよくもてはやす。吹き合せたる笛の音に月もかよひてすめる心地すればいよいよめでられて宵惑もせず起き居たり。「おうなは昔はあづまごとをこそはこともなく彈き侍りしかど、今の世には變りにたるにやあらむ、この僧都の聞きにくし念佛より外のあだわざなせそとはしたなめられしかば、何かはとて彈き侍らぬなり。さるはいとよくなることも侍り」といひつゞけていと彈かまほしと思ひたればいと忍びやかにうち笑ひて「いとあやしき事をせいし聞え給ひける僧都かな。極樂といふなる所には菩薩なども皆かゝる事をして天人なども舞ひ遊ぶこそたふとかなれ。行ひまぎれ罪得べきことかは。今夜聞き侍らばや」とすかせばいとよしとおもひて「いでとのもりのくそ、あづまとりて」といふにもしはぶきは絕えず。人々は見苦しと思へど僧都をさへうらめしげに憂へていひ聞かすればいとほしくてまかせたり。取りよせて只今の笛の音をも尋ねず唯おのが心をやりてあづまの調べをつきさはやかにしらふ。皆こと物は聲やめつるをこれをのみ

めでたると思ひてたけふぢ、ちりちりたりたな（缺る）など掻き返しはやりかに彈きたることばどもわりなくふるめきたり。「いとをしう今の世に聞えぬ言葉こそは彈き給ひけれ」と譽むれば、み〻ほのぼのしく傍なる人に問ひ聞きて「今やうの若き人はかやうの事をぞ好まれざりける。此所に月比物し給ふなる姫君かたちはきよらに物し給ふめれど、もはらか〻るあだわざなどし給はず、うもれてなむ物し給ふめる」と、我かしこにうちあざわらひて語るを、尼君などはかたはらいたしとおぼす。これに事皆さめて歸り給ふほども山おろし吹きて聞え來る笛の音いとをかしう聞えて起きあかしたり。つとめて「よべはかたがた心亂れ侍りしかば急ぎまかで侍りし。

忘られぬむかしの事も笛竹のつらきふしにもねぞなかれける。猶少しおぼし知るばかり敎へなさせ給へ。忍ばれぬべくはすきずきしきまでも何かは」とあるをいとゞ侘びたるは涙とゞめがたげなる氣色にて書き給ふ。

「笛の音にむかしのことも忍ばれてかへりしほども袖ぞぬれにし。あやしう物思ひ知らぬにやとまで見え侍る有樣はおい人の問はずがたりにも聞しめしけむかし」とあり。珍しからぬも見所なき心ちしてうちおかれけむかし。荻の葉に劣らぬ程々に音づれわたる、いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにしをりをりもやうやう思ひ出づるま〻に「猶か〻るすぢのこと人にも思ひはなたすべきさまに疾くなし給ひてよ」とて經習ひて讀み給ふ。心のうちにも念じ給へり。かくよろづにつけて世の中を思ひ捨

つれば若き人とてをかしやかなることも殊になく、むすぼゝれなる本性なめりと思ふ。かたちの見るかひあり美しきに萬の咎見ゆるして明暮の見物にしたり。少しうち笑ひ給ふをりは珍しくめでたきものに思へり。九月になりてこの尼君初瀬にまうづ。年比いと心ぼそき身に戀しき人の上も思ひやまれざりしを、かくあらぬ人とも覺え給はぬなぐさめを得たれば、觀音の御しるしうれしとてかへり申しだちて詣で給ふなりけり。「いざ給へ。人やは知らむとする。同じ佛なれどさやうの所に行ひたるなむしるしありてよきためし多かる」とそゝのかしたつれど、昔母君乳母などかやうにいひ知らせつゝ度々詣でさせしをかひなきにてこそあめれ、命さへ心にかなはずたぐひなきいみじきめを見るはと、いと心憂きうちにも知らぬ人に具してさる道のありきをしたらむよとそら恐しくおぼゆ。心ごはきさまにはいひもなさで心地のいと惡しうのみ侍ればさやうならむ道の程にも、いかゞなどつゝましうなむ」とのたまふ。物おぢはさもし給ふべき人ぞかしと思ひて強ひてもいざなはず。

「はかなくてよにふる川のうきせには尋ねもゆかじふたもとの杉」と手習にまじりたるを尼君見つけて「二本はまたもあひ聞えむと思ひ給ふ人あるべし」とたはふれごとをいひあてたるに胸つぶれておもて赤め給へるもいとあいぎやうづき美しげなり。

「ふる川の杉のもとだち知らねども過ぎにし人によそへてぞ見る」。異なることなきいらへを口疾くいふ。「忍びて」といへど皆人慕ひつゝこゝには人少なにておはせむを心苦しがりて心ばせある少將の尼左衞門とてあるおとなしき人、童ばかりぞ留めたりける。皆出で立

ちけるをながめ出でゝあさましき事を思ひながらも今はいかゞせむとたのもし人に思ふ人一人ものし給はぬは心細くもあるかなと、いとつれづれなるに中將の御文あり。「御覽ぜよ」といへど聞きも入れ給はず。いとゞ人も見えずつれづれときしかた行くさきを思ひくし給ふ。「苦しきまでもながめ給ふかな。御碁うたせ給へ」といふ。「いと怪しうこそはありしか」とはのたまへど、うたむとおぼしたれば盤とりにやりてわれはと思ひてせんせさせ奉りたるにいとこよなければ又手なほしてうつ。「尼上疾う歸らせ給はなむ。この御碁見せ奉らむ。かの御碁ぞいと强かりし。僧都の君早うよりいみじう好ませ給ひてけしうはあらじとおぼしたりしを、いときせいだいとこになりてさし出でゝこそうたざらめ。御碁に負けじかし」と聞え給ひしに遂に僧都なむ二つ負けさせ給ひし。「きせいが碁にはまさらせ給ふべきなめり。あないみじ」と興ずれば、さだすぎたるあまびたひの見つかぬに物ごのみするに、むつかしき事も志そめてけるかなと思ひて「心地あし」とて臥し給ひぬ。時々「はればれしうもてなしておはしませ。あたら御身をいみじう沈みてもてなさせ給ふこそ口惜しく玉に瑕あらむ心地し侍れ」といふ。夕暮の風の音も哀なるに思ひ出づる事多くて、

「こゝろには秋の夕をわかねどもながむる袖につゆぞみだるゝ」。月さし出でゝをかしき程に晝文ありつる中將おはしたり。あなうたて、こはなぞと覺え給へば、奥深く入り給ふを、「さもあまりにもおはします物かな。御志のほども哀まさる折にこそ侍るめれ。ほのかにも聞え給はむことも聞かせ給へ。志みつかむ事のやうにおぼしたるこそ」などいふに、いとう

しろめたくおぼゆ。おはせぬよしをいへど薫の使の一所など問ひ聞きたるべし。いとこと多く恨みて「御聲も聞き侍らじ。唯け近くて聞えむことを聞きにくしともおぼしことわれ」とよろづにいひ侘びて「いと心うく所につけてこそ物の哀もまされ。あまりかゝるは」などあばめつゝ、

「山里のあきの夜ふかきあはれをも物思ふ人はおもひこそ知れ。おのづから御心も通ひぬべきを」などあれば、「尼君おはせでまぎらはし聞ゆべき人も侍らず。いと世づかぬやうならむ」とせむれば、

「うきものと思ひも知らですぐす身を物思ふ人とひとは知りけり」。わざといふともなきを聞きて傳へ聞ゆればいと哀と思ひて「猶唯聊いで給へ」と聞えうごかせど、この人々をわりなきまで恨み給ふ。「怪しきまでつれなくぞ見え給ふや」とて入りて見れば、例はかりそめにもさし覗き給はぬ老人の御方に入り給ひにけり。あさましう思ひて「かくなむ」と聞ゆれば「かゝる所にながめ給ふらむ心の中の哀に大かたの有樣なども情なかるまじき人の、いとあまり思ひ知らぬ人よりもけにもてなし給ふめるこそ、それも物ごりし給へるが猶いかなるさまに世を恨みていつまでおはすべき人ぞ」など有樣問ひていとゆかしげにのみおぼいたれど、「こまかなる事はいかでかは言ひ聞かせむ。唯知り聞え給ふべき人の年比はうとうとしきやうにて過ぐし給ひしを、初瀬に詣うであひ給ひて尋ね聞え給へる」とぞいふ。姫君はいとむつかしとのみ聞く。おい人のあたりにうつぶしふしていも寝られず、よひまどひは

えもいはずおどろおどろしきいびきしつゝ、前にもうちすがひたる尼ども二人臥して、劣らじといびきあはせたり。いとおそろしう今宵この人々にやくはれなむと思ふも惜しからぬ身なれど、例の心よわさは一つ橋危がりて歸り來たりけむもののやうに侘しく覺ゆ。こもき共にゐておはしつれど色めきてこの珍しき男のえんだち居たる方に歸りいにけり。今やくるくると侍ち居給へれどいとはかなきたのもし人なりや。中將いひ煩ひて歸りにければ、「いと情なくうもれてもおはしますかな。あたら御かたちを」など譏りて皆一所にねぬ。夜中ばかりにやなりぬらむと思ふ程に尼君しはぶきおぼゝれて起きにたり。火影に頭つきはいとしろきに黑きものをかづきてこの君の臥し給へるを怪しがりて、鼬とかいふなるものがさるわざする額に手をあてゝ、「あやし、これは誰ぞ」としふねげなる聲にて見おこせたる、更に只今くひてむとするぞと覺ゆる。鬼のとりもて來けむほどは物覺えざりければなかなか心やすし。いかさまにせむと覺ゆるむつかしさにもいみじきさまにて生き返り人になりて又ありしいろいろのうき事を思ひ亂れ、むつかしとも恐しとも物を思ふよ、死なましかばこれよりも恐しげなるものゝ中にこそはあらましと思ひやらる。昔よりの事をまどろまれぬまゝに常よりも思ひつゞくるにいと心うく、親と聞えけむ人の御かたちも見奉らず、遙なるあづまをかへるがへる年月をゆきてたまさかにたづねよりて嬉したのもしと思ひ聞えしはらからの御あたりも思はずにてたゞすぎ、さる方に思ひ定め給ひし人につけてやうやう身の憂さをも慰めつべききはめに、あさましうもてそこなひたる身を思ひもて行けば、宮を少

しも哀と思ひ聞えけむ心ぞいとけしからぬ、唯この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば小島の色をためしに契り給ひしを、などてをかしと思ひ聞えけむと、こよなくあきにたる心ちす、初めよりうすきながらも長閑に物し給ひし人はこのをりかのをりなど思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられ奉らむ恥しさは人よりまさりぬべし、さすがにこの世にはありし御樣をよそながらだに何時かは見むとするとうち思ふ。なほわろの心やかくだに思はじなど心ひとつをかへさふ。辛うじて鳥のなくを聞きて いとうれし、母の御聲を聞きたらむはましていかならむと思ひ明して心ちもいとあし。供にて渡るべき人も頓に來ねば、猶臥し給へるにいびきの人はいとゝく起きて、かゆなどむつかしき事どもをもてはやして御前に「とく聞し召せ」など寄り來ていへど、まかなひもいと心づきなくうたて見知らぬ心ちして 惱しくなどことなし給ふを強ひていふもいとこちなし。げすげすしき法師ばらなど數多來て「僧都今日おりさせ給ふべし。など俄には」と問ふなれば、「一品宮の御物のけに惱ませ給ひける。山の座主御修法仕らせ給へど猶僧都參らせ給はではしるしなしとて昨日二度なむ召し侍りし。左大臣殿の四位少將、よべ夜更けてなむ上り坐しまして后の宮の御文など侍りければおりさせ給ふなり」などいと花やかにいひなす」恥しくとも逢ひて尼になし給ひてよといはむ、さかしら人少くてよき折にこそと思へば起きて「心地のいと惡しうのみ侍るを、僧都のおりさせ給へらむに忌む事うけ侍らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞え給へ」と語らひ給へばぼけぼけしううちうなづく。例の方に坐して髮は尼君のみ

けづり給ふを、ことびとに手觸れさせむもうたて覺ゆるに、手づからはたえせぬことなれば唯少し解きくだして、親に今一度かうながらのさまを見えずなりなむこそ人やりならずいと悲しけれ。いたう煩ひしけにや、髮も少し落ちほそりにたる心ちすれど何ばかりも衰へず、いと多くて六尺ばかりなる末などぞいと美しかりける。すぢなどもいとこまかに美しげなり。「かゝれとてしも」とひとりごち居給へり。暮方に僧都ものし給へり。南面拂ひしつらひてまろなる頭つきども行きちがひ騷ぎたるも例に變りていと恐しき心ちす。「母の御方に參り給ひていかにぞ月比は」などいふ。「東の御方は物詣し給ひにきとか、このおはせし人は猶物し給ふや」など問ひ給ふ。「しかこゝに泊りてなむ、心地惡しとこそ物し給ひて忌む事うけ奉らむとのたまひつる」と語る。立ちてこなたにいまして「爰にやおはします」とて几帳のもとについゐ給へばつゝましけれどゐざりよりていらへし給ふ。「不意にて見奉りそめてしもさるべき昔の契りありけるにこそと思ひ給へて御いのりなどねんごろに仕うまつりしを法師はその事となくて御文聞え承らむも便なければ、じねんになむおろかなるやうになり侍りぬる。いとあやしきさまに世を背き給へる人の御あたりにいかでおはしますらむ」とのたまふ。「世の中に侍らじと思ひ立ち侍りし身のいと怪しくて今まで侍るを、心憂しと思ひ侍るものから萬に物せさせ給ひける御心ばへをなむ、いふかひなき心ちにも思ひ給へ知らるゝを、猶世づかずのみ遂に得とまるまじく思ひ給へらるゝを、尼になさせ給ひてよ、世の中に侍るとも例の人にて長らふべくも侍らぬ身に」など聞え給ふ。「まだいと行く先遠げな

る御程にいかでかはひたみちにしかはおぼしたゝむ、かへりて罪ある事なり。思ひたちて心を起し給ふ程は強くおぼせど、年月經れば女の御身といふものいとたいだいしきものになどのたまへば「幼く、侍りし程より物をのみ思ふべき有樣にて、親なども尼になしてや見ましなどなむ思ひのたまひし。まして少し物思ひ知りて後は例の人ざまならで後の世をだにと思ふ心深く侍りしを、なくなるべき程のやうやう近くなり侍るにや、心ちのいと弱くのみなり侍るを猶いかで」とてうち泣きつゝのたまふ。怪しくかゝるかたち有樣をなどて身を厭はしく思ひはじめ給ひけむ、ものゝけもさこそいふなりしかと思ひあはするに、さるやうこそはあらめ、今まで生きたるべき人かは、惡しきものゝ見つけそめたるにいと恐しく危き事なりとおぼして「とまれかくまれおぼし立ちてのたまふを三寶のいとかしこくほめ給ふことなり。法師にて聞え返すべき事にあらず。御忌むことはいと易く授け奉るべきを急なることにて罷出たれば今宵はかの宮に參るべく侍り。明日よりや御修法はじまるべく侍らむ。七日はてゝまかでむに仕うまつらむ」とのたまへば、かの尼君おはしなば必ずいひ妨げてむといと口惜しくて、みだり心地あしかりし程にしたるやうにて「いと苦しく侍れば重くならば忌むことかひなくや侍らむ。猶今日は嬉しき折とこそ思ひ侍れ」とていみじく泣き給へば聖心にいといとほしく思ひて「夜や更け侍りぬらむ。山よりおり侍ること昔はこととも覺え給はざりしを、年の老ゆるまゝには堪へ難く侍りければうち休みて内には參らむと思ひ侍るを、しかおぼし急ぐことなれば今日仕うまつりてむ」とのたまふにいと嬉しくなりぬ。鋏とりて櫛の

箱の蓋さし出でたれば、「いづら大徳達こゝに」と呼ぶ。初め見つけ奉りし二人ながら共にありければ呼び入れて「御髮おろし奉れ」といふ。げにいみじかりし人の御有樣なればうつし人にては世におはせむもうたてこそあらめとこの阿闍梨もことわりに思ふに、几帳の帷子のほころびより御髮をかきいだし給へるがいとあたらしくをかしげなるになむ、しばしは鋏をもてやすらひける。かゝに程少將の尼は、せうとの阿闍梨の來たるにあひてしもに居たり、左衞門はこのわたくしの知りたる人にあへしらふとて、かゝる所につけては皆とりどりに心よせの人々珍しくて出で來たるに、はかなき事しけるみいれなどしける程に、こもき一人してかゝる事なむと少將の尼に告げたりければ惑ひて來て見るに、我が御上の衣袈裟などをことさらばかりとて着せ奉りて「親の御方を拜み奉り給へ」といふに、いづかたとも知らぬほどなむ得忍びあへ給はで泣き給ひにける。「あなあさましや。などかくあうなき事はせさせ給ふ。上かへりおはしてはいかなる事をのたまはせむ」といへど、かばかりにしそめつるをいひ亂るともものしと思ひて僧都諫め給へばよりてもえ妨げず。流轉三界中などいふにもたちはてゝし物をと思ひ出づるもさすがなりけり。御髮もそぎ煩ひて「のどやかに尼君だちしてなほさせ給へ」といふ。ひたひは僧都ぞそぎ給ふ。「かゝる御かたちやつし給ひてくひ給ふな」など尊き事ども說き聞かせ給ふ。とみにせさせ給ふべくもあらず、皆いひ知らせ給へることを嬉しくもしつるかなとこれのみぞ生ける佛はしるしありて覺え給ひける。皆人々いでしづまりぬ。夜の風の音にこの人々「心ぼそき御住ひもしばしのことぞ、今いと

めでたくなり給ひなむと頼み聞えつる御身をかくしなさせ給ひて、殘り多かる御世の末をいかにせさせ給はむとするぞ、老い衰へたる人だに今はかぎりと思ひはてられて、いと悲しきわざに侍る」といひ知らすれど猶只今は心やすくうれし、世に經べきものとは思ひかけずなりぬるこそはいとめでたきことなれと胸のあきたる心地ぞし給ひける。つとめてはさすがに人の許さぬことなれば變りたらむさま見えむもいと恥しく、髮のすその俄におほどれたるやうにしどけなくさへそがれたるを、むつかしき事どもいはでつくろはむ人もがなと、何事につけてもつゝましくてくらうしなしておはす。思ふことを人にいひつゞけむ言の葉はもとよりだにはかばかしからぬ身を、まいて懷かしくことはるべき人さへなければ唯硯に向ひて思ひあるをりには手習をのみ、たけきことゝは書きつけ給ふ。

「なきものに身をも人をも思ひつゝ捨てゝし世をぞさらにすてつる。今はかくて限りつるぞかし」と書きても猶みづからはいとあはれと見給ふ。

「かぎりぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな」。同じすぢのことをとかく書きすさび居給へるに中將の御文あり。物騷しくあきれたる心地しあへる程にてかゝることなどいひてけり。いとあへなしと思ひてかゝる心深くありける人なりければはかなきいらへをもしそめじと思ひ離るゝなりけり。さてもあへなきわざかな、いとをかしく見えし髮のほどをたしかに見せよと一夜も語らひしかば、さるべからむ折にといひしものをと、いと口惜しくて立ちかへり聞えむかたなきは、

「岸遠くこぎはなるらむあま船に乘りおくれじといそがるゝかな」。例ならずとりて見給ふ。ものゝ哀なるをりに今はと思ふも哀なるものからいかゞおぼさるらむ。いとはかなき物のはしに、

「心こそうき世の岸をはなるれど行くへも知らぬあまのうき木を」例の手習にし給へるをつゝみて奉る。「書きうつしてだにこそ」とのたまへど「なかなか書き損ひ侍りなむ」とてやりつ。珍しきにもいふ方なく悲しくなむ覺えける。物詣の人歸り給ひて思ひ騷ぎ給ふ事かぎりなし。「かゝる身にては進め聞えむこそはと思ひなし侍れど、のこり多かる御身をいかで經給はむとすらむ。おのれは世に侍らむこと今日明日ともしり難きにいかで後ろ安く見おき奉らむとよろづに思ひ給へてこそ佛にも祈り聞えつれ」とふしまろびつゝいといみじげに思ひ給へるにもまことの親のやがてからもなきものと思ひ惑ひ給ひけむ程推し量るぞ先いと悲しかりける。例のいらへもせで背き居給へるさま いと若く美しげなればいと物はかなくぞおはしける。つらき御心なれどなくなく御ぞの事など急ぎ給ふ。鈍色は手なれにしとなれば小袿袈裟などしたり。ある人々もかゝる色を縫ひ着せ奉るにつけてもいと覺えず。嬉しき山里の光と明暮見奉りつるものを、口惜しきわざかなとあたらしがりつゝ僧都を怨みそしりけり。一品宮の御惱げにかの弟子のいひしもしるく、いちしるき事どもありて怠らせ給ひにければ、いよいよいと尊きものにいひのゝしる。名殘もおそろしとて御修法延べさせ給へば、とみにもえ歸り入らで侍ひ給ふに、雨などふりてしめやかなる夜召してよゐに侍

はせ給ふ。日比いたく侍ひごうじたる人は皆休みなどして、御前に人ずくなにて近く起きたる人少きをりに、同じ御帳におはしましてて「昔よりたのませ給ふ中にもこの度なむいよいよ後の世もかくこそはとたのもしき事まさりぬる」などのたまはす。「世の中に久しく侍るまじきさまに佛なども敎へ給へる事ども侍るうちに、今年來年過ぐし難きやうになむ侍りければ、佛をまぎれなく念じつとめ侍らむとて深く籠り侍るを、かゝる仰言にてまかり出で侍りにし」など啓し給ふ。御ものゝけのしうねきこと樣々になのるが恐しきことなどのたまふ序に「いとあやしくけうのことをなむ見給へし。この三月に年老いて侍る母の願ありて初瀨に詣でゝ侍りし、かへさの中やどりに宇治の院といひ侍る所に罷り宿りしを、かくのごと人すまで年經ぬる大なる所は善からぬ物必ず通ひすみて、重き病者のため惡しき事どもやと思ひ給ひしもしるく」とてかの見つけたりし事どもを語り聞え給ふ。「げにいと珍らかなるとかな」とて近く侍ふ人々皆寢入りたるを恐しくおぼされて驚かさせ給ふ。大將の語らひ給ふ宰相の君しもこの事を聞きけり。驚かさせ給ふ人々は何とも聞かず、僧都おぢさせ給ふ御氣色を心もなき事啓してけりと思ひて委しくその程の事をばいひさしつ。「その女人この度罷り出で侍りつる便に小野に侍る尼どもあひとぶらひ侍らむとてまかりよりしに泣く泣くすけの志深きよしねんごろに語らひ侍りしかば頭おろし侍りにき。某が妹故衞門のかみのめの侍りし尼なむうせにし女子のかはりにと思ひ喜び侍りて隨分にいたはりかしづき侍りけるを、かくなりにたればうらみ侍るなり。げにぞかたちはいとうるはしくけうらにて行ひ

やつれむもいとほしげになむ侍りし。何人にか侍りけむ」と物よくいふ僧都にて語りつゞけ申し給へば「いかでさる所によき人をしもとりもていきけむ、さりとも今は知られぬらむ」などこの宰相の君ぞ問ふ。「知らず。さもやと語らひ侍らむ。誠にやんごとなきか人ならば何かくれも侍らじをや。田舍人のむすめもさる樣したるこそは侍らめ。龍の中より佛生れ給はずはこそ侍らめ。たゞ人にては罪輕きさまの人になむ侍りける」など聞え給ふ。その比かのわたりに消え失せにけむ人をおぼし出づ。このお前なる人も姉君のつたへに怪しくてうせたる人とは聞き置きたれば、それにやあらむとは思ひけれど定めなきことなり。僧都もかゝる人世にあるものとも知られじとよくもあらぬかたきだちたる人もあるやうにおもむけてかくし忍び侍るを、事のさまの怪しければけいし侍るなりと、なまがくす氣色なれば人にも語らず「宮はそれにもこそあれ。大將に聞かせばや」とこの人にぞのたまはすれど、いづかたにも隱すべき事を定めて、さならむとも知らずながら耻しげなる人にうち出でのたまはせむもつゝましくおぼしてやみにけり。姫宮をこたりはてさせ給ひて僧都ものぼりぬ。かしこに寄り給へればいみじく恨みて「なかなかかゝる御有樣にて罪も得ぬべきことをのたまひもあはせずなりにけることをなむ、いと怪しき」などのたまへどかひなし。「今は唯御行ひをし給へ、老いたる若き定めなき世なり。はかなきものにおぼしとりたるもことわりなる御身をや」とのたまふにもいと恥しくなむ覺えける。「御法服新しくし給へ」とて綾、羅、衣などいふ物奉りおき給ふ。「某が侍らむかぎりは仕うまつりなむ。なにかおぼし煩ふべき。常なき世に

生ひ出でゝ世間の榮花に願ひまつはるゝかぎりなむ所せく捨てがたく我れも人もおぼすべかめることなめる。かゝる林の中に行ひ勤め給はむ身は何事かはうらめしくも恥しくもおぼすべき。このあらむ命は葉の薄きが如し」といひ知らせて「松門に曉いたりて月徘徊す」と法師なれどいとよしよししう恥しげなるさまにてのたまふ事どもを、思ふやうにもいひ聞かせ給ふかなと聞き居たり。今日はひねもすに吹く風の音もいと心ぼそきにおはしたる人も「あはれ山伏はかゝる日にぞねはなかるなるかし」といふを聞きて、我れも今は山伏ぞかし、ことわりにとまらぬ涙なりけりと思ひつゝ端の方に立ちいでゝ見れば、遙なる軒端より狩衣姿いろいろにたちまじりて見ゆ。山へのぼる人なりとてもこなたの道には通ふ人もいとたまさかなり。黑谷とかいふ方よりありく法師の跡のみまれまれは見ゆるを、例の姿見つけたるはあいなく珍しきに、この恨み侘びし中將なりけり。かひなきこともいはむとて物したりけるを、紅葉のいとおもしろく外の紅にそめましたるいろいろなれば入り來るよりぞ物哀なりける。こゝにいと心ちよげなる人を見つけたらば、怪しくぞ覺ゆべきなど思ひて「暇ありて徒然なる心ちし侍るに、紅葉もいかにと思ひ給ひてなむ。猶立ち返り旅寢もしつべき木のもとにこそ」とて見出し給へり。尼君例の涙もろにて、

「木がらしの吹きにし山のふもとにはたち隱るべき影だにぞなき」とのたまへば、

「まつ人もあらじと思ふ山里のこずゑを見つゝなほぞすぎうき」。いふかひなき人の御ことを猶盡せずのたまひて「さまかはり給へらむを聊見せ給へよ」と少將の尼にのたまふ。

「それをだに契りししるしにせよ」とせめ給へば、入りて見るに、殊更人にも見せまほしきさましてぞおはする。薄鈍色の綾、中にはくわんざうなどすみたる色を着て いとさゝやかに容躰をかしく今めきたるかたちに、髪は五重の扇を廣げたるやうにこちたきすゑつきなり。こまかに美しきおもやうのけさうをいみじくしたらむやうに あかく匂ひたり。行ひなどをし給ふも猶珠數は近き几帳にうち懸けて 經に心を入れて讀み給へるさま 繪にも書かまほし。うち見るごとに涙の留め難き心ちするを、まいて心かけ給はむ男は いかに見奉り給はむと思ひて、さるべき折にやありけむさうじのかけがねのもとに あきたる穴を敎へて まぎるべき几帳など引きやりたり。いとかくは思はずこそありし、いみじく思ふさまなりける人を、と、わがしたらむあやまちのやうに惜しく悔しく悲しければ つゝみもあへず、物ぐるはしきけはひも聞えぬべければ、のきぬ。かばかりのさましたる人を失ひて尋ねぬ人ありけむや、又その人かの人のむすめなむ行方も知らずかくれにたる、もしは物ゑんじして世をそむきにけるなど、おのづからかくれなかるべきをなど怪しく返すがへす思ふ、尼なりともかゝるさましたらむ人はうたても覺えじなど、なかなか見所まさりて心苦しかるべきを しのびたるさまに、猶かたらひとりてむと思へば、まめやかにかたらふ。「世の常のさまにはおぼしはゞかる事もありけむを、かゝるさまになり給ひにたるなむ心安く聞えつべくなむ侍る。さやうに敎へ聞えたまへ。來し方忘れがたくてかやうに參りくるに又ひとつ志をそへてこそ」などのたまふ。「いと行く末心ぼそくうしろめたき有樣に侍るめるにまめやかなるさまにおぼ

し忘れず問はせたまはむ、いとうれしくこそ思ひたまへおかめ。侍らざらむ後なむ、哀に思ひ給へらるべき」とてなき給ふに、この尼君もはなれぬ人なるべし。誰ならむと心得がたし。「行く末の御うしろみは命もしり難くたのもしげなき身なれど、さきこえそめ侍りなばさらにかはり侍らじ。尋ね聞え給ふべき人は、まことにものし給はぬがさやうのことのおぼつかなきになむ、はゞかるべきことには侍らねど猶へだてある心ちし侍るべき」とのたまへば、「人に知らるべきさまにて世に經給はゞ、さもや尋ね出づる人も侍らむ。今はかゝる方に思ひ限りつる有樣になむ、心のおもむけもさのみ見え侍るを」など語らひ給ふ。こなたにもせうそこし給へり。

「大かたの世をそむきける君なれどいとふによせて身こそつらけれ」。ねんごろに深く聞え給ふことなどいひ傳ふ。「はらからとおぼしなせ、はかなき世の物語なども聞えて慰めむ」などいひつゞく。「心深からむ御物語など聞きわくべくもあらぬこそ口惜しけれ」といらへて、このいとふにつけたるいらへはし給はず、思ひよらずあさましき事もありし身なればいとうとまし。すべて朽木などのやうにて人に見捨てられて止みなむともてなし給ふ。されば月比たゆみなくむすぼゝれ、物をのみおぼしたりしもこの本意のことし給ひて後より、少しはればれしくなりて、尼君とはかなくたはぶれもしかはし、碁うちなどしてぞ明し暮し給ふ。行ひもいとよくして法華經はさらなりこと法文などもいと多く讀み給ふ。雪深く降り積み人め絕えたるころぞげに思ひやる方なかりける。年もかへりぬ、春のしるしも見えず、氷

りわたれる水の音せぬさへ心ぼそくて「君にぞまどふ」とのたまひし人は心憂しと思ひはてにたれど、猶そのをりなどのことは忘れず、

「かきくらす野山の雪をながめても ふりにしことぞ今日も戀しき」など例のなぐさめの手習を行ひのひまには書給ふ。われ世になくて年隔たりぬるを思ひ出づる人もあらむかしなど思ひ出づる時も多かり。若菜をおろそかなるこに入れて人のもて來たりけるを、尼君見て、

「山里の雪まの若菜つみはやし 猶おひさきのたのまるゝかな」とてこなたに奉り給へりければ、

「雪ふかき野邊のわかなも 今よりは君がためにぞ年もつむべき」とあるをさぞおぼすらむと哀なるにも見るかひあるべき御さまと思はましかば とまめやかにうちなひ給ふ。ねやのつま近き紅梅の 色も香も變らぬを春やむかしのとこと花よりもこれに心よせのあるは、あかざりしにほひのしみにけるにや、ごやにあか奉らせ給ふ。下﨟の尼の少し若きがある召し出でゝ花折らすればかごとがましくちるにいとゞにほひくれば、

「袖ふれし人こそ見えね花のかの それかとにほふ春のあけぼの」。大尼君の孫の紀守なりけるがこの比上りて來たり。三十ばかりにてかたち清げに誇りかなるさましたり。「何事かこそおとゝし」など問ふに、ぼけぼけしきさまなれば、こなたに來て「いとこよなくこそひがみ給ひにけれ、哀にも侍るかな。のこりなき御さまを見奉ることかたくて遠き程に年月を過

し侍るよ。親たち物し給はで後は一所をこそ御かはりに思ひ聞え侍りつれ、常陸の北の方は音づれ聞え給ふや」といふは妹なるべし「年月にそへてはつれづれに哀なる事のみまさりてなむ、常陸はいと久しく音づれ聞え給はざめり、えまちつけ給ふまじきさまになむ見え給ふ」との給ふに、我が親の名とあいなく耳とまれるに、またいふやう「まかりのぼりて日比になり侍りぬるに、公事のいとしげくむつかしくのみ侍るにかゝづらひてなむ、昨日も侍はむと思ひ給へしを、右大將殿の宇治におはせし御供に仕うまつりて故八宮の住み給ひし所におはして日くらし給ひし。故宮の御むすめに通ひ給ひしをまづ一所は一とせうせ給ひき。その御弟また忍びてすゑ奉り給へりけるを、去年の春又うせ給ひにければ、その御はてのわざせさせ給はむ事、かの寺の律師になむさるべきことのたまはせて、某もかの女のさうぞくひとくだり調じ侍るべきをせさせ給ひてむや。織らすべきものは急ぎせさせ侍りなむ」といふを聞くにいかでか哀ならざらむ。人やあやしと見むとつゝましうて奥に向ひて居給へり。尼君「かのひじりのみこの御むすめは、二人と聞きしを、兵部卿の宮の北の方はいづれぞ」とのたまへば、「この大將殿の御後のはおとり腹なるべし。ことごとしくももてなし給はざりけるをいみじく悲ひ給ふなり。はじめのはた、いみじかりき、ほどほどすけも志給ひつべかりきかし」などかたる。かのわたりの親しき人なりけると見るにもさすがおそろし。「あやしくやうのものとかしこにてしもうせ給ひけること昨日もいとふびんに侍りしかな。川近き所にて水をのぞき給ひていみじく泣き給ひき。上にのぼり給ひて柱に書きつけ給ひし、

見し人はかげもとまらぬ水の上に落ちそふ涙いとゞせきあへず、となむ侍りし。殊にあらはしてのたまふ事は少けれど唯氣色にはいと哀なる御さまになむ見え給ひし。女はいみじくめで奉りぬべくなむ、若く侍りし時より優におはしますと見奉りしみにしかば、世の中に一の所も何とも思ひ侍らず、唯この殿を賴み聞えてなむ過ぐし侍りぬる」と語るに、殊に深き心もなげなるかやうの人だに御有樣は見知りけりと思ふ。尼君「ひかる君と聞えけむ故院の御有樣にはえならび給はじと覺ゆるを、只今の世にこの御ぞうぞめでられ給ふなる。左のおほいどの」とのたまへば「それはかたちもいとうるはしう淸らにしうとくにてきはことなるさまぞし給へる。兵部卿の宮ぞいといみじくおはするや、女にてなれ仕うまつらばやとなむ覺え侍る」など敎へたらむやうにいひつゞく。哀にもをかしくも聞くに身の上もこの世の事とも覺えず、滯ることなく語り置きて出でぬ。忘れ給はぬこそはと哀に思ふにもいとゞ母君の御心の中推し量らるれど、なかなかいふかひなきさまを見え聞え奉らむは、猶いとつゝましくぞありける。かの人のいひつけし事などを染め急ぐを見るにつけても、怪しく珍らかなる心ちすれどかけてもいひ出でられず、裁ち縫ひなどするを「これ御覽じ入れよ、物をいと美しくひねらせ給へば」とて、小袿のひとへ奉るを、うたて覺ゆれば心地惡しとて手も觸れず臥し給へり。尼君急ぐことをうち捨てゝいかゞおぼさるゝなど思ひ亂れ給ふ。紅に櫻の織物の袿かさねて「御前にはかゝるをこそ奉らすべけれ、あさましき墨染なりや」といふ人あり。

「あま衣かはれる身にやありし世のかたみの袖をかけてしのばむ」と書きて、いとほしくなくもなりけむ後に物のかくれなき世なりければ、聞き合せなどしてうとましきまでかくしけるとや思はむなどさまざま思ひつゝ「過ぎにし方の事は絶えて忘れ侍りにしを、かやうなる事をおぼし急ぐにつけてこそほのかに哀なれ」とおほどかにのたまふ。「さりともおぼし出づる事は多からむを、盡きせず隔て給ふこそ心うけれ。こゝにはかゝる世の常の色あひなど久しく忘れにければ、なほなほしく侍るにつけても昔の人あらましかばなど思ひ出で侍り。しかあつかひ聞え給ひけむ人世におはすらむや。かくなくなして見侍るだに猶いづこにかあらむ、そことだに尋ね聞かまほしく覺え侍るを、行くへ知らで思ひ聞え給ふ人々侍らむかし」とのたまへば「見し程までは一人はものし給ひき。この月比うせやし給ひぬらむ」とて、涙の墮つるをまぎらはして「なかなか思ひ出づるにつけてうたて侍ればこそ聞え出でね。へだては何事にか殘し侍らむ」と、ことずくなにのたまひなしつ。大將はこのはてのわざなどせさせ給ひてはかなくても止みぬるかなと哀におぼす。かの常陸の子どもは、かうぶりしたりしは藏人になし、我が御つかさのぞうになしなどいたはり給ひけり。童なるが中に清げなるをば近くつかひならさむとおぼしたりける。雨など降りてしめやかなる夜、后の宮に參り給へり。お前のどやかなる日にて御物語など聞え給ふついでに「あやしき山里に年比まかり通ひ見給へしを、人のそしりもさるべきにこそはあらめ、誰も心のよるかたのことはさなむあると思ひ給へなしつゝ猶時々見給へしを、所のさがにやと心憂く思ひ給へなり

にし後は、道も遥けき心ちし侍りて久しくものし侍らぬを、さいつころ物のたよりにまかりてはかなき世のありさまとり重ねて思ひ給へしに殊更道心起すべく作りおきてたりける。ひじりのすみかとなむ覺え侍りし」と啓し給ふに、かの事おぼし出でゝいといとほしければ「そこに恐しきものや住むらむ、いかやうにてかかの人はなくなりにし」と問はせ給ふを、猶うちつゞきたるをおぼしよるかと思ひて「さも侍らむ。さやうの人ばなれたる所は善からぬものなむ必ず住みつき侍るを、失せ侍りしさまなむいと怪しく侍る」とて委しくは聞え給はず。猶かく忍ぶるすぢを聞き顯しけりと思ひ給はむがいとほしくおぼされ、宮のものをのみおぼしてその比は病になり給ひしをおぼし合するにも、さすがに心苦しくてかたがたに口入れにくき人のうへとおぼしとゞめつ。小宰相に忍びて「大將かの人のことをいと哀と思ひてのたまひしに、いとほしうてうち出づべかりしかど、それにもあらざらむものゆゑとつゝましくてなむ君ぞことごと聞き合せける。かたはならむ事はとり隱してさる事なむありけると、大方の物語のついでに僧都のいひし事語れ」とのたまはす。「御前だにつゝませ給はむことを、ましてことひとはいかでか」と聞えさすれど、「さまざまなることにこそ。又まろはいとほしき事ぞあるや」とのたまはするも心えてをかしと見奉る。立ちよりて物語などし給ふついでにいひ出でたり。珍らかに怪しといかでか驚かれ給はざらむ、宮の問はせたまひしもかゝることをほのおぼしよりてなりけり、などかのたまはせはつまじきとつらけれど、われも又はじめよりありしざまの事聞えそめざりしかば、聞きて後も猶をこがましき心ちして人

にすべてもらさぬを、なかなかほかには聞ゆることもあらむかし。うつゝの人々の中に忍ぶる事だにかくれある世の中かはなど思ひいりて、この人にもさなむありしなどあかし給はむことは猶口おもき心ちして「猶あやしと思ひし人のことに似てもありける人のありさまかな。さてその人は猶あらむや」とのたまへば、「かの僧都の山より出でし日なむ尼になしつる。いみじう煩ひし程にも皆人をみてせさせざりしを、さうじみの本意深きよしをいひて、なりぬるとこそ侍るなりしか」といふ。所もかはらずそのころの有様など思ひあはするに違ふ節なければ誠にそれと尋ね出でたらむ、いとあさましき心ちもすべきかな、いかでかたしかに聞くべき、おりたちて尋ねありかむもかたくなしなどや人のいひなさむ、又かの宮も聞きつけ給へらむには必ずおぼし出でゝ思ひ入りにけむ道も妨げ給ひてむかし、さてさなのたまひそなど聞え置き給ひければにや、われにはさる事なむ聞きしと、さる珍しき事を聞し召しながらのたまはせぬにやありけむ、宮もかゝづらひ給ふにては いみじう哀と思ひながらも、更にやがてうせにしものと思ひなしてをやみなむ、うつゝびとになりて末の世には黄なる泉のほとりばかりをおのづから語らひよる風のまぎれもありなむ。我が物にとり返し見むの心は又つかはじなど思ひ亂れて、猶の給はずやあらむと覺ゆれど、御氣色のゆかしければ大宮にさるべき序作り出でゝぞ啓し給ふ。「あさましうて失ひ侍りぬと思ひ給へし人、世におちあぶれてあるやうに人のまねび侍りしかな。いかでさる事は侍らむと思ひ給へれど、心とおどろおどろしうもてはなるゝことは侍らずやと思ひわたり侍る人の有様に侍れ

ば、人の語り侍りしやうにてはさるやうもや侍らむと、似つかはしく思ひ給へらるゝ」とて今少し聞え出で給ふ。「宮の御事をいと耻しげにさすがに恨みたるさまにはいひなし給はで、かの事又さなむと聞きつけ給へらば、かたくなにすきずきしくもおぼされぬべし。更にさてありけりとも知らず顔にて過ぐし侍りなむ」と啓し給へば「僧都の語りしに、いと物恐しかりし夜のことにて耳も留めざりしことにこそ。宮はいかでか聞き給はむ。聞えむ方なかりける御心のほどかなと聞けば、まして聞きつけ給はむこそいと苦しかるべけれ。かゝるすぢにつけていと輕くうきものにのみ世に知られ給ひぬめれば、心憂くなむ」とのたまはす。いと重き御心なれば必ずしもうちとけ世がたりにても人の忍びて啓しけむことを漏らさせ給はじなどおぼす。住むらむ山里はいづこにかあらむ、いかにしてさま惡しからず尋ねよらむ、僧都に逢ひてこそはたしかなる有樣も聞き合せなどしてともかくも問ふべかめれなど、唯この事をおきふし覺す。月ごとの八日は必ず尊きわざせさせ給へば藥師佛によせ奉るにもてなし給へるたよりに中堂に時々參り給ひけり。それよりやがて横川におはせむとおぼして、かのせうとの童率ておはす。その人々にはとみに知らせじ、有樣にぞ隨はむとおぼせど、うち見む夢のこゝちにも哀をも加へむとにやありけむ、さすがにその人とは見つけながら怪しきさまにかたちことなる人の中にて憂き事聞きつけたらむこそいみじかるべけれと、よろづに道すがらおぼしみだれけるとや。

夢浮橋

山におはしまして例せさせ給ふやうに經佛など供養ぜさせたまふ。またの日は横川におはしたれば僧都驚きかしこまり聞え給ふ。年比も御いのりなどにつけかたらひ給ひけれど、ことにいと親しきことはなかりけるを、このたび一品宮の御心ちの程にさぶらひ給へるに勝れ給へるげん物し給ひけりと見給ひてより こよなうたふとび給ひて、今少し深き契り加へ給ひてければ、おもおもしうおはする殿の かくわざとおはしたることゝもてさわぎ聞え給ふ。御物語などこまやかにしておはすれば御ゆづけなど參り給ふ。少し人々しづまりぬるに「小野のわたりに知り給へるやどりや侍る」と問ひ給へば「しか侍り、いと異やうなる所になむ。某が母なる朽尼の侍るを京にはかばかしきすみかも侍らぬうちに かくて籠り侍るあひだは、夜中曉にもあひとぶらはむと思ひ給へおきて侍る」など申し給ふ。「そのわたりにはたゞ近きころほひまで人おほう住み侍りけるを、今はいとかすかにこそなり行くめれ」などのたまひて、「今すこし近うゐよりて忍びやかに いとうきたる心ちもし侍り。又尋ね聞えむにつけてはいかなりけることにかと心得ずおぼされぬべきに、かたがたはゞかられ侍れど、かの山里にしるべき人のかくろへて侍るやうに聞きしを、たしかにてこそは、いかなるさまにてなども漏らし聞えめなど思ひ給ふるほどに、御弟子になりて 忌むことなど授け給ひてけ

りと聞き侍るはまことか、まだ年も若く親などもありし人なればこゝにうしなひたるやうに、かごとかくる人なむ侍るを」などの給ふ。僧都、さればよたゞ人と見えざりし人のさまぞかし。かくまでのたまふは輕々しくはおぼされざりける人にこそあめれと思ふに、法師といひながら心もなく忽にかたちをやつしけることゝむねつぶれていらへ聞えむやう思ひまはさる。たしかに聞き給へるにこそあめれ、かばかり心得給ひてうかゞひ尋ね給はむに、かくれあるべきことにもあらず、なかなかあらがひかくさむにあいなかるべしなどとばかり思ひえて、「いかなりけることにか侍りけむとこの月比うちうちに怪しみ思ひ給ふる人の御ことにやとて、かしこに侍る尼どもの初瀬に願侍りて詣でゝかへりける路に、宇治の院といふ所にとゞまりて侍りけるに、はゝのあまのらうけ俄におこりて、いたくなわづらふと告げに人のまうで來たりしかば、まかりむかひたりしに、まづ怪しき事なむとさゝめきて、親の志にかへるをばさしおきてもてあつかひ歎きてなむ侍りし。この人もなくなり給へるさまながらさすがに息は通ひておはしければ、昔物語にたま殿に置きたりけむ人のたとひを思ひ出でゝ、さやうなる事にやとめづらしがり侍りて、弟子ばらの中に驗あるものどもを呼び寄せつゝかはりがはりに加持せさせなどなむし侍りける。なにがしはをしむべき齡ならねど、母の旅のそらにて病おもきを助けて、念佛も心みだれずせさせむと、佛を念じ奉り思ひ給へしほどに、その人のありさま委しくも見給へずなむ侍りし。ことの心推し量り思ひ給ふるに天狗こだまなどやうのものゝ欺きゐてたてまつりけるにやとなむうけ給はりし。助け

で京にゐて奉りて後も三月ばかりはなき人にてなむものし給ひけるを、なにがしが妹故衞門督の北の方にて侍りしが尼になりて侍るなむ、一人もちて侍りし女子を失ひて後、月日は多くへだて侍りしかど、かなしひに堪へず歎き思ひ給へ侍るに、おなじ年のほどゝなむ見ゆる人の、かくかたちいとうるはしくきよらなるを見出で奉りて、觀音の賜へると喜び思ひてこの人いたづらになし奉らじとまどひいられて、なくなくいみじき事どもを申されしかば、後なむかのさかもとにみづからおり侍りて護身など仕うまつりしにやうやういき出でゝ人となり給へりけれど、猶このらうじたりけるものゝ身に離れぬ心地なむする。この惡しきもののさまだけを遁れて後の世を思はむなど悲しげにの給ふ事どもの侍りしかば法師にてはすゝめも申しつべきことにこそはとて誠にすけせしめ奉りてしに侍る。更にしろしめすべきことゝはいかでかそらにさとり侍らむ。珍しき事のさまにもあるを、世語りにもし侍りぬべかりしかど聞えありて煩しかるべきことにもこそと、このおい人どものとかく申して、この月ごろおとなくて侍りつるになむ」と申し給へば、さてこそあなれとほのきゝて、かくまでもとひ出で給へることなれど、むげになき人と思ひはてにし人を、さは誠にあるにこそはとおぼすほど夢の心地してあさましければ、つゝみもあへず涙ぐまれ給ひぬるを、猶僧都の恥かしげなるにかくまで見ゆべき事かはと思ひ返して、つれなくもてなし給へど、かくおぼしけることをこの世にはなき人と同じやうになしたることゝ　あやまちしたる心地して、罪深ければ「惡しきものにらうぜられ給ひけむも、さるべききさきの世の契なり。思ふにたかき

家のこにこそものし給ひけめ。いかなるあやまちにてかくまではふれ給ひけむにか」と問ひ申し給へば「なまわかんとほり」などいふべきすぢにやありけむ。こゝにもとよりわざと思ひしことにも侍らず、物はかなくて見つけそめては侍りしかど、又いとかくまでおちあふるべききはとは思ひ給へざりしを、珍らかに跡もなく消え失せにしかば、身をなげたるにやなどさまざまに疑ひおほくて、たしかなる事はえきゝ侍らざりつるになむ。罪かろめて物すなれば、いとよしと心やすくなむみづからは思ひ給へなりぬるを、はゝなる人なむいみじく戀ひ悲しぶなるを、かくなむ聞き出でたるとつげしらせまほしく侍れど、月比かくさせ給ひけるほい違ふやうに物さわがしくや侍らむ。親子の中の思ひたえず、かなしびにたへでとぶらひ物しなどし侍りなむかし」などのたまひて「さていとびんなきしるべとはおぼすとも、かのさかもとにおり給へ。かばかり聞きてなのめに思ひ過すべくは侍らざりし人なるを、夢のやうなる事どもを今だに語り合せむとなむ、思ひ給ふる」とのたまふ氣色いと哀と思ひ給へれば、かたちをかへ世を背きにきとおぼえたれど、かみひげをそりたる法師だにあやしき心は失せぬもあなり、まして女の御身といふものはいかゞあらむ、いとほしう罪えぬべきわざにもあるべきかなと味氣なく心みだれぬ。「罷りおりむと今日明日さはり侍り。月たちての程に御せうそこを申させ侍らむ」と申し給ふ。いと心もとなけれどなほなほとうちつけにいられむもさまあしければ「さらば」とてかへり給ふ。かのせうとの童御供にゐておはしたりけり。ことはらからどもよりはかたちも淸げなるを呼び出で給ひて「これなむその人の近

きゆかりなるを、これをかつかつものせむ。御文ひとくだりたまへ。その人とはなくて、唯尋ね聞ゆる人なむあるとばかりの心をしらせ給へ」との給へば「なにがしこのしるべにて必罪え侍りなむ。ことのありさまは委しくとり申しつ。今は唯御みづからたちよらせ給ひてあるべからむことは、物せさせ給はむに、何の咎か侍らむ」と申し給へば、うちわらひて「罪えぬべきしるべと思ひなし給ふらむこそはづかしけれ。こゝには俗のかたちにて、今まで過ぐすなむいとあやしき。いわけなかりしより思ふ志ふかく侍るを、三條の宮の心ぼそげにたのもしげなき身ひとつをよすがにおぼしたるが、さりがたきほだしに覺え侍りてかゝづらひ侍りつるほどに、おのづから位などいふこともたかくなり、身のおきても心にかなひがたくなどして、思ひながら過ぎ侍るには、又えさらぬことも數のみそひつゝすぐせど、おほやけわたくしに遁れ難きことにつけてこそさも侍らめ。さらでは佛の制し給ふ方のことを僅にもきゝ及ばむことは、いかであやまたじとつゝしみて、心のうちは聖に劣り侍らぬものを、ましていとはかなきことにつけてしも重き罪うべきことは、などてか思ひ給へむ、更にあるまじきことに侍る。疑ひおぼすまじ。たゞいとほしき親の思ひなどを聞きあきらめ侍らむばかりなむ嬉しう心やすかるべき」など、昔より深かりし方の心おきてかたり給ふ。僧都もげにとうなづきていとたふときことなど聞え給ふ程に日も暮れぬれば中やどりもいとよかりぬべけれど、うはの空にて物したらむこそ猶びんなかるべけれと思ひわづらひて歸り給ふに、このせうとの童を、僧都めとゞめてほめ給ふ。これにつけて「まづほのめかし給へ」と聞え給へば、

文かきてとらせ給ふ。「時々は山におはしてあそび給へよ。すゞろなるやうにはおぼすまじきゆゑもありけり」とうち語らひ給ふ。この子は心もえねど文とりて御供にいづ。坂本になれば、「御前の人々すこしたちあかれて忍びやかにを」などのたまふ。小野にはいと深くしげりたる青葉の山に向ひてまぎるゝこともなくやりみづのほたるばかりを昔覺ゆるなぐさめにてながめ給へるに、例のはるかに見やらるゝ谷の軒端より、さき心ことにおひていとおほうともしたる火ののどかならぬ光を見るとて尼君達もはしに出で居たり。「たがおはしますにかあらむ、御前などいと多くこそ見ゆれ。ひるあなたにひきぼし奉れたりつる返事に大將殿おはしまして御あるじのことにはかにするを、いとよき折とこそありつれ。大將殿とはこの女二の宮の御をとこにやおはしつらむ」などいふもいとこの世とほく田舍びにたるや。誠にさにやあらむ、時々かゝる山路わけおはせし時いとしるかりし隨身の聲もうちつけにまじりて聞ゆ。月日のすぎ行くまゝに昔のことかく思ひ忘れぬも今はなにゝすべきことぞと心うければ、阿彌陀佛に思ひまぎらはしていとゞ物もいはで居たり。横川に通ふ人のみなむこのわたりには近きたよりなりける。かの殿はこの子をやがてやらむとおぼしけれど、人め多くてびんなければ殿に歸り給ひて又の日殊更にぞいだしたて給ふ。むつましくおぼす人のことごとしからぬ二三人ばかりおくりにて、むかしも常に遣はしゝ隨身そへ給へり。人きかぬまに呼び寄せ給ひて「あこがうせにし妹の顏はおぼゆや。今は世になき人と思ひはてにしを、いとたしかにてそものし給ふなれ。疎き人にはきかせじと思ふを、いきて尋ねよ。はゝに

はまだしきにいふな。なかなか驚きさわがむほどに、しるまじき人もしりなむ。その親の御思ひのいとほしさにこそかくも尋ぬれ」とまだきにいと口がため給ふを、をさなき心地にもはらからはおほかれど、この君のかたちをば似るものなしと思ひしみたりしに、うせ給ひにけりと聞きて、いと悲しと思ひわたるにかくのたまへば、いとうれしきにも涙の落つるを恥かしと思ひてまぎらはしに「をゝ」と荒らかに聞えゐたり。かしこにはまだつとめて僧都の御許より「よべ大将殿の御使にてこ君やまうで給へりし。ことのこゝろうけ給りしに、あぢきなく歸りておくし侍りてなむと、姫君に聞え給へ。みづから聞えさすべきことも多かれど今日明日すぐしてさぶらふべし」と書き給へり。これは何事ぞと尼君驚きてこなたへもてわたりてみせ奉り給へば、おもてうち赤みて物の聞えあるにやと苦しう物がくししけると恨みられむを思ひつゞくるに、いらへむ方なくて居給へるに「猶の給はせよ、心うくおぼし隔つること」といみじく恨みてことの心を知らねばあわたゞしきまで思ひ居たるほどに「山より僧都の御せうそこにて參りたり人なむある」といひ入れたり。怪しけれど「これこそは、さはたしかなる御せうそこならめ」とて「こなたに」といはせたれば、いと清げにしなやなる童のえならずさうぞきたるぞ歩みきたる。わらうださし出てたれば、簾垂のもとについゐて、「かやうにてはさぶらふまじくこそは、僧都はのたまひしか」といへば、尼君ぞいらへなどし給ふ。文とり入れて見れば「入道の姫君の御方に、山より」とて名書き給へり。あらじなどあらがふべきやうもなし。いとはしたなく覺えていよいよ奥の方に引き入られて人に顔も見

合せ給はず、常もほでりかならずものし給ふ人がらなれど「いとうたて心うし」などいひて、僧都の御文見れば、「今朝こゝに大將殿の物し給ひて御ありさま尋ねとひ給ふに初よりありしやう委しく聞え侍りぬ。御志深かりける御中を背き給ひてあやしきやまがつの中にすけし給へること、かへりては佛のせめ添ふべき事なるをなむ、承り驚きはべる。いかゞはせむ、もとの御契りあやまち給はであいしうの罪をはるかし聞え給ひて一日のすけのくどくは、はかりなきものなれば猶頼ませ給へとなむ。ことことには自らさぶらひて申し侍らむ。かつかつこの小君聞え給ひてむ」とかいたり。まがふべくもあらず書きあきらめ給へれど、こと人は心もえず、「この君は誰にかおはすらむ。猶いと心うし。今さへかくあながちに隔てさせ給ふ」とせめられて少しとざまに向きて見給へば、この子は今はと世を思ひなりし夕暮にもいと戀しく思ひし人なりけり。同じ所にて見しほどは いとさがなくあやにくにおごりてにくかりしかど、母のいと悲しくして宇治にも時々ゐておはせしかば、少しをよすけしまゝにかたみに思へりしわらは心を思ひ出づるにも夢のやうなり。まづ母のありさまいと問はまほしくこと人々の上はおのづからやうやう聞けど、親のおはすらむやうはほのかにもえ聞かずかしと、なかなかこれを見るにいと悲しくてほろほろとなかれぬ。いとをかしげにて少しうち覺え給へる心ちもすれば「御はらからにこそおはすめれ。聞えまほしくおぼすこともあらむ。うちに入れ奉らむ」といふを、何か今は世にあるものとも思はざらむに、怪しきさまにおもがはりしてふと見えむも恥しと思へば、とばかりためらひて「げにへだてありともお

ぼしなすらむが苦しさに物もいはれでなむ。あさましかりけむありさまは珍らかなることゝ見給ひてけむを、さてうつしてゝろもうせたましひなどいふらむものもあらぬさまになりにけるにやあらむ。いかにもいかにも過ぎにし方のことを我れながら更にえ更にえ思ひ出でぬに、きのかみとかありし人の世の物語すめりし中になむ、見しあたりのことにやとほのかに思ひ出でらるゝことある心ちせし。その後とざまかうざまに思ひ續くれど更にはかばかしくも覺えぬに、唯一人物し給ひし人のいかでかとおろかならず思ひためりしを、まだや世におはすらむとそればかりなむ心にはなれず悲しき折々侍るに、今日見ればこの童の顔はちひさくて見し心ちするにもいと忍びがたけれど、今さらにかゝる人にもありとば知られで、止みなむとなむ思ひ侍る。かの人若し世に物し給はゞそれ一人になむたいめんせまほしく思ひ侍る。この僧都ののたまへる人などには更にありとしられ奉らじとこそ思ひ侍れ。かまへてひがことなりけりと聞えなしてもてかへし給へ」とのたまへば、「いとかたいことかな。僧都の御心はひじりといふ中にもあまりくまなく物し給へば、まさにのこいては聞え給ひてむや。後にかくれあらし。なのめに輕々しき御程にもおはしまさず」などいひさわぎて「世に知らず心強くおはしますことぞ」と皆いひ合せて母屋のきはに几帳たてゝ入れたり。この子もさは聞きつれど、幼ければふといひよらむもつゝましけれど「まだ侍る御文いかでたてまつらむ。僧都の御志るべにはたしかなるを、かくおぼつかなく侍るこそ」とふしめにていへば「そゝや、あなうつくし」などいひて「御文御覽ずべき人はこゝに物せさせ給ふ

めり。けそうの人なむいかなることにかと心得がたく侍るを、猶の給はせよ。をさなき御程なれどかゝる御しるべに頼み聞え給ふやうもあらむ」などいへど「おぼしへだてゝおぼおぼしくもてなさせ給ふには、何事をか聞え侍らむ。疎くおぼしなりにければ聞ゆべきことも侍らず。唯この御文を人づてならで奉れとて侍りつる、いかて奉らむ」といへば「いとことわりなり。猶いとかくうたてなおはせそ。さすがにむくつけき御心にこそ」と聞えうごかして、几帳のもとにおし寄せ奉りたれば、あれにもあらで居給へるけはひ こと人には似ぬ心地すればそこもとによりて奉りつ。「御返りとくたまはりて参りなむ」と、かくうとうとしきを心うしと思ひていそぐ。尼君御文ひきときて見せ奉る。ありしながらの御手にて紙の香など例の世つかぬまでしみたり。ほのかにみて例のものめでのさしすぎ人いとありがたくをかしと思ふべし。「更に聞えむ方なくさまざまに罪重き御心をば僧都に思ひ許しきこえて今はいかであさましかりし世のゆめかたりをだにと、いそがるゝ心のわれながらもどかしきになむ。まして人めはいかに」と書きもやり給はず。

「法の師と尋ぬる道をしるべにて　おもはぬ山にふみまどふかな。この人はみや忘れ給ひぬらむ。こゝには行くへなき御かたみに見る物にてなむ」などいと細やかなり。かくつぶつぶと書き給へるさまのまぎらはむ方なきに、さりとてその人にもあらぬさまを思の外に見つけられ聞えたらむほどのはしたなさなどを思ひ亂れて、いとゞはれはれしからぬ心はいひやるべき方もなし。さすがにうちなきてひれふし給へれば、いとよつかぬ御ありさまかな

と見わづらひぬ。「いかゞ聞えむ」などせめられて「心ちのかき亂るやうにし侍るほどためらひて今聞えむ。昔のこと思ひ出つれど更に聞ゆることなく、あやしういかなりける夢にかとのみ心も得ずなむ。少ししづまりてやこの御文なども見知らるゝこともあらむ。今日は猶もてまゐり給ひね。所違へにもあらむにいとかたはらいたかるべし」とてひろげながら尼君にさしやり給へれば「いと見苦しき御ことかな。あまりけしからぬは、見奉る人も罪さり所なかるべし」などいひさわぐも、いとうた聞きにくゝ覺ゆれば、顔も引き入れて臥し給へり。あるしぞこの君に物語少し聞えて「ものゝけにておはすらむ。例のさまに見え給ふ折なくなやみわたり給ひて御かたちもことになり給へるを、尋ね聞え給ふ人あらばいとわづらはしかるべき御事と見奉り歎き侍りしもしるく、かくいとあはれに心苦しき御事どもの侍りけるを、今なむいとかたじけなく思ひ侍る。日比も心地うちはへなやませ給ふめるを、いとゞかゝる事どもにおぼし亂るゝにや、常よりも物覺えさせ給はぬさまにてなむ」と聞ゆ。所につけてをかしきあるじなどしたれど幼き心ちはそこはかとなくあわてたる心ちして「わざと奉れさせ給へるしるしに、何事をかは聞えさせむとすらむ。唯一言をのたまはせよかし」などいへば「げに」などいひて、かくなむとうつし語れども物ものたまはねばかひなくて、「唯かく覺束なき御有樣を聞えさせ給ふべきなめり。雲の遙にへだゝらぬほどにも侍るめるを、山風ふくとも又も必ず立ち寄らせ給ひなむかし」といへば、すゞろにゐくらさむもあやしかるべければかへりなむとす。人しれずゆかしき御ありさまをもえ見ずなりぬるを、覺束なく口

惜しくて、心ゆかずながらまゐりぬ。いつしかと待ちおはするにかくたどたどしくかへり來たれば、すさまじくなかなかなりと、おぼすことさまざまにて、人のかくしすゑたるにやあらむと、我が御心の思ひよらぬくまなくおとしおき給へりしならひにとぞ。

源氏物語 終

明治三十六年三月二十六日印刷
明治三十六年三月二十九日發行

國文大觀物語部索引附
全九冊定價金貳拾圓

監修者　木村正辭
同　本居豐穎
同　小杉榲邨
同　井上頼圀
同　落合直文
校訂者　丸岡桂
同　松下大三郎
發行者　東京市京橋區銀座三丁目十番地　下田度計
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區銀座三丁目十番地　板倉屋書房
（電話長距離加入 新橋一六三四番）

[illegible]

明治三十六年六月

井村真琴

